



古今和歌六帖全注釈 第一帖



## 目次

はじめに	1
凡例	2
諸本について	4
注釈 第一帖	7
あとがき	429



## はじめに

『古今和歌六帖』は十世紀後半に私的に編まれた歌集である。編者は不明だが、四千数百首を五百余の題のもとに分類し、六帖とした手腕には驚くべきものがある。

『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』の歌のほか、『貫之集』との歌の一致が顕著である一方、藤原公任の歌が皆無であることがその成立の時期推定の手がかりとなる。おそらく公任撰の『拾遺抄』より前に『古今和歌六帖』は成立していたのであろう。上限はいつか。現在知られる最も新しい歌は、

琴の音に峰の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ

の歌で、貞元元年（九七六）秋の歌合に、斎宮女御によつて詠まれたものである。成立は従つて九七六年以降であらうと推定される。『枕草子』や『源氏物語』などの成立に先立つこと四半世紀という頃である。

本書は、永青文庫所蔵の『古今和歌六帖』の影印複製本を底本とし、全歌について注釈を施したものである。とりあえず第一帖について、【異同】【現代語訳】【語句】【所載】【参考】の項目にわけて説明した。

## 凡 例

一 底本は永青文庫叢刊『古今和謌六帖(上)』(汲古書院 昭和五八年)とする。

漢字、仮名遣いなど底本どおりに翻刻する。ただし、読みやすさを考慮し、濁点を付し、異体字は通常の文字に改めた。またミセケチは「リ」のように文字の左側に傍線を付して表した。校合した本は以下の三本である。

(ア) 宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』(五〇六・一三) 御所本

(イ) 宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』(五一〇・三四) 桂宮本

(ウ) 榊原家旧蔵大久保正氏所蔵『古今六帖』 大久保本

【異同】の項に(ア)を「御」、(イ)を「桂」、(ウ)を「大」と略称して本文の相違を記した。ただし、これらの傍記などは略した。また、漢字、仮名遣いの差は原則として記さない。これらの書誌については別に記した。

一 歌には通し番号を付した。和歌の【現代語訳】はわかりやすいように適宜言葉を補うなど配慮した。【語句】には意味とその用例をなるべく挙げた。

一 和歌は題のもとに分類されているが、各題については初出の箇所◎印を付し、簡潔な説明を加えた。

一 【所載】にはその歌が、他の書物に掲載されていることを示す。

例 古今集・春上・一一／忠岑集Ⅰ・三二／忠岑集Ⅱ・五／……

これは古今和歌集の春上の部の一番にあり、また、『私家集大成』において忠岑Ⅰと略称される家集の三二番に、同じく忠岑Ⅱと略称される家集の五番に、その歌があることを示す。原則として、『新編国歌大観』の巻一、二、三、四、五までと、『新編私家集大成』の中古Ⅰ、Ⅱの範囲で集名と歌番号とを記した。ただし歌合の判詞等は除いた。

一 特に万葉集はその訓読の様相が『古今和歌六帖』と深い関係があるので、以下のようにした。

例 万葉集・一四二二(旧一四一八) 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨  
イハソクタルミノウヘノサワラビノモエイヅルハルニナリニケルカモ いはばしるたるみのうへのさわらびのもえいづるはるになりにつけるかも

これは、『新編国歌大観』の万葉集に基づく。すなわち、漢字本文は西本願寺本の表記、カタカナはその訓読部分を示し、ひらがなは新しく付した訓読である。(旧一四一八)は旧番号である。  
一【参考】には類似しているが同一とは言えない歌、注記として付された作者名などについて述べた。

一 散文作品の引用は特に断らない場合、『新編日本古典文学全集』(小学館)によった。  
一 五首ずつごとに担当した者の名を後に記した。



## 諸本について

数葉の鎌倉期古筆切を除くと、中世極末期を遡る善本はなく、現存の諸本間に大きな異同はない。大きく版本系と写本系に二分する。

版本系とは寛文九年刊本、および、それを底本とし、写本四本で校合した山本明清『古今和歌六帖標注』『旧国歌大観』『校註国歌大系』（第九巻 など）。

また、写本については、十二本の書誌が図書寮叢刊『古今和歌六帖 下巻』（養徳社 一九六九年①とする）にあり、現存最古の写本が永青文庫叢刊『古今和歌六帖』（解題 荒木尚、汲古書院 一九八三年 ②とする）に影印本として刊行された。

本書は、永青文庫本を底本とし、桂宮本、御所本、大久保本（榊原家旧蔵）の三本によって校合した。それらの書誌を簡単に記す。

一、永青文庫本（②の底本）

縦二五・七センチ、横二〇・三センチの袋綴、六冊。縹色楮紙の表紙。左肩に朱地に金泥で竜紋を画いた題簽があり、「古今和歌六帖 第一」と記して貼付する。墨付一一〇丁。遊紙、前後各一丁。奥書がある（一帖の他、三・四・六の各帖にも奥書がある）。

この本は、文禄四（一五九五）年、細川幽斎が富小路秀直（一五六四—一六二一）をもって借り出した世尊寺行能筆の禁裏本を忠実に書写したもの。ただし、第三帖幽斎筆のほか、四五人の寄合書という（②による）。

一、御所本

縦二八・〇センチ、横二〇・五センチの袋綴、六冊。黄蘗染の鳥の子紙の表紙。題簽は藍色内曇り、鳥の子紙の小短冊。一面十行、歌二行書。奥書は次の桂宮本と同様、一帖のほか、三・四帖にある（①による）。

一、桂宮本

縦二六・六センチ、横二〇・六センチの袋綴、六冊。鼠茶地の鳥の子紙の表紙。題簽は後補。一面十二行、歌一行書。奥書は一帖のほか、三・四帖にある（①による。①の底本）。

一、大久保本（榊原家旧蔵）

縦二八・〇センチ、横二〇・六センチの袋綴、六冊。灰色がかった紺色の表紙。左肩に白地の題  
簽があり「古今六帖第一」と記して貼付する。一面十行、歌一行書。印記「楽山亭文庫」「吏部大  
卿 忠次」「文庫」。奥書は桂宮本と同様、一帖のほか、三・四帖にあり、さらに別の奥書が一・二・  
五帖にもある（①による）。榊原家旧蔵。ついで大久保正氏蔵。現在は福岡温子氏蔵。



古今和歌六帖 第一



古今和歌六帖題目録

第一帖

歳時部

春

はるたつひ　むつき　ついたちのひ　のこりのゆき　ねのひ　わかな　あをむま  
なかの春　やよひ　三日　はるのはて  
【異同】ナシ

夏

はじめの夏　ころもがへ　うづき　うのはな　神まつり　さつき　五日　あや  
め草　みな月　なごしのはらへ　なつのはて  
【異同】五日―五月（大）

秋

あきたつひ　はつあき　たなばた　あした　はつき　十五夜　こまひき　なが  
つき　九日　あきのはて  
【異同】ナシ

冬

はつふゆ　かみな月　しも月　かぐら　しはす　仏名　うるふ月　としのくれ  
【異同】ナシ

天

あまのはら　てる日　はるの月　夏の月　秋の月　冬の間　さうの月　みか月  
ゆふづくよ　ありあけ　ゆふやみ　ほし　はるのかぜ　あめ　むらさめ　しぐれ　ゆふだ  
冬のかぜ　山をろし　あらし　さうのかぜ

ち くも つゆ しも ゆき あられ こほり ひ けぶり ちり な  
る神 いなづま かげろふ  
【異同】ナシ

第二帖

やま 山 やまどり さる しか とら くま むさゝび やまがは 山だ  
山ざと 山の井 やまびこ いはほ みね たに そま をのゝえ すみが  
ま せき はら をか もり やしろ みち つかひ むまや  
【異同】ナシ

田 はるのた 夏のた あきのた ふゆのた かりほ いなおほせどり そほづ  
【異同】ナシ

野 はるのゝ 夏のゝ あきのゝ ふゆのゝ ざうのゝ かり ともし わし  
おほたか こたか きじ はと うづら 大たかづり こたかづり みゆき  
【異同】ナシ

都 みやこ みやこどり もゝしき  
【異同】ナシ

田舎 くに こほり さと ふるさと やど やどり かきほ  
【異同】ナシ

宅 いる となり 井 まがき には にはとり かど と すだれ ところ

【異同】ナシ

人 をきな をんな をや うなゐ わかいこ くるま うし むま

【異同】ナシ

仏事 たら かね ほうし あま

【異同】ナシ

### 第三帖

水

みづ みづとり をし かも かは にほ かはづ う かめ いを こゐ ふな す  
づき たひ あゆ ひを え いけ あま ぬま うき はし ひを めせき しがらみ  
よかは あじろ やな せ うみ あま ぬま うき はし ひを めせき しがらみ  
かた さは いかり あめ せ のりそ はまゆふ みるめ たくなは たき しほ にはたづみ ふね  
つり しま はま ちどり はまゆふ みるめ いそ われから なみ うら みをつくし  
ぎさ しま はま ちどり はまゆふ みるめ いそ われから なみ うら みをつくし  
かた みなと とまり ちどり はまゆふ みるめ いそ われから なみ うら みをつくし  
【異同】あめ―あみ（御・大）

### 第四帖

恋



こひ かたこひ ゆめ をもかけ うたゝね なみだつ うらみ うらみず  
ないがしろ ざうのおもひ

【異同】なみたつ—なみた川(御・桂・大)

祝

いはひ わかな つゑ かざし

【異同】ナシ

別

わかれ ぬさ たむけ たび かなしび

【異同】ナシ

## 第五帖

雑思

しらぬ人 いひはじむ としへていふ はじめてあへる あした しめ あひ思  
あひ思はぬ こと人を思 わきて思 いはで思 人しれぬ 人にしらるゝ よるひ  
とりをり ひとりね 物へだてたる ふたりをり ふせり あか月にをく 一よへだてたる

二よへだてたる うちきてあへる よひのま ひごろへだてたる としへだてたる とを道へだ  
てたる 人をよぶ 道のたより ものがたり ちかくてあはず 人をまつ 人を  
またず をどろかす 思いづ むかしをこふ 人づて わする わすれず 心かは

人をたづぬ 思わづらふ くれどあはず ちかふ ちかしたむ 人まつ いへとじを思  
思やる 思わづらふ くれどあはず ひとをとゞむ とゞまらず なをゝしむ を  
しまず なきな わぎもこ わがせこ かくれづま いはゞかひなし こんよかた

み

【異同】ふたりをり—ふたりね(大) うちきてあへる—うちきてのへる(大) 人まつ—人つま(大) ひとを

とゝむ一人をとゝむる(大) かくれつま―コノ次ニ「になき思ひ」ガ入ル(大) いはゝかひなし―今はかひなし(大)

服飾

たまくしげ たまかづら かみ もとゆひ くし たま たまのを かづみ  
まくら たまくら はた ころも しほ やき衣 なつ衣 あき衣 衣がへ  
かりころも すり衣 あさ衣 かは衣 ぬれぎぬ ざうの衣 ふすま も  
ひも をび ひとり ことのほ ふみ こと ふえ ゆみ や たち  
かたな さや はかり あふぎ かさ みの かたみ つと  
【異同】たまのを―コノ次ニ「たまたすき」ガ入ル(大) 衣かへ―衣うつ(大) ことのは―かとは(大)

色

いろ くれなゐ むらさき くちなし みどり

【異同】ナシ

錦綾

にしき あや いと わた ぬの

【異同】ナシ

第六帖

草

はるの草 夏の草 あきの草 冬の草 した草 にこ草 ざうの草 山ぶき  
なでしこ あきはぎ をみなへし すゝき しのすゝき をぎ らに きく  
くさのかう きちかう りうたん しをに くだに さうび かるかや かや  
はちす かきつばた こも 花かつみ あし ひとし ぬなは ねぬなは むぐあ  
さゞ つき草 わすれ草 しのぶ草 ことなし草 せり なぎ あさち つばな  
ら たまかづら くず さねかづら あをつづら あさがほ あさち

かにひ あぢさひ さこく すみれ をはぎ わらび ゑぐ ゆり あゐ  
あさきかづら ひかげ 山たち花 すげ さゝ あふひ みくり よもぎ  
こけ いちし しば  
【異同】あさきかづら—まさきのかつら(大)

虫  
むし せみ なつむし きりくす まつむし すゞむし ひぐらし ほたる  
はたおりめ くも てふ  
【異同】ナシ

木  
き しほり はな あきの花 もみぢ はゝそ まゆみ かへで まつ  
かへ たけ たかな ひざくら むめ こんばい やなぎ さくら かばざくら 山  
ざくら にはざくら ひざくら ふち たち花 あつたち花 ざくろ なし  
山なし もゝ すもゝ からもゝ くるみ すぎ むろ ま木 かつら  
かうか あふち かし くぬぎ つばき かしは ほゝがしは ながめがしは  
つゝじ いはつゝじ ひさぎ くは はたつもり しきみ あせみ 山ちさ  
ゆづるは かたかし つまゝ さねき  
【異同】こんはい—こうはい(大) かはさくら—コノ次ニ小サク補入ノ印ガアリ、「はなさくら」ト傍書(御)  
あつたち花—あへたち花(御)

鳥  
とり はまちどり ひなどり かも つる かり うぐひす ほとゝぎす  
ちどり よぶこどり しぎ からす さぎ はこどり かほどり かさゝぎ  
もず くひな  
【異同】はまちとり—はなちとり(御) くひな—コノ次、末尾ニ「つはくらめ」ガ加ワル(大)

古今和歌六帖第一

歳時

春立日 親月 元日 残雪 子日 若菜 白馬 仲春 弥生 三日

暮春

初夏 更衣 卯月 卯花 神祭 早苗月 五日 菖蒲 皆尽月 祓

夏尽

秋立日 早秋 七夕 後朝 葉月 十五夜 駒牽 長月 九日 秋尽

初冬

無神月 霜月 神樂 師馳月 仏名 潤月 歳暮

【異同】 弥生―三月(大) 無神月―神無月(大)

天

漢渚 照日 春月 夏月 秋月 冬月 雜月 三日月 夕月夜 有明

夕暗

星 春風 夏風 秋風 冬風 山下 嵐 雜風 雨 白雨

寒雨

夕多千 雲 露 志津久 霞 霧 霜 雪 霰 氷 火

【異同】 白雨―村雨(大)

春たつひ

古 春上

一 としのうちに春はきにけりひとゝせをこそとやいはんことしとやいはむ  
あり原もとかた

【異同】 ナシ

【現代語訳】 年内に春は来てしまった。この同じ一年を去年と言おうか、今年と言おうか。

【語句】 ◎春たつひ 立春の日。「はる立つ日よめる」(後撰集・二)、「立春日」(友則集・一)などと、詞書に

立春の日のことを詠んだ歌であると示す例が見られる。礼記・月令には「立春之日……以迎春於東郊」(立春の日……以て春を東郊に迎へ)とある。「立春」と「春立つ」については、新井栄蔵「万葉集季節観考―漢語へ立

春」と和語（ハルタツ）——『万葉集研究 第五集』塙書房、一九七六年）に詳しい。○としのうちに春はきにけり 年内、すなわち暦の上ではまだ旧年中に、立春になったことを表す。いわゆる年内立春。所載欄の古今集・一の詞書に「ふるとしに春たちける日よめる」とある。年内立春を詠んだ先例に「月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか」（二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首）・万葉集・四五六一（旧四四九二）・大伴家持）がある。菅原道真の漢詩にも年内立春に興を覚えた作がある（菅家文草・二七八、菅家後集・四九二）。当時、年内立春は一・七年に一回の割であつた（神尾暢子「在原元方と立春映像——歳内立春と古今巻頭——『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二年）。○ひととせ 一年。同じ一年。「こゑたえずなけやうぐひすひととせにふたたびとだにくべき春かは」（古今集・一三二）。

【所載】古今集・春上・一／和漢朗詠集・三／寛平御時中宮歌合・三／後六々撰・九八／定家十体・一六〇／奥儀抄・一三三／古来風体抄・二一五／三五記・九九／桐火桶・三八／沙石集・九

【参考】作者名「在原元方」は、古今集等所載欄の文献に一致する。

## 紀つらゆき

二 同  
そでひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】袖を濡らして手ですくった水が凍っていたのを、立春の今日の風が解かしていることだろうか。

【語句】○そでひちて 水につかつて袖が濡れる状態。「ひつ」は、「つかる」「ぐつしよりと濡れる」意の自動詞（山内洋一郎「動詞「漬つ」について」『国語学』一九六四年十二月）。「かりてほす山田のいねの袖ひちて植ゑしさなへとみえもするか」（貫之集・四三九）。○春たつけふの風やとくらん 礼記・月令「孟春之月……東風解冻」（孟春の月……東風凍を解く）に拠り、立春解氷を詠んだもの。なお、従来の通説通り礼記・月令を典拠とすることについては、中野方子「魚袋」の歌と詩と——侍宴応制詩から歌へ——『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）に詳しい。「みづのおもにあやふきみだる春風やいけのこほりをけさはとくらん」（後撰集・一一・紀友則）。

【所載】古今集・春上・二／新撰和歌・一／和漢朗詠集・七／俊頼髓脳・九七／奥儀抄・四三三／袖中抄・八六四／古来風体抄・二一六／和歌色葉・二二八／桐火桶・三九

【参考】作者名は所載欄の古今集等の「紀貫之」に一致する。

夏に袖を濡らして手ですくった水が、冬になつて凍り、それを立春の日の今日の春風が解かしているだろうという、一年間の季節の推移が表されている歌。また、「むすぶ」と「とく」との対比がある。「けふとくる水にかけてぞむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを」（順集・一六四）は、古今六帖当該歌の影響下で詠まれたものか。

三　としのうちに春たつことをかすが野のわかなさへにもしりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】年内に立春になることを、（暦だけではなく）春日野の若菜によつてまでも、知ったことだよ。

【語句】○としのうちに春たつ　年内立春。一番歌参照。貫之集によると、延喜十二（九一二）年十二月二十二日のことで、当該歌は、藤原定方が、同母妹である尚侍満子の四十賀のために依頼した詠作。実は、満子の四十歳は翌年であつて、醍醐天皇主催の満子四十賀も、延喜十三（九一三）年十月十四日に行われているのだが（日本紀略）、定方は年内立春により前年十二月に行つたものと考えられる。当時は立春とともに（新年となり）齢を重ねるとされていた。「春立つと思ふ心はうれしくて今ひとせのおいぞそひける」（拾遺集・一〇〇〇・凡河内躬恒）。○かすが野　春日野。大和国の歌枕。現在の奈良市街の東南部、春日山麓に展開する野。春の景物を詠むことが多く、若菜が特に多く詠まれた。春日の地には、藤原氏の祖神を祭る春日大社があり、藤原氏の賀を寿ぐのにふさわしい地名でもあつた。○わかなさへにもしりにけるかな　貫之集の注釈書では、「若菜によつてもまた知つたことだよ。」（木村正中『新潮日本古典集成 土佐日記 貫之集』新潮社、一九八八年）、「人々だけでなく、……若菜までが知つていたのだつた。」（田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』風間書房、一九九七年）と、解釈が分かれている。「若菜」は、古今六帖では四三番歌から四九番歌までの題となつている。正月子の日などに、若菜を摘み不老長寿を寿いで食した。四十賀を正月子の日に行い、若菜を供した例として、延長二（九二四）年正月二十五日に宇多上皇が催した醍醐天皇の四十賀がある（西宮記など）。源氏物語（若菜上）に、玉鬘が正月子の日に源氏に若菜を奉り、四十賀を祝う例があるが、これは、醍醐天皇の四十賀を典拠とするとされる（花鳥余情）。若菜は、春日野の代表的な景物でもあつた。「あたらしき春くるごとふるさとの春日の野辺に若菜をぞつむ」（能宣集・一二六）等、春になると春日野で若菜を摘むことが詠まれている。「に」は、「……で」「……によつて」の意。「春の野に若菜つまんと来しものを散りかふ花にみちはまどひぬ」（古今集・一一六・貫之）。また、自然現象以外に立春を知るの暦によつてである。「偏因曆注覺春來」（偏に曆注に因つて春の来る

を覚ゆ) (菅家文章・二七八)、「月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか」(万葉集・四五一六(旧四四九二)・大伴家持)。したがって、曆によるだけではなく、春日野の若菜によっても、年内に立春になることを知った、と解釈した。

【所載】新撰朗詠集・三／夫木抄・一八／貫之集Ⅰ・六八三

【参考】古今六帖には作者名はないが、貫之集等によると、作者は紀貫之。

#### 四 拾一春 春たつといふばかりにやみよしのゝ山もかすみて今朝はみゆらん みぶのたぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になったというだけで、み吉野の山も霞んで今朝は見えるのだろうか。

【語句】○春たつ 立春になる(二番歌参照)。霞は春の代表的な景物の一つであり、春になれば霞が立つと歌に詠まれた。「ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも」(万葉集・一八一六(旧一八一二))。○みよしのゝ山 吉野山のこと。「み」は、美称の接頭語。吉野山は大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。雪が景物として知られるが、また霞も詠まれた(斎藤照子「春日」と「吉野」『赤染衛門とその周辺』笠間書院、一九九九年)。「吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん」(拾遺集・四・源重之)。

【所載】拾遺抄・春・一／拾遺集・春・一／金玉集・春・二／和漢朗詠集・八／新撰朗詠集・三／忠岑集Ⅰ・二七／忠岑集Ⅱ・一／忠岑集Ⅲ・一／左兵衛佐定文歌合・一／前五番歌合・七／秘藏抄・二／三十人撰・七一／三十六人撰・八〇／深窓秘抄・二／九品和歌・一／秀歌大体・三／俊頼髓脳・九八／奥儀抄・八七／古来風体抄・三四一／和歌色葉・六三／瑩玉集・四／近代秀歌・二八／詠歌大概・一／詠歌一体・四一／三五記・二二一、二五七／井蛙抄・一〇一／沙石集・一九一

【参考】作者名「みぶのたぐみね」は所載欄の文献に一致する。

#### 五 古一 春上 谷イ やまかぜにとくるこほりのひまごとにうちいづるなみや春のはつ花

【異同】ナシ

【現代語訳】山風によって解ける氷の隙間ごとにほとばしり出る波、これが春の最初の花なのか。

【語句】○やまかぜ 古今六帖での傍記異文によると「谷風」の本文が伝えられ、古今集の本文でも「谷風」「山風」の異同があり、その他の文献でも両様の本文が存在する。春風によつて氷が解けるといふ発想は、「孟春之月……東風解凍（孟春の月……東風凍を解く）」（礼記・月令）に淵源が見られる。古今六帖の配列では、当該歌も立春解氷の歌ということになる。山風については、「花の色はかすみにこめて見せずともかをだにぬすめ春の山かぜ」（古今集・九一）などと、春の山風が詠まれた例はある。谷風は、東風すなわち春風とされ、「氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声」（拾遺集・六・源順）などと、氷を解かす春の谷風が詠まれている。なお、この歌の古今集における本文異同の問題については、奥村恒哉「たにかぜ」「やまかぜ」に関する諸問題——古今集と資料——『古今集の研究』臨川書店、一九八〇年）、増田繁夫「古今集の歌語——山風と谷風——」（『論集古今和歌集』笠間書院、一九八一年）に詳しい。○はつ花 最初に咲く花。「あはゆきのこのころ継ぎてかく降らば梅の初花散りか過ぎなむ」（万葉集・一六五五（旧一六五二）・大伴坂上郎女）。当該歌では、波をその初花に見立てた。

【所載】古今集・春上・一二／新撰万葉集・二三九／金玉和歌集・五／和漢朗詠集・一六／寛平御時后宮歌合・二／寛平御時中宮歌合・一／俊頼髓脳・四九／和歌童蒙抄・一〇六／袋草紙・六一四／古来風体抄・二二三／八雲御抄・七二／桐火桶・四一

【参考】古今六帖に作者名はないが、歌合本文や古今集などによると、作者は源当純。なお古今集などの勅撰集では同じ作者の歌がつづくと二首目以降は作者名が省略される。従つて当該歌のような場合は前歌の作者「みぶのたぐみね」が作者と判断されるが、古今六帖ではそうではない。またすべての歌に作者名が記されるわけではない。

〔以上五首担当 長戸千恵子〕

## む月

### 大伴坂上郎女

六 うちのぼるさほのかはべのあをやぎのもえいづるはるになりけるかな

【異同】あをやきの——青柳（大）

【現代語訳】さかのぼって行く佐保の川辺に見える青柳の芽吹き始める春になったことだよ。

【語句】◎む月 一月。春のはじめの月。「正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ」（万葉



集・八一九（旧八一五）。○うちのぼる（川原を）さかのぼって行く。「君が代のかずにしとらばうちのぼるさほのかはらの石もたえじな」（永久百首・五一七）。○さほのかはべ 佐保川の川辺。佐保川は春日山中に発し、山麓の北側を迂回してから南下、平城京を南北に通り大和川と合流する。万葉集では「千鳥」と共に詠まれることが多い。「千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ波やむときもなし我が恋ふらくは」（万葉集・五二九（旧五二六））。○あをやぎの 新春の様を詠んだものとしては、万葉集に天平二（七三〇）年正月十三日に筑前の大伴旅人邸で催された宴会での「梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにけらずや」（万葉集・八二二（旧八一七））がある。○もえいづる 芽を出す。芽吹く。「もえいづるこのめを見てもねをぞなくかれにし枝の春をしらねば」（後撰集・一四）。以下、所載欄の万葉集では「今は春べとなりになるかも」とする。ここでは次の七番歌の下句と混同したかのような形をとる。

【所載】玉葉集・春上・八七／万葉集・一四三七（旧一四三三） 打上 佐保能河原之 青柳者 今者春部登 成  
尔鶏類鴨 ウチアグルサホノカハラノアヲヤギハイマハルベトナリニケルカモ うちのぼるさほのかはらのあ  
をやぎはいまははるべとなりになるかも／夫木抄・七四七

【参考】作者名は所載欄万葉集に一致する。

七 いはそゝくたるひのうへのさわらびのもえいづるはるになりける哉 志貴王子かゞみの王女とも

【異同】かゝみの王女とも―かゝみの王子とも（大）

【現代語訳】岩に注ぎかかりそうな氷柱のそばの早蕨が芽吹き始める春になったことだよ。

【語句】○たるひ 垂氷。つらら。「みねにひやけさはうららにさしつらむのきのたるひの下の玉水」（好忠集・六）。所載欄の万葉集では「たるみ」とあり、新古今集や俊賴髓脳、古来風体抄なども「たるみ」と伝える。一方で和漢朗詠集や綺語抄など「たるひ」と伝えるものも併存する。○さわらび 芽が出たばかりの蕨。「さわらびのおひいづるのべをたづぬれば道さへみえず空もかすみて」（能宣集・三五五）。○もえいづる 六番歌参照。ここでは「もえ（燃え）」と「さわらび」の「ひ（火）」が縁語。

【所載】新古今集・春上・三三／万葉集・一四二二（旧一四一八） 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔  
成来鴨 イハソクタルミノウヘノサワラビノモエイヅルハルニナリニケルカモ いはばしるたるみのうへの  
さわらびのもえいづるはるになりけるかも／和漢朗詠集・一五／夫木抄・八九〇／俊賴髓脳・一七一／綺語抄

・二〇一／和歌童蒙抄・五四〇／袖中抄・一三三／古来風体抄・八四／和歌色葉・七四／三五記・二三六  
【参考】万葉集の題詞は「志貴皇子の權（よろこ）びの御歌一首」とする。

八 はるきぬとひといいどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞおもふ  
丹生のたぐみね

【異同】ひといいとも―人はいへとも（桂・大） 丹生のたぐみね―丹生たぐみね（大）

【現代語訳】春が来たと言はうけれども、鶯が鳴かないうちはそんなことはあるまいと思うよ。

【語句】○かぎり 時間的に、限定された範囲内をいう。うち。あいだじゅう。「秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬわが身を」（古今集・二七六）。○あらじとぞおもふ あるまいと思うよ。「おもふ」の主語は自分。二句目の「ひと」と対比する。

【所載】古今集・春上・一一／忠岑集Ⅰ・三三／忠岑集Ⅱ・五／忠岑集Ⅲ・五／忠岑集Ⅳ・一四／三十人撰・七三／九品和歌・九／奥儀抄・九五／詠歌一体・四三／三五記・二二三

【参考】作者名は所載欄の文献に一致する。表記「丹生」については古今集・善海所伝本の当該歌に「にふのたぐみね」とある（久曾神昇『古今和歌集成立論・資料編上』風間書房、一九六〇年）。

九 かすがのゝとぶひのゝもりいでゝみよいまいくかありてわかなつみてん  
古一春上

【異同】ナシ

【現代語訳】春日野の飛火野の野守よ、外に出て見ておくれよ。あと何日たてば若菜を摘むことができるのだらうかと。

【語句】○かすがのゝとぶひのゝもり 「かすがの」は奈良市の春日山のふもとの野。平城京からは東方の高台にあたり、烽火を置いて外敵に備えたことから「飛火野」ともいい、「とぶひのゝもり」で、この地の番人をいう。「かすがのゝとぶひのゝもり見しものをなきなといはばつみもこそうれ」（後撰集・六六三）。○わかなつみてん 「わかな」は春先に見られる食用となる草の総称。宮中では正月の最初の子の日に若菜の羹を天皇に献上したこと、民間にもこの日に若菜を摘む風習が広まったとされる。「てん」は完了の助動詞「つ」の未然形に推量の助動詞「む」が付いたもので、可能の推量。……できるだろう。「梓弓おして春雨けふふりぬあすさへ

ふらばわかなつみてむ」(古今集・二〇)。

【所載】古今集・春上・一八／新撰和歌・二五／秀歌大体・六／俊頼髓脳・三一七／和歌童蒙抄・一一一／奥儀抄・四三八／袖中抄・三一二／和歌色葉・二二九／桐火桶・四二／悦目抄・二四

藤原言直

一〇 春<sup>同</sup>やとき花やをそきゝわかむうぐひすだにもなかずもあるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】春の訪れが早いのか、花の咲くのが遅いのか、と(その声を)聞いて判断しようと思っていた、その鶯でさえも、まだ鳴かずにいることであるよ。

【語句】○花やをそき 花やおそき。○きゝわかむ 鶯の声を聞いて判断しようの意。「む」は詠み手の意志を表わし、連体形。

【所載】古今集・春上・一〇／新撰和歌・一三／奥儀抄・四三九／古来風体抄・二二二

【参考】作者名は古今集に一致する。

〔以上五首担当 青木太朗〕

一一 いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆるはるべ<sup>日</sup>となりにしものを

【異同】ナシ

【現代語訳】今更雪が降ろうか、もう降るまい。陽炎のもえ立つ春の季節になつてしまったものを。

【語句】○雪ふらめやも 「めや」は推量の反語形。……だろうか……ではないだろう。○かげろふ 晴れた春の日などに地面が熱せられ、立ちのぼる水蒸気が光を受けてゆらめいて見えるもの。「かぎろひ」とも。○はるべ 春のころ。「べ」は「タベ」の「べ」に同じ。上代では「はるへ」「ゆふへ」と清音。

【所載】新古今集・春上・二一／万葉集・一八三九(旧一八三五) 今更 雪零目八方 蜻火之 療留春部常 成西物乎 イマサラニユキフラメヤモカゲロフノモユルハルヘトナリニシモノヲ いまさらにゆきふらめやもかぎろひのもゆるはるべとなりにしものを／人麿集Ⅱ・二〇／人麿集Ⅲ・一／人麿集Ⅳ・一〇七／赤人集Ⅰ・一三四／赤人集Ⅱ・一七／赤人集Ⅲ・二〇／秀歌大体・一四

一二 うぐひすのふゆごもりしてむめるこははるのむ月のなかにこそなけ

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が、長い冬籠もりに耐えて生んだ子は、春の睦月を待ち得て、やわらかな産着に包まれてのどやかに鳴いていることだ。

【語句】○はるのむ月の「睦月」に「襦袢（産着）」を掛ける。「正月一日、子生みたる人にむつきつかはずとてよめる めづらしく今日たちそむる 鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな」（詞花集・一六二）。ここは鶯の雛が産毛に包まれているさまをいう。

【所載】夫木抄・三七七

### ついたちのひ

拾一 春

そせい法師

一三 あらたまのとしたちかへるあしたよりまたるゝものはうぐひすのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】新しい年に改まった、その朝から、待たずにいられないものは鶯の声である。

【語句】◎ついたちのひ「ついたち」は、「月立ち」の意から、一日、特に一月一日、元日をいう。和歌では、新しい年を迎え、鶯や霞が詠まれて、春になる喜びが歌われる。○あらたまの年、月、春などにかかる枕詞。○としたちかへる 年が改まる。新年になる。○あしたより「あした」は朝の意。○またるゝものは「るる」は自発の助動詞。

【所載】拾遺抄・春・四／拾遺集・春・五／和漢朗詠集・七二／素性集Ⅰ・五〇／素性集Ⅱ・四一／素性集Ⅲ・三九／俊頼髓脳・二九一

【参考】作者名「そせい法師」は、所載欄の文献のすべてに一致する。

一四 同 きのふこそとしはくれしかはるがすみかすがの山にはやたちにけり

山辺あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日、年は暮れてしまったばかり。それなのに、元旦の今朝は、早くも春霞が春日の山に立ち懸かっていることだ。

【語句】○きのふこそとしはくれしか 「…こそ…已然形」の形で気持ちがあとにつづく場合、逆接になる例が多い。「きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く」（古今集・一七二）。○かすがの山現在の奈良市、春日神社の背後一帯の丘陵地。

【所載】拾遺集・春・三／万葉集・一八四七（旧一八四三）昨日社 年耆極之賀 春霞 春日山尔 速立尔来 キノフコトシハクレシカハルカスミカスガノヤマニハヤタチニケリ キのふこそとしははてしかはるかすみかすがのやまにはやたちけり／和漢朗詠集・七七／人麿集Ⅱ・一／人麿集Ⅲ・一四／赤人集Ⅰ・一四一／赤人集Ⅱ・二四／赤人集Ⅲ・二七／家持集Ⅰ・二／家持集Ⅱ・二／和歌体十種・三一／和歌十体・一三／三十人撰・一／三十六人撰・一／深窓秘抄・一／秀歌大体・一／奥儀抄・一一七／柿本人麻呂勘文・三九／古来風体抄・九九、三四三【参考】作者については拾遺集においても「山辺赤人」とするが、万葉集では不明。所載欄の諸家集は問題多く、赤人である可能性は低い。

一五 きライのふよりのちをばしらずもゝとせのはるのはじめはけふつらゆきにぞ有ける

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日以前のこととは知りません。それはさておき、百年もつづく春のはじめは今日の元旦でした。

【語句】○きのふよりのちをばしらず 「昨日より後」では解しがたい。傍記異文や所載欄の拾遺集や貫之集により、「昨日よりをち（遠）」として考えた。

【所載】拾遺集・雑賀・一一五九／貫之集Ⅰ・一三九／奥儀抄・四四二

【参考】賀の屏風歌で、所載欄の文献により貫之詠と確認できる。なお貫之集Ⅰの詞書には、「延喜二年五月、中宮の御屏風の和歌廿六首、あつまりて元日さけのむ所」とあり、田中喜美春、田中恭子『貫之集全釈』では、その「延喜二年五月」を「延長二年五月」の誤りとし、

底本、諸本、及び拾遺集詞書（雑賀・一一五九）などいずれも「延長」を「延喜」とし、さらに、この屏風

歌を資料とした勅撰集入集歌も「延喜」としているが、家集のこの位置に延喜初年の歌が収録されるのは疑問。私見により「延長」に改めた。

とする。延長二年であれば醍醐天皇の中宮穩子はちょうど四十歳。前年の四月二十六日に女御から立后したばかりで、四十賀の屏風歌ということになるうか。なお冷泉家新出の素寂本「貫之集」は非常に特異な本文を持ち、納得できることが多いが、ここはまさしく「延長二年五月」となっている。

〔以上五首担当 大養廉・久保木哲夫〕

一六 あたらしくあくるこよひをもゝとせのはるのはじめとうぐひすぞなく

【異同】 あたらしく―あらしふく（大）

【現代語訳】 新しく（年が）明ける今宵を「百年続く春の始め」と鶯が鳴いている。

【語句】 ○あくるこよひを（年が）明ける今宵を。所載欄の風雅集では「あくるとしをば」。貫之集では「あくることしをも」。○もゝとせのはるのはじめ 百年続く春の始め。賀意を表す。

【所載】 風雅集・賀・二一六八／貫之集Ⅰ・二一八

拾一春

一七 よしの山みねのしら雪いつきえてけさはかすみのたちかはるらん

源しげゆき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 吉野山の峰に残っていた白雪はいつの間にか消えて、（立春の）今朝は霞が代わりに立っているのだろうか。

【語句】 ○よしの山 奈良県吉野郡吉野町にある山。四番既出。○けさはかすみの（立春の）今朝は霞が。所載欄の三十人撰と深窓秘抄では「けふはかすみの」。○たちかはる 古いものが新しいものと入れ替わる。交替する。接頭語「たち」に「霞が」立ち」を掛ける。「たこの浦の風ものどけき春の日は霞ぞ浪にたちかはるらん」（続拾遺集・三三）。

【所載】 拾遺集・春・四／金葉集三奏本・春・一／重之集・二二二／金玉集・三／玄玄集・二九／三十人撰・七四／深窓秘抄・三／古来風体抄・三四四

【参考】作者名「源しげゆき」は所載欄の文献に一致する。

一八 むめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあは雪ぞふる  
のこりのゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】梅の枝に鳴きながら飛び移っている鶯の羽を真つ白にして淡雪が降っていることだ。

【語句】◎のこりのゆき 春になって降る雪。また、春に消え残る雪。古今六帖では初春に降る雪の歌が並んでいる。○はねしろたへに 羽を真つ白にして。「しろたへ」は白い色。○あは雪 淡雪。春先などに降る消えやすい淡い雪。万葉集の沫雪（あわゆき）は降ったばかりの、沫のように溶けやすい柔らかな雪で、冬の歌にもみえるが、中古に入ると淡雪（あはゆき）と理解されるようになり、春の雪とされた。

【所載】新古今集・春上・三〇／万葉集・一八四四（旧一八四〇）梅枝尔 鳴而移徒 鶯之 翼白妙尔 沫雪曾落 ウメガエニナキテウツロフウグヒスノハネシロタヘニアワユキゾフル うめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあわゆきぞふる／人麿集Ⅲ・六九／赤人集Ⅰ・一三九／赤人集Ⅱ・二二

一九 かすみたちこのめもはるのゆきふればはなゝきさともはなぞちりける  
古一春上 つらゆき

【異同】このめもはるの―木のめをはるの（大）

【現代語訳】霞が立ち、木の芽もふくらむ春の雪が降るという、花の咲いていないこの里にも花が散るように見えることだ。

【語句】○このめもはるの 「張る」は芽や根が伸びること。「春」と掛詞。「かすみたちこのめも」までが「はる」の序詞。「よも山にこのめ春さめふりぬればかぞいろはとや花のたのまん」（千載集・三二）。○はなゝきさと 花の咲いていない里。

【所載】古今集・春上・九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

凡河内みつね

二〇 はるたちてなをふるゆきはむめの花さくほどもなくちるかとおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】立春を過ぎてまだ降る雪は、梅の花が咲く間もなく散るのか、と思うことだよ。

【語句】○はるたちてなをふるゆき 春立ちてなほ降る雪。立春を過ぎてなお降る雪。「うちきらし猶ふる雪も春たつといふばかりにや花とみゆらん」（玉葉集・三〇）。○ちるかとおおもふ 所載欄の他文献では全て「ちるかとおもふ」。

【所載】拾遺抄・春・五／拾遺集・春上・八／躬恒集・三八五／左兵衛佐定文朝臣歌合・二

【参考】作者名「凡河内みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦狭依〕

あか人

二一 うちなびきはるさめくらししかすがにあまぐもきりあひゆきはふりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】春になって春雨が一日中降り暮らしている、それなのにまだ空には霧がたちこめて雪が降っていることよ。

【語句】○うちなびき 枕詞。草木の枝葉が萌え出、伸びてなびき茂るので「春」に、なびく様子から「草」「黒髪」にかかる。○はるさめくらし 春雨が一日中ふり「暮らし」と春雨が降って「暗し」と掛ける。○しかすがに それなのに。そうはいうものの。○きりあひ 霧がたちこめ。○ふりつゝ 降り降りしていることよ。「つゝ」は詠嘆の余情をこめて反復継続の意を表す。

【所載】万葉集・一八三六（旧一八三二）打麿 春去来者 然為蟹 天雲霧相 雪者零管 ウチナビキハルサリクレバシカスガニアマクモキリアヒユキハフリツツ うちなびくはるさりくればしかすがにあまぐもきらひゆきはふりつゝ／人麿集Ⅲ・一三／赤人集Ⅰ・一一九／赤人集Ⅱ・三／赤人集Ⅲ・一八／綺語抄・五八／和歌童蒙抄・九五

【参考】作者名「あか人」とあり、赤人集には当該歌があるが、人麿集にもあり、万葉集には、作者名なしで載



る。

二二 　はるがすみたちよらねばやみよしのゝやまにいまさへゆきのふるらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞がたちよってこないから、それで吉野の山には今でも雪が降っているのだろうか。

【語句】○たちよらねばや　立ちよらないからか。「たち」は春霞立ちと、立ち寄るの掛詞。○みよしの　大和国の歌枕。奈良県吉野川流域一帯をいう。「み」は美称。吉野山の桜、雪、吉野川の滝瀬などが歌に詠まれる。

○いまさへ　今でも。○ふるらん　降っているのだらう。「らん」は目前に見えないことを推量する助動詞。

【所載】貫之集Ⅰ・二〇一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二三 　うちきらしゆきはふりつゝしかすがにわがいのそのにうぐひすぞ鳴  
已下十一首無之イ  
あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】空全体を曇らせて雪は降り続いている、それでもさすがに我が家の庭では鶯が鳴いている。春なのだなあ。

【語句】○うちきらし　空全体を曇らせて。「うち」は接頭語。「きらし」は「霧る」の他動詞形。○ゆきはふりつゝ　「つゝ」は同じ動作の反復される意を表す。○しかすがに　そうはいうものの。

【所載】後撰集・春上・三三／拾遺集・春・一一／万葉集・一四四五（旧一四四一）打霧之　雪者零乍　然為我二  
吾宅乃苑尔　鶯鳴裳　ウチキラシユキハフリツツシカスガニワギヘノソノニウグヒスナクモ　うちきらしゆき  
はふりつつしかすがにわぎへのそのにうぐひすなくも／夫木抄・三七五／綺語抄・五九

【参考】作者名「あか人」とあるが、所載欄の後撰集はよみ人知らず、その他の文献すべて大伴家持とする。

二四 はるのひにかすみたなびきうらがなしこのゆふかげにうぐひすなくも  
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】春の日に霞がたなびいていても哀しい。この夕暮れの光のなかで鶯が鳴いていることよ。

【語句】○うらがなし ものかなし。○ゆふかげ 夕方の日の光。○うぐひすなくも 「も」は詠嘆を表す。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三八八／万葉集・四三二四（旧四二九〇）春野尔 霞多奈毘伎 宇良悲 許能暮影尔 鶯奈久母 ハルノノニカスミタナビキウラガナシコノユフカゲニウグヒスナクモ はるのひにかすみたなびきうらがなしこのゆふかげにうぐひすなくも

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

二五 うぐひすのたにのそこにてなくこゑはみねにこたふるやまびこもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が谷の底で鳴くその声は、山頂にまだ残りの雪があつて、春を告げる鶯に應えるこだまもないなあ。

【語句】○たにのそこ 谷の底。「底」に「其処」をかける。○みね 山頂。谷の底との対比。山頂には題「のこりのゆき」がある。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三八九／躬恒集Ⅱ・一五／躬恒集Ⅲ・一五／躬恒集Ⅳ・三六一  
〔以上五首担当 橋本智美・林マリヤ〕

二六 ふくかぜをなきてうらみようぐひすはわれやははなにてだにふれたる

【異同】ナシ

【現代語訳】吹いて、花を散らす風を泣いて恨んでおくれ、鶯よ―おまえは私を恨んでいるようだが―私は花に手だって触れてはいないのだから。

【語句】○なきて 「泣き」と「鳴き」の懸詞。○うぐひすは 「鶯よ」とほぼ同じ気持ち。新編日本古典文学

全集『古今和歌集』頭注では『うぐひす』は四字なので下に『は』をつけた」と指摘する。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九〇／古今集・春下・一〇六

二七 まつひとこぬものからにうぐひすのなきつるえだを<sup>花</sup>りてけるかな  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】待つ人も来ないのに、さつきまで鶯が愛し惜しんで鳴いていた枝を折ってしまったのだよ（あの人とともにめでようとして……）。

【語句】○ものから ……のに。逆接条件。○なきつるえだ 鶯が寄るのであるから、花のついた枝。傍記の「なきつる花」と等価。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九二／古今集・春下・一〇〇

【参考】作者名「みつね」とあるが、所載欄の古今集では「よみ人知らず」。

二八 はるた<sup>て</sup>ゝばはなとやみえんしらゆきのかゝれるえだにうぐひすぞなく

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になったら、（鶯にも）花と見えるのだろうか。白雪のかかっている枝に、鶯が鳴いているよ。

【語句】○はるたゝば 所載欄にある他の文献では「春立てば」。古今六帖の分類が「残りの雪」であるので、本来「春立てば」とあったものと思われるが、現存本文に従った。○はなとやみえん 雪を花に見立てる。古今集その他では「みらん」とあり、古来風体抄では「みらんの詞、今の世には少し用ひ難きなり」とする。異同にはそのような経緯が関係するか。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九三／古今集・春上・六／新撰万葉集・四一／素性集Ⅰ・一／素性集Ⅱ・三七／素性集Ⅲ・一／古来風体抄・二二〇／桐火桶・四〇

二九 しるしなきねをもなかなうぐひすのことしのみちるはなゝらなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】効のない声を立てて（花を惜しんで）鳴いていることだな、鶯は。今年だけ散る花でもないのに。

【語句】○しるしなき 効のないこと。「ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらをらばをりてめ」（古今集・六四）。○なく 「鳴く」と「泣く」の懸詞。○うぐひすの 新日本古典文学大系『古今和歌集』脚注では「説が一定しないが、『の』は主語で、作者の万感がこめられた余情表現と解す」とする。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九一／古今集・春下・一一〇／躬恒集Ⅰ・一二〇／躬恒集Ⅱ・二二／躬恒集Ⅲ・二六／躬恒集Ⅳ・三七五

三〇 はなのかをかぜのたよりにたぐへてぞうぐひすさそふしるべにはする<sup>やる</sup>

【異同】する―「する」ト「やる」ヲ割書ノヨウニ書ク（大）

【現代語訳】花の香を風の便りに添えてやって、（まだ訪れのない）鶯を誘い出す案内にしよう。

【語句】○かぜのたより 風という便り。○しるべ 道案内。てびき。

【所載】古今六帖「はるのかぜ」三八五、「うぐひす」四三九四／古今集・春上・一三／新撰万葉集・一一／新撰和歌・一五／新撰朗詠集・六四／友則集・二五／寛平御時后宮歌合・一／綺語抄・四七三

〔以上五首担当 杉本まゆ子〕

三一 たのまれぬはるのこゝろとおもへばやちらぬさきよりうぐひすのなく<sup>な</sup>をきかぜ

【異同】○はるのこゝろと―花の心と（大）

【現代語訳】うつろいやすい心をもった花、と思うからか、まだ散らぬ先から鶯はないているよ。

【語句】○たのまれぬ 頼みにできない。ずっと変わらぬものとして信頼することができない。「君が思ひ雪とつもらばたのまれず春よりのちはあらじと思へば」（古今集・九七八）。○はるのこゝろ 春の心。この歌語の用例はあるが、初句からの続きとして傍書の「はなのこゝろ」の方が自然である。こちらで解釈する。「花の心」は 花の色のあせ、散りやすい性質を「浮気な人」に重ねた表現。「うちはへてはるはさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん」（後撰集・九二）。○おもへばや 「ば」は已然形に接続し、確定条件、この場合、原因・

結果を示す。「や」は係助詞。軽い疑問を表す。思うからか。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九五／続古今集・春下・一二二／新拾遺集・雜上・一五四九／亭子院歌合・一〇／興風集Ⅰ・八

【参考】作者名「をきかぜ（興風）」は亭子院歌合（十卷本）に一致する。

三二　うぐひすの谷よりいづるこゑなくははるくることをたれかしらまし  
ちさと

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯の谷から里へ来鳴く声がなかったら、春の来たことを誰が知ろうか。

【語句】○谷よりいづるこゑ 「伐木丁々 鳥鳴嚶々 出自幽谷 遷于喬木」（毛詩伐木篇）による。原拠詩は「谷より出づ」に「登用される」という人事的意味があるが、この和歌にはそれを含めない。○こゑなくは 声がなかったなら。室町時代以降「声なくば」のように「ば」と解されたが、それ以前、形容詞の語尾「く」について「は」は、係助詞で清音。○たれかしらまし 「か」は反語。「まし」は助動詞。事実と反対のことを想像する場合に用いる。上の「なくは」に呼応し、なかったら、誰が知るだろうか、誰も知る人はいない、の意。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九六／古今集・春上・一四／新撰万葉集・二六一／寛平御時后宮歌合・二二二／俊賴髓脳・一七九／綺語抄・五七〇／和歌童蒙抄・一〇五／奥儀抄・一三五／袋草紙・六〇四／八雲御抄・六二

【参考】作者名「ちさと」は所載欄の古今集に一致する。

三三　むめのはなちるてふなへにはるさめのふりでつゝなくうぐひすのこゑ  
はせを

【異同】ちるてふなへに―ちりてふなへに（大）

【現代語訳】梅の花の散るといふ折に春雨が降り、振り出すように鳴く鶯の声。

【語句】○ちるてふ 散るといふ。○なへに ……と同時に ○ふりでつゝ 春雨に続く「降り」に、鶯の声を振り絞つての意の「ふりいで」を掛ける。鳥の声を「ふりいでて」鳴くとした例には「思ひいづるときはの山の

郭公からくれなゐのふりいでてぞなく」(古今集・一四八、新撰和歌・一三三)など。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九七／後撰集・春上・四〇／伊勢集Ⅰ・三三六／伊勢集Ⅱ・三三六／伊勢集Ⅲ・三三九

【参考】作者名「はせを」は後撰集四〇番歌では「よみ人しらず」。前の三九番の作者が紀長谷雄。「よみ人しらず」という表記が略されるか見落された場合、「はせを」の歌と認識される可能性はある。

三四 としたてばはなてふべくもあらなくにはるいまさらにゆきのふるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】新年になったので(もう春の)花と(言ってもよさそうなのに)そうは言えず、(この舞い落ちるのは)春にいまさら雪が降るらしい。

【語句】○としたてば「たつ」は新しい月あるいは季節がくることをいう。「睦月たつ」「春たつ」など。○はなてふべく 花といふべく。

【所載】貫之集Ⅰ・三五一

【参考】貫之集には第二句「花こふべくも」とある。

三五 やまのまにうぐひすなきてうちなびきはるとおもへどゆきはふりつゝ

【異同】やまのまに―やまのはに(御・大)

【現代語訳】山の間に鶯が鳴き、草木のなびく春と思うのに、しきりに雪が降る。

【語句】○やまのま 山と山の間。「うまさけ みわのやま あをによし」ならのやまの やまのまに いかくるまで……」(万葉集・一七)。○うちなびき 「うちなびく」という枕詞がある。草木の枝葉が伸びてなびき繁ることにより「春」にかかる。しかし万葉集では「うちなびき」は「こころはいもに」などとかかる例もあり、枕詞ではなく、こころそのようにとる。○ふりつゝ 助詞「つつ」は動作の反復を表す。何度も降り。

【所載】万葉集・一八四一(旧一八三七) 山際爾 鶯喧而 打靡 春跡雖念 雪落布沼 ヤマノハニウグヒスナキテウチナビキハルトオモヘドユキフリシキヌ やまのまにうぐひすなきてうちなびくはるとおもへどゆきふりしきぬ／人麿集Ⅲ・七一

【参考】初句を「やまきはに」とする類似歌が、赤人集Ⅰ・一三六、赤人集Ⅱ・一九、二三九、赤人集Ⅲ・二二に見える。

〔以上五首担当 平野由紀子〕

### 子日

#### 大伴やかもち

三六 はつはるのはつねのけふのたまばゝきてにとるからにゆらく玉のを

【異同】ナシ

【現代語訳】新春の初子のきよう賜った玉で飾った箸は、手にとるとともに、玉を貫いた緒がゆらゆらと清らかな音をたてるよ。

【語句】◎子日 正月最初の子の日のこと。この日野外に出て、小松を引き若菜を摘み、遊宴して千代を祈った。宮廷で行われた子日宴は、続日本紀天平一五年正月壬子（十二日）条に、「御石原宮楼（在城東北）賜饗於百官及有位人等（石原宮楼に御し（城の東北に在り）饗を百官及び有位の人等に賜ふ）」とあるのが文献上の初例。○たまばゝき 「たまははき」とも、「たまばわき」とも発音される。上代、正月子の日の儀礼用品の一、蚕室を掃く玉で飾った箸をいう。皇后が養蚕を行ったことを表すものとされ、天皇が農耕したことを表す辛鋤（からすき）とともに子の日に飾られる。○からに ただ……だけで。とともに。……と同時に。○ゆらく 玉や鈴が触れあつて音を立てるさま。○玉のを 玉を貫き通したひも状の緒。

【所載】新古今集・賀・七〇八／万葉集・四五一七（旧四四九三）始春乃 波都祢乃家布能 多麻婆波伎 手尔等流可良尔 由良久多麻能乎 ハツハルノハツネノケフノタマバハキテニトルカラニユラクタマノヲ はつはるのはつねのけふのたまばはきてにとるからにゆらくたまのを／夫木抄・一六二／俊頼髓脳・二七八／綺語抄・五五四／和歌童蒙抄・一一四／奥儀抄・三六八／袖中抄・八五三／古来風体抄・二一〇／和歌色葉・一三七／八雲御抄・一六七／太平記・一一七／宝物集・四〇二

【参考】この歌は、聖武天皇天平宝字二年正月三日に内裏で子日宴が行われたときのもの。作者名「大伴やかもち」は所載欄の文献に一致する。

つらゆき

三七 ちとせてふこまつひきつゝはるのゝにとをさもしらずわれはきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】千年のよわいを寿ぐという小松を引きながら、春の野で、その遠さも忘れて、あなたの長寿を祈りながらここまでできてしまったことだ。

【語句】○こまつひきつゝ 「つつ」は反復を表わす。野のあちこちで小松を引いて。松は長寿・不変の象徴とされ、平安時代には、初子の日に野に出て小松を引き千代を祈るならわしがあった。○はるのゝに 春の野において、という意味。○とをさもしらず とほさもしらず。遠さも気にかけて、忘れて。

【所載】貫之集Ⅰ・五一二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

いせ

三八 おふるよりとしさだまれるまつなればひさしきものとたれか見ざらん

【異同】ナシ

【現代語訳】生い出でたその時から、千歳の寿命ときまつている松だから、行く末久しいものと誰が見ないであろうか。誰しも行く末久しくめでたいものと思つて見るであろう。

【語句】○としさだまれるまつ 千年の長寿ときまつている松。○たれか見ざらん 「か」は反語。誰が見ないであろうか、誰しもそう思つて見るであろう。

【所載】新後拾遺集・慶賀・一五五〇／伊勢集Ⅱ・七六／伊勢集Ⅲ・七三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

みつね

三九 ねたくわれねのひのまつにならましをあなうらやまし人にひかるゝ

【異同】ナシ



【現代語訳】 いまいましいことに、私は子の日の松になればよかったのに、ならなかった。ああ、うらやましいことよ。松は人に引かれていたよ。(私も松になって人に引き立てられ用いられたらどんなにかよかったらうに。)

【語句】 ○ねたく 「名痛く」の略。相手の名が高くて自分に痛く感じられる、が原意。憎らしい。いまいましい。小癪だ。○ならましを (実際にはそうではないが) …… だったらよかったらうに。○ひかるゝ 子の日の松が人に「引かれる」ことに、人事面で人に「引き立てられる」ことを言い掛けた。

【所載】 躬恒集Ⅰ・九七／躬恒集Ⅱ・一／躬恒集Ⅲ・一／躬恒集Ⅳ・三四八／躬恒集Ⅴ・三二二

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

四〇 おぼつかなけふはねのひかあまならばうみまつをしぞひくべかりける づらゆき

【異同】 ひくへかりける―ひくへかりけれ(御)

【現代語訳】 心もとないことだ。きょうは子の日なのか。もし私が海人(あま)であるならば、小松ならぬ海松(みる)をこそ引くところであつたよ。

【語句】 ○おぼつかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹。対象がはつきりせず、そのために不安になる心という。ここは、海上の旅の途中なので、「けふはねのひか」と「おぼつかな」く思われる、ということ。○あま 漁業、製塩など、海に拠って生活する人々。○うみまつをしぞ 「うみまつ」はみる(海松)のこと。海の岩に生える緑藻。食用になる。「し」は強意の副助詞、「ぞ」は係助詞。

【所載】 土佐日記・三五

【参考】 所載欄に示したとおり、土佐日記の承平五年正月二九日条にある歌、海上での貫之の詠である。

〔以上五首担当 斎藤熙子・山下道代〕

四一 はるがすみたなびくまつのとしあらばいづれのはるかのかのべにこざらん

【異同】 ナシ

【現代語訳】 春霞がたなびいている松の如き長寿があつたなら、どの春も、寿命を延べるために松を引きに野辺へ来ないことがあるうか。

【語句】○はるがすみたなびくまつ 春霞が横に長く引いてかかっている松。神仙思想への連想も働く。「松」は長寿の象徴で、子の日の行事（三六番歌子の日の項参照）には、その根を引く。霞が「たなびく」の「ひく」から、子の日の行事である松を「引く」と意味を遷移させる工夫がある。「春霞たなびく」は「山」「野辺」にかかる例が多く、直接「松」にかかるのは、他に「久しきをねがふ身なれば春霞たなびく松をいかでとぞ見る」（貫之集・二八一）の一例のみで、漢詩文にみられる「松煙（松にかかる霞）」に導かれた表現。「風竹松煙昼掩閑 意中長似在深山（風竹松煙昼閑を掩ふ 意中長く深山に在るに似たり）」（長安閑居・白氏文集・六六五）、「輕煙松心入 轉鳥葉裡陳（輕煙松心に入り 轉鳥葉裡に陳へつらぬく）」（美努淨麻呂「春日、応詔」・懷風藻・二四）。○いづれのはるかのべにこざらん 「か」は反語の係助詞。「のべ」は「野辺」と寿命を「延べ」る意を掛ける。どの春も、野辺に寿命を延べに来ないことがあるうか、毎春来るの意。類歌「百千鳥木伝ひ散らす桜花いづれの春か来つつ見ざらん」（貫之集・五七）。

【所載】貫之集Ⅰ・九一

【参考】「霞」と「煙」についての参考文献として、小島憲之「上代に於ける詩と歌——『霞』（カ）と『霞』（カすみ）をめぐって」（『万葉学論攷』一九九〇年四月）、渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）、田中幹子『和漢・新撰朗詠集の素材研究』（和泉書院、二〇〇八年）等がある。  
古今六帖に作者名はないが、貫之集に入集する。

## 四二 ねのひするのべにこまつのなかりせばちよのためしになにをひかまし

たづみね

【異同】ナシ

【現代語訳】子の日の遊びをする野辺に、もし小松がなかったなら、千代の長寿を保つ例として、いったい何を引いたらよいのだろう。

【語句】○ねのひする 正月の最初の子の日に、野に出て小松の根を引き、長寿を祈る。○ちよのためし 千年の寿命を保つ例。「鶴のすむ松が崎にはならべたる千代のためしを見するなりけり」（拾遺集・六一七・平兼盛）。「子の日の松」と「千年」の取り合わせの例は多く、「ちとせまで限れる松も今日よりは君に引かれて万代や経む」（拾遺集・二四・大中臣能宣）など。○ひかまし 「引く」は子の日の行事である松を「引く」と、言葉、典拠、証拠などを探して例とする、引用する意の「引く」との掛詞、「まし」は反実仮想。

【所載】拾遺抄・春・二〇／拾遺集・春・二三／金玉集・八／和漢朗詠集・三一／忠岑集Ⅳ・一六七／忠見集Ⅰ・八五／忠見集Ⅱ・五六／秘藏抄・五／三十人撰・一〇八／三十六人撰・一二八  
【参考】作者名「たぐみね」は、拾遺抄、拾遺集、金玉集、和漢朗詠集の作者と一致し、忠岑集Ⅳに入集するが、忠見集Ⅰ・Ⅱにも入集する。『忠岑集全釈』は、この歌が忠岑集Ⅳにおいて、忠見歌として異伝を持つあたりの歌群に配置されていること、忠見集が「朱雀院の御屏風に」という詠歌年次を表す詞書をもっており、朱雀院の在位は延長八年（九三〇）～天慶九年（九四六）であるから、忠岑では無理で、忠見の歌人活動時期にふさわしいものとする。この作者名の妥当性については、後考を俟ちたい。

### わかな

あか人

四三 はるたゝばわかなつまんとしめしのにきのふもけふもゆきはふりつゝ

【異同】はるたゝは――明日からは（大）

【現代語訳】立春になったら若菜を摘もうと標を張っておいた野に、昨日も今日も雪は降り続けているよ。

【語句】◎わかな 若菜。ゑぐ、莖、薺など早春の野辺に生えた食用の菜。若菜を摘む民俗が、平安時代に入って正月子の日の宮廷行事「供若菜」となったという。「春日野に煙立つ見ゆ娘らし春野のうはぎ摘みて煮らしも」（万葉集・一八八三（旧一八七九））、「春日野に若菜摘みつつ万代を祝ふ心は神ぞ知るらむ」（古今集・三五七・素性）など。○しめし 標をしておいた。「標む」＋過去の助動詞「き」の連体形。「標む」は土地を占有したり場所の区画を示すために、木をたてたり、縄を張ったりして、立ち入りを禁じたりしをつける意。

【所載】新古今集・春上・一一／万葉集・一四三一（旧一四二七） 従明日者 春菜将採跡 標之野尔 昨日毛今日毛 雪波布利管 アスヨリハワカナツマムトシメシノニキノフモケフモユキハフリツツ あすよりははるなつまむとしめしのにきのふもけふもゆきはふりつつ／新撰和歌・二三／和漢朗詠集・三六／赤人集Ⅰ・二／赤人集Ⅱ・二三五／赤人集Ⅲ・二三五／俊成三十六人歌合・一六／時代不同歌合・七／三十六人撰・四四／秀歌大体・八／袖中抄・七六五／桐火桶・一三九／和歌口伝抄・二  
【参考】作者名「あか人」は所載欄の文献に一致する。

四四 ゆきてみぬ人もしのべとはるのゝのかたみにつめるわかなゝりけり つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】子の日の遊びに行かなかった人も様子を思い浮かべなさいよというので、この筐に摘んだ若菜なのだなあ。

【語句】○しのべ 「偲ぶ」の命令形。「偲ぶ」は心ひかれて見えないところに思いを馳せる意。○かたみ 目の細かい竹籠の「筐」と、過去のことなどを思い出す種となる「形見」を掛ける。「形見」は「恋しくは形見にせよと我が背子が植ゑし秋萩花咲きにけり」(万葉集・一二二三(旧二二一九))という例があり、「玉津島見れどもあかずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため」(万葉集・一二二二(旧一二二三))、「故郷の初もみぢ葉を手折り持ち今日ぞ我が来し見ぬ人のため」(万葉集・二二三〇(旧二二二六))のごとく、見ぬ人のために自然の景物を持ち帰るとするのも万葉集以来の類型表現である。

【所載】新古今集・春上・一四／金玉集・春・一〇／和漢朗詠集・三七／貫之集Ⅰ・三／三十人撰・一二／三十六人撰・一二／深窓秘抄・一二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

四五 きみがためはるのゝにいでゝわかなつむわがころもでにゆきはふりつゝ 古一 春上

(仁和のみかどの御哥)

【異同】(仁和のみかどの御哥—ナシ(御所本ハ四六番歌ノ作者トスル)。底本ノ永青文庫本ハ、次ノ行ノ「仁和のみかどの御哥」トコノ歌ヲ線デ結ブ。桂宮本・大久保本ハ四五番歌ノ前ニ「仁和のみかとの御哥」トスル作者記載ガアル。

【現代語訳】あなたにさしあげようと思って、春の野に出て若菜を摘んでいる私の袖に雪が降りかかっています(折りからの雪のなかで摘んだ若菜です)。

【語句】○きみがため 君がため。「君」は若菜を贈る相手。例歌として「君がため山田の沢にゑぐ摘むと雪消の水に裳の裾濡れぬ」(万葉集・一八四三(旧一八三九))、「君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでて摘める若菜ぞ」(大和物語・二九三)等。○ころもで 袖の歌語。○仁和のみかど 光孝天皇。

【所載】古今集・春上・二二／新撰和歌・二九／新撰朗詠集・三三／仁和御集・一／新時代不同歌合・四三／秀歌大体・一一／百人秀歌・一八／百人一首・一五／定家十体・一六一／詠歌大概・二／東野州聞書・一四四

【参考】作者名「仁和のみかど」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野方子〕

四六 <sup>古一春上</sup> かすがのゝわかかなつみにやしろたへのそでふりはへて (は□) <sup>人の</sup> ゆくらむ

【異同】四五番歌参照。かすかのゝ―春の野に(大) 人のゆくらむ―底本ハ「は□」(一字分不明)ノ上ニ重ネテ「人の」ト書ク。

【現代語訳】春日野の若菜を摘みに行くのであろうか、女性たちが白い袖を振りながらわざわざ(遠くに)出かけて行くのは。

【語句】○かすがの 「春日野」は大和国の歌枕、現在の奈良市街東南部に位置する野。三番歌参照。○しろたへの 「そで」にかかる枕詞で、こゝは袖の白さの意味もある。○そでふりはへて 「袖振り」に、「ふりはへて」(わざわざ、ことさらに、の意)を掛ける。袖を振る主体は女性。

【所載】古今集・春上・二二／新撰和歌・三一／和歌体十種・五／秀歌大体・九／綺語抄・五一七／古来風体抄・二二五

【参考】作者名がないが、所載欄の古今集・古来風体抄に貫之とある。古今集の二一番(光孝天皇歌)・二二番(紀貫之歌)という隣合せが、古今六帖の四五・四六番歌となっている。なお、所載欄の古今集の詞書には「歌たてまつれとおほせられし時、よみてたてまつれる」とあり、醍醐天皇に奉った歌で屏風歌と思われる。片桐洋一「古今和歌集全評釈」に、貫之集の「春日野」詠全三首がすべて若菜を詠み込み、屏風歌であると指摘する。

四七 かはかみにあらふわかかなのながれてもきみがあたりのせにこそよらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】川上で洗う若菜が流れても下流の浅瀬に寄りつくように、わたしもあなたに寄り添いたいものです。

【語句】○わかかなの 若菜のように、の意。○きみがあたりのせ 「せ(瀬)」は川の浅くなったところ。所載欄の万葉集に「妹があたりのせ」とある。万葉集「妹」が古今六帖「君」とある、そのような語の転換例は多い

と指摘されている（平井卓郎『古今和歌六帖の研究』第三章第五節）。当該歌の「きみ」も女性を指すか。

【所載】万葉集・二八四九（旧二八三八）河上尔 洗若菜之 流来而 妹之当乃 瀬社因目 カハカミニアラフ  
ワカナノナガレキテイモガアタリノセニコソヨラメ かはかみにあらふわかなのながれていもがあたりのせに  
こそよらめ／人麿集Ⅱ・四九四／人麿集Ⅳ・二六八

【参考】人麿集に見える歌だが、所載欄の万葉集に作者名はない。

四八 わかなつむわれをひと見ばあさみどりのべのかすみとたちかくれなむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】若菜を摘んでいる私をもし人が見るならば、浅緑色に野辺に霞が立つ、その中に私もきつとたち隠れているであろう。

【語句】○あさみどりのべのかすみ この表現は、「あさみどり野辺の霞はつつめどもこぼれてにほふ花桜かな」（寛平御時后宮歌合・一）の影響があるう。霞の色彩に触れた論考は数あるが、森田直美『『更級日記』「あさみどり花もひとつに霞みつつ」詠再考』（『むらさき』二〇〇九年十二月）によれば、「あさみどり色の霞」という表現（概念）が通行し定着するのは中世期になってからであり、霞の色としては「白（半透明）」が想定される歌が平安和歌に幾つも確認できるといふ。ここは、緑色の野辺の草木に白い霞がかかり、色が薄まったという、写実的な表現であるという指摘を生かした。○とたちかくれなむ 「霞と立ち」と「たち隠れ」（「たち」は接頭語）とを掛け、野辺に霞立つように、私もたち隠れるであろう、の意。格助詞「と」は、「さくら花みかさの山のかげしあれば雪とふれどもぬれじとぞ思ふ」（拾遺集・雑春・一〇五六）や「春たたば花みんと思ふ心こそ野べの霞と立ちまさりけれ」（袋草紙・六一八）等の「と」の用法と同じで、「……のように、……というようすで」の意味。なお、「かくれなむ」よりも、所載欄の貫之集「……野べの霞も立ちかくさなむ」のように、「隠さなむ」（霞が隠してほしい）の方がわかりやすい。

【所載】貫之集Ⅰ・六八／金葉集初度・三二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に同じ。貫之集に「延喜十七年八月、宣旨によりて」とあるが、詳しい詠歌事情は不明。霞が若菜を摘む女性の姿を隠すという類歌「野辺なるを人を見るとて若菜摘む我を霞の立ちかくすらむ」（貫之集Ⅰ・二五〇）は、屏風歌である。

四九 く<sup>ら</sup>にすこのわかなつまんとしめしのゝしばしばわれをおぼせわがせこ

【異同】ナシ

【現代語訳】国栖の子らが若菜を摘もうとして決めていた標（し）めし野、その名のようにしばしば私を心にして思つて下さい、わが恋人よ。

【語句】○くにすこの 「国栖（くにす）」は、『古今和歌六帖標注』に日本書紀神武紀・応神紀を引用するように、吉野川上流に住んだという吉野の国栖を指す。宮中における、元日・白馬・踏歌の節会や新嘗会・大嘗会の折に、大贄（おおいえ）。貢ぎ物を献上し歌笛を奏し、服属儀礼に参与した。管見に入つた「くにすこ」はこの一例のみで、「くにすら（が）」「くずひと（の）」の例が多い。なお、「国栖ら」「国栖」の若菜摘みを詠じた歌は参考欄参照。他にも宝治百首・文保百首等に見える。○しめしの 標（しめ）を張つておいた野。四三番歌参照。○しばしば 上三句までが、「しめしの」の類音である「しばしば」を導く序詞。○せこ 女性が夫や恋人である男性を親しんで呼ぶ語。

【所載】ナシ

【参考】初句から「しばしば」までほぼ同じ歌として、万葉集・一九二三（旧一九一九）「国栖等之 春菜将採 司馬乃野之 数君麻 思比日 クニスラガワカナツムラムシバノノシバシバキミヲオモフコノコロ くにすら がるなつむらむしまのののしばしばきみをおもふこのころ」、袖中抄・七六四「くずひとの若菜摘むらむ司馬（しめ）の野のしばしば君を思ふこのころ」（作者名「吉野国撰」）がある。また、赤人集Ⅰ・二〇二「くにすらが若菜摘まむと標めし野にあまのきみかよぎりころほひ」（赤人集Ⅱ・八三、赤人集Ⅲ・九〇に下句異同）は、下句意味不通ながら、上三句はほぼ同じ。

あをむま

やかもち

見イ

五〇 みづとりのかものはいろのあをきむまをけふくる人はかぎりなしてふ

【異同】ナシ

【現代語訳】水鳥の鴨の羽色をした青い馬、その青馬を今日見る人の寿命は限りないという（傍書「見る人」で現代語訳した）。

【語句】◎あをむま 青馬（「白馬」とも表記）の節会に牽かれる馬。後年の「あをむま」歌はほとんど節会の折のもので、新撰六帖・夫木抄の同題でも節会の馬の詠がならぶ。白馬の節会は、正月七日に行われ、叙位の儀が済んだ後、紫宸殿の庭に七頭ずつ計二十一頭の馬が牽かれて渡るのを天皇が御覧、その後に宴が持たれた（北山抄）。なお、牽かれる庭は、平安時代初期には豊樂院であった。「馬」は陽獣、「青」は春の色をあらわし、正月七日に青馬を見ると、その年の邪氣が払われるという（年中行事歌合判詞・公事根源）。見物に来る里人も多かった。○みづとりの「かも（鴨）」の枕詞。○かものはいろの「こ」までの初二句は、「あをき」を導く序詞。○あをきむま「青」といわれる馬の毛色は、上代に「青馬」と表記し、白毛に青毛・黒毛のまじる色であった。和名類聚抄「驄馬」の項に、「青白雑毛馬也」の説明を、また、「漢語抄（奈良時代の辞書）云、青馬也」を引用する。平安時代になると、「白馬」節会と表記され、「あをうま」題で、「ふる雪に色もかはらでひくものを誰かあを馬と名付けそめけむ」（兼盛集・一一八）などの歌も見えるが、『小右記』万寿元（一一〇二四）年十一月三十日条に、「葦毛」（あしげ）の馬を、「白馬料」と記すので、やはり雑毛の馬であつたらしい。○けふくる人は「けふ」は正月七日。なお、「くる人」では意味をなさないので、傍記異文や所載欄の「見る人」を生かす。○かぎりなしてふ 寿命の限りがないという。「てふ」は「と言ふ」の縮まった表現。

【所載】万葉集・四五二八（旧四四九四）水鳥乃 可毛羽能伊呂乃 青馬乎 家布美流比等波 可芸利奈之等伊布ミヅトリノカモハノイロノアウマヤケフミルヒトハカギリナシトイフ みづとりのかものはいろのあをう

まをけふみるひとはかぎりなしといふ／和歌童蒙抄・一一三

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の万葉集も同じ。万葉集には、天平宝字二（七五八）年正月七日の節会に向けて、家持があらかじめ作つておいたものだが、節会は六日に変更されて歌を奏する機会がなかったとある。

〔以上五首担当 犬養悦子・加藤静子〕

## なかのはる

みつね 或本

五一 はかなくてはるひとはるはすぎにけり花のさかりはすぎがてにせよ

【異同】ナシ



【現代語訳】束の間に春はすべて過ぎてしまったことだ。けれども、花の盛りは（そんなふうにあっけなく過ぎてしまうのではなく）なかなか過ぎて行かないようにしておくれ。

【語句】◎なかのはる 仲春。春の三か月のうち、中の月。陰暦二月の異称。○はかなくて あっけない状態で。この「はかなし」は、「束の間である」「あっけない」の意。「はかなくてすぐる秋とは知りながら惜しむ心のなほ飽かぬかな」（陽成院歌合・一六）。○はるひとはる 春の三か月全部。春いっぱい。但し、所載欄の文献ではすべて「はるひとつき」とあり、春の一か月が過ぎたという意になるこちらの本文の方が、「なかのはる」の題にはふさわしい。古今六帖の本文では、春の三か月が過ぎてしまったことになる。○がてに ……できないで。……しかねて。

【所載】躬恒集Ⅰ・五八／躬恒集Ⅲ・一六一／躬恒集Ⅴ・九〇／左兵衛佐定文歌合・四

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

五二 わがこゝろはるの山べにあくがれてなが／＼し日をけふもくらしつ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の心は春の山辺にひかれてさまよい出て、長い長い春の日を日暮まで今日もまた過ごしてしまつた。

【語句】○あくがれて 「あくがる」は、ある対象に心がひかれて、心が体から離れてさまよい出る意。○なが／＼し日を 長い長い春の日を。「ながながし」は、「長い長い」「非常に長い」意。類想歌「あだにこそこのべの花みにわがこしかながながし日をくらしつるかな」（古今六帖・一二二）。

【所載】新古今集・春上・八一／躬恒集Ⅰ・一四八／躬恒集Ⅱ・五九／躬恒集Ⅲ・四七／躬恒集Ⅴ・七三／亭子院歌合・一四／袋草紙・三三五

【参考】古今六帖には作者名がなく、所載欄の新古今集は作者を「紀貫之」とするが、亭子院歌合・袋草紙は「躬恒」とし、躬恒集に見える。

五三 春はなをわれにてしりぬ花ざかりこゝろのどけきひとはあらじな  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】春はどういうものか、やはり自分自身を顧みることによってわかった。花盛りには心のどかでいられる人はいないだろうよ。

【語句】○春はなを 春の季節にはやはり。「なを」は「なほ」。○こゝろのどけきひとはあらじな 心のどかに過す人はないであろうよ。春の花盛りには、自分だけではなく誰もが、花のことが気になって心のどかではないだろう、という気持。「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」（古今集・五三・在原業平）。

【所載】拾遺抄・春・二六／拾遺集・春・四三／和漢朗詠集・二六／忠岑集Ⅰ・二八／忠岑集Ⅱ・六六／忠岑集Ⅲ・二／忠岑集Ⅳ・一六八／左兵衛佐定文歌合・三／三十六人撰・八二

【参考】作者名「たゞみね」は、所載欄の文献に一致する。

五四 うぐひすのはなふみしだくこのもとはいたく雪ふるはるべなりけり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が花を踏み散らす木の下は、（春とはいっても）ひどく雪が降る春であったよ。

【語句】○ふみしだく 踏みつける。踏み散らす。○はるべ 春の頃。春の季節。○雪ふる 落花を雪が降つたと見立てたもの。

【所載】万代集・春下・四二二／貫之集Ⅰ・二〇四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰによると、当該歌は藤原定方のための屏風歌。

五五 いつまでかのべにこゝろのあくがれんはなしちらずはちよもへぬべし  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】いったいいつまで野辺に心がひかれてさまようのだろうか。花さえ散らないならば、きっと千年も

の長い年月でも野辺で過<sup>ご</sup>してしま<sup>う</sup>だろう。

【語句】○あくがれん 「あくがる」については五二番歌参照。

【所載】古今集・春下・九六／素性集Ⅰ・一四／素性集Ⅱ・二三／素性集Ⅲ・四四

【参考】作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

### やよひ

五六 ちるはなにせきとめらるゝやま川のふかくもはるのなりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】散る花に堰き止められた山川の水かさが深くなるように、日が積もり春も深まったことだ。

【語句】◎やよひ 三月。歌題としては他に亭子院歌合（十卷本）に見える。○やま川の 「やま川」は、山あいを流れる川。流れが速く、したがって底は浅い。一方で、散った花や紅葉が堰き止めることで、水かさが深くなったり流れが淀む、などと詠む事例も多い。「山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」（古今集・三〇三）。初句から「こ」までが「ふかく」を導く序詞。○ふかくも 水かさの深さと春が深まるの意を掛け。「みなそこにしづめるはなのかげみればはるのふかくもなりにけるかな」（亭子院歌合・三四）。

【所載】詞花集・春・四四／新撰朗詠集・四四／後葉集・春下・七七

【参考】詞花集では作者を「能宣」とするが現存の能宣集からは見出せない。

五七 まださかぬ花も山べにあるべきをこゝろもとなくすぐるはるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】まだ咲いていない花も山辺にはあるはずなのに、それを待ちきれずに過ぎて行く春であることだ。

【語句】○こゝろもとなく 待ちきれない、じれったい。『古今和歌六帖標注』では用例として土佐日記・二月九日「心もとなきに、明けぬから船を引きつつ上れども」と伊勢物語・八十三段「この馬の頭、心もとながりて」を指摘する。和歌では「ほどもなくくるとおもひし冬の日のこころもとなきをりもありけり」（詞花集・二三一・道命）まで下る。

【所載】ナシ

みかの日

拾五賀

たぐみね

五八

みちとせになるてふもゝのことしよりはなさくはるになりぞしにける

あふ

【異同】ナシ

【現代語訳】三千年に一度実が成るという桃の、今年から花が咲くというその春になったということだよ。

【語句】◎みかの日 三月三日。『雑令』に節日とされる。古く持統天皇の頃から宴が持たれ、次第に年中行事「曲水（こくすい・きよくすい）の宴」として定着、賦詩も行われた。私邸においても、この日には桃の花を飾り、節供のものを準備した。和歌では、桃の花や草餅に関わる詠がよく見られる。○みちとせになるてふもゝ 桃の実が三千年に一度実するという、仙女の西王母伝説を踏まえた表現。吉兆にめぐり合えたことで賀意を表わす。「みちとせにひらくる桃の花ざかりあまたの春は君のみぞ見む」（兼盛集・一七五）。所載欄の拾遺抄・拾遺集や和漢朗詠集、躬恒集、是則集、元輔集では初句を「みちとせに」とするが、忠岑集と亭子院歌合、また歌学書では「みちよへて」とあり、対立する。袋草子では、「みちとせ」と「ことし」と二箇所「年」を表わす語のあることを歌病の一として指摘する。

【所載】拾遺抄・賀・一八四／拾遺集・賀・二八八／和漢朗詠集・四四／躬恒集Ⅱ・二一一／忠岑集Ⅰ・四八／忠岑集Ⅱ・七七／忠岑集Ⅲ・一一／忠岑集Ⅳ・一四九／是則集・六／元輔集Ⅰ・二五九／亭子院歌合・六／俊頼髓脳・三三／和歌童蒙抄・六六三、九一三／奥儀抄・二五六／袋草紙・三三三／和歌色葉・三五五

【参考】作者記載には忠岑とあり忠岑集にも載るが、亭子院歌合では坂上是則の詠とする。他に躬恒とする文献もあり、作者を断じることが難しい。なお元輔集では、貫之をはじめとする古今集時代の歌人の屏風歌を集めた歌群に収まる。

つらゆき

五九

きみがためわがをるはなははるとをくちとせをみたびありつゝぞさく

【異同】つらゆき―ナシ（大）

【現代語訳】あなたのために私の折る花は、春も行く末遠く、千歳を三度重ねても咲いていることですよ。

【語句】○はるとをく 春遠く。「遠く」は、「きみがため」の繁栄を寿ぐための語。行く末遠く、の意。「散りぬともあだにしもみじ藤花行さきとほく松にさければ」(貫之集・二二五)。○ちとせをみたび 千年を三度経ることで三千年の意。西王母伝説を踏まえ、桃の花が咲き続けるという ○ありつゝぞさく 貫之集をはじめとする所載の文献には「折りつつぞ咲く」とある。

【所載】夫木抄・一七六四／貫之集I・一七六／和歌童蒙抄・六六四

【参考】貫之集の詞書には「ももの花をんなのもののをる所」とある。西本願寺本貫之集では下句を「千歳みたびを折りつつぞ咲く」とする。

### 家持宅宴三月三日

新二春下

六〇 から人のふねをうかべてあそびけるけふぞわがせこはなかつらせよ

やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】唐の国の人が舟を浮かべて遊宴していたという今日、さあ、皆さんも花かずらを付けましょう。

【語句】○家持宅宴三月三日 万葉集の題詞に「三日守大伴宿祢家持之館宴歌三首」とある。これにより歌中の「ふねをうかべて」が曲水の宴の様子を指すことがわかる。○あそびける 万葉集をはじめとする所載欄の文献では「遊ぶてふ」といふの本文を残すものが多い。○わがせこ 集う官人への呼びかけの語。さあ皆さん。男性が親しみをこめて男性に対して用いる例は万葉集に多く見られる。「秋の田の穂向き見がりてわがせこがふさ手折りける女郎花かも」(三九六五(旧三九四三)) は大伴家持の大伴池主への贈歌。○はなかつらせ 花で作った髪飾り。

【所載】新古今集・春下・一五一／万葉集・四一七七(旧四一五三) 漢人毛 筏浮而 遊云 今日曾和我勢故花縵世奈 カラヒトモフネヲウカベテアソブテフケフゾワガセコハナカヅラセナ からひともしかだうかべてあそぶといふけふぞわがせこはなかつらせな／新撰朗詠集・四〇／夫木抄・一七四七／定家十体・二六三／綺語抄・三五三／和歌童蒙抄・一一六／袖中抄・一六〇

【参考】作者名は所載欄の万葉集に一致する。

〔以上五首担当 青木〕

はるのはて

六一 ゆくはるのたそかれどきになりぬればうぐひすのねもくれぬべらなり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】過ぎゆく春がたそがれ時になったので、日が暮れるように鶯の声も聞こえなくなってしまったようだ。

【語句】◎はるのはて 春の終わり。春の末。行く春を惜しみ、鶯や花に愛着を示しながら別れを告げる。○たそかれどき 薄暗くなつてはつきりと人が見わけられず、「誰（た）そ彼」といぶかしく思われる時分。夕暮れ時。春の終わりを一日の終わりに喩えた。○くれぬべらなり 暮れてしまったようだ。鶯の声が聞こえなくなつたことを「たそかれどき」に対応し、「暮れぬ」という。「べらなり」は、さかし↓さかしらなり、うまし↓うまらなり、などと同じように、推量の助動詞「べし」から派生した語。古今集、特に貫之の歌に多く見え、見立ての趣向のおもしろさを見いだす個性的な判断の陳述（藏中スミ「歌語『べらなり』の周辺」『水門』一九七八年八月、「歌語『べらなり』覚え書」『水門』一九八〇年十月）とか、単なる婉曲的表現ではなく、漢籍などの典故に支えられながら、当時の新しい「喩」の表現を確信をもって統括する言辭（中野方子『古今集』における『べらなり』——喩に承接される助動詞——『國文』一九九七年一月）などと説明される。使用例に男女の差はない。

【所載】貫之集Ⅰ・四二七

【参考】作者名「つらゆき」は貫之集とも一致する。なお、聞こえなくなる鶯の声と春の終わりとを結びつけた歌には、同じ貫之集Ⅰに「春のけふくるゝしるしは鶯のなかなずはなりぬる心なりけり」（四二八）や「桜花をるときしも鳴くなればうぐひすの音もくれやしぬらん」（四六三）などがある

六二 つれぐゝと花をみつゝぞくらしつるけふをしはるのかぎりとおもへば  
みつね

【異同】くらしつる—暮しふる（大）

【現代語訳】つくねんと、花を眺めながら一日を暮らしてしまったことだ。今日を春の最後の日と思うので。

【語句】○けふをし まさにこの今日を。「し」は強めの副助詞。平安時代では「し」は「しぞ」「しも」などと他の係助詞を伴う形か、当該歌のように「……し……ば」の形で条件句の中に用いられるのが一般的な用法。

【所載】新後拾遺集・春下・一六二／万代集・四九七／躬恒集Ⅰ・一五八／躬恒集Ⅱ・六八／躬恒集Ⅲ・五七／躬恒集Ⅳ・四〇七

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

六三 こゑたてゝなけやうぐひすひとゝせにふたゝびとだにくべきはるか  
藤原をきかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】声を振り絞って鳴け、鶯よ。この一年に二度と春は巡ってくるはずもないのだから。

【語句】○こゑたてゝ 大声を出して。「声たててなきぞしぬべき秋ぎりに友まどはせるしかにはあらねど」（後撰集・三七二・紀友則）。ただし所載欄に見える他文献ではすべて「声絶えず」か「声絶えで」とする。○くべきはるか は来るはずの春であろうか、そんなことはない。「かは」は反語。今年はまだ二度と春は巡ってこないのだから、思う存分悲しめ、の意。

【所載】古今集・春下・一三一／新撰万葉集・二四一／新撰和歌・一一九／興風集Ⅰ・四／興風集Ⅱ・八／寛平御時后宮歌合・四

【参考】作者名「藤原をきかぜ」は、所載欄の文献に一致する。

六四 花もみなちりぬるやどはゆくはるのふるさとゝこそなりぬべらなれ  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】花もすっかり散ってしまった家は、過ぎ去ってゆく春のふるさとなってしまった感じですね。

【語句】○ふるさと 古びて荒れた里、または、昔なじみの懐かしい里。○べらなれ 六一番歌語句欄参照。

【所載】拾遺抄・春・五三／拾遺集・春・七七／金玉集・春・二二／和漢朗詠集・上・春・三月尽／貫之集Ⅰ・八／貫之集Ⅱ・六／三十人撰・一三／三十六人撰・一三／深窓秘抄・二六

【参考】作者名を「そせい」とするが、所載欄の文献にはすべて「貫之」とあり、貫之集にも見える。

六五 はなのもたとつことうくもなりぬるか  
はるはけふをし  
かぎりとおもへば  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】花のもとを立ち去ることがつらく感じられてしまうことだなあ。春はもう今日限りで終わりだと思  
うと。

【語句】○うくもなりぬるか いやになつてしまうことだ。つらくなつてしまうことだ。「か」は詠嘆の終助詞。  
○けふをし 「し」は強意の副助詞。

【所載】ナシ

【参考】作者名を「つらゆき」とするが、確認できない。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

六六 ちる花のもとにきてしぞくれはつるはるのをしさもまさるべらなれ

【異同】まさるへらなれ—まさるへらなり（大）

【現代語訳】散る花の木の下に実際に来てこそ、暮れ果ててしまった春を惜しむ気持ちも深まってゆくらしいよ。  
【語句】○もとにきてしぞ 木の下に来てこそ。元々は「もとにきてこそ」だったのが、書写の過程で「しそ」  
となったものか。所載欄の貫之集では「本にきつつそ」。○くれはつるはる 暮れ果ててしまった春。「くれはつ  
る春はいづくにかへる山ありとしきかばゆきて尋ねん」（新続古今集・二一六）。

【所載】貫之集Ⅰ・一四四

六七 花みつゝをしむかひなくけふくれてほかのはるとやあすはなりなん

【異同】ナシ

【現代語訳】花を何度も見ながら惜しむその甲斐もなく今日が暮れると、（夏の来る）明日はよその里の春とな



ってしまうのだろうか。

【語句】○ほかのはる よその春。別の春。今日が暮れるとここでは夏になるが、別の里では春なのだ、ということ。「たちいでてほかの春をもみるべきにやどの花こそうしろめたけれ」（建長八年百首歌合・四二三・左京大夫）。

【所載】新撰朗詠集・五〇／亭子院歌合・三九

### はじめのなつ

つらゆき

六八 花とりもみなゆきかひてむばたまのよのまにけふのなつは来にけり

【異同】ナシ

【現代語訳】花も鳥もみな入れ代わって、一晚のうちに今日の夏が来てしまったことだ。

【語句】◎はじめのなつ 夏の初め。首夏。初夏。○ゆきかひて 交替して。「ゆきかふ」はあるものが去って、他のものが代わって入ること。暦だけでなく、春と夏の風物も交替するとした。○よのまに 一晚のうちに。「このねぬる夜のまに秋はきにけらしあさけの風のきのふにもにぬ」（新古今集・二八七・藤原季通朝臣）。

【所載】万代集・五〇一／夫木抄・二三一七／貫之集Ⅰ・四九六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

いせ

六九 いづこまで春はいぬらむくれはてゝわかれしほどはよるになりなき

【異同】ナシ

【現代語訳】どのあたりまで春は行ってしまったのでしょうか。すっかり暮れ果ててしまつて、春と別れたのは前夜のことになってしまいましたよ。

【語句】○いぬらむ 行ってしまったのだろう。春を擬人化した表現。○くれはてゝ 「春が暮れ果てる」意に「一日が暮れ果てる」意を響かせる。

【所載】伊勢集Ⅰ・一一五／伊勢集Ⅲ・一一四／三十人撰・三五

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

七〇 花ちれば<sup>る</sup>みちのまに／＼とめくれば山には<sup>ふかやぶ</sup>はるものこらざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】花の散っている道に沿って春を求め来たところが、山にも春は残っていないかったことだよ。

【語句】○花ちれるみちのまに／＼ 花の散っている道にしたがって。道に沿って。「おくれめてこひつつあらばおひゆかんみちのまにまにしめゆへわがせ」（古今六帖・二六一〇）。所載欄の他文献では傍書と同じ「花ちれる水のまにまに」で、「花の散っている水の流れに沿って」となる。○とめくれば（春を）求めて来たところ

【所載】古今集・春下・一二九／深養父集Ⅰ・四／深養父集Ⅱ・三

【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

七一 あけくるゝ月日もあれどほとゝぎすなくこゑにこそ夏はき<sup>つらゆき</sup>にけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】一日一日と明け暮れて過ぎてゆく月日というものもあるが、（それはそれとして）郭公が鳴く声にこそ夏が来たと気付くことだよ。

【語句】○あけくるゝ 夜が明け日が暮れる。一日一日が過ぎること。○月日もあれど 月日というものもあるが、それとは別に、という気持か。この第二句の逆接は、貫之集の「月日あれども」の方がわかりやすい。○きにけれ 来たことに気づく。

【所載】貫之集Ⅰ・四六八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

ころもがへ

つらゆき

七二 なつころもたちきるものをあふさかのせきのしみづのさむくもあるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】薄い夏の衣服を仕立てて着たのだが、その夏ころもでは、逢坂の関の清水は寒さを覚えるほどだなあ。

【語句】◎ころもがへ 季節に応じ、衣服をその季節のものに替える事。陰暦四月一日と十月一日に行うものであった。ここは四月の衣更え。○なつころも 夏の衣服。夏着。○たちきる 裁ち着る。裁ち縫って着る。○あふさかのせきのしみず 逢坂関付近にあった清水。「関寺よりは西へ二、三町ばかり行きて、道より北の面に少し立上りたる所に、一丈ばかりなる石の塔あり。その塔の東へ三段ばかり下りて窪なる所は、則ち昔の関の清水の跡なり。……今は小家の後に成りて、当時は水もなくて見所もなければ、昔の名残面影に浮びて優になん覚え侍し」(無名抄「関清水事」)。

【所載】新撰和歌・一四一／夫木抄・二三〇七

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、この歌は貫之集に見えず、また他文献にも「貫之」とするものはない。

七三 はるにだにもありしころを夏ころもいかにうすさのけふまさるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】春のころでさえ薄かったあなたの気持は、夏衣を着るきよう、その夏衣のようにどんなにか薄さがまさることであろうか。

【語句】○はるにだにもありしころ 春のころでさえも薄かったあなたの心。「だにあり」は状態を比較するときの言い方で、「だに」と「あり」のあいだに形容詞的語句が省略されている。ここでは、下句の形容詞「うすし」を補ってみるとわかりやすい。「春にだにもうすくありしころ」ということ。○夏ころもいかにうすさのけふまさるらん 夏衣が薄い事に、気持ちが薄くなる、薄情になる事を掛ける。薄い夏衣のように、どんなにかあなたの気持も薄情になることだろうか。「蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば」(古今集・七五)。

【所載】ナシ

七四 <sup>拾二夏</sup> 花のいろにそめしたものをしければころもかへうきけふにもあるかな  
しげゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春の花を偲ぶよすがとして桜色に染めた袂が惜しいので、衣更えするのがつらいきようであることだなあ。

【語句】○花のいろにそめしたもと 桜色に染めた袂。春の花を惜しむ愛着の形見。「さくらいろに衣はふかく染めて着む花の散りなむのちのかたみに」（古今集・六六）。○ころもかへうき 「うき」は憂き。衣をかえるのがつらい。衣をかえたくない。

【所載】拾遺抄・夏・五五／拾遺集・夏・八一／和漢朗詠集・一四六／玄々集・三二／重之集・二四一／和歌童蒙抄・一二二

【参考】作者名「しげゆき」は、拾遺集・重之集・玄々集等とは一致するが、拾遺抄は作者を「順」としている。

卯月

七五 はるはゝやすぎにしものをうぐひすのまたなくひとのこひしきやなぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】春はもう過ぎてしまったのに、鶯がまた鳴いている。それを聞くと、またとなくあの人が恋しく思われるのはどうしてなのだろうか。

【語句】◎卯月 陰暦四月のこと。この月から夏である。○はるはゝやすぎにしものを 春という季節はもう過ぎてしまったのに。○またなく 鶯が「又鳴く」ことに、またとない意の「またなく」を掛けている。○ひとのこひしきやなぞ あの人が恋しく思われるのはどうしてだろうか。この「ひと」は、特定の人、すなわち恋人をさしている。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 橋本・山下〕

七六 はるすぎてうづきになればさかきばのときはのみこそしげくなりけれ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春が過ぎて卯月（四月）になるといふと、神事に使う榊の常緑の葉だけが茂っていくことだ。

【語句】○うづき 四月の中酉の日には、賀茂の祭（葵祭）が行われる。○さかきば 神事に用いる。古今集・神楽歌の「神垣の御室の山の榊葉は神の御前に茂りあひにけり茂りあひにけり」においては、繁茂の見事さを詠むことは、神を讃えることになるという（新編日本古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』脚注）。○ときは 常葉。常緑を意味する。永久不変の「常磐」を響かせる。○しげくなりけれ 「常葉」が「繁」し、と賀意を表す。

【所載】貫之集Ⅰ・四三〇

【参考】作者名貫之は、所載欄の文献に一致する。

### うの花

七七 山がつかきほにさけるうのはなはたがしろたへのころもかけしぞ

【異同】ころもかけしそ—ころもかけしか（大）

【現代語訳】山人の家の垣根に咲いている卯の花は、いったい、誰が白妙の衣をかけたのであろうか。

【語句】◎うの花 落葉灌木ウツギの花。初夏に白い花が穂のように咲く。垣根に使うことが多い。○山がつ山人。山中で暮らす、身分の賤しい者。樵など。○しろたへ 衣の枕詞と見ることも出来るが、ここでは、本来の袴（たえ）で織った白い布の意味でとる。

【所載】拾遺集・夏・九三／躬恒集Ⅲ・一六三／左兵衛佐尉貞文歌合・八

七八 むかし見しわがふるさとはいまもなをうのはなのみぞめにはみえける  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】昔見ていた私の古馴染みのあの場所は（もう変わってしまったのかもしれないが）、今もなお、卯の花だけが私の目には見えてくることだ。

【語句】○ふるさと 昔馴染みの土地。○いまもなを いまもなほ。「昔」と「今」の対比。『和歌文学大系 貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』脚注では、「ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はさきけり」（古今集・九〇）を類歌として挙げる。

【所載】躬恒集Ⅰ・一九三／躬恒集Ⅲ・九八／躬恒集Ⅳ・四四四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

七九 うのはなのさけるあたりにやどりせじねぬにあげぬとをどろかれけり

【異同】ナシ

【現代語訳】卯の花の咲いている辺りに仮寝はすまい。眠りもしないのに、花の白さで、夜が明けたかと思つて目を覚ましてしまうことだ。

【語句】○やどり 仮寝。宿泊。○ねぬにあげぬ 夏の短夜もさることながら、卯の花の白さで夜が明けたと錯覚する。○をどろかれけり 「おどろく」ははつと気づくの意。

【所載】拾遺集・雑春・一〇七二／重之集・二四四

八〇 けふもまたのちもわすれじしろたへのうのはなつらゆき 或本としゆきにほふやどゝみつれば

【異同】ナシ

【現代語訳】今日もまた、さらにこれからも忘れはすまい。白妙の卯の花の見事に咲く家と、あなたの家を見たからには。

【語句】○うのはな 卯の花には、「憂（う）」を掛けることが多いが、ここでは特に掛詞として解釈しない。「否諾（いなう）」の「諾（う）」の意を込める田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』（風間書房、一九九七年）は、「卯の花があると、申し入れを承諾してくれることになる。一般に卯の花は『憂』を込めるが、賀の屏風ゆえ、成就

の意の『諾』が歌われた」と注するが、不審。卯の花に「憂」を掛ける例は、古今集・九四九「世中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色にいでにけむ」など多いが、明らかに卯の花と「諾」の関連が詠まれるのは、管見の範囲では、「とはばこそいなどとも卯花の雪のよそめの道も分れず」（藤川五百首鈔・一〇五・実隆）まで下るためである。

【所載】後拾遺集・異本歌・一二二四／貫之集Ⅰ・一四七／和歌童蒙抄・五五二

【参考】作者名「つらゆき」は、後拾遺集では清原元輔とするが、貫之集に収められている。

〔以上五首担当 杉本〕

八一　ときならぬたまをぞぬけるうのはなはさ月をまたばひさしかるべく

【異同】ナシ

【現代語訳】まだその時期ではないのに薬玉につくるように花を糸が貫いたようだ。卯の花は（薬玉の時期まで）待つとしたらなかなかの（この四月に）。

【語句】○ときならぬ その時ではないのに。○たまをぞぬける 「玉をぬく」は 玉の穴に糸を通すこと。草に置く露を、草の糸が白珠を通すと歌う。「秋の野の草は糸とも見えなくにおく白露を玉にぬくらん」（古今六帖・五四）。また薬玉にあやめ草を通すこと。「ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉に貫く日をいまだ遠みか」（万葉集・一四九四（旧一四九〇）、「……卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめ草 珠貫くまでに 昼暮らし 夜渡し聞けど……」（万葉・四一一三（旧四〇八九））。○さ月をまたばひさしかるべく 五月を待つにはまだまのあるはずだが。五月五日は沈香（じんこう）や丁子（ちようじ）など香料を袋に入れ菖蒲や蓬をあしらひ五色の糸を長く垂らした薬玉（くすだま）が糸所（いとどころ）から献上された。

【所載】万葉集・一九七九（旧一九七五）不時 玉乎曾連有 宇能花乃 五月乎待者 可久有 トキナラヌタマ  
コソヌケルウノハナノサツキヲマタバヒサシカルベク ときならずたまをぞぬけるうのはなのさつきをまたばひさしかるべみ／人麿集Ⅲ・八〇

【参考】卯の花の咲き満ちた様を薬玉とみて歌ったもの。薬玉の時期五月には程遠い四月の卯の花。「時ならで玉をぞぬける」で始まる類歌が赤人集Ⅰ・二五六、赤人集Ⅱ・一三〇、赤人集Ⅲ・一四二にある。

八二　時わかずふれる雪かとみるまでにかきねもたわにさけるうの花

【異同】ナシ

【現代語訳】冬でもないのに降る雪かと思えるまでに垣根もしなるほどたわわに咲いている卯の花。

【語句】○時わかず 季節を区別せず。「時わかず月か雪かとみるまでにかきねのままにさけるうの花」(後撰集・一五五)。○ふれる 動詞「降る」の已然形「降れ」に完了の助動詞「り」の連体形「る」の接続したかたち。

【所載】後撰集・夏・一五三／拾遺集・夏・九四／和歌童蒙抄・五五三

### 神まつり

#### そせい法師

八三 かみまつるうづきにさけるうの花をしるくもきねがしらげたるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】賀茂祭りの四月に咲いている卯花を(何と)真白に巫が白くしたこと！

【語句】◎神まつり 神を祭る儀式。祭り。賀茂の祭りは有名。それ以外にも三輪神社、春日神社などをはじめ、各神社ごとに、毎月の例祭をはじめ様々にあるが、ここは四月の祭り。「春風にこずる咲きゆく紀の国やありまの村にかみまつりせよ」(夫木抄・一四八五二)。○きね 巫。かんなぎ。かむなぎ。神意を伺い、神に仕える人。穀物などを臼に入れてつくのに用いる道具の「杵(きね)」をかける。「きねといふはかんなぎの名なり」(俊頼髓脳)。○しらげたるかな 動詞「しらぐ」(下二段)は玄米を搗き糠をのぞいて白くすること。「臼たてたり。臼一つに女ども八人立てり。米しらげたり。」(宇津保物語・吹上 上)、「物しらぐる具にも杵といふものあればそへてよめり」(奥儀抄)。

【所載】拾遺抄・五九／拾遺集・九一／躬恒集Ⅰ・三四四／躬恒集Ⅱ・二〇五／躬恒集Ⅲ・三六八／俊頼髓脳・三四六／奥儀抄・二五一

【参考】作者名「そせい法師」とあるが、拾遺抄・拾遺集では「躬恒」の作。

八四 うの花のいろにまがへるゆふしでゝけふこそ神をいのるべらなれ  
つらゆき



【異同】○いのるへらなれ―まつるへらなれ（大）

【現代語訳】卯の花の色に見まがう白木綿を長くたらしで、今日この日神を祈るのだ。

【語句】○ゆふ 木綿。楮の皮の繊維を織った糸。これで織った布を袴という幣帛、として衾にたらず。○してゝ たらして。「しづ」はタ行下二段活用 of 動詞。しだれさせる意。○べらなれ 助動詞「べらなり」の已然形。

【所載】貫之集Ⅰ・四二九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

八五 神まつるときにしなければさかきばのときはのかげはかはらざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】神祭る冬になったので（木々の葉は色変わり、落ちたが）榊葉の常緑の木陰は少しも変わらないのだった。

【語句】○神まつるとき 四月の賀茂祭にいうが、当該歌は所載欄の貫之集によれば、一連の屏風絵中の冬の「山里に神祭る」絵に付された歌。○さかきば 榊葉。さかきの葉。榊は賢木とも書くが、葉に光沢のあるツバキ科の常緑樹。古来神事に用いる。○ときは 常磐。永久に変わらないこと。ここは色を変えない榊の、常に緑であることをいう。

【所載】貫之集Ⅰ・二四二

【参考】本来は貫之の屏風歌で、その歌は冬の「山里に神祭る」絵とともに鑑賞される性質のもの。歌意もそれにふさわしい。古今六帖「巻一、歳時部、夏」の中のこの位置にあるのは不審。「神まつる」という語句をもつ歌として注記されていたのが本文化したか。

〔以上五首担当 平野〕

八六 かみのますもりのしたくさ風ふけばなびきてもみなまつるころかな  
したがつ

【異同】ナシ

【現代語訳】御祭神のおわします賀茂の社の森の下草に風が吹きわたると草がなびくように、人々もみななびき

従って神を祭る頃であるよ。

【語句】○かみのますもり この一首は、順集では屏風歌で、「四月、神まつる所」と詞書がある。四月の「まつり」は賀茂社の祭であり、従ってこの「かみ」は賀茂別雷神（上賀茂）、その母玉依媛命と賀茂建角身命（下賀茂）をさす。その神の鎮座まします賀茂の社の森。○なびきて 森の下草が風に「なびく」ことに、人々が神威に「なびき従う」ことを掛けた。

【所載】順集Ⅰ・一〇／順集Ⅱ・一七一

【参考】作者名「したがふ」は所載欄の文献に一致する。

## 五月

八七 さ月やまこずゑをたかみほとゝぎすなくねそらなるこひもするかな  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】五月の山の梢は葉が茂って高いので、その梢あたりで鳴くほととぎすの声も空高く聞こえる。そんな時私も恋をして、心はまさに上の空になっていることだ。

【語句】◎五月 さつき。陰暦五月の称。仲夏。○さ月やま 本来は陰暦五月の山という意であったが、歌枕化して地名のイメーজが生じ、大阪府池田市にある五月山がそれか、と言われるようになった。ただしこの歌では、特定の山をさすものではなく、ただ五月の山、ということであろう。○なくねそらなる ほととぎすの鳴く音が「空」ですることに、恋の思いで心が「うわの空」になることを掛けた。この掛詞により、初句より「なくね」までが、「そらなる」にかかる序詞。

【所載】古今集・恋二・五七九／貫之集Ⅰ・五七八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

八八 さみだれになへひきうふるたごよりもひとをこひちにわれぞぬれぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨にぬれて泥にまみれながら苗を植える農夫も苦勞なことであるが、それよりもなお私は、泥

(こひぢ) ならぬ恋路 (こひぢ) にさまよつて、五月雨ならぬ涙にぬれていることだ。

【語句】○さみだれ 陰暦五月のころに降りつく長雨。梅雨。○なへひきうふる なへひきううる。稲の苗を苗代から引いて水田に植える。○たご 田子。農夫のこと。○こひぢ 泥のこと。ここでは「恋路」を掛けてある。「こひぢ」「ぬれ」は「たご」の縁語。

【所載】 夫木抄・二五七九／和歌童蒙抄・五七／袖中抄・七七五

八九 をしなべてさ月のそらをみわたせばみづもくさばもみなみどりなり

【異同】ナシ

【現代語訳】五月の空を広く見渡すと、空ばかりでなく、総じて目に入る景はすべて、水も草葉も緑一色であるよ。

【語句】○をしなべて おしなべて。すべて一様に。総じて。この初句は、下句全体にかかる。

【所載】 新勅撰集・夏・一五二／新撰万葉集・三一／寛平御時后宮歌合・七二

九〇 さみだれにみだれそめにしわれなれば人をこひぢにぬれぬ日ぞなき  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】さみだれの降るこの頃、恋に心乱れはじめた私だから、雨降り道の泥 (こひぢ) ならぬ、恋路の涙にぬれぬ日とてない。

【語句】○さみだれ 八八番参照。○みだれそめにし 恋の思いに心の乱れはじめた。「さみだれにみだれ」と同音をくり返した技巧。○こひぢ 八八番参照。

【所載】 玉葉集・恋四・一六二七／躬恒集Ⅰ・一八七／躬恒集Ⅱ・一〇四／躬恒集Ⅲ・九二／躬恒集Ⅳ・二八、四三九

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 斎藤・山下〕

九一 さみだれにはるのみやびとくるときはほととぎすをやうぐひすにせん  
おほかすがのもののり

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨の時期に「春」という名をもつ春宮坊の方がいらっしやる時には、夏の鳥である時鳥を春に因んだ鶯にしてみましようか。

【語句】○さみだれ 五月雨の季節。岩井宏子「歌語さみだれの基層」『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年）によれば、「五月雨」は雨ではなく季節を表す場合があるという。季節の乱れという意味の「さ乱れ」を響かせるか。○はるのみやびと 春宮坊の宮人。「霞たつ山べを君によそへつつ春の宮人なほやたのまん」（貫之集・七八一・東宮かくれたまへるころよめる）。○ほととぎす 時鳥。カッコウ目カッコウ科の鳥。カッコウより小型で山地の樹林に住む。夏を知らせる鳥で鳴き声が珍重され、鶯などの単に托卵する。五月雨と取り合わされた歌「五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ」（古今集・一五三・友則）。○うぐひす 「春の宮人」の「春」に因んで春の鳥を引き合いに出した。ほととぎすとともに詠まれるのは、「うぐひすのかひごのなかに ほととぎす ひとり生まれて なが父に 似ては鳴かず……」（万葉集・一七五九（旧一七五五））という托卵の歌。鶯の巢のなかに郭公が生まれることを逆手にとり、五月雨の季節の郭公ではなく、春宮坊の春に因んだ鶯にしてみおうという趣向。

【所載】後撰集・夏・一六六

【参考】作者名「おほかすがのもののり」は所載欄の文献に一致する。勅撰作者部類に「六位 御書所預 隼人佐」とされる「大春日師範」を指すか。

九二 ほととぎすこゑきしよりあやめぐさかざすさ月としりにしものを  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時鳥の声を聞いた時から、菖蒲草をかざす五月になったと知っていたのだが。

【語句】○ほととぎす 九一番歌参照。○あやめぐさかざすさ月 五月五日の節句には菖蒲髪をつける風習がある。「是ノ日内外ノ群臣皆菖蒲ヲ著ス」（延喜式・太政官式）。「ほととぎす」と「あやめ草」は、「卯の花」「花

橘」とともに万葉集以来の常套的な取り合わせ。「……時鳥 鳴く五月には あやめ草 花橘を 玉に貫き かつらにせむと……」(万葉集・四二六(旧四二三))、「ほととぎす今来鳴きそむあやめ草かつらくまでに離るる日あらめや」(万葉集・四一九七(旧四一七五))、「時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな」(古今集・恋一・四六九)など。○ものを 逆接確定条件。……のになあ。……のだがなあ。

【所載】新勅撰集・夏・一五三／貫之集Ⅰ・二二八  
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

九三 さ月くるみちもしらねどほととぎすなくこゑのみぞしるべなりける

【異同】しるへなりける―しるへ也けり(大)

【現代語訳】五月がやってくるという道は知らないけれど、時鳥の鳴く声だけがその訪れを知るたよりだったのだなあ。

【語句】○さ月くるみち 季節の擬人化。「道知らばたづねも行かむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり」(古今集・三二三・躬恒)。○しるべ 知るたより、導き、道案内。五月が来たことを知る「たより」の意だが、五月を導いてくる「道案内」の意を響かせる。ほととぎすの声をしるべとする例は、「時鳥来つつこだかく鳴く声は千世のさ月のしるべなりけり」(貫之集・三三〇)。

【所載】貫之集Ⅰ・二五六

【参考】古今六帖に作者名はないが、貫之集に入集する。

五日

九四 あしひきのやまほととぎすけふとてやあやめのくさのねにたてゝなく

【異同】ナシ

【現代語訳】山郭公は、今日と思ひ定めて、菖蒲草の根にあやかつて、それで高く声たてて鳴いているのか。

【語句】◎五日 五月五日。端午の節。軒の菖蒲を葺き、競べ馬の行事が催され、粽や薬玉の贈答が行われた。

○あしひきのやまほととぎす 「あしひきの」は山にかかる枕詞。「やまほととぎす」は山に住む郭公。単に郭公をさす場合もある。「あしひきの山郭公我がごとや君に恋ひつついねがてにする」(古今集・四九九)、「いつのま

にさ月来ぬらむあしひきの山郭公今ぞ鳴くなる」(古今集・一四〇)。〇とてや だと思つて、と定めて……か。「や」は疑問の係助詞。〇あやめのくさ 「郭公」と取り合わされる。九二番歌参照。〇ねにたててなく 前句「あやめのくさの」から「根」へと続き、同音の掛詞「音」に転ずる。「ねになく」は声をたてて鳴く。「ね」の一語で、五月の景物である「あやめ草」と「山郭公」を結びつける。「いつかともおもはぬさはのあやめ草ただつくづくとねこそなかるれ」(拾遺集・七六七)、「あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく」(古今集・一五〇)。

【所載】拾遺抄・夏・七一／拾遺集・夏・一一一／新撰和歌・一三五／新撰朗詠集・一四九／元輔集I・二二七／時代不同歌合・七九／秀歌大体・三九

【参考】作者名はないが、拾遺抄、拾遺集、新撰朗詠集、時代不同歌合では「延喜御製」となっている。元輔集Iは竄入の可能性が高い。

九五 ほとゝぎすなくともわ<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ずあやめ草こぞくすりびのしるしなりける つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時鳥が鳴いているとも知らず、あやめ草を見てこれこそが五月五日、薬日のしるしであると気づいたのだった。

【語句】〇なくともしらず 「とも」は逆接仮定条件を表す接続助詞。たとえ……しても。「夏衣しばしなたちそ時鳥鳴くともいまだ聞えざりけり」(貫之集・七八)。〇くすりび 陰暦五月五日(九四番歌参照)の異称。この日薬玉を掛けたからとも、薬狩をしたからともいう。「薬日のたもとにむすぶあやめ草たまつくりえにひけばなるべし」(惠慶集・二二〇)。〇しるし 他とまぎれないよう見分けるための目印、証拠。「ふればまづ君がすみかを思ふかな雪は山べのしるしなりけり」(公任集・二二七)。

【所載】夫木抄・二六〇七／貫之集I・五二五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野〕

九六 たがさともねやのまに／あやめぐさけふひきかけぬ人はあらじな

【異同】ナシ

【現代語訳】誰の里でも、寝所ごとに、きょうこの日、あやめぐさを引きかけない人はないでしょうね。

【語句】○たがさとも 誰の里でもみんな。○ねやのまに／＼ 寝所ごとにそれぞれ。「ねや」は人が寝るための建物または部屋。○あやめぐさ 菖蒲のこと。池辺・沼沢などに生えるサトイモ科の常緑多年草で、夏、肉穂花序の細かい花を付ける。葉は似ているが現在のあやめとは別。その香気が愛され、邪気を払うものとして端午の節には門口や軒や部屋の入り口などにひき掛けられた。また薬玉を作ったり、鬘として冠や髪に挿したりもした。○けふ 五月五日をさす。端午の節の日。

【所載】ナシ

### あやめぐさ

### つらゆき

九七 さはべなるみこもかりてはあやめぐさそでさへひちてけふやとらん

【異同】そでさへひちて―そへさへひちて（御）

【現代語訳】沢辺に生えているまこもを刈って、それからあのあやめ草を、袖までもびしよぬれになりながら、きょうは採ることでしょうか。

【語句】◎あやめぐさ 菖蒲のこと。九六番歌参照。和歌では、五月五日端午の節の景物として「根」「泥（うき）」「刈り」「引く」などとの関連で詠まれる。○みこも まこも。イネ科の多年草。川や湖沼の浅い所に群生する。

○かりては 刈ってからその上で。○そでさへひちて 袖までも濡れて。「さへ」は、添加、累加を表わす副助詞。足や衣の裾はもちろん、その上袖までも濡れて、の意。

【所載】貫之集Ⅰ・三六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。和歌童蒙抄五六二番歌は、この歌の上句と次の歌（九八番）の下句とが結びついた形で一首となっている。

九八 さ月てふさつきにあへるあやめぐさうべもねながくおもひそめけり

【異同】ナシ

【現代語訳】すべての五月にめぐり合うあやめ草は、なるほど根が長いが、思えばわたしも、あの人のことをずいぶん長い以前から思い始めたことだなあ。

【語句】○さ月てふさつき ありとあらゆる五月。年ごとのすべての五月。○うべも いかにも。なるほど。「うべ」は、事情を肯定し納得する気持を表す副詞。「も」は強調の助詞。○ねながくおもひそめけり あやめの「根長く」に、「長く思ひ初め」を言い掛けた。「さ月てふさつきにあへるあやめぐさね」が、「ながく」を言うための序。貫之集Ⅰでは、第五句が「おひそめにけり」となっている。

【所載】貫之集Ⅰ・三九三

【参考】和歌童蒙抄五六二番歌は、前歌（九七番）の上句とこの歌の下句が結びついた形で一首となっている。

九九 あやめぐさねながきのちつげばこそけふとしなれば人のひくらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草は根が長く、長い命を持ち続けるからこそ、五月五日という今日になると、人が抜き取るであろう。

【語句】○ねながきのち 根の「長き」ことに、「長き命」を掛ける。○つげばこそ 引き続き保持しているからこそ。○けふとしなれば きょうというこの日になれば。「し」は強意の助詞。○人のひくらめ 人があやめの根を引くのであらう。「ひく」は、この場合、引いて抜き取ること。

【所載】貫之集Ⅰ・一三二

一〇〇 みがくれておふるさ月のあやめぐさかをたづねてや人のひくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】水中に隠れ生えている五月のあやめ草は、あんなに水に隠れていても、その高い香りをたずね知って、人が引き抜くのでしょうか。

【語句】○みがくれて 水隠れて。水中に隠れて。○かをたづねてや 香りを探してそれによってありかを知つてか。「や」は、軽い疑問の気持を含む係助詞、末句の「ひくらん」へひびく。



【所載】和歌童蒙抄・五六三

【参考】続古今集・夏・二二九番に、貫之の歌として「みがくれておふるさつきのあやめぐさ長きためしに人はひかなん」がある。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

### みつね

一〇一 さみだれのたまにぬく日のあやめぐさねにあらはれてなきぬべらなり

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨が糸として葉玉を貫く日のあやめ草が、雨に洗われ根が顕れて―私も「音に顕れて」声をたてて泣いてしまいうさだ。

【語句】○さみだれのたまにぬく日 五月雨が、糸として葉玉を貫く日。すなわち、五月五日の端午の節の日。

「の」は主格。○ねにあらはれて 「根」に「音」を掛け、「洗はれて」に「顕れて」を掛けて、五月雨に洗われてあやめ草の根が顕れ露出する意と、声を出して泣く意とを表す。「風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり」(古今集・六七二)。○べらなり 確定推量の助動詞。六一番歌参照。藏中スミ「歌語『べらなり』の周辺」『水門』一九七八年八月)、藏中スミ「歌語『べらなり』」『水門』一九八〇年十月)。

【所載】躬恒集Ⅱ・九五／躬恒集Ⅲ・八四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一〇二 かくれぬのそこにおふれどあやめぐさねごめにひきて見るひとはみつ

【異同】ナシ

【現代語訳】このあやめ草は隠れ沼の底に生えていたけれど、根こそぎ引いて、見る人は見たよ。

【語句】○かくれぬ 隠れ沼。草などの陰に隠れて見えない沼。「かくれぬにおひそめにけりあやめ草しる人なしに深きしたねを」(蜻蛉日記・一九四)。○ねごめ 根ぐるみ。根こそぎ。「垣越しにちりくる花を見るよりはねごめに風の吹きもこさなん」(後撰集・八五)。

【所載】ナシ

【参考】当該歌は、人に知られぬ女を男が見いだして逢った意を込めるか。その場合、「そこ」は、「底」に「其処」を掛けるか。「かくれぬのその心ぞ恨めしきかにせよとてつれなかるらん」(拾遺集・七五八)。

一〇三 あやめ草ねながきとればさはみづのふかきこゝろもしりぬべらなり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草の根が長いものを取ると、それが生えていた沢水が深いことがわかるように、私の深い心もきつとわかるに違いないよ。

【語句】○ふかき 根の長いあやめ草が生えていた沢水の深さと、心(思い)の深さとを表す。「とぶ鳥のこゑもきこえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」(古今集・五三五)。○べらなり 一〇一番歌参照。

【所載】貫之集I・二二七

【参考】作者名は「つらゆき」とあり、貫之集では「さうふとれる所 又かさせるもあり」という詞書と共に見える。

一〇四 あやめぐさいくよのさつきあひぬらんくるとしごとにわかくみえつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草はいつたいどれほど長い年代の間、五月という月に逢ってきたのだろうか。新しい年が巡って来てあやめ草の根を繰る度に、若々しくなるように見えていながら。

【語句】○いくよ どれほどの長い年月。○くる 「来る」に、「あやめ草」の縁語である「繰る」を掛ける。「さみだれにあひくることはあやめぐさねながき命あればなりけり」(貫之集・五〇九)。

【所載】新撰万葉集・六一／寛平御時后宮歌合・七一

【参考】新撰万葉集には、二句「イクツノセチニ(五十人沓之五月)」、五句「ワカクミユレバ(稚見湯札者)」とあり、寛平御時后宮歌合には、二句「いくらの五月」、三句「あひ来らむ」、五句「若くみゆらむ」とある。いずれも作者名の記載はない。

みな月

みつね

一〇五 おほあらきのもりのした草茂りあひてふかくもなつになりけるかな

【異同】 ふかくもなつに—ふかくも夏の（大）

【現代語訳】 大荒木の森の下草が茂りあつて草深くなり、すっかり夏も深くなつたことだ。

【語句】 ◎みな月 陰暦六月の異称。当該歌のように繁茂する夏草が詠まれたり、一〇七番歌のように残暑が詠まれたりした。○おほあらきのもり 大荒木の森。「おほらきのもり」ともいう歌枕。所載欄の躬恒集・忠岑集の伝本によつては、「おほらきのもり」とするものもある。五代集歌枕などは山城国とするが、本来は大和国であつたともいう。平安時代には、下草が生い茂つて訪れる人もいない様が詠まれることが多かつた。「おほあらきの森のした草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし」（古今集・八九二）。○ふかく 下草が繁茂して草深くなる意と、夏が深まる意とを表す。「深く」が上の文脈と下の文脈を連結する例については、一〇三番歌に同様の形が見られる。

【所載】 拾遺抄・夏・八六／拾遺集・夏・一三六／新撰朗詠集・一五九／躬恒集Ⅰ・八二／躬恒集Ⅲ・一四三／躬恒集Ⅳ・五／躬恒集Ⅴ・一八／忠岑集Ⅰ・三／忠岑集Ⅱ・五五／忠岑集Ⅲ・八九／忠岑集Ⅳ・一六九／寛平御時中宮歌合・一二／秀歌大概・四一

【参考】 作者名は「みつね」とあり、躬恒集に見え、寛平御時中宮歌合も作者名を「躬恒」とするが、拾遺抄・拾遺集によると作者は壬生忠岑とあり、忠岑集にも見えて、問題が残る。寛平御時中宮歌合は撰歌合と推察されるので、拾遺抄・拾遺集・躬恒集・忠岑集等の詞書を勘案すると、延喜五（九〇五）年、藤原定国の四十賀の屏風歌と認められる。所載欄の他の文献では四句目が「深くも夏の」とあるものが多い。

〔以上五首担当 長戸〕

一〇六 なつはみないづこともなくあしひきの山べも野べもしげりあひつゝ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 夏はみなどこといふこともなく、山辺も野辺も草木が生い茂っているよ。

【語句】○いづこともなく 場所を特定することなく。どこということもなく。「みかさやまさしても見えず夏なればいづこともなくあをみわたれり」(好忠集・一〇三二)。○しげりあひ 一〇五番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】前歌を受けて「しげりあひ」が特定の場所にとどまらずますます広がっている、と言いたげな配列。

一〇七 みな月のつちさへわれてるひにもわが袖ひめやいもにあはず  
人丸 或本

【異同】ナシ

【現代語訳】六月の土までひび割れるほど強く照る日でも、私の袖が乾くことがあるのだろうか(いや、乾きはしまい)、君に逢わないでは。

【語句】○つちさへわれて 所載欄の文献ではいずれも「土さへさけて」とある。万葉集には「割」がこの歌のほかにも四例あるが、いずれも「さけ」と訓まれている。○わが袖ひめや 「や」は係助詞。反語。○ずて 打消の助動詞「ず」の連用形に接続助詞「て」の付いたもの。……ないで。……なくて。上代に多くみられる。「思ひ遣るすべのたづきも今はなし君に逢はずて年の経ぬれば」(万葉集・三三七五(旧三三六二))。

【所載】拾遺抄・恋上・二七七／拾遺集・恋三・八二五／万葉集・一九九九(旧一九九五) 六月之 地副割而照日尔毛 吾袖将乾哉 於君不相四手 ミナツキノツチサヘサケテルヒニモワガソデヒメヤキミニアハズシテ  
みなつきのつちさへさけてるひにもわがそでひめやきみにあはずして／人麿集Ⅰ・七三／人麿集Ⅱ・四〇七／人麿集Ⅲ・二二二／赤人集Ⅰ・二六八

【参考】人麿集にも収められているが、万葉集では「作者未詳」。拾遺抄・拾遺集でも「よみ人知らず」とする。なお、古今六帖・二七四に「つくばねの雲けふまでにてるひにもわがそでひめやいもにあふまで」という、下句の酷似する歌がある。

一〇八 夏ごろもうすきかひなくあきまではこのしたかぜのやまずふかなむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夏衣の薄い甲斐もなく（暑いこの夏なので）、秋までは木の下を抜ける涼しい風が止むことなく吹き続けてほしいものだ。

【語句】○夏ごろもうすきかひなく 薄い夏衣でも甲斐のないほどの暑さをいう。ただし、夏衣の薄さは愛情が薄くなった喩えとして恋歌に用いられることが多い。「蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば」（古今集・恋四・七一五）。○このしたかぜ 木の、枝で覆われた下を吹き抜ける風。ここでは涼風。「かげふかきこのした風の吹きくれば夏のうちながら秋ぞきにける」（貫之集・四八三）。

【所載】貫之集Ⅰ・一五〇／元輔集Ⅰ・二六三

【参考】作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。ただし元輔集は屏風歌を集めた歌群に収め、作者記載はない。

### なごしのはらへ

拾五 賀

一〇九 みな月のなごしのはらへするひとはちとせのいのちのぶといふなり

【異同】ナシ

【現代語訳】六月の夏越の祓をする人は、千歳までも寿命が延びるということです。

【語句】◎なごしのはらへ 六月晦日に行う祓。茅輪をくぐる、人形（ひとがた）を撫で祝詞をあげ川に流す、などを行なったという。和歌では屏風歌に多く見られる。「かはなみもなごしのはらへするけふはうかぶかげさへのどけかりけり」（能宣集・三九七）、「ゆふだちにややくれにけりみなづきのなごしのはらへせでやすごさん」（好忠集・五〇三）。○のぶといふなり 「なり」は伝聞。「すみよしとあまはつぐともながあすな人忘草おふといふなり」（古今集・九一七）、「しらかはのたきのいとなみみだれつつよるをぞ人はまつといふなる」（後撰集・一〇八七）。

【所載】拾遺抄・賀・一八七／拾遺集・賀・二九二

一一〇 おほぬさの川のせごにながれてもちとせの夏はなつばらへせん

【異同】ナシ

【現代語訳】大幣が川の瀬ぐことに流れても、いつまでもめぐつて来る夏には夏越の祓を続けようと思えます。  
【語句】○おほぬさ 大串につけた幣。祓の時に用いて人々の穢れを移し、終わると川に流した。「なげきどをなべてはらふるおほぬさははやかはのせにながれいでぬめり」（伊勢集・四二）。○川のせごにながれても あちこちで大幣を流している。大幣の数だけ思いはそれぞれだが、の意。「みそぎするかはのせごにひくあみをおほぬさなりと人やみるらん」（能宣集・八七）。○ちとせの夏 いつまでもめぐり続ける夏。賀意をこめる。「わがやどの池にのみすむ鶴なれば千とせの夏の数はしるらん」（貫之集・四八二）。○なつばらへ「夏越しの祓」に同じ。一〇九番歌参照。「かも河のみなそこすみててる月をゆきて見むとや夏ばらへする」（後撰集・二一五）。

【所載】貫之集Ⅰ・一三二

〔以上五首担当 青木〕

一一一 みそぎつゝおもふことをぞいのりつるやをよろづよの神のまに／＼  
いせ

【異同】おもふことをそ—おもふかとをそ（大）

【現代語訳】禊ぎをしながら、心中の願い事をお祈りしたことでした。八百万代の神様の思し召しのままに。

【語句】○やをよろづよの 「やほよろづ」に「よろづよ」を掛けた言い方。「やほよろづ」は「八百万」で、数の多いこと、無数に、の意。「八百万の神」というように用いられる。また「よろづよ（万代）」には長寿をこゝとほぐ意がこめられており、当該歌は拾遺集等によれば「中宮の賀」における屏風歌なので、中宮に対する賀の気持ちも表されているよう。

【所載】拾遺抄・賀・一八八／拾遺集・賀・二九三／伊勢集Ⅰ・八二／伊勢集Ⅱ・八四／伊勢集Ⅲ・八一／綺語抄・二七二

【参考】作者名は「いせ」とあり、伊勢集にも見えるが、拾遺抄には「寛平四年中宮の賀し侍りける時の屏風に藤原伊衡朝臣」、拾遺集にも「承平四年、中宮の賀し侍りける屏風 参議伊衡」とあって、いずれも「伊衡」である。そこに多少の問題は残る。また拾遺抄等に見える「中宮の賀」は、伊勢集の詞書では各伝本ともに「后宮五十賀」とあり、醍醐天后、藤原穩子の五十賀である可能性が大きい。穩子の五十賀は承平四年（九三四）三月二十六日のことだから、拾遺抄の詞書に見える「寛平四年」は誤りで、拾遺集の「承平四年」が正しいのであろう。

一一二 この川にはらへてながすことのはなみの花にぞたぐふべらなる つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】この川で祓い清めて流す言の葉は、白く泡立つ波の花と一緒にあって見えることだ。

【語句】○はらへてながす 罪や穢れを祓い清めるために、それを幣に書いて水に流す。○ことのは 祓えの内容、言葉。○なみの花 波が立ったときに見える、白い波がしらをいう。「花」は「葉」の縁語。「言の葉もなくて経にける年月にこの春だにも花は咲かなむ」(後撰集・一二四三)。○たぐふべらなる 寄り添っているようだ。一緒にになっているみたいだ。「べらなる」は推量の助動詞「べらなり」の連体形。

【所載】貫之集Ⅰ・一〇七／夫木抄・三七六一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一三 みそぎ<sup>スイ</sup>つるかはのせみればからころもひもゆふぐれになみぞたちける つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】禊ぎが終わった川の浅瀬を見ると、着替えの衣の紐を結う、その夕暮れ時に波が立っていることだ。

【語句】○ひも 「紐」に「目も」を掛ける。○ゆふぐれに 紐を結ぶ意の「結ふ」に「夕暮」を掛ける。○なみぞたちける 波が「立つ」に「裁つ」を掛ける。「紐」「結ふ」「裁つ」は「からころも」(唐衣)の縁語。

【所載】新古今集・夏・二八四／貫之集Ⅰ・一一／貫之集Ⅱ・九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一四 そらみえてながるゝ川のさやかにもはらふることを神はきかなん みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】空を映して流れる川がはつきりと澄み切っているように、どうぞ神様はお祓いの言葉をはつきりと耳におとどめになつてください。

【語句】○そらみえて 空を川に映して、の意にとつた。拾遺集等には「そこきよみ」とあり、その方がわかりやすい。○さやかにも 上二句を受け、下二句を修飾する。すなわち「空見えて流るる川」がさやかであり、「祓ふることを神は」さやかに聞いてほしい、という意。

【所載】拾遺抄・夏・八四／拾遺集・夏・一三三／躬恒集IV・三五二／躬恒集V・三三／宝物集・二一八

【参考】作者名は「みつね」とあり、躬恒集にも見えるが、拾遺抄等には「題不知 読人不知」とあって、問題が残る。

一一五 <sup>みゝと川イ</sup> みことがはきけばをなじくおほぬさにかくはらふるをかみはきくらむ

【異同】 <sup>みゝと川イ</sup> みことかは― <sup>みゝと川イ</sup> みゝもかは (御)、みゝと河 (桂・大) おほぬさに―大麻に (大)

【現代語訳】みみと川で聞くと、その名と同じようによく耳が利き、こうしてお祓いすることをさぞかし神様は聞いてくださるでしょう。

【語句】○みことかは 底本文は「みゝとかは」とも十分に読めるが、わざわざ傍注に「みゝと川イ」とあるので、敢えて異なる読み方に従つた。しかし和歌本文としてはやはり「みゝとかは」が穩当と考え、採用した。「みみと川」は大宮大路に沿つて南流する川。大宮川。内裏に入つて御溝水になり、朱雀門より出る。朱雀門のあたりで大祓え、七瀬の祓えなどが行われた。「耳敏(みみと)」の意を掛ける。○おほぬさ 大串につけた幣で、祓えの具。

【所載】躬恒集I・一八六／躬恒集II・一〇三／躬恒集III・九一／躬恒集IV・四三八／夫木抄・一一二七六

【参考】作者名の記述はないが、当該歌は躬恒集の各伝本に見え、夫木抄にも「みつね」とある。

(以上五首担当 犬養廉・久保木)

一一六 としなかにわがなげきどはなりぬればみそぐともよにうせじとぞおもふ <sup>いせ</sup>

【異同】ナシ



【現代語訳】一年の半ばとなってしまいました。（あなたに顧みられない私の嘆きはとても深いので）襖をしても決して消えることはあるまいと思います。

【語句】○としなか 一年の半ば。半年。六月祓は六月晦日に行われた。○なげきど 用例のないことば。関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』（風間書房、一九九六年）に従い、嘆き所の意と解する。○よにうせじ 決して消えることはない。「世に」は、下に打ち消しの語を伴って、「決して・断じて」の意を表す副詞。

【所載】夫木抄・三八〇九／伊勢集Ⅰ・四一／伊勢集Ⅱ・四三／伊勢集Ⅲ・四〇

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では温子の命により伊勢が詠んだ月次屏風歌の一部で、ⅠⅡⅢとも男が女に詠んだ歌。「なげきどをなべて祓ふるおほぬさはや川の瀬に流れいでぬめり」（伊勢集Ⅰ・四二）との返歌がある。『伊勢集全釈』にあげてあるように、祓によって恋の思いを断とうとした話は伊勢物語六十五段にもあり、「恋せじと御手洗河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」と詠まれている。

## 八代女王

一一七 きみによりことのしげさにふるさとのあすかの川にみそぎしにゆく

【異同】八代女王―底本「八代女王」トスル入替符号アリ。八代女王（御・桂・大）

【現代語訳】あなたのせいでひどく噂を立てられますので、昔の都の飛鳥川に襖をしに参ります。

【語句】○八代女王 所載欄の他文献では「八代女王」とする。系譜等未詳。続日本紀によれば、天平九（七三七）年二月無位から正五位上。天平宝字二（七五八）年十二月、先帝（聖武天皇）に愛されていたのにその志を改めたとの理由で従四位下の位記を破棄された。○きみにより あなたのせいで。○ことのしげさに 噂がいっぱいなので。「に」は原因・理由を示す格助詞。○ふるさと 旧都。飛鳥古京をさす。○あすかの川 奈良県明日香地方を流れて大和川に注ぐ川。

【所載】万葉集・相聞・六二九（旧六二六）君尔因 言之繁乎 古郷之 明日香乃河尔 潔身為尔去 一尾云、竜田超 三津之浜辺尔 潔身四二由久 キミニヨリコトノシゲキヲフルサトノアスカノカハニミソギシニユク 一尾云、タツタコエミツノハマヘニミソギシニユク きみによりことのしげきをふるさとのあすかの川にはみそぎしにゆく 一尾云、たつたこえみつのはまへにみそぎしにゆく／夫木抄・三七八五

【参考】万葉集の題詞に見える「八代女王獻天皇歌」の「天皇」は聖武天皇。

一一八 みそぎするならのを川のかは風にいのりぞわたるしたにたえじと

【異同】ナシ

【現代語訳】禊をするならの小川の川風の中で神に祈り続けることだ、恋仲が人に知られないで絶えないようにと。

【語句】○ならのを川 京都市上賀茂神社境内を流れる御手洗川。○いのりぞわたる ずっと祈り続ける。「わたる」は動詞の連用形について「ずっと……続ける」意を表し、「川」の縁語。○したに ひそかに。内密に。「したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人なとがめそ」（古今集・六六七・とものり）。○たえじと 絶えないようにと。「たえ」は「川」の縁語。「じ」は打ち消しの意志の助動詞。

【所載】新古今集・恋五・一三七六／定家十体・二七

【参考】所載欄の他文献には作者名「八代女王」とある。新古今集の諸注釈書はそれを古今和歌六帖一一七番歌の作者名による誤認としている。

一一九 たつた川たきのせきりにはらへつゝいはひくらすはきみがためとぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】竜田川の滝の急流で祓をしながら、無事を祈って一日を過ごすのは、あなたのためというわけですよ。

【語句】○たつた川 奈良県竜田の付近を流れる川。紅葉の名所。○せきり 水が瀬を押し切って流れていくこと。また、その所。早瀬。急流。「たがみそぎゆふだたみして立田川たきのせきりにぬさながすらん」（夫木抄・三八三八）。○いはひくらす 一日中神に無事を祈って過ごす。

【所載】夫木抄・三七八六、一一〇一八

一二〇 ねぎこともきかであらぶる神だにもけふのなごしのはらへといふなり

したがふ

【異同】ナシ

【現代語訳】願い事もきかずに荒れ狂う神でさえも穏やかになる「和（なご）し」ではないが、今日は夏越（なご）しの祓ということだ。

【語句】○ねぎごと 願い事。○あらぶる神 荒れる神。人間に害をする神。○なごしのはらへ 夏越しの祓。六月の晦日に行った大祓の行事。「なごし」に「和し」（穏やかである意）を掛ける。「さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしの祓なりけり」（拾遺集・一三四・藤原長能）。

【所載】和漢朗詠集・一七〇／順集Ⅰ・一二／深窓秘抄・三五

【参考】順集の詞書によれば源高明の大饗日にたてる屏風の歌。作者名「したがふ」は所載欄の順集と一致するが、深窓秘抄では作者名を高明の妻愛宮とする。和漢朗詠集では作者名記載なし。

〔以上五首担当 三浦〕

## 夏のはて

一二二 ゆふだちに夏はいぬめりそをちつゝあきのさかみにいまやいたらん

【異同】ナシ

【現代語訳】夕立とともに夏は過ぎ去るようだ。ぬれながら秋への境目に、今なるうとしているのだろうか。

【語句】◎夏のはて 夏の終り。陰暦六月末日。夏は陰暦四、五、六月。○そをちつゝ そほちつゝ。ぬれながら。○あきのさかみ あきのさかひ。夏と秋との境目。

【所載】古今六帖「ゆふだち」五〇九

一二三 こよひしもいなばのつゆのをきしくはあきのとなりになればなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】今宵に限って、稲の葉に露がいちめんに置き広がっているのは、秋が隣まできているからなのだなあ。

【語句】○をきしく おきしく。露や霜がおりて一面に覆いつくす。○あきのとなりになれば 秋が隣まできているから。「あとたえてあれたるやどの月みれば秋のとなりになりぞしにける」（恵慶法師集・一四八）。

【所載】夫木抄・三七四七

一二三 にしへだに夏のいにせばしたひつゝやがてこひしき秋はみてまし

【異同】ナシ

【現代語訳】西へさえ夏が行ってくれたら、なつかしく思っている恋しい秋にまもなく会えるのに。

【語句】○夏のいにせば もし夏が去ってくれたら。五句「秋はみてまし」と呼応して反実仮想となる。○こひしき秋 陰陽五行説では東が春、西が秋、南が夏、北が冬。それで西へ行けば恋しい秋に会えると言ったもの。

「おなじえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ」(古今集・二五五)。

【所載】夫木抄・三七四六／和歌童蒙抄・一三一

一二四 夏とあきとゆきかふそらのかよひぢ<sup>に本</sup>はかたへすゞしき風やふくらん みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】去って行く夏とやってくる秋が行き来する空の通り道は、片一方には涼しい風が吹いているのだから。

【語句】○ゆきかふ 往来する。所載欄古今集の詞書に「みな月のつごもりの日よめる」とある。○かたへ 片一方。○すゞしき風 初秋の風として詠まれる。「孟秋之月、涼風至、白露降」(礼記・月令)。

【所載】古今集・夏歌・一六八／新撰朗詠集・一六〇／躬恒集Ⅰ・一九五／躬恒集Ⅱ・一一二／躬恒集Ⅲ・一〇〇／躬恒集Ⅳ・四四六／古来風体抄・二四二／桐火桶・七二

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

### 秋たつひ

古四 秋上

一二五 あきゝぬとめにはさやかに見えねどもかぜのをとにぞをどろかれぬる 藤原敏行朝臣

【異同】ナシ

【現代語訳】秋が来たと目にははつきり見えないが、風の音ではつと秋が感じられることだ。

【語句】◎秋たつひ 立秋の日。二十四節気の一。秋は陰暦のほぼ七、八、九月。暑い夏が去って待ちこがれた秋が来た、という期待をもって涼風とともに詠まれる。和漢朗詠集、千載佳句には「立秋」の題がある。○さやかに はつきりと。○をどろかれぬる おどろかれぬる。 はつと気づかされた。「れ」は自発。

【所載】古今集・秋上・一六九／新撰万葉集・三八八／新撰和歌・二／和漢朗詠集・二〇六／敏行集・一四／寛平御時中宮歌合・一四／俊成三十六人歌合・六一／時代不同歌合・四九／和歌体十種・一三／和歌十体・六／三十人撰・六五／三十六人撰・八九／奥儀抄・一一〇／桐火桶・七三

【参考】作者名「藤原敏行朝臣」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・林〕

一二六 同 河風のすゞしくもあるかうちよするなみとゝもにやあきはたつらん つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】川風がなんと涼しいことだ。この打ち寄せる波が立つように、波とともに秋が立つのであろうか。

【語句】○河風のすゞしくもあるか 当該歌を下敷きにした例として「河かぜのすゞしくもあるか夏ごろも我がみのうへに秋や立つらん」（高遠集・三四六）があげられる。○なみとゝもにやあきはたつらん 川風が吹き、波が立つ、それと同時に立秋になるのか、と詠む。この歌は、所載欄の古今集によれば実際に賀茂川で詠んだ歌。

【所載】古今集・秋上・一七〇／新撰朗詠集・一八八／貫之集I・七九二／秀歌大体・四四／古来風体抄・二四三／桐火桶・七四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。なお、集付けの「同」は一二五番歌に、「古四 秋上」とあるのに同じ、の意。

一二七 同 きのふこそさなへとりしかいつのまにいな葉そよぎて秋風のふく

【異同】いな葉そよきて—いな葉もそよと（大）

【現代語訳】つい昨日、早苗をとって田植をしたように思っていたけれど、いつの間に稲葉が繁りそよそよと

音を立てて秋風が吹くようになったのだろうか。

【語句】○きのふこそ 「昨日こそ……しか」で、つい昨日……したばかりのように思っていたが、の意。「昨日こそ……しか」の表現は、万葉集の「昨日こそきみはありしか」(四四七・旧四四四)「昨日こそ船出はせしか」(三九一五・旧三八九三)の例や、拾遺集の「昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはやたちにけり」(三三)の例がある。この拾遺集歌は赤人の詠(和漢朗詠集では人麻呂詠)とされる歌で、「昨日こそ……しか」は古体な感じのする表現。

【所載】古今集・秋上・一七二／新撰和歌・六／和漢朗詠集・五七一／九品和歌・一一／俊賴髓脳・三四二／奥儀抄・九七

一二八 にはかにも風のすゞしくなりゆくか秋たつひとはむべもいひけり

【異同】ナシ

【現代語訳】急に風がすずしくなっていてゆくことだよ。だから、秋が動き始める日、「立秋」とはよく言ったものだ。

【語句】○秋たつ 立秋。「たつ」は行動をおこすこと。○むべ だからなるほど、の意。

【所載】後撰集・夏・二二七／新撰万葉集・一二五／新撰朗詠集・一八七

はつあき

一二九 はつあきのそらにきりたつからころも袖のつゆけきあさぼらけかな

【異同】ナシ

【現代語訳】初秋の空に霧が立ち、袖が露に濡れる朝ぼらけであることよ。

【語句】◎はつあき 初秋。○きりたつ 「霧が立つ」に袖の縁語「裁つ」を掛ける。○からころも 「袖」を導くために用いる。○袖のつゆけき 「涙」の喩か。

【所載】ナシ

一三〇 わぎもこがころものすそをふきかへしうらめづらしき秋のはつかぜ  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしのいい人らしい人の衣のすそを吹き返し、私に裏—心中—を見せる、すばらしい秋の初風よ。

【語句】○うらめづらしき 「うら」は衣の裏と心中を指す。「うらめづらしき」は心引かれるの意。正徹はこの歌を踏まえて「吹きかへしうらめづらしき程もみす衣のすその秋の初風」(草根集・三三三七)と詠む。

【所載】古今六帖「秋のころも」三二九六／古今集・秋上・一七一／新撰和歌・四／家持集Ⅰ・二二一／家持集Ⅱ・二二六／躬恒集Ⅱ・一二五／躬恒集Ⅲ・一〇九／躬恒集Ⅳ・四五八／秀歌大体・四五／能因歌枕・六／綺語抄・三八五

【参考】作者名「みつね」とあるが古今集では「よみ人知らず」となっている。

〔以上五首担当 杉本〕

一二一 あづまちのぬさめのさとははつあきのながきよをひとりあかす我なぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】東路の「ぬさめの里」とは、初秋の長い夜をひとりおきあかす私をいう名であったよ。

【語句】○ぬさめのさと いさめの里。「いさめ」は「ねざめ」(寢覚)。身体は横たわっているが目は覚めている状態。横たわっていて意識を回復すること。「故、遣り下り坐して、玉倉部の清水に到りて息ひ坐しし時、御心稍に寝めましき。故、其の清水を上げて居覚の清水といふ。」(古事記・中巻)、「里は、逢坂の里。ながめの里。寢覚(いさめ)の里……」(枕草子)。場所は未詳。○ひとり 共寝の相手もないで、の意。○あかす 寝ずに明るくなるまで時を過す。○我な わが名。

【所載】古今六帖「さと」一二九五／夫木抄・三九〇七、一四五四八

一二二 こがらしのあきのはつかぜふきぬるをなどかくもぬにかりのこゑせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】木枯らしの秋の初風がふいたのに、なぜ（まだ）雲の上に初雁の声がしないのか。

【語句】〇こがらし 秋、冬に木の葉を散らし吹く風。「あさぢふの露吹結ぶ木枯にみだれてもなく虫の声かな」（順集Ⅰ・一五八）。

【所載】順集Ⅰ・二四／順集Ⅱ・一五八／天禄三年八月廿八日規子内親王前栽歌合 別2／和歌一字抄・一〇六〇／和歌童蒙抄・九三八／袋草紙・三七三

【参考】歌合は左右二組に別れて歌のよしあしを競うものであるが、言葉が適切かという非難や、いやこういう例があると証拠の歌を提示する場合もある。所載欄の歌合は秋の草花や虫を歌にしたが、ある歌に対し「木枯らし」は冬の風をいうのではと難じた。それに対し、秋の風を詠んだ例としてあげた。すなわち「木枯らしとは冬の風をこそいへ、このころのかぜをいはば、雨をもしぐれとやいふべからん」というのに対して、御簾の内から「ふるきことをこそはすれ」と「いひいだし」た二首のうちの一首が当該歌。

## 七日の夜

いせ

一三三 めづらしくあふたなばたはよそ人もかげ見まほしきものにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】年に一度、彦星・織姫のあい逢う夜は、（恋人の）影を地上の人も見たいのでありましたよ。

【語句】◎七日の夜 七月七日の夜。七夕。天の川を渡り、牽牛と織女が年に一度相逢うという漢代の伝説をふまえ、万葉以後数多くの歌人が歌う。中国では川を渡るのは織女であるが、和歌では渡るのはほとんど彦星である。夜訪れて朝別れる当時の通い婚を背景にしている。多くは二星いづれかの心で詠う。また、恋人同士が天上の恋に較べて我が恋を詠う場合もある。〇たなばた 織女を指す場合と、牽牛と織女の両星を指す場合がある。ここは二星。〇よそ人も 当事者でない者も。〇かげ 二星を盟の水に映して見ることをした。その二星の「影」に「人影」をかける。「やまの井の浅き心もおもはぬに影ばかりのみ人のみゆらん」（古今・七六四）のように「影」は正身にたいするもの。

【所載】風雅集・秋上・四六五／伊勢集Ⅰ・八三／伊勢集Ⅲ・八二

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では后宮の賀の屏風歌のうちの一首。



人丸

一三四 あまの川みづかげくさのあきかぜになびくをみればときはきぬらし

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川のほとりに生う草の秋風に揺れるのを見ると、(待ちに待った)年に一度の日が来たらしい。

【語句】○あまの川 銀河。天漢。天空の川に見たて、牽牛と織女の二星が年に一度逢うために渡る。一三三番歌の語句欄「七日の夜」参照。○みづかげくさ 水影草。水陰草。水のほとりに生える草。後の例として、稻をいう。日葡辞書に「まだ穂のついている稻」との説明がある。ここでは「水辺に生える草」と解す。

【所載】続古今集・秋上・三〇七／万葉集・二〇一七(旧二〇一三) 天漢 水陰草 金風 靡見者 時来之 マノガハミズカゲクサノアキカゼニナビクヲミレバトキハキヌラシ あまのがはみづかげくさのあきかぜになびかふみればときはきにけり／人麿集Ⅲ・一二三／赤人集Ⅰ・二八二／赤人集Ⅱ・一六一／赤人集Ⅲ・一七四／袖中抄・七三七・

【参考】当該歌は万葉集に「右は柿本朝臣人麿の歌集に出づ」とする歌群の中にある。古今六帖の作者名「人丸」は、その点で一致する。

ふかやぶ

一三五 わびぬればつねはゆゝしきたなばたもうらやまれぬるものにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】(お会いできずにいる) 苦しさのうちひしがれ、(年に一度しか会えないことは間違っても似てはならないと) 忌み避けていた七夕も、(年に一度でも会えるのなら、どんなによいかと) うらやましいと思うのであったよ。

【語句】○わびぬれば 困り果てて。○ゆゝしき 「ゆゆし」は「忌み避けたい」の意。○うらやまれ 「うらやむ」に自発の助動詞「る」の接続したかたち。ついうらやましいと思ってしまう。

【所載】拾遺抄・恋上・二八四／拾遺集・恋二・七七三／深養父集Ⅰ・三二／深養父集Ⅱ・七

【参考】作者名「ふかやぶ」は拾遺抄・拾遺集とは一致しない。

〔以上五首担当 平野〕

拾三秋

一三六 あまの川とをきわたりにあらねどもきみがふなではとしにこそまて

人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】天の河の渡し場は、兩岸が遠く離れている渡し場ではないけれども、あなたの船出は一年にわたって待つのである。

【語句】○とをきわたり とほきわたり。遠き渡り。兩岸の距離が遠く隔っている渡し場。○きみがふなで あなたの船出。牽牛が対岸から船で天の川を渡ってくると考えている。織女の立場で詠んだ歌。○としにこそまて 一年にわたって待つのだ。

【所載】後撰集・秋上・二三九／拾遺集・秋・一四四／万葉集・二〇五九（旧二〇五五）天河 遠度者 無友 公之舟出者 年尔社候 アマノガハトホキワタリハナケレドモキミガフナデハトシニコソマテ あまのがはとほ きわたりはなければどもきみがふなではとしにこそまて／和漢朗詠集・二一八／人麿集Ⅰ・八二／人麿集Ⅱ・三九／古来風体抄・三五六／井蛙抄・一四六

【参考】作者を「人丸」としているが、万葉集では作者不詳歌である。拾遺集、人麿集Ⅰ、人麿集Ⅱ、古来風体抄は、人麿の作としている。

一三七 くにもせにつねにあふなはたつめれどあひみることはたゞこよひなり

【異同】ナシ

【現代語訳】国中に、いつもあなたとの恋の噂は立っているようだけれども、ほんとうは、二人が逢うのは、ただこの夜だけなのだ。

【語句】○くにもせに 「せに」は「狭に」。国も狭く感じられるくらいいっぱい。国中に。○つねにあふなはたつめれど わたしたちが逢っているという噂はいつも立っているようだが。「つねに」は「たつめれど」にかかる。「あふな」は「逢ふ名」、恋の噂。織女牽牛のことは世に知られた伝説だから、「くにもせにつねにあふなはたつ」と言った。

【所載】奥儀抄・二八七／和歌色葉・三一七

一三八 たまかづらたえぬものからさぬるよはとしのわたりにたゞひとよのみ

【異同】ナシ

【現代語訳】二人の間は絶えることのない仲ではあるものの、共寝するのは、年に一度の渡河の折の、ただ一夜だけなのだ。

【語句】○たまかづら 「たえぬ」にかかる枕詞。○たえぬものから 絶えることのない間柄ではあるけれども。

「ものから」は、ここでは逆接。○としのわたり 年の渡り。七夕の星の一年に一度の川渡り。

【所載】後撰集・秋上・二三四／万葉集・二〇八二（旧二〇七八）玉葛 不絶物可良 佐宿者 年之度尔 直一夜耳 タマカヅラタエヌモノカラサヌラクハトシノワタリニタダヒトヨノミ たまかづらたえぬものからさぬくはとしのわたりにただひとよのみ／人麿集Ⅳ・二九〇／綺語抄・一二一、四二一、四八三

一三九 あからひくいろたへのこのかずみれば人づまゆへにわれこひぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】ほんのりとくれないを帯びた容顔うるわしいひとをたびたび見ると、（そのひとが）人妻であるというのに、わたしは恋してしまいそうだ。

【語句】○あからひく ほんのりとくれないの色を帯びた。美麗な容顔の形容。ここは「いろたへのこ」にかかる枕詞。○いろたへのこの ここでは、「いろたへのこを」とする万葉集によつて解した。容色うるわしき美女を。○かずみれば 幾度も見れば。○人づまゆへに 人妻ゆゑに。それが人妻であるにもかかわらず。「ゆゑに」は、ここでは逆接。○こひぬべし 恋してしまふにちがいない。恋してしまいそうだ。

【所載】万葉集・二〇〇三（旧一九九九）朱羅引 色妙子 数見者 人妻故 吾可恋奴 アカラヒクシキ（イロ）タヘノコヲシバミレバヒトヅマユエニアレコヒヌベシ あからひくいろぐはしこをしばみればひとづまゆゑにあれこひぬべし／人麿集Ⅲ・一三八／綺語抄・一三五／奥儀抄・三五一／和歌色葉・二二

【参考】歌意から見て「七日の夜」にかかわりある歌とは思われない。この一首がなぜここに置かれたのか、不審。

古四 秋上

一四〇 あまの川もみぢをはしにわたせばやたなばたつめのあきをしもまつ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋になれば、天の川が紅葉を橋としてかけ渡すから、（牽牛がそれを渡ってくると思つて）たなばたの織女は、秋の季節をひたすら待つのであるうか。

【語句】○もみぢをはしにわたせばや 秋の紅葉を橋として天の川にかけ渡すからであるうか。「や」は係りの助詞。第五句の句末にひびいて疑問の意を表わす。○あきをしもまつ 「しも」は強意の助詞。「まつ」には第三句の「や」を受けて疑問の意が生ずる。

【所載】古今集・秋上・一七五／桐火桶・七五／兼載雑談・三四

〔以上五首担当 斎藤・山下〕

一四一 とをづまとたまくらかへてねたるよはとりのねなくにあげばあくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】遠く離れた妻と逢つて手枕をかわして寝ている夜は、夜明けを告げる鶏が鳴いて、夜が明けるなら明けてしまつてもよい。

【語句】○とをづま とほづま（遠妻）。遠い所に居る妻。織女星を指すことが多い。○たまくらかへて 互いに相手の手を枕にして。○とりのねなくに 夜明けを告げる鶏が鳴くことによつて。「に」は原因、理由を表す格助詞。……によつて、……のために。所載欄の万葉集歌は「とりがねななき」と禁止の形となつてゐる。○あげばあくとも 同じ動詞を重ねた「……ば……とも」は、どうともなれという放任の気持ちを表す。

【所載】玉葉集・秋上・一四三／万葉集・二〇二五（旧二〇二二）遥窄等 手枕易 寐夜 鶏音莫動 明者雖明 トホヅマトタマクラカヘテネタルヨハトリガネナクナアケバアクトモ とほづまとたまくらかへてねたるよはとりがねななきあげばあくとも／夫木抄・一六六一八／人麿集Ⅲ・一四七／和歌童蒙抄・七八六

一四二 としにありてひとよいもにあふひこぼしもわれにまさりておもふらめやは

【異同】ひとよいもにあふ——一夜いもせにあふ（大）

【現代語訳】一年間逢うことなく過ごして、たった一夜だけ恋しい妻に逢う彦星も、私以上に物思いをするだろうか、これほどではあるまい。

【語句】○としにありて 一年間そのままです。○ひこぼしもわれにまさりて 所載欄の万葉集では、遣新羅使人の一人が故郷に残した妻を思慕する歌であり、故郷に帰れない自分と、彦星の心とを対比させる。彦星に比して自らの恋心を訴えるのは万葉集以来のモチーフ。「彦星の思ひますらむ心より見る我苦し夜のふけゆけば」(万葉集・一五四八(旧一五四四)・湯原王)、「七夕に思ふものからあふことのいつとも知らぬ我ぞわびしき」(貫之集・五七〇)。「おもふらめやは」「らめ」は眼前にない現在を推量する助動詞「らむ」の已然形。「やは」は反語。

【所載】拾遺抄・秋・九三／拾遺集・秋・一四八／万葉集・三六七九(旧三六五七)等之尔安里弓 比等欲伊母尔安布 比故保思母 和礼尔麻佐里弓 於毛布良米也母 トシニアリテヒトヨイモニアフヒコホシモワレニマサリテオモフラメヤモ としにありてひとよいにもあふひこほしもわれにまさりておもふらめやも／人麿集Ⅰ・一七四／人麿集Ⅱ・四二／袋草紙・三一／柿本人麿勘文・四九

古四 秋上

一四三 ちぎりけんころろぞつらきたなばたのとしにひとたびあふはあふかは

おき風

【異同】ナシ

【現代語訳】年に一度と約束したという心こそはつれないものだ。織女が一年に一度だけ逢うというのは、逢うことといえようか。

【語句】○ちぎりけん 「けん」は過去の伝聞。○つらき 「つらし」は薄情でつれない、無情だ。相手から受ける仕打ちをこらえかねるほど痛く感じる意。両度聞書は「一夜の飽かぬ悲しみより契りけん心ぞつらきと言ふなり」と、一夜限りの逢瀬の悲しみより、織女が一夜限りの契りと決めた薄情さに焦点を置いた歌とする。○たなばた 織女。下二句の主語だが、初句の「ちぎりけん」の主体でもある。「年ごとに逢ふとはすれどたなばたの寝る夜の数ぞ少なかりける」(古今集・一七九、古今六帖・一四八)。○としにひとたび 一年にたった一度だけというニュアンス。「二年に七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば夜はふけゆくも」(万葉集・二〇三六(旧二〇三二))、「玉かづら絶えぬものからさ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ」(万葉集・二〇八二(旧二〇七八))、「一年に一夜と思へどたなばたはふたりともなき妻にざりける」(貫之集・四一六)など、例歌が多い。○かは 反語。

【所載】古今集・秋上・一七八／新撰万葉集・四六〇／新撰和歌・二〇／新撰朗詠集・二〇〇／興風集Ⅰ・五／興風集Ⅱ・一一／寛平御時后宮歌合（十卷本）・一一七、一六三／俊成三十六人歌合・七九／新時代不同歌合・六八／三十人撰・七七／三十六人撰・一〇七

【参考】作者名「おき風」は所載欄の文献に一致する。

#### 人丸

一四四 おほぞらをかよふわれすらなにゆへにあまのかはらをなづみてぞくる

【異同】ナシ

【現代語訳】広い大空を自在に行き来する私でさえ、いったいどういうわけで天の河原を難儀しながら来たのだろう。

【語句】○われ 彥星の自称。星は空を自在に行き来する。○なにゆへに なにゆゑに。所載欄の万葉集の「ながゆゑに」あるいは「なれゆゑに」（あなた〈織女〉ゆゑに）が元の形と思われるが、本文通り、原因、理由を問う形で訳出した。○あまのかはら 天の川の河原の意であるが、「けふよりは天の河原はあせなんそこひともなくだだ渡りなん」（後撰集・二四一・友則）という用例からみて、河岸だけではなく、河全体を指す場合もあったと思われる。所載欄の万葉集の「天漢道（あまのかはぢ）」の方が「なづみてぞ来る」とよく照応する。○なづみてぞ 「泥みてぞ」。歩行や進行が妨げられて難儀して。行き悩んで。通い路の困難さを訴えるための表現。「巻向の檜原に立てる春霞おぼにし思はばなづみ来めやも」（万葉集・一八一七（旧一八一三））。漢詩文では織女が河を渡るとして詠まれるが、我が国では彥星が河を渡るとする表現が多い（小島憲之『上代日本文学と中国文学』〈中〉塙書房、一九六四年）。

【所載】万葉集・二〇〇五（旧二〇〇一）従蒼天 往来吾等須良 汝故 天漢道 名積而叙来 オホソラニカヨフワレスラナレユエニアマノカハヂヲナヅミテゾクル おほそらゆかよふわれすらながゆゑにあまのかはちをなづみてぞこし／人麿集Ⅲ・一二九／赤人集Ⅰ・二七四／赤人集Ⅱ・一五三

【参考】作者名は「人丸」とあるが、万葉集では作者未詳。

#### そせい

一四五 こよひこむ人にはあはじたなばたのひさしきほどにあえもこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】今夜訪れてくる人には会いますまい。織女の逢瀬の久しさにあやかることになつては大変だから。  
【語句】○ひさしきほど 長い時間。○あえもこそすれ 「あえ」は「肖ゆ」(ヤ行下二段)で、形がそっくり似る、あやかるの意。「是肖皇太后為雄装之負軛(肖、此云阿𪛇)」(日本書紀・応神天皇。「肖、似也、アユ・アエタリ」(色葉字類抄)。「逢うことはたなばたつめにひとしくてたちぬふわざはあえずぞありける」(後撰集・二二五)。「もこそ」は、将来起こり得る悪い事態を予測し、危惧する意。……するといけない。……すると大変だ。所載欄の古今集の第五句は「待ちもこそすれ」(ただし筋切、元永本、基俊本は「あえもこそすれ」)であるが、古今和歌集打聴は「今の本には待ちもこそすれとあれど、紀氏新撰、六帖にも、あえもこそと有をよしとす」とする。

【所載】古今集・秋上・一八一／新撰和歌・一六／素性集Ⅰ・六／素性集Ⅱ・四

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

「こよひこん人にぞあはん七夕のたえぬ契りにあえんとおもへば」(千五百番歌合・一〇八四)は、同じ語を用いて逆の発想を詠んだもの。

〔以上五首担当 中野〕

一四六 あひみまくあきたらずとしのゝめのあけはてにけりふなでせんかは  
人丸

【異同】あきたらずとも―あきたゝすとも(御・桂・大)

【現代語訳】こうして逢つていたいのは、たとえ満ち足りなく思っている、もう空は明るんでしまった。舟出しようか、いやまだしない。

【語句】○あひみまく 「あひ見る」は、男女が逢い契りを交わす意。「まく」は、推量の助動詞「む」の古い未然形「ま」に、準体助詞「く」が付いたもの。○あきたらずとも 満ち足りなく思っている。他本の「秋立たずとも」では歌意が通らない。所載欄の万葉集に「(あひみらく)あきたらねども」(綺語抄「あきたらねども」)、和歌童蒙抄・袖中抄に「あきたらずとも」とある。○しのゝめの 「しのめ(東雲)」は、「しのめのめのほがらほがらとあけゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」(古今・恋三・六三七)のように、空が白んで明けてゆく

ころで、相愛の男女も別れを告げねばならぬ時。所載欄の万葉集では「いなめのめ」（和歌童蒙抄・袖中抄も同じ）とある。「しのめのめ」「いなめのめ」については、窓がわりの明りとりに篠竹や稲藁等を粗めに縦横に編んだ物を用い、その編目を篠目（しのめのめ）、稲目（いなめのめ）と言ひ、夜の明け方に光がさしこんできて明るなることから、ともに「あけ」にかかる枕詞とする説がある。○ふなでせんかは「舟出す」とは、彦星が別れを告げて天の川を舟で帰ること。「かは」の箇所、所載欄の万葉集に「嬬」とあり、旧訓「いも」新訓「つま」と読み、綺語抄・袖中抄に「いも」、童蒙抄に「つま」とあるように、いずれも織姫に呼びかけたかたちとなつて、より歌意がとおる。また、「む・ん（助動詞）十か（助詞）十は（助詞）」を含む歌を検索すると、他は中世以後の四例のみで、いずれも反語の意であつた。

【所載】万葉集・二〇二六（旧二〇二二）相見久 猷雖不足 稻目 明去来理 舟出為牟嬬 アヒミラクアキダ  
ラネドモイナノメノアケユキニケリフナデセムイモ あひみらくあきだらねどもいなめのめあけさりにけりふな  
でせむつま／綺語抄・一三二／和歌童蒙抄・一四五／袖中抄・七三二／古今秘注抄・五一—

【参考】万葉集に作者名の記載なく、作者名「人丸」は疑わしい。なお、赤人集Ⅱ・一六八、赤人集Ⅲ・一八三  
「あひ見まくあれどもあかずしのめのめの明けにけらしな舟出せむいも」（赤人集Ⅰ・二八八は小異）は、当該歌  
によく似る。

一四七 <sup>拾十七 雑秋</sup> わたしもりふねは <sup>はや舟かくせイ</sup> やわたせひととせにふたゝびきますきみならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】渡し守よ、はやく舟をこちらに渡してほしい。一年に二度と来て下さるお方ではないのだから。

【語句】○ふねはやわたせ 「舟」は、彦星が織女に逢うために天の川を渡る舟。底本の傍記異文や所載欄の拾遺集では「はや舟かくせ」とあつて、彦星が帰れないように舟を隠してほしい、の意となる。○ならなくに…ではないのだから、の意。

【所載】拾遺集・雑秋・一〇八五／万葉集・二〇八一（旧二〇七七）渡し 舟早渡世 一年尔 二遍往来 君尔  
有勿久尔 ワタリモリフネハヤワタセヒトトセニフタタビカヨフキミニアラナクニ わたりもりふねはやわたせ  
ひととせにふたたびかよふきみにあらなくに／人麿集Ⅰ・八五／人麿集Ⅱ・四一／赤人集Ⅰ・三四〇／赤人集Ⅱ  
・二二—

【参考】所載欄の拾遺集に人麿という作者名があるが、万葉集に作者名の記載はなく、疑わしい。



古四 秋上

一四八 としごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずですくなりける みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年七月七日に、逢うには逢うけれども、織女星・彦星の共寝する夜の数はほんとうに少なかったことです。

【語句】○たなばたの 古今集の注釈書にあたると、「たなばた」を織女星とする説、織女星・彦星の両星とする説がある。「たなばた」は、「たなばたつめ」の略として織女とする本来の意味から、より範囲が広まり、二星を意味したり、さらに彦星のみを指したりする。ここは、二星に解した。○ぬるよのかず 共寝する夜の数年に一度の逢瀬なので逢う夜が少ない。

【所載】古今集・秋上・一七九／新撰和歌・二二〇／和漢朗詠集・二二〇／躬恒集Ⅰ・二九、六二／躬恒集Ⅱ・一二〇／躬恒集Ⅲ・一五一、一六五／躬恒集Ⅳ・四五四／寛平御時后宮歌合・一一八／左兵衛佐定文歌合・一二一

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

一四九 あさまだきいでゝひろはんけふのをに心ながさをくらべてしかな いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】まだ早朝、庭に出て七夕飾りの糸を引きわたすであろう、その糸の長さと、私の心の長さとを較べてみたいものです（第二句「いでてひくらん」として現代語訳した）。

【語句】○あさまだき 朝早くに。○いでゝひろはん 『古今和歌六帖標注』に「出てひろはんにてはうたの意きこえず」とあるように、「拾ふ」では意味が通らない。所載欄の伊勢集のように、「いでてひくらん」とありたいところなので、「引くらむ」で現代語訳した。○けふのを 今日（を）の緒（を）。この「緒」は、「糸」とも表現されるが、かなりの太さがあつたらしい。七夕の日には、裁縫の具の針や糸などを供えたが、庭の前栽などに糸を引きかける風習があつた。月次屏風の絵柄に、「七月七日、庭に糸引く女あり」（源順集・二三二詞書）や、「七月七日、女ども庭に出でて、尾花に糸かけたり」（兼盛集・一四八詞書）とあり、庭に出て女性が糸を前栽に引

きかけたとわかる。現実にも、栄花物語・卷三七に、「七月七日、中宮の御前に、前栽に村濃の糸を引きて、色々の玉を貫きたり」などと見える。その行為が朝方になされたらしいのは、「七月七日よめる」の詞書で、「たなばたは朝ひく糸の乱れつとくとや今日の暮れを待つらん」（後拾遺集・秋上・二四〇・小左近）や、詞書「七月七日、七夕の糸引くに」で、「たなばたのくれは心にかけながら思ひ乱るるあさの糸かな」（肥後集・八四）等から窺える。なお、和漢朗詠集「七夕」に、「憶得少年長乞巧 竹竿頭上願糸多 おもひえたりせうねんにながくきつかうすることを ちくかんのとうしやうにぐゑんしおほし 白」（二二二）とあり、少年時代、竹竿に「願糸」をかけて芸の上達を祈ったと見える。○心ながさを 自分が心変わりしないことを、糸の長さにひきかけて表現。

【所載】伊勢集Ⅰ・四三／伊勢集Ⅱ・四五

【参考】伊勢集では屏風歌中の一首で、男の立場から女に贈った歌。

一五〇 秋かぜによのふけゆけばあまの川河べのなみのたちゐこそまて

拾三秋

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が吹いて、夜もふけてくると、天の川岸の波が立つように、立ったり座ったり落ち着かずに、あなたの訪れを待ちこがれていることです。

【語句】○河べの 所載欄の拾遺抄・貫之集ⅡⅢに「かはべに」とあり、拾遺集・新撰和歌・家持集Ⅱ・貫之集Ⅰには、「かはせに」とある。○なみのたちゐ 波の「立ち」に、織女が立ったり座ったりする意の「立ち居」（連用形）とを掛けた。同様の詠みぶりの歌として、「天の川岩越す波の立ちゐつつ秋の七日の今日をしぞ待つ」（後撰集・秋上・二四〇）がある。

【所載】拾遺抄・秋・九一／拾遺集・秋・一四三／新撰和歌・一八／家持集Ⅱ・二〇八／貫之集Ⅰ・一三／貫之集Ⅱ・一一／貫之集Ⅲ・二九

【参考】貫之集にあり、作者名「つらゆき」は拾遺集・拾遺抄も同じ。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一五一 あまのがはみだえもせなんかさゝぎのはしもわたさでたゞわたりせん

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川は水がなくなつてほしい。そうしたら、鵲の橋を渡すまでもなく川を直接渡つて行こう。

【語句】○あまのがは 銀河。牽牛星と織女星が、七月七日の夜、年に一度だけ、この川を渡つて逢うとされる。○みだえもせなん 「みだえ」は、水がなくなること。「小山田のみだえせしよりあめにいますいはとの神をねがぬ日ぞなき」（好忠集・一四五）。「なん」は他へ詠え望む助詞。所載欄の貫之集Ⅰでは「水たえせん」。○かささぎのはしもわたさでたぐわたりせん 「かささぎのはし」は、七月七日の夜、牽牛・織女の二星が逢う時に、鵲がその翼を天の川の上に並べて渡すという想像上の橋。その鵲の橋も渡さないで、即ち鵲の橋が渡されるのを待つまでもなく、川にじかに入つて渡ろうということか。所載欄の貫之集Ⅰでは、下句「橋をし知らずただ渡りなん」とあり、和歌童蒙抄も五句は「ただわたりなむ」とある。

【所載】貫之集Ⅰ・五九七／和歌童蒙抄・一四六

【参考】作者名の記載はないが、この歌は貫之集に見える。家持集に、「かささぎの橋つくるよりあまのがは水もひななん川渡りせん」（二〇六）という類歌が見える。

#### とものり

一五二 けふよりはあまのかはらもあせなゝんよどみともなくたぐわたりなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】今日からは天の川も浅くなつてしまつてほしい。そうしたら、どこが水の淀みということもなく、まっすぐに渡つてしまおう。

【語句】○あまのかはら 天の川の河原。当該歌では、下句の内容により、実質的には天の川全体を指している。「いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふや渡らむ」（古今集・一〇一四・藤原兼輔）。また、所載欄の友則集には「あまのかはなみ」とある。○あせなゝん 浅せなん。浅くなつてほしい。水が干上がつてほしい。「なん」は一五一番歌参照。「中にゆくよしの河はあせなんいもせの山をこえてみるべく」（篁集・一）。○よどみともなくたぐわたりなむ どこが深い淀みかと意を払い、渡りやすい浅瀬を探して回り道をするようなことをしないで、まっすぐに渡つてしまおう。「よどみともなく」は、所載欄の後撰集では「そこひとまなく」、家持集Ⅰ・友則集・奥儀抄・和歌色葉では「そよみともなく」、家持集Ⅱでは「ふちせともなく」と見え

る。

【所載】後撰集・秋上・二四一／家持集Ⅰ・一六一／家持集Ⅱ・二〇四／友則集・一三／奥儀抄・二八五／和歌色葉・一一、三一五

【参考】作者名は「どものり」とあり、家持集にもあるが、友則集に見え、後撰集も作者を「紀友則」とする。

一五三　ひととせにひとよばかりをたなばたのいつとあふとかなをばたつらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一夜だけの逢瀬であるものを、織女はいつたいいつ恋人に逢うというので浮き名が立つのだろうか。

【語句】○ひとよばかりを　一夜しか逢えないというのに、の意。○たなばた　ここでは、織女のこと。

【所載】ナシ

【参考】作者名は「つらゆき」とあるが、当該歌は貫之集に見えない。

一五四　ひととせにひとよとおもへどたなばたのあひみる秋のかぎりなきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一夜の逢瀬だとは思いうけれど、織女が牽牛に逢う秋は限りなく続くことよ。

【語句】○ひととせにひとよとおもへど　織女星が牽牛星に逢うのは一年にたった一夜だけだと思いうけれど。「一とせに一夜とおもへど七夕はふたりともなきつまにざりける」（貫之集・四一六）。○たなばた　一五三番歌参照。

【所載】拾遺抄・秋・九五／拾遺集・秋・一五〇／和漢朗詠集・二一九／貫之集Ⅰ・三九五

【参考】作者名はないが、所載欄の拾遺抄には「右衛門督源清蔭家屏風歌　貫之」、拾遺集には「右衛門督源清蔭家の屏風に　つらゆき」と見え、和漢朗詠集も「貫之」とする。貫之集Ⅰにも見えて同集によると、天慶二（九三九）年閏七月、右衛門督源清蔭の為の屏風歌中の一首。

一五五　たなばたはいまやわかれんあまのがは川ぎりたちてちどりなくなり

【異同】ナシ

【現代語訳】織女は今牽牛と別れるところであろうか。天の川に川霧が立つて千鳥が鳴く声が聞こえる。

【語句】○いまやわかれん いま、まさに別れるところであろうか。○川ぎり 川霧や千鳥は、「夕されば佐保の川原の河ぎりに友まどはせる千鳥なくなり」（拾遺集・二三八・紀友則）など、佐保川の景物として知られるが、天の川の川霧の詠としては、「ひさかたのあまの川霧たつときはたなばたつめの渡りなるらん」（躬恒集・二七一）などの例がある。

【所載】新古今集・秋上・三二七／貫之集Ⅰ・二五八

【参考】作者名はないが、新古今集に「中納言兼輔家屏風に 貫之」として見える。貫之集Ⅰにも「京極権中納言の屏風のれうの歌廿首」中の一首としてある。

〔以上五首担当 長戸〕

一五六 ゆふづくよひさしからぬをあまの川はやくたなばたこぎわたりなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月は長くないので、天の川を早く七夕は漕いでいることだろうよ。

【語句】○ゆふづくよ 夕方の月。夜には隠れてしまう。「夕月夜影立ち寄り合ひ天の川漕ぐ舟人を見るがともしさ」（万葉集・三六八〇〈旧三六五八〉）。○ひさしからぬを 「を」は順接。……から。○たなばた 牽牛、織女二星の一方を指す場合も、両方を指す場合もある。ここは前者。また、舟を漕いで天の川を渡るのには一般には牽牛星だが、織女星の場合もないわけではない。○こぎわたりなむ 「なむ」は完了の助動詞「ぬ」の未然形に推量の助動詞「む」が付いたもの。ここでは強意の推量。七夕の訪れを待ち望む思いを表わす。所載欄の貫之集では末句「こぎわたらん」とあり、七夕へ直接呼びかける形をとる。

【所載】貫之集Ⅰ・四三二

【参考】作者については一五八番歌参照。

一五七 つもりぬるとしおほけれどあまの川きみがわたれるかずぞすくなき

【異同】ナシ

【現代語訳】積み重なった年数は多いけれども、天の川をあなたが渡ってきた回数は少ないことだ。

【語句】○つもりぬるとし 積み重なった年月。「はるごとにみるとはすれどさくら花あかでもとしのつもりぬるかな」（後拾遺集・九五）。ここでは付き合いを始めてからの年月。

【所載】貫之集Ⅰ・四三三

【参考】一五六・一五七の二首は、貫之集では詞書「七夕」として連続している。作者については一五八番歌参照。

一五八 あまの川よぶかくきみはわたるともひとしれずとおもはざらなむ

已上貫之

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川を夜おそくにあなたは渡っているけれども、人知れずこっそりと渡っているとは思わないで下さいよ。

【語句】○おもはざらなむ 思わないでください。「なむ」は他への願望を表わす終助詞。ここでは、地上から多くの人が七夕の渡っている空を見ていることをいう。

【所載】新千載集・秋上・三三三／家持集Ⅰ・一七一／家持集Ⅱ・二二五／貫之集Ⅰ・一〇八

【参考】新千載集は詞書を「題不知」、作者名を「中納言家持」としており、採歌源が家持集であると知れる。貫之集の詞書には「七月ひこぼし見る所」とある。また「已上貫之」とあるが、一五四から一五八まではいずれも貫之集に見られる。

古四 秋上

一五九 あまの川あさせしら波たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

とものり

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川の浅瀬に立つ白波をたどりながら渡ろうとしたが、まだ渡りきらないというのに、夜が明けてしまったよ。

【語句】○あさせしらなみ 浅瀬に立つ白波。「天河あさせしらなみたかければただわたりなんまてばすべなし」(人丸集・九二)。○わたりはてねば 「ば」は打消の語に続き、ここでは逆接の確定条件を表わす。……ないのに。「卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺に来鳴きとよもす」(万葉集・一四八一(旧一四七七))。

【所載】古今集・秋上・一七七／友則集・一七／兼輔集Ⅰ・三九／兼輔集Ⅱ・一五六／兼輔集Ⅳ・三五／兼輔集Ⅴ・五二／秀歌大体・四九／俊頼髓脳・三四一／八雲御抄・六一

【参考】作者記載「とものり」は古今集と一致する。古今集の詞書には「寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのことも歌たてまつれとおほせられける時に、人にかはりてよめる」とある。兼輔集にも「七月七日、哥よみける所にいきて」(Ⅰ三九、Ⅱ一五六)と伝えるものがあり、兼輔が同席した可能性を物語る。なお家持集・三〇四に「あまのがはあさせしらなみかきたどりわたりはてねばあけぞしにける」という、三句目のみ異なる類歌がある。

一六〇 <sup>同</sup> ひさかたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなばかちかくしてよ

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川の渡し守よ、あの人がちちらに渡つて来たならば、(もう帰れないように) 梶を隠しておくれよ。

【語句】○ひさかたの 「あま」にかかる枕詞。○かち 梶。舟を漕ぐ道具。「天の川梶の音聞こゆ彦星とたなばたつめとこよひ逢ふらしも」(万葉集・二〇三三(旧二〇二九))。○かくしてよ 「てよ」は完了の助動詞「つ」の命令形。渡し守への呼びかけ。

【所載】古今集・秋上・一七四／新撰髓脳・一六／綺語抄・七／奥儀抄・七六

〔以上五首担当 青木〕

一六一 なぬかびのはやくれなゝんひさかたのあまの川ぎりたちわたるべく <sup>みつね</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】今日の七夕の日が早く暮れてしまつてほしいものだ。天の川の川霧が立ち渡ることく、早く天の川

を立ち渡って行けるように。

【語句】○なぬかび 七月七日、七夕の日をいう。○はやくれなゝん 早く暮れてしまつてほしい。○ひさかたのあまの川ぎり 「たちわたる」を導く序。「ひさかたの」は「あま」の枕詞。○たちわたるべく 牽牛星が天の川を渡り、織女星のもとに通って行けるように。

【所載】風雅集・秋上・四六〇／躬恒集Ⅱ・六／躬恒集Ⅴ・三七／夫木抄・三九九四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一六二 拾三秋  
ひこぼしのつまゝつよひの秋風にわれさへあやなひとぞこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】牽牛星が妻の織女星を待つ七夕の宵の、肌寒く吹く秋風に、私まで、なんともわけのわからないことだ、人が恋しくなってくる。

【語句】○つまゝつよひの 「つま」はここでは織女星を指す。一般に和歌では織女星が牽牛星の訪れを待つ例が多いが、その逆もまったくないわけではない。○あやな 筋が通らない、理屈が立たない意の形容詞「あやなし」の語幹。「われさへひとぞこひしき」にはさみこまれた形で、間投詞的な表現。なんと筋の通らないこと。

【所載】拾遺抄・秋・九〇／拾遺集・秋・一四二／躬恒集Ⅱ・二〇八／躬恒集Ⅲ・七／躬恒集Ⅳ・三五四／躬恒集Ⅴ・三八

【参考】所載欄に示す文献はすべて作者を躬恒とする。なお拾遺集・拾遺抄・躬恒集Ⅱによれば、この歌は「延喜御時屏風歌」。

一六三 ひこぼしのおもひますらんことよりもみるわれくるしよのふけゆけば  
ゆげのわう ゆはらの大きみ或本

【異同】ナシ

【現代語訳】牽牛星がもの思いを募らせているであろう、そのことよりも、空を見上げている私の方が切ないことだ。夜が更けていくと。

【語句】○おもひますらん もの思いが増してゆくであろう。稀にしか逢えないつらさ、嘆きをいう。



【所載】拾遺抄・秋・九二／拾遺集・秋・一四七／万葉集・一五四八（旧一五四四）牽牛之 念座良武 従情  
見吾辛苦 夜之更降去者 ヒコホシノオモヒマスラムココロユモミルワレクルシヨノフケユケバ ひこほしのお  
もひますらむところよりみるわれくるしよのふけゆけば

【参考】所載欄に示す文献はすべて作者を湯原王とする。湯原王は志貴皇子の子。第四期の歌人。なお「ひこぼし」は万葉集では「比故保思」と記されている箇所があり、「ひこほし」と清音。

あした

一六四 <sup>拾十七 雑秋</sup> あさとあけてながめやすらந்தなばたはあかぬわかれのそらをこひつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】朝の戸を開けて、もの思いに耽っているだろうか、織女星は。飽き足りない思いで別れた牽牛星の、立ち去った後の空を恋い慕い恋い慕いして。

【語句】◎あした 本来は、朝、の意。ここは七月七日の翌朝。逢瀬の別れはつらいものだが、一年に一度しか逢えない牽牛・織女の別れは特につらいものとして詠まれる。○あさと 朝起きて開ける戸。万葉以来の歌語。

「朝戸あけてもの思ふ時に白露の置ける秋萩見えつもとな」（万葉集・一五八三（旧一五七九））。○あかぬわかれ 一年に一度だけの逢瀬なので、もっと逢っていたいという、満ち足りない思いでの別れ。

【所載】後撰集・秋上・二四九／拾遺集・雑秋・一〇八四／貫之集Ⅰ・八一二  
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一六五 <sup>古四 秋上</sup> けふよりはいまこんとしのきのふをぞいつしかとのみまちわたるべき <sup>みつね</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一度の逢瀬が終わってしまった今日からは、また次にやってくる昨日、七月七日の日を、いつかいつかとばかり待ちつづけるのだろう。

【語句】○けふよりは 古今集の詞書に「八日の日よめる」とあり、七夕の翌日である七月八日を「けふ」と言

っている。○いまこんとしのきのふ　これからやってくる年の昨日、すなわち来年の七月七日。○いつしかとのみ　いつかいつかとばかり、早く。待ち望む意を表す。○まちわたるべき　ずっと待ちつづけるのだろう。「けふよりは」を受ける。

【所載】古今集・秋上・一八三／忠岑集Ⅱ・五七／忠岑集Ⅲ・九二／忠岑集Ⅳ・二

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　犬養廉・久保木〕

一六六　たなばたのかへるあしたのあまのがはふねもかよはぬなみもたゝなむ  
かねすけ

【異同】ナシ

【現代語訳】たなばたが帰る朝の天の川は、船も通えないほど高い波が立てばよいのに。

【語句】○たなばた　織女。中国では織女が天の川を渡って会いに来ることになっている。「ひさかたのあまのかはきりたつときは織女つめのわたるなるらん」（躬恒集Ⅰ・三六一）。和歌では日本の実生活通り男性が通って来る形で詠まれることが多いので、この「たなばた」は牽牛をさすとする説もある。○なみもたゝなむ　波がたてばよいのに。「なむ」は願望の意を表す終助詞。

【所載】後撰集・秋上・二四八／兼輔集Ⅲ・三〇／兼輔集Ⅳ・四二／和歌一字抄・一〇五三／袋草紙・七〇八

【参考】作者名「かねすけ」は所載欄の文献に一致する。

## 八月

一六七　秋かぜにはつかりがねぞひゞくなるたがたまづさをかけてきつらむ  
きこゆい　　とものり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風に初雁の音が響いてくる。誰からの手紙を運んできたのだろうか。

【語句】◎八月　葉月。三秋のうちの仲秋。歌語として用いられるようになったのは平安後期か。用例はあまり多くない。○ひゞくなる　古今集以下の所載欄の他文献では、傍書の「きこゆなる」とするものが多い。○たま

づさ 手紙。漢の蘇武の雁信の故事（漢書・蘇武伝）は、古今集の三〇番「春くればかりかへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし」にもひかれている。

【所載】古今集・秋上・二〇七／和漢朗詠集・三二四／友則集・二二／寛平御時后宮歌合・七八／新撰万葉集・九一／三十人撰・七〇／三十六人撰・五八／俊頼髓脳・二七五／綺語抄・六一八、六二〇／和歌童蒙抄・七四四／奥儀抄・四六三／宝物集・二六二

【参考】作者名「どものり」は所載欄の文献に一致する。

一六八 しらつゆはうへしなりけるみづとりのあをばのやまのいろづくみれば

【異同】うへしなりける―うつし也ける（大）

【現代語訳】白露は、移し染めの染料だったのだな。青葉の山が色付くのを見ると。「第二句は傍書により「うつしなりける」として解した。」

【語句】○しらつゆ 白露。万葉集では「秋の露」。○うへし 所載欄の文献はすべて傍書や大久保本と同じ「うつし」。「うへし」では意が通らないので、傍書の「うつし」で解釈する。「うつし」は、草木の花の汁などを含ませた紙を生地の上に置いて染める「移し染め」の染料。「移し紙」「移し花」ともいう。○みづとりの 鴨の羽の色が青いところから「青羽」と同音の「青葉」にかかる枕詞。

【所載】古今六帖「山」九二一／万葉集・一五四七（旧一五四三）秋露者 移尔有家里 水鳥乃 青羽乃山能色付見者 アキノツユハウツシナリケリミヅトリノアヲバノヤマノイロヅクミレバ あきのつゆはうつしにありけりみづとりのあをばのやまのいろづくみれば／夫木抄・八六八九／和歌童蒙抄・一七六

【参考】作者名の記述はないが、所載欄にあげた古今六帖九二一番や万葉集、夫木抄では三原王の作とする。なお古今六帖一四六八番歌の下句は当該歌と同じである。

みつね

一六九 ひとしれぬねをやなくらんあきはぎのいろづくまでにしかのこゑせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】人に知られずに声を出して鳴いているのだろうか。秋萩が色付くまで鹿の声がしないことだ。

【語句】○ねをやなくらん 声を出して鳴いているのだろうか。「音をなく」は「声を出してなく」意。「鳴く」に「泣く」の意を込める。○あきはぎ 歌語。萩のこと。萩は鹿の妻で、鹿はその花妻を求めて鳴くとされる。「我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿」(万葉集・一五四五(旧一五四一))。

【所載】 躬恒集Ⅰ・六三／躬恒集Ⅱ・一三四／躬恒集Ⅲ・一一八、一六六／躬恒集Ⅳ・四六七／躬恒集Ⅴ・五／左兵衛佐定文朝臣歌合・一四／袋草紙・六五三

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

## 十五夜

つらゆき

一七〇 ひさかたのあまつそらよりかげみればよくところなき秋のよの月

【異同】 ナシ

【現代語訳】 天空を渡る月の光を見ると、避ける所がなく一面に照らす秋の夜の月であるよ。

【語句】 ◎十五夜 八月十五夜とも。中国の風習が渡来し、観月の宴を催し詩歌を詠じた。和歌が詠まれたのは醍醐朝以降か。○ひさかたの 天に關係のある「天(あめ、あま)」「雨」「月」「雲」「空」「光」「夜」などにかかる枕詞。○あまつそらより 天空を通りすぎて行く。「より」は経過する場所を示す助詞。○かげ 日・月などの光。○よくところなき (月が) 余す所もなく照らしている。「よく」は避ける意。

【所載】 貫之集Ⅰ・五一九

【参考】 作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

一七一 なにはがたしほみちくれば山のはにいづる月さへみちにけるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 難波潟に潮が満ちてくると、山の端に出る月までもが満月になったことだよ。

【語句】 ○なにはがた 摂津国淀川の河口あたりの海の古称。○しほみちくれば 満潮になってくれば。

【所載】 夫木抄・五一六二／貫之集Ⅰ・二三二／和歌童蒙抄・一四八／八雲御抄・一八〇

一七二 月ごとにあふよなれどもイ  
へつゝこよひはまさるかげなかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】毎月、十五夜の月にはめぐりあうものだが、幾年過ごしても今宵は、これに勝る月の姿はないことだなあ。

【語句】○あふよなれど このままでは全体の歌意が通じない。現代語訳は傍書「なれども」に拠って解した。○よをへつゝ 何年経つても。○かげ 光によってみえるものの姿。こゝは月の姿。

【所載】貫之集Ⅰ・四七七

【参考】「月ごとに見る月なれどこのつきの今宵の月になる月ぞなき」（続古今集・一五九五／万代集・九九五／村上御集・一三八）という類想の歌がある。

一七三 もちづきのこまよりをそくいであればたどる／＼ぞやまはこえつる  
そせいほうし

【異同】ナシ

【現代語訳】望の月（満月）がわたしの馬の出立よりも遅く出たので、暗い道をたどりたどりしながら、山越えたことだ。

【語句】○もちづきのこま 毎年八月十五日の駒牽の行事に、信濃の国望月の牧から献上された馬。「望月（陰暦十五日の月）」に信濃の御牧の名「望月」を掛ける。「逢坂の関の清水に影見えて今やひくらん望月のこま」（拾遺集・一七〇）。○をそく おそく。遅く。○たどる／＼ 歩みがおぼつかなく、はかどらないさま。

【所載】後撰集・雑二・一一四四／拾遺集・雜上・四三八／素性集Ⅰ・二七／素性集Ⅱ・五一／素性集Ⅲ・二三

【参考】作者名「そせいほうし」は所載欄の文献に一致する。

一七四 こゝに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとはをそしとやまつ  
或本みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】ここでもまた私がいくら見ても見飽きないこの月を、あの山の端の向うの遠くの里では、(月の出が)遅い、と待っているのだろうか。

【語句】○あかぬ 満ち足りない。満足できない。○をち 遠く隔たった場所。遠方。○をそし おそし。遅し。

【所載】元輔集Ⅰ・二二〇

【参考】「或本みつね」とあるが、他文献でそれを確認することはできない。

一七五 いづこにかこよひの月のみえざらむあかぬは人のこゝろなりけり  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】どこに今宵の月が見えない所があるか。見えない所はないのに、その月をいくら見ても見あきないのが、人の心というものののだなあ。

【語句】○いづこにか いっただいどこに。この場合は反語の表現。第三句「みえざらむ」に対応する。○あかぬ 満ち足りない。満足できない。

【所載】拾遺抄・秋・一一七／拾遺集・秋・一七六／躬恒集Ⅲ・八／躬恒集Ⅳ・三五五／躬恒集Ⅴ・三九

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

こまひき

一七六 あふさかのせきのしみづにかげみえていまやひくらんもち月のこま  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関の清水に影を映して、今まさに牽いているであろう、信濃望月の馬を。

【語句】◎こまひき 駒牽。馬を八月中旬に朝廷に献じ、それを天皇が御覧になる行事をいう。信濃国の駒牽は望月が二十三日、それ以外は十五日(村上朝以後は十六日)。なお駒迎は逢坂の関まで馬寮の官人が迎えに行く

ことをいう。駒牽・駒迎とも月次屏風に詠まれる題。○かげ 五句の望月から、月影と馬の影の両義を持たせる。鹿毛を掛けるとする説(片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』笠間書院、一九九九年)もある。なお、和歌文学大系『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』(明治書院、一九九七年)は月影から馬の影に転じたとして「昼の歌」と明記している。また新日本古典文学大系『拾遺和歌集』では、「満月の影が映る逢坂の関の清水に、姿を見せて」と夜の歌のように解釈している。○望月 馬の産地である信濃国望月に、八月十五夜の望月をかける。ここでは望月の駒牽は二十三日なので、実際に満月の中を行くのではないと考えた。

【所載】拾遺抄・秋・一一四／拾遺集・秋・一七〇／金玉集・二四／貫之集Ⅰ・一四／三十人撰・一四／三十六人撰・二〇／深窓秘抄・三八／和歌九品・四／童蒙抄・一五〇／奥儀抄・九〇／古来風体抄・三五八／西行談抄・四一／愚秘抄・一三／井蛙抄・一〇三／十訓抄・八〇／古今著聞集・一四八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一七七 みやこまでなつてひくはをがさはらみづのみまきのこまにやあるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】都まで手なづけてひいてきた小笠原の馬は、美豆の御牧の馬なのであろうか。

【語句】○なづけて 手なづけて。○をがさはら 小笠原は甲斐国の御牧の名。「をがさはらへみのみまきにある馬もとればぞなつくこのわがそでとれ」(古今六帖・一四三二)の例のように荒馬で有名。なお「へみのみまき」ではなく、ここでは「みづのみまき」とある。理由は不明。○みづのみまき 美豆御牧。歌枕名寄では甲斐国とするが、実際は山城国の歌枕(京都市伏見区)。勅撰集では「さみだれはみづのみまきのまこもぐさかりほすひまもあらじとぞ思ふ」(後拾遺集・二〇六・相模)が初出。私家集では、兼盛集・重之集・惠慶集などに見られる。

【所載】貫之集Ⅰ・二九八／夫木抄・雑四・一〇一一五

一七八 もちづきのこまひきこゆるやまみればおぼつかなくもあらずぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】望月の駒を牽いて越える山を見れば、満月の光で、はつきりしないところなどないようだ。

【語句】○望月 一七六番歌参照。○あらずぞありける 「よぶこ鳥いくこゑなきぬ山びこのこたふばかりはあらずぞ有りける」(小馬命婦集・三七)。

【所載】ナシ

【参考】伊勢集Ⅱ・五〇〇に、「もち月の駒引わたす影みればおぼつかなくもみえずぞ有ける」がある。

一七九 あふさかにひくらんこまをあきぐりのたちのかとこそとはまほしけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂で牽いているであろう駒を秋霧のたつという立野のもののかと問うてみたいものだ。

【語句】○たちの 立野。武蔵国都筑郡(現在の横浜市都筑区付近)の御牧。延喜式に立野牧の名が見える。「秋ぎりのたちの駒をひく時は心にのりて君ぞこひしき」(後撰集・三六七・藤原忠房)。

【所載】ナシ

### 藤原たかとを

一八〇 あふさかのせきのいはかどふみならしやまたちいづるきりはらのこま

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関の、ごつごつした岩を音を立てて踏みしめて、逢坂山を、霧の立つ中、出立する桐原の駒よ。

【語句】○いはかど 岩の突き出した所。岩かどは、「岩門(堅固な門の意)」とも考えられるが、「踏みならし」との繋がりから考え、岩の突き出したところ、の意と取る。逢坂は岩間の清水を詠むことも多い。○ふみならし 「踏み慣らし。踏み鳴らしとも」(新日本古典文学大系『拾遺集』脚注)とある。この両方の意を含んでいると見てよいであろう。○たちいづる 出立するの意味に、第五句「きりはらのこま」の霧が立つ、を導く語。○きりはら 桐原の牧。信濃国。現在の長野市桐原とする説、松本市入山辺(東桐原・西桐原)とする説がある。「霧」を掛ける。

【所載】拾遺抄・一一三／拾遺集・秋・一六九／高遠集・四／金玉集・二六／玄玄集・三九／和歌童蒙抄・一〇四九／西行上人談抄・四二／後十五番歌合・二八／後六々撰・一一一／古来風体抄・三五七



【参考】作者名「藤原たかとを」は所載欄の文献に一致する。なお、古今六帖は主として後撰集時代の歌人の詠作までを収めるが、藤原高遠は拾遺集時代の歌人である。しかし、拾遺抄・拾遺集に依れば高遠が「少将」の折（安和二年（九六九）〜天延四年（九七六））の詠となる。後十五番歌合に取り上げられる名歌であるので、早くから著名であったか。

〔以上五首担当 杉本〕

一八一 なにせんにいそぎゝつらんあふさかのせきあけてこそこまもひきけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】どうしてこんなにいそいでやってきたのだろう。逢坂の関は開けてこそ東路からの駒も牽くことができるのに。

【語句】○なにせんに どうして……なのか……しなくてもいいのに。「なにせんにいのち継ぎけむわぎもここにひめさきにも死なましものを」（万葉集・二三八一（旧二三七七））。○いそぎゝつらん 急いできたのか。急いだことを後悔する言葉だが、所載欄の順集には「よはにきつらん」とあり、その本文であると夜の間にやってきたことを後悔する意となる。○あふさかのせき 逢坂関。既出七二番。○あけてこそ 関が開いてこそ。順集の本文であると夜明けの「明け」がかけられたことになる。「あけてこそ……已然形」の例は「……するの夜があけてからこそできる」の意。その例は「ゆふづくよおほかなきをたまくしげふたみのうらはあけてこそめ」（古今集・四一七）。

【所載】順集・一三七

【参考】「なににわれよはにきつらん」という初・二句で順集にはある。

或本忠房

一八二 秋ぎりのたちのゝこまをひくときはこゝろにのりて人ぞこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧のたつ中、立野の駒を牽く時、（本来はいらっしゃるはずの）あなたのことがこころにかかり、（いらっしやらなくて）とても残念です。

【語句】○たちのこま 立野の駒。武蔵国の立野の御牧の馬。立野の「たち」に、秋霧が生じるという意の「たち」をかける。「延喜式卷四十八」によれば、武蔵国からは年に五十匹、そのうち立野牧は二十四の馬を献上したという。「みちのくにありたのやまにあきぎりのたちののこまもちかづきぬべし」(好忠集Ⅰ・二三七)。○こゝろにのりて 心を占めて。

【所載】後撰集・秋下・三六七

【参考】後撰集には末句を「君ぞ恋しき」とする。また、詠歌事情の詳細な詞書があり、現代語訳はその事情を踏まえて訳した。

兼輔朝臣左近少将に侍ける時、むさしの御むまむかへにまかりたつ日、にはかにさはることありて、かはりにおなじつかさの少将にてむかへにまかりて、あふさかより隨身をかへしていひおくり侍ける

藤原忠房朝臣

古今六帖の作者注記「或本忠房」もこれを指すか。

## なが月

これのり

一八三 さほ山のはゝそのいろはうすけれどあきはふかくもなりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山の柞の葉の色は薄く、まだ深くはないが(九月ともなれば)秋は深くなったことよ。

【語句】◎なが月 長月。旧暦の九月。夜の長い月、の意。秋は七月・八月・九月の三か月であったから、現在とちがい、秋の終わりの頃。紅葉をはじめ周囲の変化は季節の深まりを示す。○うすけれど 紅葉はまだ十分に染まらない。下の「ふかく」と対比させる。

【所載】古今六帖「紅葉」四〇九四／古今集・秋下・二六七／是則集・一六／陽成院親王姫君達歌合・一五／三十人撰・九五／秀歌大体・七七

【参考】作者名「これのり」は所載欄の文献に一致する。

一八四 月をみぬつきはなけれどながつきのみじかくもあるかこよひばかりは

【異同】ナシ

【現代語訳】空の月を見ない月はない、月はいつも眺めているが、(長い夜の)長月も短かく感じられることよ、この美しい満月の今宵ばかりは。

【語句】○ながつき 長月。陰暦九月。夜が長いことからその名がつく。長いはずの一夜が短く感じられるのは美しい月を眺めて時のたつのも忘れるから。

【所載】ナシ

一八五 なが月のしぐれの雨にぬれとをりかすがの山はいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】長月の時雨の雨に打たれ、春日の山はこれまでの色を変えはじめたことだ。

【語句】○ぬれとをり ぬれとほり。濡れ通り、すっかりぬれて。

【所載】万葉集・二一八四(旧二一八〇)九月乃 鍾礼乃雨丹 沽通 春日山者 色付丹来 ナガツキノシグレ  
ノアメニヌレトホリカスガノヤマハイロヅキニケリ ながつきのしぐれのあめにぬれとほりかすがのやまはいろづきにけり／家持集Ⅰ・一三三／家持集Ⅱ・一三三／和歌童蒙抄・五九

〔以上五首担当 平野〕

一八六 ながつきのしぐれの雨にやまきりてけふきわかれんたイかれみばかやまん

【異同】ナシ

【現代語訳】九月の時雨の雨で山は霧が立ちこめたようになり、今日来て別れることになるのだろう、誰を見たらかが晴れるのだろうか。

【語句】○きりて 霧が立って。「霧る」は霧が立つ。○けふきわかれん 意をとりにくいが、「今日来て別れるのだろう」の意とみる。所載欄の万葉集の第三句「烟寸吾胸」を「ケフキワカムネ」とした西本願寺本の訓か

それに近似した訓読をもとに、「けふきわかれん」とした可能性はある。○かれみばかやまん 未詳。傍記の「た」をとり、「たれみばかやまん」、誰を見たら心が晴れるのだろうかの意とみるが、所載欄の万葉集において、長月の時雨の雨で、山が霧が立ったようにけぶり、それが我が胸の鬱屈した思いの比喩とする方が、一首全体の意味

が通る。

【所載】万葉集・二二六七（旧二二六三）九月 四具礼乃雨之 山霧 烟寸吾胸 誰乎見者将息 ナガツキノシグレノアメノヤマギリニケブキワガムネタレヲミバヤマム ながつきのしぐれのあめのやまぎりのいぶせきあがむねたをみばやまむ／人麿集Ⅲ・二六〇／家持集Ⅰ・二九〇／家持集Ⅱ・二八九

九日

一八七 なが月のこゝぬかごとにもゝしきのやそうぢびとのわかゆてふきく

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年九月九日の重陽の節供ごとに、宮中に仕える多くの官人たちが、若返るというふうに関く、菊の花です。

【語句】◎九日 陰暦九月九日の節供、重陽節。小高い丘に登って遠望しながら遊宴したり、不老長寿の仙薬である菊の花びらを酒杯に浮かべて飲むという中国の風習が我が国に伝わったもの。天武天皇十四年（六八五）に始まり、嵯峨天皇の頃から年中行事として定着した。特に我が国には、八日の夜、菊花に綿をかぶせ、翌九日の朝、夜露と香のしみ込んだ綿で顔を拭って長寿を祈る被綿（きせわた）の習慣がある。○もゝしきの 枕詞「もしきの（多くの石や木で造り築かれている）」がかかる「大宮」から意味が転じ、宮中、皇居の意。○やそうぢびと 八十氏人。多くの氏族の人々。大勢の人々。九月九日、百敷、八十氏人と数字が連続して織り込まれている。○わかゆ 若くなる。若返る。○きく「聞く」に「菊」を掛ける。

【所載】和歌童蒙抄・一五一

ほうわう

一八八 ながつきの九日ごとにつむきくのはなもかひなくおいにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年九月九日の節供ごとに摘む菊の花にあやかすることもできず、老いてしまったことだなあ。

【語句】○ながつきの九日 一八七番歌参照。○かひなく 効果がなく。効き目がなく。

【所載】拾遺抄・秋・一二三／拾遺集・秋・一八五／新撰朗詠集・二五〇／躬恒集Ⅰ・二六一／躬恒集Ⅱ・二二

○／躬恒集Ⅲ・二八五

【参考】作者名「ほうわう」（宇多法皇を指すか）は、所載欄の文献では凡河内躬恒。

一八九 かぎりなくきみがよはひをのばへつゝなだゝるやどのつゆとならん  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】限りなくご主人様の寿命を延ばしながら、名高いお邸の菊の露となつて欲しいものです。

【語句】○のばへ のばふ（延ばふ）の連用形。長くする。延ばす。○なだゝる 「名立たり（名高い、評判の高い。）」の連体形。連体形として用いられる場合が多い。○つゆ 菊の露。不老長寿の効能があるとされた。一八七番歌及び参考欄参照。○なん あつらえ望む意。終助詞。菊の露に対して人に対するように詠みかけた形とみる。

【所載】後撰集・秋下・三九四／伊勢集Ⅰ・四七〇／伊勢集Ⅱ・四五三／伊勢集Ⅲ・三八三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集、後撰集では初句「数知らず」。伊勢集Ⅰ（西本願寺本）の詞書には「九月八日に隣より、菊に綿おほひにおこせたりける、明日に折りてやるとて」とあり、隣家から伊勢の家の菊で被綿（きせわた）を作つて欲しいとの依頼があり、翌朝、被綿をかぶせたまま菊の花を折つて届けさせた時に添えた歌である。伊勢集Ⅱ、後撰集では返歌「露だにも名だたる宿の菊ならば花のあるじや幾世なるらん」の作者を藤原雅正とする。

一九〇 いのりつゝなをなが月のきくの花いづれのあきかうへて見ざらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたの御寿命がなお一層長かれと祈りつつ、どの秋に長月の菊の花を植えて愛でないことなどあるうか。

【語句】○なをなが月の なほ長月の。「長月（ながつき）」の「なが」は、なお長かれの意と長月を掛ける。○いづれのあきかうへて見ざらん いづれの秋か植ゑて見ざらん。どの秋に植えてみないことがあるうか。「か」

は反語で、いつも菊を植えて賞美する意。

【所載】新古今集・賀・七一八／貫之集Ⅰ・三九七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では天慶二年閏七月右衛門督殿の屏風歌。

〔以上五首担当 斎藤・中野〕

一九一 もゝとせをひとにとゞむるたまなればあだにやはみるきくのうゑのつゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】百年という長寿を人にとどめておく玉であるから、変わりやすいものとしてかりそめに見過ぐすことができようか、菊の上の露を。

【語句】○もゝとせ「ももとせ」は、百年、また多くの年。田島智子『屏風歌の研究』（和泉書院、二〇〇七年）は、「ももとせ」が貫之によつて用いられた表現とする。○とゞむる ひきとめる。おさえて行かせない。「千年をしとどむべければ白玉をぬけるとぞ見る菊の白露」（貫之集・四一八）。○たまなれば 玉であるので。「玉」は露の見立て。菊の露は玉に見立てられる。「今日までに我を思へば菊の上露は千歳の玉にざりける」（貫之集・三二二）、「緒をよりて貫くよしもがな朝ごとに菊の上なる露の白玉」（貫之集・三九〇）など。所載欄の貫之集では「花なれど」（陽明文庫本「花なれば」）となつており、菊の花自体にも長寿の薬効があるとされる。一九二番歌・一九四番歌参照。○あだにやはみる 「あだ」は、「かりそめ」の意に「うつろいやすいこと」の意を掛ける。本来はうつろいやすい露が、菊の上に置くとうつろわぬ長寿をもたらす特別な力を持つとするのである。「やは」は反語。類歌「露とてもあだにやは見る長月の菊は千歳をすぐすと思へば」（新後拾遺集・四三二・貫之）。

【所載】貫之集Ⅰ・五一〇

【参考】作者名はないが、貫之集に入集する。

菊の露を長寿と結びつけるのは「風俗通曰南陽酈県有甘谷、谷水甘美、云其山上大有菊、水從山上流下、得其滋液、谷中有三十余家、不復穿井、悉飲此水、上寿百二、三十、中百余、下七、八十者」（風俗通）に曰く、南陽の酈県に甘谷有り、谷水甘美なり。其の山上に大なる菊有り、水山上より流れ下り、其の滋液を得。谷中に三十余家有り。復井を穿たず。悉く此の水を飲めば、上は寿百二、三十、中は百余、下は七、八十なりと云ふ。」（芸文類聚・菊）という中国の故事に基づくとされる。

菊の歌と漢詩文の関わりについては、本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院・二〇〇二年）に詳しい考証がみられる。

一九二 ぬれぎぬと人にいはすなきくのはなよはひのぶとぞわれそぼちつる<sup>つゆイ</sup>

【異同】きくのはな―菊の露（大）<sup>つゆイ</sup>

【現代語訳】根も葉もない濡れ衣だなどと人にいわせないでくれ、菊の花よ、寿命が延びると信じて私は濡れてしまったのだから。

【語句】○ぬれぎぬ 「無実の罪」や「根も葉もない浮名」の意に用いられる場合が多いが、ここでは菊の花が寿命を延ばす効力があることが根も葉もないものであるとする。○よはひのぶ 「よはひ」は、人間の重ねた年齢。「のぶ」はのびる、長くなる。菊の花（露）が長寿の効力を持つ。一九一番歌参考欄、一九五番歌参照。「咲くかぎり散らではてぬる菊の花むべしも千代のよはひのぶらむ」（貫之集・四二）。○きくのはな 菊の花。傍記異文の「きくのつゆ」の方が「ぬれぎぬ」「そぼちつる」と照応し、本来は「菊の露」であつたと思われるが、本文で解した。○そぼちつる 「そぼつ」はしみて内部まで濡れる。「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形。「限りなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はん日までに」（古今集・四〇一）。「そぼつ」は奈良時代までは清音。

【所載】古今六帖「ぬれぎぬ」三三三二

一九三 きくの花つゆとをきゐていざをらんぬれなばそでのかこそにははめ

【異同】いさをらん―いさほらん（大）

【現代語訳】菊の花に露のように置いていて、ずっと起きていて、さあその花を折ろう、濡れたら袖に移り香がするであらうから。

【語句】○きくの花 菊の花。「露」「折る」「濡る」と取り合わせられた例として、「いかでなほ君が千歳をきくの花折りつつ露にぬれんとぞ思ふ」（貫之集・一九六）がある。○つゆとをきゐて 露とおきゐて。「露と」は、露のように。「をきゐ」は「置きゐ（置いている）」に「起きゐ（起きていて）」を掛ける。「うちとけて君は寝ぬらん我はしも露とおきゐて思ひあかしつ」（新千載集・一五一〇、平中物語・五四）。

【所載】ナシ

一九四 みな人のおいをわするといふきくはもゝとせをやるはなにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】誰もが老いを忘れるという菊は、百年という長い年月を過ごさせる花であるよ。

【語句】○おいをわする 老いを忘れる。中古の用例はあまり見られないが、類歌に「菊の花植ゑたる宿のあやしきは老いてふことを知らぬなりけり」（貫之集・一八三）がある。所載欄の貫之集には「老いをとどむ」とあり、木村正中（新潮日本古典集成『貫之集』）は「とどむ」と「やる」という反対概念を同一義に用いた面白さがあるとする。○もゝとせ 一九一番歌参照。○やる 物や動作を先方に移動させる。長い歳月を過ごさせる。

【所載】貫之集Ⅰ・四七八

【参考】作者名はないが、貫之集に入集する。

一九五 をるきくのしづくをおほみわかゆてふぬれぎぬをこそおいの身にきれ  
たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】折る菊の雪が多いので、露に濡れて若返るといふ濡れ衣を老いの身に着ることだ。

【語句】○をるきく 折る菊。「菊」が「折る」「露」「老い」と取り合わされた例として「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」（古今集・二七〇）がある。○しづくをおほみ 雪が多いので。「おほみ」は、形容詞の語幹＋み。○わかゆ 若くなる。若返る。若さを取り戻す。「……老いず死なずの葉もが君が八千代を若えつつ見む」（古今集・一〇〇三）、「菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千世はゆづらむ」（紫式部集Ⅰ・一一四）。○ぬれぎぬをこそおいの身にきれ 実際は年老いた身だが、菊の露によって若返るといふ濡れ衣を着る。一九二番歌の「ぬれぎぬ」参照。

【所載】古今六帖「露」五九九／貫之集Ⅰ・七八七／忠岑集Ⅰ・一二／忠岑集Ⅱ・六〇／忠岑集Ⅲ・九三／夫木抄・五八九二

【参考】作者名は「たぐみね」とあり、忠岑集の各伝本に見え、夫木抄にも「ただみね」とあるので忠岑の作である可能性が高いが、貫之集では「九月九日たぐみねがもとに」とあって、貫之作であり、次の古今六帖一九六



番歌が忠岑の返歌となっている。

〔以上五首担当 中野〕

一九六 つゆふかききくをしをれる心あらばちよのあだなはたゝむとぞおもふ  
つらゆきかへし

【異同】ナシ

【現代語訳】露を深く含んだ菊を手折るような気持があなたにあるのだったら、千代までの長い浮名は、当然立つだろうと思いますよ。

【語句】○つらゆきかへし 前歌（一九五番歌）に対する貫之の返歌、の意。ただし貫之集Ⅰでは、前歌が貫之の歌、こちらが忠岑の返歌、となっている。なお忠岑集Ⅰ・Ⅲには、前歌はあるが、この歌はない。○きくをしをれる心あらば 菊を手折るような気持があなたにあるならば。「し」は強意の助詞。○ちよのあだな 千代までも残るような浮名。「菊を手折る」にことよせて恋の含意を持たせ、たわむれた。

【所載】貫之集Ⅰ・七八八

【参考】作者表示「つらゆきかへし」は、貫之集Ⅰとは一致しない。

秋のはて

おきかぜ

一九七 みやまよりをちくるたきのいろみてぞ秋はかぎりとおもひしりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】深い山から流れ落ちてくる滝の水の色を見て、これでもう秋は終りだなあ、と思い知ったことだ。  
【語句】◎秋のはて 秋という季節が終るころ。長月の末をいう。古今六帖歳時部は、春・夏・秋の三つの季に、それぞれ「春のはて」「夏のはて」「秋のはて」の題を立てている。○みやま 深い山。○をちくるたきのいろ おちくるたきのいろ。落ちてくる滝の水の色。古今集に収められた当該歌の詞書には、「寛平御時古き歌奉れとおほせられければ、竜田川もみち葉流るといふ歌を書きてその同じところを詠めりける」とある。すなわち、「竜田川もみち葉流る神南備のみむろの山にしぐれ降るらし」（古今集・二八四）の歌に依拠して、「をちくるたきのい

ろ」が紅葉の色に染まっていると見立てたもの。○秋はかぎり 秋という季節はこれで終りだ。「かぎり」は終り、最後の意。

【所載】古今集・秋下・三一〇／新撰朗詠集・二六三／興風集Ⅰ・一〇／興風集Ⅱ・一六  
【参考】作者名「おきかぜ」は所載欄の文献に一致する。

一九八 けふありてあすゝぎなゝん神な月しぐれにまがふもみちかざゝん  
人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】きようはまだ秋であつても、あすはもうこの秋の季節が過ぎて行つてほしい。あすからは、陰曆十月、冬のしぐれに散りまがう紅葉を、かざすことにしよう。

【語句】○けふありて きようはまだ秋の季節としてあつて。○あすゝぎなゝん あすはこの秋という季節が過ぎて行つてほしい。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「なん」は他へ詠え望む助詞。所載欄の文献ではみな、第二句が「あすは過ぎなむ」となっており、「あすは紅葉が散ってしまうだろう」の意となる。その方が、歌意はよく通る。○神な月 陰曆十月の称。曆の上ではこの月からが冬。○しぐれにまがふ 降るしぐれの中に散りまがう。○かざゝん かざすことにしよう。「かざす」は、草木の花や小枝を髪や冠り物に挿すこと。

【所載】玉葉集・冬・八九〇／万代集・一三二五／人麿集Ⅱ・一五八／人麿集Ⅲ・一八八／人麿集Ⅳ・七九  
【参考】作者名「人丸」は所載欄の文献に一致する。

一九九 なが月のあり明の月はみえながらはかなくあきは過ぬべらなり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】陰曆九月の有明の月は空に残って見えていながら、秋ははかなく過ぎ去つてゆくようだ。

【語句】○ながつき 陰曆九月の称。○あり明の月 暁方の空に残る月。十五日以降の月は翌日の空に残るが、特に二十日以後の月を有明月という。能因歌枕に「廿月よりありあけ」とある。この歌の後撰集における詞書は、「ながつきつごもりに」となっている。○はかなく 「過ぬ」にかかる。秋があとなく去つてゆくさまの形容。

○過ぬべらなり 過ぎてゆくようだ。「べらなり」は推量の助動詞。

【所載】後撰集・秋下・四四一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二〇〇 草も木もみぢゝりぬとみるまでぞあきのくれぬるけふはきにける

【異同】ナシ

【現代語訳】草も木もすっかりもみぢして散ってしまった、と見えるまで、秋の暮れはてるきょうの日は来たことだなあ。

【語句】○もみぢゝりぬ もみぢして散ってしまった。「もみぢゝり」は、「もみづ」と「散る」の二つの動詞が複合した形。その主語は「草も木も」である。○あきのくれぬるけふ 秋の暮れてしまったきょう。陰暦九月晦日のこと。

【所載】貫之集Ⅰ・四八〇

【参考】作者については二〇一番歌参照。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

二〇一 しぐれふる神なづきこそちかゝらし山のをしなべいろづきにける

已上三首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨の降る神無月が近いと見える。山が一樣に紅葉して色づいたことだよ。

【語句】○しぐれ 時雨。晩秋から初冬にかけて降るにわか雨。「神な月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびのもり」(古今集・二五三)。○神なづき 神無月。陰暦十月の称。冬の初めの月。古今六帖では、二一〇番歌から二一二番歌までの題。○ちかゝらし 近いらしい。あゆひ抄に、「らし」は「らむ」よりは確かに見定めながら心の落ち居ぬ言葉」であると見え、「からし」に「ウアルソウナ」と注する(中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』風間書房、一九六〇年)。○山のをしなべ 山が一樣に。「の」は主格を表し「いろづきにける」に対応する。所載欄の続後撰集・万代集には「山おしなべて」とある。

【所載】続後撰集・秋下・四三九／万代集・秋下・一二一八／貫之集Ⅰ・三八三  
【参考】作者名「已上三首つらゆき」は所載欄の文献に一致する。なお当該歌は、所載欄文献の詞書によると、天慶二年（九三九）四月の、藤原実頼のための屏風歌。

二〇二 みちしらばたづねもゆかんもみぢばをぬさにたむけてあきはいぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】もし（秋の去って行く）道を知っているならば、訪ねても行こう。紅葉の葉を幣として手向けて、秋は去って行ってしまっても。

【語句】○ぬさにたむけて 幣として手向けて。所載欄の文献では「ぬさとたむけて」とある。

【所載】古今集・秋下・三一三／新撰和歌・一一六／躬恒集Ⅰ・二六五／躬恒集Ⅱ・一五三／躬恒集Ⅲ・二八九  
【参考】後撰集に「もみぢばをぬさとたむけて散らしつつ秋とともにやゆかんとすらん」（一三三八・大輔）という類想歌がある。なお、作者については二〇三番歌参照。

二〇三 いづかたによはなりぬらんおぼつかないあけぬかぎりはあきにやあるらん

已上みつね

【異同】あけぬかぎりは―あけぬは限は（大）

【現代語訳】夜は、秋と冬のどちらになったのだろう。はつきりしないよ。夜が明けないうちは、まだ秋なのだろうか。

【語句】○いづかたによはなりぬらん 秋の最後の日の夜、すなわち翌日からは冬になる境目の夜なので、いたい秋と冬のどちらになったのだろうかと自問したことば。「いづかたに更けゆくよはのなりぬらん秋の残か冬のはじめか」（夫木抄・「九月尽」・隆季）。

【所載】後撰集・秋下・四四二／躬恒集Ⅰ・二六四／躬恒集Ⅱ・一九〇／躬恒集Ⅲ・二八八  
【参考】二〇二番・二〇三番についての作者名「已上みつね」は、所載欄の文献に一致する。

或本みつね

二〇四 もみぢばのながれてよどむみなとをぞくれゆくあきのとまりとはみる

【異同】 なかれてよとむ―なかれてとまる（桂）

【現代語訳】 紅葉の葉が流れてきて淀んでいる河口を、ここが、暮れて行く秋の最後に行き着く港なのだなあと  
思っていることだよ。

【語句】 ○みなと 水門。河口など、水の出入り口。船が停泊する所（港）ともなった。「もみぢばの流れと  
まるみなとには紅深き浪や立つらむ」（古今集・二九三・素性）。○とまり 船が停泊する所。港。また、最後  
に行き着く終着点。「年ごとにもみぢば流す竜田河みなどや秋のとまりなるらん」（古今集・三一・貫之）。

【所載】 ナシ

【参考】 作者名は「或本みつね」とあるが、躬恒集では確認できない。

そせい

二〇五 もみぢばを袖にこきれてもてい<sup>てイ</sup>なむあきはかぎり<sup>てイ</sup>と見ん人のため

【異同】 袖にこきれて―袖にこきいれて（大） もてい<sup>てイ</sup>なむ―もていてなむ（御）

【現代語訳】 紅葉の葉をしごき取り袖に入れて持って帰ろう。秋はもう終わりだと思っているだろう人のために。

【語句】 ○こきれて 所載欄の文献では「こきいれて」とある。「こきる」は「こきいる」を約した語で、枝に  
ついている花などをしごき取って袖などに入れる意。「池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花を袖にこき  
れ」（万葉集・四五三六（旧四五二））。

【所載】 古今集・秋下・三〇九／新撰和歌・一二二／素性集Ⅰ・四四／素性集Ⅱ・一六／素性集Ⅲ・一〇

【参考】 作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

二〇六 もみぢばにみちはうもれてあともなしいづれよりかはあきはゆくらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】紅葉した葉に道は埋もれて跡形もないことだ。いったいどこを通って秋は行くのだろうか。

【語句】○あともなし 跡形もない。落葉に覆いつくされて道が見えない様子をいう。○いづれよりかは「か」は疑問。○あきはゆくらむ 秋を擬人化して、道もないのにどこを通ってここから立ち去っていくのか、と秋を惜しむ気持ちを表す。秋を擬人化したものとしては「もみちばのながるる時は立田河みなとよりこそ秋は行くらめ」（貫之集・二三八）などがある。

【所載】続後撰集・秋下・四五六

二〇七 ゆふづくよをぐらの山になくしかのこゑのうちにや秋はくるらむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月のようにほの暗い小倉山で鳴く鹿の声の聞こえる中で秋は暮れてゆくのだろうか。

【語句】○ゆふづくよ 「秋のはて」には夕方に月がのぼることはない。夕暮れどきの月の薄暮のイメージが「を暗」の名を持つ「をぐらの山」に通じることによる措辞。○をぐらの山 小倉山。京都市右京区嵯峨。大堰川を挟み嵐山と対する。紅葉の名所として知られ、貴族の山荘も多くあったという。ここでは、ほの暗いの意の「を暗し」を掛ける。「もみちせばあかくなりなんをぐら山秋まつほどのなにこそありけれ」（拾遺集・一三五）。○こゑのうちに 鳴く声の聞こえる中で。貫之には「くれぬとてなかずなりぬる鶯の声の内にや春のへぬらん」（貫之集・三五二）という例もある。○秋はくるらむ 「くる」は下二段活用「暮る」。日が暮れるのと秋が暮れゆく時とを重ね合わせる。

【所載】古今集・秋下・三二二／新撰和歌・一二〇／和漢朗詠集・三三七

【参考】作者名は所載欄の古今集に同じ。古今集の詞書には「なが月のつごもりの日大井にてよめる」とある。

はつふゆ

二〇八 こがらしのをとにて秋は過にしをいまもこずゑにたえずふく風

【異同】ナシ

【現代語訳】木枯しの音とともに秋は過ぎて行ったのに、今も木末には絶えず風が吹いているよ。

【語句】◎はつふゆ 冬の初め。歌題としては既に「延喜五年四月廿八日右兵衛少尉貞文歌合」や「天慶二年二月廿八日貫之歌合」に見出せる。○こがらし 晩秋から初冬にかけて吹く風。「うちすててわかるるあきのつらきよにいとどふきそふこがらしのかぜ」（中務集・二五二）。○をとにて秋は 所載欄の歌学書ではいずれも「音聞く秋は」と伝える。○いまも 冬となった今でもなお、の意。秋とともに木枯も過ぎ去ったはずなのにどうしてまだ残っているのか、という思い。季節の到来と眼前の景物とのずれを詠んだものとしては「はるがすみたちにしものをいまもなほよしののやまにゆきのみぞふる」（躬恒集・三〇九）がある。

【所載】袋草紙・六四七／八雲御抄・一〇一

二〇九 神無月ふりみふらずみさだめなきしぐれぞふゆのはじめなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】十月になって、降ったり降らなかったりと定まりのない時雨こそが冬の始まりであったことだ。

【語句】○神無月 旧暦十月の称。「時雨」をと共に詠む場合も多い。二〇一番歌参照。○ふりみふらずみ 「み」は接尾語。動詞の連用形に付いて動作の反復を示す。……たり……たり。「さねかづらいまするいもがうらわかみゑみみいかりみきつつひもとく」（古今六帖・一四一七）。○ふゆのはじめ 冬の到来。和歌に用いられる事例は少ない。「あでのかはけふはなみのおときこえぬはふゆのはじめとこほりすらしも」（惠慶集・二七一）。

【所載】後撰集・冬・四四五／和漢朗詠集・三五五／隆源口伝・二三／綺語抄・五二／古来風体抄・三一五

かみな月

つらゆき

二一〇 かみな月かぎりとおおもふもみぢばのやむときもなくよるさへにちる

【異同】ナシ

【現代語訳】十月となって、もうこれきりと思ったのだろうか。紅葉した葉が、とどまることなく夜になってまで散っているよ。

【語句】◎かみな月 旧暦十月の称。屏風歌の題に多く見られる。景物は紅葉、菊、網代など多岐にわたる。○よるさへにちる 夜になってまで散っている。冬の十月になってしまったので散らなければいけない、という。「も

みちば」を擬人化する。本来は自然であるはずの落葉まで月次意識を優先しているという点に眼目を置く。末句、所載欄の後撰集では「夜さへにふる」とあり、「時雨が降る」と掛けて、紅葉の散る様子を「降る」と喩える。なお後撰集の二荒山本や片仮名本では「ちる」とする。

【所載】後撰集・冬・四五六

【参考】作者名は「つらゆき」とあるが、現存する貫之集には残らない。後撰集も「よみ人知らず」とする。なお、順集に、天曆五年、宣旨により梨壺に五人が召された時に、その別当・藤原伊尹からの「かみなづきのへいはくにいはく、『かみなづきかぎりとおもふもみちばの』」とあり、おのおのうたをたてまつるに」との注文に応じた、

神無月ではては紅葉もいかなれや時雨とともにふりに降るらん（一一七）  
がある。

〔以上五首担当 青木〕

二二一 ちはやぶるかみなづきこそかなしけれたれをこふとかつねにしぐるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月というのは悲しいものだ。一体、誰を慕って、いつもしぐれ、泣き濡れているのだろうか。

【語句】〇ちはやぶる 「かみなづき」の「神」にかかる枕詞。

【所載】ナシ

【参考】「つねにしぐるゝ」の主語があいまい。「かみなづき」を擬人化し、その「かみなづき」を主語と考えるか、「かみなづき」という季節は悲しいものとし、そうした折の自らの気持ちを推し量っていると考えるか。類歌に「ちはやぶる神な月こそかなしけれわが身時雨にふりぬと思へば」（後撰集・四六九）がある。それによれば後者であろうか。

二二二 たつ田やまにしきをりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

【異同】にしきをりかくもみち織かく（大）

【現代語訳】竜田山は、錦を織って架けたようだ。神無月の時雨の雨を縦糸と横糸にして。



【語句】○たつ田やま 大和国の歌枕。平安期以降はもみじとともに詠まれることが多い。「唐衣たつたの山のもみぢばは物思ふ人のたもとなりけり」（後撰集・三八六）。○にしきをりかく 「をり」は「織（お）り」。錦を織って架ける。全山の紅葉を錦に見立てるのは、古来、漢詩的発想による常套手段。「山機霜杼織葉錦」（懷風藻 大津皇子）。○たてぬきにして 「たて」は経、「ぬき」は緯、織物の縦糸と横糸をいう。

【所載】古今集・冬・三一四／家持集Ⅰ・二六三／家持集Ⅱ・二六九

【参考】古今集には初句を「竜田川」とする本文と「竜田山」とする本文とがあり、当該歌は後者に属するが、片桐洋一は、「織った錦をみずから『架ける』という表現は『山』にふさわしい」（『古今和歌集全評釈』）とする。

## しも月

二二三 さかしらになつは人まねさゝのはにさやぐしもよはわがひとりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】さかしげに、暑い夏の間は、人と同じように独り寝をしたりするが、笹の葉に音を立てて霜の降る寒い夜は、そうした独り寝をするのがつらいことだ。

【語句】◎しも月 陰暦十一月の称。奥儀抄・物異名の項に「しもつき 霜しきりにふるゆゑにしもふり月といふをあやまれり」とある。本来「霜降り月」であつたのを誤つたとするが、霜のおく月なので「霜月」であることは確かであろう。○さかしらに 賢げに。利口ぶつて。よせばいいのに、自分から、という気持ちがある。○なつは人まね わかりにくい。八代集抄に「夏の夜こそ、暑ければ、人の独ぬるやうに我もひとりぬべけれ、冬の上、霜のさむきに、ひとりぬる事のあぢきなきよし也」とあるのに一応従う。「人真似」に「人間寝」（人のいない間に寝る）を掛けるとする説もある。○さゝのはにさやぐしもよは 笹の葉にさやさと音を立てて霜の降る、そんな寒い夜は。「さむしろに思ひこそやれささのはのさやぐ霜夜のをしの独り寝」（堀河百首・九一七）。

【所載】古今六帖「ひとりね」二七〇七／古今集・誹諧歌・一〇四七／八雲御抄・一七四

二二四 冬のよをねざめてきけばをしぞなくはらひもあへずしもやをくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】冬の夜を眠れないで耳を澄ましていると、おしどりが鳴いている。払うこともできないほど上毛に

霜がおいて、それで冷たくて鳴いているのであろうか。

【語句】○ねざめてきけば 「ねざめ」は、必ずしも眠りから覚めた状態をさすのではなく、「寢床に体を横たへたまま、眠りに入ることができずにゐる状態をいふのが原義」（増田繁夫「歌語『ねざめ』について」『人文研究』一九九〇年一月）という。○をし おしどり。和歌ではもっぱら冬の鳥として詠まれ、雌雄相離れることのない鳥として意識された。「かたみにやうはげの霜をはらふらむともねのをしのもろごゑになく」（千載集・四二九）。○はらひもあへず 払おうとしても払いきれず。

【所載】古今六帖「をし」一四七六／後撰集・冬・四七八／拾遺集・冬・二二八／金玉集・三六／和漢朗詠集・三七三／深窓秘抄・五六

【参考】古今六帖以外の本文はすべて初句を「よをさむみ」とする。

二二五 ふく風はいろもみえねどふゆくればひとりぬるよの身にぞしみける

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風は何色なのか見えないけれど、冬が来ると、独り寝をするわが身にはそぞろ身に染みることだ。

【語句】○いろもみえねど 身に染みるのだから色はあるだろうに、という気持ち。

【所載】古今六帖「ふゆのかぜ」四二四／後撰集・冬・四四九／新撰万葉集・四一八／寛平御時后宮歌合・一三〇

【参考】後撰集や歌合に本文異同はないが、古今六帖・四二四番歌のみは第三句を「ゆふくれは」とする。題は「ふゆのかぜ」であり、「夕暮れは」では意に合わない。おそらく「ふゆくれば」を「ゆふくれは」と誤ったのであろう。もともと当該歌もなぜ「しもつき」の項に収められているのかは不審。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

かぐら

つらゆき

二二六 かはやしろしのにをりかけほすころもいかにほせばかなぬかひざらん

はへイ

【異同】 つらゆき―ナシ（桂） しのをりかけ―しのおりはへ（大）

【現代語訳】 川社の篠にたくさん折ってかけて干す衣は、どのように干したから七日乾かないのでしょうか。

【語句】 ◎かぐら 神の心を慰めるように、神を祭るときに奏する舞楽。歌題としての神楽は、十二月吉日に行われた宮中神楽を詠んだものが多い。○かはやしろ 六月祓などの神事に、川のほとりに棚を設け、神や篠を立てて神饌を供え、神楽などを奏して神を祭った社。異説もあり、俊頼髓脳・綺語抄などでも論議された難語である。

○しのに しきりに。たくさん。「篠」を掛ける。「篠」は群生する細い竹の総称。○をりかけ 大久保本と所載欄の他文献では「をりはへ」「をりはふ」は長くのぼして広げる意。「をりかく」は折って掛ける意。「賤の男が篠をりかけて干す衣いかに干せば乾ざらん乾ざらん七日乾ざらん」（梁塵秘抄・四六九）。○ほすころも 干す衣。白波を干してある衣に見立てたとする説もある。○なぬか 七日。

【所載】 新古今集・神祇・一九一五／貫之集Ⅰ・四〇六／俊頼髓脳・三三〇／綺語抄・二六五／奥儀抄・六三五／和歌童蒙抄・五二六／袖中抄・一九五／六百番陳状・二〇八／古来風体抄・一一一／和歌色葉・一九二／八雲御抄・一六九

【参考】 作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集によると夏神楽を詠んだ屏風歌。解釈がさまざまあり、濡れ衣の晴れないことを嘆いている歌とも考えられている。

二二七 ゆく水のうへにいのれるかはやしろかみなりたかくあそぶこゑかな

【異同】 かみなりたかく―かみなひたかく（桂）

【現代語訳】 流れ行く水のほとりで（神を）祈る川社では、雷鳴が大きいように、大きな音で神楽を奏していることですよ。

【語句】 ○いのれる 神や仏の名を呼び幸福を求める。神仏に願いをかける。所載欄の他文献では「いはへる」（神を祭っている意）が多い。○かみなりたかくあそぶこゑかな 雷鳴が大きいように、大きな音で神楽を奏していることですよ。貫之集をはじめ、所載欄の文献のほとんどには「かはなみたかくあそぶなるかな」とあり、川波が高く立ち、声高く神楽を奏するようですよ、の意となる。「あそぶ」は神遊び、即ち神楽を演じること。

【所載】 夫木抄・三二八〇／貫之集Ⅰ・四七三／和歌童蒙抄・五二七／俊頼髓脳・三三一／綺語抄・二六六／袖中抄・一九六、二〇一／奥儀抄・六三六／六百番陳情・二〇九／古来風体抄・一一二

【参考】 貫之集によると夏神楽を詠んだ屏風歌。作者については二二一番歌参照。

二一八 あしひきのやまのさかきのときはなるかげにさかゆる神のきねかも

【異同】ナシ

【現代語訳】山の榊の常緑の木陰で、変わらぬ神のご威光により栄える、神にお仕えする巫覡ですよ。（繁茂するご神木ですよ。）

【語句】○さかき 常緑樹の総称。特に神事に用いる木をいう。○ときは 「常緑」に「永久不変」の意を響かす。○かげ 榊の木の「陰」と、お蔭で、の意味の「蔭」を掛ける。○神のきね 神に仕える人。男女どちらにも言う。「きね」は巫覡と木根（木の意。ネは接尾語）を掛ける。

【所載】拾遺集・神楽歌・六一八／貫之集Ⅰ・一八七

【参考】拾遺集・貫之集の詞書によると、民部卿清貫の六十賀の屏風歌。また、この歌は「しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも」（古今集・神遊びの歌・一〇七五、古今六帖・二二二）をふまえて詠まれている。作者については二二一番歌参照。

二一九 さかき葉のときはにしあればながけくにいのちたもてる神のきねかも

【異同】ナシ

【現代語訳】榊葉は常緑でいつまでも変わらないので、（それを持つことにより）長々と寿命を保つ神の巫覡でありますよ。

【語句】○ながけくに 長い状態で。「に」は状態を表す格助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・五三一

【参考】貫之集詞書によると、神楽を詠んだ屏風歌。作者については二二一番歌参照。

二二〇 こゑたかくあそぶなるかなあしひきのやまいまぞと越るべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】大きな音で神楽を奏でていることですよ。（神楽に招かれた）山人が、（山へ帰るのに）今まさに通

つているところです。

【語句】○あそぶ 二一七番歌参照。○やま 山中に住む人。獵師・炭焼きのたぐいだが、山の神に仕える神人でもあり、平素は山に住み、祭りなどの時だけ里に出た（西角井正慶『神楽研究』壬生書院、一九三四年）。「あしひきのやまゆきしかばやまびとのわれにえしめしやまつとぞこれ（万葉集・四三一七（旧四三九三））。○越るべらなる こゆるべらなる。「越ゆ」は通過する意。所載欄の文献では「かへるべらなる」。

【所載】夫木抄・七四九三／貫之集Ⅰ・五二一

【参考】貫之集・夫木抄の詞書によると、忠平女貴子の四十賀の屏風歌。作者については二二一番歌参照。

〔以上五首担当 三浦〕

二二二 山びとのすれるころもにゆふだすきかけてころをたれによすらん

已上六首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山人は山藍で摺った小忌衣（おみごろも）に木綿襷（ゆうだすき）を掛けて、誰に思いを寄せているのだろうか。

【語句】○山びと 山に住む人。炭焼き人など。また山の神に仕える人。「あふさかをけさこえくれば山人のちとせつけとてきれるつまなり」（拾遺集・五八〇）。所載欄の歌はすべて初句「みやびとの」。○すれるころも 白地に山藍で春草、小鳥などの模様を青く摺りつけた小忌衣。○ゆふだすきかけて 「ゆふだすき」は木綿（ゆう）で作った襷。神事に奉仕するとき掛ける。「かけて」は「襷をかける」に、心をかける意を掛けている。「ちはやぶるかも杜のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし」（古今集・四八七）。

【所載】古今六帖「ころも」三二八二／新古今集・神祇歌・一八七〇／貫之集Ⅰ・二一／貫之集Ⅱ・一九  
【参考】左注「已上六首つらゆき」とする二二六番—二二一番の六首は所載欄の文献に一致する。

二三二 しもやたびをけどかれせぬさかきばのたちさかゆべきかみのきねかも  
或本つらゆき

【異同】かみのきねかも—かみのきねかな（御・桂・大）

【現代語訳】霜が幾たび置いても決して枯れない榊葉のように、栄えてゆくに違いない神人よ。

【語句】○やたび 幾度も。「や」は数や量の多いことを表す語。「やくもたついてもやへがきつまごみにやへがきつくるそのやへがきを」(古事記・一)。○たちさかゆべき 目立って栄えてゆくにちがいない。上三句までは「たちさかゆべき」にかかる序詞。○きね 神に奉仕する人。

【所載】古今集・神あそびのうた・一〇七五／和歌童蒙抄・七一〇  
【参考】「或本つらゆき」とあるが、所載欄の文献には作者名なし。

二二三 さかきばにゆふとりしでしでかけてイたれかゝく神のみまへにいはひそめけん

【異同】ナシ

【現代語訳】榊の葉にゆうを取り掛けて、誰がこのように神の御前で穢れを忌みつつしみ、吉事を願いはじめたのだろうか。

【語句】○ゆふ 楮の樹皮をはぎ、裂いて糸にしたもの。幣として祭りの時神などにかける。また褌として神事につかう。○とりしでゝ 取りかけて。垂らして。○たれかゝく 「誰か掛く」に「かく(このように)」をかける。○いはひそめけん 「いはふ」は、幸福安全を願い、穢れを忌み謹んで神を祭ること。

【所載】拾遺集・神楽歌・五七六／袖中抄・八四四

二二四 わぎもこがあなしの山のやまびとゝ人もみるがべくイね山かづらせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】私のいとしいあの女は、あなしの山の山人と人も見るほど見事に山かずらをしておくれ。

【語句】○わぎもこ 男が妻・愛人など親しい女を呼ぶ語。所載欄の歌は初句「まきもくの」。袖中抄のみ「わぎもこが」。○あなしの山 まきもくのあなしの山。奈良県桜井市三輪町の東方にある山。○やまびと 二二一番歌参照。○みるがね 見るほかに。○やまかづら 山野の蔓性の植物で作った髪飾り。

【所載】古今六帖「やしろ」一〇七二／古今集・神あそびのうた・一〇七六／綺語抄・二六七／奥儀抄・五九二／袖中抄・三四六、三四七／和歌色葉・二九六

二三五 神がきやみむろの山のさかきばゝかみのみまへにしげりあひにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】神域の内のみむろの山の神葉は、神の御前でともども繁茂していることだなあ。

【語句】○神がきや 「神がき」は神社や神域の垣。「や」は感動をあらわす助詞。○みむろの山 神が降臨する山。「みむろ」は本来神が降臨する御室の意であるが、「たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集・二八四）が有名となり、後に奈良県生駒郡斑鳩町の神無備山のことと考えられるようになった（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院、二〇〇一年）。○しげりあひにけり 茂りあっている状態を祝いの気持をこめてよんだもの。

【所載】古今集・神あそびのうた・一〇七四

〔以上五首担当 橋本・林〕

二二六 みやまにはあられふるらしと山なるまさきのかづらいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】山には霧が降ったらしい。人里近い山では、まさきの葛が綺麗に色づいている。

【語句】○みやま 木の茂った深い山。また「み」を接頭語とし、神霊の領する山とする意もある。なお笹川博司『深山の思想』（和泉書院、一九九八年）は古今集時代の「み山」は「神の住む山」と解釈すべきであり、「深い山」へと変化していくのは院政期頃とする。○と山 外山。人里に近い山。○まさきのかづら 蔓性植物を指す。定家葛とする説もあるが、定家葛は紅葉しない。神事にちなむ葛を「真栄（まさき）」と賛美したか。

【所載】古今集・大歌所御歌・一〇七七／新撰和歌・一二八／金玉集・三七／和漢朗詠集・三九二／和歌体十種・七／深窓秘抄・五八／九品和歌・三／新撰髓脳・一三／俊頼髓脳・三八、一六九／和歌童蒙抄・九八／奥儀抄・七一、八九、一〇八／袖中抄・三四八／簸河上・四／代集・一／悦目抄・四四／井蛙抄・一〇二

二二七 としごとに神をぞいのるさかきばのいろもかはらでをらんと思へば

いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年毎年神を拝みます。榊葉が色も変わらないように、私たちの仲も変わることなくいたい、そう思うので。

【語句】○さかきば 常緑樹である榊の葉。神樂の際、挿頭などにする。○をらんと 「折る」に「居る」を掛ける。

【所載】伊勢集Ⅰ・八一／伊勢集Ⅱ・八三／伊勢集Ⅲ・七八／中務集Ⅰ・六四／中務集Ⅱ・八一

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の伊勢集に一致する。中務集にあるのは混入か。

二二八 しはすにはあはゆきふるとしらぬかもむめのはなさくふくめらずして

【異同】ナシ

【現代語訳】師走には淡雪が降ると知らないのであらうか、梅の花が咲いたよ、つぼみのままでいいないで。

【語句】◎しはす 陰暦十二月。○あはゆき 降るとすぐに消える雪。万葉集・一六四三(旧一六三九)に「沫雪のほどもどろにふりしけば」とする用例がある。仮名の違いによって「あはゆき」(淡雪)「あわゆき」(泡雪)の二通りがある。○ふくめらずして 「ふくむ」は、「含 フクム、クム、フム」(名義抄)。万葉集・七九二(旧七九五)「春雨を待つとしあらしわがやどの若木の梅もいまだ含めり」などからわかるように、いまだ開ききらないことを言う。「ふくめらずして」で「つぼみのままでいいないで開いてしまつて」となる。

【所載】万葉集・一六五二(旧一六四八)十二月尔者 沫雪零跡 不知可毛 梅花開 含不有而 シハスニハアワユキフルトシラヌカモユメノハナサクツホメラズシテ しはすにはあわゆきふるとしらぬかもうめのはなさくふふめらずして／綺語抄・六八／和歌童蒙抄・九〇、一五五／袖中抄・七八六

これのり

二二九 みよしのゝやまのしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

【異同】ナシ

【現代語訳】吉野の山に白雪がつもつたらしい。こんなにこの古里(である奈良)が寒くなつてきている。



【語句】○みよしのゝやま 四番歌参照。○ふるさと 旧都。ここでは所載欄の是則集詞書「ならの京にまかりてやどる所に」や吉野との関わりから奈良の都であることが分かる。○なりまさるなり 下の「なり」は断定の意。古今榮雅抄に「ふるさとのさむくなりまさるは、吉野山に雪のふりつもるらしと也」とあるのが分かり易い。

【所載】古今集・冬・三二五／金玉集・三八／和漢朗詠集・三八二／是則集・二三／寛平御時后宮歌合・二五／左兵衛佐定文歌合・一八／前十五番歌合・一七／俊成三十六人歌合・八五／時代不同歌合・一三三／三十人撰・九三／三十六人撰・一一三／深窓秘抄・六〇／秀歌大体・九〇／西行談抄・一二一

【参考】作者名「これのり」は所載欄の文献に一致する。

二三〇 せきこゆるみちならなくにちかながらとしにさはりて春をまつ哉

【異同】ナシ

【現代語訳】関越えの道のような容易ならぬ道ではなく、近いのに、年という隔てによって（こうして）春を待つていることだ。

【語句】○せきこゆるみち 「関」は障害になる物。○なくに 詠嘆的な否定の表現。○ちかながら 近いのに。○としにさはりて 「年」が障害（関）となつての意。春が来ない理由をあらわす。暦の上で春が来ないことに對する思いを述べた歌。

【所載】後撰集・冬・五〇五／伊勢集Ⅰ・九三／伊勢集Ⅱ・九五／伊勢集Ⅲ・九三

〔以上五首担当 杉本〕

二三一 あらたまのとしのをはりになる時はゆきもわが身もふりまさりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】一年の最後になる時は、雪も降りまさり、わが身も古りまさる。

【語句】○あらたまの 「年」にかかる枕詞。○ふりまさりつゝ 「ふり」は古くなるの意。これに「降り」をかける。「つつ」はAの年もふり、Bの年もふり、Cの年もふり…というのを「ふりまさりつつ」という（竹岡正夫『古今和歌集全評釈』）。

【所載】古今集・冬・三三九／家持集Ⅰ・二六六／家持集Ⅱ・二七二／万葉集時代難事・五七／桐火桶・一二四

二三二 あらたまのとしゆきかへり春たゝばまづわがやどにうぐひすはなけ  
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】年が行き、また返って春になったら鶯はまず我が家に鳴けよ。

【語句】○としゆきかへり 古い年が去り、またあらたに新しい年がやってくる。「あらたまのとしゆきかへりつきかさね……」(万葉集・四一四○(旧四一一六))、「あらたまのとしゆきかへりはなのうつろふまでに……」(万葉集・四〇〇二(旧三九七八))など。

【所載】続後拾遺集・冬・四九八／万葉集・四五一四(旧四四九〇) 安良多未能 等之由伎我敝理 波流多多婆 末豆和我夜度爾 宇具比須波奈家 アラタマノシユキガヘリハルタバマヅワガヤドニウグヒスハナケ あらたまのとしのゆきかへりはるたばまづわがやどにうぐひすはなけ／三十人撰・四九／三十六人撰・四一／夫木抄・八八七五

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

## 仏名

二三三 としのうちにつもれるつみはかきくらしふるしら雪とゝもにきえなん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】この年のうちにつもった罪は、空をかきくらし降る雪が消えるようにともに消えてほしい。

【語句】◎仏名 仏名会(ぶつみょうえ)のこと。御仏名(おぶつみょう)ともいう。諸仏の名号を唱え罪障を懺悔する。内裏や寺院で行われた法会。平安中期には毎年十二月二十日前後の一夜。のちに十九日からの三日間。屏風の画題としてもあった。和歌の題としてはその年の罪障消滅を祈る心や、会式に際しての導師とのやりとりが詠まれる。○かきくらし 空を暗くして。○きえなん 消えてほしい。「なん」は動詞の未然形に接続し、「…してほしい」の意を表す。

【所載】拾遺抄・冬・一六〇／拾遺集・冬・二五八／新撰朗詠集・三六九／貫之集Ⅰ・二二／貫之集Ⅱ・二〇／

宝物集・四六四

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰには「延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首せじにてこれをたてまつる廿首」のうちにある。

二三四 きみさらば山にかへりて冬ごことにゆきふみわけてをりよとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいつてしまわれたら、山にお帰りになってきつと冬ごことに（また仏名の導師として）雪ふみわけて下りてきて下さるようにと願っております。

【語句】○さらば 去らば。「去る」の未然形に仮定の助詞「ば」の接続したかたち。挨拶の語ではない。○冬ごことに 冬になるたびに。○をりよ おりよ。「おりる」の古語「おる」は上二段活用。その命令形。下山して下さ

い。

【所載】貫之集Ⅰ・四〇一  
【参考】仏名のために招く僧侶を「導師」というが、仏名が終わると別れの宴がある。貫之集によればそこでの歌。次の拾遺集の歌が参考になる。

屏風のゑに仏名のあしたに梅の木のもとに導師とあるじとかはらけとりてわかれをしてみたところ

よしのぶ

雪ふかき山地になにかへるらん春まつ花のかげにとまらで（二五九）

うるふ月

いせ

二三五 さくらばなはるくはゝれるとしだにも人のこゝろにあかれやはせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】桜花よ、今年のように春が余分にある年だけでももう十分堪能したと人の心に思われるくらい咲いてくれないか。（いつもあわただしく散ってしまつて……）

【語句】◎うるふ月 閏月。暦月と季節を調節するためもうける。現行の暦では四年に一度二月に一日設けて閏

日とするが、平安時代に用いた宣明暦では、中気のない月を閏月とする。この暦は大の月三十日、小の月二十九日であり、平年を三五四日とするから、約三年に一度は閏月がある。またその時節も異なる。以下、春・夏・秋・冬の順に歌を配置する。○はるくはゝれる 閏三月のある年で春が四ヵ月あるのをいった。道真の漢詩の序に「況んや年の閏月は一歳余分の春……」などとする。平安初期の漢詩の発想を巧みに和歌に移したものの、「つねよりものどけくにはへ桜花春くははれる年のしるしに」（風雅集・二二三・修理大夫顕季）の歌は、詞書に「三月に閏ありける年よめる」とある。

【所載】古今六帖「さくら」四二〇六／古今集・春上・六一／和漢朗詠集・六二／伊勢集Ⅰ・二二五／伊勢集Ⅱ・二二一／伊勢集Ⅲ・二二七／古来風体抄・二三四／和歌色葉・二二三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 平野〕

二三六 うるひさへありてゆくべきとしだにも春にかならずあふよしもがな

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】閏月さえあるはずの今年は、せめて人生の春にかならず会いたいです。

【語句】○うるひ 「うるふ」の連用形の名詞化。閏月。○としだにも この年はせめて。○春 所載欄後撰集の詞書に「やよひにうるふ月ある年、つかさめしのころ申文にそへて、左大臣の家につかはしける」とあり、三月が二度ある「春」に我が身の「春叙位」、任官をはたすことを願っている。

【所載】後撰集・春下・一三五／貫之集Ⅰ・八七九／古来風体抄・三〇九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二三七 ほとゝぎすのちのさ月もありとてやながくう月をすぐしはてつる

【異同】ながくう月を―なかくて卯月を（大）

【現代語訳】ほととぎすよ、今年は閏五月もあるからと言って、ゆっくりと四月の初音を楽しんで過ごしているのかな。

【語句】○ほとゝぎす ほととぎすは四月のうちは山で忍び音に鳴き、五月になると里に降りて来て本格的に鳴くとされた。○のちのさ月 閏五月。

【所載】亭子院歌合・五八（二十卷本類聚歌合のみ）

二三八 さみだれにつゞける<sup>のイ</sup>としのながめにはものおもひたえぬ人ぞかなしき<sup>いせ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】さみだれの降る五月が二度もある年の長雨には、雨につきもののもの思いをする私は、ずつとうれいが絶えずかなしいことだ。

【語句】○さみだれにつゞけるとし 「さみだれ」は陰暦五月ごろ降り続く長雨。梅雨。「つゞけるとし」とは古今六帖の題が「うるふ月」なので、さみだれの降る五月が二度続く年の意。所載欄伊勢集Ⅰの詞書に「五月ふたつある年」とある。岩井宏子は古今集撰者時代の「さみだれ」は時候表現であるとし、この歌について「雨が降り続くという意ではなく、五月が連続するということである。」としている（「さみだれ」の生成と基層―季節と歌語『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年）。○ながめ 「長雨」に物思いの「ながめ」をかける。○ものおもひ 岩井宏子は「さみだれ」が「心の乱れを表現する言葉として機能することにより重層的に恋愛心情を表現するものと理解された。」としている（同上著書）。

【所載】後撰集・夏・一九〇／伊勢集Ⅰ・二二九／伊勢集Ⅱ・二三〇／伊勢集Ⅲ・二三〇

【参考】作者名「いせ」は、伊勢集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲには当該歌が載るが、後撰集は「よみ人知らず」である。

二三九 たなばたはあまのかはらをなゝかへりのちのなぬかをみそぎにはせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】織女は天の川原で七度被えをし、六月に閏月が加わる今年は、後の六月七日（例年なら彦星と逢えるその日）を禊の日としなさい。

【語句】○なゝかへり 七度の被え。『後撰集新抄』（風間書房、一九八八年）は本居宣長の説として「七かへりとは七度の被への事なり」と記している。○のちのなぬか 閏六月七日。例年なら七月七日。所載欄の後撰集詞

書に「みな月ふたつありけるとし」とある。後撰集と八雲御抄は、第四句「のちのみそかを」である。六月晦日は夏越の祓えの日。

【所載】後撰集・夏・二一六／八雲御抄・一七七

二四〇 神無月ふたつあるとしのしぐれにはひともとぎくぞいろこかりける

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月が二つもある年のしぐれの頃は、一本の菊がことさらに色濃く美しいことだ。

【語句】○神無月 陰暦十月。○しぐれ 晩秋から初冬にかけて、降ったり止んだりする雨。「しぐれ」はひと雨ごとに、木の葉や花の色を濃く染めるとされた。しぐれが二か月も降るのだから菊の色も濃く染まるといった。「白露も時雨もいたくもる山はしたばのこらず色つきにけり」（古今集・二六〇）。○ひともとぎく 一本の菊。「ふたつあるとし」と「ひともと」の対比。

【所載】兼輔集Ⅰ・五六／兼輔集Ⅱ・一一〇／兼輔集Ⅲ・四三／兼輔集Ⅳ・五三／兼輔集Ⅴ・六二

〔以上五首担当 斎藤・林〕

二四一 この月のふゆのあまりにあらざらばうぐひすはゝやなぎぞしなまし

【異同】ナシ

【現代語訳】この月が冬の余りとしてあるのでなかったら、鶯はもうとつくに鳴いていることだろうに。

【語句】○ふゆのあまり 閏十二月。後撰集には「年のあまりに」とあるが、鶯の鳴く春を待つという下の句からみて「冬」の方が妥当。○うぐひす 鶯。万葉集以来、春の最初に鳴く鳥、春を告げる鳥として歌われた。「梅が枝に来ある鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ」（古今集・五）、「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯の鳴く」（古今集・六）。○なまし 完了の助動詞「ぬ」の未然形＋反実仮想「まし」。「ば」と呼応して実際にありえないことを仮想する。鶯が鳴く春の到来が遅れるのは閏十二月のせいだとした趣向。

【所載】後撰集・冬・五〇四／夫木抄・七六三三

としのくれ

二四二 ゆくとしのおしくもあるかなますかゞみみるかげさへにくれぬとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】去りゆく年が惜しまれることだなあ、鏡に映る姿にさえ、老いのかげりがみえてきたと思うと。

【語句】◎としのくれ 一年の終わり。年末。歳暮。○おしくもあるかな をしくもあるかな。「も」は感動の意を添える係助詞。「かな」は詠嘆の終助詞。○ますかゞみ 澄んでよく映る「真澄鏡（ますみのかがみ）」の転とも、よく整った完全な「真十鏡（まさかがみ）」の転ともいわれるが、ここでは単に「鏡」のこと。○みるかげさへに 「みるかげ」は鏡の中にみる自分の姿。「さへに」は副助詞「さへ」＋格助詞「に」。すでにある事柄の上にさらに別の事柄を添加する。○くれぬ 「くれ」は、動詞「暮る」の連用形で、「季節や年月が終わりに近づく」意と「人生の終わりに近づく、老年になる」意を掛ける。「暮る」を老年の意で用いた例として「齒老ここに至りて暮れぬ」（大唐西域記・卷十一・平安中期点）があり、白居易の詩にも詠まれている。参考欄参照。「むばたまのわが黒髪に年くれて鏡の影に降れる白雪」（貫之集Ⅰ・八一四／拾遺集・一一五八）などの例がある。○とおもへば と思うと。上の句の詠嘆にもどる形。「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」（古今集・三二五）。

【所載】古今集・冬・三四二／新撰和歌・一六〇／和漢朗詠集・三六一／貫之集Ⅲ・三〇／色葉和難集・六二三  
【参考】古今集・冬部の巻末歌で、歳末に老いを嘆く歌。鏡をみての嘆老は、「晨興照青鏡 形影両寂寞（晨に興きて青鏡に照らせば 形影両つながら寂寞）」（歎老三首・白氏文集・〇四五三）、「前去五十有幾年 把鏡照面心茫然（前五十を去ること幾年か有る 鏡を把つて面を照らして心茫然たり）」（浩歌行・白氏文集・五七九）、歳暮と嘆老は、「白頭歳暮苦相思（白頭歳暮苦に相思ふ）」（歳暮寄微之三首・白氏文集・二四五三）といった漢詩文の影響が考えられる。岩井宏子『古今の表現の成立と展開』第三章第二節（和泉書院、二〇〇八年）には、老いを嘆く歌に白居易の詩が与えた影響についての詳しい考察がある。

みつね

二四三 あづさ弓はるたちしよりとし月のいるがごとくもおもほゆるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になってからは、年月の過ぎ去るのが矢を射るように迅（はや）く思われることであるなあ。  
【語句】○あづさ弓 あづさ弓を「張る」ことから「春」にかかる枕詞。○はる 「張る」と「春」の掛詞。○いる 月が「入る」と弓を「射る」の掛詞。「はる」「いる」は「弓」の縁語。「あづさ弓春の山辺にいるときはかざしにのみぞ花は散りける」（貫之集Ⅰ・五）、「青柳をかざしにさしてあづさ弓はるの山辺にいるひとや誰」（躬恒集Ⅰ・一七六）など。

【所載】古今集・春下・一二七／躬恒集Ⅱ・一一／躬恒集Ⅲ・一〇／躬恒集Ⅴ・四一／大和物語・一三二段  
【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

なお、古今六帖では「としのくれ」に配置されるが、古今集では「ゆく春」の歌群のなかに置かれている。

## 二四四 ゆきふりてとしのくれぬるときにこそついにみぢぬまつもみえけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降り、年が暮れてゆくときにはじめて、最後まで色を変えない松のことが目に映るのである。

【語句】○ついにみぢぬまつ つひにもみぢぬ松。最後まで色を変えぬ松。「つひに」は一つの行為や状態が最後まで持続するさまを示す。いつまでも。最後まで。「もみぢぬ」は、紅葉する意の動詞「もみづ」＋打消の助動詞「ず」の連体形。「もみぢぬまつ」とは、常緑で葉の色を変えぬ松。論語・子罕篇の節操が堅固であることを喩えた「歳寒、然後知松柏之後彫也（歳寒くして、然る後に松柏の彫へし）むに後へおくるを知る也」による。○まつ 「松（まつ）」と「雪」の取り合わせは多く、「我が宿の松の木ずゑに住む鶴は千代の雪かと思ふべらなり」（貫之集Ⅰ・五二）、「年経れど色もかはらぬ松が枝にかかれる雪を花かとぞみる」（古今六帖・雪・七四〇）など。○みえけれ 「みえ」は「見ゆ」の連用形で、自然に目に映る。「けれ」は気づきの「けり」の已然形で「こそ」の結び。

【所載】古今集・冬・三四〇／新撰万葉集・九四／宗于集・一〇／寛平御時后宮歌合・一二三／和歌童蒙抄・七〇三／奥儀抄・四七九／古来風体抄・二六一／桐火桶・一二五、三一八

## 二四五 くれてまたあくとのみこそおもひしかことはけふぞかぎりなりける

【異同】ナシ



【現代語訳】一日が暮れるとまた明けるとばかり思っていたが、今年は今日がその限りであつたのだなあ。

【語句】○くれてまたあくとのみこそ 一日が暮れてまた明けること。「くれ」に「年の暮」をひびかせる。一日の明け暮れと年の明け暮れを詠んだものとしては「年くれて春あけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪」（後撰集・五〇〇）の如き例がみられるが、ここでは、年が「明ける」ことよりも、繰り返される日々の明け暮れのなかでふと気付いた断絶の感覚が詠まれる。

【所載】躬恒集Ⅰ・三七〇／躬恒集Ⅲ・三九四／躬恒集Ⅳ・二六三

【参考】作者名はないが躬恒集に入集する。

〔以上五首担当 中野〕

二四六 いちしろき<sup>るイ</sup>しるしなりけりあらたまのとしのくるゝは雪にぞありける<sup>つらゆき</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】実にはっきりした白い目じるしだったのだなあ。年が暮れるというのは、雪が降るのであつたよ。  
【語句】○いちしろき 「いちしろし」は、顕著な、明白な、の意。傍記異文や所載欄の貫之集の「いちしろし」も同じ意。「いちしろく」と詠まれる歌に、「こもりぬの下ゆ恋ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべく」（万葉集・三九五七、〈旧三九三五〉）、「道のべのいちしろの原の白妙のいちしろくしもあれ恋ひめやも」（歌経標式・五）など。古今六帖では、「いちしろし」の表記型が三例、「いちしろし」の方が十例で数多い。○あらたまの「とし」にかかる枕詞。○雪にぞありける 所載欄の貫之集には「雪のふる家」の詞書があつて、理解しやすい。田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』に、「降る」と「古る」が実現する。雪は年が古るくなる年の暮れを表すことになる」と語釈する。なお、二三一番歌参照。

【所載】貫之集Ⅰ・四四七

【参考】作者名「つらゆき」は、貫之集により確認される。

二四七 昨日といひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日といい今日といって日を暮らしてもう明日になる。まったく飛鳥川の流れのように、過ぎゆくのがはやい月日であり、年の暮れとなつてしまったなあ。

【語句】○あすか川 「飛鳥川」は奈良県飛鳥地方を流れる川の名で、「明日（あす）」を掛ける。当該歌のように、「きのふ・けふ・あす」と詠み込む例は、万葉集から見える。○ながれてはやき 飛鳥川の流れがはやいことに、月日の経つのがはやいことを掛け、年末に時の経過に驚き嘆く。所載欄の古今集の詞書に「年の果てに詠める」とある。なお、飛鳥川の流れのはやさについては、万葉集から詠まれ、「あすか川行く瀬をはやみはやけむと待つらむ妹をこの日暮らしつ」（巻十一・二七二二（旧二七一三））などがある。

【所載】古今集・冬・三四一／新撰和歌・一五八

【参考】古今六帖には作者名の記載がないが、所載欄の古今集に「はるみちのつらき」、定家八代抄に「春道列樹」（五七二）とある。

二四八 ものおもふとすぐる月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いをしていて過ぎゆく月日も気づかずにいるうちに、今年は今日で終わってしまうとか聞くことです。

【語句】○ものおもふ もの思いにふける。恋のものの思いという場合が多い。○はてぬとか 所載欄の敦忠集に「なりぬとか」とある。

【所載】後撰集・冬・五〇六／敦忠集Ⅰ・一三八／俊成三十六人歌合・四三／時代不同歌合・一五七／六百番陳状・五二／大和物語・九二段・一三七

【参考】作者名の記載がないが、所載欄の後撰集・敦忠集・俊成三十六人歌合・時代不同歌合から、藤原敦忠の詠と確認できる。後撰集や敦忠集には、年を経て言い寄っていた「御匣殿別当」という女性に「師走の晦日」に贈った、と詠歌事情が付されている。

二四九 としくれてはるあけがたになり行ばはなのためしにふれるしら雪

【異同】ナシ

【現代語訳】一年も暮れて明ければすぐ春になる時なので、花の手本として降り積もった白雪であるよ。

【語句】○はるあけがた 明ければすぐ春という頃。「暮れ」に「明け」で対比させる。「はるあけがた」の例として後世のものだが、六条修理大夫集に百首歌「除夜」の題で、「門松をいとなみ立つるそのほどに春あけがたになりやしぬらん」(二五〇)や、「おなじ所にて人々、梅告春近題并恋」の詞書で「雪のうちにつぼみにけりな梅の花春あけがたになりやしぬらん」(六六)などがある。○なり行ば 桂宮本・大久保本に「なりゆけば」と表記するように、「なりゆけば」と読んだ。二四五番歌に比して、時を連続性の中に捉えている。○はなのためし まだ咲かない花の手本、の意。○ふれる 降れる。所載欄の後撰集には「まがふ」とある。

【所載】後撰集・冬・五〇〇

二五〇 やまのはにゆふひさしつゝくれぬればはるにいりぬるとしにぞありける  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山の端に夕日がさしながら落ち最後の日が暮れると、もう春に入りはじめていた年なのであった。  
【語句】○やまのはにゆふひさしつゝ 冬の澄んだ空に美しい落日が山の黒く濃い影を作る。○くれぬれば 暮れてしまったので。この年最後の日が暮れると、年も暮れるのである。所載欄の貫之集には、「くれゆくは」とある。○はるにいりぬる 年が暮れてもう春に入っていた、の意。『貫之集全釈』は「年内立春すでに春になつてしまっている年だったのだ」と解するが、「年内立春」に触れる記述が見出せなかったので採らなかった。

【所載】貫之集I・四一五

【参考】「としのくれ」題の最後の歌である。この年末歌には、「やがて来るものの方へ向かつてはたらく感得力」「まさに未来へ入りつつあるその時間の感知」が指摘される(山下道代『伊勢集の風景』臨川書店、二〇〇三年)。なお、作者名貫之は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

あまのはら

拾八 雑上 其の海に集

人丸

二五一 あまの川くものなみたち月のふねほしのはやしにこぎかへるみゆ  
く集

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川に雲の波が立ち、月の舟が星の林に漕ぎ入って帰っていくのが見える。

【語句】◎あまのはら 天の原。広々としてはてしない大空。○あまの川 「あまのはら」に流れる銀河。所載欄の拾遺集・夫木抄には「そらの海」とあり、万葉集・人麿集には「あめ(天)の海に」とある。○月のふね 月を、大空の天の川に浮かぶ舟にたとえた語。小島憲之『古今集以前』(塙書房、一九七六年)に詳しい。○ほしのはやし 多くの星が集まっているさまを林に見立てた語。

【所載】拾遺集・雑上・四八八／万葉集・一〇七二(旧一〇六八) 天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見 アメノウミニクモノナミタチツキノフネホシノハヤシニコギカクルミユ あめのうみにくものなみたちつきのふねほしのはやしにこぎかくるみゆ／夫木抄・七七〇五／人麿集Ⅰ・二三四／人麿集Ⅱ・一八三／人麿集Ⅲ・六七〇／人麿集Ⅳ・五一／和歌童蒙抄・四／和歌初学抄・一／古来風体抄・七三

【参考】作者名は「人丸」とあり、人麿集に所載。万葉集では「右一首柿本朝臣人麿之歌集出」と注する。拾遺集等も「人まろ」とする。

### あべのなか丸

二五二 あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

【異同】ナシ

【現代語訳】遠く大空を振り仰いで見ると、(あそこにかかっているのは)春日にある三笠の山にかつて出た月なのだなあ。

【語句】○あまの原ふりさけみれば 「天の原振りさけ見れば天の川霧立ち渡る君は来ぬらし」(万葉集・二〇七二(旧二〇六八))などの例がある慣用的表現。「あまの原」は広々とした大空のこと。「ふりさけみれば」は、遠くを仰ぎ見る意。○かすがなる 春日にある。「春日」は、大和国の歌枕。「春日山」「春日野」などの形でも詠まれた。現在の奈良市街東方の丘陵地。○みかさの山 三笠山。大和国の歌枕。春日にあり、春日神社の背後に位置する。続日本紀養老元年(七一一)二月一日条に「遣唐使祠神祇於盖山之南」(遣唐使神祇を盖山の南に祠る)と見え、古くは遣唐使と関わりがあった。

【所載】古今集・羈旅・四〇六／新撰和歌・一八二／金玉和歌集・五一／和漢朗詠集・二五八／和歌体十種・三

五／深窓秘抄・七九／秀歌大体・一一一／百人秀歌・六／百人一首・七／新撰髓腦・五／俊頼髓腦・一七二／綺語抄・一／和歌童蒙抄・九五四／奥儀抄・八〇／万葉集時代難事・四七／柿本人麻呂勘文・三五／古来風体抄・二六七／西行上人談抄・一五／井蛙抄・二／江談抄・五／今昔物語集・一二六／古本説話集・八三／宝物集・二五八／世継物語・七九

【参考】古今集左注等により、安倍仲麿が唐で詠んだ歌として知られている。

二五三 あまのはらくもなきよひにむばたまのよわたる月のかはらくをしも

【異同】ナシ

【現代語訳】広々とした大空に雲一つない宵に、夜空を渡る月が隠れるのは惜しいよ。

【語句】○むばたまの「夜」にかかる枕詞。○かはらく 万葉集等では「入らまく」とある。傍記の「かくらく」の方が、月が隠れるという意になって歌意が通るので、これによって解釈した。

【所載】新千載集・秋上・四五一／万葉集・一七一六（旧一七一）天原 雲無夕尔 烏玉乃 宵度月乃 入卷 倍毛 アマノハラクモナキヨヒニヌバタマノヨワタルツキノイラマクラシモ あまのはらくもなきよひにぬばたまのよわたるつきのいらまくをしも

二五四 はなはだもふらぬ雨ゆへこちたくもあまのみそらのくもりあひつゝ

【異同】はなはだも―たなはたも（大）

【現代語訳】それほどひどくも降らない雨なのに、大仰にも天空がすっかり厚い雲に覆われているよ。

【語句】○ゆへ ゆゑ（故）。こゝは逆接的に原因や理由を表す。……なのに。……にもかかわらず。「はなはだも降らぬ雨故にはたづみいたくな行きそ人の知るべく」（万葉集・一三七四（旧一三七〇））。○こちたくも おおげさにも。大仰にも。○あまのみそら 天空のこと。「み」は美称の接頭語。

【所載】万葉集・二三二六（旧二三二）甚多毛 不零雪故 言多毛 天三空者 陰相管 ハナハダモフラヌユ キユエチタクモアマノミソラハクモリアヒツツ はなはだもふらぬゆきゆゑこちたくもあまつみそらはくもらひにつつ／人麿集Ⅲ・二〇二／夫木抄・七六七五

【参考】家持集Ⅱ・一四四に「いたくしも降らぬ雪ゆゑひさかたのあめより空はくもりあひつつ」という歌があ

る。

二五五 おほぞらはこひしき人のかたみかはおもふごとにながめらるむ  
さかゐの人ざね

【異同】ナシ

【現代語訳】大空は恋しい人の形見だろうか。いや、そうでもないのに、どうして物思いにふけるたびに大空が自然に眺められるのだろう。

【語句】○おほぞら 大空。空の広さ、はてしなさを強調している語。「おほ空はくれゆく秋のかたみかはをしむ袂もうちしぐれつつ」(後鳥羽院御集・八四七)。

【所載】古今集・恋四・七四三

【参考】作者名「さかゐの人ざね」(酒井人真)は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

二五六 おもひやるこゝろしそらになりぬればながむるかたにゆきもあふらん

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたへの思いを馳せた心が空に行ってしまい、私の心も上の空になってしまいましたので、私が物思いにふけて見つけていると、行き逢うこともあることでしよう。

【語句】○おもひやる 空に思いを馳せそこでの邂逅を願うという発想は「おもひやる心のそらにゆきかへりおぼつかなさをかたらししかば」(後拾遺集・七三二)や「思ひやる心はそらにあるものをなどか雲ぬにあひ見ざるらん」(新古今集・一二四九・熙子女王、朱雀院御集にも)などに見られる。○こゝろしそらに 「空」は、心を擬人化して空に在るということと「上の空」を掛ける。「おもひやる心のそらになりぬればけさはしぐるとみゆるなるらん」(蜻蛉日記・一七)。○ながむるかたに 空へ行ってしまった自分の心を「ながむる」という。

【所載】ナシ

二五七 おほぞらにわがおもふ人はやどらなむながむるかたにゆきもあふやと

【異同】ナシ

【現代語訳】大空に、私の思っている人はとどまっていほしいものです。私の物思いにふけているところで行き逢うこともあるうかと思えます。

【語句】○わがおもふ人 私がい思を寄せている人。「月草のうつろひやすく思へかも我が思ふ人の言も告げ来ぬ」(万葉集・五八六(旧五八三))、「名にしおはばいざ事とはむ宮ごどりわが思ふ人はありやなしやと」(古今集・四一一)。○やどらなむ 「なむ」は他への願望を表わす終助詞。空での邂逅を期待して、相手へ呼びかけている。自身の心が空へ行ってしまったとする前歌とは逆に、ここではまだ空にさまよい出る以前の段階。○ながむるかたに 新編国歌大観(CD-ROM版)によると奈良・平安時代での「ながむるかた」の使用例は範永と俊成に各一例あるのみ。空を舞台としていることや末句の「ゆきもあふらん」「ゆきもあふやと」の類似も併せ考えると、二五六番歌と非常に近いところで詠まれたもののように思われる。

【所載】ナシ

二五八 おほぞらに我よぶ人もきこえぬにものおもふことになぞといはるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】大空で私を呼ぶ人の声も聞こえないというのに、物思いをすることに「あなたですか」と口に出してしまうことです。

【語句】○なぞ 「どうして」の意。「篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ」(古今集・五二九)。ここでは「我」に対比させ、「汝(な)」を掛けて解しておく。○いはるゝ 「るゝ」は自発。問いかけられてゐるわけでもないのに思わず口に出してしまう。

【所載】ナシ

二五九 あまぐものよそなるおもひつけしよりむなしきそらになりわたるかなきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】空に浮かぶ雲のように遠くにゐる人に思いを寄せた時から、何もない大空のように私の心もなつて

しまったことだ。

【語句】○あまぐものよそ 空に浮かぶ雲のように遠く。「天雲の外に見しより我妹子に心も身さへ寄りにしものを」(万葉集・五五〇(旧五四七))、「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから」(古今集・七八四)。○むなしきそら 漢語「虚空」の訓読。何も無い大空。自分の今の心情を喩える。「わがこひはむなしきそらにみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし」(古今集・四八八)。○なりわたるかな 自分の気持ちは「あまぐものよそなる」所へ行ってしまったので何も残っていない状態をいう。傍記異文「なきわたるかな」では、何も無い大空に向けて泣き続けている状態を表わす。

【所載】ナシ

二六〇 きみによりうきたるものをおもふにはこゝろもそらになりぬるものを

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたのせいであつらい物思ひをしているので、心までもが上の空になつてしまったことだなあ。

【語句】○きみにより あなたによつて。あなたのせいだ。「君により我が名はすでに龍田山絶えたる恋の繁きころかも」(万葉集・三九五三(旧三九三))、「君によりわがなは花に春霞野にも山にもたちみちにけり」(古今集・六七五)。○うき つらいの意の「憂き」に「浮き」を掛ける。「浮き」は「そら」の縁語。「人しれずうきたるこひをするひととそらふくかぜといづれまされり」(忠岑集・一〇二、躬恒)。○こゝろも 物思ひが「うき」て空にあるばかりか、心までもが、の意。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 青木〕

二六一 ひさかたのあまのそら<sup>つイ</sup>にもすまなくにひと<sup>もとかた</sup>はよそにぞおもふべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】遠い空の彼方に住んでいるわけでもないのに、あの人は、私のことをまったくかわりのない人と思つてゐるようだ。



【語句】○ひさかたの 天・雨・日・月・雲・光などを導く枕詞。○すまなくに 住んでいるわけでもないのに。主語を第四句の「ひと」とみる説（新編日本古典文学全集『古今和歌集』もある。○ひと 恋人など、特定の人を指す。○よそにぞおもふべらなる 「よそにおもふ」は、自分とは関係ないものと思う意。恋歌ではしばしば恋人との隔たりを表す語となる。「昨日までよそに思ひしあやめ草けふわが宿のつまと見るかな」（拾遺集・一〇九）。なお「べらなり」は、推定された状態を表す助動詞で、……のようすだ、……らしい、……するそうだ、の意。

【所載】古今集・恋五・七五一／元方集・三／新撰和歌・二〇四／綺語抄・五  
【参考】作者名「もとかた」は所載欄の文献に一致する。

## てるひ

二六二 あさひこがさす<sup>かげ</sup>やをかべのまつがえ<sup>のはイ</sup>のいつともしらぬこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】朝日がさす岡辺の松の枝がいつも変わらないように、絶えざる恋に、私も身を焦がしていることだ。

【語句】◎てるひ 「日の光」はもちろん、「朝日」や「入り日」「夕づく日」なども該当するが、「昼」、暮れる「日」「春の日」、あるいは単に「春」などもこの項には含まれており、必ずしも、照り輝く太陽、という意味ではなさそうである。○あさひこが 朝の太陽が。「あさひこ」は、朝日を擬人化し、親しみをこめた表現。「わが駒は早くゆかなん朝日子がやへさす岡の玉笹の上に」（拾遺集・五八四）。○まつがえの 松の枝が。松は常緑なので季節の区別がつかない、そこから、上三句が「いつともしらぬ」を導く序詞となる。○いつともしらぬ ひとつとわらない。いつもいつも。

【所載】古今六帖「ゆふづくよ」三五五／古今集・恋一・四九〇／猿丸集Ⅰ・二〇／猿丸集Ⅱ・一九／綺語抄・一六／近代秀歌・七三

【参考】古今六帖三五五番歌は「ゆふづくよさすやをかべのまつのはのいつともわかぬこひもするかな」という形になっており、古今集なども同じである。当該歌だけが特殊な本文ということになる。なお猿丸集にも載るが、古今集では「よみ人知らず」歌。

二六三 はるのひのゝどけきときにこぐふねはみなそこさへにしづかなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】春の日ののどかな時に漕ぐ舟は、水底までも静かなことであつた。

【語句】○みなそこさへに 水の底までも。「さへに」は添加の副助詞。「今はとてわが身しぐれにふりぬれば言の葉さへにうつるひにけり」(古今集・七八二)。

【所載】公忠集Ⅰ・三七／公忠集Ⅱ・五

【参考】公忠集には「春の日ののどけき浦をこぐ舟はみなそこさへぞしづかなりける」とあり、中宮の賀における屏風歌である。

二六四 くもはらふてるひもくもるやまなればあかきいせに月もみえぬなるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】雲を払いのける、照る日も曇るような山なので、明るいのにも見えないのでしょうか。

【語句】○くもはらふてるひもくもるやま 意味不明。伊勢集Ⅰには「……てる日こもれるやま」とあり、それによれば、雲を払いのける、照る日が籠もっている山なので、明るくて月も見えないのでしょうか、の意となり、一応意は通じるように思われる。参考欄参照。

【所載】伊勢集Ⅰ・二四六／伊勢集Ⅱ・二四七／伊勢集Ⅲ・二四六

【参考】非常に解しにくい歌だが、伊勢集Ⅰによれば、「白雲のたなびきにけるみ山には照る月影もよそこにこそ聞け」の返歌となっていて、伊勢集Ⅱには「仁和寺なる人の」との詞書がある。仁和寺とはかつての伊勢の恋人であつた宇多法皇の住まわれているところである。白雲のたなびく山では、照る月影も今はよそごとに聞くばかりだ、という歌の「照る月影」は暗に伊勢を指し、返歌の「照る日籠もれる山」とは法皇の御所である仁和寺を指す、と説くのは関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』である。歌本文は伊勢集Ⅰ、詞書本文は伊勢集Ⅱという、系統の異なる本文を取り合わせた上での解に難はあるが、ともかく六帖本文のままでは解しにくい。なお、作者名「いせ」は、伊勢集によっても確認される。

二六五 たわすれていをぞねにけるあかねさすひるはさばかりおもひしものを

【異同】ナシ

【現代語訳】うっかり忘れて、寝込んでしまったことだ。昼のうちはあれほど思っていたのに。

【語句】○たわすれて 「た」は接頭語。忘れて。「ぬばたまのその夜の梅をたわすれて折らず来にけり思ひしものを」(万葉集・三九五(旧三九二))。○いをぞねにける 「い」は眠る意の名詞。「いをぬ」「いもねられず」などと、寝る意の動詞「ぬ」とともに用いられることが多い。○あかねさす 日・昼・光などを導く枕詞。

【所載】 綺語抄・一〇

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

二六六 ひしくればいざとくねなむなつごろもぬぐかとすればあけぬといふよに

【異同】ナシ

【現代語訳】日が暮れたらさあ早く寝てしまおうよ。夏衣を脱いだかと思うと明けてしまうという(短い)夜に。

【語句】○ひしくれば 日が暮れたら。仮定条件。「し」は強意。○ねなむ 「ね」は動詞「寝」の連用形。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「む」は勧誘の意を表す助動詞。○なつごろも 夏の衣装。夏に着る着物。○ぬぐかとすればあけぬといふよに 暮れたかと思うとすぐに明けてしまう夏の夜の短さを誇張した表現。「夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのめ」(古今集・一五六・紀貫之)と同じ趣向。

【所載】ナシ

二六七 ともにこそ花をもみむとまつ人のこぬものからにをしき春かな

【異同】ナシ

【現代語訳】一緒に花をも見ようと待つ人は来ないにきまつているけれど、(過ぎ去ってしまったのが)惜しい春ですよ。

【語句】○こぬものからに 来ないにきまつているけれど。「ものから」は確定と考えられることの逆接を表す。……だけでも。「来めやとは思ふものから蛸の鳴く夕暮は立ち待たれつつ」(古今集・七七二)。所載欄の後撰

集・貫之集では「こぬものゆゑに」。

【所載】後撰集・春下・一三八／貫之集Ⅰ・八三九

【参考】当該歌がなぜ「てるひ」の項にあるのか、不審。

二六八 いりひさすときぞかなしきむらとりのをのがちりぐしらぬとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】入目がさす時に心が痛みますよ。（朝立つときは）群がっていた鳥が、めいめい散り散りになつて  
いるのを知らないと思うので。

【語句】○かなしき 心が痛む。切ない。悲しい。「かなし」はしみじみと深く感じて心が強く揺り動かされる  
さまを広く表現する語。○むらとり 群がっている鳥。「風わたる梢よりたつむら鳥のおりある見れば木の葉な  
りけり」（夫木抄・六四九一）。

【所載】ナシ

二六九 いづこにかやどりとるらんあさひこがさすやおかべのたまざゝのうへに

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人はどこに宿をとっているのでしょうか。朝日が、丘のあたりの美しい笹の上に射していますよ。

【語句】○あさひこ 朝日。朝の太陽。「こ」は親しみの意を表す接尾語。○たまざゝ 「たま」は美称の接頭  
語。「わが駒ははやくゆかなんあさひこがやへさすをかのたまざさのうへに」（拾遺集・神楽歌・五八四）。

【所載】古今六帖「やどり」一三二一

二七〇 みねたかきかすがの山にいづるひはくもるときなくてらすべらなり  
ないしのすけよるか

【異同】ナシ

【現代語訳】峰高くそびえる春日山から昇る太陽は、曇る時もなくずっと地上を照らすことでしよう。

【語句】 ○ないしのすけよるか 藤原因香。生没年未詳。寛平九（八九七）年従四位下掌侍となり、のちに典侍となる。古今集に四首、後撰集に一首入集。○かすがのやま 藤原氏の氏神である奈良の春日大社の背後の山。

【所載】 古今集・賀・三六四／新撰朗詠集・六二八

【参考】 作者名「ないしのすけよるか」は所載欄の文獻に一致する。古今集の詞書によると醍醐天皇の皇子保明親王の誕生に際して詠まれた歌。保明親王の母は藤原基経女の中宮穩子。藤原氏の女性が生んだ皇子を春日山から出る日にたとえた。

〔以上五首担当 三浦〕

二七二 こひつゝもけふはくらしつあかねさすあすのはるひをいかでくらさむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】（あの人を）恋い慕いながら今日はなんとか暮らした。しかし、明日の長い春の一日をどのようにして過ごそうか。

【語句】 ○こひつゝも 恋しく思いながらも。○あかねさす 「はるひ」の「ひ」にかかる枕詞。○はるひ 春の一日。昼の長い春の日中をいうことが多い。

【所載】 古今六帖「かすみ」六三〇／拾遺抄・恋上・二四八／拾遺集・恋一・六九五／万葉集・一九一八（旧一九一四）恋乍毛 今日者暮都 霞立 明日之春日乎 如何将暮 コヒツツモケフハクラシツカスミタツアスノハルヒイカデクラサム こひつゝもけふはくらしつあすみたつあすのはるひをいかにくらさむ／人麿集Ⅰ・一八九／人麿集Ⅱ・二八七／赤人集Ⅰ・一九五／赤人集Ⅱ・七六／赤人集Ⅲ・八四／綺語抄・一三四／桐火桶・五【参考】 類想の歌として「恋ひつゝもけふはあらめどたましくしげ明けなむあすをいかにくらさむ」（万葉集・二八九六（旧二八八四））、「恋ひつゝもけふは有りなまたましくしげ明けんあしたをいかでくらさむ」（拾遺集・六九六）等がある。

二七二 くもゝなくなぎたるあさのてるひにもおもはれまさるわれやなになり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 雲も無く穏やかに晴れた朝の輝く日の光にも、おのずと悩みが増してくる、この私は、いったい何

なのだろう。

【語句】○くもゝなくなぎたるあさ 雲も無く穏やかな朝。「雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ」(古今集・七五三)。○おもはれまさる 自然にも思いが募ってくる。「れ」は自発の助動詞。「思はれまさる」に「晴れまさる」を掛けている。○われやなになり 私はいったい何なのだろう。山下道代「われやなになり」(『みみらくの島』青簡舎 二〇〇八年)。

【所載】ナシ

二七三 おくやまのいはかげもみぢゝりぬべくてるひのひかりみるときなくて  
せきを

【異同】いはかけもみち―岩垣もみち(大)

【現代語訳】山の奥深くの岩の蔭の紅葉は散ってしまうだろう、明るく照る日の光を見る時もなくて。

【語句】○せきを 藤原閑雄。参議真夏の五男。平安初期の歌人・漢詩人。東山進士と呼ばれた。延暦二四(八〇五)年〰仁寿三(八五三)年。○いはかげもみち 岩蔭にあつて、光が当たらない紅葉。作者自身の暗喩。○てるひのひかりみるときなくて 明るく照る太陽の光を見るときもなくて。「てるひのひかり」は、朝廷の恩顧の暗喩。

【所載】古今集・秋歌下・二八二／家持集Ⅰ・二一六／家持集Ⅱ・三〇三／綺語抄・一五七／和歌童蒙抄・六八八／古来風体抄・二五三

【参考】作者名「せきを」は古今集に一致する。

二七四 つくばねの雲けふまでにてるひにもわがそでひめやいもにあふまで  
つイ

【異同】ナシ

【現代語訳】つくば山の峰の雲が今日程までに強く照り輝いている日であっても、私の袖が乾くだろうか、いや乾くことはない。愛しいあの女性に会うまでは。

【語句】○つくばね 常陸国の歌枕。筑波山。○けふまでに 「今日までに」と解しておく。諸本みな「ふ」のところ「つイ」の傍記あり。これに拠って「消つまでに」と読んだ方が、意味はわかりやすい。○わがそで

ひめや 私の袖が乾くだろうか、いや乾くことはない。「ひめや」の「ひ」は上一段活用動詞「乾（ひ）」の未然形、「め」は推量の助動詞「む」の已然形、「や」は反語を表す助詞。○いも 男性から妻や恋人を親しんで呼ぶ語。

【所載】ナシ

【参考】一〇七番歌「みな月のつちさへわれてる日にもわが袖ひめやいもにあはずて」と、下句が非常に類似している。

二七五 ながむればくるしきものを山のはにいりひはやさしはやくもれなん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】（照る日の昼間）物思いに耽って過ぎすつらいもののな（なかなか暮れない）。入り日はやく射して一刻も早く暗くなってほしい。

【所載】○ながむれば もの思いにふけていると。「ながむ」は、ぼんやりとももの思いにふけるさまを表わす。○いりひはやさし 「入り日はやく射し」と解しておく。入り日はやく射して。○はやくもれなん 解しにくい句だが、はやく暮れ方になって暗くなってほしい、の意と解しておく。この歌の下句は、貫之集Ⅰの「いり日とくさはやくも暮れなん」の方がわかりやすい。

【所載】貫之集Ⅰ・六六三

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

二七六 ひのひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとも花さきにけり  
ふるのいまみち

【異同】ナシ

【現代語訳】日の光は藪をも分け隔てなくさして、古く忘れ去られたようなこの里にも花が咲いたことだよ。

【語句】○ひのひかり 日光。所載欄の古今集では「石上のなむまつが宮づかへもせで石上といふ所にこもり侍

りけるを、にはかにかうぶり給はれりければ、よろこび言ひ遣はすとてよみて遣はしける」と詞書にあり、官途が開けたのを機に歌を送る状況から、この日の光は天皇の恩恵の比喩となる。○いそのかみ 奈良県天理市布留町、石上神宮の周辺。「ふる」に掛かる枕詞。古今集では、なむまつが籠もっていた地名でもある。○花 当該歌では実際の開花を指すが、古今集ではそこに、祝意を託す。

【所載】古今集・雑上・八七〇／三五記・二三五

【参考】作者名「ふるのいまみち」は、所載欄の文献に一致する。布留今道は寛平十（八九八）年に三河介。従五位下の記録が確認される。

なお、古今集の詞書に沿って解釈すれば「天皇の恩沢はどんな処にも分け隔てなく及んで、石上のあなたの許にも喜びの花が咲いたことですね」となる。

二七七

つねよりものどけかるべきはるひすらひかりに人のあはざらめやは

太政大臣実頼

【異同】ナシ

【現代語訳】いつもよりもゆっくりと過ぎていくはずの春の日なのだから、その春の光に人（あなた）が出会わないことがあるでしょうか。いや、きっと出会いますよ。

【語句】○つねよりものどけかるべき 所載欄の後撰集によれば、当該歌は「弥生にうるふ月ある年、司召のころ、申文にそへて左大臣の家につかはしける」の詞書を持つ紀貫之の「あまりさへありてゆくべき年だにも春にかならずあふよしもがな」の返歌。左大臣は実頼のこと。つまり閏三月によつて春が四か月間と長くなっているのので、「常よりものどけかるべき」である。なお、閏三月がある年は、貫之と実頼との関係から考えると、天慶五（九四二）年となる（新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注など）。ちなみに、凡河内躬恒には「閏三月侍りけるつごもりに」の詞書で、「つねよりものどけかりつる春なれど今日のくるはあかずぞありける」（拾遺集・七八）がある。○はるひすら 「春日」とは「春の一日」または「春の日差し」を意味する。ここでは前者。「春日すら」は、「春日すら田に立ちつかる君はあはれ若草のつまなき君が田に立ちつかる」（万葉集・一二八九（旧一二八五））など例はあるものの、解しにくい。後撰集の「春なれば」のほうが歌意が通りやすいので、現代語訳にはこちらを用いた。

【所載】後撰集・春下・一三六



【参考】作者名「太政大臣実頼」は藤原実頼のこと。清慎公と諡された。所載欄の後撰集における作者名「左大臣」は、後撰集成立時の官職。

二七八 日のひかりあひみてうとむあさつゆのきえぬさきにもあひみてしがな

【異同】ナシ

【現代語訳】日の光を受けることを嫌う朝露が消えないうちにまた（あなたに）逢いたいことです。

【語句】○うとむ 嫌がる。この歌は『新続古今集』に収められているが、そちらの「消えむ」のほうが意が通りやすい。○あひみてしがな 逢いたいものだ。

【所載】新続古今集・恋二・一一五五

二七九 ゆふづくひさすやをかべのつくるやのかたちをよしみしかぞよりくる

【異同】ナシ

【現代語訳】夕日の射す岡に造った建物の形がいいのでこうして寄ってくるのだ。

【語句】○ゆふづくひ 夕日。○をかべにつくるや 岡の辺りに作った建物。『万葉集』では「かはべにつくるや」。○かたちをよしみ 「容貌（かたち）をよしみ」。姿が良いので。上三句はこの後を導く序詞。○しかぞよりくる このように寄ってくる。万葉集現訓では「うべよそりけり」。

【所載】古今六帖「さふの思」二一五九／万葉集・三八四二（旧三八二〇）夕附日 指哉河辺尔 構屋之 形平宜美 諾所因来 ユフヅクヒサスヤカハヘニツクルヤノカタチヲヨシミシカゾヨリクル ゆふづくひさすやはにつくるやのかたをよろしみうべよそりけり

二八〇 草も木もおもひしあればいづる日のあけぐれこそはたのむべらなれ

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】草も木も思いを持っているので、日が出る、その直前の暗い頃を頼りにしているのです。（同じよ

うに、とるにたりない私共も、あなたさまのご威光に浴せる夜明け頃を頼みにしております」

【語句】○草も木も 草木に人々を喩える。この歌は、貫之集によると「延長五年九月右大臣殿前裁合のまけわざ」の際のもので、この前裁合（せんざいあはせ）の負態（まけわざ）に関わった人々を指す。前裁とは建物の前庭や中庭に草木を植え込むことで、前裁合とは実際の植え込み以外に州浜台（すはまだい）の上に草木を造花などで作り込み、これを物合わせとして行った。○いつる日 この歌では権力者の威勢を示す。○あけぐれ 明け暗とも明け暮れとも取れるが、ここでは前者。夜明け前の暗い状態を指す。「女のもとより、くらきにかへりてつかはしける」の詞書で源順は「あけぐれのそらにぞ我は迷ひぬる思ふ心のゆかぬまにまに」（拾遺集・七三六）と詠んでいる。○たのむべらなれ 「日がでない」と『思ひ』はなくなってしまうので、日が出ようとする明け暗を頼りとする」（田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』風間書房、一九九七年）。

【所載】貫之集Ⅰ・六八八／貫之集Ⅱ・七三

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本〕

二八一 われおもふきみならんとや山のはにいるひを見つゝいでゝゆかめや

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしを思っ下さるあなたにちがいないと（一刻も早く）日が山の端に入るのも（もどかしく夜をまちかねて）、家を出て（あなたに会いに）行けるだろうか、行けはしない。

【語句】○山のはにいるひ 「山のは」は山の端。日が入る、また月が出るところとして歌に詠まれる。山の端に入る太陽。「あふことをこよひとおもはばゆふづくひいるやまのはもうれしからまし」（金葉集二度本・四一四・雅定）。○いでゝゆかめや 家までで行けるか。いや行けない。「め」は推量・仮定の助動詞「む」の已然形。「や」は反語。

【所載】ナシ

【参考】夕刻恋人に会うため家を出たくとも出来ないことを歌ったと解した。

はるの月

二八二 あさがすみはるひのくればこのまよりいさよふ月をいつしかも見ん

【異同】ナシ

【現代語訳】朝霞が立ち、春の夕暮れになったら、木の間よりなかなか出てこない月を、早く見たいものです。  
【語句】◎はるの月 春の月。この前の歌群が「照る日」であつたのに対し、以下「月」の歌は春夏秋冬に分ける。○あさがすみ 朝霞。朝立つ霞。秋にも春にもいう。「秋の田の穂の上に霧らふあさがすみいづへの方にあが恋ひやまむ」（万葉集・八八）。○はるひのくれば 春の日の暮れるならば。「くれば」は動詞「暮る」（下二段）の未然形に「ば」の接続した形。○いさよふ月 出るのをためらっているような月。「いさよふ」は進もうとして進めない状態をいう。○いつしかも いつか早く。

【所載】万葉集・一八八〇（旧一八七六）朝霞 春日之晩者 従木間 移歴月乎 何時可將待 アサカスミハルヒノクレハコノマヨリウツロフツキノイツシカマタム あさがすみはるひのくればこのまよりうつるふつきをいつとかまたむ／人麿集Ⅲ・七／赤人集Ⅰ・一六九／赤人集Ⅱ・五一／赤人集Ⅲ・五七／和歌童蒙抄・二五

二八三 はるくれば葉がくれおほき夕づくよおぼつかなしもはなかげにして

【異同】ナシ

【現代語訳】春となると（木の葉がしげり）葉に隠れた（見えない部分が）多い月、（はつきりとみたいと思つても）なかなか見えない、花にかくれがちで。

【語句】○夕づくよ 夕月夜。夕月のこと。夕月の光。「春霞たなびく今日の夕月夜清く照るらむたかまつの野に」（万葉集・一八七八（旧一八七四））。○おぼつかなし 見たい、聞きたいと願っているのに、かなえられない時のもどかしい気持ちをいう。「夕月夜おぼつかなきをたまくしげふたみの浦はあけてこそ見め」（古今集・四一七）。○はなかげ 花の咲く木の下。

【所載】後撰集・春中・六二／万葉集・一八七九（旧一八七五）春去者 紀之許能暮之 夕月夜 鬱束無裳 山陰尔指天 ハルサレバキノコノクレノユフツクヨオボツカナシモヤマカゲニシテ はるさればこのくれおほみゆふづくよおぼつかなしもやまかげにして／夫木抄・一五八五／人麿集Ⅲ・九／赤人集Ⅰ・一七一／赤人集Ⅱ・五三／赤人集Ⅲ・五六／綺語抄・一八

二八四 あれたればかげもかくれぬわがやどのはのどかなる春のよの月

【異同】ナシ

【現代語訳】荒れていて（遮るものがないため）くつきりとさやかに見える我がやどは、「庭のどかなる」（とでもいうべき）春の夜の月（の欠くところなさよ）。

【語句】○のどかなる 気象や自然現象に用いるのは後代の用例。平安時代の用例は天皇の治世の安泰であることという場合に限られる。従ってここでは庭を称して「のどかなる」といったところに詠み手の興じるころがある。「のどかなる光をそへて池水にちよとすむべき秋の夜の月」（続拾遺集・七四〇・俊忠）、「あまつ空けしきもしるし秋の月のどか成るべき雲の上とは」（拾遺愚草・九九七）。

【所載】ナシ

二八五 わがやどにさきたるむめの月きよみよな／＼見せん君をこそまて

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家に咲く白梅、月の明澄なること、夜毎あなたにこそお見せしたいとお待ちしていますのに。（おいでになりません）。

【語句】○月きよみ 月が清らかなので。「きよみ」は形容詞「清し」の語幹に接尾語「み」のついた形。原因・理由を表す。……なので。……のゆえに。○よな／＼ 夜な夜な。毎晩毎晩。夜毎に。○君をこそまて 「こそ」は係助詞。「まて」は「待つ」の已然形。逆説の意味が生まれる。

【所載】続古今集・春上・六八／万葉集・二三五三（旧二三四九）吾屋戸尔 開有梅乎 月夜好美 夕夕令見 君乎祚待也 ワガヤドニサキタルウメヲツキヨミヨナヨナミセムキミヲゾマツヤ わがやどにさきたるうめをつくよよみよひよみせむきみをこそまて／人麿集Ⅰ・一六六／人麿集Ⅱ・一一／家持集Ⅰ・一九／家持集Ⅱ・一九／万代集・一二一

〔以上五首担当 平野〕

## 夏の月

二八六 なつのよのしもやをけるとみるまでにあれたるやどをてらす月かげ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の夜の霜が置いたのかと思うほどに、荒れた家の庭を照らす白じろとした月の光であるよ。

【語句】◎夏の月 二八九番歌のように短か夜との関係で詠まれることが多いが、例歌では明るい月光などもみられる。○しもやをける 霜や置ける。霜が置いたのかしら。夏の月光を霜に見立てた例として「つきかげになべてまさこの照りぬれば夏の夜ふかく霜かとぞみる」（月照平砂夏夜霜）千里集・三三二）などがある。○とみるまでに……と思うほどに。「あさぼらけ有明の月と見るまでによしのの里にふれる白雪」（古今集・三三二）を踏まえ、冬を夏に換え、月の位相を非現実から現実のものに換えた趣向。○やど 屋敷内の庭。

【所載】新撰万葉集・四五／新撰和歌・一五一／万代集・七三〇／寛平御時后宮歌合・五〇

二八七 夏の月ひかりをましてゝるときはながるゝ水にかげろふぞたつ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の月がひとときわ光を増して照るときは、流れる水に光がほのめいて、ゆらゆらとかげろうが立ちのぼるように見えるよ。

【語句】○かげろふ 「かぎろひ」の転。地面から暖かい空気がゆらゆらと立ちのぼる現象。ここでは水にゆらめく月光の比喩。

【所載】新撰万葉集・二八七／興風集Ⅰ・二六／興風集Ⅱ・三四／寛平御時后宮歌合・七四

二八八 かさゝぎのみねとびこえてなきゆけば夏のよわたる月ぞかくるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】カササギが峰を飛び越えて鳴きながら遠くへ行くのを、目で追っていると、夏の短か夜、空を渡って行く月はもう西の山の端にかくれてしまふことだ。

【語句】○かさゝぎ からす科の鳥。鳥よりやや小さく、腹面と肩羽が白、他は黒。○夏のよ 短い夜を意味する。○月ぞかくるゝ 月が西の山の端に沈む。「かささぎ飛びて山の月曙なり」（全唐詩・一函第八冊・上官儀）による（新日本古典文学大系『後撰和歌集』）。

【所載】古今六帖「かささぎ」四四九〇／後撰集・夏・二〇七／新撰万葉集・二八九／夫木抄・一二七一〇／和

歌童蒙抄・七九四／兼載雜談・八

【参考】上句の同じ歌に「かささぎのみねとびこえてなきゆけばみやまくるゝ月かとぞみる」（赤人集Ⅰ・九二、千里集・七三）がある。

二八九 なつのよはまだよひながらあけぬるをくものいづこに月やどるらむ  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の今夜はまだ宵の口だと思っていたら、そのまま夜があけてしまったが、この分では月は西の山に沈むところまで行きつかなかったらう。一体雲の中のどこに宿っているのだらう。

【語句】○よひながら 宵の状態のままで。「よひ」は日が暮れて暗くなった頃から夜中の前まで。○あけぬるを 夜が明けてしまったが。○月やどるらむ 月の擬人化。

【所載】古今集・夏・一六六／新撰和歌・一五九／新撰朗詠集・一四五／深養父集Ⅰ・一一／深養父集Ⅱ・七／時代不同歌合・一三九／後六々撰・七八／百人秀歌・三三／百人一首・三六／近代秀歌・三五／和歌用意条々・九／桐火桶・七一／井蛙抄・一四四

【作者】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

二九〇 こぬ人をしたにしまてば夏のよの月をあはれといひつゝぞをる

【異同】ナシ

【現代語訳】訪ねてこないあの人を、心の中で深く思い待つので、それと人に知られぬように夏の夜の月を、あきれいだ、などと繰り返して言って眺めているのです。

【語句】○したに 心の中で。○あはれ 普通はあまり褒めない夏の月なのに「あはれ」と賛嘆するのである。ああ美しい。○いひつゝぞをる 繰り返し言っては待っていることよ。所載欄の文献は「いはぬ夜ぞなき」が多い。

【所載】拾遺集・雑賀・一一九五／貫之集Ⅰ・八〇／和歌体十種・二三／和歌十体・一〇／三十人撰・一八／三十六人撰・二七／深窓秘抄・七二／奥儀抄・一一四

【参考】作者名はないが貫之の作。延喜一七（九一七）年八月、宣旨による詠進歌。

〔以上五首担当 斎藤・林〕

二九一 ことならばやみにもあらなん夏のよのてる月かげぞ人だのめなる<sup>はい</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】どうせ同じことなら闇夜であって欲しい、夏の夜に照る月の光はかえって虚しい期待を抱かせる。

【語句】○ことならば 「こと」は「如」と同根とされる。どうせ同じことならば。「ことならば咲かずやはあらぬ桜花見るわれさへにしづ心なし」（古今集・八二）。○夏のよのてる月かげ 夏の夜に照る月光。夏の夜の月は、「夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ」（古今集・一六六、古今六帖・二八九）や、「夏の夜の月はほどなく明けぬれば朝のまをぞかこちよせつる」（後撰集・二〇六）など、すぐに明けてしまつてよく見ることでできないものとされるが、この歌は特にそうした意味はない。所載欄の拾遺集では「秋の夜のなぞ月影の」となっており、本来は「秋の夜の月」であつた可能性が高いと考えられる。○人だのめ 人をあてにさせること。実際は期待に反する場合に用いられることが多い。「わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふものぞ人頼めなる」（古今集・五六九）。新日本古典文学大系『拾遺和歌集』脚注は「人目を忍んで訪ねてくる人 wait しているのだから、闇夜であつてほしい」と、人の来ないのを明るい月のせいにする と解するが、「月夜」には男性が訪れるものとされる（古橋信孝『雨夜の逢引』大修館書店、一九九六年）から、「月夜」には人が待たれるから、どうせ来ないものならば闇夜がよい」とする『拾遺和歌集増抄』（未刊国文古註釈大系）の一説をとりたい。

【所載】古今六帖「人を待つ」二八二五／拾遺抄・恋・三六二／拾遺集・恋三・七九六

二九二 さみだれのたそがれ時の月かげのおぼろけにやはわが人をまつ

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨の夕暮れ時に見える月光はぼんやりと霞んではつきりしないが、そんなおろそかな気持ちで私は恋しい人を待っているのではない。

【語句】○さみだれのたそがれ時の月かげの ぼんやりと霞んでいるさまを表す「おぼろ」にかかる序詞。○お

ぼろけにやは「おぼろけ」は、並一通りである、いいかげんだの意で、多く打消、反語表現を伴う文脈で用いられる。反語「やは」によって意味が反転する。○わが人「わが」の「が」を主格とみるが、他にあまり例のみられない表現。躬恒集の三本においても全て「わが」となっている。

【所載】古今六帖「人を待つ」二八三〇／玉葉集・恋二・一三九七／万代集・二一〇四／夫木抄・三〇二七／躬恒集Ⅱ・二七一／躬恒集Ⅳ・九四／躬恒集Ⅴ・二二〇

### 秋の月

二九三 このまよりもりくる月のかげみればこゝろづくしのあきはきにけり

【異同】作者名ナシ―いせ（御・桂・大）

【現代語訳】木々の隙間から漏れてくる月の光を見ると、もの思いの限りを尽くす秋がやってきたなあと思うのである。

【語句】◎秋の月 「月」は四季それぞれと結びつくが、秋の月が特に趣深いものとして詠まれるのは拾遺集以後。この歌はその先蹤とされる。○こゝろづくし 心尽くし。もの思いの限りを尽くさせる。秋のもの思い、「悲秋」は、宋玉の「九弁」、潘岳の「秋興賦」などの漢詩に学んだ発想（小島憲之『国風暗黒時代の文学』中（下・Ⅰ）塙書房、一九八五年）。片桐洋一『古今和歌集全評釈』には「思い悩んで心を使い果たして何も考えられなくなる」とある。「思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽くして恋ふるわれかも」（万葉集・六八五・旧六八二）、「渡りてはあだになるてふ染河の心尽くしになりもこそすれ」（後撰集・一〇四七）など恋歌に用いられる場合が多い。月をみて秋のもの思いを尽くす歌としては「月見ればちぢにものこそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」（古今集・一九三）がよく知られている。

【所載】古今集・秋上・一八四／新撰和歌・二四／小町集Ⅰ・一〇五／古来風体抄・二四四／桐火桶・七七

【参考】底本に作者名はないが、他の三本には「いせ」とある。伊勢集にはみられず、古今集では「よみ人知らず」である。

二九四 こころもではさむからねども月かげをたまらぬあきの雪かとぞみる

【異同】ナシ



【現代語訳】袖のあたりが寒く感じられるわけではないが、袖に映る月光を積もることのない秋の雪かと見まがうのである。

【語句】○ころもで 「袖」の歌語。上二句は「秋田刈る飯廬をつくり我が居れば衣手寒く露ぞおきける」（万葉集・二一七八・〈旧二二七四〉）、「夕されば衣手寒しみ吉野の吉野の山にみ雪降るらし」（古今集・三二七）といった万葉集以来の「衣手寒し」という常套表現をもとにした言い回し。○たまらぬ 積もらぬ。○あきの雪 「月光」を「秋の雪」に見立てる趣向。「雪」を「月光」に見立てた「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪」（古今集・冬・三三三）とは逆の趣向。類歌に「ひく琴の音のうちつけに月影を秋の雪かとおどろかれつゝ」（貫之集・四四五）がある。

【所載】後撰集・秋中・三二八

【参考】作者については二九八番歌参照。

「月光」を「雪」に見立てるのは漢詩文によく見られる趣向だが、特に「秋の雪」という語は、「遍覧古今集、都無秋雪詩（遍く古今の集をみるに、都て秋雪の詩なし）」（和劉郎中望終南山秋雪・白氏文集・二六二四）という白詩語を利用したものという（渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一年）。

二九五 ちるもみぢよるもみよとや月かげのこずゑのこらずてりわたるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】散る紅葉を夜も見よというので、月光が稍全体余すところなく照りわたっているのだろうか。

【語句】○ちるもみぢよるもみよとや 散る紅葉を夜も見よというので……か。「や」は疑問。散る紅葉が夜見えるほど月影が明るいとするのは、「佐保山のははそのもみぢ散りぬべみ夜さへ見よと照らす月影」（古今集・二八一）、「照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉を夜もみよとか」（後撰集・四二八）など例が多い。○てりわたるらん 「らん」は疑問の「や」を受け、現在の事実について、その原因・理由を推量する。「ひさかたの月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ」（古今集・一九四）。

【所載】ナシ

【参考】作者については二九八番歌参照。

〔以上五首担当 中野〕

二九六 秋の月ひかりさやかにもみぢばのおつるかげさへみえわたるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月の光が明るく冴えて、もみじ葉の散りゆく姿まで見えわたることよ。

【語句】○さやかに 清かに。はつきりと明るく冴えているさま。○かげさへ 「かげ」は光によって見える物の形や姿のこと。「さへ」によって、「もみぢばのおつるかげ」だけでなく、視界のすべてのものが「さやかにみえわたる」さまを詠み出している。○みえわたる 広い範囲にわたってずっと見える。

【所載】後撰集・秋下・四三四

【参考】後撰集では、「延喜御時、秋歌めしありければ 貫之」となっている。作者については二九八番歌参照。

二九七 つねよりもてりまさるかな山のはのみぢをわけていづる月かげ

【異同】ナシ

【現代語訳】いつもより美しく照り輝いているなあ。山の端の紅葉を押し分けながら昇って出てくる今夜の月の光は。

【語句】○山のはのもみぢをわけていづる月かげ 山の端を出る月が峯の紅葉を分けて出るから、つねよりも照りまさる、とした屏風歌らしい趣向。参考欄参照。

【所載】拾遺抄・雑下・五〇三／拾遺集・雑上・四三九／貫之集Ⅰ・四〇／和歌童蒙抄・三二一

【参考】延喜十四年十一月十九日（貫之集Ⅰが十二月とするは誤）醍醐第一皇女勸子内親王裳着のときの屏風歌。この歌の作者については、二九八番歌参照。

二九八 よにかくれきつるかひなくもみぢ<sup>もイ</sup>ばの月もあかくもてりまさるかな

已上五首貫之

【異同】ナシ

【現代語訳】夜の暗さにかくれてきたかいもなく、もみぢ葉に照る月もいっそう明るく照りまさることだ。

【語訳】○よにかくれ 夜に隠れ。夜の暗さにかくれて。○もみぢばの月もあかくもてりまさるかな 紅葉した

もみぢ葉に照る月も、いつそう明るく照りまさることだ。「もみぢばの」は文脈上「てりまさるかな」へつづく。「の」は主格を表わす。所載欄の貫之集Ⅰでは「もみぢばも月にあかくぞ」となっており、その方が歌意はよく通る。

【所載】貫之集Ⅰ・二四七

【参考】貫之集Ⅰの五〇二番には、「人しれずきつる所に時しもあれ月のあかくもてりわたるかな」という非常に近似した歌がある。当該二九八番歌は延長六（九二八）年、貫之集Ⅰの五〇二番歌は天慶五（九四二）年の作。どちらも貫之の屏風歌。

二九四番から二九八番までの五首を「已上五首貫之」としているが、二九五番を除く四首は所載欄の文献でも貫之の作となっている。

二九九 もゝしきのおほみやながらやそしまをみるこゝちするあきの夜の月  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】ここはもしきの大宮の内でありながら、あたかも大海原に浮かぶ八十島を見ているような気分になる秋の夜の月であることよ。

【語句】もゝしきの「おほみや」にかかる枕詞。○やそしま たくさんの島々。参考欄に述べるように、この歌の詠まれた賀は、延喜十九（九一九）年、九月十三夜の月をめでの催しであったと思われる。「松浦沙」のある前栽を、海原に浮かぶ島々と見立てての詠。

【所載】拾遺集・雑秋・一一〇六／躬恒集Ⅰ・二二〇／躬恒集Ⅲ・一二六／躬恒集Ⅳ・一〇／躬恒集Ⅴ・一〇五／袖中抄・九二三

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

躬恒集Ⅳ・一〇番歌の詞書には、「清涼殿の南のつまにみかは水流れいであり、その前栽に松浦沙あり、延喜九年九月十三日に賀せしめたまふ、題に、月にのりてささらみづをもてあそぶ、詩歌こころにまかす」とある。ただしその年次は、拾遺集や躬恒集Ⅴにより、延喜十九年が正しいと思われる。

三〇〇 しらくもにはねうちかはしとぶかりのかずさへみゆる秋のよのつき

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲のある空に羽を連ねながら飛びゆく雁の、数まで見えるほどにさやかな秋の夜の月であることよ。

【語句】○はねうちかはし 「うち」は接頭語。「かはし」は交はし。羽をまじえ連ねて。

【所載】古今集・秋上・一九一／新撰万葉集・三九四／新撰和歌・四四／和漢朗詠集・二五九／俊賴髓脳・一六二／和歌口伝抄・六

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

三〇一 月みればちづにものこそかなしけれわが身ひとつのあきにはあらねど  
おほえのちさと

【異同】ナシ

【現代語訳】月を見るとあれこれと物悲しい気持ちになるよ。私一人の秋ではないのだけれど。

【語句】○ちづに さまざまに。下句の「ひとつ」と対比。○わが身ひとつのあきにはあらねど 「悲秋」の概念を踏まえた上で「その悲しい秋は我が身だけのものではないけれど」という思いを詠んだもの。「おほかたの秋くるからに我が身こそ悲しきものとおもひしりぬれ」（千里集・三八）。

【所載】古今集・秋上・一九三／是貞親王家歌合・六二／時代不同歌合・一二七／後六々撰・一〇一／百人秀歌・三〇／百人一首・二三／定家十体・二一四／古来風体抄・二四五／西行上人談抄・一〇／近代秀歌・三八／詠歌大概・二七／桐火桶・八〇

【参考】作者名「おほえのちさと」は所載欄の文献に一致する。なお、この歌は、古今集の古注以来、白氏文集・卷十五の「燕子楼中霜月夜 秋来只為一人長」（燕子楼中霜月の夜 秋来りて只一人のために長し）によることが指摘されている。

三〇二 わがやどをてりみつあきの月影はながきよみれどあかずぞありける  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の家を隔々まで照らす秋の月の光は、長い夜の間見ているけれど、それでも見飽きないことだよ。  
【語句】○わがやどを 私の家を。「を」という目的格の格助詞は、第二句の「てりみつ」という四段活用自動詞と整合しないが、諸本のこの部分に異同はない。伊勢集Ⅰではこの部分が不完全であり、Ⅱ・Ⅲでは「わがやど」となっている。ここでは仮に、「てりみつ」を下二段他動詞に置き変えて訳した。○ながきよ 秋の夜長を「ながき夜」と詠んだ。所載欄の伊勢集の詞書によると、八十賀の屏風歌なので、「夜」に「代」を掛けて長寿をことほいだ歌となる。

【所載】伊勢集Ⅰ・一四一／伊勢集Ⅱ・一三九／伊勢集Ⅲ・一三八

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。この歌についての伊勢集の詞書は、人物の呼称について諸本間の異同が大きい。貫之集の詞書に見える呼称など他の資料も参照して検討すると、清和天皇七宮貞辰親王の母、藤原基経女佳珠子の八十賀のために、佳珠子の弟にあたる藤原忠平が伊勢に依頼した屏風歌かと考えられる。参考、山崎正伸『貫之集』における御息所について（『解釈』一九九三年五月）。

三〇三 ひさかたの月のまどかになるころはもみぢゝるともしられざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】月が満月になる頃は、紅葉が散ってもそれとわからないことだよ。

【語句】○ひさかたの 「月」にかかる枕詞。○月のまどかになる 月が満ちて満月になる。伊勢集の詞書には、「円成寺に后宮おはしますおん供に参りて」とある。すなわちこれは伊勢が后宮温子の円成寺行啓に際して詠んだ歌であって、「まどかになる」のところに円成寺の「円成」を詠み込んだものと見られる（関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』風間書房 一九九六年）。○もみぢゝるともしられざりけり 月も紅葉も、どちらも「あかし」なので、月の明るい満月の頃には、紅葉が散っても、紛れてわからないものだったんだあとと詠んだ。「夜にかくれ来るかひなく紅葉ばの月もあかくも照りまさるかな」（古今六帖・二九八）。信明集に「こと御屏風の絵に、もみぢりたるをみる人々」として「ほのぼのとあり明の月の月影にもみぢ吹きおろす山おろしの風」（一八）と見えるように、月と散る紅葉の取り合わせは屏風絵にも描かれる題材だった。なお下句は、伊勢集の本文では、「もみぢはすとしぐれざらん」または「紅葉そむとも時雨ざらん」である。

【所載】伊勢集Ⅰ・三〇九／伊勢集Ⅱ・三〇八／伊勢集Ⅲ・三〇八

三〇四 あきの月ひとつにあらぬものなればなみだをやりてうつしてぞみる

ためイ  
とめイ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月の一つではないもので、涙を袖に流して、そこに映してもう一つの月を見ることだ。

【語句】○ひとつにあらぬものなれば 所載欄の伊勢集では、「ひとへにあかぬものならは」、または「ひとつにあかぬ物なれば」となっている。誤写の可能性もあるが、古今六帖の本文のままで解釈をつけた。○なみだをやりて 涙や露は、「やる」というよりも、「とめる」もしくは「ためる」と詠まれる。「朝ごとに置く露袖にうけためて世のうき時の涙にぞかる」（後撰集・三二五）。伊勢集でも「涙をためて」または「涙をとめて」となっている。ここでは古今六帖の本文により、「涙を遣りて」すなわち、「涙を送って」「涙を流れて行かせて」と解釈したが、「うつしてぞみる」に続くので、結局は、「遣った」涙を、そこ（袖）にためて、水鏡のようにするということになる。○うつしてぞみる 袖に涙をためて月を映して見る。所載欄の伊勢集Ⅰでは「やどしてぞみる」。「あひにあひて物思ふときのわが袖はやどる月さへぬるるがほなる」（伊勢集・二〇八）。

【所載】伊勢集Ⅰ・三〇二／伊勢集Ⅱ・三〇〇／伊勢集Ⅲ・三〇二

三〇五 をとにのみちるときくべきもみぢばをいろしらせつる秋のよの月

かましイ

【異同】ナシ

【現代語訳】散るということを音によつてだけ聞くはずのもみぢ葉を、目に見える色によつて知らせてくれる秋の夜の月であることよ。

【語句】○をとにのみちるときくべき 葉の落ちるのを音によつてのみ聞く。「をと」は「おと」。音。夜の紅葉は暗くて眼に見えにくいから「音にのみ聞く」ことになる。なお「音に聞く」は、噂として聞く、評判として聞く、の意もあり、恋歌などに多く用いられた。○いろしらせつる 目に見える色によつて實際を知らせてくれる、という意味。○秋のよの月 秋の夜の月は明るく照るから、散る紅葉がよく見える、ということ。

【所載】ナシ

【参考】散る紅葉と秋の夜の月とを、恋歌によくある表現を用いて対比的に歌う。

〔以上五首担当 長戸〕

三〇六 まつ人のかげはみえずて秋の夜の月のひかりぞゝでにいりける

【異同】ナシ

【現代語訳】待っている人の姿は見えないで、秋の夜の月の光が涙にぬれた袖に入ってきたことだよ。

【語句】○まつ人のかげ 待っている人の姿。男の来訪を待つ女性の立場での詠。○みえずて 見えないで。「ずて」は打消の助動詞「ず」に接続助詞「て」。「秋はぎをしがらみふせてなくしかのめには見えずておとのさやけさ」(古今集・二二七)。○月のひかり 部屋に差し込む月の光と、訪れない男とを対比している。○ゝ(そ)でにいりける 「ける」とあるので、気が付いたら月の光が袖に差し込むほど時が経ってしまった、の意。所載欄の重之集では「袖に入りぬる」と末尾が異なり、いたずらに時間が経過したことを嘆く。

【所載】重之集・二六五

【参考】作者名はないが、重之百首の中の一首。

三〇七 ひさかたのつきのかつらもあきはなをもみぢすればやてりまさるらん  
たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】月の桂も秋はやはり紅葉するので、月も一段と照り輝いているのだろうか。

【語句】○つきのかつら 桂の木が月に生えるというのは中国の故事を踏まえたもの。「俗伝、月中仙人桂樹」(初学記・月)。万葉集に既にこれを踏まえた歌「天の海に月の船浮け桂梶かけて漕ぐ見ゆ月人壮士」(二二二七・旧二二二三)がある。○なを なほ(猶)。○てりまさる 月が一段と照り輝いている。秋の月が輝くするのは「つねよりも照りまさるかな秋山の紅葉を分けて出づる月かげ」(貫之集・四〇)など多く見出せるが、その原因を「つきのかつら」が色づいたからとする点に眼目がある。

【所載】古今集・秋上・一九四／新撰和歌・六四／忠岑集Ⅰ・八／忠岑集Ⅱ・一四／忠岑集Ⅲ・二〇／忠岑集Ⅳ・三、一七六／是貞親王家歌合・五八／秀歌大体・七〇／桐火桶・八一／平家物語(延慶本)・二四〇／源平盛衰記・二六五

【参考】作者名は所載欄の文献に一致する。

三〇八 秋のよの月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり  
もとかた

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の月の光がとりわけ明るいので、暗いと言われるくらぶ山もきつと越えられそうだよ。

【語句】○月のひかりし 「し」は副助詞。取り立てて強調する意。「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」（古今集・羈旅・四一〇）。○くらぶの山 暗部山。歌枕。京都市左京区の鞍馬山が比定される。その名から「暗し」を掛けて用いられることが多い。「梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける」（古今集・三九）、「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」（後撰集・二七一）。

【所載】古今集・秋上・一九五／元方集・一／六百番陳状・一一〇

【参考】作者名は所載欄の文献に一致する。

三〇九 あきの月つねにかくてるものならばやみになるよはまじらざらまし  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月が常にこのように照り輝いているものだとしたら、闇になる夜はまじらないでいるのになあ。

【語句】○やみになるよ 所載欄の後撰集には「やみにふる身」とあり、述懐歌と解せる。○まじらざらまし 三句目をうけて反実仮想。後撰集の諸注は自らの不遇を「やみにふる身」と詠んだ述懐歌と説くが、「古今六帖」内での異文がないこともあり、ここでは採らない。

【所載】後撰集・秋中・三二四

【参考】作者名「ふかやぶ」とあるが、現存の深養父集には不載。次の三一〇番歌は後撰集では清原深養父の作とし、その後に「よみ人知らず」歌一首を置いてこの歌を配す。本来は次の歌の作者記載であるべきなのか、もしくは後撰集の作者記載に影響されたか。なお三一一番歌の後に「三首ふかやふ」とある。三一一番歌参照。

三一〇 あきのうみにうつれる月をたちかへりなみにあらへどいろはかはらず



【異同】ナシ

【現代語訳】秋の海に映っている月を、繰り返し寄せてくる波で洗うのだけど、色は変わらないでいるよ。

【語句】○たちかへり 繰り返し。「なみ」の縁語。「いしま行く水の白浪立帰りがくこそは見めあかずもあるかな」（古今集・六八二）、「あひだなくよする川浪立ちかへり折りても猶あかずぞ有りける」（貫之集・二八七）。○いるはかはらず 波がかかってもなお元の姿のままでいる。月の明るさをいう。波が洗うことで姿がより一層はつきりするという発想は「水のうへにいろさへすめるあきのつきなみこそかげをあらふべらなれ」（能宣集・三八〇）や、やや時代が下るが「すみよしのまつのしづえはしらなみのあらふにつけていろまさりけり」（経信集・一九〇）がある。

【所載】後撰集・秋中・三三三／深養父集Ⅰ・一三／深養父集Ⅱ・補三

【参考】作者については三二一番歌参照。

〔以上五首担当 青木〕

三二 秋のよの月のひかりはあかけれど人のこゝろの<sup>くまい</sup>うちはてらさず

三首ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の月の光は明るいけれど、あの人の心のうちまでは照らさないことだ。

【語句】○あかけれど 「あかけれ」は「明かし」の已然形。○人の 思いを寄せているあの人の。

【所載】後撰集・秋中・三三三／是貞親王家歌合・五五

【参考】作者名に関しては、当該歌を含めて「三首ふかやぶ」と注し、深養父の作とするが、三二〇番歌を除いて後撰集ではいずれも「よみ人しらず」とする。なお当該歌に関していえば、後撰集、是貞親王家歌合ともに、三句を「きよけれど」、五句を「くまはてらさず」とする。

三二 そらとをみあきやよくらんひさかたの月のかつらのいろもかはらぬ  
きのよしみつのあそん

【異同】いろもかはらぬ―色もかはらす（大）

【現代語訳】空が遠いので、秋が避けているのであろうか。月の中に生えているという桂は、秋になっても紅葉しないことだ。

【語句】○そらとをみ 「とをみ」は「遠（とほ）み」。秋のやって来る道から見て、空が遠くにあるという発想。月のある空が遠いので。○月のかつら 月に桂の木が生えているという中国の古伝承による。「久方の月の桂も秋は猶もみちすればやてりまさるらむ」（古今集・一九四）。

【所載】後撰集・秋中・三二七

【参考】作者名は後撰集においても「紀淑光朝臣」とする。

三二二 あきの月いりがてにしつさはやまのみちはいまぞさかりなるらし

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月が沈みかね、ためらっていることだ。佐保山の紅葉は今が盛りであるらしい。

【語句】○いりがてにしつ 入ることをむずかしがっている。入ることをためらっている。「がてに」は本来可能の意を表す補助動詞「かつ」の未然形に、打消の助動詞の古い形の連用形「に」が伴ったもの。不可能ないし困難の意を表す。ここは「いりがてにす」という動詞に完了の助動詞「つ」が接続した形。○さほやまの 「さほやま（佐保山）」は大和国の歌枕。今の奈良市北部、佐保川北岸の丘陵地帯。○さかりなるらし 盛りであるらしい。「らし」は根拠のある推定。ここは秋の月が「入りがてに」していることを根拠に、きつと紅葉が盛りなのだろう、と推定している。月が沈みかねているのは紅葉が美しいから、というわけである。

【所載】ナシ

三二四 こゝろなきあきの月よのものおもふともねられぬにてりつゝもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】思いやりのない秋の月が、物思いで眠れないでいるのに、いたずらに照りつけることだ。

【語句】○こゝろなき 思慮のない。思いやりのない。○あきの月よの 「月よ」は「月夜」で、月の意。「月よの」の「の」は主格を表す。秋の月が。第五句の「てりつゝもがな」にかかる。○いもねられぬに 「い」は眠りの意の名詞。「いをぬ」「いもねられず」、あるいは「いぬ」などと、寝る意の動詞「ぬ」とともに用いられ

ることが多い。「ねられぬ」の「られ」は可能、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形、「られぬ」で不可能の意を表す。眠ることができない。○てりつゝもがな 「もがな」は願望の終助詞。ただしこのままでは意が通じない。所載欄に示したように、万葉集では「てりつつもとな」とある。「もとな」は、わけもなく、何の根拠もなく、やたらに、無性に、などの意を表す副詞。一般的な用法としては「……まなかひに もとなかりて やすいしなさぬ」（万葉集・八〇六（旧八〇二））や、「ぬばたまの いめにはもとな あひみれど……」（万葉集・四〇〇四（旧三九八〇））などのように、用言の前にくることが多いが、当該歌のように末尾に用いられる例も見いだされる。「さよなかに ともよぶちどり ものもふと わびをとときに なきつつもとな」（万葉集・六二二（旧六一八））。本書の現代語訳は万葉集の本文によった。

【所載】万葉集・二二三〇（旧二二二六）無心 秋月夜之 物念跡 寐不所宿 照乍本名 ココロナキアキノツキヨノモノオモフトイノネラレヌニテリツツモトナ こころなきあきのつくよのものもふといのねらえぬにてりつつもとな／人麿集Ⅱ・一三〇

### ふゆの月

三二五 ふゆのいけのうへはこほりにとぢたるをいかでか月のそらにいらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬の池の上は氷でとじているのに、どうして月は底に入っているのだろう。

【語句】◎ふゆの月 秋の月とは異なり、冷え冷えとしている。氷、雪などともに詠まれることも多い。○そらにいらむ 所載欄の文献ではいずれも「そこに入るらん」「そこにみゆらん」「そこにいりけん」「そこにすむらん」など、「そこに」とする。「こ」と「ら」とでは誤りやすいし、歌としても「空に」より「底に」の方がずっとわかりやすいだろう。「池水の底に宿れる月影はとづる氷にさはざりけり」（夫木抄・六六六〇）と同工異曲。従って「底に入るらん」の本文で解した。

【所載】拾遺抄・冬・一五三／拾遺集・冬・二四一／新撰万葉集・四二六／是則集・二四／寛平御時后宮歌合・一三七

【参考】なお作者は、拾遺抄・拾遺集では「よみ人知らず」とするが、是則集に入集し、寛平御時后宮歌合でも「是則」とする。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

つらゆきしレイ

三二六 ふりしけるゆきかとみゆる月なれどぬれてさこえたるさころもぞなき

【異同】ナシ

【現代語訳】一面に降り積もっている雪かと思われるほどの月の光ですが、雪に濡れて凍る着物は見当たりませんよ。

【語句】○ふりしける 「降り敷く」は一面に降る意。「よるならば月とぞみましわがやどの庭白妙にふりしける雪」(貫之集・六五)。○ゆきかとみゆる月 月光を雪に見立てる。二九四番参照。○ぬれてさえたるさころも 雪であれば着物が濡れて凍る。「さゆ」は「冷え冷えとする、凍てつく」意。「さころも」は、所載欄の貫之集では傍書と同じ「ころもで」(袖)とある。

【所載】貫之集I・二五九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

をなじ人

三二七 むまたまのよるのみにふれイふるしらゆきはてる月かげのたまるなりけり

【異同】○よるのみにふれイふるのみにふれイふる(大)

【現代語訳】夜にだけ降る白雪は、照る月の光が積もったものでしたよ。

【語句】○むまたまの 「ぬばたまの」の変化したもの。「夜」の枕詞。○月かげ 月の光。○たまる 集まり積もる。「衣手はさむからねども月影をたまらぬ秋の雪かとぞ見る」(古今六帖・二九四)。

【所載】後撰集・冬・五〇三

【参考】作者名は「をなじ人」(つらゆき)とあるが、所載欄の後撰集ではよみ人知らずとなっている。

三二八 おほぞらの月のひかりしさむければかげみしみづぞまづこほりける

【異同】ナシ

【現代語訳】大空の月の光が寒々としているので、その月影を映した水が真つ先に凍ったことですよ。

【語句】○さむければ 寒々としているので。古今集では、「きよければ」とする。○かげみしみづ 月の光を映した水。庭の池などであろう。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。

【所載】古今集・冬・三二六／新撰万葉集・一七七／和漢朗詠集・三八六／古来風体抄・二五九／桐火桶・一一八

三二九 あまのはらそらさへさえやわたるらむこほりとみゆるふゆのよの月

【異同】ナシ

【現代語訳】空までもが一面に凍っているのでしょうか。氷と思うほど寒々とした冬の夜の月が懸かっていますよ。

【語句】○あまのはら 大空の意だが、ここでは「空」の枕詞。「あまのはらそらかきくらしふるゆきにおもひこそやれみよしののやま」（高陽院七番歌合・五一）。○そらさへ 所載欄の今昔物語集・古本説話集では「そこさへ」。○さえやわたるらむ 一面に凍っていることでしょう。「やえわたる」は、あたり一面に凍る意。「やは疑問の意を表す係助詞。「らむ」は目前に見えないことを推測する助動詞。所載欄の恵慶集では「さえやまさるらむ」。「やえまさる」はいっそう澄んで見えること。

【所載】拾遺抄・冬・一五四／拾遺集・冬・二四二／玄々集・三六／恵慶集・一一六／時代不同歌合・二四五／後六々撰・二八／古来風体抄・三六七／近代秀歌・五二／今昔物語集・一三〇／古本説話集・五八

【参考】今昔物語集（巻二十四・第四十六）・古本説話集では安法法師作。所載欄の他の文献では、作者表記なしの近代秀歌以外は恵慶法師作。

### ぎょうの月

三二〇 わがこゝろなぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

【異同】ナシ

【現代語訳】私の心は慰められませんでした。更級の姨捨山に照る月を見ていると。

【語句】◎ぎうの月 ざふ（雑）の月。「雑」はくさぐさの意で、いろいろのものが混じり集まること。四季の月に入らない歌を集めた。○なぐさめかねつ 慰めることができなかった。「―かぬ」は動詞の連用形に付いて……のが難しい、……ことができない、の意の動詞を作る接尾語。○さらしな 更級は、長野県更級郡。○をばすて山 長野県善光寺平の南にある山。一帯の山々の総称とも、冠着山のことともいう。観月の名所。

【所載】古今集・雑上・八七八／新撰和歌・二五七／俊頼髓脳・二九一／和歌童蒙抄・九五五／和歌初学抄・一七四／袖中抄・八三四／古来風体抄・二八八／和歌色葉・三〇九／今昔物語集・一六六／大和物語・二六一

【参考】大和物語（百五十六段）と今昔物語集（卷三十・第九）では、棄老伝説と結びつけて、おばを捨てた男が、おばを思つて詠んだ歌とする。

〔以上五首担当 三浦〕

三二一 おもふことありとはなしにひさかたの月よとなればねられざりけり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いがあるというのではないが、美しい月夜となると月に魅せられて、寝られないことだなあ。

【語句】○おもふこと もの思いをすること。○ありとはなしに ありはしないが。○ひさかたの 枕詞。天、雨、月、雲、光などにかかる。○ねられざりけり もの思いがなくても、月が美しいために寝られないという趣向。天慶二（九三九）年四月（田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』、右大将藤原実頼の屏風歌。題「家に女月を見る」。

【所載】拾遺抄・雑下・四九八／拾遺集・雑上・四三三／貫之集I・三七八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。三三五番歌参照。

三二二 あまくものたなびけりともみえぬ夜はゆく月かげぞのどけかりける  
るイ

【異同】ゆく月かけそ―ゆく月そ（大）

【現代語訳】天の雲がたなびいているとも見えない晴れた夜は、空を行く月の姿が穏やかでゆっくり動いているように見えるなあ。

【語句】○ゆく月かげぞのどけかりける 所載欄の貫之集によれば「夜の雲をさまりて月の行くことおそし、といふ題を人のよませ給ふに」と詞書があり、野郢展「水東帰詩」の「秋水漲来船去速 夜雲收尽月行遲」（和漢朗詠集「月」、千載佳句「秋夜」）からとった題詠歌。「のどけかりける」は「月行遲」を和風に言ったもの。

【所載】玉葉集・秋下・六七五／貫之集Ⅰ・七七一／袋草紙・九一

【参考】作者名はないが、所載欄の文献はいずれも貫之の作。三二五番歌参照。

三二三 かつみれどうとくもあるかな月かげのいたらぬさとはあらじとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】月を美しいと思つて見るが、一方では疎んじたくなくなります。月の光の行き届かない里はあるまいと思ふので。

【語句】○かつみれど 月を美しいと思つて見るが、一方では。○月かげのいたらぬさとはあらじ 月光が自分の所ばかりか、差さない里はないだろう。裏に、月光をひとり占めしたい気持ちをあらわす。所載欄の古今集詞書には「月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる」とあり、貫之の作。

【所載】古今集・雑歌上・八八〇／新撰和歌・二二九／貫之集Ⅰ・七七二

【参考】作者名はないが、所載欄の古今集には貫之とある。三二五番歌参照。

三二四 ひさかたの月かげ見ればなにはがたしほもたかくぞみえぬべらなる

【異同】みえぬへらなる―みちぬへらなる（大）

【現代語訳】月の光を見ると難波潟は一面に輝き、潮も満潮時で高くなって見えるようだ。

【語句】○ひさかたの 枕詞。天、雨、月、雲などにかかる。○なにはがた 大阪市の淀川河口から海にかけての一带をいう。○みえぬべらなる ……のように見える。……の様子だ。「みえぬ」は動詞「見ゆ」（下二段）の連用形「見え」に完了の助動詞「ぬ」の終止形が付いた形。「べらなる」は助動詞「べし」の語幹「べ」に「ら」が付き、さらに断定の助動詞「なり」の連体形が付いた形。

【所載】万代集・三二八〇／夫木抄・五一六一／貫之集Ⅰ・二二三

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば貫之の作。三二五番歌参照。

三三五 みやこにて山のはにみし月なれどうみよりいでゝな<sup>み</sup>にこそいれ

已上五首つらゆき

【異同】うみより―なみより（大）

【現代語訳】都では山の端に見た月だが、ここでは海から昇って波に沈むのだなあ。

【語句】○山のはにみし月（都では）周囲が山に囲まれているので、山の稜線すれすれに昇り、また沈むのを見ていた月。○なみにこそいれ 土佐国から都へ上る途中の船での詠。

【所載】後撰集・羈旅・一三五五／奥儀抄・一七〇／宝物集・二五二／土佐日記・二六

【参考】左注「已上五首つらゆき」とある三二一―三二五番歌の作者名は、いずれも所載欄の文献に一致する。

（以上五首担当 橋本・林）

三二六 ふたつなきものとおもひしをみなそこにやまのはならでいづる月かげ

【異同】ナシ

【現代語訳】この世に二つとないものだと思っていたのに、あの水底に、山の稜線でなくても出ている月だよ。

【語句】○ふたつなき ここでは、月がただ一つのものであることを指す。「二つなき恋をしすればつねの帯をみへむすぶべくあがみはなりぬ」（万葉集・三二八七（旧三二七三））のように、「ふたつなき」は恋・契りや、仏と結びつけて詠まれることが多い。○みなそこに 水中に。水中に宿る月は、大般若經の「水月」の喩や維摩經の「如智者見水中月」喩など諸仏典に登場するため、仏教的に捉えることが多くあった。中野方子は貫之の「手にむすぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ」（拾遺集・一三三二）に、「水月」喩を見ている（『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）。当該歌も貫之の詠であり（参考欄参照）、「ふたつなき」の語から法華經方便品の「十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三（ただ十方の仏土の中には、ただ、一乗の法のみありて、二もなくまた三もなし）」を導き、また多くの喩に使われる「水中月」の喩から仏教的な背景を十分に踏まえた上で、機知的に詠じたものと思われる。○やまのは 山の稜線。月は山の端から出て、山の端に沈む。三二七番歌参照。

【所載】古今集・雜上・八八一／新撰和歌・二三一／貫之集Ⅰ・七七六



【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば貫之の作。

三二七 あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなむ  
なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】まだ十分に満足していないというのに、もう、月が隠れようとしている。山の端よ、逃げて月が沈まないようにしておくれよ。

【語句】○あかなくに まだ十分に満足していないのに。当該歌は伊勢物語の歌で、惟喬親王一行が水無瀬を訪れた折、親王が宴席から外れようとした際詠み送ったもの。つまり「あかなくに」は宴席を十分に満足していない、の意。○月 伊勢物語・古今集では惟喬親王を指す。参考欄に引用した「十一日の月」は夜中過ぎに沈むので、状況に即応した詠みぶりといえよう。

【所載】古今集・雑上・八八四／新撰和歌・二六七／業平集Ⅰ・五六／業平集Ⅱ・四九／業平集Ⅳ・二三／伊勢物語・一四九

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。以下に古今集の詞書を載せる。

これたかのみこのかりしけるとともにまかりてやどりにかへりて夜ひとよさけをのみ物がたりをしけるに、十一日の月もかくれなむとしけるをりに、みこゑひてうちへいりなむとしければよみ侍りける

三二八 いにしへはいりこしものをひさかたの月のひかりのまへわたりする

【異同】ナシ

【現代語訳】昔は奥まで入ってきてくれたのに、今では月の光が私の前を素通りすることよ。

【語句】○いりこしものを 「いりこし」は「入り来し」。「いり」と「わたる」は月の縁語。○まへわたり 前渡りは家の前を素通りすること。ここでは、月光は修辭で、通ってくる男に見立てている。月の満ち欠けによって光が差し込まないことを擬人化した。

【所載】ナシ

三二九 ひるなれやみぞまどひぬる月かげをけふとやいはんこよひとやいはむ  
みつね

【異同】みそまとひぬる―闇そまとひぬる(大)

【現代語訳】昼なのだろうか、見ていて混乱してしまうよ。この明るい月光を、今日と言おうか、今宵と言おうか。

【語句】○ひるなれや 昼なのだろうか。「や」は疑問。○みぞまどひぬる 見て混乱する。後撰集では、「見ぞまがへつる」とあるので、見間違ってしまうの意。○けふとやいはんこよひとやいはむ 今日と言おうか、今宵と言おうか。在原元方の「としのうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ」(古今集・一)を踏まえた表現。「こよひ」は現在考える「今晚」の意味だけでなく、暁から見ての昨夜を指すことがあり、ここでは後者の意。奥儀抄では当該歌を「盗古歌証歌」とする。また和歌初学抄の「似物」に「月は昼に似ず」として当該歌を引く。批判はともかく、元方歌をベースにし、日の光と見紛う月光を眼目とした歌といえよう。

【所載】後撰集・雑一・一一〇〇／躬恒集Ⅰ・二六九／躬恒集Ⅱ・一九五／躬恒集Ⅲ・二九三／躬恒集Ⅴ・一六四／奥儀抄・一三四／和歌初学抄・七七

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

三三〇 あひにあひて物おもふころのわがそでにやどる月さへぬるゝがほなる  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】よりにもよって、いろいろと思い煩い、涙に暮れることの多い私の、その涙の溜まった袖に映る月までも、濡れたような顔をしていることだよ。

【語句】○あひにあひて 「合ふ」と「逢ふ」の二通りが考えられる。ちょうどびたりと合って(小町谷照彦訳注『古今和歌集』旺文社、一九八八年)、よくも合ったもので(新日本古典文学大系『平安私家集』、あれほど逢った上で(新日本古典文学大系『後撰和歌集』・同『古今和歌集』、待ちに待ってやっと逢った(工藤重矩校注『後撰和歌集』和泉書院、一九九二年)など、注釈書によって違いがある。ここでは「合ふ」を前面に出した。

○そでにやどる月 涙が溜まって池となり、そこに映った月、の意。「袖に宿る」の形では、伊勢の後、赤染衛

門集に「雲井にてながむるだにもあるものを袖にやどれる月をみるらん」（二六九）がある。

【所載】古今集・恋五・七五六／後撰集・雜四・一二七〇／伊勢集Ⅰ・二〇八／伊勢集Ⅱ・二二二／伊勢集Ⅲ・二二一

【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本〕

三三二 いづこにかこよひの月のくもるべきをぐらのやまはなをやかふらん  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】「いったいどこで、この満月のくもることがあろうか、小倉山は（「小暗し」というが暗い所はひとつもなく）名を変えるのではないだろうか。」

【語句】○をぐらのやま 小倉山・小棕山。京都府右京区の嵯峨、大堰川をへだてて嵐山と対峙する山。○なをやかふらん 名をや変ふらん。「や」は疑問の係助詞。古くは「名」すなわち実体と考えたが、実体が伴わない場合、「名を変ふ」「名のみなりけり」などと歌われた。「大井川うかべる船のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり」（後撰・二二三・業平）。

【所載】新古今集・秋上・四〇五／深養父集Ⅰ・三三／元輔集Ⅰ・二二九

【参考】作者名「ふかやぶ」は、新古今集には「大江千里」とあり、一致しない。

三三三 あはぢにてあはとくも<sup>はるかに</sup>みにみし月のちかきこよひはところ<sup>みつね</sup>がらかも

【異同】ナシ

【現代語訳】淡路島では「彼は」と遙か遠くに見えた月がこんなにも近く大きく見えるのは（月はそれを見る所によってかわるのか）この所がらによるものか。

【語句】○あはぢ 淡路島。○あはと 島名「あはぢ」のアハと同音で指示代名詞のア「彼」と格助詞「は」をかける。「アハ」はすなわち「あれは」。○ところがら 場所による。「大峰のしんせんと申す所にて、月をみて

よみける みねのうへもおなじ月こそてらすらめ所がらなるあはれなるべし」(山家集・一一〇五)。

【所載】新古今集・雑上・一五一五／躬恒集Ⅰ・二二五／躬恒集Ⅱ・一三〇／躬恒集Ⅲ・一一四／躬恒集Ⅳ・四六三／躬恒集Ⅴ・一〇二

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

三三三 てる月をひるかときればあかつきにはねかくしぎもあらじとぞおもふ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】明るく照る月は昼かと見えて(夜か昼かわからないから)、暁に羽掻く鳴もあるまいと思う。

【語句】○はねかくしぎ 羽掻く鳴。有名な古歌「暁の鳴のはね掻き百羽掻き君が来ぬ夜は我ぞ数かく」(古今集・七六)による。来ない恋人を待ち明かし、ひとり暁の鳴の羽掻く音を聞く寂寥を詠んだもの。「数かく」の所作が具体的にはどういうものかは不明。

【所載】貫之集Ⅰ・二六〇／金葉集初度本・秋・二八五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では「京極の権中納言の屏風」の歌二十首のうちの一首。

三三四 ますかゞみてる月かげをしろたへのくものかくせるあまつきりかも  
忌部首黒麿 或本をとくろ

【異同】ナシ

【現代語訳】鏡のごとく照る月を白雲が隠してしまった(と思うとそれは)霧であつたよ。

【語句】○ますかゞみ 真澄の鏡。○月かげ 月光。月の形。○あまつきり 天つ霧。大空の霧。「関越ゆる道たどたどし白河の山道をかくすあまつきりかも」(夫木抄・霧・五三七二)。

【所載】万葉集・一〇八三(旧一〇七九)真十鏡 可照月乎 白妙乃 雲香隠流 天津霧鳴 マソカガミテルベキツキラシロタヘノクモカクセルアマツキリカモ まそかがみてるべきつきをしろたへのくもかくせるあまつきりかも／人麿集Ⅱ・一八八／人麿集Ⅳ・四六

【参考】所載欄の万葉集に作者名はない。「忌部首黒麿（いんべのおびとくろまる）」は万葉歌人。宝字二（七五八）年八月外従五位下、同三年十二月姓連を賜り、同六年正月内史局（図書）助となる。「をとくる」は、古今六帖・三五六、六七八、一〇六〇、一四一一にも出る。

三三五 山のはにいさよふ月をいでんかとまちつゝをるによぞふけにける

【異同】ナシ

【現代語訳】山の端に（隠れていてなかなか）出てこない月を今出るか今出るかと待つまに、（こんなにも）夜が更けてしまった。

【語句】○いさよふ ぐずぐずする。ためらう。「いさよふ月」は山の端に出る前の月をも、空ゆく月の動きの遅さにもいう。

【所載】続後撰集・雑中・一一〇五／万葉集・一〇七五（旧一〇七二）山末尔 不知夜歴月乎 将出香登 待乍居尔 夜曾降家類 ヤマノハニイサヨフツキライデムカトマチツツラルニヨヅフケニケル やまのはにいさよふつきをいでむかとまちつつをるによぞふけにける／綺語抄・三四／和歌童蒙抄・一三／袖中抄・九五二／古来風体抄・七四／八雲御抄・一〇七

【参考】類歌が袖中抄・九五三、九五四にある。

〔以上五首担当 平野〕

三三六 したにのみこふればくるし山のはにいでくる月のあらはればいかに

【異同】ナシ

【現代語訳】心の中でのみ恋い慕っているのは苦しい。山の端に出る月のように、この気持ちこそとに表れたら、どうでしょう。

【語句】○したにのみ 心の中でだけ。「した」は人に隠している心。「したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人などがめそ」（古今集・六六七）。○山のは 山の稜線。尾根。○いでくる月の 昇ってくる月のように。「あらはれ」にかかる。所載欄の万葉集によれば、男との仲を親に打ち明けたいが如何と相手に問う歌。

【所載】万葉集・三八二五（旧三八〇三）隠耳 恋辛苦 山葉従 出来月之 顕者如何 シタニノミコフレバク

ルシヤマノハニデクルツキノアラハレバイカニ　こもりのみこふればくるしやまのはゆいでくるつきのあらはさばいかに

三三七　をそくいづる月にもあるかなあし引のやまのあなたもおしむべらなり

【異同】あし引の―ひしひきの（御）

【現代語訳】出るのが遅い月だなあ。これはきつと、山の向こう側でも人々が月との別れを惜しんでいるのだらう。

【語句】○あし引の　枕詞。「山」「峰（を）」などに掛かる。○やまのあなたも　山の向こう側でも。人々が月との別れを惜しんでいるので、月がなかなか昇ってこられないと想像。○おしむべらなり　をしむべらなり。惜しむ様子だ。惜しんでいるのであらう。

【所載】古今六帖「さと」一二九一／古今集・雑上・八七七／俊頼髓脳・一一四／新撰和歌・二八七

三三八　ひさかたのあまてる月をかぐみにてこひしき人のかげをだにみん

【異同】ナシ

【現代語訳】天に照る月を鏡に見立て、せめてそれにうつる恋しい人の面影だけでもみよう。

【語句】○ひさかたの　天空に関係のあるもの、天、雨、空、月、星などにかかる枕詞。○かぐみにて　鏡として。鏡に見立てて。月を鏡に見立てた例として「くまもなき鏡とみゆる月かげに心うつらぬ人はあらじな」（金葉集二度本・二〇五）がある。○かげ　心に思い浮かべる顔形。○だに　せめて……だけでも。

【所載】ナシ

三三九　おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの

【異同】ナシ

【現代語訳】およそ人の愛でるところの月をも私は愛でまい。月を観、愛でる歳月がつもれば、それは人の老いとなるものなのだから。

【語句】○おほかたは おおよそ。ふつうには。○これぞこの 月をめであることを指す。「月」に歳月の「月」をかける。○つもれば 月を愛でる歳月がつもれば。○老となるもの 老いさせる原因となるものだから。「月明に対して往時を思ふことなかれ君の顔色を損じ君の年を減ず」(白氏文集・卷一四・贈内)。

【所載】古今集・仮名序／古今集・雜上・八七九／業平集Ⅰ・五五／業平集Ⅱ・三六／業平集Ⅲ・三〇／業平集Ⅳ・二四／俊賴髓腦・一五八／悦目抄・二七／井蛙抄・一九六／伊勢物語・一六二

三四〇 むばたまのそのよの月はいまゝでもわれはわすれず君によそへて

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたにお会いしたあの月夜の情景は、今でも私は忘れません。あなたの面影によそえて。  
【語句】○むばたまの 「ぬばたまの」とも云う。枕詞。黒、夜、夕、宵、髪、などにかかる。○そのよ 相手に会った夜。○よそへて ことよせて。関係付けて。

【所載】万葉集・七〇五(旧七〇二)夜千玉之 其夜乃月夜 至干今日 吾者不忘 無間苦思念者 ヌバタマノソノヨノツキヨケフマデニワレハワスレズマナクシオモヘバ ぬばたまのそのよのつくよけふまでにわれはわすれずまなくしおもへば

〔以上五首担当 斎藤・林〕

三四一 もゝしきのおほみや人のまかりいでゝあそぶこよひの月のさやけさ

【異同】ナシ

【現代語訳】大宮人たちが退出し、くつろいで宴を楽しんでいる今宵の月のなんと澄みきっていること。

【語句】○もゝしきの 「おほみや(大宮)」にかかる枕詞。○おほみや人 大宮人。宮中に仕える人。○まかりいでゝ 退出して。「まかりいで」は、退出するという意の謙讓語「まかりいづ(罷り出づ)」の連用形。○あそぶ 遊樂や遊宴をする。詩歌、管絃、舞などを行う。○さやけさ 清く澄んでいるさま。

【所載】玉葉集・秋下・六三〇／万葉集・一〇八〇(旧一〇七六)百師木之 大宮人之 退出而 遊今夜之 月清左 モモシキノオホミヤヒトノタイデアソブコヨヒノツキノサヤケサ もしきのおほみやひとのまかりでてあそぶこよひのつきのさやけさ／人麿集Ⅱ・一八七／人麿集Ⅳ・四七

三四二 くらはしの山をたか<sup>か敷</sup>みるこが<sup>に</sup>くれていでくる月のかたま<sup>ひかりともしき</sup>ちがたき

【異同】ナシ

【現代語訳】倉橋の山が高いからか、木の間隠れに昇ってくる月がただもう待ちきれないことだ。

【語句】○くらはしの山 倉橋山。奈良県桜井市倉橋付近の山。最も高い音羽山説。その西方の多武峰説などがある。倉橋の「くら」に「暗」を響かせる。○たかみる 用例もなく、わかりにくい。所載欄の万葉集の訓「高みか」の本文を採り、「る」を「か」の誤写とみて、ミ語法による疑問条件と解す。○こが<sup>に</sup>くれて 木の陰に隠れて。「春くれば木隠れ多き夕月夜おぼつかなしも花かげにして」（後撰集・六二、万葉集・一八七九（旧一八七五）の異伝歌）。○かたま<sup>ち</sup> 終止形は「かた待つ」。ひたすら待つて、一心に待つて。「鶯は今は鳴かむとかた待てば霞たなびき月は経につつ」（万葉集・四〇五四（旧四〇三〇））。

【所載】万葉集・一七六七（旧一七六三） 倉橋之 山平高敷 夜牢尔 出来月之 片待難 クラハシノヤマヲタカミカヨゴモリニイデクルツキノカタマチカタキ くらはしのやまをたかみかよごもりにいでくるつきのかたまちかたき

【参考】所載欄の万葉集では沙弥女王の作。万葉集には当該歌の傍書と関わりが深いとみられる「棕橋乃 山平高可 夜隠尔 出来月乃 光乏寸 クラハシノヤマヲタカミカヨゴモリニイデクルツキノヒカリトモシキ くらはしのやまをたかみかよごもりにいでくるつきのひかりともしき」（二九三（旧二九〇））という歌があり、その作者名「間人宿禰大浦」は、当該歌の作者「はしうとのおほうら」に一致する。この間人宿禰大浦作の万葉歌（二九三（旧二九〇））は猿丸集Ⅰ・八、猿丸集Ⅱ・八に入集する。

ゆげのわう

三四三 あめにます月よみおとこまひなはんこよひのながさいほよつげども

【異同】ナシ

【現代語訳】天にまします月読男に贈り物をしよう、ああ、今夜の時間が五百夜も続いてほしいなあ。

【語句】○月よみおとこ 月読をとこ。月を擬人化した語。○まひなはん 賄（まひなひ）をしよう。「賄（ま



ひな)ふ」は、「幣(まひ)」を神に捧げて祭る。「ん」は意志。○いほよ 五百夜。○つげぞも 「つげ」は、ガ行四段活用「継ぐ」の已然形か命令形、あるいはガ行下二段活用の「告ぐ」の連用形とみられるが、「ぞも」は原則として体言か連体形を受けるので、接続に問題が残る。一応上三句との照応からみて、所載欄の万葉集における「つぎこそ(継ぎこそ)」の「継ぎ」の意とする。「ぞも」は係助詞「ぞ」に、詠嘆の係助詞「も」が付いた感動を込めた強調の表現。上代は「そも」。

【所載】万葉集・九九〇(旧九八五) 天尔座 月詠壮子 幣者将為 今夜乃長者 五百夜継許増 アメニマスツキヨミヲトコマヒハセムコヨヒノナガサイホヨツギコソ あめにますつくよみをとこまひはせむこよひのながさいほよつぎこそ／綺語抄・二七／和歌童蒙抄・一八／袖中抄・七四二

【参考】作者名「ゆげのわう」は所載欄の万葉集では「湯原王」。

### 三四四

おしなべてイ  
おほかたはみねもたひらになりなゝんやまのあればぞ月もかくるゝ

かんつけのみわけ 或本いまを

【異同】ナシ

【現代語訳】一様に峰も平らになつてしまつてほしい、山があるからこそ月も隠れるのだ。

【語句】○おほかたは おおよそ。一様に。「寝ても見ゆ寝でも見えけりおほかたはうつせみの世ぞ夢には有りける」(古今集・八三三)。○なりなゝん 「なゝん」の「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形、「なん」はあつらえ望む意の終助詞。

【所載】後撰集・雑三・一二四九／伊勢物語八二段・一五〇

【参考】作者名「かんつけのみわけ」は、所載欄の後撰集では「上野岑雄」。

なお、伊勢物語・八二段において、酔つて御寝されようとした惟喬親王を月にたえて引き留めた業平歌、あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ

につづいて、紀有常が詠んだとされる、  
おしなべて峰もたひらになりななむ山の端なくは月も入らじを  
と似ている。

### 三四五 わがせこがふりさけみつゝなげくともきよき月よにくもなたなびき

そイ

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のはるかに仰ぎ見つつ私を偲んで嘆いているとしても、この澄んだ月夜には、雲よ、たなびいて月を隠さないで。

【語句】○ふりさけみつゝ 「ふりさく」は視線を遠く放ちやること。はるか彼方をふり仰いでみながら。「遠き妹がふりさけみつつしのふらむこの月の面に雲なたなびき」（万葉集・二四六四（旧二四六〇））という類歌は男の作。○なげくとも 「とも」は逆接仮定条件。仮に……したとしても。たとえ……でも。所載欄の万葉集における「なげくらむ」の方が下二句との繋がりが自然であるが、本文通りに解した。○なたなびき 「な」は、すぐ下の動詞の動作を禁止する副詞。

【所載】古今六帖「くも」五一三／万葉集・二六七七（旧二六六九）吾背子之 振放見乍 将嘆 清月夜尔 雲莫田名引 ワガセコガフリサケミツツナゲクラムキヨキツキヨニクモナタナビキ わがせこがふりさけみつゝなげくらむきよきつくよにくもなたなびき／綺語抄・三三四

〔以上五首担当 中野〕

### 安郡扉娘女

三四六 みそらゆく月のひかりにたゞひとめあひみし人のゆめにしみゆる

【異同】安郡扉娘女―安部扉郎女（大）

【現代語訳】大空を行く月の光の中で、ほんの一目見ただけの人が、夢に見えることです。

【語句】○みそらゆく 月や雲にかかる枕詞的修辭。○たゞひとめあひみし人 たった一度見ただけの人。一目で激しい恋に落ちたと詠む歌は、「花ぐはし葦垣」しにただ一目あひ見し兒ゆゑ千度嘆きつ」（万葉集・二五七〇（旧二五六五））など他にも多い。○ゆめにしみゆる こちらが思えば相手の夢に見える、という俗信もあるが、ここはもちろん恋い慕っている相手が夢に見えたもの。「ゆめにし」の「し」は強意の副助詞。この結び、万葉集に十一首ほど見られる。

【所載】万葉集・七一三（旧七一〇） 三空去 月之光二 直一目 相三師人之 夢西所見 ミソラクツツキノヒカリニタダヒトメアヒミシヒトノユメニシミュレ（ル） みそらゆくつきのひかりにただひとめあひみしひとのいめにしみゆる／綺語抄・二六

【参考】作者名「安郡扉娘女」とあるが、所載欄の万葉集に「安郡扉娘子（あとのとびらのをとめ）」とあり、「安郡」氏の「扉」という名の女性で、大伴家持周辺の人と解されている。

三四七 あまがくれみかさのやまをたかみかも月のいでこずよはふけにけり  
あべのむしまろ

【異同】ナシ

【現代語訳】三笠山が高いせいであろうか、月がなかなか出てくれず、夜は更けてしまった。

【語句】○あまがくれ 物陰に入って雨を避ける、雨宿り、の意。所載欄の万葉集では「雨隠」とあり、「あまごもる」で「みかさ」に掛かる枕詞の可能性がある。所載欄の夫木抄は「あまがくる」。○みかさのやま 奈良市春日山の前方にそびえる三笠山。麓に阿倍氏の館があったかとされる。ここは固有名詞の三笠山に、「あまがくれ」から「御笠（みかさ）」を響かす。○たかみかも 高いからであろうか、の意。「たかみかも」の語構成は、形容詞語幹「高」に、原因・理由を表す接尾語「み」、詠嘆的に疑問を表す「かも」（係助詞「か」＋係助詞「も」）。なお他例も、「獵高（かりたか）の高円山を高みかも出でくる月の遅く照るらむ」（万葉集・九八六（旧九八二））など、すべて第三句に置く。○月のいでこずよはふけにけり 「かも」の結びとしては、所載欄の万葉集の「いでこぬ」や、夫木抄の「いでこし」の方が自然。他に「いでこず」の例はない。「よはふけにけり」のところ、夫木抄は「よはふけにつつ」。

【所載】万葉集・九八五（旧九八〇）雨隠 三笠乃山平 高御香裳 月乃不出来 夜者更降管 アマゴモリミカサノヤマヲタカミカモツキノイデコヌヨハフケニツツ あまごもるみかさのやまをたかみかもつきのいでこぬよはくたちつつ／夫木抄・八八五二

【参考】作者名「あべのむしまろ」は、所載欄の万葉集「安倍朝臣虫麿」に一致する。虫麿は、母が大伴坂上郎女の母と同母姉妹であり、郎女との戯れの贈答歌が残る（万葉集・六六八～六七〇（旧六六五～六六七））。天平勝宝四（七五二）年従四位下中務大輔で没。

三四八 おもへばぞ月のわれてもいでつらむかばかりさはぐ雲のうへより  
そらたちイ

【異同】ナシ

【現代語訳】三日月が乱れ動く雲から顔を出す、あなただつて私を思っているからこそ無理してでも出て来たのでしょう。これほど噂のかまびすしい殿上から。

【語句】〇おもへばぞ月のわれてもいでつらむ 「思へばぞ」は、思っているからこそ、の意。「われても」は、割れている三日月に、副詞「われて」の、無理に、あながちに、の意を掛ける。続く「出づ」「騒ぐ」「雲の上」も、自然と人事の両意がある。当該歌の上句とほぼ同じくする歌「思へばぞわれても月の出でつらむこらたらちのさねのなかより」（奥儀抄・四二三。和歌初学抄・一〇一、和歌色葉・二〇四にも）がある。奥儀抄は、下の句について、「たらち」を「たらちね」の一字脱と解し、「かばかり親たちのさ寝たる中より」と説明する。なお、当該歌は、男女が丁々発止とやりあう場面での答歌のような詠みぶりである。〇かばかり これほど。傍記イ本「そらたち（騒ぐ）」のような表現を含む例歌はない。〇雲のうへより 雲の上からと殿上からの意を掛ける。当該歌と似た詠みぶりの歌として、「三日月のおぼるけならぬ恋しさにわれてぞ出づる雲の上より」（金葉集二度本・恋下・四八四・藤原永実）があるが、詞書に「藏人にて侍りけるころ、内裏（うち）をわりなく出でて女のもとにまかりて詠める」とあって、詠歌事情がよくわかる。

【所載】ナシ

三四九 きみまつとおきたるわれもあるものをねまちの月はかたぶきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】あの方のお越しを待つてずっと起きている私がいるのに、遅く出た寝待の月はさらに西に傾いてしまった。

【語句】〇ねまちのつき 陰暦十九日の月、月の出の時刻は遅い。起きて待つ我と寝て待つ月、のように対比的に詠む。〇かたぶきにけり 月は西の空に傾いてしまった。恋人はまだ来ない。「ま袖もち床うち払ひ君待つと居りしあひだに月傾きぬ」（万葉集・二六七五（旧二六六七））。

【所載】ナシ

三五〇 きみまつとねやにしをればかきまより月のはのぼりぬこじとてならし

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたをお待ちして寝所にじつとしてしていると、垣の間から月は昇ってしまった。もうお越しにはなるまい、ということらしい。

【語句】○かきまより 垣のすき間から。「垣間」は、「春されば卯の花腐しわが越えし妹が垣間は荒れにけるかも」（万葉集・一九〇三（旧一八九九））のように、男が恋人に逢うために越えて来る所でもある。○こじとてならし 「じ」は打消推量。「ならし」は、「なるらし」の転とも、「なり」の形容詞化されたものともいう。……であるらしい、の意。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

### みか月

#### 坂上らう女

三五一 つきたちてたゞみか月のまゆねかきけながくこひし君にあへるらむ<sup>かもイ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】月が改まってほんの三日目の、三日月のような眉を掻いたので、何日もの間恋いこがれていたあなたにお逢いできたのでしょうか。

【語句】◎みか月 陰暦三日に出る月。その形から眉や弓に見立てられることが多い。また、宵の間に現れてすぐに沈んでしまうさまが詠まれたり、望月ではなく欠けていることから「われて」を導いたりする。○まゆねかき 眉根掻き。眉根は眉のこと。眉がかゆくなるのは、恋しい人に逢える前兆とされていた。さらに、その俗信を裏返して、かゆくなくとも、眉を掻くと恋しい人に逢えると考えられた。「めづらしき君を見えとこそ左手の弓取る方の眉根掻きつれ」（万葉集・二五八〇（旧一五七五））。当該三五一番歌は、後者の発想による。○けながく 日数が長く経過するさま。「け」は「日」の複数名詞。

【所載】万葉集・九九八（旧九九三）月立而 直三日月之 眉根搔 氣長恋之 君尔相有鴨 ツキタチテタダミ カヅキノマユネカキケナガクコヒシキミニアヘルカモ つきたちてただみかづきのまよねかきけながくこひしきみにあへるかも／和歌童蒙抄・一〇

【参考】作者名「坂上らう女」は、所載欄の万葉集に「坂上郎女」とあるのに一致する。

三五二 ふりあふぎてみ<sup>か</sup>月みればひとめみし人のまゆびきおもほゆるかも  
やかもち

【異同】み<sup>○</sup>月みれば—みかつきみれば（御・桂・大）

【現代語訳】振り仰いで三日月を見ると、一目見たあの人の、三日月のような、美しい眉のさまが思われるよ。

【語句】○まゆびき 眉引き。細長く美しい眉のさま。

【所載】万葉集・九九九（旧九九四）振仰而 若月見者 一目見之 人乃眉引 所念可聞 フリサケテミカヅキ  
ミレバヒトメミシヒトノマヨビキオモホユルカモ ふりさけてみかつきみればひとめみしひとのまよびきおもほ  
ゆるかも

【参考】作者名「やかもち」は、所載欄の万葉集に「大伴宿祢家持」とあるのに一致する。

三五三 よひのまにいでゝいりぬるみか月のわれてもゝのをおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】宵の間に出て入ってしまう三日月が割れているように、心が碎け割れるほどに思い悩むこの頃であるよ。

【語句】○われて 三日月が片割れ月で「割れて」いる意に、心が「破（わ）れる」、すなわち心が碎けるほどに思い乱れ、悩む意を掛ける。上三句は、「われて」を導く序詞。「みか月のわれては人をおもふともよにふたゝびはいづるものかは」（古今六帖・三五四）。

【所載】古今集・誹諧歌・一〇五九

三五四 みか月のわれては人をおもふともよにふたゝびはいづるものかは

【異同】ナシ

【現代語訳】三日月が割れているように、心も碎けあの人のことを思っても、月は一夜に二度出るものだろうか、いや再びは出ない。そのように、決して二度とはあの人に逢えないだろう。

【語句】○みか月のわれて 三五三番歌参照。

【所載】ナシ

ゆふづくよ

三五五 <sup>古十一恋一</sup> ゆふづくよさすやをかべのまつのはのいつともわかぬこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月がさす岡辺の松の葉のように、いつもいつも変らぬ恋をすることだ。

【語句】◎ゆふづくよ 夕方の月。陰曆上旬に、夕方、空に出ている月。または、夕方の月が出る夕暮れ時。古今六帖のこの項には、「夕月夜」という形の他、「よひの月」の形で詠まれたものも見える。○いつともわかぬこひ 常緑の松の葉がいつも変わらないように、いつも変ることのない恋。常に変ることなくその人を思っている、ということ。上三句は、「いつともわかぬ」を導く序詞。

【所載】古今集・恋一・四九〇／猿丸集Ⅰ・二二〇／猿丸集Ⅱ・一九／綺語抄・一六／近代秀歌・七三

【参考】猿丸集にも見えるが、古今集ではよみ人知らずの歌。古今六帖二六二番に、「てるひ」の題で「あさひこがさすやをかべのまつがえのいつともしらぬ恋もするかな」という形で見える。

〔以上五首担当 長戸〕

いべのをとくろまる

三五六 たまだれのこすのまとをりひとりみてみるしるしなきゆふづくよかも

【異同】ナシ

【現代語訳】小さいすだれの間を通して、ひとりで座って見る、何の甲斐もない夕方の月であることよ。

【語句】○たまだれの 「玉」を「緒」に通すことから「小簾」「越智」などに掛かる枕詞。転じて「コ」で始まる語に掛かることもある。「玉垂の小簾のすけきに入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ」（万葉集・二三八八（旧二二六四））、「玉だれのこがめやいづらこよろぎのいその浪わけおきにいでにけり」（古今集・八七四）。○こす もとは「をす」。小さいすだれ。○しるしなき 甲斐がない。効き目がない。ここでは訪れる人もいないことを嘆く。「思へども験もなしと知るものをなにかここたく我が恋ひ渡る」（万葉集・六六一（旧六五八））。

【所載】万葉集・一〇七七（旧一〇七三）玉垂之 小簾之間通 独居而 見驗無 暮月夜鴨 タマダレノコスノ  
マトホシヒトリキテミルシルシナキユフヅクヨカモ たまだれのをすのまとほしひとりみてみるしるしなきゆふ  
づくよかも／夫木抄・五〇九八／人麿集Ⅱ・一八六／人麿集Ⅳ・四八／和歌童蒙抄・一五、四九七／袋草紙・四  
六

【参考】所載欄の万葉集では「古歌集の一」とあり、作者名はない。「いべのをとくろまろ（忌部首黒麿）」は天  
平宝字二（七五八）年八月従五位下が確認され、万葉集には四首残る。古今六帖では「くろまろ」ないし「おと  
くろ」はこの他五か所に名が見えるが（三三四、六七八、一〇六〇、一四一一、一八一七）、いずれも万葉集の黒  
麿歌とは一致しない。

三五七 たびなればよひにたちいでゝてる月のたかしまやまにかくるゝをしも

【異同】ナシ

【現代語訳】旅の身なので、宵に現れて照る月が高島山に隠れてしまうのが惜しいことだよ。

【語句】○よひにたちいでゝ 宵に出て。所載欄の万葉集「よなかをさして」では題「ゆふづくよ」に合わない。  
○たかしまやま 近江国。滋賀県西北部、琵琶湖西岸一帯の山々。「たかしまやみをの中山そまたててつくりかさ  
ねよちよのなみくら」（拾遺集・六〇五）。

【所載】万葉集・一六九五（旧一六九二）客在者 三更刺而 照月 高嶋山 隠惜毛 タビニアレバヨナカラサ  
シテテルツキノタカシマヤマニカクラクヲシモ たびにあればよなかをさしててるつきのたかしまやまにかくら  
くをしも／夫木抄・八四〇八／和歌童蒙抄・二一

三五八 はるがすみたなびく山のゆふづくよきよくてゐるらんだかまどのゝに  
あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞のたなびいている山にかかる夕方の月ははっきりと照り輝いていることだろう、高円の野では。

【語句】○たなびく山の 所載欄の万葉集をはじめとする文献の多くは「たなびく今日の」とする。いずれも霞  
に覆われた下界と「きよくてゐる」月との対比。○きよく 月がくもりなく照り輝いているさまをいう。三四五番



歌参照。○たかまどのゝ 高田の野。「高田」は奈良市東郊、春日山の南に広がる丘陵地帯のうち西麓の一带。「高田の野辺のかほ花面影に見えつつ妹は忘れかねつも」(万葉集・一六三四(旧一六三〇))。ただし所載欄の文献では万葉集と同じく「高松の野」とするものが多い。

【所載】新拾遺集・春上・六九／万葉集・一八七八(旧一八七四) 春霞 田菜引今日之 暮三伏一向夜 不穢照良武 高松之野尔 ハルカスミタナビクケフノユフツクヨキヨクテルラムタカマトノノニ はるかすみたなびくけふのゆふづくよきよくてゐらむたかまつのに／人麿集Ⅲ・八／赤人集Ⅰ・一七〇／赤人集Ⅱ・五二／赤人Ⅲ・五五／能因歌枕・二〇／綺語抄・一四

【参考】作者名「あか人」は赤人集にも見出せるが、万葉集では作者未詳歌である。

三五九 ゆふづくよおぼろに人をみてしよりあまぐもはれぬこゝちこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方に出る月がぼんやりと霞んでいるように、かすかにあの人を見たときから、まるで空の雲が晴れないような思いでいるよ。

【語句】○おぼろに 夕月夜の様子と、あの人を「かすかに」見たの意を掛ける。「誰となくおぼろに見えし月影にわたける心を思ひしらなん」(後撰集・七三七)。○みてしより 見たときから。「し」は直接経験を表わす。相手の姿を「みてしより」思いが去らないと歌うものには「我妹子が夜戸出の姿見てしより心空なり地(つち)は踏めども」(万葉集・二九六二(旧二九五〇))、「うたたねに恋しきひとを見てしより夢てふ物はたのみそめてき」(古今集・五五三)などがある。○あまぐもはれぬ 鬱々とした心情を喩える。「なくなみだそらにもなどかふらざらむあまぐもはれぬものをおもへば」(西宮左大臣集・七二、実頼女)。

【所載】新撰万葉集・四八四／冷泉家承空本敏行集・卷末歌／寛平御時后宮歌合・一八七

三六〇 つねはさもおもはれぬものをこの月のすぎかくれゆくをしきよひかも

【異同】ナシ

【現代語訳】日頃はそんなふうにも思わないのだが、この月が過ぎて隠れてしまうのが惜しい今宵であることよ。  
【語句】○さも そのように。そんなふうに。「うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見るがわびしさ」

(古今集・六五六)。○をしきよひかも 所載欄の万葉集では卷七・雑歌「月を詠む」にあり、「この月」の見えなくなるのを惜しむ歌。

【所載】万葉集・一〇七三(旧一〇六九) 常者曾 不念物乎 此月之 過匿卷 惜夕香裳 ツネハサモオモハヌ  
モノヲコノツキノスギカクレマクヲシキヨヒカモ つねはかつておもはぬものをこのつきのすぎかくらまくをし  
きよひかも／人麿集Ⅱ・一八四／人麿集Ⅳ・五〇

〔以上五首担当 青木〕

三六一 ゆふづくよころもしらぬにしら露のをぐらのにはなくきりぐす

【異同】ナシ

【現代語訳】月の出ている夕暮れ時、心もしおれてしまうほどに、白露の置いているこの庭にはこおろぎが侘びしげに鳴いていることだ。

【語句】○ころもしらぬに このままでは意が通じにくい。所載欄の他文献ではすべて「心もしのに」とあり、それに従って解した。「心もしのに」は、心もしおれなびくように、しんみりしてしまふように、せつないほどに、の意。「あふみの海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古へ思ほゆ」(万葉集・二六八(旧二六六))。○をぐらのには「小倉の山」の用例は多いが、「小倉の庭」は他に見いだせない。ここも所載欄の文献ではすべて「おくこの庭に」とある。「こ」と「ら」は写本段階では非常に誤りやすいので、やはり他文献本文に従うべきであろう。○きりぐす 今のこおろぎという。

【所載】万葉集・一五五六(旧一五五二) 暮月夜 心毛思努尔 白露乃 置此庭尔 蟋蟀鳴毛 ユフヅクヨコロ  
モシノニシラツユノオクコノニハニキリギリスナクモ ゆふづくよころもしのにしらつゆのおくこのにはに  
こほろぎなくも／玉葉集・秋上・六一二／綺語抄・四七〇／袖中抄・五七九／古来風体抄・九二

ありあけ

たぐみね

三六二 ありあけのつれなく見えしわかれよりありあけのつれなくみえしわかれよりあか  
月ばかりうきものはなし

【異同】底本デハ丁ニ跨ッテ上句ガ二度繰リ返シ書写サレテイルガ、誤リニ氣ツイタノデアロウ、前者ガミセケチニヨッテ抹消サレテイル。他本ニオイテハ問題ガナイ。

【現代語訳】月を残したまま夜が明け初めてゆくころの、あの人が無情に見えたきぬぎぬの別れ——また、そんな私を無表情に照らしていた月影——あの時以来、暁ほどつらいものはないと私は思うようになりました。

【語句】◎ありあけ 月が空にありながら夜の明けること、また、そのころ。あるいは、夜が明けてもなお空に残っている月。月の満ち欠けを中心に考えている陰暦では、毎月十六夜以降がそれに該当する。和歌では「長月のありあけの月」と詠まれることが多く、特に恋歌では、男が女のもとから帰る道、女が男を待ち明かした際などに、つらく、あわれ深いものとして詠まれることが多い。

【所載】古今六帖「くれどあはず」三〇三四／古今集・恋三・六二五／新撰朗詠集・三九三／忠岑集Ⅱ・六一／忠岑集Ⅲ・四七、一二七／忠岑集Ⅳ・一五三／俊成三十六人歌合・五四／時代不同歌合・一一九／百人秀歌・二四／百人一首・三〇／定家十体・六／奥儀抄・五一三／西行上人談抄・二〇／近代秀歌・八六／詠歌大概・九三／竹園抄・四六、六四／三五記・三／古今著聞集・二〇七

【参考】作者名「たぐみね」は所載欄の文献に一致する。なお、「百人一首」の注釈史では、「つれなくみえし」が恋人の態度なのか、ありあけの月なのか、議論が絶えない。

### 三六三 君をのみをきふしまちの月なればうき人しもぞこひしかりける

【異同】月なれば―月みれば（御・桂・大）

【現代語訳】あなたのことばかり四六時中お待ちしていて、やっと出てきた臥し待ちの月を見ると、こんなにもつらい思いをさせた人が無性に恋しくてならないことだ。

【語句】○をきふしまちの月なれば 「起き臥し、待ち」と「臥し待ちの月」の掛詞。「起き臥し」は、いつもいつも。常に。「臥し待ちの月」は、陰暦十九日の月。立ち待ちの月（十七日）、居待ちの月（十八日）につづいて、臥して待って、やっと出てくるような出の遅い月。十九日の月だけではなく、それ以後の月についてもいうことがある。なお他本ではすべて「月みれば」となっており、その方が意が通りやすく、従った。○うき人しもぞ つらい人が。つらい思いをさせる人が。「しも」「ぞ」はいずれも強めの助詞。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖「人をまつ」二八二〇番に上二句のまったく同じ歌がある。下三句は次のとおり。「月影はや

ちよもここにありあけをせよ」。

三六四   ながつきのありあけの月のありつゝもきみしきまさばわれもわすれじ  
人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】九月のありあけの月、こうしてありつづけ、待ちつづけて、もしもあなたが来てくださったたら、私も決して忘れたりはいらないでしょう。

【語句】○ながつきの 陰暦九月の。上二句は同音反復による序詞。「あり」を導く。○ありつゝも ずつとこのようにありつづけて。ずつとこうして待ちつづけて。○きみしきまさば あなたがいらつしやたら。「し」は強めの副助詞。「きまさば」の「まさ」は尊敬の意を表す補助動詞「ます」の未然形。「ば」は順接仮定条件。

【所載】拾遺集・恋三・七九五／万葉集・二三〇四（旧二三〇〇）九月之 在明能月夜 有乍毛 君之来座者 吾将恋八方 ナガツキノアリアケノツキヨアリツツモキシキマサバワレコヒメヤモ ながつきのありあけのつくよありつつもきみがきまさばあれこひめやも／人麿集Ⅰ・一五六／人麿集Ⅱ・三〇二／人麿集Ⅲ・四五三／人麿集Ⅳ・二九四／小町集Ⅰ・一〇一

【参考】現存人麿集の所収歌はほとんどが万葉集に見えるものの、人麿詠と確認できるものは少ない。当該歌も万葉集では作者未詳歌である。従って作者名に「人まろ」とあり、人麿集に歌が載っていても、この歌の作者が人麿である保証にはならない。なお万葉集も拾遺集も末句は「われこひめやも」となっていて、それによれば、あなたが来てくださったたらこんなに恋い慕ったりはしない、の意となる。

三六五   よの人はつらきこゝろぞありあけの月とやまにやいりもしなまし

【異同】ナシ

【現代語訳】世の中の人はいつれない心を持っていることだ。ありあけの月と一緒に、私も山に身を隠してしまおうかしら。

【語句】○つらきこゝろぞありあけの 「つらき心ぞあり」と「ありあけの月」の掛詞。○月とやまにやいりもしなまし 月と一緒に山に入ってしまうのか、どうしよう。当時、月は山の端に沈むと意識されていたし、人が

山に入るのは、出家を意味した。「や……まし」はためらいの気持ちを表す。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

三六六 いでゝこぬ<sup>くるイ</sup>山もかはらぬながつきのありあけの月のかげをこそまで<sup>つらゆき</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】月がなかなか出てこない、山も変わらない、そのような長月の有明の月の光を待つことです。

【語句】○いでゝこぬ 所載欄の貫之集では傍書と同じ「いでてくる」。「いでてくる」の方がわかりやすい。○山もかはらぬ 同じ山から月が出ることで永遠性を表す。○ながつきのありあけの月 「有明の月」は、陰暦十五日以後、特に二十日頃の、夜が明けても、まだ空に残っている月。「長月の有明の月」と続ける形が多かった。三六四番参照。○かげをこそまで 光を待つことです。「かげ」は光の意。貫之集では「影をこそみれ」。同じ山から出る、有明の月の変わらぬ光に、変わらぬもののすばらしさを感じた。

【所載】貫之集Ⅰ・六八九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰ・六八八詞書には「延長五年九月、右大臣殿前裁の合負けわざ、内舍人橘のすけなはつかうまつる州浜に書ける」とあり、「月」の題で当該歌が続く。萩谷朴によると、この前裁合は延長三年三月に忠平に下賜された東院を五年秋に改造新築したときに催された。『平安朝歌合大成』では三三・「延長五年」秋小一条左大臣忠平前裁合の補二としてこの歌をあげる。「すけなは」は伝未詳。貫之集Ⅰ・六八八番から六九四番までの一連の歌群には、不変（永遠）と長寿を寿ぐ賀歌が並ぶ。

三六七 しらつゆをたまになしたるながつきのありあけの月よみれどあかぬかも

【異同】ナシ

【現代語訳】白露を玉かと思わせる長月の有明の月は、いくら見ても飽きませんよ。

【語句】○しらつゆをたまになしたる 露が月光にきらめいて、玉のように見えることをいう。「なす」は、あるものを別の状態のものにする意。所載欄の人麿集では「たまにつくれる」、家持集では「たまにもぬきて」。露を

玉に見立てる歌は古今集二五番「秋ののにおくしらつゆは玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ」等数多く見られる。○ながつきのありあけの月よ 人麿集では「長月の有明のかげは」、家持集では「なかつきのありあけのつきを（は）」。「つくよ」は月、月の光。

【所載】万葉集・二二三三（旧二二二九）白露乎 玉作有 九月 在明之月夜 雖見不飽可聞 シラツユヲタマニナシタルナガツキノアリアケノツキヨミレドアカヌカモ しらつゆをたまになしたるながつきのありあけのつくよみれどあかぬかも 人麿集Ⅰ・一三八／家持集Ⅰ・一四四／家持集Ⅱ・一三四

三六八 しぐれふるあか月つきよひもとかできみをかなしとをらましものを

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨の降る暁月夜に、私も紐を解かずに、あなたを愛おしいと思っていたいのに。

【語句】○しぐれふる 時雨は、秋の末から冬の初め頃に、降ったり止んだりする雨。降り続く雨ではないので、暁月夜に続くうる。「神無月あり明の月のしぐるるを又われならぬ人やみるらむ」（時代不同歌合・二八九・赤染衛門）。○あか月つきよ 月の残っている夜明け方。○ひもとかで 下紐（下裳・下袴などの紐）を解かずに。所載欄の万葉集・人麿集ともに「ひもとかず」。「紐解く」は男女が共寝する意を表すことが多い。○きみをかなしと あなたを愛おしいと思つて。万葉集では「恋ふらむ君と」、人麿集では「恋しき君と」。万葉集の本文がわかりやすいが、こゝは六帖の本文によつて解釈しておく。○をらましものを いたいのに。「まし」は願望を表す。【所載】万葉集・二三〇九（旧二二〇六）四具礼零 暁月夜 紐不解 戀君跡 居益物 シグレフルアカツキヅキヨヒモトカズコヒシキキミトララマシモノヲ しぐれふるあかときづくよひもとかずこふらむきみとをらましものを 人麿集Ⅲ・五五四

【参考】万葉集では二二三〇八（旧二三〇五）番「旅尚 襟解物乎 事繁三 丸宿吾為 長此夜（旅にすら紐解くものを言繁みまろ寝ぞ我がする長きこの夜を）」との問答歌。人の噂を訪ねない理由にして、秋の夜長の一人寝の侘しさを訴える男に対して、「紐も解かずに（他の女と共寝することなく）自分を恋しく思っているというあなたと一緒に居られればいいのに」と返したもの。

ゆふやみ

三六九 いもがめのみまくほしけくゆふやみのこのはがくれの月まつごと

【異同】ナシ

【現代語訳】あの子の顔を見たいと思う気持ちは、夕闇の木の葉に隠れている月を待つのと同じようなものです。

【語句】◎ゆふやみ 日没後まだ月が出なくて暗い頃。特に陰暦二十日前後のことをいうことが多い。○いもがめ 「め」は目に映る顔や姿。「妹が」などの限定を伴って会いたいと思う人の顔や姿をいう。所載欄の人麿集では「いもにより」（妹のせいで）。○みまくほしけく 「見む」のク語法と「欲し」のク語法の複合形で、見たく思う意。○このはがくれの月 木の葉に隠れてなかなか現れない月。人麿集では下句「このはがくれをまてこそゆけ」。女の許へは月の光を頼りに通うのが習いだった。

【所載】万葉集・二六七四（旧二六六） 妹目之 見眷欲家口 夕闇之 木葉隱有 月待如 イモガメノミマクホシケクユフヤミノコノハゴモレル（カクレテ）ツキマツガゴト いもがめのみまくほしけくゆふやみのこのはごもれるつきまつごとし／人麿集Ⅲ・四七〇

【参考】万葉集第四句「隠有」は、コモレルともカクレルとも読めるが、『時代別国語大辞典』（上代編）に「カクレルは視界内から外へ去るといふ動きをあらわし、コモルは対象が奥に入りかくれた状態をあらわす」という点にその差が認められる」とあり、諸注もコモレルとしている。

三七〇 ゆふやみはみちもみえねどふるさとはもとこしこまにまかせてぞくる

【異同】ナシ

【現代語訳】夕闇は暗くて道も見えませんが、昔馴染んだ家には、そのころ通いなれた馬にまかせて来ましたよ。

【語句】○ゆふやみは 所載欄の大和物語では「夕されば」（夕方になると）。○ふるさと 古い馴染みの地。ここでは、かつて通いなれていた女の家をいう。「君しのぶ草にやつるるふるさとは松虫のねぞかなしかりける」（古今集・二〇〇）。○こま 馬の歌語。○まかせてぞくる 随ってきましたよ。「まかす」は随う意。所載欄の文獻では「まかせてぞ行く」が多い。

【所載】後撰集・恋五・九七八／綺語抄・六五三／奥儀抄・三三八／和歌色葉・三三四／大和物語・五十六段・七五

【参考】大和物語によれば、この歌は兼盛が、兵衛の君（藤原兼輔の兄兼茂の娘）に詠んだ歌。後撰集ではよみ人

知らず。返歌「駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな」。『後撰集標柱』は、桓公が雪で道に迷った時、管仲の言に従って老馬を放ち、それに随って帰るを得た、「管仲随馬」（蒙求）の故事によると指摘する。

〔以上五首担当 三浦〕

大□娘女<sup>宅</sup>

三七一 ゆふやみはみちたどくし月まちてかへれわがせこそそのまにも見ん

【異同】作者名、底本ハ「宅」ニ似タ字ノ右ニ改メテ「宅」ヲ記ス。

【現代語訳】夕闇の時は道が薄暗くて分かりにくうございます。月が出るのを待ってお帰りください、あなた。その間にもあなたを見ていましょう。

【語句】○ゆふやみ 夕方、日が落ちてまだ月が上がらない間の闇。またその「ゆふやみ」時分のこと。○たどくし 夕やみの薄暗さのために、目標やあたりの様子が分りにくいさま。○かへれわがせこ お帰りください、あなた。

【所載】新勅撰集・恋四・八八一／万葉集・七一（旧七〇九）夕闇者 路多豆多頭四 待月而行 吾背子 其間 尔母将見 ユフヤミハミチタヅタヅシツキマチテユカムワガセコソノマニモミム ゆふやみはみちたづたづしつきまちていませわがせこそそのまにもみむ／伊勢集Ⅰ・四三七／伊勢集Ⅱ・四四二／俊頼髓脳・一三一

【参考】作者名「大宅娘女」は、万葉集の作者名に一致する。

ほし

三七二 ひくるれば山のはにいづるゆふつづのほしとは見れどあはぬ<sup>君イ</sup>ころ哉

【異同】ナシ

【現代語訳】日が暮れると山の端に出てくる宵の明星の、その「星」ではないが、「欲し」いとは思って見るけれども、恋しい人に逢えない今日この頃だ。

【語句】◎ほし 星。太陽・月・地球以外の天体の称。○ゆふつづ 夕方西の空に見える金星。宵の明星。上三句は、「ほし」を導き出すための序詞。○ほしとは見れど 「星」に「欲し」を掛ける。「欲し」は、この場合「逢



いたい」ということ。逢いたいとは思って見るけれども。「あひ見まく星はかずなく有りながら人に月なみ迷ひこそすれ」(古今集・一〇二九)。○あはぬころ哉 (恋しい人に) 逢えない今日この頃だ。

【所載】万代集・三〇五五／夫木抄・七七〇三／忠岑集Ⅱ・四四／忠岑集Ⅲ・六八／忠岑集Ⅳ・六二

### 三七三 わがこひはそらなるほしのかずなれや人にしられでとしのへぬれば

【異同】ナシ

【現代語訳】私の恋は、空にある星の数のようなものだろうか。あの人に知られずに年月ばかりが経ってしまったので。

【語句】○わがこひはそらなるほしのかずなれや わたしの恋は、空にある星の数のようなものだろうか。「なれや」は、「……たろうか」と疑問の形にしながら、「まるで……のようだ」と、それを肯定する言い方。わが恋の思いは、まるで空にある星のように数かぎりもない、ということ。○人にしられで あの人に知ってもらえなくて。「人」は、この場合恋の相手をさしている。「で」は、打消のはたらきをする接続助詞、「ずして」の意。空にある星の数がどれほどあるか人に知られぬように、わが恋の尽きせぬ思いもあの人に知ってもらえない、ということ。

【所載】躬恒集Ⅰ・三〇八／躬恒集Ⅲ・三三二

### 三七四 あづまやのふせやいたまのあはぬよりそらのほしともみゆるきみかな

【異同】ナシ

【現代語訳】屋根を四方に葺き下ろした小さい粗末な家の、ふき板の板間が合わない、ちょうどそのように、逢わなくなつて以来、空の星のように欲しい(逢いたい)と見えるあなたであることよ。

【語句】○あづまや 屋根を四方に葺き下ろした造りの家。○ふせや 屋根を地に伏せたような低い家。小さい粗末な家。○いたま 板間。板ぶき屋根のふき板の板と板のあいだ。初句は、「あはぬ」にかかる序詞。○あはぬより 板間が「合はぬ」ことに恋の「逢はぬ」を掛ける。逢わなくなつて以来。「あはぬ」は、体言的用法。「より」は、「逢はぬ」ようになったことの時間的起点をあらわす。○ほしともみゆる 「星」に「欲し」(逢いたい意)を掛ける。三七二番歌参照。

【所載】ナシ

三七五 月かげにはがくれにけりあかほしのあかぬ心にいでゝくやしく

【異同】ナシ

【現代語訳】明けの明星は月の光によつて隠れてしまったなあ。せつかく明星が（私を）眺め足りないような気持ちにさせながら出ていたのに、くやしいことに隠れてしまった。

【語句】○月かげに 月の光によつて。○はがくれにけり 「はがくれ」は、葉隠れ。草や木の葉の蔭にかくれることだが、ここは月光の明るさによつて「あかほし」の光がかき消されたことを比喩的に言つたものか。蔭にかくれて見えなくなつてしまったなあ。○あかほし 明けの明星。暁方の空に見える金星。○あかぬ心 充分に満足しない気持。ここでは「あかほし」を眺め足りない気持。「あかほしのあかぬ」で、同音がくり返されている。○いでゝくやしく せつかく出ていたのに残念なことに。

【所載】ナシ

【参考】明星が「はがくれで」見えなくなつたことを残念がつた歌だが、この下句には、恋の暗喩があるのかもれない。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

三七六 よひごとになちもいでなむゆふつづの月なきそらのひかりとおもはん

【異同】ナシ

【現代語訳】宵ごとに出てきてほしいものです。宵の明星のように、月のない空の光と思ひましよう。

【語句】○たちもいでなむ 出てきてください。接頭語「たち」と詠えの助詞「なむ」を用いる。○ゆふつづ 夕つづ。夕方の星。宵の明星（金星）の異名。次の三七七番歌が万葉集卷十に収載されており、それが古い例。

【所載】夫木抄・七七〇二

三七七 ゆふつづもかよふあまぢのいつしかとあふぎてまたん月人おとこ

【異同】ナシ

【現代語訳】宵の明星も通う大空の道を、早く出たとふり仰いで待とう、月の出るのを。

【語句】○ゆふつゞ 三七六番歌参照。○あまぢ 天路。大空の道。○いつしかと 早く出てほしい、の意。○月人おとこ 月人をとこ。月を擬人化した表現。この歌は万葉集では秋雑歌・七夕歌群に収められているので、本来待っているのは、牽牛を待っていることになる。しかし、古今六帖では、牽牛を待っているのか、月の出を待っているのかは不明。一応、月の出を待っていると解した。

【所載】万葉集・二〇一四（旧二〇一〇）夕星毛 往来天道 及何時鹿 仰而将待 月人壮 ユフツヅモカヨフ アマヂライツマデカアフギテマタムツキヒトヲトコ ゆふつづもかよふあまぢをいつまでかあふぎてまたむつきひとをとこ／夫木抄・七七〇四／人麿集Ⅲ・一三六／赤人集Ⅰ・二八一／赤人集Ⅱ・一六〇

三七八 君にのみあはまくほしのゆふさればそらにみちぬるわがこゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたにただ逢いたいと望んで、夕方になると、空に星が満ちるように、その気持ちでいっばいになつてしまう私の心だよ。

【語句】○あはまくほし 逢いたいと望む。「欲し」に「星」をかける。○ゆふされば 夕方になると。

【所載】ナシ

三七九 はるのかぜ  
はるのかぜ  
はるのかぜのふきそめしよりたきつせのこほりもとけてはなぞちりける

【異同】ナシ

【現代語訳】春風が吹き始めて、急流の水も溶けて川の水が波の花となり、それが碎けて散っていくことだ。

【語句】◎はるのかぜ 以下、四季の風を題とする。「春の風」は東風解氷に始まり、花散らしの風となる。○はるかぜの 以下「こほりもとけて」まで、いわゆる東風解氷をあらわす。「袖ひちてむすびし水のこほれるを 春立つけふの風やとくらむ」（古今集・二・貫之）が有名。○たきつせ 滝つ瀬。もと「滾（たぎ）つ瀬」で、水の激しく流れる瀬。○はなぞちりける 春のはじめに花が散る、という季節に合わない表現になるが、古今集

・一二・当純の、「谷風にとくるこほりのひま」ことにうちいづる浪や春のはつ花」を視野に入れると、まさに「風で氷が解ける」―「解けた氷が波の花となる」―「波の花がたきつせで散る」となる。

【所載】ナシ

良峯宗貞

三八〇 花のいろはかすみにこめて見せずともかをだにぬすめはるの山かぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】花の色は霞で隠して見せなくても、その香りだけは盗み出しておくれ、春の山風よ。

【語句】○かすみにこめて 花を霞が隠すという典型。○かをだにぬすめ 「盗む」は歌語としては珍しいが、小島憲之は、「白詩に多い語」であり、香を盗むとは「花の香をひそかにとり入れる、香をもたらしして漂わせること」であると説く『古今集以前』塙書房、一九七六年）。丹羽博之は晋書・賈充伝の偷香の故事が背景にあるとする。女（賈充の娘）が密かに通じる男（韓寿）に父秘蔵の香を盗んで送り、その香によって娘の相手を知ったこの故事に関して、菅原道真も詩に詠んでおり、当時知られたものであったとするが、この故事は隠された裏の意味として捉えるべきだとする（『古今集春上91番歌』『香をだにぬすめ春の山風』と『偷香』の故事）『平安文学研究』一九八三年十二月）。なお、古今六帖には「花の色に雪はまじりて見せずともかをだにぬすめ人のしるべく」（七一六）という歌があるが、これは古今集・三三五では、「かをだににほへ」とする小野篁の詠である。

【所載】古今集・春下・九一／新撰和歌・五五／遍昭集Ⅰ・一／遍昭集Ⅱ・一／和歌体十種・三七

【参考】作者名「良峯宗貞」は遍昭の俗名であり、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本〕

三八一 はるかぜは花のあたりをよきてふけこゝろづからやうつろふと見ん  
ふぢはらのよしかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】春風は（花を散らせるものと言われているが）花のあたりを避けて吹いて見よ、そうすれば、風の仕業か、そうではなく花自身が自分からうつろうのか確かめられるから。

【語句】○よきて 「よく」は上二段。よける。避ける。従来「よぎて」と読まれていたが清音。○こゝろづから 自分の意志で。○うつろふ 色あせる。衰える。

【所載】古今集・春下・八五／興風集Ⅰ・一／興風集Ⅱ・一／俊頼髓脳・一一三／綺語抄・七三四／万葉集時代難事・六六／桐火桶・五七

【参考】作者名「ふちはらのよしかげ」は所載欄の古今集に一致する。興風集は自撰ではなく、別人の歌も含む。藤原好風（良風とも）は古今集に一首を残す。寛平十（八九八）年左兵衛少尉、延喜十一（九一一）年従五位下。出羽介。

### みつね

三八二 吹風をいとひもはてじむめのはなちりくるときぞかはまさりける

【異同】ナシ 「いとひもはてし」細字二行二書ク。「かはまさりける」細字二行二書ク。

【現代語訳】吹く風を（花を散らすものと）嫌い通すまい、花の散りくる時にいつそう花の香がまさるのだった。（風が梅の香を運ぶのだった）。

【語句】○いとひもはてじ 厭ひも果てじ。「厭ひ果つ」に打ち消しの助詞「じ」の接続したかたち。「も」は強意の助詞。最後まできらい通すまい。

【所載】拾遺抄・春・一六／拾遺集・春・三〇／躬恒集Ⅰ・一〇九／躬恒集Ⅱ・二〇／源平盛衰記・一八七

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

### もとかた

三八三 かすみたつはるの山べはとをけれどふきくるかぜは花のかぞする

【異同】ナシ 作者名「もとかた」ハ小字デ書キ入レテイル。

【現代語訳】霞のたなびく春の山辺ははるか遠くにあるが、吹き来る風は（まるで近いかのように）花々の香がする。

【語句】○とをけれど 遠けれど。山べは遠いが風は「近い」とは言わずに「花の香がする」と表現する。対句的である。

【所載】古今集・春下・一〇三／新撰万葉集・二九／寛平御時后宮歌合・二九／時代不同歌合・七三／西行上人談抄・四／桐火桶・五九

【参考】作者名「もとかた」は所載欄の文献に一致する。

三八四 春はまづあづま<sup>ち</sup>よりぞわかくさのことはつてよむさしのゝかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】春は東からくるもの、東国から春の萌え出る若草の言葉を一番先に伝えてよ、武蔵野の風よ。

【語句】○あづまぢ 東路。東国。陰陽五行説では東は春にあたる。春は東から来るとする。これと同様、西は秋にあたり「西こそ秋のはじめなりけり」(古今集・秋下・二五五)などと、西を「秋の来る方角」とする歌もある。○わかくさの 萌え出たばかりの草。「若草の葉」として「ことのは」に掛けられた「葉」に続く。○ことは言葉。○つてよ 「伝える」という意味の動詞「つつ」(下二段活用)の命令形。伝えよ。

【所載】古今六帖「人づて」二八六四

【参考】春が東から来る、ということについて、礼記・月令に「立春之日、天子親帥三公・九卿・諸侯・大夫以迎春於東郊」とある。また、後拾遺集の春の巻頭近くに、春は東より来るということを踏まえた歌がある。

みちのくにははべりけるととき、はるたつひよみはべりける

いでてみよいまはかすみもたちぬらんはるはこれよりすぐとこそきけ (二)

春はひむがしよりきたるといふ心をよみ侍りける

あづまちはなこそせきもあるものをいかでか春のこえてきつらん (三)

とものり

三八五 花のかをかぜのたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

【異同】ナシ

【現代語訳】花の香をむこうへゆく風に伴わせて送り、(こちらはもう花が咲く春と知らせ) 鶯を誘う案内役として遣わします。

【語句】○かぜのたよりにたぐへてぞ 「たより」は名詞で、使者の意。○しるべにはやる 「しるべ」として

違わす、の意。こちらへ案内する者のことを「しるべ」といった。古今六帖三〇番は「しるべにはする」。

【所載】古今六帖「残りの雪」三〇番既出。

【参考】作者名「どものり」は古今集に一致する。

〔以上五首担当 平野〕

そせい

三八六 はなちらす風のやどりはたれか<sup>そせい</sup>しるわ<sup>そせい</sup>れにを<sup>そせい</sup>しへ<sup>そせい</sup>よ<sup>そせい</sup>ゆ<sup>そせい</sup>きてう<sup>そせい</sup>ら<sup>そせい</sup>み<sup>そせい</sup>ん<sup>そせい</sup>わ<sup>そせい</sup>れにを<sup>そせい</sup>し<sup>そせい</sup>へ<sup>そせい</sup>  
よゆきてうらみん

【異同】底本デハ丁ニ跨ッテ下句ガ二度繰リ返シ書写サレテイルガ、前者ガミセケチニヨッテ抹消サレテイル。  
【現代語訳】桜の花を散らす風の今夜の宿は、誰か知っているか。もし知る人があれば私に教えてほしい。そこへ行って恨みごとを言おう。

【語句】○やどり 宿。自宅以外の宿泊所をいう。

【所載】古今集・春下・七六／素性集Ⅰ・一一／素性集Ⅱ・一七／素性集Ⅲ・三

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

三八七 つれもなき人におもひをはる風はわがもゆるごとふきもつげなん

【異同】ナシ

【現代語訳】冷淡な人に、私の思いを、春風は私の燃えるように烈しい思いそのもののように強く吹いて、告げ知らせしてほしいものだ。

【語句】○つれもなき 自分に無関心である。冷淡である。無情な。「つれ」は「連れ」の意で、つながりということ。「つれもなき人を恋ふとて山びこの答へするまでなげきつるかな」(古今集・五二二、古今六帖・九九二)。

【所載】ナシ

三八八 春かぜのいたくふくらしなだのあまのつりするをぶねさしかへる見ゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の突風が強く吹いているらしい。海上の難所に出て釣りをする漁夫の乗る小舟が岸に帰るのが見える。

【語句】○春かぜの 所載欄の文献では「あゆのかぜ」。○なだ 灘。海上の風波が荒く、航行に注意を要するところ。所載欄の文献では「なご」。○あま 漁夫。○さしかへる 「さし」は、語の意味を強めたり、語調を整えたりする接頭語。ここでは「かへる」を強調し、すぐにひきかえすの意。

【所載】万葉集・四〇四一（旧四〇一七）東風（越俗語東風謂<sub>ニ</sub>之安由乃可<sub>一</sub>是アユノカゼ<sub>一</sub>也）伊多久布久良之 奈吳乃安麻能 都利須流乎夫祢 許芸可久流見由 アユノカゼイタクフクラシナゴノアマノツリスルヲブネ  
コギカクルミユ あゆのかぜいたくふくらしなごのあまのつりするをぶねこぎかくるみゆ／夫木抄・七七五二／  
綺語抄・七八／和歌童蒙抄・三六／袖中抄・七六三／古来風体抄・一八七

三八九 はる風は花のなきまにふきはてねさきなば思なくて見るべく

【異同】ナシ

【現代語訳】春風は花の咲かないうちに吹き終わってしまえ。花が咲いたら風の心配なくゆったりと花を見ることのできるように。

【語句】○花のなきまに 花が咲いていないうちに。○ふきはてね 吹き果ててしまえ。「はてね」は、動詞「はつ」の連用形＋助動詞「ぬ」（完了・強意）の命令形。○思 おもひ。気がかりなこと。風で花が散ることに對する心配。

【所載】拾遺集・雑春・一〇三五

三九〇 にほふより心あだなるはなゆへにのどけきはるの風もうらめし

【異同】ナシ

【現代語訳】色美しく咲くとすぐに、浮気心をおこして散ってしまう花のために、のどかな春の風も恨めしいことであるよ。

【語句】○にほふより 「にほふ」は、当該歌では、視覚に関する語。色美しく映える。「より」は、……する



とすぐに、の意。「あづさゆみ春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな」（古今集・一二七・みつね）。○あだなる 真実さが無い。移り気で誠実さが無い。浮気である。花の散ることを、風の誘惑のせいと見ている。

【所載】続後撰集・春下・一一八／寛平御時中宮歌合・七

〔以上五首担当 斎藤・長戸〕

三九一 ふく風やはるたちきぬとつげつらんえだにこもれる花さきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風が春が立ってやってきたよと告げたのだろうか、枝のなかに籠もり隠れていた花々も咲き出したことだ。

【語句】○ふく風やはるたちきぬとつげつらん 「はるたちきぬ」は春が立ってやってきたという擬人法。「ふく風」が「つげ」というのも擬人法で、入子型のごとく二重の擬人法が用いられている。このような春と風の擬人は、新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注の指摘にもある通り、白居易の詩「潯陽春 三首」の「春生」の翻案とみられる。参考欄参照。

【所載】後撰集・春上・一二／新撰万葉集・一五／和歌童蒙抄・一〇七。

【参考】白居易の詩には「春生何処闇周遊 海角天涯遍始休 先遣和風報消息 続教啼鳥説来由（春生じて何れの処にか闇に周遊する 海角天涯遍くして始めて休す 先づ和風をして消息を報ぜしめ 続いで啼鳥をして来由を説かしむ）」（潯陽春 三首 春生・白氏文集・一〇二〇）とあり、春が生まれ、あちこちを周遊して海の果て天の果てまでいって漸く休むのである、和やかな風に春が来たという便りを届けて知らせ、鳴く鳥によって、春の来た由来を語らせるのであるという形で、「春」そのものが人であるかのような詠まれ方をしている。春の擬人と漢詩文の関わりについては、田中幹子『古今集』における季の到来と辞去について―三月尽意識の展開―（『中古文学』一九九七年三月）にも詳しく論じられている。

三九二 はるかぜのわがやどにだにふきこずはしらぬさとなるはなをみましや  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】春風がわが宿にまでも吹いて来なかったなら、見知らぬ里に咲いた花を見ただろうか。

【語句】○ずは 打消の順接仮定条件。もし……でないならば。○みましや 見ただろうか、いや見ない。「ましや」は反語の反実仮想。「ずは……みましや」の例歌として「けふこずはあすはゆきとぞふりなましきえずはありともはなとみましや」（古今集・六三）がある。類想の歌としては「吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや」（古今集・一一八）。

【所載】ナシ。参考欄参照。

【参考】「おひかぜのわがやどにだにふきこずはあながらそらの花をみましや」（伊勢集Ⅰ・一一二、伊勢集Ⅱ・一一四、伊勢集Ⅲ・一一一）が原歌とみれば、作者名「いせ」と一致する。

三九三 わがためのなにのあたとかはるかぜのをしむとしれる花をしもふく

【異同】ナシ

【現代語訳】私に対して何の恨みがあるというので、春風は、大切にしていると知っている花に限って吹きつけるのだろうか。

【語句】○わがためのなにのあたとか あた（仇）は、恨み。所載欄の伊勢集諸本はすべて「わがために」。貫之集に「わがためのあたにざりける年月は思ひもなさで行きかへりつつ」（五八三）という例があるが、「なにの」といった語句を間に入れた例は見られない。

【所載】続古今集・雑上・一五二五／万代集・三五五／伊勢集Ⅰ・三一〇／伊勢集Ⅱ・三〇九／伊勢集Ⅲ・三〇九

【参考】作者名はないが、続古今集には「伊勢」とあり、伊勢集にも入集する。

夏のかぜ

みつね

三九四 ゆくみちはまだとをけれど夏やまのこのした風はたちうかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】これから行く道はまだ遠いけれども、夏山の木蔭の下を吹く風は涼しく、立ち去るのがつらいこと

だ。

【語句】◎夏のかぜ 夏の風は冬の風とともに、春の風、秋の風ほど多く取り上げられる歌材ではなかったが、納涼の主題と取り合わされる場合が多い。○とをけれど とほけれど。遠いけれど。○このした風 木の下を吹く風で山下風にならった造語。「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」(貫之集・七九四)がよく知られるが、夏の歌としても「夏衣薄きかひなし秋までは木の下風もやまず吹かなん」(貫之集・一五〇)がある。類想歌に「夏山の蔭をしげみや玉ぼこの道行き人も立ちどまるらん」(拾遺集・一三〇、貫之集・一)がある。

【所載】拾遺集・夏・一二九／躬恒集Ⅰ・九五／躬恒集Ⅱ・二〇七／躬恒集Ⅲ・一四二／躬恒集Ⅴ・三〇

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。ただし初句「ゆくみちは」と四句「このした風は」が一致するのは躬恒集Ⅰのみ。他は初句「行末は」四句「木の下蔭ぞ」となっている。拾遺集の詞書に「女四のみこの家の屏風に」とある。女四のみこは勤子内親王。

三九五 なつのかぜわがたもとにしつゝまればこひしき人のつとにしてまし

【異同】ナシ

【現代語訳】涼しい夏の風を私の袂に包むことができるなら、恋しい人のみやげにすることができのに。

【語句】○つゝまれば 包むことができるなら。「れ」は可能の助動詞「る」の未然形。「ば」は順接仮定条件。

「まし」と呼応して反実仮想となる。「かくばかりおつる涙のつつまれば雲のたよりに見せましものを」(伊勢集・五三三)。○つと みやげ。贈り物。恋しい人のための「つと」は万葉集以来の典型的発想で、「伊勢の海の沖つ白浪花にもが包みて妹が家づとにせむ」(万葉集・三〇九(旧三〇六))、「宇治川に生ふる菅藻を川早み採らず来にけりつとにせましを」(万葉集・一一四〇(旧一一三六))など例歌は多いが、風を「つと」にするという例は珍しい。

【所載】古今六帖「つと」三四七五／新撰万葉集・二九三／夫木抄・七七三〇／寛平御時后宮歌合・五一

【参考】和歌では、袂に包むのは、「つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり」(古今集・五五六)のように「涙の玉」とされる場合が多いが、風が袂(袖)に入るという例として「出入君懷袖 動揺微風発(君が懷袖に出入し 動揺して微風発す)」(班婕妤「怨歌行」・文選・樂府上)がある。

〔以上五首担当 中野〕

三九六 ふくかぜはわがやどにくるなつのよは月のかけこそすゞしかりけれ

【異同】 ふくかぜは—ふくかぜの（大）

【現代語訳】 吹く風がわが家に入ってくる夏の夜は、月の光が実に涼しいことだ。

【語句】 ○ふくかぜは 所載欄の文献では「ふくかぜの」となっている。その方がわかりやすい。○わがやどにくるなつのよは わが宿に来る夏の夜は。「くる」は連体形であるから「なつのよ」にかかる。二句切れとはならない。○月のかげ 月の光。

【所載】 新撰万葉集・三〇一／寛平御時后宮歌合・五七

三九七 夏ながらみぎはのかぜのすゞしきはなみにとひてぞしるべなりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 夏でありながら水のほとりの風の涼しいわけは、波に問うて知ることができる。（波がそれを知らせてくれるよすがだ。）

【語句】 ○夏ながら 夏でありながら。夏であるにもかかわらず。○みぎは 水際。水のほとり。○なみにとひてぞしるべなりける 「問ひて知る」に、「しるべ（手引き、よすがの意）」を掛けている。波に問うことによつて知ることができる。

【所載】 ナシ

三九八 ことのねにひゞきかよへるまつかぜにしらべてもなくせみのこゑかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 琴の音と合奏するように鳴っている松風に、さらに音（ね）をととのえ合わせて鳴く蟬の声だなあ。

【語句】 ○ことのねにひゞきかよへるまつかぜ 琴の音にひびきを合わせるように吹いている松風。李嶠百二十詠の「松声入夜琴（松声夜の琴に入る）」の句の想をふまえるか。「松のおと琴にしらぶる山風は滝の糸をやすげてひくらん」（貫之集Ⅰ・九四）。○しらべて 楽の調子や音律を整えて。

【所載】新拾遺集・夏・三〇三／新撰万葉集・七三／夫木抄・三五八四／寛平御時后宮歌合・七五

三九九 雨ふるとふくまつかぜはきこゆれどいけのみぎはゝまさらざりけり  
つらゆき

【異同】いけのみきはゝ―かけの汀は(大)

【現代語訳】あたかも雨が降るようだと、吹く松風の音は聞こえるけれども、(雨ではないのだから)池のみぎわの水位は増さないよ。

【語句】○雨ふるとふくまつかぜはきこゆれど 雨が降るかのように吹く松風の音は聞こえるが。雨の音を松籟にたぐえる発想は、千載佳句・九九六に「山深野客如禪客 夜久松声似雨声(山深くして野客は禪客のごとし 夜久しくして松声は雨声に似たり)」と見える(渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一年)。貫之も、当該歌のほか「雨とのみ風吹く松はきこゆれど声には人もぬれずぞありける」(貫之集I・二五二)など、好んでその想の歌を詠んでいる。○みぎはゝまさらざりけり 「みぎは」は水際。三九七番歌参照。水際の水位は上がらない。

【所載】古今六帖「いけ」一六六六／拾遺抄・雑下・五一八／拾遺集・雑上・四五四／貫之集I・一二〇  
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

四〇〇 かげふかきこのしたかぜのふきくればなつのうち○からあきに○ざりける  
おなじ人  
なイ  
ぞあイ

【異同】ナシ

【現代語訳】深い木蔭を木の下風が吹いてくるので(涼しくて)、まだ夏のうちでありながらも秋であったよ。

【語句】○おなじ人 三九九番歌の「つらゆき」をさす。○かげふかき 木蔭の深い。夏の樹が繁って深い木蔭を作っているさま。○このしたかぜ 樹蔭を吹き通る風。○なつのうちから 傍記「な」を補って「なつのうちながら」として解した。まだ夏のうちでありながら。

【所載】貫之集I・四七二

【参考】作者名「おなじ人」(貫之)は、所載欄の文献に一致する。

あきの風

四〇一 きみまつとこひつゝふればわがやどのすだれうごきてあき風ぞふく

【異同】すたれうこきて―すゝきうこきて（御・桂・大）

【現代語訳】あなたのおいでを待って恋い慕いながら過ごしていると、私の家の簾が動いて秋風が吹くことですよ。

【語句】◎あきの風 秋の訪れを知らせるものとしてよく詠まれる。古今六帖のこの項には、雁が飛来する季節の風、秋萩をいろどる風、という詠み方のもも含まれる。また「秋」は、恋歌では「飽き」と掛けることが多い。○きみまつと あなたを待って。あなたを待つべく。

【所載】新勅撰集・恋四・八八二／万葉集・四九一（旧四八八）君待登 吾恋居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹  
キミマツトワガコヒラレバワガヤドノスダレウゴカシアキノカゼフク きみまつとあがこひをればわがやどのすだれうごかしあきのかぜふく、一六一〇（旧一六〇六）君待跡 吾恋居者 我屋戸乃 簾令動 秋之風吹 キミマツトワガコヒラレバワガヤドノスダレウゴカシアキノカゼフク きみまつとあがこひをればわがやどのすだれうごかしあきのかぜふく／家持集Ⅰ・九九／家持集Ⅱ・九〇／和歌童蒙抄・三九

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると作者は額田王で、近江天皇を思つて作つた歌。古今六帖・一三七九番に「すだれ」の題で、「ひとりしてわがこひをればわがやどのすだれとほりて秋かぜぞふく」の類歌がある。

四〇二 わがやどのおばながうへのしらつゆのをきし日よりぞ秋かぜのふく

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の尾花の上の白露が置いた日から、秋風が吹き始めたよ。

【語句】○おばな をばな。尾花。薄（すすき）のこと。○をきし日 おきし日。

【所載】新古今集・秋下・四六二／家持集Ⅰ・一七七／家持集Ⅱ・二二〇／秀歌大体・五五

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると、作者は家持。万葉集・一五七六（旧一五七二）に「大伴家持

が白露の歌一首」として、「我がやどの尾花が上の白露を消たずて玉に貫（ぬ）くものにもが」（古今六帖・三六九二番にも「すすき」の題で収載）という、上句の類似した歌が見える。また同一ではないが、類似した歌が、人麿集Ⅲ・一五〇、人麿集Ⅳ・二八八にも見える。

四〇三 うちさはざかりぞきぬらしわがせこがころものひまにときつ風もをイふく

【異同】ころものひまに―衣のひまを（大）

【現代語訳】鳴き騒いで雁が飛んできたらしい。私のいとしい人の衣のすきまに秋の時つ風が吹いている。

【語句】○せこ 一般に女性が男性を親しんで呼ぶ語。○かり 雁。秋に飛来するガンカモ科の渡り鳥。○ときつ風 時つ風。季節・時刻によって吹く風。当該歌では、上句に雁が来たと詠まれていることから、秋の風ということになる。「ひまに」の傍書「ひもを」をとれば、「時つ風」の「時」に「解き」が掛かる。

【所載】夫木抄・五四二五

四〇四 かりがねのつかひなるべしこのゆふべあきかぜさむくふきぞきぬなる

【異同】ナシ

【現代語訳】あれは、雁の使いなのであろう。今夕は、秋風が寒く吹いてきたよ。

【語句】○かりがねのつかひ 昔、中国で、蘇武が雁の足に手紙を結びつけて故国に連絡を取ったという故事『漢書』蘇武伝）により、雁を手紙を運ぶ使いと見立てた。「かりがね」は、ここでは鳥としての雁のこと。雁は秋になると飛来することから、秋風が寒く吹いて来ると、雁の使いがやって来たのだらうと推量した詠。「鴈がねは使ひに来むと騒くらむ秋風寒みその川の上に」（万葉集・三九七五（旧三九五三））。

【所載】ナシ

四〇五 たかまどのおばなふきしく秋風にひもときあけなたゞならずとも

【異同】ナシ

【現代語訳】高円の尾花にしきりに吹く秋風に紐を解き放とう。たとえ直接ではなくても。

【語句】○たかまど 高円。奈良市街地の東南、高円山麓一帯の地。○おばな 四〇二番歌参照。○ひもときあけな 衣の紐を解き放とう。「な」は、ここでは、一座の人に勧誘した言い方。○たゞならずとも 直接ではなくとも。具体的には意味がとりにくい、直に尾花に触れたりするのはなくとも、ということか。

【所載】万葉集・四三一九（旧四二九五）多可麻刀能 乎婆奈布伎故酒 秋風尔 比毛等伎安気奈 多太奈良受等母 タカマトノヲバナフキコスアキカゼニヒモトキアケナタダナラズトモ たかまとのをばなふきこすあきかぜにひもときあけなただならずとも／夫木抄・四三七四

【参考】所載欄の万葉集によると作者は大伴宿祢池主で、官人同土酒を携えて高円山に登った折の歌である。行楽の場で、くつろいで紐を解き放つて風に当たり、尾花には直接触れずとも、それに触れた風に紐を解いて当たらう、と言いなしたもののか。

〔以上五首担当 長戸〕

#### 四〇六 あきかぜはのわけ山わけふくなれどこひのみゝにはわくよしもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】もう飽きたと告げる秋風は野を分け山を分け吹いているけれど、恋をしているわが身の耳にはそれと区別するすべもないことだよ。

【語句】○あきかぜは 「秋風」の「秋」に「飽き」を掛ける ○こひのみゝ 本文不審。「恋の耳」と解す。恋しているがゆえに耳をそばだてるといふ発想は「あか月のねざめのみみにききしかどとりよりほかにこゑもきこえず」（伊勢集・一六七）、「ひとづてにさむしとききし風のおとをわがうたたねのみみなれにけり」（好忠集・二九〇）、「物おもへば雲ゐにみゆる雁金のみみにちかくも聞ゆるかな」（和泉式部集・一九三）など、見出すことができる。『古今和歌六帖標注』には「蔵本においの耳とあり、それよろし」とある。ただし「老いの耳」の本文を伝えるものは確認できない。所載欄の夫木抄では三句以下を「ゆくなれど恋のみだれはあくる夜もなし」とあり、解しやすい形で伝わる。

【所載】夫木抄・五四二六

【参考】夫木抄では典拠を「六一」（古今六帖の第一帖）と記す。



四〇七 あきかぜはときとふきぬしろたへの我ときごろもぬふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風はこの時と定めて吹いて来た。けど、私の縫い糸を解きほどこいた衣を縫い合わせてくれる人もいない。

【語句】○ときと 時と定めて。「ひぐらしは時と鳴けども恋ひしにたわやめ我は定まらず泣く」(万葉集・一九八六(旧一九八二))。○ときごろも 縫い糸を解いた衣「ときとふききぬ」の縁。万葉集「解衣(とききぬ)」の転。なお万葉集ではいずれも枕詞で「乱る」に掛かる。「解衣之(とききぬの)思ひ乱れて恋ふれどもなぞ汝が故と問ふ人もなき」(万葉集・二六二七(旧二六二〇))が夫木抄・一五五一四では初句「ときごろも」とある。

【所載】夫木抄・五四二七／家持集Ⅰ・一八二／家持集Ⅱ・二三〇

四〇八 あきはぎをいろどるかぜのふきぬれば人のこゝろもうたがはれけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩を色づかせる風が吹いて来たので、あなたの心も「飽き」風によって変わってしまうのではないかと疑われてしまうことだよ。

【語句】○あきはぎを 「あき」に「飽き」を響かせる。○いろどるかぜ 風によって木の葉が色づくという発想は「打ちはへて影とぞたのむ峰の松色どる秋の風にうつるな」(後撰集・三七四)にある。○人のこゝろも 色変わり、すなわち心変わりするのは秋萩だけではなく、あなたの心も、の意。「秋風に山のこのはのうつろへば人の心もいかがとぞ思ふ」(古今集・七一四)

【所載】後撰集・秋上・二二三／業平集Ⅰ・一一／業平集Ⅱ・八五／大和物語・二六五

【参考】後撰集の詞書には「女のもとより、ふん月ばかりにいひおこせて侍りける」とあり、業平の返歌も載せる。四一六番歌参照。大和物語・一六〇段では染殿内侍と業平との贈答とする。

四〇九 あしひきの山べにをりてあきかぜのひごとにふけばいもをしぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】山辺にいて、秋風が日増しに吹くので、あなたのことが思われてなりません。

【語句】○ひごとに 所載欄の万葉集「日異（ひにけに）」の転だが、ここでは「日増しに」の意。「秋風の日ごと」にふけば水ぐきの岡のこのはも色づくにけり（古今六帖・一〇三八）の場合も、万葉集・二一九七（旧二一九三）では二句目が「日異吹者（ひにけにふけば）」とある。

【所載】玉葉集・恋四・一六三七／万葉集・一六三六（旧一六三三） 足目木乃 山辺尔居而 秋風之 日異吹者 妹乎之曾念 アシヒキノヤマヘニフリテアキカゼノヒニケニフケバイモラシゾオモフ あしひきのやまへにをりてあきかぜのひにけにふけばいもをしぞおもふ

【参考】万葉集では、久邇京にいる大伴家持が奈良に留まる坂上大娘へ贈った歌とある。

四一〇 わびしくもをとのさやけくふくかぜのひごとにあきやもしはきぬらん

【異同】もしはきぬらん—もえはきぬらん（御・大）

【現代語訳】やりきれないことに、音をはっきりさせて風が日増しに吹いて秋が深まるように、日が経つにつれて飽きられる日が、もしかしたら、近づいているのだろうか。

【語句】○わびしくも 「わびし」はつらい、やりきれない、の意。「つれもなくあるらんひとを片思ひに我は思へばわびしくもあるか」（万葉集・七二〇（旧七一七）、「なつぐさのかりのよひとはわびしくも我に秋風吹き初めつるか」（古今六帖・三五六〇）。○さやけく はっきりと。声については「さやけさ」という場合が多い。「秋はぎをしがらみふせてなくしかのめには見えずておとのさやけさ」（古今集・二二七）。○ふくかぜの 初句からここまでが「あき」「きぬ」を導く序詞のようなはたらきをする。○ひごとに 万葉集「日異（ひにけに）」の転だが、ここでは「日増しに」の意。○あき 「秋」と「飽き」を掛ける。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 青木〕

四一一 こひつゝもいなばかきわけいゑみせばともしくもあらじあきのゆふ風

【異同】ナシ

【現代語訳】家人を思いながら、一面の稲穂を掻き分けるようにして小屋にいと、満足できるほどに吹いてく

るようだ、秋の夕風が。

【語句】○いなばかきわけいゑゐせば 「いゑゐ」は「家居（いへゐ）」。ここは、稲刈りの前後、一時的に家を離れ、自分の持ち田の周辺に小屋を作り、住むこと、という（日本古典文学全集『万葉集』）。○ともしくもあらじ 「ともし」は、不十分だ、少ない、の意。少なくともはないだろう。秋の夕風を十分に満喫できる、と言っているようでもあるが、やせ我慢か、戯れの気持ちがあるところにはあるのではないか。

【所載】新続古今集・秋下・五〇八／万葉集・二二三四（旧二二三〇）恋乍裳 稲葉搔別 家居者 乏不有 秋之暮風 コヒツツモイナバカキワケイヘキセバトモシクモアラジアキノユフカゼ こひつつもいなばかきわけいへをればともしくもあらずあきのゆふかぜ／人麿集Ⅰ・一三九／人麿集Ⅱ・五七／綺語抄・八三／六百番陳狀・一五

【参考】当該歌は人麿集に見えるが、現存の人麿集は問題が多く、作者を人麿と断定はできない。万葉集では作者名無表記である。また新続古今集にも作者を人麿とするが、これは現存人麿集によった故であろう。

#### 四二二 あきかぜの身にさむければつれもなき人をぞたのむくるゝよごと

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が身に染みて寒いので、つい、つれないあの人を頼りにしてしまうのです。日が暮れてゆく、夜ごと夜ごとに。

【語句】○つれもなき 「つれなし」は、反応がない、無情だ。「も」は強調。

【所載】古今集・恋二・五五五／素性集Ⅰ・二〇／素性集Ⅱ・三五

【参考】作者名は書かれていないが、古今集をはじめ、所載欄の文献はすべて作者を素性とする。

#### 四二三 かぜのをとのあきにもあるかな久かたのあまつそらこそかはるべらなれ

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風の音がいかにも秋らしくなったことだ。地上ではまだ夏だが、当然ながら空ではもう変わっているようだ。

【語句】○久かたの 「あま（天）」「月」「星」「雲」など、空に関係する語にかかる枕詞。○かはるべらなれ

変わっている様子だ。変わっているらしい。「べらなり」は推定された状態をあらわす助動詞。

【所載】貫之集Ⅰ・三八

【参考】貫之集所載歌でもあり、作者は貫之である可能性が大きい。次の歌に注する「二首つらゆき」とも一致する。

#### 四一四 もみぢばのわかれをしみてあき風はけふやみむろの山をこゆらん

二首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】もみぢ葉が別れを惜しんで散ってゆき、秋風は今日、三室の山を今ごろ越えているであろうか。

【語句】○みむろの山 歌枕としては、奈良県生駒郡斑鳩町の神奈備山を指し、紅葉の名所。○こゆらん 「らん」は現在の推量をあらわす助動詞。疑問の係助詞である「けふや」の「や」を受け、ここは連体形。今日、越えているであろうか。

【所載】金葉集（初度本）・秋・三六八／貫之集Ⅰ・九六

【参考】作者は金葉集にも「紀貫之」とあり、作者名はすべて一致する。

素性法師

#### 四一五 すみのえのまつをあきかぜふくからにこゑうちそふるをきつしらなみ

【異同】ナシ

【現代語訳】住の江の松を秋風が吹くにつれ、その松風の音に、さらに音を加える沖の白波だ。

【語句】○すみのえの「すみのえ」は、大阪市住吉区の一帯。具体的な固有名詞としてではなく、浜辺の松を導き出すため、枕詞的に用いられることも多い。○ふくからに 吹くことによつて。吹くにつれて。「からに」は、原因、理由を示す。○こゑうちそふる 「こゑ」は直接的には波の音を指す。すでにある松風の音に、波の音を添えている、という。

【所載】古今集・賀・三六〇／拾遺集・雑秋・一一二／躬恒集Ⅰ・八三／躬恒集Ⅱ・二三二／躬恒集Ⅲ・一四四／躬恒集Ⅳ・六／躬恒集Ⅴ・一九／寛平御時中宮歌合・一六

【参考】作者は「素性法師」とあり、古今集も同じだが、拾遺集には「みつね」とあって、すべての躬恒集伝本にも見え、問題が残る。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

なりひら

四一六 あきはぎをいろどるかぜはやくとも心はかれじ草ばならねば

【異同】はやくとも—さやくとも（大）

【現代語訳】秋萩を色付かせる風は速く激しく吹いても、私の心は枯れはしませんし、飽きて、あなたから離れたりはしません。草葉ではないのですから。

【語句】○あきはぎをいろどるかぜ 秋萩を色付かせる風。秋に「飽き」を響かせ、相手の心変わりを疑った。四〇八番歌参照。所載欄の大和物語では初句「秋の野を」。○はやくとも 速く激しくても。「つきもせずうき事のはのおほかるをはやく風の風もふかなむ」（後撰集・一二一一）。所載欄の他文献では後撰集を始めとして「吹きぬとも」とするものが多い。○かれじ 心が「離る」と草葉が「枯る」を掛け、「じ」は打ち消しの意志・推量を表す。所載欄の業平集では「ころはふかし」が多い。○草ばならねば 草葉ではないので。「人を思ふ心のにはあらばこそ風のまにまにちりもみだれぬ」（古今集・七八三・小野さだき）。

【所載】後撰集・恋五・二二四／業平集Ⅰ・二／業平集Ⅱ・八六／業平集Ⅲ・七／業平集Ⅳ・五／大和物語・一六〇段・二六五

【参考】当該歌は四〇八番への返歌として他文献にみえる。作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。

ちさとし

四一七 つゆわけてたもとほすまもなきものをなどあきかぜのまだきふくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】（あなたと逢った帰りに）露の置いた草を分けて濡れた袂を干す暇もないほどなのに、どうして秋風ならぬ飽き風がもう吹いたりするでしょうか。

【語句】○つゆわけて （女の許から朝帰りする時に）露の置いた草を分けて。後撰集では「露わけし」。「秋の

のにささわけしあさの袖よりもあはでこしよぞひちまさりける」(古今集・六二二・なりひらの朝臣)○たもとほすま 露に濡れた袂を干す暇。「夏草の露分け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき」(万葉集・一九九八(旧一九九四)、古今六帖・三三九二)○まだき 早くも。もう。○あきかぜ 秋風の「秋」に「飽き」を掛ける。

【所載】後撰集・恋五・二二二

【参考】作者名「ちさと」は所載欄の文献に一致する。

四一八 こひく／＼のちあふものとおもはずはいまはけぬべき秋かぜのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】長い間恋い慕った後にあの人と逢うのだと思わないなら、今すぐ命が消えてしまふでしょう。今すぐに命が消えてしまふそうなら秋風の音がしますよ。

【語句】○こひく／＼で ずっと慕い続けて。動詞の連用形を重ねて、動作を繰り返す意を表す。「こひこひて後もあはむとなくさむる心しなくはいのちあらめや」(拾遺集・八七三・人まろ)。○いまはけぬべき秋かぜのこゑ 今すぐに命が消えてしまふそうなら秋風の音。「秋」に「飽き」を掛ける。

【所載】ナシ

四一九 もみぢせぬときはのやまはふくかぜのをとにや秋をきゝわたるらん

きのよしもち

【異同】ナシ

【現代語訳】(常緑という名をもち)紅葉しない常磐の山は、吹く風の音によって秋を感じ続けるのでしょうか。

【語句】○ときはのやま 京都市右京区常磐の付近にあった山か。葉の緑の変わらない「常磐」の意を掛ける。普通名詞とする説もある。○きゝわたるらん 「わたる」は時間の継続をいう。聞き続けて、秋の到来だけでなく、推移を実感するのである。「らん」は眼前に見えないことを推量する助動詞。「こえぬまはよしのの山のさくら花人づてにのみききわたるかは」(古今集・五八八)。

【所載】古今六帖「山」九一九／古今集・秋・二五二／拾遺集・秋・一八九／小町集Ⅰ・九九／新撰和歌・一二／俊頼髓脳・一七五／奥儀抄・一三九／古来風体抄・二四九

【参考】 所載欄の文献ではほとんどが作者を紀淑望とする。拾遺集では作者は能宣だが、片桐洋一は、一九〇番の能宣の歌「もみぢせぬときはの山にすむしかはおのれなきてや秋をしるらん」の傍注としてあったものが本文化したとする『古今和歌集全評釈』。時代から考えて、淑望作で良いと思われる。

#### とものり

四二〇 あき風は身をわけてしもふかなくに人のこゝろのそらにみゆらん

【異同】 ナシ

【現代語訳】「飽き」を連想させる秋風は、身と心を分けて吹くわけでもないのに、どうしてあの人の心が上の空のように見えるのでしょうか。

【語句】 ○身をわけてしも 身（体）と心を分けて。下二段活用の「分く」は分割する意。「身を分く」は、「おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる」（古今集・三七三）のように、離別に際して体を分けないことを嘆く用例が多いが、ここではそれとは逆に、体はここにあっても心は上の空であることを嘆いている。「しも」は強調を表す。○そらにみゆらん 「心が空になる」はそわそわと落ち着かないことで、心移りを暗示している。「らん」は原因・理由を推し量って問う意を表す。「どうして……だろうか」。所載欄の古今集では第五句「そらになるらむ」。

【所載】 古今集・恋五・七八七／友則集・四一

【参考】 作者名「とものり」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

四二一 たのめこし人はつれなくあきかぜはけふよりふきぬわが身かなしな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 あてにさせていたあの人はすげなくて、私に飽きたという秋の風が立秋の今日から吹いてきた。我が身のなんと悲しいことよ。

【語句】 ○たのめこし わたしに期待を抱かせていた。○つれなく 冷ややかで。○あきかぜ 所載欄後撰集の詞書によれば「秋立つ日人につかはしける」とある。「秋」に「飽き」を掛けて愛情のさめることをたとえている。

○けふ 立秋の日。立秋は涼風と共に歌に詠まれる。

【所載】 後撰集・秋上・二一九

四二二 わがせこがころもありせばあきかぜのさむきこのごろしたにきましを

【異同】 ナシ

【現代語訳】 いとしい夫の着物があつたら、秋風の寒いこの頃じかに着られようものを。

【語句】 ○わがせこ 女性が夫、恋人などを親しんで言う語。○ころも 衣服。「ころも」は散文「きぬ」の歌語として歌に多く用いられた。○したにきましを 下に着ましを。じかに着られたらよいのに。「まし」は二句「ころもありせば」と呼応して反実仮想。もし着物があつたら、下に着られてよかったのに、の意となる。

【所載】 古今六帖「わがせこ」三一〇五、「秋のころも」三三〇〇

【参考】 人麿集Ⅱ・三四七、人麿集Ⅲ・二五〇に、当該歌と下句が同じ表現で、初・二句が「わぎもこがころもならなん」「……ころもあらなん」として見える。

四二三 ふきくれば身にもしみける秋かぜをいろなきものとおもひけるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 吹いてくると、色が染みつくように我が身に沁みる秋の風を、色がでないものと思っていたことだなあ。

【語句】 ○身にもしみける 秋の冷気が痛切に感じられる。身に「沁む」と、色が「染(し)む」とを掛ける。「染む」と「色なきもの」との対比。

【所載】 続古今集・秋上・三〇六／河海抄・一二一一、一三七二

ふゆのかぜ

四二四 ふくかぜはいろもみえねどゆふぐれはひとりある人の身にぞしみける

【異同】 ナシ



【現代語訳】吹く風は色も見えないけれど、夕暮れ時は独り身の私には、色が染みつくように風が身に沁みるなあ。

【語句】◎ふゆのかぜ 時雨、雪などとともに詠まれることが多い。○ゆふぐれは 題「ふゆのかぜ」の例歌として挙げてあるので「ふゆくれば」の誤りか。所載欄の歌はすべて第三句が「ふゆくれば」である。○ひとりある人 独り身の人。○身にぞしみける 冬の風が寂しく身に「沁む」と、色が「染（し）む」とをかける。「色も見えねど」と「染む」の対比。

【所載】古今六帖「しも月」二一五／後撰集・冬・四四九／新撰万葉集・四一八／寛平御時后宮歌合・一三〇

#### 人まろ

四二五 あしひきの山した風はふかねども君がこぬよはかねてさむしも

【異同】ナシ

【現代語訳】山から麓へ吹き降ろす風は今日は吹いていないけれど、あなたが来ない夜はもう今から寒いのです。  
【語句】○あしひきの 枕詞。山、峰（を） などにかかる。○山した風 山から麓へ吹き降ろす風。山おろし。  
○かねて その時でもないのに早くも。

【所載】新勅撰集・恋四・八六二／万葉集・二三五四（旧二三五〇）足櫓木乃 山下風波 雖不吹 君無夕者  
予寒毛 アシヒキノヤマシタカゼハフカネドモキミナキヨヒハカネテサムシモ あしひきのやまのあらしはふかねどもきみなきよひはかねてさむしも／人麿集Ⅰ・一六七／人麿集Ⅱ・二八二／人麿集Ⅳ・七六

【参考】新勅撰集は作者名を「人麿」とするが、万葉集は作者名なし。なお下句に小異ある類似歌が、家持集Ⅰ・三〇四、家持集Ⅱ・一七二に見える。

〔以上五首担当 橋本・林〕

#### 山をろし

四二六 ころもでに山をろしふきてさむきよをきみまさねばひとりかもねん

【異同】ナシ

【現代語訳】袖に山おろしが吹いて寒い夜を、あなたがいらつしやらないので、ひとりで寝ることでしょうか。

【語句】◎山をろし 山嵐。山から吹きおろす風。万葉集から見いだせる語（一七五五（旧一七五一）など）で、古今集や忠岑集・信明集などにも見られるが、やはり「うかりける人を初瀬の山おろしよ激しかれとは祈らぬものを」（千載集・七〇七・源俊賴、百人一首などにも）が有名で、これ以降、新古今歌人などに用例が多い。○きみきまさねば あなたがいらつしやらないので、の意。所載欄の万葉集の訓（西本願寺本・現訓とも）や、新古今集の「きみきまさずは」ならば、あなたがいらつしやらないのならば、の意。

【所載】新古今集・恋三・一二〇八／万葉集・三二九六（旧三二八二）衣袖丹 山下吹而 寒夜乎 君不来者 独鴨寐 コロモデニヤマオロシフキテサムキヨヲキミサズハヒトリカモノム ころもでにあらしのふきてさむきよをきみきまさずはひとりかもねむ／人麿集Ⅲ・五五二／和歌童蒙抄・三八

四二七 こひしくは見てもしのばむもみぢばをふきなちらしそ山をろしのかぜ  
せきを

【異同】ナシ

【現代語訳】盛りの時が恋しく思い出されたら、よすがとして見たいものだ、そんな紅葉を吹いて散らしてくれ  
るな、山嵐の風よ。

【語句】○こひしくは 「こひしくは」は古今集の「わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎた  
てるかど」（九八二）などにも見られるように、「恋しく思い出されたならば」の意。○見てもしのばん 「偲ぶ」  
は、賞美するの意とよすがとして懐かしく思うの意がある。ここでは後者。

【所載】古今集・秋下・二八五／新撰和歌・五六／秀歌大体・八二

【参考】作者名「せきを」は、藤原関雄を指すと思われる。所載欄の文献にはその名が見出せない。しかし古今  
集のうち、伊達家旧蔵本『新編国歌大観』が底本に採用 などではこの歌の作者を「よみ人知らず」とするが、  
元永本や筋切には「藤原関雄」とある。

四二八 まどごしに月はてらしてあし引のあらしふくよはいもをしぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】窓越しに月がさしこみ、嵐の吹く夜は恋しいあなたのことを思う。

【語句】○まど 窓・牖。窓の形態は不明。『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）の「窓」項で触れている「秋風入窓裡羅帳起飄颻仰頭看明月寄情千里光」（近代呉歌・秋歌）などの孤閨詩の影響が考えられる。○あし引の 普通は「山」にかかるが、ここでは「山から吹き下ろす風」の意で風にかかる。「山」以外に「あしひきの」がかかる例としては、万葉集・四一七五（旧四一五一）に「足引乃 峰上之桜（アシヒキノヲノヘノサクラ）」がある。○いも 女性を指す。所載欄の万葉集では「きみ」とし、詠者の立場が変わる。

【所載】万葉集・二六八七（旧二六七九）窓超尔 月臨照而 足檜乃 下風吹夜者 公乎之其念 マドゴシニツキサシイリテアシヒキノアラシフクヨハキミヲシゾオモフ まどごしにつきおしてりてあしひきのあらしふくよはきみをしぞおもふ／夫木抄・五一八九、一四九一五

あらし

四二九 やまざとにすみにしひよりとふ人もいまはあらしのかぜぞわびしき

【異同】かせそわひしき―山そわひしき（大）

【現代語訳】山里に住んだ日から、訪れる人もいないその嵐の風がわびしいことだ。

【語句】◎あらし 荒く激しく吹く風。はじめは山から吹き下ろす風を指したが、後には暴風をいうようになる。○やまざと 人の訪れない、孤絶した場所をイメージする語。小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店、一九九四年）によれば、古今集に見られる山里は「わびし」「さびし」「ものうし」などの語で象徴される寂寥・憂愁であり、「見る人もなし」「とふ人もなし」「人目もかれぬ」「住む人さへ思ひ消ゆ」などで表象される孤独・孤絶」であり、後撰集では「都」に対する「ひな」という印象がより鮮明になっているように思われる」とされる。○いまはあらし 「あらし」に「嵐」と「あらし」を掛ける。

【所載】ナシ

つらゆき

四三〇 けさのあらしさむくもふくかあし引のやまかきくもりゆきやふるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】今朝の嵐は、とりわけ寒く吹くことだ。山の方はかき曇って雪が降っているのだろうか。

【語句】 ○あし引の あしひきの。 山にかかる枕詞。

【所載】 後撰集・冬・四六六

【参考】 作者名「つらゆき」とあるが、貫之集になく、後撰集では「よみ人知らず」。

〔以上五首担当 杉本〕

四三二 ふくからになべて草木のしほるればむべやまかぜをあらしといふらん  
ふんやのあさやす<sup>やすひでイ</sup>

【異同】 ナシ

【現代語訳】 吹くやいなや、あたり一面草木がしなえてしまいうから、どうりで山の風を「嵐」というのだろう。

【語句】 ○ふくからに 「からに」は「……するとすぐに」の意。○なべて すべて。○むべ なるほど。うべ。合点のゆく時に発する語。

【所載】 古今集・秋下・二四九／後六々撰・一三六／九品和歌・一三／百人秀歌・二七／百人一首・二二／奥儀抄・九九／詠歌大概・四四／和歌用意条・二九／悦目抄・九

【参考】 作者名「ふんやのあさやす」は古今集（古写本）に一致する。また異文の「やすひで」は古今集（定家本）に一致する。「あさやす（朝康）」は「やすひで（康秀）」の子。いずれとも決しがたい。所載欄の文献はどれも第二句を「秋の草木の」とする（ただし、古今集・仮名序の第二句は「野べの草木の」。後六々撰、悦目抄も同じ）。漢字「嵐」を「山」と「風」とに分解し、「あらし」という理由を説明して自ら納得しているのである（片桐洋一『古今和歌集全評釈』。古代中国ではいわゆる離合詩は後漢の頃からあり、六朝後期に流行した。古今集にはこの影響を受けた和歌があり、その一例。

四三二 つねよりもあきのゆふべのわびしきはいとどあらしのかぜやなになり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 秋のゆうべのいつもよりものわびしいのは、いつそうこの世に生きていたくないという思いにかられる、折しも嵐の風が吹くなんて一体何なのだ。

【語句】 ○あきのゆふべ 秋は悲哀に満ちた季節。その中でも、特に夕方は哀切。○いとど いっそう。○あら

し。「嵐」に「在らじ」をかける。「在らじ」は「在り」の未然形に助動詞「じ」の接続した形。打消の意志を表す。○なになり 一体どういうわけか。強い嘆きの吐露に用いられる慣用句。疑問詞があるのに「なり」は連体形にならない。二七二番歌参照。

【所載】ナシ

四三三 あふさかのあらしのかぜははやけれどゆくゑしらねばわびつゝぞふる

【異同】はやけれど―寒けれど（大）

【現代語訳】逢坂の関に吹く嵐の風はきつく、あなたにお会いする機会はあるまいと、行方もわからずつらい気持ちのまま日を送っています。

【語句】○あふさか 逢坂。歌枕。京から東国への道に逢坂の関がある。越えたと「近江（あふみ）」「逢ふ身」に通じる。恋人に「逢ふ」をかけて用いる。○あらしのかぜ 逢坂の「嵐」に「在らじ」をかける。四三二番歌参照。

【所載】古今集・雑下・九八八／新撰和歌・三四三／和歌童蒙抄・一九四／西行上人談抄・二五

【参考】古今集では第三句「さむければ」第五句「わびつゝぞぬる」。古今集の形では逢坂は「旅立ち」の所であつてさすらいの旅（片桐洋一『古今和歌集全評釈』へ出る歌であると解釈される）。

四三四 われをきみとふや／＼とまつかぜのいまはあらしとなるぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】私をあなたが訪ねて下さるか下さるか待つ甲斐も今はもう決してあるまい、となったことの何と悲しいこと。

【語句】○われをきみ 「われをきみなにはの浦に有りしかばうきめをみつのあまとなりనికి」（古今集・九七三）、「我を君あはぬ恋とやから車やまことひのかげずまひする（夫木抄・一五七二・仲正）。○とふや／＼と 訪ふや訪ふやと。訪れて下さるか下さるか。」「飛ぶや飛ぶやと」とをかける。○まつかぜの 上からの続きでは「我を君訪ふや訪ふやと待つ」となり、下へは「松風の」となる。すなわち「待つ」に「松」をかける。○あらし 上からの続きでは「松風のいまは嵐」となり、下へは「在らじ」と続く。「嵐」に「在らじ」をかける。「飛ぶや

飛ぶやと」「松風」「嵐」の語句が一つの情景を浮かべさせる。

【所載】 夫木抄・七七二九

四三五 とふ人もいまはあらしの風はやくわすれはてにし人にやはあらぬ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 訪う人も今はあるまい。ずっと昔忘れ果てた人ではないか（あの人にとって私という人間は）。

【語句】 ○とふ人もいまはあらし 「在らじ」に「嵐」をかける。四二九番歌参照。「とふ人も今はあらしの山かげに人松虫のこゑぞかなしき」（拾遺集・二〇五）。○はやく 風の激しい意の「速く」に「早く」（以前より）をかける。

【所載】 ナシ

〔以上五首担当 平野〕

ぎょうのかぜ

四三六 かぜふけばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとりゆくらん  
かぐやまのはなのこ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 風が吹くと沖の白波が立つ、その立つという名の龍田山を、夜半に、君はひとりで越えてゆくのだろうか。あのさびしい山路を。

【語句】 ◎ぎょうのかぜ ぎふのかぜ。雑の風。春・夏・秋・冬の季節の風の範疇に入らない風。古今六帖のこの項では、人事と密接に結びついた風の詠を収めるか。この題は、『新編国歌大観』による限りでは、奈良・平安時代を通して他に見えない。○かぜふけばおきつしらなみたつた山 初、二句はたつた山を導く序詞。波が立つにたつた山を掛ける。「海（わた）の底沖つ白波竜田山いつか越えなむ妹があたり見む」（万葉集・八三）。たつた山（龍田山）は、奈良県生駒郡の山。大和・河内間の要路に当たる。「しらなみ（白波）」の意を及ぼして盗賊の出る山の意をこめるとする説もある。

【所載】 古今六帖「山」八五七／古今集・雑下・九九四／新撰和歌・二五九／金玉集・七五／秘蔵抄・三／和歌

体十種・三／新撰髓腦・一／俊頼髓腦・九六／奥儀抄・八四／袖中抄・二五／六百番陳狀・一三五／和歌色葉・六〇／鍬河上・六／悦目抄・一、三四／十訓抄・一三九／伊勢物語・二三段・四九／大和物語・一四九段  
【参考】作者名「かぐやまのはなのこ」は、古今六帖の重出歌では「かこのやまのはな子」。古今集では「よみ人知らず」である。

四三七 ふくかぜにわが身をなして草しげみはわけをしつゝあはんとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風に、わが身を変えて、草が深く生い茂っているので、風のようにその葉をかきわけて行つて逢いたいと思うことだ。

【語句】○わが身をなして わが身をそれに変えて。「もろくともいざ白露に身をなして君があたりの草に消えなん」(忠岑集・四三二)。○はわけ 葉分け。葉と葉のあいだを分けること。

【所載】ナシ

四三八 こがらしのをとはずぎにし時なれどときはにつねにまつにふくかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉を吹き落とす木枯らしの風の音はもはや過ぎ去った時だけれど、葉を落とさぬ常緑樹の松には永久に、いつも風が吹くことだ。

【語句】○こがらし 秋の末から冬の初めにかけて吹く風。○をとは 「をとは」は「おとは」。音は永久不変に。「をとは」と「ときは」で韻を踏むような言葉の遊びか。○まつ 松の木の「松」に「待つ」を掛け、人を待つ自分を暗示する。

【所載】ナシ

四三九 おもへどもきえぬうき身をいかにしてあたりの風にありとしらせん

【異同】ナシ

【現代語訳】消え入りそうになるほど思っているけれども、消えずに生きながらえているつらい我が身のことを、何とかしてあなたのあたりの風に「ここに私がいる」と知らせたいものだ。

【語句】○おもへども 我が身が消え入りそうになるくらいあなたのことを恋しく思うけれども。あるいは、消え失せてしまいたい（消えて死んでしまいたい）と思うけれど、の意か。○いかにして どうにかして……したいの意。○あたり 相手の女の住居のあたり。四三七番歌語句欄に引用の忠岑歌参照。○ありとしらせん ここにいる、と知らせたい。

【所載】続後撰集・恋二・七八九

四四〇 さぐなみのいたやまかぜのうちふけばつりするあまのそでかへるみゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】比良山おろしが、湖上に吹きつけると、釣りをする漁夫の袖がひるがえるのが見えるよ。

【語句】○さぐなみの 大津 志賀、近江、比良など琵琶湖周辺の地名にかかる枕詞。○いたやま 傍記異文「ひらやま」がよい。所載欄の万葉集・新古今集・夫木抄では二、三句「ひらやまかぜのうちふけば」。他の文献でも、二句は、「ひらやまかぜの」もしくは「ひら（比良）の山風」となっている。比良山は、比叡山の北に連なる山。近江国の歌枕。山越しの風の烈しさは比良山おろしとして有名。「さざ浪やひらの山風はやからしなまにきゆるあまの釣舟」（続詞花集・七五七・藤原基俊）。ここでは、「ひら（比良）やま」として解釈した。

【所載】新古今集・雑下・一七〇二／万葉集・一七一九（旧一七一五） 栗波之 平山風之 海吹者 釣為海人之 袂変所見 ササナミノヒラヤマカゼノウミフケバツリスルアマノソデカヘルミユ ささなみのひらやまかぜのうちふけばつりするあまのそでかへるみゆ／夫木抄・一〇四〇八／綺語抄・八一／和歌童蒙抄・一八一／奥儀抄・六一七／和歌初学抄・一〇〇／袖中抄・四七九／和歌色葉・八〇

〔以上五首担当 斎藤・長戸〕

四四一 あまつ風くものかよひち吹とちよをとめのすがたしはしとぐめん

【異同】ありはらのむねさた―よしみねの宗さた（大） くものかよひち―底本二行書き しはしとぐめん―底



本二行書キ

【現代語訳】天を吹く風よ、雲の通路を吹き閉ざしておくれ、舞姫の美しい姿を、しばらくとどめておきたいから。

【語句】○あまつ風 天空を吹く風。○くものかよひ路 雲のかよひ路。古今集の諸注は、漢語「雲路」にあ

たり「雲の往来する路」と解する。「通ひ」は「雲」の述語ではなく、「路」の修飾とみなすべきで「雲の作つた通路」とする説(市村宏『雲の通ひ路』『夢の通ひ路』『東洋大学 王朝文学』一九六四年五月)もあるが、「雲路」は「青山雲路深」(盧照鄰「贈益府裴録事」)の如き用法もみられるので、「雲のなかの(行き来する)路」でよい。「雲路」は、初唐詩に織女の通り道として詠まれることが多く、わが国でもその影響を受けて「鳳駕雲路に飛び、龍車漢流を越ゆ。神仙の会を知らんと欲し、青鳥瓊樓に入る」(懷風藻・七夕・藤原総前)の如き例がみられ、神仙、神女と関わりの深い語である。参考欄参照。

【所載】古今集・雜上・八七二／新撰和歌・二二七／和漢朗詠集・七一八／遍昭集Ⅰ・一〇／遍昭集Ⅱ・一〇／百人秀歌・一五／百人一首・一二／綺語抄・三二四／古来風体抄・二八七／近代秀歌・一〇四

【参考】作者名「ありはらのむねさだ」は、所載欄の文献が「良岑宗貞」としていることから、傍書の「よしみねのむねさだ」が妥当と考えられる。

古今集の詞書によれば「五節のまひひめを見てよめる」。五節舞姫の起源は、天武天皇が琴を弾いた時に、神女が舞い降りてきて「乙女子が乙女さびすもからたまを乙女さびすもその唐玉を」と歌いつつ舞った(袋草紙・上巻、希代の歌)とされ、神女、天女との関わりが深い伝承を持つ。なお金子彦次郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌 千載佳句研究編 増補版』(培風館、一九五五年)は、この歌に「高唐賦」(文選・卷十九)の神女の影響をみる。

#### あめ

四四二 雨ふりてさよはふくともなをゆかんあはんといもにいひてしものを

【異同】あはんといもに―あはんと君に(大)

【現代語訳】雨が降って夜がふけたとしてもやはり行こう。逢おうとあの人にいったのだから。

【語句】◎あめ 恵みの雨、自然の推移を促進させるものとして詠まれるが、恋の歌では恋人の行き来の障害と

なるもの、涙雨、袖を濡らすものとして詠まれる場合が多い。「あめ」の項の前半部には恋の歌が並ぶ。○さよはふくとも「さよ」の「さ」は接頭語。「萩が花ちるらむをのつゆじにもぬれてをゆかむさ夜はふくとも」(古今集・二二四)。○なを なほ。やはり。○ものを 順接確定条件。……ので。……だから。

【所載】ナシ

【参考】四四三番歌と下二句を等しくする類歌。

四四三 いそのかみふるともあめにさはらめやあはんといもにいひてしものを  
おほとものかたみ<sup>よしみねのむねさだい</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】たとえ降ったとしても雨などに妨げられるものか。逢おうとあの子にいったのだから。

【語句】○いそのかみ 大和の地名。奈良県天理市布留町の石上神宮の辺。こゝは、「布留」に掛けて「降る」を起こす枕詞。○さはらめや 「さはる」は、行く手を遮られて行き悩む。障害となる。さしつかえる。「め」は意志を表し、「や」は反語。「大名児を彼方野辺に刈る草の束の間も我忘れめや」(万葉集・一一〇)。

【所載】拾遺抄・恋下・三一六／拾遺集・恋二・七六五／新撰和歌・二六八／万葉集・六六七(旧六六四)石上零十方雨二 将関哉 妹似相武登 言義之鬼尾 イハノカミフルトモアメニサハラメヤイモニアハムトチギリ(イヒテ)シモノヲ いそのかみふるともあめにつつまめやいもにあはむといひてしものを／綺語抄・三五五／袖中抄・五三六

【参考】作者名「おほとものかたみ」は所載欄の文献に一致する。なお袖中抄の下二句は「またんといもがいひてしものを」と女性側の表現を取り入れた形となっている。

四四四 春さめの心はきみもしれるらんぬかしふらばなゝよこじとや

【異同】ナシ

【現代語訳】(さほど濡れないという) 春雨の本意はあなたもご存じでしょう。七日降り続いたら、七夜も来ないおつもりですか。

【語句】○春さめの心 所載欄の万葉集歌にあるように「春雨」はしとしとと降る、あまり衣を濡らさぬ雨で、

通うにさほど障害にならないというのである。「心」は「本意」といったほどの意味。所載欄の万葉集「衣はいたくとほらめや」の方が意味が通りやすいが、本文通りに訳した。当該歌について、沢瀉久孝『万葉集注釈』は、万葉集歌の「ころもは」の「ころ」の連綿体が「こころ」と誤写されたとみる。○しれるらん しれ（ラ行四段活用「しる」の已然形）＋る（存続の助動詞「り」の連体形）＋らむ、知っているでしょうという意となるが、他に「ききしれるらん」（古今六帖・一四三七）があるのみで、あまり例のない表現である。○なぬかし 七日し。「し」は強意の助詞。

【所載】万葉集・一九二一（旧一九一七）春雨尔 衣甚 将通哉 七日四零者 七夜不来哉 ハルサメニコロモハイタクトホラメヤナヌカシフラバナナヨコジトヤ はるさめにころもはいたくとほらめやなぬかしふらばなぬかこじとや／夫木抄・九三七／赤人集Ⅰ・二〇〇／赤人集Ⅱ・八一／赤人集Ⅲ・八八

四四五 いまさらにきみはなゆきそはるさめのころもを人のしらざらなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】いまさらお帰りにならないで下さいね、帰すまいとして降る春雨の心を人が知らないはずはないのですから。

【語句】○はるさめのころも 春雨が降って、去る人をひきとめようとする心、気持ち。四四四番歌参照。○人 第三者をさすが相手の男を意識した表現。○なくに 順接確定条件。……ないのだから。

【所載】万葉集・一九二〇（旧一九一六）今更 君者伊不往 春雨之 情乎人之 不知有名国 イマサラニキミハイユクナハルサメニコロヲヒトノシラザラナクニ いまさらにきみはいゆかじはるさめのころもをひとのしらざあらなくに／赤人集Ⅰ・一九九／赤人集Ⅱ・八〇／赤人集Ⅲ・八七／家持集Ⅰ・二九／家持集Ⅱ・二九／家持集Ⅲ・二九

【参考】四四四、四四五番歌は、万葉集において連続した二首（一九二一、一九二〇）を逆順に採る。

〔以上五首担当 中野〕

四四六 わぎもこがあかものすそをしみぬらんけふのこしあめに我もぬれすな

【校異】我もぬれすな―我もぬらすな（大）

【現代語訳】我妹子の赤い裳裾を今頃は濡らしていることであろう。今日のわか雨に私まで濡らしてくれるな。  
【語句】○あかもものすそ 「赤裳の裾」で、女性が赤い裳の裾を長く引いて歩く様をいう。○しみぬらん 「しみ」は、「濡れとおる」意の、自動詞四段活用「しむ（浸む）」の連用形。「すそを」なので、他動詞「しめ（浸め）」とあるか、もしくは「すその」とありたいところ。今頃この雨で裳裾を濡らしているだろう、と助動詞「らむ」で推量する。なお、所載欄の万葉集西本願寺本は「すその」そめひちむ」とあり、現代の万葉集注釈書の訓みは、「すその」ひづちなむ』（『萬葉集注釋』『新潮日本古典集成』、「すその」ひづつらむ』（『萬葉集釋注』『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』など。「ひづつ」は濡れる意。人麿集Ⅲに「すその」そみぬれば、人麿集Ⅳに「すそを」そめむとて、綺語集に「すそを」しめぬらん。○こしあめに「こしあめ」は、色葉字類抄（前田本）は、「驟雨」「シウウ ユシアメナリ」とにわか雨の意とし、観智院本類聚名義抄は、「霖」「ナガメ ユシアメ」と降り続く雨の意として、意味が分かれる。ここは、前者の意味で解した。所載欄の歌集には、みな「こさめ」（小雨）とある。「こしあめ」を詠んだ歌として、柿本集に「わがせこが袴の腰を染めむとて今日のこしあめに我ぞ濡れぬる」（人麿集Ⅱ・一九一）と見え、散木奇歌集に、詞書「摂政殿下にて、雨中のすみれといへる事をよめる」として、「誰れと見てしのびかはさん（かはせん）」を校訂 つれづれとこし雨降りてすみれ咲く野を」（俊頼集Ⅰ・一六〇）とある。○我もぬれすな 「我も濡れずな」でも「我も濡れすな」でも解しにくい。所載欄の万葉集「われさへぬれな」（私も濡れよう）や、綺語抄「われをぬらすな」・和歌童蒙抄「われもぬらすな」（：濡らしてくれるな）の表現の方がわかりやすい。「濡れす」は、後世の例だが、「ぬれぬれす」時雨もいまはずか河伊勢まで秋の色やみゆらん」（建保名所百首・九八〇）や、「時雨にもぬれせぬ山の木の葉かな」（梵灯庵袖下集・二九）などから、「濡れす（サ変）」で濡れる、の意として現代語訳した。「な」は、所載欄の綺語抄や和歌童蒙抄も参考にして、禁止の意とした。

【所載】万葉集・巻七・一〇九四（旧一〇九〇） 吾妹子之 赤裳裾之 将染泥 今日之霏霖尔 吾共所沾名  
ギモコガアカモノスソノソメヒチムケフノコサメニワレトヌレヌナ わぎもこがあかもものすそのひづちなむけふ  
のこさめにわれさへぬれな／人麿集Ⅲ・六七九／人麿集Ⅳ・四四／綺語抄・三二九／和歌童蒙抄・四八

四四七 わがせこをこひてすべなみはるの雨のふりわけしらでいどこしかも

【異同】ふりわけ―ふみわけ（大）

【現代語訳】あなたが恋しくてどうしようもなく苦しくて、春雨が降るのも知らないで家を出てきました。

【語句】○わがせこをこひてすべなみ 「恋ふ」は、上代では、眼前にいない相手に逢いたいと思う意を表し、「……に恋ふ」という形で用いられることが一般的であり、平安時代以降に、思慕する意味に変化して「……を恋ふ」のかたちになるという（小学館『古語大辞典』）。所載欄の歌集は、すべて「わがせこにこひて」とある。「すべなみ」は、形容詞「すべなし」の語幹＋接尾語「み」で、どうしようもなく苦しいので、の意。○はるの雨の 所載欄の歌集ではほとんどが「はるさめの」とある。○ふりわけ このままでは意味不通。所載欄の万葉集や赤人集Ⅰの「ふるわき」とあるのに従い、現代語訳した。「わき」は、わきまえ、分別の意。

【所載】万葉集・一九一九（旧一九一五）吾背子尔 恋而為便莫 春雨之 零別不知 出而來可聞 ワガセコニ コヒテスベナミハルサメノフルワキシラズイデテコシカモ わがせこにこひてすべなみはるさめのふるわきしらずいでてこしかも／人麿集Ⅲ・四三八／赤人集Ⅰ・一九六／赤人集Ⅱ・七七／赤人集Ⅲ・八五

【参考】所載欄の万葉集に作者名なし。

四四八 いもがゝどゆきすぎかねつひちかさあめあめもふらなんあまがくれせん

【異同】ひちかさあめ―ひちかさの（大）

【現代語訳】彼女の家の門を通り過ぎることができない。肱を笠にするにわか雨でも降ってほしい。そしたら物陰で雨宿りができよう。

【語句】○いもがゝど 愛する女性の家の門。○ゆきすぎかねつ 「かね」は、補助動詞「かぬ」（……しようとする気持がありながら、それが出来ない、意）の連用形。所載欄の文献に、「ゆきすぎがてに」と表現するものがある。○ひちかさあめ にわか降る雨。雨にぬれないように、肱（袖）を笠の代わりにすること。源氏物語「須磨」巻、光源氏らが三月上巳に海辺に出た時に、「……にはかに風吹きいでて、空もかきくれぬ。御祓もしはてず、立ち騒ぎたり。肱笠雨（ひちかさあめ）とか降り来て、いとあわたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠もとりあへず」と見える。なお、所載欄の歌論書には、大久保本同様、ほとんどが「ひちかさの」とある。○あまがくれ 物陰に入って雨宿りすること。

【所載】夫木抄・七八九七／俊頼髓脳・二〇七／綺語抄・五一・四四六／和歌童蒙抄・四九／袖中抄・一二、一三、一四

【参考】袖中抄・巻一「ひちかさ雨」の項で、万葉集・二六九三（旧二六八五）「妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬかそをよしにせむ」を引用し、古今六帖の当該歌について、「万葉の歌をやはらげたる歌也」と

説明し、催馬楽「妹が門」も万葉集を本体に作つたとする。

四四九 からころもきみにうちつけみまほしみこひてくらし雨のふるひを

【異同】ナシ

【現代語訳】逢えないでいるあなたに突然逢いたくなくて日がな恋しい思いで暮らして、雨の降る一日中。

【語句】○からころも 「からころも」について、「めずらしく美しい衣服」という従来の説明を退けたのは、和田早苗「王朝和歌における服飾表現―「からころも」をめぐる」『服飾美学』一九九九年九月）である。実際の歌に注目すると、「からころも」の実体はむしろ肌身に近くまとう私的な衣であり、また、「朝影にわが身はなりぬからころも裾のあはずて久しくなれば」（万葉集・二六二六（旧二六一九）、「からころも裾のうちかへあはねどもけしき心をあが思（も）はなくに」（万葉集・三五〇一（旧三四八二）など、「からころも」の特徴は「裾の袂が重なり合わないこと」であつて、重なりあわないところから自分と逢えない人になぞらえ、いとし人に「逢えない」気持ちを効果的に詠み込んだものという。○きみにうちつけ 「うちつけ」は、形容動詞「うちつけなり」の語幹で、だしぬけに、突然、の意。所載欄の万葉集では「君内著（きみにうちきせ）……」と、からころもを着せてそれを見たいと続く。なお、壬二集に「初秋」題での「なが月やさえん霜夜のから衣まづうちつけの秋のはつ風」（一四六九）歌は、衣服を着ける意の「うちつけ」と掛けた例と思われるが、当該歌では掛詞と解さなかつた。○みまほしみ 逢いたいので。語構成は、動詞・連用形「見」＋願望の意の助動詞語幹「まほし」＋接尾語「み」。なお、所載欄の万葉集には、西本願寺本「ミマクホリ（ミマクホシ）」、新訓「みまほり」。助動詞「まほし」は中古になつてから生まれた。○こひてくらし 接続助詞「て」が重なる。「くてくらし」の歌は他に見当たらない。万葉集「こひぞ暮らし」の方がわかりやすい。

【所載】万葉集・二六九〇（旧二六八二）辛衣 君内著 欲見 恋其晩師之 雨零日乎 カラコロモキミニウチキセミマクホリ（ミマクホシ）コヒゾクラシアメノフルヒヲ からころもきみにうちきせみまほりこひぞくらししあめのふるひを

四五〇 とをるべく雨はなをふるわざもこがかたみのきぬを我したにきて

【異同】我したにきて―わかしたにきて（大）

【現代語訳】衣の下まで濡れとおるほどに雨は依然として降っている。妻の衣を彼女の代わりとして私はじかに着ているのに（濡らさないでほしい）。

【語句】○とをるべく とほるべく。雨が下の着衣にまで濡れとおるほどに。○なをふる なほ降る。副詞「なほ」は、変わることもなく、依然として、の意。○かたみのきぬを、「かたみのきぬ」と詠む例は、当該歌と所載欄の綺語抄にしか見えず、他はほとんどが、「かたみのころも」。「形見」とは、衣に妻が付着しているから。男が妻の衣を着ているのは、家を離れて旅にでもあるのだろうか。「わぎもこが形見の衣下にてただに逢ふまではわれぬかめやも」（万葉集・七五〇（旧七四七））。○我したにきて 「我」は「われ」と読んだ。

【所載】万葉集一〇九五（旧一〇九一）可融 雨者莫零 吾妹子之 形見之服 吾下尔著有 トホルベキアメハナフリソワギモユガカタミノコロモワレシタニキタリ とほるべくあめはなふりそわぎもこがかたみのころもあれしたにけり／綺語抄・三三〇

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

四五一 あきはぎをゝとすながあめのふる程はひとりをきゐてこふるよぞおほき

【異同】ナシ

【語句】○ゝ（を）とす 「をとす」は「おとす」。落とす。○をきゐて おきゐて。起きゐて。

【現代語訳】秋萩の花を落とす長雨が降る頃は、一人で起きていて恋い慕う夜が多いよ。

【所載】玉葉集・恋四・一六五一／万葉集・二二六六（旧二二六二）秋芽子乎 令落長雨之 零比者 一起居而恋夜曾大寸 アキハギヲチラスナガメノフルコロハヒトリオキキテコフルヨゾオホキ あきはぎをちらすながめのふるころはひとりおきゐてこふるよぞおほき／夫木抄・四一三一／人麿集Ⅰ・一五一／人麿集Ⅱ・七九／人麿集Ⅲ・二五九

【参考】人麿集に見え、玉葉集・夫木抄も人丸の詠とするが、古今六帖にも所載欄の万葉集にも作者名はない。古今六帖・二六九三番に「よるひとりをり」の題で、「秋はぎをちらすなあめのふるなへにひとりおきゐてこゆるよぞおほき」という近似した歌がある。

四五二 ひさかたの雨もふらなんあまつかみ君にたぐへてこのひくらさん

【異同】君にたくへて―君にたへて（御）

【現代語訳】雨でも降ってほしい。天つ神よ。そうしたら、（雨に降りこめられて）いとしいあの方に寄り添って今日一日を過ごそう。

【語句】○ひさかたの「雨」にかかる枕詞。○あまつかみ 古今六帖の本文に従い、「天つ神」として解釈した。「天つ神」は通常「国つ神」に対し高天原の神を指す。但し、所載欄の万葉集には「あまつつみ」とある。「あまつつみ」は、「あまつつみ常する君はひさかたのきぞの夜の雨にこりにけむかも」（万葉集・五二二（旧五一九））のように、雨に降られて外に出られず屋内に閉じこもっていることなので、その方が歌意にはふさわしい。

【所載】万葉集・五二三（旧五二〇）久堅乃 雨毛落糠 雨乍見 於君副而 此日令晚 ヒサカタノアメモフラヌカアマツツミキミニタグヒテコノヒクラサム ひさかたのあめもふらぬかあまつつみきみにたぐひてこのひくらさむ／綺語抄・五四

【参考】万葉集では、語句欄に引用した五二二番歌が詠まれた後、別人が唱和して詠んだ歌とされている。

四五三 はるの雨にありけるものをたちかくれいもがいゑぢにこのひくらしつ あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】（ひどくは降らない）春の雨であつたものを、雨宿りをして、あの娘（こ）の家に行く道で今日一日を暮らしてしまった。

【語句】○はるの雨 ひどく降ることはなくたいして濡れない春雨。「春雨はいたくもふらで晴がたき物也」（萬葉拾穂抄（新典社、一九七六年刊影印本））。

【所載】万葉集・一八八一（旧一八七七）春之雨尔 有来物乎 立隠 妹之家道尔 此日晚都 ハルサメニアリケルモノヲタチカクレイモガイヘデニコノヒクラシツ はるのあめにありけるものをたちかくれいもがいへぢにこのひくらしつ／人麿集Ⅲ・二四／赤人集Ⅰ・一七二／赤人集Ⅱ・五四／赤人集Ⅲ・五八

【参考】古今六帖は作者名を「あか人」とし、赤人集・人麿集に載せるが、所載欄の万葉集では作者名の記載はない。

四五四 ひさかたのあめにぬれしをあまつこといづみのこやにわれねしよはも



【異同】ナシ

【現代語訳】雨に濡れたことだよ。海人の娘（こ）と和泉の小屋で私が寝た夜はね。

【語句】○ひさかたの　ここは「雨」にかかる枕詞。○あめにぬれしを　雨に濡れたことだよ。「を」は感動を表わす間投助詞。○あまつこ　海人の娘の意か。○いづみ　畿内五ヶ国の一つ、和泉国。現在の大阪府南部で西は海に面し、漁業に従事する者が多かった。

【所載】ナシ

四五五　ふしておもひをきてながむる春さめにはなのしたひもいかにとくらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】寝ては思い、起きては物思いにふけりながら眺める春雨に、花の下紐はどのように解けて、蕾をほころばせるのだろうか。

【語句】○ふしておもひをきてながむる　「をきて」は「おきて」、起きて。寝ている間も心の中で思い、起きても物思いにふけりながら（春雨を）眺める意。「臥して思ひ起きてかぞふるよろづよは神ぞ知るらむわが君のため」（古今集・三五四・素性法師）。「起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ」（伊勢物語・第二段・三）のように、春雨に終日恋の物思いにふける趣。○はなのしたひもいかにとくらむ　衣の下紐が解けるのになぞらえて、春雨に当たって花の蕾がほころぶことをいう。「山ざとに人め見しよりわがこふる花のしたひもいかにとくらん」（古今六帖「ひも」三三五六・つらゆき）。

【所載】新古今集・春上・八四／和歌童蒙抄・六七五

〔以上五首担当　長戸〕

四五六　はるさめのはなの枝よりもりてこばなをこそぬれめかにゝほふべく  
としゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨が花の枝を伝って洩れ落ちてくるならば、もっと濡れてみよう。香りに匂うことができるよう

に。

【語句】○はな 後撰集では詞書より桜であることがわかる。ここでは種を特定せずに解釈する。○もりてこば 洩れ落ちてくるならば。雨滴が枝を伝って衣服や身体にしみ込む。○なを なほ（猶）。

【所載】後撰集・春下・一一〇／新撰朗詠集・七八／敏行集・二二

【参考】作者名は所載欄の諸文献に一致する。後撰集の詞書には、寛平御時（宇多天皇の御代）に行われた桜花の宴の折に雨が降ったので詠んだ歌とある。なお後撰集では五句「かもやうつると」とする。

なりひら

四五七 おきもせずねもせでよるをあかしてははるのものとてながめくらしつ

【異同】ナシ

【現代語訳】起きるというわけでもなく、かといって寝てしまうというわけでもなく、夜を明かしたら、昼は春のものということで長雨を見ながらぼんやりと一日を過ごしたことだよ。

【語句】○はるのもの 春の景物。ここでは春特有の長雨をいう。○ながめくらしつ 「ながめ」はぼんやり過ごすの意と「長雨」を掛ける。

【所載】古今六帖「あした」二五九三／古今集・恋三・六一六／新撰和歌・二四〇／業平集Ⅰ・七／業平集Ⅱ・五五／業平集Ⅲ・八／業平集Ⅳ・八／伊勢物語・二段・三

【参考】伊勢物語（二段）では、ひそかな逢瀬の後、なお恋しく思ったのか、三月ついたちの雨の降る中、相手へ贈った歌とする。古今集でもほぼ同じ内容の詞書を添え、作者を業平とする。

としゆき

四五八 つれぐのながめにまさるなみだ川そでのみひちてあふよしもなみ

【異同】ナシ

【現代語訳】ずっと続く長雨に川の水かさが増すように、することもなくぼんやりと物思いにふけっていると涙が止まず川のように流れ、ただ袖ばかりが濡れて逢うすべもなくて。

【語句】○つれぐ 同じ状態がずっと続くの意と、することもないの意を掛ける。○ながめ 「長雨」とぼ

んやりと過ぐすの意の「ながめ」を掛ける。○なみだ川 涙の出ることを川に喩えた言い方。恋歌に多く見られる。「涙河何みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり」（古今集・五一）。○あふよしもなみ 「み」は接尾語。形容詞の語幹に付き、原因、理由を表わす。ただし所載欄の文献では古今六帖重出歌をはじめ「あふよしもなし」とする。

【所載】古今六帖「涙川」二〇七八／古今集・恋三・六一七／業平集Ⅰ・二五／業平集Ⅱ・四三／業平集Ⅲ・一三／敏行集・七／八雲御抄・三四／悦目抄・七三／伊勢物語・一〇七段・一八三

【参考】古今集にも敏行の名で採られ、業平の許にいた女への歌とし、その女に代わって業平の詠んだ歌とで贈答歌をなす。伊勢物語（二〇七段）でも敏行は実名で登場し、同様の詠歌事情を伝える。

四五九 さくらがりあめはふりきぬおなじくはぬるともはなのしたにかくれん

【異同】ナシ

【現代語訳】桜狩りをしていたら雨が降ってきたよ。同じことなら、たとえ濡れても、花の下に隠れよう。

【語句】○さくらがり 花見。「さくらがりぬれてぞきにしうぐひすのみやこにをるは色のうすさに」（宇津保物語・三二六）。○おなじくは どうせなら。いつそのことなら。「わびわたるわが身はつゆをおなじくは君がかきねの草にきえなん」（後撰集・六四九）。○したにかくれん 所載欄の文献では「かげに隠れん」とする。

【所載】拾遺抄・春・三二／拾遺集・春・五〇／和漢朗詠集・八五／和歌童蒙抄・六七〇／奥儀抄・二四九／袖中抄・九六四／和歌色葉・三五〇／近代秀歌・三二／詠歌大概・一二／撰集抄・七三

【参考】撰集抄では巻八「実方中将桜狩の歌の事」にこの歌が見える。登場人物の活躍する年代は古今六帖の成立からやや時代が下がる。概略は次の通り。殿上人が東山へ花見に行ったときにわか雨が降ったのを、居合わせた藤原実方が騒がず、桜の木の下に立ち濡れながらこの歌を詠んだ。翌日、やはりその場にいた藤原齊信が帝にこのことを伝えたところ、この時陪席していた藏人頭の藤原行成が「歌はおもしろし。実方は痴（をこ）なり」と言った。これを実方が漏れ聞いて、行成に深く恨みを抱くようになった。

四六〇 水のうへにあやをりみだるはるさめややまのみどりをなべてそむらん

【異同】○水のうへに―水の面に（大） あやをりみたる―あやめをりみたる（桂）

【現代語訳】水の上にきれいな模様を織り込んだ春雨が、山の緑を一面に染め抜くのだろうか。

【語句】○水のうへに 所載欄の新撰万葉集や歌合では「水の上に」とするが、新古今集や伊勢集諸本では大久保本と同じく「水の面に」とある。○あや 織物の模様。○をりみだる 織（お）り乱る。「織り」は「そむ」とともに「あや」の縁語。○はるさめ 水面に映るあたりの景色を、春雨が織りなした文様に見立て、春雨を擬人化する。そして今度は山を染めるのだという趣向。○なべて すべて。総じて。ここでは見わたす限り一面に、の意。

【所載】新古今集・春上・六五／新撰万葉集・一／新撰朗詠集・七七／伊勢集Ⅰ・一〇三／伊勢集Ⅱ・一〇四／伊勢集Ⅲ・五一〇／寛平御時后宮歌合・一九／綺語抄・二二四／和歌童蒙抄・五三

〔以上五首担当 青木〕

四六一 あづさゆみをしてはるさめけふゝりぬあすさへふらばわかなつみてん

【異同】ナシ

【現代語訳】今日、春雨が降った。明日も降ったらきつと若菜を摘んでしまおう。

【語句】○あづさゆみをして 「あづさゆみ」は梓の木で作った弓。梓弓を押して弦を「張る」ことから、「春雨」の「はる」を導く序詞。○わかなつみてん きつと若菜を摘むだろう。「てん」は完了の助動詞「つ」の未然形に、意志、推量の助動詞「む」のついた形。一般に強い意志をあらわす。

【所載】古今集・春上・二〇／新撰和歌・二七／俊賴髓脳・四〇／三五記・二四五／悦目抄・一一、四七

【参考】所載欄の古今集には「よみ人知らず」とある。

四六二 つれぐとそでのみひちてはるのひのながめはこひのつまにぞ有ける

【異同】ナシ

【現代語訳】何事も手につかず、袖が濡れるばかりで、春の日の長雨がつづく、そんな折のもの思いは恋のはじまりだったのですね。

【語句】○つれぐと 何をしてもおもしろくない、する気もない、単調で、退屈、ぼんやりとした状態をあらわす語。○そでのみひちて 袖が濡れるばかりで。長雨のために濡れているようであるが、実は涙で濡れている。

「ひつ」は濡れる意。なお「のみ」はこの場合、いわゆる限定ではなく、そのことがしきりに行われる意をあらわす。「御胸のみつとふたがりて」（源氏物語・桐壺）。○ながめ 春の「長雨」に、もの思いをする意の「眺め」を掛ける。○こひのつま 「つま」は、本来、ものの端、へり、を意味するが、ここは、端緒、きつかけ、はじまりをいう。「あきかぜや涙もよほすつまならむおとづれしより袖のかわかぬ」（千載集・二三四）。

【所載】 夫木抄・九三八

四六三 ふりぬとておもひなわびそはるさめのたぐにやむべき君ならなくに

【異同】 ナシ

【現代語訳】 不遇なまま年をとってしまったらといって、嘆いたりなさいますな。春雨がやむように、このまま終わりになってしまうはずのあなたではありませんのに。

【語句】 ○ふりぬとて 「ふり」は、古くなる、年をとる、人から相手にされなくなる、などの意の「古り」と、雨が降るなどの「降り」との掛詞。「降り」は、「止む」とともに「春雨」の縁語。○おもひなわびそ 心の中で嘆いたり、つらがつたりする意の「思ひ侘ぶ」に、禁止の終助詞「な……そ」が伴った形。嘆いたりするな。○はるさめの 詠作時にたまたま春雨が降っていたのであろうが、ここは「やむ」を導き出すための枕詞的な働きをする。○たぐにやむべき このまま終わりになってしまうはずの。「やむ」には春雨が「やむ」意もこめられている。○君ならなくに あなたではないことなのに。「なくに」は、打消の助動詞のいわゆるク語法「なく」に、助詞の「に」が添えられたもの。

【所載】 後撰集・春中・八〇

【参考】 所載欄の後撰集によれば、壬生忠岑が身の不遇を恨んでよこした文に対して、紀貫之が詠んだ歌。四六六番歌の注記に、「已上四首つらゆき」とある。

四六四 わがせこがころもはるさめふるからにのべのみどりぞいろまさりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 私の夫の衣を洗って張る、そんな春の日、春雨が降ることによって野辺の緑は色がまさることだ。  
【語句】 ○わがせこが 「せこ」は女性の立場から親しい男性を指して言う語。私のいとしい人の。「せこが」

の「が」は連体格助詞。○ころもはるさめ 衣を洗い張りする意から、衣を「張る」といい、同音の「春雨」にかかる。「わがせこがころも」は、「春雨」の序。○ふるからに 降ることによって。降るにつれて。「からに」は、原因、理由を示す。

【所載】古今集・春上・二五／新撰和歌・三三／秀歌大体・一五／俊頼髓脳・四〇九／袖中抄・一九〇／三五記・二四六

【参考】所載欄の古今集では作者が貫之。四六六番歌の注記にも「已上四首つらゆき」とある。

四六五 あめによりたみのゝしまをけふゆけばなにはかくれぬものにぞありける<sup>ど</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】雨に降られて、「田養」の島ならば濡れないだろうと今日やって来たところ、やはり名前には隠れることが出来ないのだった。

【語句】○たみのゝしま 摂津国の歌枕。淀川の河口近くにあった島の一つだったらしいが、現在の大阪市のどのあたりを指すか、具体的にはわからない。田の作業をする時に身につける蓑「田養」を連想させるものとして詠まれている。○なにはかくれぬ 「田養」という名に隠れることは出来ない。びしょ濡れになってしまったことをいう。「名には」に「難波」を隠しているのであろう。

【所載】古今六帖「しま」一九一七／古今集・雑上・九一八／拾遺集・別・三四三／貫之集I・八〇七

【参考】所載欄の文献はすべて作者を貫之とし、四六六番歌の注記にも「已上四首つらゆき」とある。  
〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

四六六 かきくらしあめふるごとにみちしらぬかさとりやまにまどはるゝ哉

已上四首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】空を暗くして雨が降る度に、（笠をさすという名のついた）笠取山で道を知らずに迷うように、私も恋に迷っているのだなあ。

【語句】○かきくらしあめふる 「かきくらす」は雨や雪などがあたり一面を暗くして降ること。「心を暗くする」

「悲しみにくれる」意もかける。即ち、「空を暗くして雨が降る」意に、「心を暗くして涙を流す」意をこめる。貫之集や歌枕名寄では上の句は「かきくもり雨ふることもまたしらぬ」で、「空一面曇つて雨が降ることも未だにない」意となる。○かさとりやま 京都府宇治市の北東にある山。もとは西方の醍醐山を含めた広い範囲をさしたとする説もある。その名に笠を持つので、雨にちなんだ詠まれることが多い。紅葉の名所。「雨降れど露ももらじを笠取の山はいかでもみぢそめけむ」(古今集・二六一・在原元方)。○まどはるゝ哉 迷っているのだなあ。「まどふ」に、「道に迷う」意と「心が乱れる」意をこめる。

【所載】貫之集Ⅰ・六三六

【参考】「已上四首つらゆき」とあるが、四六三番～四六六番の四首は所載欄の文献においても作者貫之とする。

#### 四六七 春さめのふるとみゆるはうぐひすのちるはなをしむなみだなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨が降ると見えたのは、鶯が散る花を惜しんで流す涙でしたよ。

【語句】○うぐひすのちるはなをしむなみだ 鶯が散る花を惜しんで流す涙。春雨の中で鳴く(泣く)鶯の声を聞き、雨を涙と見立てた趣向。「むめの花ちるてふなへにはるさめのふりいでつつなくうぐひすのこゑ」(伊勢集・三三六)。

【所載】ナシ

#### 四六八 はるさめのふるにおもひはきえなくでいとゝおもひのめをもやすらん

【異同】きえなくで—きえなくて(大)

【現代語訳】春雨が降っても「思ひ」の「火」は消えてしまうということはなく、(芽吹かせるように)ますます「思ひ」を燃やすのはどうしてなのだろう。(第三句は大久保本により「きえなくて」として解した。)

【語句】○はるさめのふるに 春雨が降っても。所載欄の後撰集では「はるさめのふらば」。「降る」「芽」「萌やす」は「春雨」の縁語。○おもひはきえなくで このままでは意が通らないので大久保本により「おもひはきえなくて」で解する。「思ひ」に「火」をかける。「消え」「燃やす」は「火」の縁語。所載欄の後撰集では「思ひのきえもせで」。○いとゝおもひのめをもやすらん 芽を萌やすように、ますます「思ひ」の火を燃やすのはどうし

てだろう。「萌やす」と「燃やす」を掛ける。「らん」は物事の理由・原因を推量する語。後撰集では第四句は「いとどなげきの」で、「嘆き」と「投げ木」を掛ける。後撰集の本文の方が意が通る。

【所載】後撰集・春二・六六詞書

【参考】後撰集には女によこした古歌として詞書に載る。これに返した歌が六六番で、「もえ渡る嘆きは春のさかなればおほかたにこそあはれとも見れ」（後撰集・春二・よみ人知らず）。蜻蛉日記の天延元年二月の条にも「かかることを尽きせずながむるほどに、ついたちより雨がちになりにければ、いとど嘆きの芽をもやすとのみなむありける」とある。

四六九 つれづれのながめにわれはなりぬめりつれなきそらをふるこゝちして

【異同】ナシ

【現代語訳】「つれづれのながめ」に、わたしはなつてしまふようです。長雨は変化のない空を降り、わたしはつれなき空を経る心地がして。

【語句】○つれづれ 物事がいつまでも変わらず、長々しく続くさま。所載欄の夫木抄では上句「つれづれとながめに我はなりにけり」。○ながめ 「長雨」に、「眺め」（物思いにふけて長い間ぼんやりと物を見ていること）を掛ける。「つれづれのながめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし」（古今集・六一七・としゆきの朝臣）。「空」「降る」は「長雨」の縁語。○めり 婉曲の用法。……ようだ。……らしい。○つれなきそらをふる 「つれなし」は、①冷淡である、②平然としている、③事態に何の変化もない、などの意がある。「雨がつれなき（変化のない）空に降る」意と、「わたしがつれなき空（冷たい仕打ち）を経る」意を掛ける。「ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがある山の風はやみなり」（古今集・七八五）。

【所載】夫木抄・七八九四

四七〇 あふことのかたいとなればしらたまのをやまぬはるのながめをぞする

【異同】ナシ

【現代語訳】逢うことが難しいので、途切れずに降る春の長雨のように、わたしも止むことなく物思いをしています。



【語句】○かたいと 片糸。より合わせていない糸。これを二本より合わせて糸を作る。「かた」に「難(し)」を掛ける。「逢ふ事のかた糸ぞとはしりながら玉のをばかり何によりけん」(後撰集・五五〇)。○しらたまの 白玉を貫き結ぶ緒の意で、「緒」と同音を含む「をやむ」にかかる枕詞。○をやまぬ 「をやむ」は、「ちよつと止む、途切れる」意。和歌童蒙抄では「をやまず」。「を」に「緒」を掛ける。「緒」は「糸」の縁語。

【所載】和歌童蒙抄・二九三

〔以上五首担当 三浦〕

四七一 ふるとしもみえでふりくるはるさめははなのしめゆふいとにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】降るとも見えずに降って来る春雨は、花にしめを結う糸のようなものであつたなあ。

【語句】○ふるとしもみえで 降っているようにも見えなくて。「し」は強意の副助詞。「で」は打消のはたらきをする接続助詞、「ずして」の意。○しめゆふ 「しめ」は占有物であることを明示するための標識。棒、杭、縄等を用いたり、草を結んだりして区画を示した。それを「しめ結ふ」と言う。可視的な標識がなくても、自己の所有や庇護のもとにあることを示す場合、この語を使うことがある。

【所載】夫木抄・九三九／和歌童蒙抄・五五／八雲御抄・一八二

四七二 はるさめにきみをやりてはあふさかのせきのこなたにこひやわたらん  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨の降る中、あなたを遠方へ行かせて、「逢う坂」という名でありながら逢えないままに) この逢坂の関のこちら側で私は恋い続けるのだろうか。

【語句】○あふさかのせき 逢坂の関。近江国の歌枕。正確な所在は未詳だが、平安時代は、山城と近江の間にある逢坂山の南麓の谷(逢坂越え)を、近江側へ出たあたりにあつたようで、恋歌では「逢ふ」に掛けて詠まれることが多かった(山下道代「逢坂」「逢坂を歩いて」「歌枕新考」青簡舎 二〇一一年)。○こひやわたらん 私は恋い続けるのであろうか。「わたる」は、その状態が時間的に継続しているさまを表わす。

【所載】 夫木抄・九四〇／躬恒集Ⅰ・一七五／躬恒集Ⅱ・八六／躬恒集Ⅲ・七五／躬恒集Ⅳ・四二五／躬恒集Ⅴ・三〇二

【参考】 作者名「みつね」は躬恒集に一致する。

四七三 おもはじとおもふものからなつの雨のふりすてがたきゝみにもあるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 もう思うまいと思うものの、夏の雨が「降る」の「ふり」ではないが、振り切って思い捨てることのできないあなたであることよ。

【語句】 ○おもはじとおもふものから 思うまいと思うものの。「ものから」は、ここでは逆接。○なつの雨の「ふり」を導き出すための措辞。○ふりすてがたき ふり切って思い捨てることができな。雨の「降り」に、思いを「振り捨つ」の「振り」を掛けた。

【所載】 夫木抄・七八九二

四七四 かず／＼におもひおもはずとひがたみ身をしるあめはふりぞまされる  
なりひら

【異同】 ナシ

【現代語訳】 ねんごろに私を思っていてくださるのか、思っていてくださらないのか、尋ねにくいので、わが身の程（あなたが私を思ってくださいその程度）の知られる雨は、いよいよ降りつのつています。

【語句】 ○かず／＼に 数多く、数を尽くして。ねん／＼に、心を尽くして。ここでは恋しく思われる程度を「かず／＼」と言った。「かずかずに我をわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ」（古今集・八五七）。○身をしるあめ わが身の程が知られる雨。我が身の思われようのわかる雨。雨をおして来てくれるならば思いが深いのだとわかる、と言っているのである。

【所載】 古今集・恋四・七〇五／業平集Ⅰ・六一／業平集Ⅱ・四五／業平集Ⅲ・三六／業平集Ⅳ・一八／綺語抄・三七一／奥儀抄・五三一／和歌色葉・二六五／伊勢物語・一一七段・一八五

【参考】 作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。

或本そせい

四七五 ひぐらしのあめふるかはのさゝらなみまなくもひとのこひらるゝかな

【異同】ナシ

【現代語訳】一日中雨が降る布留川のさざ波のように、絶え間なくあの人が恋しく思われることだ。

【語句】○ひぐらしの 終日の。○ふるかは 「降る川」に「布留川」を掛ける。「布留川」は大和国の歌枕。現天理市布留の地を流れて初瀬川に合流、末は大和川に注ぐ。○さゝらなみ さざなみ。波紋を連ねて寄せる小さな波。上三句は「まなく」にかかる序詞。○こひらるゝかな 恋しく思われることだ。

【所載】拾遺集・恋五・九五六／人麿集Ⅰ・一八四

【参考】万葉集に「との曇り雨ふる川のさざれ波間なくも君は思ほゆるかも」(三〇二六(旧三〇二二))という類似した歌がある。作者について「或本そせい」とあるが、この歌の作者を素性とする文献は他に見あたらない。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

そせい

四七六 うくもあるかきのふのこさめわたるせに人のなみだをふちとなさねば

【異同】ナシ

【現代語訳】心憂いことがあることか。昨日の小雨が(あの人の)渡る浅瀬に、涙で淵にしてはいないのに。

【語句】○うくもあるか 心憂いこともあるか、の意。「うくもある」は、当該歌以外に古今六帖に「つもりては山となるてふ物なれどくもあるかなちりひぢの身よ」(八〇〇)があるが、ほかには色葉和難集の用例のみ。○こさめ 万葉集・二四五六「烏玉の黒髪山の山草に小雨ふりしきしくおもほゆ」など万葉集に「小雨」が七例用いられている。○わたるせ 瀬に、逢瀬をかける。万葉集では西本願寺本の訓において「渡瀬」「わたるせ」とする語を、新撰字鏡で「灘、和多利世」とするのを参照し、現在では「わたりぜ」と読んでいる場合が多い(一三一一(旧一三〇七))。わたりぜは、比較的浅く、徒歩または乗馬したままで川を横断できるところを指す。○ふち 瀬と淵は縁語。瀬が淵に、という発想は有名な古今集「世中はなにかつねなるあすかはきのふのふちぞけふはせになる」(九三三)にあり、また涙が淵になってしまうのは、後撰集の「せきもあへず淵にぞ迷

ふ涙河わたるてふせをしるよしもがな」(九四六) などに見られる。

【所載】ナシ

【参考】作者名「そせい」とあるが、他文献に見えない。

四七七 しら雲のうへしるけふぞはるさめのふるにかひある身とはしりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】(念願が叶って) 尊い方にお仕えする今日は、長年生きてきた甲斐のあった身であると初めて知ったことです。

【語句】○しら雲のうへ この歌、後撰集の詞書に「ある人のもとにひまありの女の侍りけるが、月日ひさしくへて、む月のついたちごろにまへゆるされたりけるに、雨のふるを見て」とあるように、新参の女性(女房)が月日を経て、一月一日頃に御前への側仕えを許された時の歌。よってこの「白雲の上」は「雲上」すなわち貴所の比喩。この歌は、歌のみでは解しにくいので、後撰集の詞書を用いて解釈した。○ふる 春雨の「降る」に、年「経る」をかける。一月一日で一つ年をとったので、加齢を強調する。「老いを言うのは不遇の嘆き・謝恩の類型」(工藤重矩校注『後撰和歌集』和泉書院、一九九二年)。

【所載】後撰集・春上・四

四七八 春たちてわが身ふりぬるながあめには人のこゝろのはなもちりけり  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来て我が身がまた一つ年をとってしまふ、そんな中降っている長雨には、人の心も移ろいやすい花のように散ってしまうことだ。

【語句】○ふりぬる 後撰集詞書には「ひとにわすられて侍りけるころ、雨のやまずふりければ」とあり、長雨にふりゆくわが身をなぞらえる歌は多いが、特に「花の色は移りにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに」(古今集・小野小町)が有名。「ふり」は「降り」と「古り」の掛詞。春になりまた一つ年を取ってしまったことを「古りぬる」という。○こゝろのはな 古今集・七九七・小野小町の「色見えでうつるふ物は世中の人

の心の花にぞ有りける」にあるように、移ろいゆくものの喩。長雨によって花が散ってしまうように、あの人の心も移ろい離れてしまったことだ、の意。

【所載】後撰集・春上・二一／色葉和難集・四八六

【参考】古今六帖では諸本「いせ」とするが、後撰集では「よみ人知らず」。

四七九 春さめのふらば山べにまじりなんむめの花がさありといふなり  
つらゆき或本

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨が降ったら、山辺に分け入ってしまおう。春の山には、梅の花笠があるというのだから。

【語句】○山べにまじりなん 「山べにまじる」とは、山に分け入ること。「いざけふは春の山辺にまじりなむくれなばなげの花のかげかは」（古今集・九五・素性）。なお所載欄の後撰集では「野山にまじりなん」。○むめの花がさ 「あをやぎをきたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ」（古今集・神遊びの歌・一〇八一・返しものの歌）に拠る、梅花を指す表現。

【所載】後撰集・春上・三二／和歌童蒙抄・六五三

【参考】作者名は「つらゆき或本」とあるが、後撰集では「よみ人知らず」。

四八〇 おもふ人あめとふりくるものならばもるわがやどはあはせざらまし  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】私の思うあの方が雨となつて訪れるものならば、雨の漏る我が家の板間をあわせることはすまい。

【語句】○あめとふりくる 雨となつて人が訪れる。参考欄の大和物語を参照。○あはせざらまし 板間が合わず、雨がもれる我が家の板目を合わせることはすまい。板間と「あふ」の語の関連は、「てる月ももる板まのあはぬよはぬれこそまされかへすころもで」（順集・五一）などに見られる。荒れた家に人の訪れを待つといった状況を詠む場合に多い。

【所載】ナシ

【参考】大和物語・八三段には、

おなじ女、内裏の曹司にすみける時、忍びてかよひ給ふ人ありけり。頭なりければ殿上につねにありけり。雨のふる夜曹司の菰のつらにたちよりたまへりけるもしらで、雨の漏りければ、むしろをひきかへすとて、おもふ人雨とふりくるものならばわがもる床はかへさざらまし  
となむうちいひければ、あはれときゝて、ふとはひいりたまひにけり  
とある。当該歌とよく似た歌いぶりである。

〔以上五首担当 杉本〕

四八一 はるさめのいろかはるにやにほふらんわがみるえだにいろもかはらず

【異同】ナシ

【現代語訳】 春雨の色が変わる（と思うとそれは花が）咲き匂っているのでしょうか。（だが、）私の毎日見る枝には色も冬の枝そのままなのです。

【語句】○はるさめのいろかはるに 春雨の色変はるに。「に」は断定の助動詞「なり」。春雨の色変わる時が（花の咲く時）と判断する。○にほふ 色が美しく映える。普通「……あしひきのやまのこぬれもはるされば はなさきにほひ……」（万葉集・四一八四）のように、花が咲いて色が映えるのだが、この歌においては未開花。後代の例だが、「はるさめにまどの梅がえちりにけりいろさへにほふのきのたまみづ」（建保五年十月十九日 四十番歌合）を参考に、春雨の色が「にほふ」原因と解した。

【所載】後撰集・春上・三九

【参考】後撰集によれば、梅の盛りになったのに便りがない、と催促する贈歌への返歌である。

あひしりて侍りける人の家にまかれりけるに、梅の木侍りけり、この花咲きなん時かならずせうそこせむといひ侍りけるを、おとなく侍りければ 朱雀院の兵部卿のみこ

梅花今はさかりになりぬらんたのめし人のおとづれもせぬ

かへし

紀長谷雄朝臣

春雨にいかにも梅やにほふらんわが見る枝は色もかはらず

四八二 こぬ人をあめのあしとはおもはねどほどふことはくるしかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】来て下さらない人を悪い人とは思わないけれど、あまり長くなるのは苦しくなりません。

【語句】○あめのあし 雨脚。あまあし。降り注ぐ雨が糸すじのように見えるのをいう。「悪し」をかける。○ほどふる 程経る。「経る」に「降る」をかける。

【所載】ナシ

【参考】雨脚を詠む歌は少なくない。

ふる雨のあしともおつる涙かなこまかにものをおもひくだけば（道綱母・玄々集一九）

つくしにくだるにあきのくににあらやまをあめのふるにこゆるとて

ひとたびもまだみぬみねにまどはぬはあめのあしこそしるべなりけれ（忠見集・一四〇）

あめのあしもかずこそまされよどがはのこものみぎはもいかなるらん（保憲女集・二〇九）

四八三 くれなゐのやしほのあめは<sup>ぞイ</sup>ふりく<sup>けイ</sup>らしたつたの山のいろづく見れば

【異同】ナシ

【現代語訳】紅の八入（やしお）の雨が降ったらしい。雨にあたって立田山の木々の色が次第に赤く染まるのを見と。

【語句】○やしほ 八入。染色において一度染液に浸すのを「ひとしほ」と言う。何度も浸して濃い色にすることを「やしほ」に染めるという。○ふりくらし 降り来るらしい。「くらし」は力変動詞「来（く）」の終止形に、推量の助動詞「らし」が接続した形。○たつた山 立田山。古来、大和国と河内国とのゆききの路にあり、伊勢物語「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらん」をはじめ、多く詠まれた歌枕。紅葉の名所。

【所載】新拾遺集・秋下・五三九／人麿集Ⅱ・一四九／人麿集Ⅲ・一五六／人麿集Ⅳ・四二

【参考】当該歌をふまえ、「たつた姫かけてほすてふもみぢはのやしほの衣あめにそめつつ」（夫木抄・六一四四・為家）と詠まれた。

みつね

四八四 やみなばやこゝろをばみん春さめのふるにとまれるわがやど君かとぞイおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】止んだとしたら、あの人の本当の心がわかるでしょうか。来なくてやって来たのか、（そうではなくただ）春雨の雨宿りに泊まっただけのわが家なのかと。

【語句】○やみなばや 動詞「やむ」に、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」、仮定の助詞「ば」、疑問の助詞「や」が接続したかたち。止んだとしたらば。○ふるにとまれる 雨が降ってやむを得ず泊まった。○わがやどゝ 女の立場でいう。訪れる夫が一晚泊ってゆくか、泊まらずに帰るかは平安時代の女にとって常に重大な関心事であった。

【所載】躬恒集Ⅰ・一七三／躬恒集Ⅱ・八四／躬恒集Ⅲ・七三／躬恒集Ⅳ・四二三

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

四八五 しる人もなみだならずはぬらしけんはるさめこそはあはれともみめ いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】（私の恋を）知る人もなく、涙ではないとしたら、袖を濡らした春雨こそは、（私を）あはれと見てくれるでしょう。

【語句】○しる人もなみだ 「知る人も無み」に「涙」をかける。○あはれともみめ 気の毒と見る。いとしいと見る。

【所載】伊勢集Ⅱ・二四五／伊勢集Ⅲ・二四四／伊勢集Ⅳ・二四四

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 平野〕

四八六 むらさめ  
にはくさにむらさめふりてひぐらしのなくこゑきけば秋はきにけり



【異同】ナシ

【現代語訳】庭の草に俄か雨が降って、蜩の鳴く声を聞くと、ああ秋が来たのだなあと感じられる。

【語句】◎むらさめ 群雨。村雨。ひとしきり烈しく降ったかと思うと、すぐに弱くなったり、止んではまた降る、にわか雨。降り方を主にして言う語。○ひぐらし 蜩。セミ科の昆虫。早朝、夕刻、曇天時に「カナカナ」と高い音で鳴く。古くから歌にも詠まれ、万葉集では夏と秋の両方の季節のものとして、平安以降では「蜩の鳴く山里の夕暮れは風より他にとふ人もなし」（古今集・秋上・二〇五）のように、秋の山里の夕暮れに鳴くという詠まれ方が増えてくる。

【所載】拾遺集・雑秋・一一一〇／万葉集・二一六四（旧二二六〇）庭草尔 村雨落而 蟋蟀之 鳴音聞者 秋付尔家里 ニハクサニムラサメフリテキリギリスナクコエキケバアキヅキニケリ にはくさにむらさめふりてこほろぎのなくこゑきけばあきづきにけり／人麿集Ⅰ・一一六／人麿集Ⅱ・三七／夫木抄・五六一三／秀歌大体・五一／桐火桶・一六

四八七 もるやいづこふるやむらさめおほぞらもおもひおもはずしらぬるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】漏れるほど降っているのはどこなのか、降るのはむらさめか。（そのような雨を降らせることで）大空も思っているか思っていないかが自ずと知れてしまうことだ。

【語句】○ふるや 「もるや」と対になる。いずれの「や」も疑問。○おもひおもはず 恋情の有無をいう語。「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」（古今集・七〇五・業平）のごとく、雨を冒して来るかどうかによって相手の恋情を推し量っている。相手の心を大空の擬人として歌ったもの。

【所載】ナシ

四八八 人しれずものおもふなつのむらさめは身よりふりぬるものにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】人知れずひとりものを思う夏、そんな時急に降り出したにわか雨は、天からではなく、我が身から降る雨、すなわち涙そのものでありますよ。

【語句】○むらさめ 「むらさめ」については四八六番歌参照。当該歌では村雨を涙に見立てる。○身より 天からではなく自分自身から。

【所載】伊勢集Ⅰ・一二八／夫木抄・七八九一

【参考】作者名はないが、伊勢集に入集する。

四八九 たまだすきかけぬときなくわがこふるしぐれしふらばぬれつゝもいかなしぐれ

【異同】ナシ

【現代語訳】心にかけてぬ時なくずっと私が恋いこがれている（あの人のもとへ）、時雨が降ったならぬれそぼちながらでも行こうよ。

【語句】◎しぐれ 晩秋から初冬にかけて、降ったりやんだりする小雨。木々を染め、紅葉させるものとして詠まれることが多い。○たまだすき たすきの美称。たすきをかける意から「かく」にかかる枕詞。○わがこふる 私が恋しく思っている。「こふる」は連体形だが、「しぐれ」にかかるのではなく、相手を指す「妹」といった語が省略されているとみる。

【所載】万葉集・二二四〇（旧二二三六）玉手次 不懸時無 吾戀 此具礼志零者 沾乍毛将行 タマタスキカ ケヌトキナシワガコヒハシグレシフラバヌレツツモユカム たまたすきかけぬときなくわがこふるしぐれしふらばぬれつゝもゆかむ／人麿集Ⅰ・一四三／人麿集Ⅱ・一六二、四一二／人麿集Ⅲ・一八六

四九〇 ちゞのいろにうつりし秋はすぎにけりけふのしぐれになにをそめまし

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉がさまざまに色づき、その色が変わって行く秋はもう過ぎてしまった。（時雨はもみぢの色を深く染めるとはいうが）今日、初冬の時雨に何を染めようか。

【語句】○ちゞ 数多いこと。さまざま。紅葉の色がさまざまであることを表すのに用いる例は多い。例えば「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちゞにそむらん」（古今集・二五七）、「ちゞの色にうつるふらめどしらくなくに心し秋のもみぢならねば」（古今集・七二六）など。

【所載】新勅撰集・冬・三六五／大和物語・三段・四

【参考】大和物語では、京極御息所主催の亭子院の六十賀（延長四年九月二八日）のために、源清蔭が、献上品を入れる鬚籠（ひげこ）と敷物の織物をいろいろに染めるよう申しつけたが、その仕事をすべて仕上げ、十月一日に届けた時、としこが申し送った歌とある。

〔以上五首担当 斎藤・中野〕

四九一 秋たかるたびのそらにてしぐれふりわがそでぬれぬほす人なしに

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田を刈るために旅寝をしている空に時雨が降って、私の袖は濡れてしまった、乾かしてくれる人もないのに。

【語句】○たびのそら 「たび」は自宅以外の所で寝ること。ここは、稲刈りの前後に自家から離れて、持田の近くに小屋を作って泊まることを指す。四一一番歌参照。「旅の空」は、平安中期頃から、「草枕我のみならずかりがねもたびのそらにぞなき渡るなる」（拾遺集・三四五）など、空に関わる景物と取り合わせて詠まれるようになり、時雨との組み合わせとしては「いとどしくなげかしき夜を神無月旅の空にもふる時雨かな」（増基法師集・一四）がある。傍書の「かりほに」の方が、所載欄の万葉集歌や前後のつながりからみて歌意が通るが、本文通りに解した。

【所載】新勅撰集・秋下・二九九／万葉集・二二三九（旧二二三五）秋田苧 客乃廬入尔 四具礼零 我袖沾千人無二、アキタカルタビノイホリニシグレフリワガソデヌレヌホスヒトナシニ あきたかるたびのいほりにしぐれふりわがそでぬれぬほすひとなしに／人麿集Ⅰ・一四二／人麿集Ⅱ・一六六／人麿集Ⅲ・一五二

【参考】傍記異文の作者名「人まる」は、万葉集では作者記載がなく一致しない。百人一首、天智天皇「秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ」の原歌「秋田刈る刈廬を作り我が居れば衣手寒く露ぞ置きにける」（万葉集・二二七八（旧二二七四））の類想歌。

四九二 一日にもちへにしきしきわがこふるいもがあたりにしぐれふりみん

はづかしきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】一日のうちにも幾度となく私が恋い焦がれるあの娘の家のあたりに時雨が降っており、それを見よう。

【語句】○一日にも 一日（ひとひ）にも。一日のうちにも。所載欄の万葉集歌の旧訓・現代訓は「一日には」だが、元暦校本には「一日にも」とある。万葉集における「一日」が「ちへ（千重）」の「千」にかかるのは、これを入れて三例、他の二例も「一日には（一日者）千たび参りし東の大き御門を入りかてぬかも」（二八六）、「一日には（一日尔波）千重波しきに思へどもなぞその玉の手に巻きかたき」（四二二）（旧四〇九）と「一日には」とあるが、本文通り「一日にも」として解した。○しきしき 「しくしく」に同じ。頻りに。繰り返して。○ふりみん 「見る」が連用形に後接する場合、通例は「とり見ん」のように主語は統一される。この場合、「降り」の主語は「時雨」だが、「見ん」の主語は「男」となる。所載欄の万葉集歌の西本願寺本の訓は「しくれふれみむ」だが、現代訓は「礼」を「所」の誤りとする『万葉集略解』に従い、「しくれふるみゆ」、時雨が降っているのが見えるとしており、解しやすい。一応、本文に即して訳した。雨に降りこめられて恋人の所に逢いに行けない男の歌。

【所載】万葉集・二二三八（旧二二三四）一日 千重敷布 我恋 妹当 為暮零礼見 ヒトヒニハチヘニシキシ  
キワガコフルイモガアタリニシグレフレミム ひとひにはちへしくしくにあがこふるいもがあたりにしぐれふる  
みゆ／人麿集Ⅲ・一八七

【参考】作者名はないが、万葉集では柿本朝臣人麻呂歌集の歌とされる。四九一番歌は、万葉集の二二三九（旧二二三五）番歌、当該歌は万葉集の二二三八（旧二二三四）番歌を原歌としており、古今六帖によくみられる、逆順の採歌方法をとる。

四九三 このしぐれいたくなふりそわぎもこがつとにみせんともみちをりてん

【異同】ナシ

【現代語訳】この時雨よ、ひどくは降ってくれるな。愛しい妻への土産としてみせるため紅葉を折ろうと思うのだ。

【語句】○な……そ おだやかな禁止。……してくるな。○つと 「包んだもの」が原義で、土地の産物。旅先から携えてゆく家へのみやげもの。三九五番歌参照。○をりてん 「てん」は確述の助動詞「つ」の未然形＋

意志の助動詞「ん」で、強い意志を表す。

【所載】万葉集・四二四六（旧四二二二） 許能之具礼 伊多久奈布里曾 和芸毛故尔 美勢牟我多米尔 母美知等里氏牟 コノシグレイタクナフリソワギモコニミセムガタメニモミチトリテム このしぐれいたくなふりそわざもここにみせむがためにもみちとりてむ／家持集Ⅰ・二六七／家持集Ⅱ・二七三

【参考】作者名はないが、万葉集では久米朝臣広縄の作とされる。

四九五 しぐれの雨まなくしふれば神なびのもりのこのはもいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨が絶え間なく降るので、神なびの森の木も葉も色づいたことだ。

【語句】○まなく 間無く。休みなく、絶え間なく。○神なびのもり 「神南備」は神の鎮座する神聖な森や山を表す普通名詞だが、大和国の歌枕ともされ、奈良県生駒郡斑鳩町の竜田周辺の森や山（三室山）を指す場合もある。「神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびの森」（古今集・二五三）のごとく、紅葉を色づかせる時雨が景物として詠まれる。

【所載】ナシ

【参考】類歌に、「時雨の雨間なくし降れば御笠山木末あまねく色づきにけり」（万葉集・一五五七（旧一五五三）、「時雨の雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色づきにけり」（万葉集・二二〇〇（旧二二九六）がある。

### 人まろ

四九五 さをしかのこゝろあひおもふ秋はぎのしぐれのふるにちるはをしくも

【異同】ナシ

【現代語訳】雄鹿が心を通わせている秋萩が、時雨が降って散りゆくのが惜しいよ。

【語句】○さをしか 「さ」は接頭語。雄鹿。○こゝろあひおもふ 「あひ」は意味が軽い接頭語。心を通わせている。「萩」は「鹿」の妻とされ、「秋萩の散りゆく見ればおほしき妻恋すらしさを鹿鳴くも」（万葉集・二一五四（旧二一五〇）、「秋萩の咲きたる野辺はさを鹿ぞ露をわけつつ妻問ひしける」（万葉集・二一五七（旧二

一五三) など、万葉集に多くの例がある(吉永登「秋萩の恋」『万葉集研究 第三集』塙書房、一九七四年)。  
【所載】万葉集・二〇九八(旧二〇九四) 竿志鹿之 心相念 秋芽子之 鍾礼零丹 落僧惜毛 サヲシカノココロアヒオモフアキハギノシグレノフルニチリソフヲシモ さをしかのこころあひおもふあきはぎのしぐれのふるにちらくしをしも／夫木抄・四五九〇／人麿集Ⅲ・一七〇

【参考】作者名「人まろ」とあるが、万葉集では柿本朝臣人麻呂歌集の歌とされる。

〔以上五首担当 中野〕

四九六 たれかれとわれをなとひそなが月のしぐれにぬれて君まつ人を

【異同】ナシ

【現代語訳】たれだあれば、とわたしのことを詮索しないでください。長月のしぐれにぬれながらあの人を待っているこの者を。

【語句】○たれかれとわれをなとひそ たれだあの者は、とわたしのことをうるさく詮索するな。「なとひそ」は、訝しんで問い糺すな、の意。「たれかれと問はばこたへんすべをなみ君が使ひをかへしつるかな」(古今六帖・一一〇〇)。○なが月 陰暦九月の称。○しぐれ 秋の末から冬のはじめのころ、降ったりやんだりする雨。能因歌枕に「十月の雨をばしぐれといふ」とあるように、平安時代には神無月のものでして次第に固定していたが、万葉集では長月にも神無月にも詠まれている。○君まつ人を あの人を待っている者を。「君」は待つ相手のこと。「人」は作者自身。自分を客体化した形で三人称的に言った。

【所載】玉葉集・恋二・一四一六／万葉集・二二四四(旧二二四〇) 誰彼 我莫問 九月 露沾乍 君待吾 タゾカレトワレヲナトヒソナガツキノツユニヌレツツキミマツワレヲ たぞかれとわれをなとひそながつきのつゆにぬれつつきみまつわれを／人麿集Ⅰ・一四五／人麿集Ⅲ・五四七

四九七 おほぞらはくもらざりけりかみな月しぐれごちはわれのみぞする

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】大空は曇りもしないなあ。この神無月の、いまにもしぐれそうな涙心地は、わたしだけがすること

だ。

【語句】○かみな月 陰曆十月の称。○しぐれごち いまにもしぐれてきそうな空模様のこと。それを人事に転用して、ともすれば涙ぐみそうになる気持の形容とした。「けふはなほ隙こそなければ曇るしぐれごちはいつもせしかど」（和泉式部統集・六〇八）。

【所載】拾遺集・恋一・六五一／貫之集Ⅰ・五九五

【参考】作者名「つらゆき」は、貫之集Ⅰとは一致するが、拾遺集は「よみ人知らず」とする。五〇一番歌参照。

四九八 ふるときはなを雨なれどかみな月しぐれにやまのいろはそめけり

【異同】ふるときは——古郷は（大）

【現代語訳】降るときはやはり普通の雨なのだけれども、神無月のしぐれによって、山の色はくれないに染められたことだなあ。

【語句】○なを雨なれど 「なを」は「なほ」。別に特殊なものではなくて、やはり普通の雨なのだが。「雨なれどしぐれといへばくれなぬに木の葉もしみて散らぬ日はなし」（貫之集Ⅰ・三八四／古今六帖・五〇一）。○しぐれに 山の木々を染めるとされるしぐれによって。「長月のしぐれの雨にぬれとほり春日の山は色づきにけり」（万葉集・二一八四（旧二一八〇））のように、万葉集以来、しぐれは山の木々を染めるものとして詠まれている。○いろはそめけり 「いろは」に対して「そめけり」の他動詞形は整合しないが、六帖ではこの部分に異同なく、諸本みなこの形。所載欄の貫之集Ⅰでは「しぐれぞ山の色は染めける」とあり、その方が無理がない。

【所載】貫之集Ⅰ・三八五

【参考】作者については、五〇一番歌参照。

四九九 わび人はときにしらねぬあきなれやわが身ひとつにしぐれのみふる

【異同】ナシ

【現代語訳】世をつらいものと思う人にとっては、時節にかかわりなくいつもが秋なのだろうか。わが身ひとりにだけ、しぐればかりが降ることよ。

【語句】○わび人 この世をつらくてやりきれないと感じている人。失意の人。ここでは作者自身。○ときにし

られぬあきなれや 時節の変化というものによつて知られることのない秋なのだろうか。四季にかかわりなく常に秋という季節なのだろうか。「なれや」は、……なのだろうか、という推定・疑問の言い方。下に推定の根拠を伴なう。○わが身ひとつにしぐれのみふる 自分ひとりにだけしぐればかりが降ることよ。「しぐれのみふる」は、不如意の悲しい状態ばかりがつづいている、ということ。「あきなれや」の縁で「しぐれ」と言った。

【所載】ナシ

【参考】作者については、五〇一番歌参照。貫之集Ⅰの六二二番に「わび人はとしに知られぬ秋なれば我袖にしも時雨ふるらん」という類似した歌がある。

五〇〇 くれなゐのしぐれふればやいそのかみふるたびごとにのべをそむらん

【異同】ナシ

【現代語訳】 くれなゐのしぐれが降るから、降るたびごとに、このように野辺を染めるのであろうか。

【語句】 ○くれなゐのしぐれ しぐれが山野を染めるという発想（四九八番参照）をさらに進めて、しぐれそのものを「くれなゐ」と見た屏風歌らしいことば。○いそのかみ 奈良県天理市あたりの古い地名。同所の小地名「布留」にかかる枕詞として用いられるが、ここでは、音の共通する「降る」にかかる枕詞として転用した。

【所載】貫之集Ⅰ・三一八

【参考】作者については、五〇一番歌参照。貫之集Ⅰでは、「延喜のすゑよりこなた延長七年よりあなた、うち／＼の仰せにてたてまつれる御屏風の歌廿七首」の中の冬歌のうちにある一首。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

五〇一 あめなれどしぐれといへばくれなゐにこのはのみしてちらぬ日ぞなき

五首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】（同じ） 雨ではあるけれど、時雨というと、木の葉ばかりが紅の色となつて、しきりに散らない日はないよ。

【語句】 ○あめなれど 雨ではあるけれど。同じ雨でも。「ふる時はなほ雨なれど神無月時雨ぞ山の色は染めけ



る」(貫之集・三九三)。○こののはのみして 木の葉ばかりで。所載欄の貫之集Ⅰには「木のはのしみて」とあり、この本文の方が、「(紅に) 木の葉が染まつて」という穏当な詠となる。

【所載】貫之集Ⅰ・三八四

【参考】「五首つらゆき」とある通り、四九七番歌から五〇一番歌まですべて貫之集に見える。四九八番歌と五〇一番歌はともに天慶二年(九三九年)の屏風歌で、「九月」の題の歌。なお、時雨は、木や草を紅葉させるものとされ、かつ、紅葉を散らすものともされていた。当該歌もこうした通念を踏まえる。

五〇二 人こふるこゝろはあきにかよへばやそらもたもともにしぐるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】人を恋しく思う心は秋に通じているから、空も私の袂も共に時雨れるのだろうか。

【語句】○そらもたもともにしぐるゝ 秋の空も時雨が降り、自分の袂も涙で濡れていることを「ともにしぐるゝ」と表した。「降らぬより袖はぬれつつしぐるるをけふしも空のしぐるべしやは」(大斎院前の御集・二四〇)、「別るれば心もそらにかよへばや袖にしぐれのひまなかるらむ」(同・二四一)。

【所載】玉葉集・恋四・一六六七／万代集・二三六一／貫之集Ⅰ・五八六

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると作者は貫之。

五〇三 しらつゆにそめはじめたる秋山にしぐれなふりそありわたるがね

【異同】ナシ

【現代語訳】白露で染め始めた秋の山に、時雨よ、降らないでくれ。(紅葉が)ずっとそのままであるように。

【語句】○しらつゆにそめはじめたる 白露で染め始めた。白露によって紅葉し始めたということ。○ありわたるがね そのままの状態でありつづけるように。「がね」は、……するよう。

【所載】万葉集・二一八三(旧二一七九) 朝露尔 染始 秋山尔 鍾礼莫零 在渡金 アサツユニソメハジメタルアキヤマニシグレナフリソアリワタルガネ あさつゆににほひそめたるあきやまにしぐれなふりそありわたるがね／人麿集Ⅲ・一六〇

【参考】作者名はないが、万葉集に「右二首柿本朝臣人麿之歌集出」と見える。

五〇四 かみなづきのこりのきくのをしけくにしぐれのあめはふらずともよし

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月には、咲き残っている菊が惜しいから、時雨の雨は降らなくてもよい。

【語句】○かみなづき 神無月。陰暦十月。題で二〇番既出。○のこりのきく 盛りの時期である秋（特に九月九日）を過ぎても咲き残っている菊。色が変わった様が賞美された。「秋すぎて残れる菊はかみな月雲をわけてぞにほふべらなる」（醍醐御時菊合・一・醍醐天皇）。○をしけく 「惜し」のク語法。惜しいこと、の意。

【所載】ナシ

【参考】時雨が、菊とともに詠まれる際には、「秋さける菊にはあれや神無月時雨ぞ花の色はそめける」（貫之集・五〇四・のこれるきく）などのように、残菊の花の色を染め、その濃さを優らせるものとして詠まれる。当該歌では、それを認めながらもなお枯れていくことを惜しんでいる。

五〇五 はつしぐれふればやまべぞおもほゆるいづれのかたかまづもみづらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】初時雨が降ると山辺が思われるよ。今頃は、山のどちらの方が最初に紅葉していることだろうか。

【語句】○はつしぐれ その年はじめて降るしぐれ。○もみづ 紅葉する、の意の動詞。上代には「もみつ」と清音で四段に活用し、平安時代に入ると「もみづ」と濁音化して上二段に活用した。

【所載】後撰集・秋下・三七五／後撰集・冬・四四三／友則集・二八

【参考】当該歌は友則集に見えるが、古今六帖に作者名の記載はなく、後撰集も「よみ人知らず」とする。「たつた河もみちば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集・二八三・よみ人知らず）のように、時雨が山の木々を紅葉させるという通念を前提とする歌。

〔以上五首担当 長戸〕

五〇六 はつしぐれふるほどもなくさほ山のみちあまねくいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】初時雨が降ってほんのわずかの間に、佐保山の紅葉は一面みな色づいたことだよ。

【語句】○もみちあまねく 末句に「色づきにけり」とあるので「もみち」とあつては意味が重なってしまう。所載欄の後撰集では「梢あまねく」とあり、この方がわかりやすい。「あまねく」は、ひとつ残らず。すべて。「このゆふべあきかぜふきぬしらつゆにあまねくはなはあすもさきなん」(家持集・一二二)。

【所載】後撰集・冬・四四四／是則集・一〇

【参考】万葉集・一五五七(旧一五五三)に「しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色付きにけり」という、下句の類似する歌がある。

五〇七 神無月しぐるゝときぞあしひきの山のみゆきはふりはじめける

【異同】ナシ

【現代語訳】十月になって時雨が降るときにまさしく、山の雪は降り始めたことだよ。

【語句】○みゆき 「み」は接頭語。雪の美称。「ふるさとはよしの山しかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし」(古今集・冬・三二二)。

【所載】後撰集・冬・四六五／和歌童蒙抄・六二

五〇八 なみださへしぐれにそひてふるさとはもみちの色もこさまさりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】涙までもが時雨に加わって降る、この思い出の地では、その涙で紅葉もよりいっそう色濃くなったことです。

【語句】○しぐれにそひて 時雨は木々を紅葉させるもの。それに涙が加わるのでよりいっそう色濃くなるという趣向。○ふるさと かつてのなじみの地。「ふる」に涙や時雨の「降る」を掛ける。所載欄の後撰集や伊勢集の詞書によると、通わなくなった男から見ての「ふるさと」(以前は通っていた場所)なので、詠者は今でもこの地にいる。

【所載】後撰集・冬・四五九／伊勢集Ⅰ・二／伊勢集Ⅱ・二／伊勢集Ⅲ・二

【参考】伊勢集では冒頭の贈答。男（藤原仲平）がかつて通っていた女（伊勢）の家に贈った「人住まず荒れたる宿を来てみれば今ぞ木の葉は錦織りける」（伊勢集・一、後撰集・冬・四五八にも）への返歌。また、初句を「神無月」として歌仙家集本索性集にも伝わる。

### ゆふだち

五〇九 ゆふだちてなつはいぬめりそほちつゝあきのさかひにいつかいらん

【異同】ナシ

【現代語訳】夕立が降って夏は過ぎ去っていくようだ。この雨にぬれながら秋の境にいつ入るのだろうか。

【語句】◎ゆふだち 夏の午後、にわかには雲が立ち短時間に激しく降る雨。○そほちつゝ ぬれながら。「夏」を擬人化したもの。類歌「ふる雪を空にぬさとぞ手向けける春のさかひに年のこゆれば」（貫之集・八九）では「年」を擬人化する。

【所載】古今六帖「夏のはて」一二一番に既出。

【参考】所載欄の「夏のはて」では、初句を「ゆふだちに」、五句を「いまやいたらん」とする。

五一〇 ゆふだちのあめうちふればかすがのゝおばながうへのしらつゆはおもほゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕立の雨がさつと降ると、春日野の尾花の上の白露が思い出されるよ。

【語句】○うちふれば 「うち」は接頭語。さつと、ちよつと。○しらつゆはおもほゆ 所載欄の万葉集では「しらつゆおもほゆ」とあり、その方が自然と思われる。尾花（ススキ）の葉にかかる露が雨上がりの夕日を受けて輝く景色。

【所載】万葉集・二一七三（旧二一六九） 暮立之 雨落毎（一云、打零者） 春日野之 尾花之上乃 白露所念 ユフダチノアメフルゴトニ（一云、ウチフレバ）カスガノノヲバナガウヘノシラツユオモホユ ゆふだちのあめふるごとに（一云、うちふれば）かすがののをばながうへのしらつゆおもほゆ／万葉集・三八四一（旧三八一九） 暮立之 雨打零者 春日野之 草花之末乃 白露於母保遊 ユフダチノアメウチフレバカスガノノヲバナガスエノシラツユオモホユ ゆふだちのあめうちふればかすがののをばながうれのしらつゆおもほゆ／夫木抄・

九六八〇／人麿集Ⅱ・五八

【参考】万葉集・三八四一（旧三八一九）では、小鯛王が家でくつろいで琴を手にするとまっ先にこの歌を口ずさんだと伝える。

〔以上五首担当 青木〕

五一 夏の日にはかにくもるゆふだちのおもひもかけぬよにもあるかな

【異同】ゆふたちの―夕たちに（大）

【現代語訳】夏の日の、にわかには曇って降り出す夕立が思いもかけないように、思いもかけないことが起こる世の中だなあ。

【語句】〇おもひもかけぬ 上三句は序詞。「ゆふだち」が思いもかけないのと、「よ（世）」が思いもかけないのと、両意を持つ。

【所載】ナシ

五二 こゝやいづこあなおぼつかなしらくものやへたつ山をこえてきにけり  
くも

【異同】ナシ

【現代語訳】ここはどこなのか。なんとも心もとないことだ。白雲の幾重にも立つ山々を越えて、はるばるとやってくるってしまったことだ。

【語句】◎くも 遠く、空に浮かんでいるところから、遙かなもの、たゆとうもの、ただよい不安定なもの、また、日や月を遮るところから、隔てるもの、遮るもの、などとして詠まれることが多い。時には満開の桜花や火葬の煙などにも見立てられた。〇あなおぼつかな 「おぼつかな」は、はつきりしない、ぼうつとしている、気がかりだ、など、茫漠とした不安感を表す形容詞「おぼつかなし」の語幹。なお「あな＋形容詞の語幹」は詠嘆の表現となる。〇やへたつ 「やへ」は「八重」で、幾重にも立つ。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖「とほみちへだてたる」二七八九番に、「こにしていづもやいづこしら雲のたなびく山をこえてきにけり」という類歌がある。

五二三 わがせこがふりさけみつゝなげくらんきよき月よにくもたなびきて

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のはるかに仰ぎ見つつ私を偲んで嘆いていることでしょう。この澄んだ月夜に雲がたなびいていて。

【語句】既出、三四五番歌参照。

【所載】古今六帖「ざふのつき」三四五／万葉集・二六七七（旧二六六九）吾背子之 振放見乍 将嘆 清月夜  
尔 雲莫田名引 ワガセコガフリサケミツツナゲクラムキヨキツキヨニクモナタナビキ わがせこがふりさけみつゝなげくらんきよきつよくにくもたなびき／綺語抄・三三四

【参考】三四五番歌では第三句が「なげくとも」、第五句が「雲なたなびき」となっている。所載欄の万葉集には「なげくらむ：くもなたなびき」とあり、雲よたなびいたりするな、の意となつて、この形が最もわかりやすい。

五一四 やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきに すさのをのみこと をイ

【異同】ナシ

【現代語訳】出雲の地に、幾重もの垣を造ることだ。妻を籠もらせるために、幾重もの垣を造ることだ。幾重もの垣根を。

【語句】○やくもたつ 多くの雲が立ち出する意で、「出雲」の枕詞。○いづも 今の島根県東部。○やへがき 幾重にもめぐらした垣根。○つまごめに 妻を籠め据えるために。○そのやへがきに 底本の「やへがきに」では意がとりにくい。傍記異文によつた。

【所載】古今集・仮名序／古事記・一／日本書紀・一／俊頼髓脳・一／和歌童蒙抄・八四九／奥儀抄・一八／古来風体抄・一／和歌色葉・一四／和歌無底抄・三五、三七／平家物語（覚一本）・九五／平家物語（延慶本）・二

一九／太平記・八九

【参考】所載欄の文献はすべて作者を素戔鳴尊とし、古今集以下ではこの歌を三十一文字の歌のはじめとする。

五一五 かぜふけばみねにわかるゝしらくものたえてつれなき人のこゝろか  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】風が吹くと、峰から離れて別れ行く雲がまったく素知らぬ顔をしているように、ひどく冷淡なあなたの心ですね。

【語句】○みねにわかるゝ 雲が峰に別れる。峰から雲が離れて行く。峰によつて雲が二つに分かれる意ではない。「あかでも人にわかれぬるかな」（古今集・四〇四）と同じ用法。○たえてつれなき 上三句を序として受け、「人のこゝろ」にかかる。「たえて」は、まったく、ひどく、の意の副詞。

【所載】古今集・恋二・六〇一／忠岑集Ⅰ・一六／忠岑集Ⅱ・三六／忠岑集Ⅲ・五七／忠岑集Ⅳ・五〇／貫之集Ⅰ・五四六／詠歌一体・六二

【参考】作者は「たゞみね」とし、忠岑集の各伝本にも見え、古今集にも「忠岑」として載るが、一部の貫之集伝本にも収められていて、問題は残る。なお貫之集以外は第五句を「君が心か」とする。

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

五一六 白雲のやへかさならんをちにてもおもはん人にこゝろへだつな  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲が八重に重なるような遠くにいても、あなたに思う人がいたとしたら、心を隔てないでください。

【語句】○白雲のやへかさならんをち 手の届かないところにある白雲が、八重に重なることによつて、遙か彼方を表す。「をち」は遠方の意。所載欄の古今集の詞書によれば陸奥国をさす。所載欄の古今集・貫之集Ⅱでは第二句「やへにかさなる」、貫之集Ⅰでは「八重かさなれる」。○おもはん人 自分をさす。「ん（む）」は仮定の

助動詞の連体形。婉曲を表す。○こゝろへだつな（雲によって体は隔てられても）心は隔てないでください。「へだつ」は「雲」の縁語。「わかれちをへだつる雲のためにこそ扇の風をやらまほしけれ」（拾遺集・三二一）。  
【所載】古今集・離別・三八〇／貫之集Ⅰ・七〇二／貫之集Ⅱ・三九  
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。古今集の詞書によれば、陸奥国へまかりける人に詠んだ歌。

五一七 おほきみはちとせもまさんしらくものみふねのやまにたゆるひあらめや

【異同】ナシ

【現代語訳】大君は千年も生きていらつしやるでしょう。白雲が三船の山に絶える日があるでしょうか、ありません。（白雲がいつも三船の山にかかっているように、大君の命もいつまでも長く続くことでしょう。）

【語句】○おほきみ 親王の尊称。所載欄の万葉集によると弓削皇子をさす。○まさん 「ます」は「有り」「居り」の尊敬語。○みふねのやま 三船山。舟岡山ともいう。吉野離宮があった吉野町宮滝と吉野川をはさんで東南にある山。懷風藻の吉田宜「從駕吉野宮」にも「雲卷三舟谷」とある。○あらめや あるでしょうか、いやない。「めや」は反語。

【所載】万葉集・二四四（旧二四三）王者 千歳二麻佐武 白雲毛 三船乃山尔 絶日安良米也 オホキミハチトセニマサムシラクモモミフネノヤマニタユルヒアラメヤ おほきみはちとせにまさむしらくもみふねのやまにたゆるひあらめや

【参考】所載欄の万葉集では、弓削皇子が吉野離宮で詠んだ五一八番歌に和え奉って春日王が詠んだ歌。

五一八 たきのうへのみふねの山にゐる雲のつねなるべくもあらぬわが身を  
人まろ 或本

【異同】ナシ

【現代語訳】（吉野川の）激流の上方にそびえる三船の山にいつもかかっている雲のように、いつまでもこの世にあらうはずのないわたしですや。

【語句】○たきのうへの 「滝」は水が激しく流れるところ。激流。所載欄の万葉集詞書によると、吉野町宮滝



付近。家持集では「みかのゝの」。○みふねの山 五一七番歌参照。所載欄の家持集Ⅰでは「みふねのうらに」。  
○ある雲の 「ある」は雲が動かずに同じ場所にじっとしていること。上三句は「つねなるべくもあらぬ」の序詞。○つねなるべくもあらぬわが身を いつまでも生きるはずもないわたしだよ。所載欄の万葉集、家持集Ⅱでは「つねにあらむとわがおもはななくに」、家持集Ⅰでは「つねならむともわがおもはななくに」。「を」は文末に用いられたときに詠嘆を示す。

【所載】万葉集・二四三（旧二四二）瀧上之 三船乃山尔 居雲乃 常将有等 和我不念久尔 タキノウヘノミ  
フネノヤマニシルクモノツネニアラムトワガオモハナクニ たきのうへのみふねのやまにあくるものつねにあらむとわがおもはななくに／夫木抄・八八七三／家持集Ⅰ・二五六／家持集Ⅱ・一七〇

【参考】古今六帖「山」八四一に下句「つねならぬよをたれたかのまむ」の類歌がある（作者人まろ）。所載欄の万葉集・夫木抄では作者は弓削皇子。また、万葉集二四五（旧二四四）番には或本歌一首として「三吉野之御船乃山尔 立雲之 常将在跡 我思莫苦ニ ミヨシノノミフネノヤマニタツクモノツネニアラムトワガオモハナクニ みよしののみふねのやまにたつくものつねにあらむとわがおもはななくに」がある。「柿本朝臣人麿之歌集出」と左注がつき、人麿集Ⅲ六七八番にもみえる。

#### 人丸

五一九 ことにのみあふとはいひてくらはしのみねのしら雲たつたひにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】くらはしの峰の白雲があちこちと揺れ動くように、ことばだけでは「お会いします」というものの、（心は）ためらっているのだな。「第五句は人麿集により「たゆたひにけり」として解した。」

【語句】○ことにのみ ことばだけでは。「こと」は話したり語ったりすること。所載欄の人麿集Ⅲ・三一〇番歌では「こゑにだに」。○あふとはいひて 「お会いします」というものの。所載欄の人麿集Ⅲ・六七七番歌では「あひぬといひし」と過去形。人麿集Ⅲ・三一〇番歌では「あひぬといはで」、人麿集Ⅳでは「あひ見ぬとおもへ」。○くらはし 奈良県桜井市の東南端にある音羽山のこと。○たつたひ 意味不明。所載欄の人麿集では「たゆたひ」。人麿集により「たゆたひ」で解釈する。「たゆたふ」は位置が固定せず不安定に揺れ動くこと。「心が動揺して決断しかねる」意をかける。「あさかやまあさある雲の風をいたみたゆたふこころわれはもたらじ」（夫木抄・八六八二）。

【所載】人麿集Ⅲ・三一〇、六七七／人麿集Ⅳ・一〇二

【参考】作者名「人丸」は、人麿集そのものに問題はああるものの、一応人麿集にも見える。

五二〇 あづさゆみいまはゝるやまゆく雲のゆきやわかれんこひしき物を  
おなじ人

【異同】ナシ

【現代語訳】梓弓を今張る、そのハルならぬ春山を今行く雲のように、わたしはあなたと別れて行くのでしょうか、恋しくてならないのに。

【語句】○あづさゆみ 梓の木で作った弓。梓弓の弦をひく、または張るところから、「い・いる・ひく・はる」にかかる枕詞。所載欄の他文献では「しらまゆみ」。○いまはゝるやま 春山の「春」に「張る」をかける。所載欄の赤人集ⅠⅡでは「いまはるのゝに」、赤人集Ⅲでは「いまはるのべに」。人麿集では「いそはの山に」。○ゆきやわかれん 「行きわかる」は行って別れ別れになる意。上三句は同音によって「ゆき」を導く序詞。所載欄の人麿集では「たちやわかれむ」。

【所載】万葉集・一九二七（旧一九二三）白檀弓 今春山尔 去雲之 逝哉将別 恋敷物乎 シラマユミイマハルヤ マニユクモノユキヤワカレムコヒシキモノヲ しらまゆみいまはるやまにゆくくものゆきやわかれむこほしきものを／人麿集Ⅳ・二九一／赤人集Ⅰ・二〇三／赤人集Ⅱ・八四／赤人集Ⅲ・九四

【参考】作者名に「おなじ人」とあるが、万葉集では作者名がなく、人麿集Ⅳと赤人集ⅠⅢに見える。

〔以上五首担当 三浦〕

五二一 ゆふさればくものはたてにものぞおもふあまつそらなる人をこふとて

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方になると雲の果てを見てもの思いにふけるのです。天上はるかに手のとどかないあの人を、恋しく思っているのだ。

【語句】○ゆふされば 夕方になると。○くものはたて 雲の果て。一説に「夕焼け雲が旗のようにたなびいたものを「雲の旗手」（豊旗雲とも）」といい、物思いの乱れにたとえた」（新編日本古典文学全集『古今和歌集』）。

○あまつそら 天上。雲居。「あまつそらなる人」で天上にいるような手の届かぬ高貴な人。

【所載】古今集・恋一・四八四／新撰和歌・二二六／俊頼髓腦・二二〇／綺語抄・六三一／奥儀抄・四九五／袖中抄・二八／和歌色葉・二四八／詠歌大概・八四

五二二 はる山にたちゐるくもに身<sup>とイ</sup>をなしてそらなる人にあふよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】春山に浮かんでいる雲に我が身を変えて、心が浮ついているあの人に逢う方法があればよいのになあ。

【語句】○たちゐるくも 浮かんでいる雲。○そらなる人 心が浮ついている人。実のない人。「そら」は「くも」の縁語。○あふよしもがな 逢う方法があればよいのになあ。「よし」は手段、方法。

【所載】ナシ

五二三 おもはずにあひもやするとあま雲のゆきてはそらにかへりきぬるを

【異同】ナシ

【現代語訳】思いがけず逢うかもしれないと、雨雲が空を行き来するように、行つてはむなく帰つて来るのだなあ。

【語句】○おもはずに 思いがけず。○あひもやすると 逢うかもしれないと。「ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみてちらばちりなん」(古今集・七八)。○あま雲の 「ゆきてはそらに」を導き出す語。○そらに むなく。うわのそらで。「そら」は「あま雲」の縁語。○かへりきぬるを 帰つて来るのだなあ。「を」は詠嘆を表す間投助詞。

【所載】夫木抄・七八四二

五二四 かすが山あさゐるくものしら／＼にわがこひまさる月に日ごとに

【異同】ナシ

【現代語訳】春日山に朝たなびいている雲がどんどん明るくなるように、わが恋心が募ります。月ごと日ごとに。  
【語句】○かすが山 奈良市春日の地の東方に聳える山。高円山と若草山の間にあり、三笠山ともいう。○しらく（東の空が）見る見る白くなるように。所載欄の万葉集は「しくしくに」。後から後から絶えないでの意。  
○月に日ごとに 月日を重ねるに従って。

【所載】万葉集・七〇一（旧六九八）春日野 朝居雲之 敷布二 吾者恋益 月二日二異二 カスガノニアサ  
牟ルクモノシクシクニワレハコヒマスツキニヒニケニ かすがのにあさぬくものしくしくにあればこひますつ  
きにひにけに／夫木抄・九六八五／綺語抄・四三

### ちふる

五二五 あしたづのひとりをくれてなくこゑはくものうへまできこえつがなん

【異同】ナシ

【現代語訳】芦辺に一羽だけ取り残された鶴の鳴く声が、雲の上まで聞こえるように、私の声も宮中まで届いてほしいものです。

【語句】○あしたづ 葦の生えている水辺の鶴。○をくれて おくれて。後に取り残されて。他人に劣って。  
○なくこゑ 所載欄の古今集詞書に「寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける」とあり、一人だけ官位昇進の遅れた作者の嘆き。○くものうへ 天空と宮中の意を掛ける。鶴の鳴く声が天に届くというのは「鶴鳴于九臯 声聞于天」（詩経）による。○きこえつがなん 伝えるように届いてほしい。

【所載】古今集・雑下・九九八／赤人集Ⅰ・一一〇／千里集・一二一／後六々撰・一〇二／奥儀抄・五七四  
【参考】作者名「ちふる」とあるが、古今集・後六々撰では「大江千里」である。

〔以上五首担当 橋本・林〕

五二六 こゝろなきものとやいひしらくものかくせばをしき月にやはあらぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲は思いやりのないものだと言ったのだろうか。雲が隠すからこそ、よけいに惜しまれる月なのではないか。

【語句】○こゝろなきもの 雲は、「三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなむ隠さふべしや」(万葉集・一八)で知られるように、情のないものだという考え方が定着している。○月 「おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに」(古今集・八八五)など、月と雲とは、ある人とそれを妨げる者の喩として用いられる。○にやはあらぬ ……ではないことがあるだろうか、反語を用いた表現。

【所載】ナシ

【参考】もうひとつの現代語訳を以下に挙げる。月は常に惜しまれる存在であるので、「雲が心ないものだというだろうか。白雲が隠すから惜しい月なのではないですよ」とする。

五二七 あしひきの山べにをへばしらくものいかにせよとかはるゝときなき

【異同】ナシ

【現代語訳】山辺に籠もっていると、白雲はこれ以上どうせよといって、晴れるときもないのか。

【語句】○あしひきの 山にかかる枕詞。○いかにせよとか 口語的な表現。どうせよというのか。○はるゝときなき 白雲の山にかかっている様子を、思いの鬱屈しているさまに例えた。

【所載】古今集・物名・四六一／拾遺抄・雑上・四七九／拾遺集・物名・三八〇

五二八 おもひやるこゝろばかりはさはらじをなにへだつらんみねのしら雲  
たちばなのなをもと

【異同】ナシ

【現代語訳】思いやる心は障害になどならないものを、どうしてへだてるのか、峰の白雲は。

【語句】○さはらじ 「さはる」は障害になる。○なにへだつらん どうして隔てるのだろうか。

【所載】後撰集・離別・一三〇六／和漢朗詠集・六三八／金玉集・五八／深窓秘抄・八八

【参考】作者名「たちばなのなをもと」(橘直幹)は所載欄の文献に一致する。

五二九 雨ふればきたにたなびくしら雲を君によそへてながめつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】雨がふると北にたなびいている白い雲を、あなたによそえて眺めていることです。

【語句】○きたにたなびくしら雲 所載欄の貫之集詞書に「こしのかたなる人にやる」とある。言うまでもなく、都から見て越の国は北側。新潮日本古典集成『貫之集』の頭注には同想の歌として「雨やまぬ山の雨雲立ちあつてやすけくもなき君をしぞ思ふ」（貫之集Ⅰ・五九四）を挙げる。○よそへて 「よそふ」は、たとえること。なぞらえること。「ながからじと思ふ心は水のあわによそふる人のたのまれぬかな」（拾遺集・六三七）。

【所載】夫木抄・七八七六／貫之集Ⅰ・七八〇

五三〇 さよふけていづらん月をたかやまのみによそへてながめつるかな  
のしらくもかくしてしかなイ つるかなイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夜ふけて出ているであろう月を、高い山の峰を口実にして眺めたことだよ。

【語句】○たかやま 八雲御抄では常陸国にこの地名があるが、特にどの山と特定する必要はないか。○みによそへて 「によそへて」以下、前歌の目移りであつて、本来は傍記の「みのしらくもかくしてしかな」が古今六帖の本文であつたと推定される。そうでないと「くも」題にそぐわない。

【所載】ナシ

【参考】本来の歌本文（下句「みのしらくもかくしてしがな」）ならば、万葉集・二三三六（旧二三三二）に「左夜深者 出来牟月乎 高山之 峰白雲 將隱鴨 サヨフケバイデコムツキヲタカヤミノシラクモカク シテムカモ さよふけばいでこむつきをたかやまのみのしらくも かくすらむかも」とあり、人麿集Ⅲ・六七一にも見える。

〔以上五首担当 杉本〕

五三一 をのが身にくもたちのぼりしぐれふりぬれとをとるもわがゝへらめや

【異同】わかゝへらめや―われ帰らめや（大）

【現代語訳】男体山に雲がたちのぼり時雨が降って全身ずぶ濡れになっても、帰るだろうか、いや私は帰りはし

ない。

【語句】○をのが身に 本来「男神に」。漢字「男神」を「をのかみ」と読んだものの、表記が変じた。筑波山は高低二つの峰から成る霊峰で、男神と女神の二神と考えられた。「をの神もゆるしたまひ、女の神も、ちはひたまひて」（万葉集・一七五三）という例は「男神毛 許賜 女神毛 千羽費給而」を訓じたもの。男体山。○しぐれふり 時雨降り。時雨は、晩秋から初冬にかけて降ったり止んだりする雨。○ぬれとをる 濡れ通る。雨や水などがしみとおる。「九月の時雨の雨に沾れ通り春日の山は色づきにけり」（万葉集・二二八〇）。雨が衣にしみ通り濡らす。○わがゝへらめや わたしの帰ることがあるうか、決してない、の意味、「われかへらめや」のかたがが多い。

【所載】万葉集・一七六四（旧一七六〇）男神尔 雲立登 斯具礼等 沾通友 吾将反哉 ヲノカミニクモタチノボリシグレフリヌレトホルトモワレカヘラメヤ ひこかみにくもたちのぼりしぐれふりぬれとほとともわれかへらめや／歌枕名寄・五六七三

【参考】筑波山の歌垣を詠んだ長歌の反歌として万葉集には在る。

五三二 うらぶりてもものなおもひそあまぐものたゆたふ心わがおもはななくに

【異同】ナシ

【現代語訳】うれえしおれて物思いなさるな。私の心はゆらいでおりませんから。

【語句】○うらぶりて しおれて。思いわびて。「うらぶれて」の例はあるが、「うらぶりて」はこの歌の他は「人知れずちがへしそでのうらぶりてうへは涙のかかるめぞみぬ」（輔尹集・二三）のみ。○たゆたふ ゆらぐ。動揺して一所に固定しない。浮動する。「春日山あさめるくもの風をいたみたゆたふころ我はしもただ」（奈良御集・一一）。○わがおもはななくに 私にはそのような思いは決してないのに、の意。「たきのうへのみふねのやまにゐるくものつねにあらむとわがおもはななくに」（万葉集・二四三）、「あさかやまかげさへみゆるやまのゐのあさきころをわがおもはななくに」（万葉集・三八二九）など用例は数多い。

【所載】風雅集・恋三・一二〇七／万葉集・二八二七（旧二八一六）浦触而 物莫念 天雲之 絶多不心 吾念莫国 ウラブレテモノナオモヒソアマクモノタユタフココロワガオモハナクニ うらぶれてものなおもひそあまぐものたゆたふころわがおもはななくに／和歌童蒙抄・四四／人麿集Ⅲ・四六九／人麿集Ⅳ・二六三

【参考】所載欄の万葉集では卷十一問答にある。男の歌に対する女の返歌は二八二八（旧二八一七）「うらぶれて

ものはおもはじめなせがはありてもみつはゆくといふものを」。古今六帖・二六九四番歌と第三句以下同じ。

五三三 さほ山にたなびく雲のたゆたひはおもふこゝろをいまぞさだむる  
にイ 人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山のたなびく雲が（一所に定めなく）ゆらいでいる、ゆらいでいる心を今こそ定め、決心します。

【語句】○たゆたひに 「たゆたふ」（五三三番歌参照）の連用形で、ここでは名詞として助詞が続く。「たゆたふ」は人目を気にして会うことを躊躇すること。傍記異文の「たゆたひに」のかたちが通例。「おほぶねのはつるとまりのたゆたひにものもひやせぬひとのこゆゑに」（万葉集・一二二、古今六帖・三〇〇三）。

【所載】人麿集Ⅱ・二〇六／人麿集Ⅲ・二二二／人麿集Ⅳ・一七

【参考】作者名「人まろ」は確証がない。人麿集に載る歌ではあるが、人麿集そのものに問題がある。

五三四 わぎもこにわれこふらくははるやまにたなびくものたゆるひもなし  
おなじ

【異同】○わぎもこに―わぎもこか（大）

【現代語訳】いとしいあの子を私がどんなに恋しく思っているか、思いの絶える日はない、春山に雲の絶える日はない。

【語句】○われこふらくは 私が恋しく思うことは。万葉集には「吾恋苦波」（わがこふらくは）の例が多い。「つばなぬくあさがはらのつぼすみれいまさかりなりわがこふらくは」（万葉集・一四五三〔旧一四四八〕）（ただし、『新編国歌大観』の新訓は「あがこふらくは」とする）。○たなびくもの 「たなびく雲」は「過ぐ」「遠（をち）にあるらし」など導く。ここでは「絶ゆる日もなし」を導く。

【所載】ナシ

【参考】作者名を前歌に「おなじ（人まろ）」とするが、その根拠は不明。人麿集Ⅳ・五五に類似歌がある。



五三五 しらくものたなびきかゝるみ山にはてる月かけをよそにこそ見れ  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲のたなびきかかるこの深い山にいる私には、照らす月は無縁のものと見ることよ。

【語句】○よそにこそ見れ 「よそに見る」は自分とは関係のないものと見る、の意。

【所載】伊勢集Ⅰ・二四五／伊勢集Ⅱ・二四六／伊勢集Ⅲ・二四五

【参考】伊勢集Ⅰには詞書のない贈答として載せる。

しらくものたなびきにけるみ山にはてる月影もよそにこそきけ（二四五）  
返し

雲はらふてる日こもれるやまなればあかき月にもみえぬなるらん（二四六）

仁和寺に居所を移した宇多法皇に仕える人からの贈歌と関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』は解す。とすれば、作者名「いせ」は伊勢集の記載には合致しない。

〔以上五首担当 平野〕

五三六 のべなるを人もなしとてわがやどにみねのしらくもをりやいるらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】我々が野辺に遠出をして遊んでいるのを、我が家に人がいないと思って（留守なのをよいことにして）峰の白雲がおりてきて居座っているのだろう。

【語句】○のべなるを 野辺に遊んでいるのを。○人もなしとて 人がいないと思って。○をりやいるらん 「をり」は「降り」。「いる」は「入る」とも「居（ゐ）る」とも解せるが、後者で現代語訳した。「白雲のおりる山」とみえつるはふりつむ雪のきえぬなりけり」（後撰集・冬・四八四・よみ人知らず）。「や」は疑問の係助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・二二〇

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

おなじ人

五三七 たちねとやいひにやらまししら雲のとふ人もなくやどにゐらん

【異同】ナシ

【現代語訳】そこを離れろと人を遣わして言つてやろうかしら。白雲が他に訪う人もないことをよいことにして居座っているのだらう。

【語句】○たちね 立ち去りなさい。「立つ」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の命令形。○とやいひにやらまし「と言いに人をやろうかしら」の意。「まし」は、疑問の「や」を伴い、ためらう気持ちを表す。○とふ人もなく 所載欄の貫之集では「とふこともなく」、和歌童蒙抄・和歌初学抄では「とひごともなく」。○ある 座つてゐる。「立つ」の対語。

【所載】貫之集Ⅰ・二二一／和歌童蒙抄・九〇九／和歌初学抄・四

【参考】「おなじ人（つらゆき）」は、和歌初学抄（作者名表記なし）を除く所載欄の文献に一致する。古今六帖五三六・五三七番の二首は貫之集に連続して載る。「延喜御時内裏御屏風のうた廿六首」とある中の二首。

五三八

よとゝもにみねへふもとへをりのぼりよとゝもにみねへふもとへをりのぼりゆく  
ゝものみはわれにざりける  
たひらのなかき

【異同】底本ハ上三句ミセケチ

【現代語訳】峰に上ったり麓へ下りたりしている雲のように、時の流れにもてあそばれている身は、他でもない私自身なのです。

【語句】○よとゝもにみねへふもとへをりのぼり 雲が峰に上ったり麓へ下りたりする様を、都で殿上に上げられたり、地方へ地下となつて下ったりする我が身に譬えた表現。参考欄参照。○われにざりける 私自身なのです。【「むり」は「ぞあり」の約。所載欄の後撰集では「われにぞありける」。

【所載】後撰集・雑一・一〇七九

【参考】作者名「たひらのなかき」は所載欄の文献に一致する。後撰集の詞書によれば、平中興（生年未詳）延

長八（九三〇）年）が外吏（地方官）として赴任していて、殿上での藏人の職から離れていた時、早期の中央官吏復帰を願って詠んだ歌。

つゆ

さがのきさき

五三九　ことしげしゝばしはたてれよひのまにをけらむつゆはいでゝはらはん

【異同】ナシ

【現代語訳】人々の口がうるさいことです。噂の種となりますので、少しの間、外に立っていていらして下さい。そうして立って待っていらつしやる宵の間に御衣に置いた露は、私が後に出て行つて払いますから。

【語句】◎つゆ　歌では主として秋の景物として詠まれ、萩や菊とよく取り合わされる。また、涙や玉、はかないものに譬えられることも多い。○ことしげし　「言繁し」。人の噂がうるさい意。○たてれ　「立つ」の已然形＋「り」の未然形＋推量の助動詞「む」の連体形。○いでゝはらはん　（皆が寝静まった後で）私が出て行つて払います。

【所載】後撰集・雑一・一〇八〇／俊頼髓脳・五七、二八九／宝物集・四〇八

【参考】作者名「さがのきさき」は、所載欄の文献に一致する。嵯峨后は檀林皇后とも称される橘嘉智子。後撰集の詞書によれば、他の女御達の目を氣にした立后前の作者が、帝に対面せずに奉った歌。嘉智子の立后は弘仁六（八一五）年、三十歳の時。

つらゆき

五四〇　さをしかのたちなくをのゝ秋はぎにをけるしらつゆわれもけぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】牡鹿が立って鳴く小野の秋萩に置いている白露のように、すぐにも消えてしまいそうな私の命ですよ、恋の切なさに。

【語句】○さをしか　牡鹿の歌語。「さ」は美称接頭語。萩と鹿の取り合わせに恋をからませて詠む歌は、万葉集はじめ多く見られる。○たちなく　立って鳴く。所載欄の後撰集では「立ちならす」で、しばしば行き来する意。

○われもけぬべし 今にも消えてしまいうな私の命です。第四句までは自分の恋情の比喩で、第五句に對して序詞とほぼ同様な働きをもつ。貫之集には他に、「さをしかのつまにしがらむ秋はぎにおけるしら露我もけぬべし」(貫之集Ⅰ・五八二)、「つまこふる鹿のしがらむ秋はぎにおける白露我もけぬべし」(同・六一四)がある。

【所載】後撰集・秋中・三〇六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 斎藤・三浦〕

### おなじ人

五四一 秋のゝのくさはいとゝもみえなくにをくしら露をたまにぬくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野の草は糸であるようにも見えないのに、どうして置く白露を玉として貫いているのだろうか。

【語句】○くさはいとゝもみえなくに 「草」を「糸」に見立てながら、一度それを否定する。この見立ては、和歌に先例はないが、「柳糸嫋々風繰出 草縷葺葺雨剪齊(柳糸嫋々として風繰り出だし 草縷葺葺として雨剪り齊(ひとし)うす」(天津橋・白氏文集・二八七五)の草縷(縷)は、衣服の破れたもの、ぼろぎれを意味する。ここでは草の比喩。前句の「柳糸」の「糸」の縁語となっている)に拠るかという説がある(渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一年)。「なくに」は、詠嘆を含んだ逆接確定条件を表す。……ないことなのに、ないのに。「深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり」(古今集・一八)、「糸によるものになくはなれ路の心細くも思ほゆるかな」(古今集・四一五)など。○しら露をたまにぬくらん 白露を玉に見立て、玉として貫くのだろうか。「浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」(古今集・二七)、「秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ」(古今集・二二五)、「白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける」(後撰集・三〇八)など、例が多い表現。上句の「なくに」によって一旦否定された「草」―「糸」の見立てを、この「露」―「玉」の見立てによって再び想起させる手法。○らん 目にみえている事実について、その原因、理由を疑いながら推量する。どうして……だろうか。「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」(古今集・八四)。

【所載】後撰集・秋中・三〇七／寛平御時后宮歌合・八一／新撰万葉集・三二七

【参考】作者名「おなじ人」(紀貫之)は、後撰集、寛平御時后宮歌合の作者記載と一致する。

新撰万葉集においてこの所載歌と対になる漢詩の一、二句「白蔵野草芽華宜 嗤見玉露貫非糸（白き蔵野の草芽の華宜し 嗤ひて見る玉露の貫くこと糸に非ず）」は、当該歌と発想が類似する。

五四二 なつの日にこがるゝやぶのくさなれやしばしのつゆに心をくらんよるイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の日に焼けるやぶの草だからか、ほんの束の間置く露に心をとどめるのであろう。

【語句】○なつの日にこがるゝ 夏の日（太陽）に焦がれる。火や太陽に焼かれて黒くなる。恋心で胸が焦がれるの意を掛ける。○やぶ 「日」との取り合わせでは、「日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとに花もさきけり」（古今集・八七〇）、日の光を恩顧、恩寵に譬え、光の及ばぬ「やぶ」にも分け隔てなく届くとする歌がよく知られているが、この場合は「日」に焦がれる「藪」という異色な取り合わせ。所載欄の夫木抄では「山」となっている。○なれや 「なり」の已然形＋疑問の係助詞「や」。「わが恋はみ山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき」（古今集・五六〇）。○心をくらん 心置（お）くらん。心を留めるのだろうか。「なれや……らん」の場合「冬河の上はこほれる我なれやしたにながれてこひわたるらむ」（古今集・五九一）のごとく、「らむ」に上接する文節ではなく、上句の「なれや」に上接する部分の原因、理由を推量する。所載欄の夫木抄では「心やるらむ」。

【所載】夫木抄・三三〇九

【参考】「夏草裳 夜之間者露丹 憩濫 常焦留 吾曾金敷（ナツクサモヨマハツユニコフランツネニコガ ルルワレソカナシキ）」（新撰万葉集・三二一）は類想歌。

五四三 みさぶらひみかさとまうせみやぎのゝこのしたつゆは雨にまされり

【異同】ナシ

【現代語訳】お供の人よ、「お笠をどうぞ」と申し上げて下さい。こゝ宮城野の木の下露は雨よりも繁く滴り落ちますので。

【語句】○みさぶらひ 御侍。貴人の側に仕える従者。「み」は敬称。従者に対する口頭の呼びかけをそのまま歌にした形。○まうせ 申し上げて下さい。「言ふ」の謙譲語「申す」の命令形。○みやぎの 宮城野。宮城県

仙台市東方一帯の広大な野。萩の名所として有名で、露、虫などの秋の景物とともによまれる。「宮城野のもとあらのはぎ露をおもみ風をまつ」ときみをこそまで」（古今集・六九四）。「みさぶらひ」「みかさ」「みやぎの」と「み」の頭音の連続に特色がある。○このしたつゆ木の下露。木の枝、葉から滴る露。「相坂のこのした露にぬれしよりわが衣手は今もかわかず」（後撰集・七三三）。

【所載】古今集・東歌・一〇九一／新撰髓脳・一二／奥儀抄・七二／和歌色葉・五四

五四四

わびわたる我身はつゆぞおなじくは君があたりのべにきえなん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】せつない思いを抱き続けている我が身は露のようなものです。いつそあなたの家のあたりの野辺で消えてしまいたいのです。

【語句】○我身はつゆぞ わが身のはかなさを「露」に譬える。「命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに」（古今集・六一五）、「露をなどあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを」（古今集・八六〇）など。○おなじくは 同じことなら。いつそのこと。「桜狩雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の影にかくれむ」（拾遺集・五〇）。○きえなん 消えてしまいたい。「消ゆ」は「露」の縁語。「我が身」と「露」が消える。「なん」は完了の助動詞「ぬ」の未然形＋希望の助動詞「む」。

【所載】後撰集・恋二・六四九／貫之集Ⅰ・六二四

【参考】作者名貫之は所載欄の文献に一致する。なお、貫之集、後撰集では四、五句が「君がかきねの草にきえなん」となっており、忠岑集（Ⅳ・四三）には、「もろくともいぎ白露に身をなして君があたりの草に消えなん」という類想歌がみられる。

五四五

しらつゆをとればけぬべしいざとらじつゆふきそひてはぎのあそびせん  
ことちイ  
さらばイ  
やかもち  
にイ

【異同】とればけぬへしーとらはけぬへし（桂） つゆふきそひてーつゆふきそひて（御・大） はきのあそひせんーはきのあそひけん（御・大）

【現代語訳】白露を手にとったら消えてしまうだろう。さあ、取らないでにおいて、露と競い合って萩の遊びをしよう。

【語句】○とれば とうとうとしたところ。とうとうすると。所載欄の万葉集では「とらば」となっているが、本文のまま解し、順接の恒常条件を表す「已然形＋ば」とみる。○いざとらじ 「いざ」という誘いかけは「とらじ」という打消推量の形と照応せず、原歌の二句「いざこども」がもとの形と思われるが、本文通りに解した。○つゆにきそひて ミセケチの異文傍記「に」をとり、「つゆにきそひて」とみる。露と競い合って。○はぎのあそび 萩の花を見ながら宴を催すことをいうか。

【所載】万葉集・二一七七（旧二一七三）白露乎 取者可消 去来子等 露尔争而 芽子之遊將為 シラツユヲトラバケヌベシイザコドモツユニイソヒテハギノアソビセム しらつゆをとらばけぬべしいざこどもつゆにきほひてはぎのあそびせむ／夫木抄・四二〇六／人麿集Ⅱ・一一八

【参考】作者名「やかもち」は万葉集では作者未詳歌であり、一致しない。

〔以上五首担当 中野〕

五四六 はかなくてきゆるものからつゆの身のくさばにをくとみえにけるかな いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】むなしく消えていくものの露が草葉の上にあやうく置いている、我が身も露と同然、ほんのわずかの世にあると見えてしまうこととです。

【語句】○はかなくて 空しく、あつげなく、の意。「はかなくて雲となりぬるものならばかすまん空をあはれとは見よ」（小町集・九一）のように、「はかなくて」で始まる歌は多い。○ものから 逆接の意の接続助詞。○つゆの身 露のようにはかなく消えてしまう我が身。「けふありてあすは消えぬる露の身の思ひおくべきことのはもがな」（伊勢集・四四二）他よく使われる表現。○くさばにをく 「をく」は「置（お）く」で、草葉の上に露が結ぶこと。「き（消）ゆる」「置く」は、「つゆ（露）」の縁語。自分の命が草葉におく露と同然、と詠む歌に、「露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを」（古今集・八六〇）、「武蔵野の草葉にやどる白露のいくよあるべき我ならなくに」（伊勢集・四二〇）など。

【所載】ナシ

【参考】作者名「伊勢」とあるが、他の文献で確認できなかった。

五四七 あきのよのゆめちにつゆぞをきけらしかよふとしつるそでひちにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜には夢路にも露が置いていたらしい。あの娘のもとに通うとしていた私の袖が、びっしょりに濡れていることだ。

【語句】○ゆめちにつゆぞ 秋の夜の露はよく歌に詠まれる景物だが、ここは、夢の中で女性のもとへ通う路に、露が置くと詠む。○をきけらし おき（置き）けらし。「けらし」は、「けるらし」の約、根拠に基づいて過去を回想し推定する意を表す。……たにちがいない。○そでひちにけり 「ひつ」（漬つ）はびしょ濡れになる、の意。目覚めてみると、涙で袖が濡れていると気付いた、という表現。夢の通い路で袖が露に濡れるという同様な表現は、古今集の貫之詠「夢ぢにも露やおくらむよもすがらかよへる袖のひちてかわかぬ」（五七四）にも見える。

【所載】ナシ

五四八 をくつゆをわかれしきみとおもひつゝあさな／＼ぞこひしかりける

【異同】こひしかりける—こひしかりけり（大）

【現代語訳】はかなく置く露を亡くなつたあなたそのものと見ながら、毎朝毎朝、恋しい思いにかられています。

【語句】○をくつゆを 「をく」はおく（置く）。○わかれしきみ はかなく亡くなつてしまったあなた。所載欄の貫之集では「哀傷」に置かれている。○おもひつゝ 所載欄の貫之集は同じだが、古今六帖「みるゝことに」、河海抄・幻「みるからに」。○あさな／＼ぞこひしかりける 「露」ははかなく消えてしまうもの、その露によそえて、死別した人を毎朝思い出しては、恋い慕っている。

【所載】古今六帖「かなしび」二四六〇／貫之集Ⅰ・七六三／河海抄・一七六〇

【参考】作者名が記されないが、所載欄の古今六帖に「つらゆき十四首」「以上貫之」とある間にあり、貫之集にもあり、貫之歌と確認される。



五四九 きみましゝむかしは露かふるさとはなみるごとにそでのひつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいらつしやつた昔は露なのでしょうか。あなたが住んでいた家の花を見るたびに、どうして私の袖が濡れているのでしょうか。

【語句】○きみましゝ あなたが生きていらつしやつた。所載欄の貫之集に「君まさで」、続古今集に「おもひいづる」とあり、表現が異なる。なお、「きみ」とは、詠歌事情を記した貫之集の詞書「泉の大將うせ給ひて後に、隣なる人の家に人々いたりあひて、とかく物語などするついでに、かの殿の桜のおもしろく咲けるを、これかれあはれがりて歌詠むついでに」によれば、「泉大將」藤原定国となる。定国は、高藤男で、延喜六（九〇六）年七月に大納言兼右大將で没、四十歳。醍醐天皇の生母胤子や三条右大臣定方の兄。○むかしは露か 「昔」が「露」であるはずはないが、飛躍した表現をとつて、落涙の理由をたずね、ありし昔が露であるからか、としたもの。この表現は、当該歌や所載欄の歌以外では金槐和歌集に一首見えるのみ。なお、「露」は花をより美しく色づけるもの。○ふるさとの この「古里」は、亡くなった人が住んでいた家の意。○そでのひつらん 助動詞「らむ」は、どうして袖が涙に濡れているのか、その原因・理由を推量する意。

【所載】古今六帖「かなしび」二四六二／続古今集・哀傷・一三九八／新撰朗詠集・四九六／貫之集I・七五三  
【参考】作者名がないが、所載欄の文献により紀貫之の歌。古今六帖・五四八番歌と同じく、「かなしび」題の「つらゆき十四首」中に重出する。

五五〇 しらつゆにくれなぬまさる秋の野ゝうつろひやすき人のこゝろか

【異同】ナシ

【現代語訳】白露に日一日紅色が濃くなる秋の野はうつろいやすい、なんと移りやすいあなたの心であることよ。

【語句】○くれなぬまさる 秋の野に白露が置いていつそう紅葉の色がまさっている。「白（露）」「くれなぬ」と色を対比。○秋の野ゝ 「秋」に「飽き」を響かす。秋の野の景を写しだした第三句までは、「うつろひやすき」を導き出す序詞。○うつろひやすき人のこゝろか 「うつろひ」には、色の変化することと愛情が衰えることとを掛ける。「か」は終助詞で詠嘆を表す。

【所載】ナシ

五五一 なぎきよをおもひあかしてあさつゆのをきてしくれそゝでぞひちける

【異同】をきてしくれそ—をきてしくれは(桂・大)

【現代語訳】長い夜を思い明かして、(露の置いた) 朝、起きてむなしく帰って来ると、袖がすっかり濡れてしまったよ。

【語句】○をきてしくれそ 「をきて」は、「おきて」。「唐衣たつ日はきかじあさつゆのおきてしゆけばぬべきものを」(古今集・三七五)、「ほととぎす夢かうつつかあさつゆのおきて別れし暁のころ」(古今集・六四一)のように、「朝露」の縁語の「置きて」に、「起きて」を掛ける。「し」は、強意の副助詞。「しくれそ」は、本文不審。桂宮本・大久保本・古今六帖重出の二七三一番歌などには「しくれば」とあり、これが本来の形かと思われるので、現代語訳はこれに従って、「おきてしくれば」、即ち「朝起きて、(いとしい人と別れて) 帰って来ると」の意と解した。

【所載】古今六帖「ふせり」二七三一／貫之集I・五五四

【参考】作者名はないが、この歌は貫之集に見え、重出の古今六帖・二七三一番も作者名を「つらゆき」とする。

五五二 ゆきなれぬみちのしげきさいに夏のよのあかつきをきは露けかりけり

【異同】みちのしげきさいに—みちのしげきさいに(御・大)

【現代語訳】歩き慣れない道の草が生い茂っているので、短い夏の夜の暁に起きて出てくると、涙に濡れ、露に濡れたことだよ。

【語句】○みちのしげき 「道の草の茂きに」の意。「夏草のしげきにあとも見えぬかな野中ふかみちいづれともなく」(元真集・九三)。○夏のよ 短くて夜が明けやすい。○あかつきをき あかつきおき。暁起き。夜明け前のまだ暗い頃に起きること。「おく霜の暁おきをおもはずは君がよどのによがれせましや」(後撰集・九一四)。○露けかりけり 「露けし」は、露で湿っぽいさま。「ひとりぬるとこは草ばにあらねども秋くるよひはつゆけかりけり」(古今集・一八八)のように、涙に濡れているさまを表すことも多い。当該歌も、暁に起きて、いとしい人と別れて来た悲しみの涙に濡れる意を響かせる。

【所載】重之集・二六〇

【参考】重之集二二一番歌詞書によると、百首歌中の一首。

五五三 あきのよをいたづらにのみをきわたる露はわが身のなにこそありけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜にただむなしく一面に置いている露とは、長い秋の夜に一晚中むなしく続き続けている我が身の名であつたのだなあ。

【語句】○いたづらにのみをきわたる 「のみ」は強意。「をきわたる」は「おきわたる」。一面に露が置く意に、一晚中ただむなしく続き続けている意を掛ける。

【所載】後撰集・秋中・二九〇

【参考】「草の葉におきてぞあかす秋の夜の露ことならぬわが身とおもへば」（能宣集・一七）などのように、むなく消える露に我が身を引き比べた歌。

五五四 あきのつゆいろ／＼ことにをけばこそ山のこの葉のちくさなるらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の露が色とりどりに異なるように置くからこそ、山の木の葉の色が様々なのだろう。

【語句】○いろ／＼ことに 色々異に。所載欄の寛平御時后宮歌合には「色のことごと」、新撰万葉集には「色殊殊丹（イロコトゴトニ）」とある。露は、「白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちちにそむらむ」（古今集・二五七・藤原敏行）のように、木の葉を様々な色に染めるものとして詠まれることが多い。○をけばこそ おけばこそ。置けばこそ。○ちくさ 千種。木の葉の紅葉の色が様々であること。

【所載】古今集・秋下・二五九／寛平御時后宮歌合・一〇九／新撰万葉集・三六〇

五五五 秋はぎにをけるしら露あさな／＼たまとぞみゆるをけるしら露  
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩に置いた白露、毎朝毎朝玉に見える、置いた白露。

【語句】○あさな／＼ 毎朝毎朝。朝ごとに。上代語では「あさなさな」だったが、平安時代には「あさなあさな」と詠まれた。「うら恋し我が背の君はなでしこが花にもがもな朝なさな（安佐奈佐奈）見む」（万葉集・四〇三四（旧四〇一〇））、「野辺ちかくいへゐしせればうぐひすのなくなるこゑはあさなあさなく」（古今集・一六）。○をけるしら露 おけるしら露。

【所載】万葉集・二二七二（旧二二六八）、冷芽子丹 置白露 朝朝 珠斗曾見流 置白露 アキハギニオケルシラツユアサナサナタマトゾミユルオケルシラツユ あきはぎにおけるしらつゆあさなさなたまとしぞみるおけるしらつゆ／人麿集Ⅰ・一二〇／人麿集Ⅱ・七六／桐火桶・三三

【参考】作者名は「やかもち」とあるが、所載欄の万葉集では作者不明であり、人麿集にも見える。

〔以上五首担当 長戸〕

五五六 わがやどのおばなをしなみをくつゆにてふれわがせこちらさでもみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の薄の穂を押し靡かせて置く露に手を触れてみなさい、あなた。露を散らさないままでも見ましよう。

【語句】○おばな をばな（尾花）。○をしなみ おしなみ。「おしなぶ」が転じた「おしなむ」の連用形。押しふせて。押し靡かせて。万葉集には見えない。「今よりはつぎて降らなむわが宿の薄おしなみ降れる白雪」（古今集・三三八）。○ちらさでもみむ 手が触れれば露は消えてしまい、不審。所載欄の万葉集では「ちらまくも見む」とあり、散るさまを見ようとの意となり、わかりやすい。

【所載】万葉集・二二七六（旧二二七二）吾屋戸之 麻花押靡 置露尔 手触吾妹兒 落卷毛将見 ワガヤドノヲバナオシナミオクツユニテフレワギモコチラマクモミム わがやどのをばなおしなべおくつゆにてふれわぎもこちらまくもみむ／人麿集Ⅰ・一二二／人麿集Ⅱ・一〇三／綺語抄・六九二／袖中抄・五八四

五五七 秋の野々さゝわけしあさのそでよりもあはでこしよぞひちまさりける

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野の笹をかき分けて帰って来た朝の袖よりも、逢わないで帰って来た夜の方が、濡れまさっていることだ。

【語句】○あはでこしよ 所載欄の文献では、古今六帖の重出歌をはじめ「あはでぬるよ」とするものが多い。○ひちまさりける 「ひつ」は濡れる。笹におりた露だけでなく、ひとりで夜を明かしたことによる涙も加わるので「まさりける」という。

【所載】古今六帖「くれどあはず」三〇三七／古今集・恋三・六二二／業平集Ⅰ・五一／業平集Ⅱ・一五／業平集Ⅲ・二六／業平集Ⅳ・一六／伊勢物語・二五段・五六

【参考】伊勢物語（二五段）では、古今集でこの歌の次に置かれる小野小町の「みるめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る」（恋三・六二三）との贈答歌としている。

五五八 ぬきとむるあきしなればしらつゆのちくさにをけるたまもかひなし

【異同】ナシ

【現代語訳】緒に貫いて置き留めてくれる秋というものはないので、白露がたくさん、いろいろな草に置いている珠と見えるのも甲斐のないことだ。

【語句】○ぬきとむる 「たま」の縁語。類想「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」（後撰集・三〇八）。○あきしなければ 「し」は強意の副助詞。秋というものはないので。「あだなりと我は見なくにもみち葉の色のかはれる秋しなければ」（後撰集・三九〇）。ただし用例は少ない。類例に「春しなければ」もある。「とふ人も宿にはあらじ山桜散らでかへりし春しなければ」（後拾遺集・一二三）、「人知れず物思ふことはならひにき花にわかれぬ春しなければ」（詞花集・三一二）。○ちくさ たくさん。数多く。また、色々の種類。ここでは「しらつゆ」の多い様とたくさん草の意とを掛ける。○をける おける（置ける）。

【所載】後撰集・秋中・三三五

五五九 しら露を秋のはぎはらにこきまぜてわくことかたきわがこゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白露を秋の萩原におりまぜて、露と萩との見分けがつかずにいる我が心であるよ。

【語句】○はぎはら 萩の生い茂っている原。白露と紛れるのだからここでの萩は白萩。○こきまぜて 種類の異なるものをまぜる。初句からここまでが「わくことかたき」を導く序詞。○わくことかたき 「わく」は区別する。白露と白萩を区別することができないということ。○わがこころかな この句を歌末に置く用例は「夏草の上は繁れる沼水の行く方のなき我が心かな」(古今集・四六二)、「春来れば柳の糸もとけにけりむすぼれたる我が心かな」(拾遺集・八一四)、「君にのみあはまくほしの夕されば空にみちぬる我が心かな」(古今六帖「星」三七八)、「恋てへば知らぬ道にもあらなくにあやしくまどふ我が心かな」(古今六帖「恋」一九七八)などがある。

【所載】新勅撰集・秋上・二三三／万葉集・二二七五(旧二二七二) 白露与 秋芽子者 恋乱 別事難 吾情可聞 シラツユトアキノハギトハコヒミダレワクコトカタキワガココロカモ しらつゆとあきはぎとはこひみだれわくことかたきあがこころかも／人麿集Ⅰ・一二一／人麿集Ⅱ・七七

五六〇 しら露のをきふしものをおもふまにわが身はあきもはてにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白露が置き、起きたり臥したりしながら物思いをしている間に、秋も終わり、我が身はすっかり飽きられてしまったことよ。

【語句】○しら露の 「をき(置き)」を導くための措辞。○をきふし おきふし。露の「置き」とわが身の「起き」とを掛ける。「露霜とおきふしいかであかすらむならはぬ旅の草の枕に」(大斎院御集・八二)。○あき 「秋」と「飽き」を掛ける。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 青木〕

五六一 をくからにちくさのいろになるものをしらつゆとのみ人のいふらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】置くとすぐにさまざまな色に染まるというのに、どうしてこれを人が白露とのみ呼ぶのだろう。

【語句】○をくからに 「からに」は、や否や、とともに、とすぐに、の意を表す接統助詞。「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ」（古今集・二四九）。○ちくさ 種類の多いこと。さまざま。いろいろ。千差万別。「秋の露いろいろごとにおけばこそ山の木の葉のちくさなるらめ」（古今集・二五九）。○人のいふらむ この「らむ」は、目の前の事実に対し、その原因、理由などを推量する言い方。「どうして」「なぜ」などの語を補うとわかりやすい。「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」（古今集・八四）。

【所載】後撰集・秋中・三一〇

五六二 うへたてゝきみがしめゆふ野べなればたまともみよとつゆやをくらん  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】しっかりと植えて、あなたがわがものとしていらつしやる野辺ですから、美しく変わらない玉とも見なさいと、はかない露は置いているのでしょうか。

【語句】○うへたてゝ 植ゑたてて。わざわざ植えて。きちんと植えて。「たて」は、この場合他の動詞につき、その動詞の意味するところをきわだたせる役割りを果たす。○しめゆふ 縄などを張りめぐらせ、自分の占有物であることを宣言する行為。○たま 移ろいやすいものとしての露に対比させ、変わらない、美しいものとして詠まれている。

【所載】後撰集・秋中・二八〇／拾遺抄・秋・一一〇／拾遺集・秋・一六七／伊勢集Ⅰ・一三六／伊勢集Ⅱ・一三四／伊勢集Ⅲ・一三三

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。なお後撰集や伊勢集Ⅰでは、当該歌は次の五六三番歌（作者宇多法皇）の返歌として詠まれている。

五六三 しら露のかはるもなどかをしからむありてのゝちもあやうきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】白露が形を変え、やがては消えてしまうのも、どうして惜しいことがあるうか。もとのまま変わらずに永らえたとしても、いずれは危うい世の中なのに。

【語句】○ありてのゝちも このままつづいて永らえた後も。○あやうきものを 危ふきものを。危うい、不安定なものなのに。なおこの第五句は、後撰集では「ややうきものを」、伊勢集では「よはうきものを」とする。

【所載】後撰集・秋中・二七九／伊勢集Ⅰ・一三五／伊勢集Ⅲ・一三四

【参考】後撰集や伊勢集では当該歌の作者を宇多法皇とし、前の五六二番歌とは贈答歌の形式になっている。

五六四 秋はぎのさけるをかべのゆふつゆにぬれつゝもませよはふけぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩が咲いている岡辺の夕方の露に、濡れながらもおいでください。たとえ夜は更けたとしても。【語句】○ぬれつゝもませ 「ませ」は、あり、をり、行く、来（く）などの尊敬語「ます」の命令形。いらつしやい。ただし所載欄の他文献はすべて「ぬれつつきませ」とする。

【所載】新古今集・秋上・三三三／万葉集・二二五六（旧二二五二）秋芽子之 開散野辺之 暮露尔 沾乍来益夜者深去鞆 アキハギノサキチルノヘノユフツユニヌレツツキマセヨハフケヌトモ あきはぎのさきちるのへのゆふつゆにぬれつつきませよはふけぬとも／人麿集Ⅰ・一四九／人麿集Ⅱ・三〇一／人麿集Ⅲ・一五三、四五六／家持集Ⅰ・一〇二／秀歌大体・六〇

五六五 あきはぎの<sup>も</sup>□<sup>う</sup>へにをきたるしら露のいちしろくしもわがこひめやも<sup>るイ</sup>

【異同】底本ハ「う□」ノ上ニ抹消記号ヲ施シ、右傍ニ「う」ト記ス（□ハ判読不明ノ文字）。

【現代語訳】秋萩の上に置いている白露のように、はつきりと目につくようになって、私は恋をしたりするでしようか。そんなことはしません。

【語句】○いちしろくしも 「いちしろく」は、はつきり目に見える。はつきりあらわれている。「しも」は強めの助詞。なお上三句は「いちしろく」を導く序。○わがこひめやも 私は恋をするだろうか、したりはしない。推量の助動詞「む」の已然形に「や」が伴った形は、常に反語の意を表す。

【所載】参考欄参照。

【参考】古今六帖「人しれぬ」の項、二六七四番に（人麿集Ⅲ・二五五にも）「わがやどのあきはぎのうへにおくつゆのいちしろくしもわがこひめやは」とあり、一応、類歌と考えられる。ところが万葉集の二二五九（旧二



二五五) 番に、同じ「わがやどの秋萩の上におく露のいちしろくしもあれ恋ひめやも」という歌があつて、その前の二二五八(旧二二五四) 番には「秋萩の上におきたる白露のけかもしなまし恋ひつゝあらずは」という歌がある。両者は並んでいて、一方の上句と他方の下句とが混雑現象を起こした結果がこの歌ということになる。古今六帖における万葉集歌にはさまざまな問題があるが、この場合などは明らかに万葉集という書物からの採歌と考えていいのだろうか。

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

五六六 あきのほをしのにをしな<sup>みイ</sup>べをくつゆのきえもしなましこひつゝあはずは

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の稲穂をしおれるばかりに押し伏せて置く露ははかなく消えてしまうが、わたしも消えて(死んで)しまえば良いのに。こんなに恋しいのにあなたにお逢いできないならば。

【語句】○あきのほを 秋の稲穂を。玉葉集では「秋の田の」。○しのに 草木の萎れ靡くさま、転じて心のしおれるさまなどを表す語。○をしなべ おしなべ。力を加えて靡かせる。一様に靡かせる。所載欄の他文献に多い「おしなみ」も同じ意。○きえもしなまし 「きえ」は露が消えることと死ぬことを掛ける。万葉集をはじめとする所載欄の他文献では「け(消) かもしなまし」が多い。「まし」は仮定の助動詞。非現実的な意思、希望を表す。上三句は「きえ」を導く序詞。○こひつゝあはずは 恋続けても逢えないのであれば。所載欄の人麿集Ⅱでは「君にあはずは」。それ以外の他文献ではすべて「あらずは」で、「恋い続けていないで」の意となる。

【所載】玉葉集・恋四・一六三八／万葉集・二二六〇(旧二二五六) 秋穂乎 之努尔押靡 置露 消鴨死益 恋乍不有者 アキノホラシノニオシナミオクツユノケカモシナマシコヒツツアラズハ あきのほをしのにおしなべ おくつゆのけかもしなましこひつゝあらずは／人麿集Ⅱ・五二二／人麿集Ⅲ・二五二／綺語抄・七〇七／古来風体抄・一一〇

【参考】古今六帖「秋の田」一一一九番には「あきのたのほなみをしわけをく露のきえもしなゝん恋てあはずは」がある。

五六七 つゆしもにころもでぬれていまだにもいもがりゆかむよはふけぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】 冷たい露に着物の袖を濡らして、今からでも妻のところへ出かけよう。夜は更けてしまっても。

【語句】○つゆしも 露の冷え冷えとした感じを表した語。「秋さらば妹にみせむとうゑし萩露霜おひて散りにけるかも」(万葉集・二二二一(旧二二二七))。○いまだにも せめて今からでも。「だに」は「む」と呼応して、「せめて……だけでも」と願う意を表す。「だに」を、時を「今」に限定する意とし、「今すぐ」と解する説もある。「山のはに月もいでぬべしいまだにもいがりゆかんおやにまうすな」(古今六帖・三〇九〇)。○いもがりゆかむ妻のところへ行こう。所載欄の万葉集・人麿集の「いもがりゆかな」の「な」は意志を表す終助詞で、同じ意となる。

【所載】 古今六帖「おもひいづ」二八九四／万葉集・二二六一(旧二二五七) 露霜尔 衣袖所沾而 今谷毛 妹許行名 夜者雖深 ツユシモノコロモデヌレイマダニモイモガリユカナヨハフケヌトモ つゆしにもにころもでぬれていまだにもいもがりゆかなよはふけぬとも／人麿集Ⅲ・四五八／綺語抄・七二

五六八 あきはぎのうへにしらつゆをくごにみつゝぞしのぶきみがすがたを

【異同】ナシ

【現代語訳】 秋萩の上に白露が置くたびに、それを見ながらお慕いしています。(白露のように美しい) あなたの姿を。

【語句】○みつゝぞしのぶ (白露を) 見ながらお慕いしています。「しのぶ」は遠い人、故人などを思慕する意。奈良時代には「シノフ」と清音。露は多く消えやすいものとして詠まれ、この歌のように恋人の美しさを譬えたり、恋人を連想させるものとして詠まれることは珍しい。○きみがすがたを 所載欄の万葉集では「すがた」を「光儀」と記す。美しい姿や立ち居振舞いをいい、万葉集に十一例ある。日本書紀にもみえ、文選、遊仙窟などに多い漢語。

【所載】 万葉集・二二六三(旧二二五九) 秋芽子之 上尔白露 毎置 見管曾思努布 君之光儀乎 アキハギノウヘニシラツユオクゴトニミツツゾシノフキミガサガタヲ あきはぎのうへにしらつゆおくごにみつゝぞしのぶきみがすがたを／人麿集Ⅲ・四五五

五六九 まちかねてうちへはいらじしろたへのわがころもでにつゆはをくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】（あの人を）待ちかねて、家の中へは入りますまい。わたしの袖に露は置いても。

【語句】○まちなかねて 所載欄の人麿集では「待わびて」。○うちへは 家の中へは。所載欄の万葉集、奥儀抄では「うちには」。○しろたへの 「ころもで」の枕詞。○わがころもで 「ころもで」は袖の歌語。所載欄の奥儀抄では「わがそでの上に」。○つゆはをくとも 露は置いても。所載欄の万葉集では「つゆはおきぬとも」、奥儀抄では「しもはおきぬとも」。

【所載】万葉集・二六九六（旧二六八八）待不得而 内者不入 白細布之 吾袖尔 露者置奴軻 マチカネテウチニハイラジシロタヘノワガコロモデニツユハオキヌトモ まちなかねてうちにはいらじしろたへのわがころもでにつゆはおきぬとも／人麿集Ⅱ・五三五／奥儀抄・一三一

としゆき

五七〇 しらつゆのいろはひとつをいかにしてあきのこのはをちづにそむらん

【異同】ナシ

【現代語訳】白露はただ白一色であるのに、どのようにして秋の木の葉を色とりどりに染めるのだろうか。

【語句】○あきのこのはを 所載欄の敏行集では「秋の山べを」。○ちづに 千々に。種々の色に。上句の「ひとつ」と対になっている。「月見ればちぢに物こそなしかれわが身一つの秋にあらねど」（古今集・一九三）などと同様に、漢詩の数対の影響を受けている。

【所載】古今集・秋下・二五七／新撰万葉集・一三二／新撰和歌・六八／敏行集・二三

【参考】作者名「としゆき」は所載欄の文献に一致する。また、古今集詞書に「是貞の親王の家の歌合に詠める」とある。

〔以上五首担当 三浦〕

たづみね

五七一 あきのゝのはぎのしらつゆけさみればたまやさけるとをどろかれつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野の萩の白露を今朝見ると、白玉が咲いたかのように見えてはつとすることだなあ。

【語句】○たまやさけると 白露の玉が咲いたかと。所載欄の歌集すべて「たまやしける」。○をどろかれつゝ おどろかれつゝ。(あたかも……のようだ) はつとすることだなあ。「つつ」止めは和歌では余情、詠嘆の意がある。

【所載】後撰集・秋中・三〇九／家持集Ⅰ・一七六、二三四／家持集Ⅱ・二一九／忠岑集Ⅰ・一〇／忠岑集Ⅲ・三二／忠岑集Ⅳ・一七七

【参考】作者名「たゞみね」は後撰集・忠岑集に一致するが、家持集にもこの歌がある。

五七二 あくるまでをきゐるきくのしらつゆはかりのよをおもふなみだなるべし

【異同】ナシ

【現代語訳】夜が明けるまでずっと置いている菊の白露は、はかない現世を思う涙なのだろうなあ。

【語句】○をきゐる おきゐる。ずっと露が「置いている」に「起きゐる」の意をかける。○きくのしらつゆ 菊の露は当時は飲むと長生きするとされていたが、この歌は「仮の世を思う涙」とみた趣向。○かりのよは かない現世。無常な此の世。

【所載】ナシ

とものり

五七三 草のつゆをきしもあえじあさなけにこゝろかよはぬときしなれば

【異同】ナシ

【現代語訳】草の露が置くことなんかとてもできないだろう。朝に昼に心が君のもとへ通っていかない時などないので。露を置く暇はないはずだよ。

【語句】○をきしもあえじ おきしもあへじ。「おきあへじ」に「しも」が入った形。「あへじ」はいっこうに……ない。全く……ない。○あさなけに 朝に昼に。いつも。

【所載】貫之集Ⅰ・八〇三／宗于集・三六

【参考】作者名「とものり」とあるが、貫之の歌。宗于集によれば、宗于が「きみひとりとひこぬからにわがやどのみちも露けくなりけるかな」（三五）と言いやった返歌として、貫之が詠んだ歌。

五七四 このころのあきかぜさむみはぎのはなしらずしらすつゆさきにけらしも

【異同】はぎのはな―萩かはな（大）

【現代語訳】この頃の秋風は寒いので、萩の花に白露が知らないうちに置いたらしいな。

【語句】○あきかぜさむみ 秋風が寒いので。○しらす 知らないうちに。「ちらす」の誤りか。所載欄の文献すべて「ちらす」。○さきにけらしも 咲いたらしいな。白露が置いたことの比喩的表現。

【所載】新勅撰集・秋上・二二一／万葉集・二二七九（旧二二七五）以来之 秋風寒 芽子之花 令散白露 置尔来下 コノコロノアキカゼサムシハギノハナチラスシラツユオキニケラシモ このころのあきかぜさむしはぎのはなしらずしらすつゆおきにけらしも／人麿集Ⅰ・一二四／人麿集Ⅱ・四一一／和歌一字抄・一一一九／袋草紙・七八九

五七五 しろたへのわがころもでにつゆはをけどいもにはあはずたゆたひにして

【異同】いもにはあはず―いもにもあはず（大）

【現代語訳】私の袖には一晩中むなく待つて露がおくけれど、あの娘には逢えない。彼女は心を決めかねていて。

【語句】○しろたへの 枕詞。衣服に関する語の衣、衣手、袖などにかかる。○ころもで 袖。○つゆはをけど つゆはおけど。一晩中戸外に待つて袖に露が置くけれど。○たゆたひ 心が決まらず、ぐずぐずすること。

【所載】万葉集・二六九八（旧二六九〇）白細布乃 吾袖尔 露者置 妹者不相 猶予四手 シロタヘノワガコロモデニツユハオキテイモニハアハズタユタヒニシテ しろたへのわがころもでにつゆはおけどいもにはあはなきたゆたひにして

〔以上五首担当 橋本・林〕

五七六 ゆふとけてわがころもでにくつゆをきみに見せんとゝればきえつゝ<sup>けとふイ</sup>

【異同】をくつゆを―をくつゆの（御・大）

【現代語訳】夕占をする私の袖に置いた露を、あなたに見せようと取るとその度に消えていつてしまう。

【語句】○ゆふとけて 所載欄の万葉集では「ゆふけとふ（夕占問ふ）。夕占（ゆううら）は相手の男が来るか来ないかを占うもの。古今六帖では異文注記はあるものの、本文は「ゆふとけて」。そのままだと、露が結んで、そして解けていく、の意か。但し、「ゆふとけて」の使用例は新編国歌大観でこの一例のみで、他にも「木綿とく」「タとく」などを検討した結果、万葉集の本文に従って現代語訳した。○ゝ（と）ればきえつゝ つつ止めで反復を表す。

【所載】万葉集・二六九四（旧二六八六）夜占問 吾袖尔 置露乎 於公令視跡 取者消管 ユフケトフワガコロモデニオクツユヲキミニシムトトレバキエツツ ゆふけとふわがころもでにくつゆをきみにみせむととればけにつつ／人麿集Ⅱ・五三四／人麿集Ⅲ・六八〇／人麿集Ⅳ・一六六／夫木抄・一七一四四

五七七 われならぬ草葉もゝのはおもひけりそでよりほかにをけるしら露

【異同】ナシ

【現代語訳】私だけかと思っていたけれど、草葉ももの思いはするのだなあ。私の袖以外にも置いているよ、白露が。

【語句】○われならぬ 私だけだと思っていたが、の意。「われならぬ」は「人」と続き「私以外の人」と詠まれることが多いが、ここでは、人ならぬ植物が、となる。同様に植物を「我ならぬ」と取り上げる例に、「われならぬ菊のはなさへ世の中をうらむるさまにうつろへるかな」（敦忠集・一二六）がある。○そでよりほかにをけるしら露 涙を露によそえる例は多いが、それを逆転させたもの。

【所載】後撰集・雑四・一二八／古来風体抄・三三七／定家八代集抄・一二八二

【参考】後撰集では、藤原のただくにが左大臣藤原実頼家の歌会で、露という字を採題で得て詠んだ歌とする。

五七八 ほにいでぬ山だをもるとからころもいなばのつゆにぬれぬひぞなき

【異同】 から衣―藤衣（大）

【現代語訳】 まだ穂が出ていない山田の番をするので、私の着ている韓衣が稲葉の露に濡れない日はない。―まだ態度に表せないのも、私の衣はしのび涙に濡れない日はない。

【語句】 ○ほにいでぬ 穂に出ていない。「穂にいつ」とは「花すすき我こそしたに思ひしかほにいでて人にむすばれにけり」（古今集・七四八）などにも見られるように、態度をあらわにすること。○山だをもる 山田を守る。○からころも 韓衣。唐衣。大陸風の装束。古今集や一部の古今六帖の写本では「藤衣」で、粗末な衣のこと。

【所載】 古今集・秋下・三〇七／猿丸集Ⅰ・四三

五七九 このころのあか月つゆにわがやどのはぎのしたばゝいろづきにけり

【異同】 このころの―このころも（大）

【現代語訳】 近頃の暁ごろに置く露で、我が家の萩の下葉は色づいてきたことだ。

【語句】 ○このころの 近頃の。○あか月つゆ 万葉集では暁露（あかときつゆ）。まだ暗い時分に置く露のこと。

【所載】 拾遺集・雑秋・一一一八／万葉集・二一八六（旧二二八二）比目之 暁露丹 吾屋前之 芽子乃下葉者 色付尔家里 ユノコロノアカツキツユニワガヤドノハギノシタバハイロヅキニケリ このころのあかときつゆにわがやどのはぎのしたばはいろづきにけり／人麿集Ⅰ・一二五／人麿集Ⅱ・七八

五八〇 をりてみばおちぞしぬべき秋はぎのえだもとをゝにをけるしらつゆ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 折って見ようとしたら落ちてしまうだろう、秋萩の枝もたわんでしまうほどに置いている白露は。

【語句】 ○とをゝ タワワの母音交替形。万葉集では「十尾」と表記する例がある。

【所載】 古今集・秋上・二二三／家持集Ⅰ・二一四／家持集Ⅱ・三〇一

〔以上五首担当 杉本〕

五八一 いつとてもかはかぬ袖のあきのよはつゆをきそへてもものぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】何時乾くといつてそのような時はなく、常に涙で濡れている私の袖だが、秋の夜はさらに露が加わり悲しくてならない。

【語句】○つゆをきそへて つゆおきそへて。露にさらに露を加えて。中世に多用された。「ふるさととあれにしにはあさちにもつゆおきそへて秋はきにけり」(千五百番歌合・一〇七七)。

【所載】ナシ

【参考】秋の夜は人をも悲しくさせる。悲秋の題は漢詩の世界から導入された。万葉集には顕著でなく平安和歌に多く見られる。「秋の夜のあくるもしらずなく虫はわがこと物やかなしかるらん」(古今集・一九七)、「ゆふさればいとどひがたきわがそでに秋のつゆさへおきそはりつつ」(古今集・五四五)。

五八二 あきはぎにをくしらつゆのかげろふはおつるなみだのとどめかねつも

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩においている白露の光がさつと暗くなるのは(私の涙のふりかかるせいで)こぼれ落ちる涙はとめようにもとめられません。

【語句】○かげろふ 「かげる」ことをくりかえす。「かげる」は「翳る」「陰になる」「曇る」。「いなづまはかげろふばかりありしより秋のたのみは人しりにけり」(古今六帖・八一六)、「うづらなきくれゆくべの秋風にゆふひのをばなすゑぞかげろふ」(伏見院御集・二〇八九)。

【所載】玉葉集・恋四・一六三九／万葉集・一六二二(旧一六一七) 秋芽子尔 置有露乃 風吹而 落涙者 留不勝都毛 アキハギニオキタルツユノカゼフキテオツルナミダハトドメカネツモ あきはぎにおきたるつゆのかけふきておつるなみだはとどめかねつも

五八三 あきはぎのえだもとを<sup>たわゝにイ</sup>に露をきてさむくもときのなりにけるかな

【異同】ナシ



【現代語訳】秋萩の枝もしなるばかり露がたくさん置いて、（一段と秋も深く）寒い時節となったことよ。

【語句】○えだもとをゝに 異文として「えだもたわゝに」。両方とも万葉集に例がある。「あきはぎのえだもとををにおくつゆのけなげぬともいろにいでめやも」（万葉集・一五九九（旧一五九五）、「あきはぎのえだもとををにおくつゆのけかもしなましこひつつあらずは」（万葉集・二二六二（旧二二五八）、「あしひきのやまちもしらずしらかしのえだもとををにゆきのふれば」（万葉集・二二一九（旧二二一五）或云「たわわに」。○ときのならにけるかな 通常の語順であれば「時の寒くもなりにけるかな」。「時になる」の例としては「吾妹子がゆきあひのいねのかるときになりけるかな萩の花さく」（人麿集・一三四）など。

【所載】続後撰集・秋下・四〇九／万葉集・二一七四（旧二二七〇）秋芽子之 枝毛十尾丹 露霜置 寒毛時者 成尔家類可聞 アキハギノエダモトラヲニツユシモオキサムクモトキハナリニケルカモ あきはぎのえだもとををににつゆしもおきさむくもときはなりにけるかも／人麿集Ⅱ・一三九／綺語抄・七〇四

五八四 あきのよの露をばつゆとをきながらかりのなみだやのべをそむらん  
たゞみね或本

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の間に置く露はそのままにして、（このように色が変わったのは）雁の血の涙がふりかかって野辺を染めたのだろう。

【語句】○露をばつゆとをきながら 「をき」は「おき」。露が置くのはそのままにして。「露のごとはかなき身をばおきながら君が千歳を思ひやるかな」（高光集・八）。露は草葉を色づかせるものと考えられた。○かりのなみだ 雁の涙。鳴く「雁」は「泣く」と擬人化され、人のように「紅涙」をこぼすと歌われた。紅涙は悲しみ極まる時に出る涙。当該歌の影響として「野辺におつる雁の涙や染めつらん霧までふかきもとあらの小萩」（範宗集・二八六）、「露は野べわがゆふ暮の袖をまたかりの涙のそめて過ぎぬる」（拾玉集・三〇二二）などがある。

【所載】忠岑集Ⅰ・九／忠岑集Ⅱ・五八／忠岑集Ⅳ・一七九

【参考】作者名「たゞみね」は所載欄の文献に一致する。

五八五 カリナキテサムキアサケノツユナラシカスガノ山ヲモミダスモノハイ

【異同】コノ一首、片仮名ニテ行間ニ細字書き入レ、一行書き（底本・御）―平仮名ニテ本行ニ書ク（桂・大）

【現代語訳】雁の鳴いて寒い朝の露なのだろう、春日山一面の草葉を紅葉させるものは。

【語句】○もみだす もみじさせる。紅葉させる。「もみだ」は四段動詞「もみづ」の未然形。「す」は使役の助動詞。

【所載】後撰集・秋下・三七七／万葉集・二一八五（旧・二一八一）雁鳴之 寒朝開之 露有之 春日山平 令黄物者 カリガネノサムキアサケノツユナシカスガノヤマヲモミダスモノハ かりがねのさむきあさけのつゆならしかすがのやまをもみだすものは

【参考】類似歌が人麿集Ⅱ・九二にある。

〔以上五首担当 平野〕

五八六 露ならぬころをはなにをきそめてかぜふく<sup>たぐみね</sup>ことに物をこそおもへ<sup>或本</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】露ではない私の心を花の上に置きはじめてからというものの、風が吹くたびに花がどうなるかと思ひ煩うことであるよ。

【語句】○露ならぬ 二句の「ころ」にかかる。「露ならぬわが身と思へど秋の夜をかくこそ明かせおきぬながらに」（後撰集・二九二）、「露ならぬ心も花のほど過ぎておきどころなく散る桜かな」（延文百首・二二二七）。○ころをはなにをきそめて 「をき」は「おき」（置き）で、露の縁語。花の上に関心を持ちはじめ、の意。○物をこそおもへ 所載欄の古今集には「物思ひぞつく」。

【所載】古今集・恋二・五八九

【参考】作者「忠岑」の下に小字で「或本」とのみ記すが、所載欄の古今集では作者は紀貫之。またその詞書に、「やよひばかりに、ものたうびける人のもとに、また人まかりつつ消息すと聞きて、遣はしける」と詠作事情が記され、「花」は親しくなった女性を喩えている。

五八七 つゆふすぶあき<sup>本</sup>りけりむべしこそうちとけぬまにむしはなき<sup>もきに</sup>けれ

【異同】つゆふすふ—つゆむすふ（桂・大） あきゝりけり—秋もきにけり（桂・大）

【現代語訳】草葉に露がむすぶ秋も来たことであるよ。なるほどほんとうに、心はうち解けないままに、虫が鳴きはじめたことだ。ふたりの間に秋ならぬ飽きが来てしまった。

【語句】○つゆふすぶ 「ふすぶ」は、他本の「むすぶ」の誤写と解した。○あきゝりけり 歌意がとおらないので、傍書や他本の「あきもきにけり」で解す。所載欄の文獻は「あきはきにけり」。○むべしこそ 「むべ」は「うべ」とも。なるほど、ほんとうに、の意。助詞「し」「こそ」で、その肯定の意味を強く表す。○うちとけぬまに 「露」の縁語「とく」を用い、心がうち解けない、の意を掛ける。「とく」「むすぶ」は対義語。なお、所載欄の文獻「うちとけぬねに」の方が解しやすい。○むしはなきけれ 「むべしこそ」を受け、秋の到来を現実の虫の鳴くことで示す。二句の「秋」に「飽き」の意味を帯びさせる。

【所載】保明親王帯刀陣歌合・一／秋風集・二八七

【参考】所載欄の歌合によれば、保明皇太子の帯刀たちが「秋の物ども」を詠んだ歌合での一番左の歌であり、作者「さかのへのくずすけ」とある。

五八八 つゆとてもあだにやは見るながつきあのきくはちとせをすぐとおもへばたどみね或本  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】はかない露だと言つて、むなしなものだと見るであろうか、いやそうは見ない。九月の菊は、千年の寿を過ぎすと思うので。

【語句】○あだにやは見る 「あだ（なり）」の原義について『古語大辞典』では、実（じつ）のないさま、むなしさまであろうとする。ここは、一時的なさま、かりそめ、の意。「やは」は反語。「露」と「あだ（なり）」とを詠みこむ例歌は多い。「百とせを人にとどむる花なればあだにやはみる菊の上の露」（貫之集・五二二「九月九日」）や古今集・哀傷・八六〇、古今六帖・一九一など。○きくはちとせを 初句の「露」、三句の「長月」の続きから、陰暦九月九日重陽の節句での菊の着綿（きせわた）や菊酒を飲む長寿を祈る風習が思いうかぶ。着綿とは、前夜に菊に綿を置き露にしめらせその綿で身をぬぐうと千年の長寿が得られるというもので、紫式部日記に、「菊の露若ゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらむ」（四）とある。○すぐとおもへば 「過ぐ」（自動詞）は、経過する、時がたつ、の意。所載欄の新後拾遺集「すぐす（と思へば）」（他動詞・過ごさせる）の方

が解しやすい。

【所載】新後拾遺集・秋下・四三二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。その詞書に「小野宮おほいまうちぎみの屏風の絵に、長月の九日の日の絵（かた）かけるを詠める」とある。

しづく

おほともの王子

五八九 あしひきの山のしづくにいもまつとわれたちぬれぬやまのしづくに

【異同】ナシ

【現代語訳】山の雪に、あなたを待ちして立ちつくし、しとどに濡れました。あの山の雪に。

【語句】◎しづく 水のしたたり、水滴のこと。「露」が静的であるのに対して、「雪」は動的に詠まれる傾向がある。「山の雪」「菊の雪」「花の雪」「むすぶ手の雪」など特定の語と結びつく歌がある。また涙を比喻する「雪」もある。○あしひきの 「山」に掛かる枕詞。○山のしづくに 「雪」は山の木々から落ちる夜露のこと。なお、第五句でさらにこの第二句を繰り返す。○いもまつと 「妹」は男が女を親しみをこめていう語。「待つと」は、待つと言って、待つために、の意。本来なら待つのは女性であるが、男性が、それも山の中で待つというのは、人目を憚らねばならない恋なのである。○たちぬれぬ 立ったまま濡れた。四句切れ。

【所載】玉葉集・恋二・一三七七／万葉集・一〇七（旧一〇七）足日木乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二 アシヒキノヤマノシヅクニイモマツトワレタチヌレヌヤマノシヅクニ あしひきのやまのしづくにいもまつとわれたちぬれぬやまのしづくに／古来風体抄・二九

【参考】作者名「おほともの王子」は所載欄の文献に「大津皇子」とある。万葉集によれば、大津皇子が石川郎女に送った歌。石川郎女は大津皇子の異母兄草壁皇子の恋人であった。

かへし

石川女郎  
わうい

五九〇 我まつときみがぬれけんあしひきの山のしづくにならまし物を

【異同】ナシ

【現代語訳】私を待つといつてあなたが夜露にお濡れになったという、その山の雪に私がなればよかったのに。

【語句】○きみがぬれけん 助動詞「けむ」は、ここは過去の事柄についての伝聞を表し、贈歌の内容を指して「……たとかいう」の意であり、連体形。この句は「山の雪」にかかる。○ならまし物を 実際そうではないが……だったらよかったろうに、の意の「まし」に、逆接条件を表す接続助詞「ものを」が付いた形。山の雪であつたならずっと寄り添っていられたであろうに、という気持である。

【所載】続後撰集・恋二・七八七／万葉集・一〇八 吾乎待跡 君之沾計武 足日本能 山之四附二 成益物平ワレマツトキミガヌレケムアシヒキノヤマノシヅクニナラマシモノヲ わをまつときみがぬれけむあしひきのやまのしづくにならましものを／夫木抄・七九〇二／古来風体抄・三〇

【参考】作者名「石川女郎」は、所載欄の万葉集では「石川郎女」とあり、五八九番に対する返歌。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

五九一 このはちるあきのしづくにそほちつゝしかのたびねによひ／ぞなく

つらゆきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉が散る秋の雪にしとどに濡れながら、鹿が旅寝で夜ごと鳴くように、私も旅にあつて毎夜泣いています。

【語句】○このはちるあき 木の葉散る秋。「うちつけに物ぞ悲しき木の葉散る秋の初めをけふぞと思へば」（後撰集・二一八）のごとく、秋が悲しい季節であることを暗示する。「木の葉散る秋の山べはうかりけりたへでや鹿のひとり鳴くらん」（金槐集・三一〇）、「木の葉散る峰のあらしに夢さめて涙もよほす鹿の声かな」（散木奇歌集・四四八・夜深聞鹿）などは影響歌。○あきのしづくにそほちつゝ 「もりのしづく」「軒のしづく」、「袖のしづく」「山のしづく」などといった造語は多いが、「秋のしづく」はこの歌のみである。「そほちつゝ」は、内部まで濡れ通りながら。「心から花のしづくにそほちつゝうくひずとのみ鳥のなくらむ」（古今集・物名・四二二）。○しかのたびね 「旅寝」は、自宅を離れて別のところで寝ること。「鹿の旅寝」という例は他にないが、旅寝で

鹿鳴を聞く寂しさを詠んだものとして、「なにゆゑに都のほかには旅寝して鹿の鳴く音をそふらん」（弁乳母集・二九）、「旅寝するさよの中山さよ中に鹿も鳴くなり妻や恋しき」（為仲集・一三四）などがある。

【所載】ナシ

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、貫之集には見られない。

五九二 きくのはなしづくをちそひゆく水のふかきこゝろとたれかしるらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】菊の花から滴る雪が落ち添って流れが深くなる、そのようにあなたの長寿を祈る私の心の深さは誰も知らないのです。

【語句】○きくのはなしづくをちそひ 菊の花の雪が落ち添って。菊の露が長寿をもたらすという故事による。一八七番歌「九日」の項参照。「水にさへ流れて深き我が宿は菊の淵とぞなりぬべらなる」（貫之集・五四二）など例歌は多い。雪ではないが、涙が落ち添って川が深くなるというものは、やはり貫之によって「君惜しむ涙落ちそふこの川のみぎはまさりて流るべらなり」（貫之集・七三〇）と詠まれている。○ふかきこゝろとたれかしるらん「たれか」は反語。「菊水の深さを誰が知りましよう。誰にも知りえないほどのあなたさまの深いお心に思いをいたしております」（新潮日本古典集成『貫之集』頭注）と、慶賀される人物の長寿をことほぐとともに陰徳を称えたとする解釈もあるが、「飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（古今集・五三五）のごとく、自分の心の深さを知る人もいないという意とみて、歌の主体である画中人物、さらには慶賀者の心とする。

【所載】貫之集Ⅰ・五八

【参考】作者名「つらゆき」とあり、貫之集に入集する。歌仙家集本貫之集の詞書「延喜十五年九月廿二日右大將御六十賀清和の七宮御息所のつかうまつりたまひける時屏風料歌四首」によれば、清和帝の七宮（貞辰親王）の母御息所佳珠子が、右大將藤原道明の賀を行ったことになるが、両者の関係が不明のため、山崎正伸「貫之集における御息所について」『解釈』三九巻五号、一九九三年五月）は、清和帝の七宮（貞辰親王）の母御息所の佳珠子の賀を、右大臣忠平が行ったとする西本願寺本の詞書を妥当であろうとする。

五九三 すゑのつゆもとのしづくやよのなかのをくれさきだつためしなるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】葉末に宿る露と根元に滴る雫は、遅速の差はあつてもついには落ちて消えゆくもの、それは人に後れたり先立ったりして死にゆくこの世の慣らいであらうか。

【語句】○すゑのつゆ 枝の先端に置く露。○もとのしづく 草木の根元の水の滴り。○をくれさきだつ おくれさきだつ。人に後れたり、先立ったりしてあの世にゆく。「風早み萩の葉ごとにおく露のおくれ先だつほどのはかなさ」（新古今集・一八四九）。「末の露もとのしづく」とともに歌のなかでの対。○ためし 例。先例。証拠。

【所載】新古今集・哀傷・七五七／和漢朗詠集・無常・七九八／遍昭集Ⅰ・五／遍昭集Ⅱ・五／前十五番歌合・六／俊成三十六人歌合・二四／時代不同歌合・三五／三十人撰・四一／三十六人撰・五〇／深窓秘抄・八五／近代秀歌・五七／詠歌大概・六六／平家物語（延慶本）・二四六

【参考】作者名はないが、新古今集、和漢朗詠集では遍昭の作。遍昭集にも載る。

またこの歌は、法華経・方便品において、諸法の実相のあり方を示す十の範疇「十如是」（相・性・体・力作・因・縁・果・報・本末究竟等）の一つで、「相」から「報」に至るまでの九つの事柄が究極的には平等であるという「本末究竟等」の思想によって無常観を表したものの（中野方子『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）。やや後代のものだが、参考歌として次のものがある。

本末究竟等

後京極摂政前太政大臣

末の露もとの雫を一つぞと思ひはてても袖はぬれけり（続拾遺集・釈教・一三四四）

五九四 ほとゝぎすまつときなかずこのくれやしづくをおほみみちやよくらむ

つらゆき或本

【異同】つらゆき 或本——つらゆき（大）

【現代語訳】ほととぎすは待っているもやって来て鳴いてくれない。木が小暗く繁っているあたりは雫が多いの道を避けて通るからなのだろうか。

【語句】○まつときなかず 「まつと」の「と」は、逆接の仮定条件をあらわす接続助詞。「きなかず」は、「来

鳴かず。待つていてもやつて来て鳴かない。所載欄の家持集「まつによふけぬ」の方がわかりやすいが、万葉集の家持歌「ほととぎす待つてど来鳴かずあやめぐさ玉に貫く日をいまだ遠みか」（一四九四（旧一四九〇））に見られるごとく、郭公は待つていてもなかなか声を聞くことができない意とみて、本文通りに解す。○このくれや「このくれ」は、木の暗。木が繁つて下蔭が暗くなること。「木の暗の茂き峰の上をほととぎす鳴きて越ゆなり今し来らしも」（万葉集・四三二九（旧四三〇五）・家持）。「や」は詠嘆。○しづくをおほみ しづくが多いので。

【所載】家持集Ⅰ・八一／家持集Ⅱ・七三／新撰和歌・一四三

【参考】作者名は「つらゆき<sup>或本</sup>」となっているが、貫之集には見られず、家持集に入集する。

五九五 あしひきのやまのもみぢにしづくあひてをつるやまべをきみやこゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】山の紅葉に雫までが加わって落ちる山辺をあなたは越えているのだろうか。

【語句】○しづくあひてをつる しづくあひておつる。「あふ」は二つ以上のものが一つになる。紅葉に雫までが加わって落ちる。山路の労苦をいう。

【所載】万葉集・四二四九（旧四二二五）足日木之 山黄葉尔 四頭久相而 将落山道乎 公之超麻久 アシヒキノヤマノモミチニシヅクアヒテチラムヤマヂヲキミガコエマク あしひきのやまのもみぢにしづくあひてちらむやまぢをきみがこえまく／僻案抄・二七

【参考】五九七番に「已上三首つらゆき」とあるが、所載欄の万葉集の左注「右一首同月十六日餞之朝集使少目秦伊美吉石竹時守大伴宿祢家持作之」によれば、家持の作である。

〔以上五首担当 中野〕

五九六 ほととぎすいくこゑなきししづくにかあやめもしらぬゝれぎぬはきし

【異同】ナシ

【現代語訳】ほととぎすよ。いったい幾声鳴いた涙のしづくで、そんなにいわれもない濡れ衣を着たのかね。

【語句】○いくこゑなきししづくにか いっぱい幾声鳴いた涙の、そのしづくによつてなのか。「鳴く」に「泣く」を掛けた。○あやめもしらぬ 条理の立たない。いわれない。条理、筋目の意の「あやめ」に、植物のア



ヤメ(菖蒲)を掛けた。「ほととぎす」と「アヤメ」は、共に五月の景物。「ほととぎすなくやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」(古今集・四六九)。○ぬれぎぬ 根拠のない非難。根も葉もない噂。ここは恋の濡れ衣であろう。

【所載】ナシ

【参考】五九七番に「已上三首つらゆき」とあるが、この歌は貫之集にもなく、これを貫之の作とする文献も他に見出せない。

五九七 こゝろからはなのしづくにそほちつゝうくひずとのみとりのなくらむ

已上三首つらゆき

【異同】已上三首つらゆき―已上二首つらゆき(御・桂・大)

【現代語訳】わが心から好んで花のしづくにぬれていながら、どうして、つらいことに乾かないよとばかり、あの鳥は鳴いているのかな。

【語句】○こゝろから わが心から。自分の気持から。○そほちつゝ 中までしみとおるほどぬれながら。○うくひずとのみ 憂く干ずとのみ。つらいことに乾かないよ、とばかり。「憂く干ず」に物名として「うぐひす」を詠み隠す。

【所載】古今集・物名・四二／敏行集・二四／三十人撰・六七／三十六人撰・九一

【参考】「已上三首つらゆき」とあるが、五九五、五九六番歌も問題があり、当該歌も所載欄の文献すべてが藤原敏行の作としている。

五九八 むまたまのくろかみやまをけふこえてしづくにいたくぬれにけるかな

けさい  
あさい

人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】黒髪山をきょう越えて、山のしづくにひどくぬれてしまったなあ。

【語句】○むまたまの 「ぬばたまの」に同じ。「くろ」にかかる枕詞。○くろかみやま 黒髪山。奈良市の北

に連なる佐保佐紀丘陵の東北部分の丘。○いたく はなはだしく。ひどく。

【所載】古今六帖「山」八六三／続古今集・羈旅・八七一／万葉集・一二四五（旧一二四一）黒玉之 玄髪山乎 朝越而 山下露尔 沾来鴨 ヌバタマノクロカミヤマアサコエテヤマシタツユニヌレニケルカモ ぬばたまのくろかみやまをあさこえてやましたつゆにぬれにけるかも／人麿集Ⅱ・二〇五／人麿集Ⅲ・六〇四／人麿集Ⅳ・一六／綺語抄・一一八／袖中抄・四四五

【参考】作者名「人丸」は所載欄の文献に一致する。

五九九 をるきくのしづくをおほみわかゆくさかゆてふイ トテイにぬれぎぬをこそおいの身にきれ たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】（一九五番既出。ただし第三句が異なる。）手折る菊のしづくが多いので、それにぬれて若やいでゆき、若返るという（ありもせぬ）ぬれぎぬを老いの身に着ることだ。

【語句】○わかゆくに 意味のとりにくい語だが、既出の一九五番歌や、所載欄の諸文献、忠岑集・貫之集などの「わかゆてふ」を参考にし、「若行くに」と解した。

【所載】古今六帖「九日」一九五番既出

六〇〇 にほふかのきみおもほゆるはなゝればいせをれるしづくにけさぞぬれぬる そでイ

【異同】ナシ

【現代語訳】かぐわしい香りの、あなたのことが思われる花ですから、手折ったしづくによって（あなたのことがしのばれて）けさは袖がぬれたことです。

【語句】○にほふかの 匂う香の。におい立つ香りの。文脈上は「はなゝれば」へつづく。「にほふかのしるべならずは梅の花くらぶの山に折りまどはまし」（中務集Ⅰ・七八）。○をれるしづくに 手折ったときにこぼれ落ちたしづくによって。○けさぞぬれぬる けさこそぬれたことだ。「ぬれ」るのは、この場合、袖であろう。

【所載】伊勢集Ⅰ・三三五／伊勢集Ⅲ・三四三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

六〇一 しもゆきのきえてうき身のしづくこそそでたわむまでさえかゝりけれ  
をなじ

【異同】ナシ

【現代語訳】霜や雪が消えて滴る雪のように、憂き我が身が流す涙の雪こそは、袖がたわむほどに冷え冷えと滴り掛かることよ。

【語句】○しもゆきのきえてうき身 霜や雪がはかなく消えるように消えてしまいそうな、はかなくつらい我が身。「流れての世をもたのまず水の上のあわに消えぬるうき身とおもへば」（後撰集・一一一五）。○しづく 霜や雪が解けて滴る雪と、憂き身の雪すなわち涙とを表す。「いはしろの森のいはじと思へどもしづくにぬる身をいかにせん」（恵慶法師集・二五〇）。「うき身より木ごとしづくはこぼるともいつまもらばかもあるもしるべき」（伊勢集・四七五）。○さえかゝりけれ 冴え掛かりけれ。「さえ」は冷え冷えとつめたいさま。「けれ」は詠嘆。「こそ」の結びで已然形となっている。所載欄の伊勢集Ⅲでは、「さやけかりけれ」。

【所載】伊勢集Ⅱ・三四二／伊勢集Ⅲ・三四七

【参考】作者について「をなじ」とあるのは、六〇〇番に「伊勢」とあるのをさす。当該歌も伊勢集に見える。

六〇二 冬すぎてはるたちぬらしあさ日さすかすがのやまにかすみたなびく  
かすみ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬が過ぎて春になったらしい。朝日のさす春日の山に霞がたなびいている。

【語句】◎かすみ 霞。春の代表的な景物であり、春になったことを知らせるものとして和歌に詠まれる。「昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり」（万葉集・一八四七（旧一八四三））、「鶯の春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども」（万葉集・一八四九（旧一八四五））。◎かすがのやま 春日山。大和国の歌枕。現在の奈良市街地東方、春日神社の背後の山。所載欄の文献のうち、赤人集Ⅰでは「しかのやまへに」。

【所載】新勅撰集・春上・四／万葉集・一八四八（旧一八四四）、寒過 暖来良思 朝鳥指 滓鹿能山尔 霞輕引 フユスギテハルハキヌラシアサヒサスカスガノヤマニカスミタナビク ふゆすぎてはるきたるらしあさひさすかすがのやまにかすみたなびく／人麿集Ⅲ・一六／赤人集Ⅰ・一四二／赤人集Ⅱ・二五／赤人集Ⅲ・二八

【参考】人麿集・赤人集に入るが、当該歌は万葉集にも作者名はなく、新勅撰集も「よみ人知らず」とする。

六〇三 はるがすみたてるやいづこみよしのゝよしのゝやまにゆきはふりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞が立っているのはどこだろう。み吉野の吉野の山に雪は降っていないながら……。

【語句】○よしのゝやま 大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。雪の名所として、春になって他所よりも遅くまで雪が降る所として和歌に詠まれた。「吉野山雪はふりつつ春霞たつは春日の野辺にさりける」（躬恒集・二五五）、「春霞たちにしものをいまもなほ吉野の山に雪のみぞふる」（躬恒集・三〇九）。○ゆきはふりつゝ 雪は降っていないながら。「つゝ」は、動作が反復・継続して行われるのと並行して、他の事態が存在することを表す接続助詞。歌の最後にあると、余情を込めた詠嘆の措辞となる。

【所載】古今集・春上・三／新撰和歌・三／和漢朗詠集・七八／秀歌大体・四／俊頼髓脳・一一五／和歌初学抄・一一七／古来風体抄・二二七／無名抄・二／西行上人談抄・一／和歌口伝・四四

六〇四 ひとしれずおもふこゝろははるがすみたちいでゝきみがめにもみえなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】人知れず思う私の心は、春霞が立ち現れるように現れ出て、あなたの目にも見えてほしいものです。

【語句】○たちいでゝ 霞が生じる意と、自分の心が外に現れる意とを掛け、「春霞」によって導き出されている。「春くれば花見んとおもふ心こそ野べのかすみとともにたちいづれ」（古今六帖・一二一一）、「くもゐにもなりけるかな春山のかすみたちいでてほどやへぬらん」（一条摂政御集・一五八）。

【所載】古今集・雑下・九九九／新撰和歌・二〇三

【参考】古今集には、「ふちはらのちちおむ」が「寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける」（九九八詞書）歌として見え、これによると「きみ」は宇多天皇を指すことになる。古今六帖で詠歌事情と切り離して当

該歌のみを見ると、「きみ」は恋しい人を指すようにも読める。なお、片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、古今集九九九番歌について、作者の藤原勝臣は清和天皇の貞観年間に活躍した人物であることから、「題知らず」とする異文に従って「誰だかわからぬが、高貴なあたりから歌を召されて奉った時に、みずからの思いを訴えた歌と見るべきか」としている。

六〇五 かはとみるみちだにあるを春がすみかすめるかたのはるかなるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あれが私の行く道だと思つて見る道でさえ遙かに遠いの、春霞が霞んでいる行く手の方はなおさら遙かなことだよ。

【語句】○かは 彼は。あれは。「おもへども人めづつみのたかければかはと見ながらそこそわたらね」（古今集・六五九）。○だにあるを ……でさえ……なのに。「……なのに」の部分に後出の意味内容を補つて解釈する語法（原田芳起『平安時代文学語彙の研究』風間書房、一九六二年、中村幸弘・碁石雅利『古典語の構文』おうふう、二〇〇〇年）。当該歌の場合は、第五句の「はるかなる」を補つて訳した。

【所載】貫之集Ⅰ・三七一

【参考】作者名はないが、貫之集には「天慶三年四月右大將殿御屏風の歌廿首」のうちの一首として収める。なお貫之集の詞書に見える「右大將」は藤原実頼。「天慶三年」は「二年」（九三九）の誤り（新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』という。

〔以上五首担当 長戸〕

六〇六 やまかぜの花のかかどふふもとははるのかすみぞほだしなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】山風が花の香りを誘い出そうとしているその麓では、春の霞がさまたげとなって（花を隠して）いることだ。

【語句】○かどふ だまして誘い出す。誘惑する。和歌での用例は他に見出せない。新撰字鏡に「詠 玄音折曲也 加止不 又久自久」とある。○ほだし 人を束縛するもの。人の妨げとなるもの。ここでは「山風」と「春

の霞」それぞれを擬人化する。

【所載】後撰集・春中・七三／興風集Ⅰ・一九／興風集Ⅱ・五／和歌童蒙抄・六六

【参考】後撰集の詞書によると、古今集に入る僧正遍昭の「花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」（春下・九一）の歌の心を詠めという宇多天皇の求めに応じたもの。

六〇七 春のきるかすみのころもぬきをうすみやまかぜにこそみだるべらなれ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の着ている霞の衣は横糸が薄く弱いので、山風に乱れているようだ。

【語句】○春のきる 「春」を擬人化して、霞の衣を身にまとうという趣向。○ぬきをうすみ 「ぬき」は、織物の横糸。「霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦の織ればかつ散る」（古今集・秋下・二九一）。「み」は接尾語。形容詞語幹に付き「……を……み」の形で「……が……で」の意。

【所載】古今集・春上・二三／新撰和歌・七三／和歌童蒙抄・六五／桐火桶・四三／悦目抄・三〇

六〇八 しがらきのみねたちこゆるはるがすみはれずもゝのをおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】信楽の峰を越えるほどまでにたちこめた春霞が晴れる気配のないように、私の心も晴れる時なく、物思いをし続けているよ。

【語句】○しがらき 滋賀県甲賀市の一部（旧、甲賀郡信楽町）。紫香楽宮（聖武天皇）の置かれた地。万葉集・古今集・後撰集には見られない。「春たちてほどはへぬらししがらきの山は霞にうづもれにけり」（重之集・二二六）、「昨日かもあられふりしはしがらきのと山の霞春めきにけり」（詞花集・二、寛和二年六月十日内裏歌合・二二）など平安中期から用例が見出せるようになり、春霞との結びつきが強い。○はれずも 春霞が晴れないの意と自分の心が晴れないの意を掛ける。「秋山にあさたつ霧のみねこめてはれずもものを思ふべらなる」（是則集・二九）。

【所載】古今六帖「岑」一〇〇八

六〇九 きみがなもまだきもをな<sup>まだきイ</sup>じはるがすみ野にもやまにもたちみちにけり

【異同】またきもをなし—わか名もおなし（御・桂・大）  
まだきイ

【現代語訳】あなたのうわさも私のうわさも同じように、春霞が野にも山にもたちこめるように、あちらこちらに広まってしまったことだ。

【語句】○まだきもおなじ 他本ではいずれも「わが名もおなじ」とあり、それに従う。○のにもやまにも 野にも山にも、から、あちらこちら至るところに通じる。「いづこにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ」（古今集・九四七）、「人目をいまはつつまじ春霞野にも山にも名は立たば立て」（躬恒集・二〇一）。○たちみちにけり 「たち」は、霞が立つ意と噂が立つ意とを掛ける。

【所載】古今集・恋三・六七五

六一〇 こゝろうきものにざりけるはるがすみたなびくときにこひのしげきは  
ぞあい

【異同】ナシ

【現代語訳】つらいものであったなあ。春霞のたなびく時に恋の思いが募ってくるのは。

【語句】○こゝろうき つらい。所載欄の万葉集では「心ぐき」とあり、心が晴れ晴れとしない様の意。「坂上郎女、大伴家持たち周辺で好まれた言葉」（伊藤博『萬葉集釋注』）、「春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む」（万葉集・七三八（旧七三五））「心ぐく思ほゆるかも春霞たなびくときに言の通へば」（万葉集・七九二（旧七八九））。○はるがすみたなびくときに 立ちこめた春霞に、拭い去ることのできない恋情を重ね合わせる発想の歌は「春霞たなびく今日の夕月夜おぼつかなくもこひわたるかな」（古今六帖「知らぬ人」二五二九）、「春霞たなびく空は人知れず我が身より立つけぶりなりけり」（兼盛集・一六）など。○こひのしげきは 「こひのしげき」という形が万葉集に八例（……は）はこの歌のみ。以後ほとんど用いられない。「木綿懸けて斎（いは）ふこの神社（もり）越えぬべく思ほゆるかも恋の繁きに」（万葉集・一三八二（旧一三七八））、「夢にだに何かも見えぬ見ゆれども我かもまどふ恋の繁きに」（万葉集・二六〇〇（旧二五九五））。平安期の例では「夕月夜あかつきかげのあさかげに我が身はなりぬ恋のしげきに」（猿丸集・四四）、「奥山の昔の根しのぎふる雪のけぬとかいはむ恋のしげきに」（古今集・五五二）と比較的古いものとどまる。

【所載】新続古今集・恋五・一五〇一／万葉集・一四五四（旧一四五〇） 情具伎 物尔曾有鶏類 春霞 多奈引 時尔 恋乃繁者 ココログキモノニゾアリケルハルカスミタナビクトキノコヒノシゲレバ こころぐきものにぞ

ありけるはるかすみたなびくときにこひのしげきは

〔以上五首担当 青木〕

六一一 やまごと<sup>ニ</sup>にたちもかくすか春がすみ人にしられぬはなやさくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】どの山にもどの山にも立ちこめて隠していることか、春霞よ。霞の向こうでは人に知られぬ花が咲いていることだろうか。

【語句】○やまごと<sup>ニ</sup>に 山という山にみな。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「三輪山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらむ」（古今集・春下・九四・貫之）がある。

六一二 花のいろをやすくもみせずたちかくすかすみぞつらきはるのやまべは

【異同】ナシ

【現代語訳】美しい花の色を簡単には見せてくれず、立ち隠している霞が何ともつれないことだ、春の山辺は。

【語句】○花のいろ 花の容色。「花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」（古今集・九一）、「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（古今集・一一三）。○やすくもみせず もつたいぶつて、容易には見せてくれず。「散りぬべき山の紅葉を秋ぎりのやすくもみせず立ちかくすらん」（拾遺集・二〇六）。

【所載】ナシ

【参考】類歌「立ち隠す霞ぞつらき山ざくら風だにのこす花のかたみを」（肥後集・五四）。

六一三 はるがすみてにしとらればやまがつのころもにいまはたちぞきてまし<sup>もイ</sup>

【異同】ナシ



【現代語訳】あのたなびいている霞がもし手に取ることができたら、木こりなどはきつといま着物に仕立てて着ているに違いないでしょうに。

【語句】○てにしとられば 手に取ることができたなら。「し」は強めの副助詞、「れ」は可能な助動詞の未然形、「ば」は順接仮定条件をあらわす接続助詞。○やまがつの 「やまがつ」は木こりや猟師、炭焼きなど、山で働く人。「の」はここでは主格。○たちぞきてまし きつと裁つて着たであろうに。複合動詞「裁ち着る」の間に強意の係助詞「ぞ」が割って入り、完了の助動詞「つ」の未然形と仮定の助動詞「まし」とを伴った形。「まし」は「ぞ」との係り結びでここは連体形。なお「てまし」は一般に、非現実的な事柄についての推量を、ほとんど実現するかのようにな強くあらわす。また「たち」は「裁ち」と「立ち」の掛詞で、「立ち」は「霞」の縁語。

【所載】ナシ

【参考】たなびく霞を衣に見立てる歌としては、「春の着る霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ」（古今集・春上・二三・在原行平）が有名。「霞衣霞錦千般状 雲峰雲岫百重生」（石淙詩・唐中宗）「霞衣席上転 花袖雪前明」（舞詩・李喬）など、唐詩からの影響を受けている。

六一四 やまがつのなげきこりつむいほりにはかすみやきつゝけぶりともなる

【異同】ナシ

【現代語訳】木こりなどが薪を伐り、つらい思いを重ねながら暮らしている庵には、霞が立ち、それがあの煙となっているのだろうか。

【語句】○やまがつ 六一三番歌参照。○なげきこりつむ 「なげき」は、「投げ木」と「嘆き」の掛詞。「投げ木」は薪の意。薪を伐り積む、嘆きを重ねる。「なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり」（古今集・一〇五七）。○かすみやきつゝ 意不明。あるいは「霞や来つゝ」で、「かすみ」に「炭」の意をこめ、炭を焼きながら、ちょうど霞が立っているの、それが煙ともなっている、の意にもとれそうに思われるが、無理であろうか。夫木抄には「かすみやたちて」とあり、一応その本文に従った。

【所載】夫木抄・一六七―

六一五 かすみたつやまのこゝろはしらねどもこのはかきわけいらむとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】霞のかかっている春の山の気持ちは知らないけれど、私は敢えて木の葉をかきわけかきわけ入ろうと思っています。

【語句】○かすみたつやまのこゝろ 霞立つ春の山の気持ち。○このはかきわけ 秋ないし冬の情景をいうか。「このは」は散り積もった落ち葉をいうのであろう。

【所載】ナシ

【参考】どういう折に、どういうことを言おうとして詠んだ歌なのか、「かすみたつやまのこゝろ」に女性の面影があるようでもあり、恋の歌かもしれないが、はつきりしない。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

六一六 うぐひすのはかぜをさむみかすが野のかすみのころもいま<sup>けさはイ</sup>またつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯の羽風が寒いので、春日野が霞の衣を着ようとして、今裁っているのでしょうか。（春日野に霞が今立っているのでしょうか。）

【語句】○はかぜ 鳥や虫が羽を動かすことによつて生ずる風。○かすが野 奈良市の春日山西麓の野。所載欄の宇津保物語・風葉集では第三句「春日山」。○かすみのころも 霞を衣に見立てた表現。「はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ」（古今集・二三）。○いままたつらん 「たつ」は「霞が」立つ」と「衣を」裁つ」を掛ける。「裁つ」は「衣」の縁語。所載欄の続後撰集では「いまはたつらん」、宇津保物語では「けさはたつかも」。

【所載】続後撰集・春上・一七／風葉集・三／宇津保物語・一三六

六一七 こゝにしてかすがのやまを見わたせばこまつがえだにかすみたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】ここから春日の山を見渡すと、小松を引くかのように、小松の枝の所に霞がたなびいていることです。

【語句】○こゝにして ここにおいて。「に」しては「……にあつて」「……に居て」の意。所載欄の続古今集などは「ここにきて」とする。○かすがのやま 奈良市の春日神社の後方にある山。所載欄の続古今集では「かすがのさと」、人麿集Ⅱでは「かすがのはら」。○こまつがえだに 「こまつ」は小さな松。正月最初の子の日には、野辺に出て若菜を摘み小松を引き抜いて長寿を祈る、小松引き（子の日の遊び）という行事が行われた。「千代ふべき春日ののべのひめこ松ながくたもてるためしにぞひく」（玄玉集・三七三）。所載欄の続古今集・人麿集Ⅱでは「こまつのうち」に、人麿集Ⅲ・万代集では「こまつのはだに」。○かすみたなびく 「たなびく」の「ひく」に、人ならぬ霞が小松を引いている意を掛けた表現。「ねのびする人なきのべのひめこまつかすみにのみやたなびかるらん」（教長集・一九）。

【所載】続古今集・春上・四一／万代集・二六／人麿集Ⅱ・二二／人麿集Ⅲ・一七／人麿集Ⅳ・一〇八

六一八 山のはを見ざらましかばはるがすみたてるもしらでへぬべかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】山の端をもしも見なかったなら、春霞が立って、春が来たのも知らずにすごしてしまうところでしたよ。

【語句】○山のは 山の端。遠く望んだ山の、空に接する部分。○はるがすみたてる 「春霞が立つ」に「春が立つ」即ち立春を掛ける。

【所載】貫之集Ⅰ・九七

【参考】貫之集の詞書によると、醍醐天皇の第四皇女勤子内親王の御髪上げの屏風のために詠まれた歌である。

六一九 まきもくのひばらのかすみたちかへりみれども花におどろかれつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】巻向の檜原に霞が立つ。その「立つ」ではないが、立ち返り（繰り返し）見ても花の美しさに驚いてしまいますよ。

【語句】○まきもくのひばら 巻向の檜原。奈良県桜井市北部の地区の檜原。大和国の歌枕。霞や若菜・雪の歌が多く詠まれた。所載欄の夫木抄では二句まで「まきもくのくひばらの山に」。○たちかへり 繰り返し。「たち」

に「霞が」立ち」を掛ける。二句までは「たちかへり」の序詞。○花におどろかれつゝ 所載欄の寛平御時后宮歌合では「花のおどろかれつゝ」、人麿集では「花のあかずもあるかな」。

【所載】新撰万葉集・一七／夫木抄・一一〇〇／人麿集Ⅲ・五九／寛平御時后宮歌合・二七

【参考】拾遺集八一六番には「まきもくのひばらの霞立返りかくこそは見めあかぬ君かな」という上三句の同じ歌がある。

六二〇 はるがすみいろの千くさにみえつるはたなびくやまのはなのかげかも

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞の色が様々に見えたのは、霞がたなびいている山に咲く花が映っている影だったのだなあ。

【語句】○千くさに 千種に。様々に。(花や紅葉の)色の種類が多いことを表す。○みえつるは 見えたのは。

「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形で、近い過去を表す。所載欄の興風集Ⅱでは「みつるは」。○はなのかげ 花が霞に映った影。○かも 詠嘆の表現。古今集の注釈書では当該歌の「かも」を疑問の表現とする説もある。

【所載】古今集・春下・一〇二／新撰万葉集・二五／興風集Ⅰ・三／興風集Ⅱ・四／寛平御時后宮歌合・三七／俊頼髓脳・一七〇

【参考】古今集一〇一番歌に作者名「藤原おきかぜ」とあり、寛平御時后宮歌合にも作者名「興風」とある。新撰万葉集と俊頼髓脳では作者名記載なし。

〔以上五首担当 三浦〕

六二一 われをこそとふにうからめはるがすみはなにつけてもたちよらぬかな

【異同】ナシ

【現代語訳】私のところへこそ訪れるとなると気がすすまないでしょうが、花にかこつけてでも、春霞が立つように立ちよってくれないかしら。

【語句】○うからめ 「憂からむ」の已然形。「こそ」の結び。○はなにつけても 花にかこつけても。所載欄後撰集の詞書に「あひしれりける人のひさしうとはざりければ、花盛りにつかはしける」とある。○たちよらぬかな 「立ち寄らぬ」に霞が「立ち」をかける。

【所載】後撰集・春下・一一三

六二二 うつくしきいもおもふとかすみたつはる日もくれにこひわたるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしいあの人を思っていると、霞の立つ長い春の日も暮れるまで恋い続けてしまうことよ。

【語句】○いも 男が女を親しんで言う語。○はる日もくれに 長い春の日も暮れるまで。○こひわたる 恋い続ける。

【所載】万葉集・一九一五（旧一九一一）左丹頰経 妹乎念登 霞立 春日毛晩尔 恋度可母 サニツラフイモ  
ヲオモフトカスミタツハルヒモクレニコヒワタルカモ さにつらふいもおもふとかすみたつはるひもくれにこひわたるかも／綺語抄・三二三／袖中抄・一六四

六二三 せながてをまきもくやまをこのゆふべこのはしのぎてかすみたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい夫の手を巻くと言う名の、巻向山にはこの夕方、木の葉に覆いかぶさるように霞がたなびいている。

【語句】○せながてを 「せな」は女が夫または親しい男を呼ぶ語。いとしい夫の手を巻く意から同音の「巻向（まきもく）山」にかかる。所載欄の文献には「こらがてを」「とくかみを」などとするものがある。○まきもくやま 奈良県桜井市北部の山。痛足山（あなしやま）東南の弓月ヶ岳と合わせていう時もある。○しのぎて 対象に覆い被さるように。

【所載】風雅集・春上・三一／万葉集・一八一九（旧一八一五）子等我手乎 巻向山丹 春去者 木葉凌而 霞  
霏微 コラガテヲマキモクヤマニハルサレバコノハシノギテカスミタナビク こらがてをまきむくやまにはるさればこのはしのぎてかすみたなびく／夫木抄・五〇一、八五八七／人麿集Ⅲ・二〇／赤人集Ⅰ・一二三／赤人集Ⅱ・六／赤人集Ⅲ・三／和歌一字抄・一〇六五／袋草紙・七二一／袖中抄・六二五

六二四 かげろふのゆふさりくればさと人のつゆをきかたにかすみたなびく

ゆくべきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方になると里の人が帰っていく方向には、露が置き霞がたなびいているよ。

【語句】○かげろふの 枕詞。はかないものたえとして、「あるかなきか」「それかあらぬか」などにかかるが、当該歌の原歌と思われる所載欄万葉集の訓は「かげろふの」と「たまかぎる」があり、「たまかぎる」ならば玉がほのかに光を出すことから「夕」「日」にかかる枕詞となる。○つゆをきかた 里人が露の置いている方へ帰って行くと。傍記の本文によって解釈した。

【所載】万葉集・一八二〇（旧一八一六）玉蜻 夕去来者 佐豆人之 弓月我高荷 霞霏霏 カゲロフノユフサ  
リクレバサツヒトノユツキガタケニカスミタナビク たまかぎるゆふさりくればさつひとのゆつきがたけにかす  
みたなびく／夫木抄・九一〇一／人麿集Ⅲ・一九／赤人集Ⅰ・一二五／赤人集Ⅱ・八／赤人集Ⅲ・四

六二五 このなかにさよのよろしきあづまの<sup>つけのイ</sup>イ<sup>あづまのイ</sup>みかた山の<sup>ぎしイ</sup>べにかすみたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】木立の中に梓弓にするのに良い木がある。その木の有る山の片側には霞がたなびいている。

【語句】○このなかに 木立の中に。○さよのよろしき 「さよの」はよろしきを言い出す語か。所載欄万葉集は「関之宜」とあり、「ツケノヨロシキ」、「かけのよろしき」と訓じている。○あづさゆみ 梓の木で作った弓。呪力のあるものとされた。○かた山のべ 山の片側の所。山裾の丘のあたり。

【所載】万葉集・一八二二（旧一八一八）子等名丹 関之宜 朝妻之 片山木之尔 霞多奈引 コラガナニツケ  
ノヨロシキアサヅマノカタヤマキシニカスミタナビク こらがなにかけのよろしきあづまのかたやまきしにか  
すみたなびく／夫木抄・八七〇二／人麿集Ⅲ・二二／赤人集Ⅱ・二三七／赤人集Ⅲ・六

〔以上五首担当 橋本・林〕

六二六 たまきはるわがやどのうへにたつかすみたちてもゐてもかみのまに／

【異同】ナシ

【現代語訳】私の家の上に立つ霞は、立つのも座るのも神のご意志のままです。

【語句】○たまきはる 枕詞。命・うち・世などにかかるほか、「たま」は玉で、玉の輪を刻む意から、同音の「我（わ）」にかかるという。ここでは「わが」の「わ」にかかるか。「たつかすみ」までが「たち」を導く序詞。○かみのまに／＼ 所載欄の綺語抄などは万葉集と同じく「きみのまにまに」。「まにまに」は、……の思うとおりに、の意。「このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」（古今集・四二〇）。

【所載】万葉集・一九一六（旧一九一二） 靈寸春 吾山之於尔 立霞 雖立雖座 君之随意 タマキハルワガヤ マノウヘニタツカスミタテモキミガマニマニ たまきはるわがやまのうへにたつかすみたつともうとも きみがまにまに／綺語抄・三九七／袖中抄・四一二

六二七 見わたせばかすがのつゞきたつかすみまくのほしききみがすがたか

【異同】ナシ

【現代語訳】見渡すと春日の山の峰続きに霞が立っている。その霞のようにいつも見ていたものだ、あなたの姿よ。

【語句】○かすがのつゞき 万葉集・赤人集では「春日の野辺に」。「かすがのつゞき」の用例は新編国歌大観中、当該歌と建長八年百首歌合の二例のみ。金葉集・源師光の「かすがやまみねつづきてる月かげにしられぬたにのまつもありけり」（五三七）の用例などから考えると、春日山の峰続きを略した形か。○みまくのほしき 見ていたい。上三句、いつも立っている霞のように、いつもいつも、の意と解釈した。

【所載】万葉集・一九一七（旧一九一三） 見渡者 春日之野辺 立霞 見卷之欲 君之容儀香 ミワタセバカス ガノノヘニタツカスミミマクノホシキキミガスガタカ みわたせばかすがのへにたつかすみまくのほしききみがすがたか／赤人Ⅰ・一九三

六二八 あしひきの山のへた／＼見えつるははるのかすみのたてるなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】連なっている山が「へたへた」見えるのは、春の霞が立っているからだつたよ。

【語句】○へた／＼ 互いに間が隔たっている意の「へだへだ（隔隔）」、あるいは「へた（端）」などが考えられるが、和歌では他の用例が見いだせない。「へだて／＼」の誤写か。所載欄の新後拾遺集では「たえだえ」とあ

る。○なりけり「……は……なりけり」の形で「……なのは、……であつた」。気づきの表現。「山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」(古今集・三〇三)。

【所載】新後拾遺集・春上・三六

六二九　ときはいまはるになりぬとみゆきふるとをきやまべにかすみたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】今がちょうど春になつたと、雪の降る遠い山辺にも霞がたなびいていることだ。

【語句】○ときはいまは　今がちょうどその時とばかりに。所載欄の万葉集では「今者」の「者」は助字と解する。建保名所百首に「ときはいま春に成りぬとみしまえの角ぐむあしにあは雪ぞふる」(一一〇)と当該歌を利用した例が見られる。○とをきやまべ　とほきやまべ。所載欄の万葉集西本願寺本の訓と同じ。

【所載】新古今集・春上・九／万葉集・一四四三(旧一四三九) 時者今者 春尔成跡 三雪零 遠山辺尔 霞多奈婢久 トキハイマハハルニナリヌトミユキフルトホキヤマヘニカスミタナビク　ときはいまはるになりぬとみゆきふるとほやまのへにかすみたなびく

六三〇　こひつゝもけふはくらしつかすみたつあすのはる日をいかでくらさむ

【異同】ナシ

【現代語訳】恋しく思いながらもどうにか今日は暮らした。霞の立ちこめる明日の長い春の日を日がな一日どうやって暮らそうか。

【語句】○かすみたつ

新日本古典文学大系『拾遺和歌集』の注では、この「霞」は憂愁の表象とする。

【所載】古今六帖・第一帖・二七一 一番既出。第三句「あかねさす」。

〔以上五首担当　杉本〕

六三一　のべなるを人<sup>にくるイ</sup>やみるらんわかなつむわれをかすみ<sup>とてイ</sup>のたち<sup>つらゆきある本</sup>かくるらむ<sup>スイ</sup>



【異同】たちかくるらむ―たちかくすらむ（桂・大）

【現代語訳】野辺に私がいるのを人が見るかもしれないと、若菜摘む私を、霞は（見られないように）隠すのだらう。

【語句】○のべなるを 野辺にあるを。野辺にいるのを。○人やみるらん 歌末にも「らむ」があり不審。○たちかくる 「たちかくす」の方が自然。それによつて訳した。

【所載】貫之集Ⅰ・二五〇

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。京極の権中納言の屏風の歌廿首のうちの一首。

### きり

人まろ

六三二 はるやまのきりにまがへるうぐひすもわれにまさりてものおもふらんやは

【異同】ナシ

【現代語訳】春山の霧中にまじり見分けられない鶯も、今の私の物思い以上に物思うだろうか。いや思いはしないだらう。

【語句】◎きり 霧は、山辺にも川辺にもかかる。視界がさえぎられ見えなかった状態から次第に晴れてゆく動きを詠む場合、夕方の霧、朝の霧を詠む場合などがある。多くは秋の歌だが、この歌のように春の歌もある。○まがへる 見分けがつかない。○おもふらんやは 「やは」は反語。

【所載】万葉集・一八九六（旧一八九二）春山 霧惑在 鶯 我益 物念哉 ハルヤマノキリニマトヘルウグヒ スモワレニマサリテモノオモハメヤ はるやまのきりにまとへるうぐひすもわれにまさりてものもはめやも／人麿集Ⅱ・五〇〇／人麿集Ⅲ二〇七／人麿集Ⅴ・二八八／夫木抄・三五五／和歌一字抄・一〇六九／奥儀抄・六一三／袋草紙・七二五

【参考】作者名「人まろ」は所載欄の文献に一致する。万葉集では四首あとの左注に「右は柿本人麻呂の歌集に出づ」とある。

六三三 ゆふぎりにころもはぬれて草まくらたびねするかもあはぬきみゆへ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕霧に衣は濡れて旅寝することよ。会えない君であるのに。

【語句】○草まくら 「旅」にかかる枕詞。○あはぬきみゆへ 「故」は……だのに。……であるが。「人妻故に」（万葉集・二二）に同じ。人妻だのに。また、「ただ一目相見し児ゆゑに」（万葉集・二五七〇（二五六五））は、ただ一目見た子だのに。

【所載】古今六帖「くれどあはず」三〇二五／万葉集・一九四 夕霧尔 衣者沽而 草枕 旅寝鴨為留 不相君故 ユフギリニコロモハヌレテクサマクラタビネカモスルアハヌキミユエ ゆふぎりにころもはぬれてくさくらたびねするかもあはぬきみゆゑ／夫木抄・五三九一

【参考】万葉集・一九四の長歌の末尾五句が短歌の形で古今六帖に収載されている。

六三四 かりのくるみねのあさぎりはれずのみおもひつきせぬよのなかのうさ

【異同】ナシ

【現代語訳】雁の来る峰の朝霧がずっと晴れずにいる——晴れない気持のまま、物思いの尽きせぬこの世の厭わしいこと。

【語句】○かりのくるみねの 物名の「くるみ」が隠されている。○はれずのみ 霧が「はれず」と自らの気持ちが「晴れず」をかける。「しがらきのみねたちこゆるはるがすみはれずも」のおもふころかな」（古今六帖・六〇八）。

【所載】古今集・物名・九三五／新撰和歌・二五五／藤六集（輔相集）・二七

六三五 あきぶりのたつをけぶりとみしほどにやまのこのはもいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧の立つのを煙とばかり思っているうちに、山の木々の木の葉の色がかわり、秋も深まっているのだった。

【語句】○けぶり 木を燃やす、藻塩を燃やすなどして煙が立つ。当該歌には霧を煙と見る。また次の例歌のように霞と煙の類似を歌ったものもある。「山がつのなげきこりつむいほりには霞やきつつけぶりとものなる」（古今

六帖・六一四。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 平野〕

六三六 秋ぎりのはるゝときなきこゝろにはたちぬのそらもおぼえざりけり<sup>もイ  
なくにイ</sup>

【異同】おほえざりけり—おもほえざりけり（御）

【現代語訳】秋霧の晴れる時がないと同様に晴れることのない私の心には、日常の立ち居の間も、上の空のよう  
なとりとめのない気持ちで、物もはつきりわからないことであるよ。

【語句】○たちぬ 立つこととすわること、ごく普通の日常の動作。「たち」「そら」は、「秋ぎり」の縁語。「秋  
霧のたちぬるときはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける」（古今六帖・六四七）。○そら 空中・虚空。（お  
ぼつかない気持ちでいう）所、場所、方向、また心、気持等の意がある。ここでは第五句に打消を伴って、空虚  
なおぼつかない状態を示している。○おぼえざりけり 「おぼゆ」の分別、判断力がある、わきまえる、の意を  
打消したもの。はつきり分別がつかない。傍記異文では、「おもほえなくに」と読める。所載欄の古今集でも「お  
もほえなくに」であり、その方がことばつきとしては自然である。

【所載】古今集・恋二・五八〇／躬恒集Ⅰ・二八九／躬恒集Ⅲ・三二三

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると作者は凡河内躬恒。

六三七 をとにきく花みにくればあきづりのみちさまたげにたちわたりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】噂に名高い花を見に来たら、秋霧が道の妨げとなって一面に立ちこめていたのであったよ。花を隠  
してしまつて。

【語句】○をとにきく 「をと」は「おと」。うわさ、風聞のこと。「おと（音）にきく花」には美女の誉れ高い  
女を寓するか。○みちさまたげ 通行の妨げとなること。また、そのもの。「思ふ事ありてこそゆけ春がすみ道  
さまたげにたちわたるらん」（貫之集・四五）という用例がある。○たちわたりつゝ 一面に立ちこめているの  
だった。「わたる」は、時間的・空間的に動作が広くゆきわたり、長く続く意。「つゝ」は動作の反復を表し、し

きりに……するの意。文末にある時は詠嘆の意も表す。

【所載】ナシ

【参考】新撰万葉集に「音丹菊 花見来礼者 秋之野之 道迷左右奇 霧曾起塗 オトニキクハナミニクレバ  
アキノノミチマヨフマデニキリゾタチヌル」（三五八）があり、寛平御時后宮歌合に「音にきく花見にくれば  
秋の野の（下句を欠く）」（二〇五）がある。

六三八 しら雲のおりある山のからにしきかねてぞあきのきりはたちける

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲が降りている山の唐錦のように美しい紅葉に、以前から秋の霧が立ちこめていたのであるよ。  
— 白雲が織っている山の唐錦を、以前から秋の霧が裁っていたのだなあ。

【語句】○しら雲のおりある山 白雲がおりている山。「降り」に「織り」を掛ける。○からにしき 唐織りの  
錦。舶来もので、紅色のまじった美しい模様が賞された。ここでは山の紅葉のたとえ。○きりはたちける 霧が  
立ちこめているよ。「立ち」に「裁ち」を掛ける。「織り」と「裁ち」が対比され、同時にそれは「唐錦」の縁語  
となり、白雲が織っている山の唐錦を重ねて秋の霧は裁っていることだよ」の意となり、この方が意が通りや  
すい。この場合は、「重ね」に「襲」を掛ける。

【所載】重之集・二七七

【参考】作者名はないが、重之集では百首歌の一首。

六三九 あさな／＼たつかはぎりのそらにのみうきておもひのあるよなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】毎朝立ち上る川霧が空に浮きただようように、ただ、うわの空で落ちつかない。こんなつらい思い  
のあるのが、男女の仲らいというものだったのだなあ。

【語句】○あさな／＼ 毎朝。○そら 川霧の立ちのぼって行く空の意と、思いがうわの空であることを掛ける。  
初、二句が第三、四句の序詞。○うきておもひの 落ちつかない恋の思いが。「しほがまの前に浮きたる浮島の

浮きてももひのあるよなりけり」(古今六帖「しほがま」一七九六・山ぐちの女ろう、新古今集・一三七九・山口女王)は、当該歌と下句が同じ。○よ 世。男女の仲らい。

【所載】古今集・恋一・五二三

六四〇 ちどりなくさほの川ぎりたちかへりつれなきひとをこひわたるかな  
みつね<sup>或本</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】千鳥の鳴く佐保川に川霧が立つ、それが立ちこめるように、たちかえりくりかえし、私は無情なあの人を恋い続けるのであるよ。

【語句】○さほの川ぎり 「さほ」は「佐保」。佐保山・佐保川は大和国の歌枕として有名。佐保川は千鳥・霧・紅葉が主要な歌材として詠まれた。「千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのは色まさりゆく」(古今集・三六一)。○たちかへり 繰り返し。ひっきりなしに。「たち」は、川霧の「立ち」に、「立ちかへり」の「立ち」を掛け、初、二句が「立ちかへり」を導く序詞。「わたつみのわが身こそ浪立返りあまのすむてふうらみつるかな」(古今集・八一六)。○つれなきひと 無関心な人。薄情な人。○こひわたる 長きにわたって恋い続ける。「わたる」はここでは「川」の縁語。六三七番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖では作者名を「みつね<sup>或本</sup>」とするが、確認できない。

〔以上五首担当 斎藤・長戸〕

六四一 つれもなき人にこゝろをつくばねのみねのあさぎりはれずのこそ思へ

【異同】ナシ

【現代語訳】薄情な人に心を寄せて、筑波嶺の嶺にかかる朝霧が晴れない、そのように晴れぬもの思いをすることだ。

【語句】○つくばね 筑波嶺。茨城県つくば市にある歌枕。万葉集では嬬歌を詠んだ長歌(一七六三(旧一七五九))が知られるが、平安期においても恋歌として詠まれることが多い。「(心を)つく」と「筑」が掛詞。「限な

く思ふ心はつくばねのこのもやいかあらんとすらん」(後撰集・一一五〇)、「おとにきく人に心をつくばねのみねど恋しき君にもあるかな」(拾遺集・六二七)、「おとにきく人に心をつくばねのみねども思ふ思はんや君」(古今六帖・二五四五)。「あきぎりはれず」「晴れず」は、「朝霧が晴れない」と「心が晴れない」との両意がある。

「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ」(古今集・九三五、古今六帖・六三四)。

【所載】ナシ

六四二 あきぎりのたちのみかくすもみちばのおぼつかなくてやみぬべらなり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧が立つて隠してばかりいるもみち葉のように、はつきりとわからぬままで終わってしまいそうだ。

【語句】○あきぐり 秋霧。秋に立つ霧。秋の景物を隠し隔てるものとして多く詠まれる。紅葉との取り合わせは「散りぬべき山の紅葉を秋霧のやすくもみせず立ち隠すらん」(貫之集・一五六)、「秋霧は今日はな立ちそ竜田山はその紅葉よそにても見む」(古今集・二六六)など。○おぼつかなくて 上三句は「おぼつかなくて」の序。はつきり確認できない状態で。「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」(後撰集・二七一)。「○やみぬべらなり」「やむ(止む)」は、中断する、終息する。もみじ葉が散ってしまった。「べらなり」は確率的の高い推量(中野方子『古今集』における『べらなり』―喩に承接される助動詞―『國文』一九九七年一月)。なお新日本古典文学大系『後撰和歌集』は当該歌を引用し、「もみち葉」を女に見立てた男の恋歌の雰囲気が強いとする。「祝部(はふり)らが斎(いは)ふ社の黄葉(もみちば)も標縄(しめなは)越えて散るといふものを」(万葉集・二二三三(旧二三〇九)、拾遺集・雑秋・一一三五)と、親の監視が厳しくても逢瀬をもつ女性を黄葉にたとえているものや、「もみち葉は秋の風こそ誘ひけれ霧のなき名をたつぞあやしき」(陽成院一親王姫君達歌合・三一)といった例から考えて従うべき見解であろう。

【所載】後撰集・秋下・三九二

【参考】作者名はないが、後撰集では貫之の作。

六四三 しぐれにもあめにもあらぬはつぎりのたつにもそらはかきくもりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨でも雨でもない秋の初霧が立つことによっても、空は急に曇ることだ。

【語句】○はつぎり 初霧。初秋（七月）に立つ霧。「初霧もたちそめにけりたれにかは人わたるらむかさざぎのはし」（元輔集・二三〇、夫木抄・三九一三）。○たつにも 立つにも。「にも」は断定の助動詞「なり」の連用形「に」＋係助詞「も」。立つのも。立つのでも。○かきくもり 雲や霧などに覆われ、空が急に曇る。「月夜にはこぬ人待たるかきくもり雨もふらなむわびつつもねむ」（古今集・七七五）。

【所載】左兵衛佐定文歌合・一一／夫木抄・三九一二

【参考】作者名はないが、夫木抄では忠岑の作となっている。

六四四 あきとてやいまかは<sup>はかい</sup>ぎりのたちぬらんおもひにあへぬものならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】飽きたからといって、今秋の川霧が立つようにお発ちになるのでしょうか。霧はもの思ひの「日」に堪えられぬようなものではありませんのに。

【語句】○あき 「秋」と「飽き」の掛詞。○いまかはぎりの 「かはぎり」は川霧。川面や川辺に立ちこめる霧。秋は川霧のたつ季節とされる。「秋されば川霧立てる天の川川に向き居て恋ふる夜ぞ多き」（万葉集・二〇三四（旧二〇三〇）、「川霧のふもとをこめてたちぬれば空にぞ秋の山はみえける」（和漢朗詠集・三四三）。傍記異文「いまはかぎりの」は、所載欄の後撰集・伊勢集の歌と同じ形である。伊勢集I・二二六の詞書は、「怨みて、いまは物いはじ、といふ人に」とあるが、後撰集の詞書では「秋霧の立ちたるつとめて、いとつらければ、このたびばかりなん言ふべきといひたりければ」と「秋霧」が明記されているため、「かぎり」に「霧」が掛けられていると考えられる。「いまはかぎりの」の方が、「秋」の掛詞「飽き」とも呼応して解しやすが、本文通りとして訳した。○たちぬらん 川霧が「立つ」と相手が「発つ」との掛詞。○おもひにあへぬ 「思ひ」と「日」を掛け、「霧」と対比させる。「秋霧のともにたちいでわかれなばはれぬ思ひに恋ひや渡らむ」（古今集・三八六）。「あへ」は、下二段動詞「敢ふ」の未然形。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。「あへぬ」で、堪えようとしても堪えることができない。○ものならなくに 「なくに」は、打消「ず」＋準体助詞「く」＋格助詞「に」。詠嘆を含んだ打消表現。「ふりぬとていたくなわびそ春雨のただにやむべき物ならなくに」（後撰集・八〇）。「あへぬものならなくに」で二重否定となる。所載欄の後撰集は同じく「あへぬ」だが、伊勢集では「あへむ」とあ

り、逆の意となる。

【所載】古今六帖「たのむる」二九六一／後撰集・恋四・八二四／伊勢集Ⅰ・二三六／伊勢集Ⅱ・二三六／伊勢集Ⅲ・二三六

【参考】作者名はないが、後撰集では伊勢の歌、伊勢集に入集する。

六四五 ある本 いかねればかしひなるらんあきぐりのまがふまただにもかなしきものを 如本

【異同】かしひなるらん—こしひなるらん（御）  
如本

【現代語訳】どういうわけで「かしひ」なのだろう。秋の霧にまぎれている間さえ、悲しいのに。

【語句】○いかなれば 「いかなり」の已然形＋接続助詞「ば」。理由を疑い、問い質す。どういうわけで。○かしひ 未詳。本文でも「如本」とあり、もとから未詳であったか。「香椎」ならば、「椎」、あるいは「椎の実」の異名となるが、歌意が通らない。所載欄の歌仙家集本伊勢集では、「いかなればみしよ成らむ」とあるが、いずれにしても解し難いため、本文通りに解す。○かなしきものを 「ものを」は詠嘆の終助詞。悲しいことだなあ。「松山につらきながらも波越さむことはさすがに悲しきものを」（後撰集・七五五）。秋霧を悲しいものとしたのは、「晴れずのみものぞかなしき秋ぎりは心のうちにたつにやあるらん」（後拾遺集・二九三・和泉式部）。

【所載】伊勢集Ⅲ・一三七

【参考】伊勢集には「思ふ人をいまはみじなどいひて」という詞書がある。

〔以上五首担当 中野〕

六四六 やまぢにはひとやまどはすかはぎりのたちこぬさきにいまわたりなん さい

【異同】ナシ

【現代語訳】山道では霧が人を道に迷わすであろうか。この河に霧が立たない前に今すぐ渡ってしまおう。

【語句】○やまぢにはひとやまどはす 所載欄の玉葉集・万代和歌集「……人やまどはん」、貫之集Ⅰ「山ぢに人も人やまどはん」とあり、「まどはむ」の方が意が通じるが、「まどはす」（他動詞・四段）で現代語訳した。○いまわたりなん 「いま」は、所載欄の歌集にすべて「いざ」とある。

【所載】玉葉集・秋下・七三二／万代集・一〇三五／貫之集Ⅰ・一五七



【参考】作者は、所載欄の文献から紀貫之。貫之集Ⅰに「延喜二年五月中宮の御屏風の和歌廿六首」とあるうちの一首だが、万代集の詞書「延長二年中宮御賀月次屏風に」より、延長二年中宮穩子の四十賀の屏風歌と知られる。所載欄の貫之集Ⅰには、直前の一五六番に「九月霧山をこめたり 散りぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立ち隠すらん」とあり、また、一五七番には詞書「河のわたりに舟ある所」とある。絵には山と川と霧とが描かれていたものか。

六四七 あきぶりのたちあるときはくらぶやまやみにこゆれどしるくぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】「下句が意味不通なので、傍記異文で現代語訳した」秋霧が立っている時は、暗部山は、暗いというその名のように、全体にぼんやりと見えることです。

【語句】○たちあるときは 「霧」「たちある」を含む例歌を新編国歌大観に見ると、他には、延文百首「雲霧のたちぬになるそれならでともはあらしの山ふかき宿」(三九五)のみ。傍記のように「たちぬる」の誤写であろうか。参考欄の後撰集に、「たちぬる」とある。○くらぶやま 暗部山。歌枕。京都市左京区にある鞍馬山のこと。歌には「暗し」の意を持たせて詠まれる。○やみにこゆれどしるくぞありける 暗いという名の暗部山を闇夜に越えてもはつきりしていた、の意であるが、上句との繋がりが悪い。参考欄に述べたように、「くらぶやま」まで含む上句と、この下句とがなんらかの手違いで合成されてしまったと推定する。傍記および参考欄の後撰集が本来のかたちとして現代語訳した。なお、「見えわたりける」は、貫之が好んで用いた表現と指摘されている。

【所載】ナシ

【参考】後撰集・秋中・二七一に、作者名紀貫之で、「秋霧のたちぬるときはくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」とある。また、古今集に同じ作者名で、「くらぶ山にてよめる」の詞書のもとに「梅花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける」(春上・三九)とある。貫之詠の「くらぶ山」を詠み込んだ二首が何らかの手違いで交錯し、当該歌のような歌形を生んだものであろう。

六四八 みることにあきにもあるかたつたひめもみちそむとやゝまはきるらん

【異同】ゝまはきるらん—山のてるらん(大)

【現代語訳】見るたびに山は秋であるなあ。竜田姫が紅葉を染めるというので、山は霧が立ち、紅葉を着ているのであろうか。

【語句】○あきにもあるか 所載欄の歌合は同じだが、後撰集には「秋にもなるかな」とある。○たつたひめ 奈良県竜田山に鎮座する竜田神社の祭神。竜田山が平城京の西にあたることから、五行説により秋を司る女神とされる。○ゝ(や)まはきるらん 「きる」は、「霧(き)る」に、「染(そ)む」の縁語「着る」を掛ける。霧は紅葉の色を増させるもの。大久保本の「山のてるらん」は、紫明抄帚木卷引用歌五五三に同じ。

【所載】後撰集・秋下・三七八／友則集・二七／是貞親王家歌合・四六  
【参考】後撰集に「よみ人知らず」とある。

六四九 かはぎりのふもとをこめてたちぬればそらにぞあきのやまはみえける

【異同】やまはみえける—山は見えけり(大)

【現代語訳】川霧が山の麓を隠すように立ちこめてきたので、空に浮かんで秋の山は見えることです。

【語句】○かはぎりのふもとをこめて 山裾近く川が流れている景。発生した川霧が麓にたなびいて。○そらにぞあきのやまはみえける 「秋の山」は紅葉の美しい山。麓を霧がぼかすように立ちこめて、山が宙に浮かんでいるように見えた。

【所載】拾遺集・秋・二〇二／金玉集・二八／和漢朗詠集・三四三／深養父集Ⅲ・二／寛平御時中宮歌合・一七  
／深窓秘抄・四七／奥儀抄・一七八

【参考】所載欄の文献に、作者を「深養父」とする。公任の秀歌撰集にもとられ、人口に膾炙した歌。山が空に浮かぶという構図は後の作歌にも影響を与えていて、女四宮歌合に女房日向の歌(一一)の判詞や、袋草子に堀河百首「霧」題の公実詠(八二)に言及がある。

六五〇 あきぶりのたゝずもあらなむあしひきの山のにしきをむらながらみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧が立たないでほしい。山の紅葉を錦の織物を広げたようなままで見ていたいから。

【語句】○あきぶりのたゞずもあらなむ 「たたず」は、「立たず」と「裁たず」（下句の「錦」の縁語）の掛詞。秋霧が立たないでほしい、の意に、（錦を）裁ち切らないでほしい、の意を掛けた。なお、所載欄の深養父集に「あきゝりは」とある。○山のにしきをむらながらみむ 秋山の紅葉を美しい絹織物「錦」に喩える。「むら（足）」は、絹織物などを数える単位、「錦」の縁語。「むらながら」は、反物（たんもの）を広げたようなままで、の意。当該歌と同じような見立ての歌に、「むらむらの錦とぞ見る佐保山の柞（ははそ）の黄葉（もみぢ）霧立たたぬ間は」（和漢朗詠集・三〇六・清正）がある。なお、所載欄の深養父集「やまのにしきは……」とある。

【所載】深養父集Ⅲ・三

【参考】作者名はないが、深養父集Ⅲに見える。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

六五 一 こゝろみにわがこひめやはあきぶりのをともせでふるものにざりける

【異同】ナシ

【現代語訳】まあ試しに、というようにいいかげんな気持ちで、私がこの恋をしているだろうか。（そうではない。本心からの恋なのに）あの人、まるで秋霧が音もせず降るように、音沙汰もなしに目を経るものだなあ。  
【語句】○こゝろみに 試しに。本気ではなく試験的に。○わがこひめやは わたしがこの恋をしているだろうか、いやそうではない。「やは」は反語。○あきぶりの 「ふる」を導き出すための措辞。○をともせでふる おともせでふる。「をと」は秋霧の音とおとずれの意の「音」とを言い重ねたもの。「ふる」は「降る」に「経る」を掛けた。秋霧が「音もせで降る」ことと相手の男が「音もせで経る」ことと同時に言っている。

【所載】夫木抄・五三五

【参考】一条摂政御集の一二五番に、「こゝろみにわれ恋ひめやは音もせでふる秋霧にぬるる袖かな」という類似した歌がある。

六五 二 うらちかくたつ秋ざりはもしほやくけぶりとのみぞみえわたりける

【異同】ナシ

【現代語訳】浦近く立つ秋霧は、まるで藻塩を焼く煙とばかりに見えわたることだなあ。

【語句】○うら 海や湖が湾曲して陸地に入りこんだところ。○もしほやく 製塩のために海水をかけた海藻を焼くこと。○けぶりとのみぞ まるで煙そつくり。「のみ」はそれだけに似ていることを強調した語。○みえわたり 空間的に遠方まで同じ状態が見えているさま。

【所載】後撰集・秋中・二七三／新撰万葉集・三二五／興風集Ⅰ・三七／興風集Ⅱ・五三／寛平御時后宮歌合・七九

六五三 あきぶりのはれぬあしたのおほぞらを見るがごとくもみえぬきみかな

【異同】みるかごとくも—みるかごとくに（大）

【現代語訳】秋霧の晴れぬ朝の大空は見えないものだが、その見えぬ大空を見るがごとくに、すこしも姿を見せないあなたですね。

【語句】○あした

夜の明けた朝のこと。○みるがごとくもみえぬきみかな 「みる」は視覚によつてものを見ること。「みえぬ」は相手が姿を見せぬこと、すなわち訪ねて来ないこと。初句から第四句の「みるが」までが

「ごとく」にかかり、初句から第四句までの全体が第五句にかかる。従つて上句から下句への意味のつづき方は、「あたかも見えぬ大空を見るがごとくに、見えない」ということ。「ごとく」という同一を表わす助動詞を使いながら、直前に「見る」を置き直後に「見えぬ」を置いているため、語句の表面では撞着した印象を与えるが、歌意として矛盾はない。

【所載】拾遺集・恋二・七四八／躬恒集Ⅳ・六八

六五四 秋の山のもみぢのにしきいくきともしらできりたつそらのはかなさ

【異同】秋の山の—秋の山（大）

【現代語訳】秋の山の錦のように美しい紅葉。それがどれだけ織られているかもわからぬほどに霧のたちこめた空の、おぼつかないことよ。

【語句】○もみぢのにしき 秋の山の紅葉の美しさを、織物の錦に見立てた。○いくき 「いく」は「幾」、数量について問う語。「き」は布などの長さを示す助数詞、「寸」「疋」「匹」等の字を宛てる。紅葉を錦に見立てたので、「いくき」と問うた。「いくきともえこそ見わかね秋山のもみぢの錦よそに立てれば」（後撰集・三八七）。

○きりたつ 「たつ」は、霧が生じる意の「立つ」に、「錦」「いくき」と縁語の「裁つ」をかける。○はかなさはつきりわからずに、心もとないさま。

【所載】忠見集Ⅰ・一〇／忠見集Ⅱ・一一、九四

六五五 あぶくまにきりたちわたりあけぬともせなをばやらじまてばすべなし

【異同】ナシ

【現代語訳】阿武隈川に霧が立ちわたり、夜が明けてしまっても、思う人をここから帰すまい。次のおとずれを待つことになれば、どうしようもなくつらいから。

【語句】○あぶくま 阿武隈川のこと。那須山地福島県側に源を発し、北流して宮城県に入り、仙台市の南方で太平洋に注ぐ一級河川。○たちわたり ずっと霧が立ちわたって。「わたり」は六五二番歌参照。○あけぬとも 夜がすっかりあけてしまっても。女の許を訪れた男は夜の明けきらぬうちに帰るものであった。○せな 女の側から、夫や兄に対して親しみをこめていう呼称。ここは恋人。「せ」には、「兄」「夫」「背」等を宛てる。「な」は、親しみを表わす接尾語。○まてばすべなし いま恋人を帰して次の訪れを待つことになれば、それはどうしようもなくつらい。

【所載】古今集・東歌・一〇八七／綺語抄・三三五

〔以上五首担当 山下〕

六五六 ことならばゝれずもあらなん秋ぎりのまぎれには<sup>みえぬ</sup>れ<sup>えぬ</sup>ぎみとおもはん

【異同】ゝれずもあらなん―晴すもあらん(大)

【現代語訳】おなじ会えないのならば、霧は晴れずにあつてほしいものだ。秋霧がたちこめて、それで見えない君だと思おう。

【語句】○ことならば おなじことなら。○ゝ(は) れずもあらなん 晴れないでくれないかなあ。「なん」は他にたいして願望む意。「も」は「はれずあらなん」を和らげた表現。○秋ぎりのまぎれ 秋霧がたちこめてよく見えないこと。○みえぬ 所載欄の歌も「みえぬ」とある。

【所載】在原元方集・五／大和物語・二八段

六五七 かはぎりのなかにきみますものならばはるゝまに／＼うれしからまし

【異同】ナシ

【現代語訳】川霧の立ちこめるなかに君がおいでになるものならば、霧が晴れるにつれてお姿が現れて嬉しいことだろうに。

【語句】○かはぎり 川に立つ霧。○ます いらつしやる。「あり」「をり」の尊敬語。○まに／＼ ……につれて。○うれしからまし 嬉しいことだろうに。

【所載】大和物語・二八段・三九

【参考】所載欄の大和物語では、戒仙法師の父が亡くなったのを偲んで戒仙の友が詠んだ歌で、初句「朝霧の」。六五六番歌はそれに対する戒仙の返歌となっている。

六五八 むばたまの<sup>よるきわたらぬイ</sup>よる／＼たえぬころもでのたかやのうへにたなびくまでに

【異同】ナシ

【現代語訳】日が暮れて夜霧が立つてきたことだ。あの高屋の上に棚引くほどに。

【語句】○むばたまの 枕詞。「ぬばたまの」とも。「黒」「夜」「髪」などにかかる。○よる／＼たえぬ 傍記異文によれば「よるきわたらぬ」である。所載欄の万葉集は「夜霧は立ちぬ」なので、「よるきりたちぬ」の誤写とみて解した。○ころもでの 枕詞。「た（手）」や、地名の「田上（たなかみ）」、「高屋（たかや）」などにかかる。○までに ……ほどに。動作、作用の程度をはっきりあらわす。

【所載】万葉集・一七一〇（旧一七〇六）黒玉 夜霧立 衣手 高屋於 霏霰麻天尔 ヌバタマノヨギリハタチ  
ヌコロモデノタカヤノウヘニタナビクマデニ むばたまのよぎりはたちぬころもでをたかやのうへにたなびくま  
でに

六五九 あきぐりのたちまふみねの山ぐちはかねてぞしるきうつろはんとて

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧がたちのぼり、漂う峰の麓のあたりは、もう既にはっきり見えているなあ、色づこうとしている気配が。

【語句】○たちまふ（霧が）立ちのぼりただよ。○山ぐち 山の入り口。麓の登り口。○かねてぞしるき もう既にはっきりしている。○うつろはんとて 色づこうとしているさまが。

【所載】ナシ

### つらゆき

六六〇 ちりぬべきやまのもみぢを秋ぎりのやすくもみえずたちかくすらん

【異同】ナシ

【現代語訳】今にも散ってしまう山の紅葉を、秋霧はどうしてたやすくも見えないように立ち隠すのだろう。

【語句】○ちりぬべき 今にも散ってしまうような。「ぬべき」は確実性の強い推量。○みえず 「みゆ」の未然形に打消しの「ず」がついたもので、見ることができない意。○たちかくすらん どうして立ち隠すのだろう。「らん」は原因、理由などを疑っている意を表す。「たち」は霧の縁語。

【所載】拾遺抄・秋・一二七／拾遺集・秋・二〇六／貫之集I・一五六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。所載欄歌集の詞書はいずれも「延喜御時中宮御屏風歌」とあるが、新日本古典文学大系『拾遺和歌集』や『貫之集全釈』によれば、実は「延長二年中宮藤原穩子屏風歌」が正しい。

〔以上五首担当 林〕

六六一 あきぶりにぬれにしそでのほさずしてひとりやきみがやまちこゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧で濡れてしまった袖を干しもしないで、たった一人であの方は山路を越えていることだろうか。

【語句】○ひとりやきみがやまちこゆらん 一人であの人は山路を越えているのであろうか。「玉かつま島熊山の夕暮れにひとりか君が山道（やまち）越ゆらむ」（万葉集・三三〇七（旧三一九三三）、「風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ」（古今集・九九四、伊勢物語・二三段、大和物語・一四九段）。

【所載】新古今集・羈旅・九〇二／万葉集・一六七〇（旧一六六六）朝霧尔 沾尔之衣 不干而 一哉君之 山道将越 アサギリニヌレニシコロモホサズシテヒトリカキミガヤマヂコユラム あさぎりにぬれにしころもほさずしてひとりかきみがやまぢこゆらむ／夫木抄・五三四七／和歌童蒙抄・七三／袋草紙・七二八

【参考】所載欄の万葉集も作者未詳だが、題詞には「岡本宮御宇天皇幸紀伊国時歌二首」とあり、日本書紀の記述に照らして斉明天皇の四（六五八）年から五年にかけての紀伊国行幸の際のものかとされている。

六六二 あすか川かはよどさらずたつきりのおもひすつべき君ならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】明日香川の川淀を離れず立つ霧が消えることがないように、思い切ることができないあなたではないのに。

【語句】○あすか川 明日香（飛鳥）川。奈良県高市郡の山中に発して飛鳥地方を北流し、大和川に注ぐ川。○おもひすつべき君ならなくに 所載欄の万葉集では、「おもひすつべきこひにあらなくに」。三句目までは下句を導く序。「片貝川の清き瀬に朝夕（あさよひ）ごとに立つ霧の思ひすぎめや」（万葉集・四〇二四（旧四〇〇〇））。【所載】続千載集・雑体・七一〇／新千載集・恋四・一五一七／万葉集・三二八（旧三二五） 明日香河 川余藤不去 立霧乃 念応過 孤悲尔不有国 アスカガハカハヨドサラズタツキリノオモヒスグベキコヒニアラナクニ あすかがはかはよどさらずたつきりのおもひすつべきこひにあらなくに／赤人集Ⅰ・三五三／赤人集Ⅱ・二三四／和歌童蒙抄・七一

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集によると、作者は山部宿弥赤人。

六六三 はるさればみくさのうへにをくしもものけつゝもわれがこひわたるかな

しも

【異同】ナシ

【現代語訳】春になると水草の上に置く霜が消える、そんな消え入るばかりの思いをしながらも、私は恋い続けているよ。

【語句】◎しも 霜。「置く」とも「降る」とも詠む。晩秋から冬にかけて地面や草葉を白く覆う寒々とした景



物で、春になると消えるということも詠まれた。○けつゝも 消つつも。「消」は、春になって霜が消える意と、「我」が恋の思いに消え入りそうになる意とを掛けて、三句目までは「消」を導く序。「秋付けば尾花が上に置く露の消ぬべくも我（わ）は思ほゆるかも」（万葉集・一五六八（旧一五六四））。

【所載】続後撰集・恋四・九〇六／万葉集・一九一二（旧一九〇八）春去者 水草之上尔 置霜乃 消乍毛我者 恋度鴨 ハルサレバミクサノウヘニオクシモノケツツモワレハコヒワタルカモ はるさればみくさのうへにおくしものけにつつもあればこひわたるかも／夫木抄・六三一／人麿集Ⅲ・二二四／赤人集Ⅰ・一八九／赤人集Ⅱ・七〇／赤人集Ⅲ・七八／和歌一字抄・一〇七五／綺語抄・七三／袋草紙・七三二

六六四 みづくきのをかのやかたにいもはあれどねてのあしたのしものふりはも

【異同】 いもはあれと―いもとあれと（大） ねてのあしたの―<sup>さけイ</sup>ねての朝けの（大）

【現代語訳】岡の仮屋に彼女は（私と一緒に） いるけれど、共寝をした翌朝の霜の降りようといったら、まあ。（なんとひどいことか）

【語句】○みづくきの 水茎の。「岡」にかかる枕詞。「秋風の日に異（け）に吹けば水茎の岡の木の葉も色付きにけり」（万葉集・二一九七（旧二一九三））。○をか 岡。普通名詞と解する説が多いが、福岡県遠賀郡芦屋町遠賀川河口の地名とする説もある（奥村恒哉「古今集「岡のやかた」考」『国語国文』一九七九年五月）。また、近江の地名とも言われる（吉田東伍『大日本地名辞書』）。○いもはあれど 恋人はいるけれども。所載欄の古今集では、「いもは」の部分が「いもと」となっているので、「妹と我と」と解せる。しかし当該歌の本文では「妹は」なので、「あれと」はラ変動詞「あり」の已然形に逆接の確定条件を表す接続助詞「ど」が付いたものとして解釈した。「妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにそありける」（万葉集・三六一三（旧三五九一））等、「……はあれど」「……はあれども」の例は多い。○ふりはも 「ふり」は四段動詞「降る」の連用形の体言用法、「はも」は強い詠嘆の表現。

【所載】古今集・大歌所御歌・一〇七二

六六五 あさな／＼みぎはの草にをくしものけつゝもわれはこひわたるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】毎朝毎朝、水際の草に置く霜が、置いては消える、そのように消え入るばかりの思いをしながらも、私は恋い続けているよ。

【語句】○あさな／＼ あさなあさな。毎朝毎朝。朝ごとに。「野辺ちかくいへぬしればうぐひすのなくなる声はあさなあさなく」(古今集・一六)。○をくしもの おくしもの。置く霜の。○けつゝも 消つつも。「消つつ」は、水際の草に置いた霜が朝になると消えるということが毎日繰り返される意と、「われ」が恋の思いに消え入りそうになりつつげながらという意を掛け、三句目までは「消つつ」を導く序。六六三番歌参照。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 長戸〕

六六六 しもがれのゝべとわが身をおもひせばもえてもはるをまたまし物を

にあはイ

【異同】ナシ

【現代語訳】もし、霜枯れの野辺であると我が身を思いなぞらえることができたなら、野焼きで燃えても再び春の到来を待つように、私も恋の思いに燃えつきてもめぐり会える春を待つのにあ。

【語句】○しもがれの 万葉集に既に見られる言い方。「霜枯れの冬のやなぎは見る人のかづらにすべく萌えにけるかも」(万葉集・一八五〇(旧一八四六))、「霜枯れの草葉をうしと思へばや冬野の野辺は人のかるらん」(貫之集・二〇)。所載欄の古今集や伊勢集では「冬枯れの」とある。○思ひせば 反実仮想。実際にはこのように思ひなすこともできず、春を心待ちにする心境にはない。○もえても 草木が萌えてもの意と、恋の「思ひ(火)」に燃えてもの意を掛ける。

【所載】古今六帖「冬の野」一一五四／古今集・恋五・七九一／伊勢集Ⅰ・二九一／伊勢集Ⅱ・二九〇／伊勢集Ⅲ・二九二

【参考】古今集の詞書には「物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに野火のもえけるを見てよめる」とある。また古今集では初句「冬枯れの」に關しての異文はない。ここで「霜枯れの」とあるのは「霜」という題に影響されたか。あるいは、古今六帖「冬の野」での重出歌も「霜枯れの」とすることから、当該本文での伝誦もあったか。

六六七 身をわけてしもやをくらんあだ人のことはさへもかれわたるかなイごとにかれもてくかな

【異同】ナシ

【現代語訳】他の人と区別して私の上に霜が降りているのだろうか。草葉が霜枯れるように、移り気なあの人の言葉の一言一言に二人の心が離れてくることだよ。

【語句】○身をわけて 区別して。ある人の上には霜を置かないで、よりによって我が身の上に置いての意を含む。「秋風は身を分けてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ」(古今集・七八七)。○ことのはごとに 言葉に葉に見立てて、そのひとつひとつに。「あはれてふことのはごとに置く露は昔を恋ふる涙なりけり」(古今集・九四〇)。○かれもてく 霜が降りることで草葉が枯れるように、相手の一言一言によって思いが離れてくる。「枯れ」と「離れ」を掛ける。「もてく」は「もて来」。所載欄の後撰集では「かれもゆくかな」とあり、わかりやすい。

【所載】後撰集・冬・四六二

六六八 さゝのはにをくしもよりもひとりぬるわがころもでぞさえまさりける

【異同】ナシ

【現代語訳】笹の葉に降りる霜よりも、独り寝をする私の袖の方が(涙で凍って)いつそう冷えまさることだよ。

【語句】○さゝのは 笹の葉に霜が降りる景は万葉集にも見える。「笹が葉のさやく霜夜にななへかる衣にませる子ろが肌はも」(万葉集・四四五五(旧四四三))。○さえまさり 霜に加えて涙が凍ることで一段と冷え冷えとする。「君恋ふと霜とわが身のなりぬれば袖のしづくぞさえまさりける」(新撰万葉集・二三一)。

【所載】古今集・恋二・五六三／新撰万葉集・一五九／友則集・四二／寛平御時后宮歌合・一二一

六六九 しもぐもりするにやあらん久かたのよわたるつきのみえずとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】霜が降りるというので曇っているのだろうか。夜空を渡り行く月が見えないと思うと。

【語句】○しもぐもり 他に用例なし。万葉集の注釈では、「霜がおりるために空が曇ること(気象上、そのようなことはないが、当時の人々はそう考えたらしい)」(日本古典文学大系『萬葉集』)、「降霜を見るころの初冬の曇

天という意か」(中西進『万葉集全訳注』講談社文庫)、「寒い夜空が曇って霜が降るという考えに基づく表現か」(伊藤博『万葉集釋注』)、「霜は地に置くものではなく、空に充滿する冷気を含めて言う。その白い霜氣によつて霞むことを『霜靄』と言う。『玉墀の皎皎を照らし、霜靄の濛濛を含む』(南朝梁・沈約「八詠、望秋月・芸文類聚・月」)は、秋月が霜靄に曇るさまを描く。『霜曇り』の語は、この漢語『霜靄』に当たる」(新日本古典文学大系『萬葉集』などと言う。○よわたるつき 万葉集に多く見られる言い方。「あかねさす日は照らせれどむばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」(万葉集・一六九)、「天の原雲なき宵にぬばたまの夜渡る月の入らまく惜しも」(万葉集・一七一六(旧一七一二))、「ぬばたまの夜渡る月の清けくはよく見てましを君が姿を」(万葉集・三〇二一(旧三〇〇七))など。

【所載】万葉集・一〇八七(旧一〇八三) 霜雲入 為登尔可将有 久堅之 夜度月乃 不見念者 シモグモリス トニカアラムヒサカタノヨワタルツキノミエヌオモヘバ しもぐもりすとかあるらむひさかたのよわたるつきのみえなくおもへば／和歌一字抄・一〇七七／袋草紙・七三四

六七〇 なよ竹のよながきがうへにはつしものをきゐてものをおもふころかな  
たゞふさ

【異同】よなかきがうへに―よなかきかうへに(御・大)

【現代語訳】夜の長い間、ずっと起きたまま物思いをして過ごしている今日このごろだ。

【語句】○なよたけの 「よ」に掛かる枕詞。「なびく方ありけるものをなよ竹の世にへぬものと思ひけるかな」(後撰集・九〇六)、「なよ竹のよながき秋の露をおきときはに花の色も見えなん」(元輔集・一四八)。○よながきがうへに 「よ」は、竹の「節間(よ)」と「夜」を掛ける。底本「が」にミセケチ記号を施し「イ」と記す。所載欄の古今集では「よながきうへに」とする。○はつしもの 「おき」を導く措辞。○おきゐて 霜が「置き」と自身が「起き」たままでいることを掛ける。

【所載】古今集・雑下・九九三／新撰和歌・二四一

【参考】作者名「たゞふさ」は所載欄の古今集に一致する。古今集の詞書によると、遣唐使に任命されたことへの悩みを歌ったものという。

〔以上五首担当 青木〕

六七一 きみこずはねやえもいらじこむらさきわがもとゆひにしもはをくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが来ないなら、私は寝室へも入りますまい。たとえこの濃い紫色の元結いに霜が置いたとしても。

【語句】○ねやえもいらじ 「闇(寝室)へも入らじ」で、寝室へも入らないだろう、入りますまい、の意。○こむらさき 濃い紫。「こ」は接頭語で、単に「紫」の意ともいう。○もとゆひ 髻(もとどり 髪を束ねたところ)を結ぶ紐。

【所載】古今六帖「もとゆひ」三一七七／古今集・恋四・六九三／奥儀抄・一三二

【参考】万葉集・二六九六(旧二六八八)に「まちなかねてうちにはいらじしろたへのわがころもでにつゆはおきぬとも」(古今六帖・五六九にも)という類歌がある。

六七二 やまかげにあれたるしものわれなれやおもふころのとけでのみ<sup>みゆらんイ</sup>ふる

【異同】ナシ

【現代語訳】山かげで荒れている霜が、私なのかしら。あなたを思う心がいつまでもとけずに過ぎすばかりですよ。

【語句】○やまかげにあれたるしものわれなれや 山かげの霜はいつまでもとけないことを前提にしているのであるが、「あれたる」は不審。「われなれや」の「なれや」は、そこで言い切りの形。下句で謎解きをする。「雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ」(古今集・七五三)。○とけでのみふる 「とけで」は、霜がとけない意と、思う心がとけずに晴れ晴れとしない意とを掛ける。「ふる」は「経(ふ)」の連体形。連体形止めで詠嘆の気持ちを表す。

【所載】ナシ

六七三 さをしかのつまゝつやまのをかべなるわさ田はからじしもはをくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】牡鹿が妻を待っている岡のほとりの早稲の田は、当分刈るまいよ。たとえ霜は置いても。

【語句】○さをしか 「さ」は接頭語。牡鹿。○わさ田はからじ 「わさ田」は、早稲を作っている田。早稲田は刈るまい。稲穂を鹿が食べるものとして詠んでいるのであろう。妻を慕う鹿への思いやり。○しもはをくともたとえ霜が置き、収穫に障りが生じても、の意。

【所載】新古今集・秋下・四五九／万葉集・二二二四（旧二二二〇）左小牡鹿之 妻喚山之 岳辺在 早田者不  
苅 霜者雖零 サヲシカノツマヨブヤマノワカヘナルワサダハカラズシモハフルトモ さをしかのつまよぶやま  
のをかへにあるわさだはからじしもはふるとも／人麿集Ⅰ・一三三／人麿集Ⅱ・一六八／家持集Ⅰ・一四〇／家  
持集Ⅱ・一三〇／秀歌大体・七三／定家十体・一三／近代秀歌・四六／詠歌大概・四五／桐火桶・一三二

六七四 うきてぬるかものうはげにおくしものこゝろとけなきよをもふるかな

【異同】よをもふるかな―世にもふる哉（大）

【現代語訳】つらい思いで、水の上に浮き寝をしている鴨の上毛に置く霜は、夜どおしとけない、私の心も、くつろぐことのない世を過ごしていることです。

【語句】○うきてぬる 「浮きて」に「憂」を掛ける。○こゝろとけなき 「心とけなし」は、他に用例を見ない。「とけなし」については、「これ聞いてぞ、とけなきものをばあへなしと言ひける」（竹取物語）があり、「とけなき」と読んで、「利気なし」あるいは「遂げなし」と考えられているが、当該歌の場合は、「解けなし」の解もあり得るか。また、霜がとけることがない意に、心がとけ、安まることがない意を掛けるか。いずれにしても上三句は「こゝろとけなき」の序。○よをもふるかな 「よ」に「夜」と「世」を掛ける。

【所載】ナシ

【参考】興風集Ⅰ・四八ならびに興風集Ⅱ・五〇に、上三句のまったく同じ歌がある。下句はいずれも「きえてものおもふころにもあるかな」とあり、この方が理解しやすい。

六七五 このはみなからくれなゐにくゝるとしてしものあとにもをきまさるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉は皆、真っ赤に括り染めにしようとして、真っ白な霜の跡に置き、一層際だたせていること

だ。

【語句】○からくれなゐにくゝるとて 「からくれなゐ」は、韓より渡来した紅の意で、深紅。「くゝる」は、ここでは括り染めにすること。「ちはやぶる神代もきかず竜田河からくれなゐに水くくるとは」(古今集・二九四)。  
○をきまさるかな お(置) きまさるかな。

【所載】 赤人集Ⅰ・七三／千里集・五〇

【参考】 赤人集や千里集では四句を「しものさらにも」とする。

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

六七六 おもひ草<sup>にはイ</sup>きゆるものとはしりながらけさしもをきてな<sup>しにイ</sup>にきつらん  
をきかぜ

【異同】 ナシ

【現代語訳】陽が出ると霜が消えるように、あなたへの思いで自分が死んでしまいそうになるとわかっていのに、霜の置いた今朝、どうして私も起きて帰ってきたのでしょうか。

【語句】○おもひ草 (首を垂れて) 物思いするように見える草。キセルソウのことという。ツユクサ等の別名とも。「物思いの種」の意をかける。また「ひ」に「陽」をかける。所載欄の他文献では「おもひには」。○きゆる物とは 「きゆる」に「霜が」消える」意と「命がなくなる」意をかける。所載欄の他文献では「きゆるものぞと」。○けさしもをきて 「しも」は強意。「霜」をかける。「をきて」は「起きて」と「置きて」をかける。「陽」消ゆる「置き」は「霜」の縁語。「けさはしもおきけむ方もしらざりつ思ひいづるぞきえてかなしき」(古今集・六四三・大江千里)と同じ趣向。所載欄の興風集では下句「けさしもなにゝおきてきつらん」。

【所載】 後撰集・雑二・一一三四／興風集Ⅰ・五九・七四／興風集Ⅱ・二四

【参考】 後撰集の詞書によると、集まりの翌朝に詠まれた歌で、名残惜しさを恋の後朝のように詠みなしたものが。作者名「をきかぜ」は所載欄の文献に一致する。

六七七 まこもかるほりえにうきてぬるかものこよひのしもにいかにわぶらむ

【異同】 ぬるかものゝあるかもの(御・大)

【現代語訳】堀で浮いたままで寝る鴨が、今宵の冷たい霜のためにどんなにつらく思っているでしようか。

【語句】○まこもかる 「堀江」の枕詞。「まこも」は「こも」（浅い水中に群生するイネ科の草の一種）の歌語。

○ほりえ 舟などを通すために人工的に掘って作った川。運河。特に、難波堀江をさすことが多い。○ぬるかもの 寝る鴨の。鴨が霜とともに詠まれる例には「あしべゆくかものはがひにしもふりてさむきゆふばはやまとしおもほゆ」（万葉集・六四）などがある。

【所載】後撰集・冬・四八三／和歌童蒙抄・七四五

六七八 あまくものよそにかりがねきしよりはだれしもふりさむしこのよは  
をとくろ

【異同】ナシ

【現代語訳】はるか遠く雲のかなたに雁の声を聞いてから、薄霜が降りて、とりわけ寒いな、今夜は。

【語句】○あまくものよそ はるか遠くの雲のかなたに。○はだれしも うつすらとまだらに置いた霜。「はだれ」は雪がはらはらと散って積もるさまを表す。「風さやぐさ夜のねざめのさびしきはだれしもふりつるさばになく」（玉葉集・二〇三七）。

【所載】新拾遺集・秋下・五二五／万葉集・二一三六（旧二二三）天雲之 外鴈鳴 從聞之 薄垂霜零 寒此夜者 一云、弥益々 戀許曾増焉 アマクモノヨソニカリガネキシヨリハダレシモフリサムシコノヨハ一云、イヤマスマスニコヒコソマサレ あまくものよそにかりがねきしよりはだれしもふりさむしこのよは一云、いやますますにこひこそまされ／人麿集Ⅰ・一〇九／人麿集Ⅱ・一六七／家持集Ⅰ・二〇一／家持集Ⅱ・二四九／和歌童蒙抄・八二

【参考】作者名「をとくろ」とあるが、所載欄の新拾遺集では作者名は人丸、万葉集・和歌童蒙抄には作者表記がない。なお、古今六帖三三四番の作者名には「忌部首黒麿或本をとくろ」とある。黒麿は万葉集歌人。

六七九 さゝのはにをきゐるしものさむければしみはしつとも色にいでめや  
つくイ

【異同】ナシ

【現代語訳】ささの葉に置いてとどまっている霜が、（夜が）寒いので凍りついてしまっても、その葉が色付くこ



とがあるでしょうが、ありはしません。それと同じように、私が恋しく思う気持ちは、ささの葉に冷たい霜が置く寒い夜故に心に深く感じられても、表に出ずでしょうが、出しはしませんよ。

【語句】○をきあるしものさむければ 古今集をはじめ所載欄の他文献では「おくはつしもの夜をさむみ」とするものが多い。○しみはしつとも 「霜がささの葉に凍みる」意と「恋心が染みる」意をかける。所載欄の他文献では「しみはつくとも」。○色にいでめや 反語表現。「ささの葉の色がかわらない」意と「恋心を表面に出さない」意をかける。

【所載】古今六帖「人しれぬ」二六六二／古今集・恋三・六六三／躬恒集Ⅰ・二二七、三七二／躬恒集Ⅱ・一六八／躬恒集Ⅲ・三九六／躬恒集Ⅴ・一〇九

六八〇 ふけしよのゆきあひのしもにうてしかどなど身にさむくあたらざりけん

【異同】ナシ

【現代語訳】夜更けに折からの霜に打たれましたが、その霜はどうして私の身には寒くあたらなかったのでしょうか。

【語句】○ゆきあひのしも 折からの霜。「行き合ひ」はちようど行き合わせること。○うてしかど 打たれたけれども。「うて」は下二段活用の「うつ」（打たれる意）の連用形。○あたらざりけん 所載欄の伊勢集Ⅱでは「あたらざるらん」。

【所載】夫木抄・六五六一／伊勢集Ⅰ・二七六／伊勢集Ⅱ・二七七／伊勢集Ⅲ・二七九

【参考】伊勢集の詞書によれば、ある人の家を秋頃訪ねて行き、夜更けの帰り道に霜に打たれた翌朝、その人のもとへ贈った歌である。

〔以上五首担当 三浦〕

六八一 ゆき  
やまのかひそこともみえずをとゝひもきのふもけふもゆきのふれゝば

【異同】ナシ

【現代語訳】山あいはそのこともはっきりも見えません。一昨日も昨日も今日も雪が降っているのだ。

【語句】◎ゆき 雪の自然現象を見たまま詠むほか、雪を「花」や「白髪」に見立てたり、「溶く」「消ゆ」の縁語と共に用いて、心の比喩として詠まれる。○やまのかひ 山すそと山すそとの交わりあっている所。山のさかい。「山のかひたなびきわたるしらくもは遠き桜の見ゆるなりけり」（貫之集・三二）。○ゆきのふれゝば 「（れ）」は助動詞「り」の已然形。雪の降っている状態がひき続き継続している意を表す。

【所載】万葉集・三九四六（旧三九二四）山乃可比 曾許登母見延受 乎登都日毛 昨日毛今日毛 由吉能布礼礼波 ヤマノカヒソコトモミエズトツヒモキノフモケフモユキノフレレバ やまのかひそこともみえずをとつひもきのふもけふもゆきのふれれば／夫木抄・七二六三／綺語抄・一五三

六八二 あしひきのやまちもしらずしらがしの枝にもはにもゆきのふれゝば

【異同】ナシ

【現代語訳】山道もどこだかわかりません。白樫の枝にも葉にも、雪が降り積もっているのです。

【語句】○あしひきの 枕詞。山、峰（を）、尾上、岩などにかかる。○しらがし ブナ科の常緑高木。少し厚手の葉で裏側は灰白色。雪の白に白樫の白が紛れた面白さ。

【所載】拾遺抄・冬・一五〇／拾遺集・冬・二五二／万葉集・二三一九（旧二三一五）足引 山道不知 白牝阿枝母等乎乎尔 雪落者 アシヒキノヤマヂモシラズシラカシノエダモトラヲニユキノフレレバ あしひきのやまちもしらずしらかしのえだもとををにゆきのふれれば／新撰朗詠集・七四六／人麿集Ⅰ／人麿集Ⅱ・四二一／人麿集Ⅲ・一九九／家持集Ⅰ・二七三／家持集Ⅱ・二七九／綺語抄・四五三、七〇二／和歌童蒙抄・一六四／和歌色葉・一二一／桐火桶・二二五

六八三 ふりしけばかずなくたまるしら雪のなにをうしかしたにきゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】しきりに降ると数え切れないほど積もる白雪は、いったい何をっらいと思つてひそかに溶けてなくなるのだろう。

【語句】○ふりしけば しきりに降ると。○かずなく 限りなく。○なにをうしか なにをっらいと思つて。○したにきゆ 隠れて見えないところで消える。

【所載】ナシ

【参考】当該歌は雪の性状を擬人的に詠んだとも、恋の比喻とも考えられる。

六八四 まつのうへにふりおほふゆきはあしたづのちよのゆかりにきゐるとぞみる<sup>おもふイ</sup>

【異同】ふりおほふ<sup>をけるイ</sup>—おほふ（御） きゐるとぞみる—きぬるとぞみる<sup>おもふイ</sup>（大）

【現代語訳】松の上に降り覆っている雪は、千年の寿命をもつめたい鶴が常葉の縁で来て座していると見ることだ。

【語句】○まつのうへにふりおほふ 松を隠すように降りかぶさる。松の上の雪を鶴にたとえて賀意をあらわす。「我が宿の松のこずゑにすむ鶴は千代の雪かと思ふべらなり」（貫之集Ⅰ・五一）。○あしたづのちよのゆかりに千年の寿命をもつという鶴が、松の常葉の縁で。○きゐる 来て座っている。

【所載】古今六帖「いはひ」二二七二／貫之集Ⅰ・二七八

【参考】所載欄の貫之集について、『新編国歌大観』（底本 陽明文庫蔵本）解題では、「底本において隣りあつた二首が合体して一首となつてしまつた歌を、西本願寺本や御所本によつてそれぞれもとの二首に分離した」としている。『新編私家集大成』貫之集Ⅰ・二七八では「松が枝にふりしく雪をあしたづのもと色かへぬ松にざりける」となっている。

六八五 ふるゆきは枝にしばしもたまらなむはなもゝみぢもたえてなきまは

【異同】ナシ

【現代語訳】降る雪は枝にしばらくでもつもつていてほしい。花も紅葉も全く無いこの季節のあいだは。

【語句】○たまらなん 積もつていてほしい。○たえて 下に打消しの語をともなつて、全く。すっかり。

【所載】新撰和歌・一四六／寛平御時后宮歌合・一三六

〔以上五首担当 橋本・林〕

六八六 よをさむきあさとをあけていでみればにはもはだらにゆきはふりつゝ<sup>みイ</sup>

【異同】にはもはたらに―にはもまたらに（大）

【現代語訳】夜が寒いので、朝、戸を開けて出てみると、庭に薄くまだらに雪が降っていることだ。

【語句】○よをさむき 文法的な面からも傍記異文を採用して「夜を寒み」とするべきであろう。夜が寒いので。

○はたらに 綺語抄に「はたら まだらといふ事也」とある。

【所載】続後撰集・冬・五〇五／万葉集・二三二二（旧二三二八）夜乎寒三 朝戸乎開 出見者 庭毛薄太良尔  
三雪落有 ヨヲサムミアサトヲアケテイデミレバニハモハダラニミユキフリタリ よをさむみあさとをひらき  
いでみればにはもはたらにみゆきふりたり／人麿集Ⅰ・二二〇／人麿集Ⅲ・一九三／家持集Ⅰ・二七二／家持集  
Ⅱ・二七八

六八七 ときしらぬやまはふじのねいつとてかかのこまだらにゆきのふるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】時節をわきまえない山はこの富士山だ。今をいつだというので、鹿の子斑に雪が降っているのだらうか。

【語句】○ときしらぬ 時節をわきまえないこと。夏のさなかに雪をいただく山に対する驚き。○いつとてか  
いつというので。○かのこまだら 鹿の斑点のような模様。

【所載】新古今集・雑中・一六一六／業平集Ⅰ・六六／今昔物語集・八四／伊勢物語・九段・一二

六八八 おほぞらにふるしらゆきのつちにをちばけぬべきこひも我はするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】大空に降る白雪が土に落ちたら消えてしまいうに違いない。そんな消えてしまうような恋を私はしていることだ。

【語句】○つちにをちばけぬべき 「をちば」は「お（落）ちば」。土に落ちたら消えてしまいうに違いない。「おくやまのまきのこのはふる雪のふりはますともつちにおちめや」（家持集・一五四）。○こひも我はするかな  
恋を私はしていることだ。「たきつせにねざしとどめぬうき草のうきたるこひも我はするかな」（古今集・五九二・忠岑）など、不安定な恋をしている自分を表す。

【所載】ナシ

六八九 まきのうへにふりをける雪のしば／＼もおもほゆるかもさよとわがせゆイ

【異同】ナシ

【現代語訳】真木の上に降り置く雪のようにしきりと、慕わしく思っています。夜においで下さい、あなた。

【語句】○ふりをける ふりおける。○しば／＼も しきりに。意味としては、「しくしくに」に同じ。「まきのうへにふりおける雪の」は「しば／＼も」を導く序。○さよと 所載欄の万葉集では「さよ問ふ（へ）」。底本の通りでは解しがたく、傍記でも訳しがたいので、万葉集によって解す。

【所載】万葉集・一六六三（旧一六五九）真木乃於尔 零置有雪乃 敷布毛 所念可聞 佐夜問吾背 マキノウヘニフリオケルユキノシクシクモオモホユルカモサヨトフワガセ まきのうへにふりおけるゆきのしくしくもおもほゆるかもさよとわがせ／和歌童蒙抄・九一

六九〇 あまぎりてゆきもふらなむいちしろくイいはしろはみちしばにイこのいはえはにふらまくも見む

【異同】いはしろは——岩代の（御・大）

【現代語訳】空が曇って雪も降ってほしい。はつきりとこの道芝に降るのを見よう。

【語句】○あまぎりて 空が曇ること。○いはしろは 所載欄の万葉集本文「灼然」は難訓であったか。なお、古今六帖・五六五番歌の「いちしろくしも」は本文「市白霜」。一応、傍書異文の「いちしろく」で読む。「いちしろく」は、はつきりする、はつきりと見える意。○いはえはに このままでは解せないの、ここも傍書異文「みちしばに」で解す。「みちしば」は道芝、道ばたに生えている芝草。「葉ずゑこそ秋をもしらめねをふかみそれみちしばのいつか忘れん」（宇津保物語・九）。○ふらまくも 「まく」は……だろうこと、の意。推量の助動詞「む」の未然形「ま」に、準体助詞「く」のついたもの。

【所載】万葉集・一六四七（旧一六四三）天霧之 雪毛零奴可 灼然 此五柴尔 零卷乎将見 アマガラシユキモフラスカイチシロクコノイツシバニフラマクラミム あまぎらしゆきもふらぬかいちしろくこのいつしばにふらまくをみむ

〔以上五首担当 杉本〕

六九一 おほうちのまそでの<sup>まかみのイ</sup>はらにふるゆきはいたくなふりそい<sup>いへもあらイ</sup>もしあはなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】大内のまそでの原の降る雪は激しく降らないでくれ、(この野で逢う約束をした)あの子に逢えないじゃないか。

【語句】○おほうちのまそでのはら 所在不明。後代の例歌に「なきてくるかりのなみだかはなすきまそでのはらにおけるしら露」(夫木抄・九九〇・正三位重氏卿)。所載欄の万葉集には「おほくちのまかみのはら」。傍書異文「まかみのはら」は、奈良県高市郡明日香村。飛鳥寺南方一帯の地。「明日香乃 真神乃原」と万葉集・一九九、人麿の高市皇子挽歌にある。また「みもの 神名火山ゆ との曇り 雨は降りきぬ 雨霧らひ 風さへ吹きぬ 大口の 真神の原ゆ 偲ひつつ 帰りにし人 家に到りにきや」(万葉集・三二八二(旧三二六八))。

【所載】万葉集・一六四〇(旧一六三六) 大口能 真神之原尔 零雪者 甚莫零 家母不有国 オホクチノマカミノハラニフルユキハイタクナフリソイヘモアラナクニ おほくちのまかみのはらにふるゆきはいたくなふりそいへもあらなくに

六九二 きえつゝも猶ふるものは人こふる我たましひとゆきとなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】消えては、やはりフルもの―それは命絶えそうになりながら生きている恋に苦しむ私の魂と雪とであつたよ。

【語句】○きえつゝも猶ふるもの 「きえ」は(雪が)消滅する意味と、人間が死にそうになる意味とをかける。「フル」は「降る」に「経る(月日を過ぐす)」をかける。「猶」(なほ)は「そうはいってもやはり」の意。○たましひ たましひ。靈魂。古代人は肉体を「カラ(容器)」と言い、そこに「靈魂」が入ると考えた。恋する場合や懊悩によつて魂はしばしばカラを離れる。「恋しさにわびてたましひ迷ひなばむなしきからのなにやのこらむ」(古今集・五七一)、「あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心地する(古今集・九九二)など。

【所載】ナシ

人丸

六九三 あはぬよのふるしら雪とつもりなばわれさへともにけぬべきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】お逢い出来ない夜が、降る白雪のつもる様に重なり積もるなら、（雪の消えるように）私まで（雪と）ともに消えてしまいたいそうなのに。

【語句】○ふるしら雪と 「つもりなば」に続く。逢えない夜が「つもったなら」というのが主意である。下の「けぬべき」は「死んでしまいたいそう」の意の「消ぬ」と（雪の）消えてしまいたいそう」の意味をかける。

【所載】古今集・恋三・六二一／人麿集Ⅰ・一七九／人麿集Ⅱ・三二三／人麿集Ⅲ・四六六／和歌初学抄・一〇／万葉集時代難事・三一

【参考】作者名「人丸」は、所載欄の古今集の歌の左注「この歌はある人のいはく、柿本人麿が歌なり」とあるのに一致する。

六九四 しらやまにふるしらゆきのこぞのうへにことしもつもるこひもするか

【異同】ナシ

【現代語訳】白山に降る白雪が去年の消えずに残るその上に（さらに）今年も降り積もる、そのように去年より今年もいつそう募る恋を私はしていることだ。

【語句】○しらやま 越の白山。石川県・岐阜県にある白山（はくさん）。雪深い山として屏風絵に描かれた。○こぞのうへにことしもつもる この語句を用いた後代の歌人真観の歌がある。「冬かけて花さく梅はこぞのうへにことしもつもる雪かとぞみる」（百首歌合 建長八年）。

【所載】ナシ

六九五 そらにしる人はあらじなしらゆきのきえてものおもふわがこゝろとは

【異同】わかこゝろとは―わかこゝろかな（大）

【現代語訳】それとなく知ってくれる人はいないだろうな、消えそうな思いで恋に苦しむ、わたしの心だとは。

【語句】○そらにしろ それという証拠もないのだが察知する、の意。「そら」に大空の「そら」をかける。○しらゆきの 「きえてものおもふ」を導く序。「そら」「消ゆ」は白雪の縁語。○きえてものおもふ 死にそうに恋しく思う。「かきくらしふるしらゆきのした消えにきえてものおもふころにもあるかな」(古今集・五六六)、「冬の池の鴨のうはげに置く霜のきえてもの思ふころにもあるかな」(後撰集・四六〇)。

【所載】新拾遺集・恋一・九二一

〔以上五首担当 平野〕

六九六 しものうへにふるはつゆきのあさごほりとけずもみゆるきみがころろか

【異同】ナシ

【現代語訳】霜の上に降る初雪が、朝には薄氷となり、それがなかなか溶けないように、一向にうちとけぬように見えるあなたのお心であるよ。(残念なことだ。)

【語句】○あさごほり 初冬、初春の朝、薄く張る氷。○ころろか 「か」は終助詞。詠嘆。「も……か」の形をとることが多い。第三句までが序詞。霜、雪、氷と冬の冷たい天然現象を畳み掛けて、第四句の「とけず」を導き出す。○とけずもみゆるきみがころろか とけないように見えるあなたのお心ですよ。「とけ」は「氷が」溶ける」と「うちとける」意を掛ける。所載欄の拾遺抄・拾遺集では「とけずも物をおもふころかな」。寛平御時中宮歌合では「とけむころこそひさしかりけれ」、左兵衛佐定文歌合では「とけむほどこそひさしかりけれ」。

【所載】拾遺抄・冬・一四六／拾遺集・冬・二二九／寛平御時中宮歌合・二〇／左兵衛佐定文歌合・解一

六九七 しらゆきのふりしくときはあし引の山したかぜに花ぞちりける

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪が降りしきる時は、山おろしの風に花が散るのであったよ。

【語句】○ふりしく 盛んに降る。降りしきる。「頻く」は、盛んにある、度重なる意。一説に、降り敷く、いちめんに地を蔽う意とも。○あし引の 枕詞。山、峰(を) などにかかる。また、山そのものを指して、岩根などにかかることもある。所載欄の他文献は全て「みよしのの」。吉野は桜の名所。○山したかぜ 山より麓に吹きおろす風。○花ぞちりける 霏々と降る雪を、落花の風に舞う様にたとえた。雪を花に、の見立て。「ける」



は詠嘆。

【所載】古今集・賀・三六三／拾遺集・冬・二五三／貫之集Ⅰ・二／元輔集Ⅰ・二二六

六九八 よるならばはなとや見ましわがやどのにはしろたえにふれるしら雪

【異同】ナシ

【現代語訳】夜ならば花と見たであろうか。我が家の庭一面にまつ白に降った白雪を。

【語句】○はなとや見まし 花と見たであろうか。所載欄の他文献では「月とぞ見まし」。○しろたえ しろたへ。梶の木の皮の繊維で織った白い布。白いこと。白色。○やど 屋戸（家の戸口）から転じて、家屋、すみか。「いへ」が家族などをあらわすのに対して「やど」は建物を指すことが多い。平安以降、「いへ」は散文に、「やど」は和歌に多く用いられた。○ふれるしら雪 所載欄の後撰集では「ふりつもる雪」、貫之集では「ふりしける雪」。

【所載】後撰集・冬・四九六／貫之集Ⅰ・六五

六九九 ふゆごもりおもひかけぬをこのまよりはなとみるまでゆきはふりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬ごもりしている今、思いがけないことだが、まるで、花が散っているのかと思われるほどに、木の間から盛んに雪が降ってくるのだ。

【語句】○ふゆごもり 冬の間、動植物が活動を停止し、人も家にこもること。○おもひかけぬを 真冬なので、花のことなど思いもかけないものを。○はなとみるまで 花と見まがうほどに。○ゆきはふりつゝ 「つゝ」は反復を表す助詞。所載欄の古今集では「雪ぞふりける」。

【所載】古今集・冬・三三一

七〇〇 むめがえにふりをけるゆきは春ちかみめのうちつけにはなかとぞみる

【異同】ナシ

【現代語訳】梅の枝に降り積もっていた雪は、春も近い時であるから、瞬間的にふとそれを見た時には、梅の花かと思っただことだ。

【語句】○ふりをけるゆきは 降り置（お）いた雪は。降り積もった雪は。所載欄の後撰集では「ふりおける雪を」。○ちかみ 近いゆえに。近いものだから。「み」は原因、理由をあらわす接続語。……だから、……なので。○めのうちつけに 何の予備知識も思惑もなく、ひよつと見ると。ひよつと見た感じでは。「こころのなしめのうちつけに、例の猫にはあらず。」（更級日記）。

【所載】後撰集・冬・四九七

〔以上五首担当 斎藤・三浦〕

七〇一 しろたえにゆきのふれゝばこまつはら色のみどりもかくろえにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】真白に雪が降っているので、小松原の色である緑もすっかり隠れてしまったのだなあ。

【語句】○しろたえに しろたへに。白袴（梶の木の繊維で織った布）のように純白で光沢があるようす。「雪」の形容。「白」は小松原の「緑」と対照をなす。○こまつはら 小松原。「小」は接頭語。松の繁っている原。○かくろえにけり 隠ろへにけり。「隠ろふ」は、「隠る」の未然形に継続の助動詞「ふ」がついた「かくらふ」の転。隠れた状態、見えない状態にある。

【所載】貫之集I・一二五

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「延喜八年承香殿御屏風の歌、仰せによりて奉る十四首」のうちの一首、「道行く人の松の雪みたる」。

七〇二 きえやらずゆきはしほしもとまらなんうきことしげきわれにかはりて

【異同】うきことしけき―うきかとしけし（大）

【現代語訳】雪は少しの間でも消えずにとどまっただけで欲しい。つらいことが多くて消え去ってしまいそうな私に代わって。

【語句】○きえやらず 「消ゆ」に補助動詞「やる」と打消の助動詞「ず」がついたもの。消えるはずのものが、

まだ消えない。すっかり消えきらない。新編国歌大観で検索すると、用例は、「小笹原風待つ露のきえやらすこのひとふしをおもひおく哉」(新古今集・一二〇五・俊成)以前には、これのみである。傍記異文「きえやすき」ならば「雪」にかかるため、句の続きもよく、所載欄の貫之集とも一致するが、本文通りとして解す。○うきことしげきわれ 苦しいことの多い自分。「有りはてぬ命待つ間のほどばかりうきことしげく思はずもがな」(古今集・九六五・平定文)。所載欄の貫之集歌は恋部にあり、「うきこと」は恋に関わると考えられるが、当該歌では特定できない。「われ」は「雪」と同じくいずれは消え果てる身とする。「恋するにきえかくる身と春たちてふりくる雪といづれまされり」(忠岑集IV・一四五)。

【所載】玉葉集・雜一・二〇四二／貫之集I・六〇二  
【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。

七〇三 はなとみるゆきのいましもふりしくははるちかくなるとしのつねかも  
けふイ しるしかイ

【異同】ナシ

【現代語訳】花と見まがう雪がちようど今しきりに降っているのは、春が間近になる毎年のことだなあ。

【語句】○はなとみるゆき 雪を花に見立てる。○いましも ちようど今。たつた今。○ふりしくは しきりに降っているのは。所載欄の貫之集では「ふりつらん」とあるが本文通りとして解す。○はるちかくなるとしのつねかも 毎年春が近くなると、雪が花のごとくみえる。

【所載】貫之集I・三八七

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「天慶三年四月右大将殿御屏風の歌廿首」のうちの一首、「十二月つごもり、雪人の家にあり」。

七〇四 はるこねど草木にはなのさくことはふるしら雪のかゝるなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】春はまだ来ないけれど草木に花が咲いているのは、降る白雪がかかっているのだった。

【語句】○ふるしら雪のかゝる 「かかる」は対象に全体がかぶさる。覆いかぶさる。貫之集では「心」とあるが本文通りとして解す。雪と花の見立て。花と思ってみるが、実は雪であったという趣向。

【所載】貫之集Ⅰ・一三八

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「延喜十九年東宮の御屏風歌内裏より召しし十六首」のうち一首、「雪の降れる」。

七〇五 このまよりかぜにまがひてふるゆきははるくるまでははなかとぞみる

【異同】かぜにまかひて―花にまかひて（大）

【現代語訳】木々の間から風にまぎれて降る雪は、春が来るまでは花かと思つて見ることだ。

【語句】○このま 木々の間。雪、花と取り合わせる類歌「ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける」（古今集・三三二、古今六帖・六九九）。○かぜにまがひてふるゆき 風にまがひて降る雪。「風にまがひて」は風に入り交じつて。風と雪のまがひはの例は、「ふきまよふ風にまがひて雪ふればあまのみそらにいさごみなぎる」（出観集・六〇六）など。所載欄の躬恒集本文とは一致するが、貫之集では「風にまかせて」とある。

【所載】貫之集Ⅰ・一〇四／躬恒集Ⅰ・九六／躬恒集Ⅴ・三一

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集、躬恒集に入集する。貫之集Ⅰでは「延喜十八年二月女四の皇女の御髪上げの屏風の歌、内裏の召ししにたてまつる」のうちの一首「十二月」。躬恒集Ⅰでは「女四宮の御屏風歌、正月（イしはす）」とある。

〔以上五首担当 中野〕

七〇六 ものごとにふりのみかくすゆきなれど水にはいろものこらざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】いろいろなものにそれぞれに降り積つておおい隠す雪だが、水にだけは（降つても消えて）いろいろ残らないことだなあ。

【語句】○ものごとに あらゆるものそれぞれに。○ふりのみかくす 降つて隠す。副助詞「のみ」によつて、直前の「ふり」を強めた。

【所載】風雅集・冬・八五九／貫之集Ⅰ・八八

七〇七 きみまさばさむさもしらじみよしのゝよしのゝやまにゆきはふるとも

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいてくだされば、私は寒さだつて感じないでしょう。たとえ吉野の山に雪が降っても。

【語句】○きみまさば あなたがいてくだされば。「ます」は、「在り」「居り」の尊敬語。○さむさもしらじ 寒ささえもそれとは感じないだろう。寒いとは思わないだろう。○みよしのゝよしのゝやま 大和国の吉野山。雪によって歌に詠まれる。

【所載】万代和歌集・二二四／貫之集Ⅰ・二一七

七〇八 くろかみのしろくなりゆくみにしあればまづはつゆきをあはれとぞ思

【異同】ナシ

【現代語訳】黒髪が次第に白くなってゆく身でありますから、なによりもまず、初雪をしみじみと切なく思います。

【語句】○くろかみのしろくなりゆくみ 年老いて黒髪が次第に白くなってゆく身。○はつゆきをあはれとぞ思 初雪が降るのを切なく思う。「あはれ」は心に深く感歎する気持を表わす語。ここは、初雪の白さにわが髪の毛くなりゆくことを思い合わせての感慨。

【所載】古今六帖「かみ」三二七〇／後撰集・冬・四六七／躬恒集Ⅰ・二三一／躬恒集Ⅲ・一三〇／躬恒集Ⅳ・二六六／躬恒集Ⅴ・一一三

七〇九 しらゆきのふりてつもれるやまざとはすむ人さへやおもひきゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪が降って積もった山里では、そこに住む人までも（あの雪のように）もの思いゆえ消え入ってしまうのだろうか。

【語句】○すむ人さへ 雪だけでなく住んでいる人までも。「さへ」は、添加の意を表わす副助詞。○おもひき

ゆ 思うことで消える、思いゆえ消える、の意。消えるような思いをすること。「きゆ」は「ゆき」の縁語。

【所載】古今集・冬・三二八／新撰万葉集・一七九／新撰和歌・一五〇／忠岑集Ⅰ・三七／忠岑集Ⅱ・二五／忠岑集Ⅲ・三九／忠岑集Ⅳ・三八

七一〇 かきくらしふるしらゆきのしたもえにきえうせねとや人のつれなき<sup>ぎイ</sup>

【異同】きえうせねとやーきみうせねとや（御・桂）、君うせぬとや（大）

【現代語訳】あたりを暗くして降る雪が（表に見えない）下の方では消えているように、私にも人知れず消えてしまえというつもりで、あの人はこんなにつれないのだろうか。

【語句】○かきくらし あたりいちめんを暗がらせて。「かき」は接頭語、「くらし」は四段活用他動詞の連用形。暗くする。見えにくくする。○したもえに このままでは意が通じない。傍記異文に抛り「したぎえに」とした方が、上二句および第四句とのつづき方に整合性が得られる。上二句は、第三句「したぎえに」を導き出すための序詞。

【所載】ナシ

【参考】古今集・恋一・五六六番に「かきくらし降る白雪のした消えに消えてもの思ふころにもあるかな」という壬生忠岑の歌がある。この古今集歌は、若干の語句異同はありながら、忠岑集Ⅰ・一三、Ⅱ・二六、Ⅲ・四〇、Ⅳ・三九にも見られる。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

七一一 したぎえのゆきまをみればふゆながらはるのけちかきこゝちこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】下消えによってあらわれた雪間を見ると、まだ冬ではありながら、なんとなく春の近い気がするのとだなあ。

【語句】○したぎえ 積もっている雪が、底の方からとけて消えてくること。○ゆきま 積雪が部分的に消えているところ。○ふゆながら 冬のままで。まだ冬という季節でありながら。○けちかき 近い。「け」は接頭語で、はっきりと指すことはできないがなんとなくそんな感じがある、というさまを表わす。

【所載】左兵衛佐定文歌合・一七

七一二 みよしのゝやまのしらゆきふみわけていりにし人のをとづれもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】あの吉野の山の白雪をふみわけて山中へ行った人の、それきり音沙汰もないことよ。

【語句】○みよしのゝやま 大和の吉野山。○しらゆきふみわけて 白く積もった雪を踏みながら自分で道をつけて。○をとづれ おとづれ。音信、消息。

【所載】古今集・冬・三二七／新撰万葉集・一八三／忠岑集Ⅰ・三六／忠岑集Ⅱ・二七／忠岑集Ⅲ・四一／忠岑集Ⅳ・四〇／寛平御時后宮歌合・一二九

七二三 このふるはむめのはな<sup>ゆきイ</sup>より冬<sup>れどイ</sup>ながらきみがにほひにはるはきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】いま降っているこれは、（雪ではない）梅の花ですよ。季節はまだ冬でありながら、あなたのよい香りに、もう春が来ましたね。

【語句】○このふるは いま現に目の前で降っているのは。「この」という指示のはたらきを持つ語は、通常は体言に接続するが、これを動詞の直前に置く用法は、万葉集によく見られる。「このねぬるあさけのかぜは」（一五五九（旧一五五五）、「このみゆるあまのしらくも」（四一四六（旧四一二二））など。「この」が指示する動詞によって表わされる状態が、現在そこで行われている、という場合の言い方である。○むめのはなより 梅の花ですよ、と強く断定している。ただしここで実際に降っているのは雪であって梅ではない。降る雪を散る梅花に見立てて、その見立てを強調している。○冬ながら 七十一番歌参照。○きみがにほひに あなたのよい香りに。「にほひ」は、そのものの本体から発言する美質をいう。ここでは第二句「梅の花なり」との関係でこの語が用いられており、香りについて言ったものか。

【所載】ナシ

【参考】この歌には、なにか人事的な詠歌事情がありそうに思われるが、詞書がなく他文献にも見えず、手がかりがないため、具体的な歌意までは読み取れない。

七一四 なにせんにそでにしらゆきかゝるともとめてわかれ本かへらぬらむイゝさとせなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】こうして袖に白雪が降りかかっても、それがいったいなんになるというのだろう。この降りかかる雪をいつまでも袖にとどめて、別れることのないぬさとするわけにはいかないのに「第四句は傍書に拠り、」とめておかれぬ」として解した。

【語句】○なにせんに それがなんになるというのか、なんにもなりはしないのに。第二、三句と倒置されている。○ゝ(ぬ)さ 神に祈るときの捧げもの。ここは、当時旅に携帯した「きりぬさ」のこと。麻や紙を細かく切ったもので、「ぬさ袋」に入れて携行し、途中の神社や道祖神の神前にまいて手向け、旅の無事を祈った。「龍田ひめ手向くる神のあればこそ秋のこのはぬさと散るらめ」(古今集・二九八)や、「漕ぎくるみちに手向けするところあり。楫取りしてぬさ奉らすに、ぬさ東の方へ散れば」(土佐日記・一月二十六日条)などによって、その形状や用いられ方が推測される。また後撰集一三〇五番歌の詞書に、「あひ知りて侍りける人のあづまの方へまかりけるに、さくらの花のかたにぬさをしてつかはしける」とあるのも、旅立つ人へ餞別として贈った「きりぬさ」である

【所載】ナシ

七一五 わすれてはゆめかとぞおもふおもひきやゆきふみわけてきみをみんとは

【異同】ナシ

【現代語訳】いまの現実をふと忘れては、これは夢か、と思うのです。かつて思ったことがあったでしょうが、こんなに雪をふみわけて来て、こうしてお目にかかることがあろうとは。

【語句】○ゆめかとぞおもふ もしや夢か、と思う。この「ゆめ」は、「うつつ」(現実)に対する「ゆめ」。いま直面している現実の信じ難さを言った句。○おもひきや かつて思ったことがあっただろうか、思ったことなどありはしない。「や」は反語。下句と倒置されている。○ふみわけて 七一二番参照。

【所載】古今集・雑下・九七〇／業平集Ⅰ・六〇／業平集Ⅱ・五〇／業平集Ⅲ・三五／業平集Ⅳ・三〇／伊勢物語・八三段・一五二



七一六 はなのいろにゆきはまじりてみせずともかをだにぬすめ人のしるべく

【異同】ナシ

【現代語訳】白い花に雪が混じりあつて見分けがつかないようにしていても、せめて香りだけでも盗んでおくれ、花が咲いていると人が気づくように。

【語句】○みせずとも 花と雪の区別がつかないようにしていても。○かをだにぬすめ せめて香りだけでも盗んでおくれ。「花の色は霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ春のやま風」（古今集・九一）。○人のしるべく 人が気づくように。

【所載】古今集・冬・三三五／新撰和歌・一三六／奥儀抄・一二五

【参考】所載欄古今集の歌本文は「花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人のしるべく」とある。

七一七 うらちかくふりくるゆきはしらなみのすゑのまつやまこそすかとぞみる

【異同】ナシ

【現代語訳】海岸近くに降ってくる雪は、白波があゝの越えることがないといわれる末の松山を、越すかと思われほどの大波に見えるよ。

【語句】○うらちかく 海辺の近く。○しらなみの 「ふりくるゆき」の形容であるとともに、「末の松山の波」をもさしている。○すゑのまつやま 陸奥国の歌枕。宮城県多賀城市。波が決して越えることがないといわれる松山。「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」（古今集・一〇九三）。

【所載】古今集・冬・三二六／拾遺集・冬・一三三九／新撰和歌・一四二／興風集Ⅰ・七、六三／興風集Ⅱ・一七／寛平御時后宮歌合・一四三／寛平御時中宮歌合・二四／袖中抄・九〇二／桐火桶・一二一

【参考】所載欄の古今集は、詞書「寛平御時后宮歌合の歌」、作者「藤原興風」。拾遺集は、作者「人麿」。

七一八 しらゆきのところもわかずふりしけばいはほにもさくはなと こそみれ

【異同】底本「はなと■みれ」ノ「■」ノ箇所、墨デ塗りツブシテイル。

【現代語訳】白雪が何処も区別せずに一面に降り積もっているの、花の咲くはずのない大きな岩にまでも、花が咲いたと見ることだ。

【語句】○ところもわかず どこそこの区別なしに。○いはほにもさくはな 巨岩にも咲く花。雪を花に見立てる。

【所載】古今集・冬・三二四

### 左大臣橘諸兄

七一九 たかやまのいはほにをふるすがのねのねもしろたへにふれるしら雪

【異同】ナシ

【現代語訳】高山の大きな岩に生えている菅の根の、黒いはずの根も、白い布のように一面に降り積もっている白雪よ。

【語句】○すがのねの 枕詞。菅の根の長いことから「長し」「乱る」「絶ゆ」に、また「根」にかかる。○しろたへに 真つ白に。「しろたへ」は梶の木の繊維で織った白い布。傍記異文「しろじろに」は目立って白くの意。上三句は「ねもしろたへに」を導く序詞。

【所載】続後撰集・冬・五〇六／万葉集・四四七八（旧四四五四） 高山乃 伊波保尔於布流 須我乃根能 祢母許呂其呂尔 布里於久白雪 タカヤマノイハホニオフルスガノネノネモコロゴロニフリオクシラユキ たかやまのいはほにおふるすがのねのねもころごろにふりおくしらゆき／家持集Ⅱ・一五二

【参考】作者名「左大臣橘諸兄」は所載欄の文献に一致する。

七二〇 ゆきをゝきてむめの花こひそあし引のやまかたかけていゑみせるきみ

【異同】ナシ

【現代語訳】雪をさしおいて梅の花を恋してはいけません。家の片側を山に寄せ掛けて住んでいる君よ。雪だつて梅の花のようにうつくしい。

【語句】○こひそ 恋するな。「そ」は禁止を表す。○あし引の 枕詞。「山」「峰（を）」などにかかる。○やま

かたかけて 家の片側を山に寄せ掛けて。「山にかたかけたる家なれば」(源氏物語・手習)。○いゑゐ 家に住むこと。「野辺ちかくいへゐしせれば鶯の鳴くなる声はあさなあさなき」(古今集・一六)。

【所載】万葉集・一八四六(旧一八四二) 除雪而 梅莫恋 足曳之 山片就而 家居為流君 ユキヲオキテウメヲナコヒソアシヒキノヤマカタヅキテイヘホセルキミ ゆきをおきてうめをなこひそあしひきのやまかたづきていへゐせるきみ／人麿集Ⅲ・二〇四／俊頼髓脳・二九五／綺語抄・一五五

〔以上五首担当 林〕

七二二 むめのはなえだにかさくとみるまでにかぜにみだれてゆきぞふりける

【異同】ナシ

【現代語訳】梅の花が枝に咲くかと見るほどに、風に乱れて雪が降ることよ。

【語句】○見るまでに 「AをBと見る」「Bと見るまでにAである」などの文型は〈見立て〉の基本文型である。鈴木宏子「雪と花の見立て」考―万葉から古今へ―『古今和歌集表現論』笠間書院、二〇〇〇年。当該歌では、雪を梅の花に見立てた。「ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける」(古今集・三三一)。

【所載】万葉集・一六五一(旧一六四七) 梅花 枝尔可散登 見左右二 風尔乱而 雪曾落久類 ウメノハナエダニカチルトミルマデニカゼニミダレテユキゾフリクル うめのはなえだにかちるとみるまでにかぜにみだれてゆきぞふりくる

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集には「忌部首黒麿雪歌一首」とある。

七二二 かきたれてふるしらゆきのきみならばあなめづらしといはましものを

【異同】ナシ

【現代語訳】しきりに降る白雪が、もしもあなたならば、ああ珍しいことと言いましようものを。

【語句】○かきたれてふる 雪や雨が激しく降り続く。「いとど愁(うれ)ふなりつる雪、かきたれいみじう降りけり」(源氏物語・未摘花)。○しらゆきならば もし白雪であったならば。○いはましものを 言おうものを。「……ならば……ましものを」は、「……ならば」という仮定に「まし」と応じる反実仮想の語形。激しく降

り続く雪が、めったに訪れてこない「君」の訪れならば、「めづらし」と珍重しようものを、そうではないので珍しくもないと、「かきたれてふる」雪に飽く思いと、「君」が訪れて来ないという、自分の願い通りにならない事実に対する不満・物足りなさを表している。

【所載】ナシ

七二三 おもへども身をしわけねばめかれせぬゆきのとむるぞわがこゝろなる

【異同】ゆきのとむるそ―雪のつもるそ（大）

【現代語訳】あなたのことを思っているけれども、この身を二つに分けることはできないので（いつもは一緒にいることはできませんが）、今日は絶え間なく降り続く雪が私を止め、ずっとあなたと一緒にいられるのは、私の本望です。

【語句】○おもへども身をしわけねば 心ではいつもあなたのことを思っているが、自分の体を分けて常にあなたと一緒にいることはできないでいる、ということを表す。「おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる」（古今集・三七三）。○めかれせぬ 目離れせぬ。目から離れない。「目離れ」は「目離る」の名詞形。「目離る」は、対象から目が離れる意。「くるとあく」とめかれぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらむ」（古今集・四五）。当該歌では、目から離れることなく雪が降り続く意か。○とむる 雪が自分（の帰宅）を止める、ということ。「いとま申さんと思ふに、雪のこぼすがごとくふりて、京へかへさじととむるは、真実、是にありたきとおもふ心のする事也、といへり。」（伊勢物語闕疑抄）『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』付録の翻刻による）

【所載】伊勢物語・八五段・一五五／業平集Ⅰ・六八／業平集Ⅱ・一〇五／業平集Ⅲ・四四

【参考】所載欄の伊勢物語八五段では、「雪に降りこめられたり」という題で、「昔男」が出家した元の主君に対する敬慕の念を詠んだ歌。

七二四 こぬ人をまつのはにふるしらゆきをきえこそかへれこふるおもひに

【異同】こぬ人を―此人を（大） しらゆきを―白雪の（大）

【現代語訳】来ない人を待っているのは、松の葉に降る白雪が日に当たるとすっかり消えるようなもので、私も

消え入りそうになるよ、恋いこがれる思いのために。

【語句】○まつ 「来ぬ人を待つ」の「待つ」に、「松」を掛ける。「久しくもなりにけるかなすみのえの松はくるしき物にぞありける」(古今集・七七八)。○きえこそかへれ 完全に消えること。また、恋の苦しみなどのため、我が身がすっかり消えてなくなるような思いになること。この歌では、松の葉に降る白雪がすっかり消える意と、我が身が消え入りそうになる意とを重ねて言っている。○こふるおもひ 恋ふる思ひ。「思ひ」の「ひ」に「日」を掛ける。所載欄の後撰集では「くゆる思ひ」、元良親王集では「あかぬおもひ」、大和物語では「あはぬおもひ」となっている。

【所載】後撰集・恋四・八五一／元良親王集・一〇五／大和物語・一三九段・二一八

【参考】元良親王集・大和物語によると、醍醐天皇女御源和子に仕える女房、承香殿の中納言の君が、元良親王に贈った歌。

七二五 いはのうへのまつのこずゑにふるゆきはいそかへりふれのちまでもみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】岩の上に生えた松の梢に降る雪は、五十回でも何回でも降れ。後々までもそれを見よう。

【語句】○いはのうへのまつ 永遠盤石のイメージから、長久を寿ぐ表現に用いた。「いはのうへの松のちとせをうちかぞへとしをおひつつきみにまかせん」(堀河中納言家歌合・一)。○いそかへり 何回も何回もくり返して。「いそ」は、五十、また数が多いこと。「かへり」は、くり返しの回数を表す。「いそかへり我が世の秋はすぎぬれどこよひの月ぞためしなりける」(清輔集・一三五)。

【所載】ナシ

【参考】万葉集に「池の辺(へ)の松の末葉(うらば)に降る雪は五百重(いほへ)降り敷け明日さへも見む」(一六五四・(旧一六五〇))という類似した歌がある。

〔以上五首担当 長戸〕

七二六 みちもあらじいかでかゆかむしら雪のふりおほふたけのよもふけにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】道もあるまい。どのようにして行けばよいのか。白雪の降り積もった竹の節間ではないが、夜も更けてしまったよ。

【語句】○いかでか 副詞「いかで」に係助詞「か」の付いたもの。ここでは疑問。どのようにして……か。「冬の池のうへは氷にとちられていかでか月のそこにいるらん」（拾遺集・二四一）。○ふりおほふ 降りつもる。六八四番歌参照。○たけの 「よ」を導くための措辞。○よもふけにけり 「夜」と竹の「節間（よ）」を掛ける。

「よ……ふけにけり（ける）」は万葉集に集中して見られる結句。平安期の私家集では人丸集・赤人集・家持集に残るのみ。「山のはにいさよふ月を出でむかと待ちつつをるに夜そふけにける」（万葉集・一〇七五（旧一〇七一））「妹がりとわが行く道の川にあればつくめ結ぶと夜そふけにける」（万葉集・一五五〇（旧一五四六））など。

【所載】ナシ

【参考】河海抄（藤袴）に初句を「道もなし」として引用されている。

七二七 ゆきふればふゆごもりせる草も木もはるにしられぬはなぞさきける

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降ると、冬ごもりをしている草も木も、春に知られない花が咲いていることだよ。

【語句】○ふゆごもり 万葉集では全十例中九例が「春」に続く。「冬ごもり春さり来れば鳴かざりし鳥も来鳴きぬ……」（万葉集・一六）など。古今集では他に一例「冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける」（古今集・三三三・貫之）。貫之には「梅の花おほかる里に鶯の冬ごもりして春を待つらん」（貫之集・一七一）があり、新撰和歌に「冬ごもり春まだとほき鶯のすのうちのねのかまほしきを」（新撰和歌・一五六）を増補するなど、貫之にとつての「冬ごもり」は冬の季節を歌う際の語彙だったようである。○はるにしられぬはな 雪を、春に知られていない花とする。逆の発想としては「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」（亭子院歌合・一三、拾遺集・六四）が有名。

【所載】古今集・冬・三三三／桐火桶・一二〇

七二八 ふるゆきやはなとはさきてたのめけむなどかみのよくなりがてにする

【異同】ナシ

【現代語訳】降る雪が、花が咲いたものとしてその気にさせたのだろうか。なのにどうして我が身の上は良くならないのだろうか。

【語句】○たのめけむ あてにさせたのだろう。所載欄に示した貫之集の詞書からは官位が上がることを期待するの意が読み取れる。○などか どうして。「秋の田の穂にこそ人をこひざらめなどか心に忘れしもせむ」(古今集・五四七)。○みのよくなり 「みの」は、所載の貫之集によると「身の」に新たな任地である「美濃」を響かせるのだが、詞書のない古今六帖ではそこまで考慮する必要はない。「(木の) 実の良く成り」と「(我が) 身の良く成り」を掛ける。また、「花」と対比して、我が身の不遇を強調する。○がてに ……できないで。……しきれなくて。「桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする」(古今集・七五)。

【所載】拾遺抄・六〇三(静嘉堂文庫本朱書校合本卷十・五四五ノ次)／貫之集Ⅰ・七七八

【参考】貫之集の詞書には「かうぶり給はりて、加賀の介になりて、美濃の介に移らむと申す間に、内裏の仰せにて歌詠ませ給ふ奥に書きける」とある。

七二九 ゆきふりて人もかよはぬみちなれやあとはか<sup>もイ</sup>となくおもひきゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降って人も通わなくなった道なのだろうか。(道行く人の足跡が雪に埋もれてすっかり消えてしまったように) あとかたもなく「思ひ」の「火」も消えてしまったようだ。

【語句】○なれや 断定の助動詞「なり」の已然形に係助詞「や」の付いたもの。疑問を表わす。「秋ののにおくしらつゆは玉なれやつらぬきかくるものとすぢ」(古今集・二二五)。○あとはかとなく 「あとはかなし」ははっきりした形跡がない。跡形もない。「さめてこそ見るべかりけうつつにもあとはかもなき夢としりせば」(和泉式部統集・六一〇)。所載欄にあげた古今集や躬恒集諸本ではいずれも「あとはかもなく」とする。ただし古今集の清輔本には「あとはかとなく」とある。○おもひきゆらん 「思ひ」に「火」を掛ける。すっかり意気消沈してなすすべもない様子。

【所載】古今集・冬・三二九／躬恒集・Ⅰ二六六／躬恒集Ⅱ・一五四／躬恒集・Ⅲ二九〇

七三〇 ふゆながらそらよりはなのちりくるはくものあなたははるにやあるらん

【異同】ふゆなから―冬ちかく（大）

【現代語訳】冬だというのに空から花が散ってくるのは、雲の向こう側ではもう春になっているのだろうか。

【語句】○そらよりはなの 降る雪を散る花に見立てる。七二七番歌参照。 ○くものあなた 深養父には「みなそこにくきなき花ぞ散りまがふ雲のあなたに春やきぬらん」（深養父集・一七）という類想の歌がある。

【所載】古今集・冬・三三〇／深養父集Ⅰ・一九／深養父集Ⅱ・一五／和歌体十種・二六／和歌十体・一一／奥儀抄・一一五

〔以上五首担当 青木〕

七三二 あさばらけありあけの月とみるまでによしのゝやまにふれるしらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】ほのぼのと夜の明け初めるころ、あたりを見まわしてみると、まるで有明の月がさしているのを見まがうほどに、吉野の山には白雪が降りつもっていることだ。

【語句】○あさばらけ 夜がほんのりと明け初めるころ。日の出前の明るくなり始めるころから日の出ごろまでを指す。○ありあけの月 陰暦十六日以降、特に二十日以降の月は夜が明けるころになっても東の空に残っている、そうした明け方の月。○とみるまでに と見まがうほどに。「ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける」（古今集・三三二）。

【所載】古今集・冬・三三二／是則集・二二／時代不同歌合・一二五／百人秀歌・二九／百人一首・三一／近代秀歌・五四／詠歌大概・六三

【参考】雪や霜が月の光に、あるいは逆に月の光が雪や霜に、それぞれ見間違えられるという表現には、たとえば和歌では「よるならば月とぞみましわがやどの庭白妙にふりしける雪」（貫之集・六五）などがあり、漢詩では、李白の「牀前看月光 疑是地上霜」などがある。なお、古今集その他では当該歌の作者を坂上是則とする。

七三二 けぬがうへにまたもふりしけ春がすみたちなばみゆきまれにこそみめ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪よ、まだ消え去らないその上に、さらに降り敷いてくれ。春霞が立ってしまったら、こんなに



美しい雪は稀にしか見られないだろうから。

【語句】○けぬがうへに 消えない、その上に。「け」は「消ゆ」の古い形の「消（く）」の未然形で、「ぬ」は打消しの助動詞の連体形。ただし「消（く）」には終止形の用例がきわめて少なく、ほとんどが連用形の「け」に、完了の助動詞「ぬ」の終止形が伴われた形である。「ふる雪はかつぞけぬらしあしひきの山のたきつせおとまざるなり」（古今集・三一九）。○ふりしけ 降り敷け。降り重なれ。○みゆき 「み」は接頭語。

【所載】古今集・冬・三三三／新撰和歌・一五四

七三三 松のうへにかゝれるゆきのうれをこそふゆのはなとはいふべかりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】松の上にかかっている雪、その梢こそ、冬の花とは言うべきであつた。

【語句】○うれをこそ 「うれ」は、植物の葉や枝の先端をいう。梢。ただし「ゆきのうれ」とあるのは不審。傍記異文の「これをこそ」によるべきか。あるいは後撰集には「それをこそ」とあるので、「う」は「そ」の誤写である可能性もあるか。

【所載】後撰集・冬・四九二

【参考】「ひかりまつ枝にかかれる雪をこそ冬の花とはいふべかりけれ」という非常によく似た歌が、新撰万葉集・上・一六一、寛平御時后宮歌合・一四四、秋萩帖・二八などに見える。

七三四 としふかくふりつむ雪をみるときぞふじのたかねにすむ心ちすれ

【異同】すむ心ちすれ—住心ちする（大）

【現代語訳】年が深まってゆき、深く降り積もる雪を見る時は、あの富士の高嶺に住んでいるような気持ちがあることだ。

【語句】○としふかく 一年が終わりに近づく。「ふかく」は「ふりつむ」にもかかる。○ふじのたかねに 所載欄に示した後撰集や躬恒集には「こしのしらねに」とあり、「越の白嶺」のほうが「富士の高嶺」よりは自然か。○すむ心ちすれ 「ぞ」の係り結びとしては、傍記異文や後撰集などのように「すむ心ちする」と連体形でありたい。

【所載】後撰集・冬・四九九／躬恒集Ⅳ・一一二／躬恒集Ⅴ・二三五

【参考】躬恒集に載るが、後撰集でも「よみ人知らず」とする。

七三五 むめがゝのふりをけるゆきにうつりせばたれかはものをわきてをらまし  
ことゝイ

【異同】ナシ

【現代語訳】梅のかおりがもし降り置いている雪にうつりまじってしまったら、一体誰が梅の花をそれだと区別して手折ることができようか、できはしないだろう。

【語句】○むめがゝの 梅の香が。「うつりせば」にかかる。○ふりをける 降り置（お）ける。○たれかはものをわきてをらまし 誰が梅の花を弁別して折ろうか、折ることはできないだろう。

【所載】古今集・冬・三三六

【参考】梅と雪との区別がつかないことを言っているのであろう。古今集の直前の歌（三三五）にも、「花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく」とある。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

七三六 ゆきふればきごとにはなぞさきにけるいづれをむめとわきてをらまし

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降ったので、どの木にも（真つ白な）花が咲いたなあ。どれを梅の花だと区別して折りまじょうか。

【語句】○きごとに この木にもあの木にも。「きごと」は「木毎」で、「木」と「毎」で「梅」。漢詩の離合詩をまねた表現。「はるちかきえだにや花のこもるらむ木ごとにむめと見ゆるしら雪」（新撰六帖・一九七）。○わきて（梅の花と雪を）区別して。○まし 疑問表現とともに用いて、決断しかねる意を表す。

【所載】古今集・冬・三三七／新撰和歌・一三八／和歌朗詠集・三八三／友則集・七／三十六人撰・五七

七三七 ゆふぐれはころもでさむしきよしのゝたかきみやまにみゆきふるらし  
さい

【異同】ナシ

【現代語訳】夕暮れは袖のあたりが寒いことです。み吉野の高い山に雪が降っているらしいよ。

【語句】○ゆふぐれは 夕暮れ時は。所載欄の家持集Ⅰでは「ゆふされば」。それ以外の所載欄の他文献では全て傍書と同じ「ゆふされば」（夕方になると）の意。○たかきみやまに 高い山に。「み」は「みよしの」「みゆき」の「み」と共に調子をとるための接頭語。所載欄の古今集・秀歌大体では「よしのの山に」、家持集Ⅰでは「たかき山べに」、家持集Ⅱでは「たかまの山に」。「たかまの山」は奈良県御所市高天にある金剛山。古今集の諸本では「たかきの山」（吉野郡の天川村と西吉野村の境界にある高城山）となっている。「みよしののたかきのやまに」らくものゆきはばかりてたなびけりみゆ」（万葉集・三五六（旧三五三））。

【所載】古今集・冬・三一七／家持集Ⅰ・二二七／家持集Ⅱ・一四〇／秀歌大体・八八

七三八 きえはつるときしなればこしぢなるしらやまは猶<sup>のなはい</sup>ゆきにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】完全に消えてしまう時などないので、越路にある白山には相変わらず雪が降り積もっていましたよ。

【語句】○こしぢ 越路は北陸道の古名の一つ。○しらやまは猶 「しらやま」は石川県・福井県・岐阜県にまたがる白山。「しらやま」という名前から、雪を連想した歌が多く詠まれた。所載欄の他文献では全て傍書と同じ「白山の名は」で、「白山という名は雪によって付けられた名だったのですね」の意。そちらが本来の形かと思われるが、ここでは一応古今六帖の本文によって解釈しておく。

【所載】古今集・羈旅・四一四／躬恒集Ⅰ・二八三／躬恒集Ⅱ・一五九／躬恒集Ⅲ・三〇七

七三九 わがせこにみせんとおもひしむめの花それともみえずゆきのふれゝば  
あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】愛しいあの人に見せようと思った梅の花は、どれが花だか区別がつきません。雪が降って（あたり一面真っ白になって）いるので。

【語句】○せこ 女性が男性を親しんで呼ぶ語。○それともみえず （雪のために）梅の花がどれであるとも見

分けがつかない。「梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば」(古今集・三三四)。

【所載】後撰集・春上・二二／万葉集・一四三〇(旧一四二六) 吾勢子尔 令見常念之 梅花 其十方不所見  
雪乃零有者 ワガセコニミセムトオモヒシウメノハナソレトモミエズユキノフレレバ わがせこにみせむとおも  
ひしうめのはなそれともみえずゆきのふれば／金玉集・七／和漢朗詠集・九四／人麿集Ⅱ・七／赤人集Ⅰ・三  
／家持集Ⅰ・一一／家持集Ⅱ・一一／三十六人撰・四五／深窓秘抄・九／俊頼髓脳・四〇八／袖中抄・一八九／  
古来風体抄・八六、三〇一

【参考】所載欄の文献では、後撰集では「よみ人しらず」、俊頼髓脳は「ある人」作とするが、この二つと私家集を除く他の全ての他文献では作者名を赤人とし、古今六帖の作者名と一致する。

七四〇 としふれどいろもかはらぬまつがえにかゝれるゆきをはなかとぞみる

【異同】としふれととしふれは(御)

【現代語訳】長年経つけれど(緑の)色も変わらない松の枝に降りかかっている雪を、花かと思つて見ることで

【語句】○まつがえに 松の枝に。所載欄の新撰万葉集では「まつのはに」、和歌童蒙抄では「まつのはに」。○  
かゝれる 降りかかっている。所載欄の新撰万葉集では「やどれる」。○ゆきをはなかとぞみる 雪を花だと思つ  
て見る。七三三番歌と同じ見立て。五句は所載欄の後撰集・和歌童蒙抄では「花とこそ見れ」、新撰万葉集では「は  
なとこそみれ」。

【所載】後撰集・冬・四七五／新撰万葉集・一九七／和歌童蒙抄・九四

〔以上五首担当 三浦〕

七四一 ゆきふればころもでさむしたかまとのやまの木ごとにゆきぞふるらし

【異同】ゆきふれば―ゆふされば(大)

【現代語訳】雪が降るので袖のあたりがさむいなあ。たかまとの山の木にはみんな雪が降り積もっているのだろ  
う。

【語句】○ゆきふれば 所載欄の万葉集(二三三三(旧三三一九))は「ゆふされば」であり、この方が歌意が通

る。○ころもで 袖。○たかまと 大和国の歌枕。奈良市白毫寺高円町。奈良市東郊の春日山の南に続く丘陵地帯。○木ごとに 木にはすべて。「こ」は例外のない意を表す。

【所載】万葉集・二三三(旧二二九) 暮去者 衣袖寒之 高松之 山木毎 雪曾零有 ユフサレバコロモデサ ムシタカマトノヤマノキゴトニユキヅフリタル ゆふさればころもでさむしたかまつのやまのきごとにゆきぞふりたる／夫木抄・七一九三／人麿集Ⅲ・一九七／家持集Ⅱ・一四〇

七四二 我せこをけさか／＼といでみればあはゆきふれるにはもほ<sup>はだらイ</sup>どろに

【異同】ナシ

【現代語訳】わが夫が来るのを今朝か今朝かと待ちかねて外に出てみると、まあ淡雪が降っている、庭にうつすらと。

【語句】○我せこ 我が夫。○あはゆき 淡雪。軽くて溶けやすい雪。所載欄の万葉集は「沫雪」。アワユキと訓読。七四六番歌参照。○ほどろに 雪などが薄くまだらに降り積もったさま。「淡雪のほどろほどろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも」(万葉集・一六四三(旧一六三九))。

【所載】万葉集・二三二七(旧二三三三) 吾背子乎 且今且今 出見者 沫雪零有 庭毛保杼呂尔 ワガセコヲ ケフカケフカトイデミレバアワユキフレリニハモホドロニ わがせこをいまかいまかといでみればあわゆきふれりにはもほどろに／人麿集Ⅱ・一八二／人麿集Ⅲ・四六五／家持集Ⅰ・二三三／家持集Ⅱ・一四六／袖中抄・二四八

七四三 あしひきのやまにしろきはわがやどにきのふのくれにふりしゆきかも

【異同】ナシ

【現代語訳】山に白く見えるのは、我が家に昨日の夕暮れに降ったあの雪かなあ。

【語句】○あしひきの 枕詞。「山」「峰(を)」「尾の上」などにかかる。○わがやど 私の家。

【所載】新後拾遺集・冬・五三六／万葉集・二三二八(旧二三二四) 足引 山尔白者 我屋戸尔 昨日暮 零之 雪疑意 アシヒキノヤマニシロキハワガヤドニキノフノクレニフリシユキカモ あしひきのやまにしろきはわがやどにきのふのゆふべふりしゆきかも／人麿集Ⅲ・一九二／家持集Ⅰ・二三七／家持集Ⅱ・一五〇／桐火桶・二

七四四 ふなばりのゝぎにふりおほふ白雪のいちしろくしもこふるわれかも

【異同】ナシ

【現代語訳】ふなばりの野の木に降り覆う白雪のように、はつきりと人目に付く恋のそぶりをする私だなあ。

【語句】○ふなばり 地名。奈良県桜井市吉隠（よなばり）の古名。所載欄の西本願寺本万葉集における訓のよ  
うに「よなばり」を「ふなばり」とよんでいる例が他にもある。○ゝ（の）ぎ 野に立っている木。○ふりおほ  
ふ 雪などが降り積もって物を覆い隠す。○いちしろくしも はなはだしくもまあ。三句までは「いちしろく」  
にかかる序詞。

【所載】万葉集・二三四三（旧二三三九）吉名張乃 野木尔零覆 白雪乃 市白霜 将恋吾鴨 フナバリノノギ  
ニフリオホフシラユキノイチシロクシモコヒムワレカモ よなばりののぎにふりおほふしらゆきのいちしろくし  
もこひむあれかも／夫木抄・九七六三

七四五 しもがれのえだもなわびそ白ゆきのきえぬかぎりははなとこそみれ<sup>トイ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】霜にあつて枯れしぼんだ枝も嘆きなさるな、白雪が消えない限りは花だと思つて見ることですよ。

【語句】○しもがれ 霜にあつて草木が枯れしぼむこと。○なわびそ 辛がつてがつくりしなさるな。「な……そ」  
は禁止を表す。○はなとこそみれ 花だと思つて見ることよ。「白雪のところもわかずふりしけばいはほにもさく  
花とこそ見れ」（古今集・三二四）。

【所載】後撰集・冬・四七六

〔以上五首担当 橋本・林〕

七四六 かつきえてそらにみだるゝあはゆきはものおもふひとのこゝろなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】一方では消えて、一方では空に乱れる淡雪は、物思いする人の心であつたのだなあ。

【語句】○かつきえてそらにみだるゝ 一方では消えて、一方では空に降り乱れるの意。「消ゆ」は、恋の歌では死にそうな思いを意味する。恋の思いで消える人事と景物の対比。○あはゆき 和名抄では「沫雪（阿和由岐）其弱如水沫」、名義抄では「沫雪、アハユキ」とある。泡雪ならば「あわゆき」、「淡雪」ならば「あはゆき」の表記となるはずだが、いずれにしても語義としては溶けやすい雪をさす。○ひと 一般的な人とも、自分のこととも取れる。所載欄の後撰集の詞書や「あは雪のたまればがてにくだけつつわが物思ひのしげきころかな」（古今集・五五〇）などからすれば、我が身を詠んだとするべきかもしれないが、自分を含めた一般的な恋の心ととりたい。

【所載】後撰集・冬・四七九

七四七 あらたまのとしをわたりてあるがうへにふりつむゆきのきえぬしらやま

【異同】ナシ

【現代語訳】年を越してなお雪が残っている、その上に、降り積もる雪の消えることのない白山よ。

【語句】○あらたまの「年」にかかる枕詞。○としをわたりて 年を越して、の意。「亭子院殿上人歌合」（延喜一六年七月七日）に「あまのがはとしをわたりてたなばたのあかぬこひするころにもあるかな」（二二五）がある。○しらやま 七三八番歌参照。

【所載】後撰集・冬・四八二／家持集Ⅰ・二七六／家持集Ⅱ・二八二／躬恒集Ⅳ・二六二

七四八 こゝろをきてみばこそわかめしらゆきもいづれかはなのちるにまがへる

【異同】ナシ

【現代語訳】もしも心づもりをして見たら見分けられるでしょうけれども。白雪もどれが花の散るのに紛れているのかしら。

【語句】○こゝろをきて 心置（お）きて。そのつもりで心を配る。「女郎花にほふあたりにむつるればあやなくつゆや心おくらん」（拾遺集・一五九）など、隔意を持つ、の意に解する場合も多いが、ここでは「心づもり」「心配り」の意味で読んでおく。所載欄の後撰集では「心あてに」とあり、躬恒の有名な「心あてに折らばや折

らむ」の歌を想起させる。○いづれか いったいどれが、の意。「河柳糸は緑にある物をいづれか朱の衣なるらん」(拾遺集・五五一・詞書「かうぶり柳を見て」)。

【所載】後撰集・冬・四八七

七四九 をしなべて雪のふれゝばわがやどのまつをたづねてとふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】あたり一面に雪が降ったので、待っている私の家の松を尋ねてくる人もいない。

【語句】○をしなべて おしなべて。あたり一面に。○まつをたづねて 松に「待つ」を掛ける。所載欄の後撰集では「すぎを尋ねて」。杉ならば、「わがいはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」(古今集・九八二)を踏まえた表現となる。なお、松は「すぎたてるやどをぞ人はたづねける松はかひなきものにざりける」(拾遺抄・三二五・題不知・よみ人知らず)や「わがやどのまつはしるしもなかりけりすぎむらならばたづねきなまし」(金葉集三奏本・四三八・赤染衛門)にあるように、杉に比べ甲斐のない木とされる。その逆転を狙った歌か。但し、「杉(杙)」と「松」は誤写の可能性もある。

【所載】後撰集・冬・四八九

七五〇 やまちかみめづらしげなくふるゆきのしろくやならむとしつもりなば

【異同】ふるゆきの―古郷の(大)

【現代語訳】山が近いので、珍しげもなく降る雪のように、(私の頭は)白くなることだろうか。年を経たならば。

【語句】○ふるゆきの 初句からここまでが「白く」を導く序。○としつもりなば 我が身が年経ることを、雪の縁で「積もる」とする。白髪を雪に喩える例は、「白頭如雪面猶紅」(菅家文草・路遇白頭翁)や「むばたまのわがくろかみに年くれてかがみのかげにふれるしらゆき」(拾遺集・一一五八・貫之、詞書に「師走の晦日がたに、年の老いぬることをなげきて」とある)などに見られる。

【所載】後撰集・冬・四九一／躬恒集IV・一〇三

【参考】新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注では「山近い所に住む人の立場に立って詠んだ歌であるが、屏



風歌の感じが強い」とする。

〔以上五首担当 杉本〕

七五一 ふるゆきはかつぞけぬらしあしひきのやまのたきつせこゑまさるなり

【異同】ナシ

【現代語訳】降る雪は降る一方で溶けているらしい。山の流れの音が（水かさを増して）音たかくなっているよ。

【語句】○かつ 「……しつ一方では」の意。「降る」一方「消える」。○あしひきの 「山」にかかる枕詞。

○たきつせ 滝つ瀬。水がわき上がる意の動詞「たぎつ」（四段活用）の連体形に「瀬」が伴った「たぎつ瀬」から生じた語。水が激しく流れる瀬。○こゑまさるなり 流水の音が大きくなることをいう。その例として「氷とくはるたちくらしみよしののよしのの滝のこゑまさるなり」（寛平御時中宮歌合・五）がある。所載欄の古今集には末句「おとまさるなり」とある。

【所載】古今集・冬・三一九

七五二 さゝのはにふりつむゆきのすゑを<sup>うれイ</sup>もみもとくたちゆくわが<sup>さかりはもイ</sup>こゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】笹の葉に次第に雪が降り積みその重みで茎の下が下がる、そのように元気がなくなつてゆく私の心よ。

【語句】○すゑ 葉の先。異文の「うれ」も先端の意。「小松がうれゆ淡雪流る」（万葉・二三一四）など。○もと 「末」に対し「もと」という。○くたちゆく 「くたつ」は清音。下降する。衰える。「わが盛りいたくくたち」（久多知）ぬ雲に飛ぶ葉はむともまたをちめやも」（万葉集・八五一（旧八四七）。「日斜 ヒクタチ」（名義抄）。初句からの文脈では笹の葉に雪が降り積み茎のもとが「下降する」意。「くたちゆくわがこゝろ」とは衰えてゆく心の意。

【所載】古今集・雑歌上・八九一／奥儀抄・五五三／和歌色葉・二八二

【参考】初句から「くたちゆく」までは、笹の葉の上の雪についての文脈。「くたちゆく」は共通音声部分。共通音声部分については、平野由紀子「古今和歌集表現論―要としての共通音声―」（『平安和歌研究』所収）参照。

七五三 月よには花とぞ見つる竹のはにふりしく雪をたれかはらはむ

【異同】ナシ

【現代語訳】月夜には（白い）花と見た。竹の葉に降りつもる雪は（美しくそのままにしておきたい）誰がうち払おうか（払いはしない）。

【語句】○ふりしく 二つの意味がある。（1）しきりに降る。「白雪のふりしく時はみ吉野の山下風に花ぞ散りける」（古今集・三六三）、（2）一面に降り敷く。「わが宿は雪ふりしきて道もなし踏み分けてとふ人しなれば」（古今集・三三二）など。ここは（1）。

【所載】夫木抄・七二六五／寛平御時后宮歌合・一五一／家持集Ⅰ・二七四／家持集Ⅱ・二八〇

七五四 まきもくのひばらもいまだくもみねばこまつがすゑにあはゆきぞふる

【異同】○くもみねは―くもらねと（大）

【現代語訳】巻向の檜原にもまだ雲がかからないのに、小松の枝先を淡雪が流れ降る。

【語句】○くもみねば 雲居ねば。「ゐ」は「ある」の未然形。雲のかかることを「雲ゐる」といった。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。「ば」はこの場合、逆接。

【所載】新古今集・春上・二〇／万葉集・二三二八（旧二三二四）巻向之 檜原毛末 雲居者 子松之末由 沫雪流 マキモクノヒハラモイマダクモミネバコマツガスエニアウキゾフル まきむくのひはらもいまだくもみねばこまつがうれゆあわゆきながる／夫木抄・一三九三三／時代不同歌合・一三／人麿集Ⅲ・一九四

七五五 あはゆきはけさはなふりそしろたへの袖まきほさむ人もあらなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】淡雪は今朝は降らないでおくれ、（濡れた）袖を（枕にして、共寝し）乾かしてくれる人もいないのに。

【語句】○あはゆき 淡雪。消えやすい雪。平安期の表記とちがい、万葉集では「泡雪（あわゆき）」。

なふりそ 「な……そ」は禁止を表す。今朝は降るな。○まきほさむ 「まき」は枕にする意の動詞「まく」の連用形。「ほす」は乾かす。○あらなくに ないことなのに。ないのに。「なく」は打消の助動詞「ず」のク語法。この歌の場合、逆接。

【所載】万葉集・二三二五（旧二三二）沫雪者 今日者莫零 白妙之 袖纏将干 人毛不有君 アワユキハケフハナフリシロタヘノソテマキホサムヒトモアラナクニ あわゆきはけふはなふりそしるたへのそでまきほさむひとあらなくに／人麿集Ⅰ・一五九／人麿集Ⅱ・一七四／人麿集Ⅲ・一九八

〔以上五首担当 平野〕

七五六 さゝのはにたれふりをゝひなけばともわすれんといへばましておもほゆ

或本

【異同】ナシ

【現代語訳】「上句の意味不明。なお、参考欄参照。」下句―忘れるであろうと言うので、いっそういしく思われる。

【語句】（所載欄に掲出した古今六帖歌、万葉集歌は、当該歌の原初形か類歌と思われる。これを参考にして語句を検討すると、以下のようになる。）○たれふりをゝひ 「はだれふり覆ひ」の「は」が欠落したものか。「はだれ」は雪や霜の薄くまだらに置いたものをいう。所載欄の万葉集西本願寺本訓では「はだれふり覆ふ」。○なけばとも 意味不明。「けなばかも」の文字順のいれかわり、及び「か」と「と」の違いか。二句までが、薄雪が消える意から、三句の「消なば」の「消（ケ）」を起こす序詞。「けなばかも」は、薄雪が消えるように自分の命が消えたら、即ち、死んだら。○わすれんといへば 自分が死んだときには忘れるでしょう（生きている限りは、決して忘れない）と（女が）いうので。所載欄の袖中抄では「こひんといはば」。○おもほゆ いとしく思われる。所載欄の袖中抄では「おもはん」。

【所載】古今六帖「わすれず」二八八―／万葉集・二三四一（旧二三三七）小竹葉尔 薄太礼零覆 消名羽鴨将忘云者 益所念 ササノハニハダレフリオホフケナバカモワスレムトイヘバマシテオモホユ ささのはにはだれふりおほひけなばかもわすれむといへばましておもほゆ／袖中抄・二五二、七九〇

【参考】所載欄の万葉集二三四一番を現代語訳すれば、「笹の葉に、うつすらと雪がふり覆い、その雪が消えるように、私の命が消えたらば、あなたを忘れることもありましようなどと言うものだから、一層いとしく思われることだ。」となる。

なお、人麿集Ⅱ・一七八番にも「ささのはにだれふりおほひけながくもわすれずといはゞわれもたのまむ」という歌がある。

## 七五七 ひとめ見し人にこふらくあさぎりのふりくるゆきのけぬべくおもほゆ

【異同】 あさぎりの―あまぎりの（御・桂） けぬへくおもほゆ―けぬへおもほゆ（大）

【現代語訳】 一目見た人に恋することは、（朝霧の立ち込めるように降ってくる雪の消えるように、）命も消えるほど切々とした思いだ。

【語句】 ○こふらく 「恋ふ」のク語法、恋ふこと。○あさぎりの 所載欄の万葉集では「あまぎらし」。「天霧らす」は空を一面に曇らせる意。異同欄の「あまぎりの」は万葉集「天霧之」からきたものか。所載欄の人麿集では「かきくらし」（辺りを一面に暗くする）意。○けぬべく 身も消えんばかりに激しく。三、四句は五句の「消（ケ）」をおこす序詞。所載欄の人麿集では五句「きえそかへれる」。

【所載】 万葉集・二三四四（旧二三四〇） 一眼見之 人尔戀良久 天霧之 零来雪之 可消所念 ヒトメミシヒトニコフラクアマギラシフリクルユキノケヌベクオモホユ ひとめみしひとにこふらくあまぎらしふりくるゆきのけぬべくおもほゆ／人麿集Ⅱ・五一六

## 七五八 わがせこがことうつくしみいもゆけばもひきもしらずゆきなふりそも

【異同】 ナシ

【現代語訳】 私の愛する夫の言葉につくしたやさしい心にひかれて、私が出て行ったら、裳を引きずって歩いた跡がはつきりつくでしょう。だから、雪よ降らないでくれ。「第四句は万葉集により「もひきしるけむ」として解した。」

【語句】 ○せこ 女性が兄または弟を言う、妻が夫を言う、恋人が恋する男を、また、男同士が親しんで呼ぶ語。

○こと ことば。○うつくしみ やさしくする。動詞「うつくしむ」の連用形。「うつくし」は、本来、親の子に対する、年長者の幼少者に対する愛情、また、夫婦間のいたわりを表す語。所載欄の万葉集新訓では「うるはしみ」。○いも 男が女を親しんで言う語。主として、妻、恋人に対して。また、女同士が親しんで言う語。ここでは、女自身をさすが、初句の「せこ」に対して「いも」を用いたか。また、所載欄の万葉集本文と同様の「い

で」が書写の誤りで「いも」となったか。○もひき 裳の裾を引きずること。ただし、平安時代の女子の正装の裳ではなく、上古の女子の腰から下にまとったものを指す。○しらず 「気にもかけず」の意か。意味がうまくつながらないので、所載欄の万葉集本文の「しるけむ」で解する。「しるけむ」は「著し」の未然形＋推量の助動詞「む」で、はつきりつくでしようの意。○なふりそも 「な」は副詞。「そ」は終助詞。「な―そ」は、「…してくれるな」の意。「も」は終助詞、感動を表す。所載欄の万葉集西本願寺本訓では「なふりこそ」、新訓では「なふりそね」。

【所載】万葉集・二三四七（旧二三四三） 吾背子之 言愛美 出去者 裳引将知 雪勿零 ワガセコガコトウツクシミイデユケバモビキモシラムユキナフリコソ わがせこがことうるはしみいでてゆかばもびきしるけむゆきなふりそね

七五九 むめのはなそれともみえずふるゆきのいはしろけむなまづかひやくは

【異同】 いはしろけむな―いはしろそむな（桂）

【現代語訳】 梅の花がそれとも見分かぬほどに降る雪、その降る雪が目立つようにはつきり目立つだろうな。あなたの許に使いをやったら。

【語句】 ○それともみえず これが花だとはつきり見分けがつかない。梅の枝に雪が積もって、花と雪の区別がつかないことを詠んだ例には、「むめのはなそれともみえず久方のあまぎる雪のなべてふれれば」（拾遺集・一二・人麿）、「わがせこに見せんとおもひしむめのはなそれともみえずゆきのふれれば」（金玉集・七・山辺赤人）などがある。○いはしろけむな 「は」は所載欄の万葉集本文と同様の「いちしろけむな」の「ち」が「者（は）」の行書体と見誤られたことによるか。「いちしろけむ」は、「著けむ」で、はつきりするだろうの意。三句までが、四句にかかる序詞。○まづかひ 間使ひ。男女の間を消息などを持って往来する使者。○やくは 「やらば」の誤写か。遣わしたらば。

【所載】万葉集・二三四八（旧二三四四） 梅花 其跡毛不所見 零雪之 市白兼名 間使遣者 一云 零雪尔間使遣者 其将知名 ウメノハナソレトモミエズフルユキノイチシロケムナマツカヒヤラバ 一云、フルユキニマツカヒヤラバソレシリナムナ うめのはなそれともみえずふるゆきのいちしろけむなまづかひやらば 一云、ふるゆきにまづかひやらばそれとしらむな

七六〇 あまをぶねとませのゝべにふるゆきのけながく思ひしきみをとする

【異同】ナシ

【現代語訳】とませの野辺に降る雪が消える、長い間思い続けた君のおいでになる音がするよ。

【語句】○あまをぶね 海人の乗る小舟。舟が泊まることを「泊（は）つ」というところから、「はつ」にかか  
る枕詞。○とませ 泊瀬（はつせ）の「泊」を「とま」と読んだ本文。地名「とませ」は、以下のように和歌に  
詠まれるが、場所を確定できない。泊瀬と同じと見られる。「かくらくのとませの山の山ぎはいさよふ雲はい  
もにかもあらん」（古今六帖・八六一）、「夕されば浦風寒し海人を舟とませの山に雪ぞ降るらし」（新統古今集・  
七〇五、実朝）、「吹き送る風をたよりの海人をぶねとませのやまに花の香ぞする」（新六帖・三四八）、「あまを  
舟とませの山もしろたへにひばらの雪の道見えぬまで」（夫木抄・一三九四〇）。所載欄の万葉集では「初瀬の山  
に」。八六一番歌参照。○けながく 「消（ケ）」と「日（ケ）」の掛詞。上三句は「けながく」を導く序。日数  
長く。○をと おと。馬、または車の音。人の訪れを知らせるもの。

【所載】万葉集・二三五一（旧二三四七）海小船 泊瀬乃山尔 落雪之 消長戀師 君之音曾為流 アマヲブネ  
ハツセノヤマニフルユキノケナガクコヒシキミガオトゾスル あまをぶねはつせのやまにふるゆきのけながくこ  
ひしきみがおとぞする／夫木抄・六四五

〔以上五首担当 斎藤・三浦〕

七六一 とし月のすぎゆきくれば草も木もおいこそすらししろく見ゆれば

【異同】すぎゆきくれば―過行くまは（大）

【現代語訳】年月が過ぎ去つてくると、草も木も年老いるらしい。（雪が降り積もって）白く見えるので。

【語句】○すぎゆきくれば 過ぎ去つてくると。他に用例はみられない。傍記異文「すぎゆきふれば」では、  
年月が過ぎゆくことに雪が降ることが掛けられ、草木が白く見える理由がより明確となる。「雪」の項に分類さ  
れた歌でもあり、所載欄の新撰万葉集の本文「雪降往者（ゆきふりゆけば）」が本来の形であったと考えられる  
が、本文通りに解した。

【所載】新撰万葉集・四三八

あられ

七六二 かきくもりあられふりしけしらたまをしけるにはとも人の見るべく

【異同】ナシ

【現代語訳】空が曇り、霰が一面に降り頻って欲しい。白玉を敷いた庭であると人が見るように。

【語句】◎あられ 空中の水蒸気が氷結し白色の粒となつて降ってくるもの。初冬の景物。寒い夜の孤独感をつのらせるもの、玉のごとく美しいものとして詠まれる。○かきくもり 掻き回したように空が一面に曇り。所載欄の後撰集、新撰万葉集では他動詞「かきくらし」であるが、本文通りとした。○ふりしけ 降り頻け。降り頻って欲しい。命令形で霰に呼びかけた形。○しらたま 白玉。霰の見立て。「宿はあれてあられふれ」(マ)ば白玉をしけるがごとくもみゆるにはかな」(和泉式部集・六八)、「ねやのうへにあられもふれば時のほど心にもあらぬ玉をこそしけ」(相模集・二七〇)。

【所載】後撰集・冬・四六四／新撰万葉集・一六五／寛平御時后宮歌合・一一八／和歌初学抄・八〇／秋萩集・八

七六三 あられふりたまとはみれどひろいをきてころのごとくぬかばけぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】霰が降り、玉と思つて見るが、拾つておいて思うままに取り出してみたら消えてしまふに違いない。

【語句】◎あられふりたまとはみれど 霰を玉に見立てる。七六二番歌参照。○ひろいをきて 拾ひおきて。拾つておいて。○ころのごとく 意のままに。思う通りに。心と同じように。「ひく琴の音」ことに思ふ心あるを心のごとく聞きもなさなん」(貫之集・四三七)。○ぬかばけぬべし 取り出してみると、きつと消えてしまうだろう。「ぬかば」の「ぬく」は選んで取り出す。「玉」の縁語だが、ここでは貫き通す意ではない。

【所載】家持集Ⅰ・二七一／家持集Ⅱ・二七七

七六四 わが袖にあられたばしりまきかくしけたずてあらんいもがみむため

【異同】まきかくし—まきかへし(御・大)

【現代語訳】私の袖に霰がばらばらとどび跳ね、それを包み隠して消さないでおこう。あの娘が見るように。

【語句】○たばしり 「た」は接頭語。飛び散つて。飛び跳ねて、「走る」の連用形。所載欄の万葉集の現代訓である「あられたばしる」の方が解しやすいが、本文通りに解した。○まきかくし 巻き隠し。袖などに包み隠す。○けたずてあらん 消さないでいよう。「消つ」は「消す」の古語。「てあり」は、動作・作用の存続の状態を表す。……いる。……ある。「ん」は意志。

【所載】万葉集・二三一六（旧二三一一）我袖尔 電手走 卷隠 妹為見 ワガソデニアラレタバシリ マキカクシケズカモアレヤイモガミムタメ わがそでにあられたばしるまきかくしけたずてあらむいもがみむため／人麿集Ⅲ・一九一／綺語抄・五六

七六五 あられふりいたまかせ吹きむきよにはたやくよひも我ひとりねむ

【異同】さむきよに―さむよに（大）

【現代語訳】霰が降り、板間から隙間風が吹いてきて、寒い夜にやはり今夜も私は一人で寝るのだろうか。

【語句】○いたまかせ吹 板間風吹き。「板間」は板と板とのすき間。多く粗末な家、荒れた家の描写に用いる。○はたや 「はた」は、二つ並んだ状態があるときに、もしや一方であるかなどと判断する場合に用いる。あるいは。ひよつとして。やはり。「や」は疑問。所載欄の万葉集では「旗野尔（はたのに）」。

【所載】万葉集・二三四二（旧二三三八）霰落 板敢風吹 寒夜也 旗野尔今夜 吾独寐牟 ミゾレ（アラレ）フリイタマカゼフキサムキヨヤハタノニコヨヒワガヒトリネム あられふりいたまかせふきさむきよやはたのにこよひわがひとりねむ／人麿集Ⅱ・一七九／和歌童蒙抄・九六

〔以上五首担当 中野〕

七六六 もののうへにあられちりしきいやましにあらはますともしのをながく

【異同】あれはますとも―あれはますとて（大）

【現代語訳】霜の上に霰が散りしいて、ますますはげしく、私はあなたのもとにやって来ますよ、将来もずっと。

【語句】○しものうへに 霜がおりたその上に。○あられちりしき 霰が降つて散り敷いて。「あられ」の歌で、「玉」が「散る」とは詠まれるが、霰が「散る」と詠む例は、中世以降にしか見えない。所載欄の文献すべて「あ



られたばしり」。○いやましに いっそう増さつて。○あれはますとも 「荒れは増すとも」とし、天候が荒れると解しても、家が荒れ増さるとしてもかなり無理がある。「しがらきのと山のあられふりすさびあれゆくころの雲のやかな」（拾遺愚草・二四一七）、「霰降るあれたる宿にながめつつみやまのけしき思ひこそやれ」（重之女・五八）。こゝは、所載欄の万葉集、綺語抄、和歌童蒙抄・九七の「我（あ）れは参（まゐ）こむ」（私はますます足繁く参上しよう）の方が歌として意が通る。○としのをながく 「年の緒」は、年月が長く続くのを緒にたとえていう。将来もずっと。この句が掛かつていく言葉がなく、所載欄の万葉集を参考に現代語には意識した。

【所載】万葉集・四三二二（旧四二九八）霜上尔 安良礼多波之里 伊夜麻之尔 安礼婆麻為許牟 年緒奈我久（古今未詳） シモノウヘニアラレタバシリイヤマシニアレハマキコムトシノヲナガク しものうへにあられたばしりいやましにあれはまゐこむとしのをながく／綺語抄・五七／和歌童蒙抄・八〇、九七／古来風体抄・二〇四

【参考】所載欄の万葉集の詞書・左注によると、天平勝宝六（七五四）年正月四日、少納言大伴家持宅の祝賀の宴に大伴氏の一族が集まったときに詠まれた一首で、作者は大伴千室とある。

### こほり

七六七 ほりてをきしいけはかゞみとこほれるをみることなくとしぞへにける

【異同】ナシ

【現代語訳】掘り作っておいた池は鏡のように凍っているけれども、鏡なら影が映って見えるものなのに、あの人の姿を見ることもなく年月がたつてしまった。

【語句】◎こほり 水が氷点下の寒さで固体化したもの。和名類聚抄（真福寺本）に「水寒凍結也」とある。名詞「氷」、動詞「こほる」で詠まれる。凍る冬の氷や融ける春の水など感覚的に季節を捉えたり、心情に絡んで比喩的にも詠まれる。○いけはかゞみとこほれるを 「と」（格助詞）は、状態を指示して下に続ける用法で、「……のように、……として」の意。○みることなくて 鏡なら映る影を見るのだが、姿を見ることなくて、の意。

【所載】新撰万葉集・一五七／寛平御時歌合・一二七

七六八 みづのおもにあやふきみだるはるさめやいけのこほりをけふはとくらん

かぜい

【異同】はるさめや—春風や（大）  
かせイ

【現代語訳】水面に紋様を吹き乱す春風は、池の水を今日とかがしていることであろう。

【語句】○あやふきみだるはるさめ 「あや」は、水面に描かれる模様。「ふきみだる」は他動詞。吹いて乱れさす。なお、吹き乱すのが「春雨」では歌意が通らず、また水をとかすのも春の風なので、ここは、傍書異文・大久保本・所載欄の歌集のように「春風」とありたいところ。一応「春風」として現代語訳した。○けふはとくらん 所載欄の後撰集は同じだが、友則集に「けさはとくらん」。

【所載】後撰集・春上・一一／友則集・一

【参考】作者名がないが、所載欄の歌集により紀友則の歌と知られる。なお、当該歌は、白氏文集卷二八「府西池」の「池有ニ波文一氷尽開、春風春水一時来」の翻案という。また、伊勢集の「水のおもにあやおりみだる春雨や山の緑をなべて染むらん」（伊勢集Ⅰ・一〇三）との類似が指摘されている。

七六九 ふるかはのうへはこほれる我なれやしたにながれてこひしかるらむ  
ゆイ

【異同】ナシ

【現代語訳】表面が凍っている布留川が私であるからか。それで氷の下には水が流れているように、私も心の中では泣かれるほどに恋しいのだろう。

【語句】○ふるかはの 「布留川」は、天理市布留の地を流れる川。傍書異文や所載欄の歌集「冬川の」の方が解しやすい。○我なれや こゝで切れる。六七二番歌参照。○したにながれて 「した」は、水面下と心中の意とを掛け、「ながれて」は、「流れて」と「泣かれて」とを掛ける。「したにのみながれわたるは冬かはのこほれるみづとわれとなりけり」（敦忠集・二九）とほぼ同内容の歌。○こひしかるらむ 所載欄の歌集に「こひわたるらむ」。

【所載】古今六帖「人しれぬ」二六七一／古今集・恋二・五九一

【参考】作者名はないが、所載欄の古今集には作者「むねをかのおほより（宗岳大頼）」とある。

七七〇 こほりこそいまはすらしもたきつせのたぎつをとさへをとほたえぬや  
たえにけりイ

【異同】いまはすらしも—今は涼しも（大）

【現代語訳】今は水が凍ったようだな。浅瀬をわき返る水音までもすつかり聞こえなくなっちゃった。

【語句】○こほりこそいまはすらしも 助動詞「らし」は、確かな根拠に基づいて現在の状況を推量する。○たきつせのたぎつをとさへをとしたえぬや 「たきつせ」は、激しく流れる段差のある浅瀬。「たぎつ」は、水が激しくわきあがる、の意。「たきつせ」「たぎつ」と繰り返し、また、「音さへ」「音は」と繰り返す。聞こえていた激しい水音と今の静寂とを対照させる。「や」は詠嘆。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「氷こそ今はすらしもみよしの山のたきつせこゑもきこえず」（後撰集・冬・四七七）。なお、「氷とくはるたちくらしみよしののたきのこゑまさるなり」（寛平御時中宮歌合・五）が、当該歌と反対の状況を詠む。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

七七一 あまのがはふゆはそらまでこほればやしにたぎつをとだにもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川は、冬は空まで凍るからだろうか、石のあいだに水のわき返り流れる音さえもしない。

【語句】○あまのがは 銀河。天上を流れる川と思われていた。○いしま 石と石とのあいだ。「石間ゆく水の白波たちかへりかくこそは見めあかずもあるかな」（古今集・六八二）○たぎつ ここでは、石間をゆく水が石にあたってわき返り流れるさま。

【所載】後撰集・冬・四八八／新撰万葉集・四〇〇／寛平御時后宮歌合・一二〇

七七二 かぜはやみ水のおもにかゝるますかゞみくもりわれなんものにやはあらぬ<sup>たらい</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】風が激しいので、水の面にかかっているあのますがみは、曇ったりわれたりするものでありはしないかね。

【語句】○かぜはやみ 風の勢いが激しいので。「み」は形容詞および形容詞型活用語の語幹に付く接尾語。原

因・理由を表わす。この初句は、文脈としては下句へつづく。○ますかゞみ 真澄鏡。澄みきった鏡の意、「ま  
そかがみ」ともいう。ここは凍結した水面の水を鏡と見たもの。○くもりわれなん 曇りかつ割れるであろう。  
○ものにやはあらぬ ものでありはしないか。ものなのだ、の意。「やは」は反語。

【所載】ナシ

七七三 ふゆのいけにすむにほどりのつれもなくこほりのしたをわれはかよはん  
にイ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬の池に棲む鴉鳥が、なにごともないようすで氷の下をくぐるように、わたしはそしらぬふりをし  
て、人目につかぬようにあなたのとこに通いましょう。

【語句】○にほどり かいつぶり。湖沼に棲む水鳥で、水によく潜り魚をとる。初・二句は「つれもなく」にか  
かる序詞。○つれもなく なにごともないふうで。そしらぬふりをして。○こほりのしたを 「氷の下」に、表  
面に見えないところの意の「した」を掛ける。傍記「こほりのしたに」の方が、歌意はなだらかに通じる。

【所載】古今集・恋三・六六二／後撰集・冬・五〇二／躬恒集Ⅰ・二二九・二九七／躬恒集Ⅱ・一六七／躬恒集  
Ⅲ・三二一／躬恒集Ⅴ・一一一／和歌初学抄・七一

七七四 なきつめし冬のなみだはこほりにきとけんはる日は身もやながれん  
ベイ

【異同】ナシ

【現代語訳】泣き詰めた冬の涙は、すっかり凍ってしまいました。これがとける春の日になったら、（おびただ  
しい涙の量に）身も流れてしまうことでしょうか。

【語句】○なきつめし 泣き詰めし。限度いっぱいまで泣いた、の意。「詰め」は下二段活用他動詞、すきまな  
くいつぱいにする。こと。「わたつみと人や見るらむ逢ふこと」のなみだをふさになきつめれば」（大和物語・一四  
四段・二三一）。○身もやながれん 身も流れてしまうことだろうか。「流れん」に「泣かれん」を掛けた。

【所載】ナシ

七七五 なみだ川身なぐばかりのふちはあれどこほりとけねばかげはうかばず

【異同】 かけはうかはすーかけはうこかす（大）

【現代語訳】 この涙川には、身を投げることもできそうな深い淵はあるけれども、氷が張っていてとけないので、（身を投げてても）この身の姿は川の面には浮かばない。

【語句】 ○なみだ川 涙がおびただしくあふれることを誇張して川にたとえた語。恋歌によく用いられる。○ふち 水の流れがよどみ、水深が深くなっているところ。○かけはうかばず 姿は川の面には浮かばない。

【所載】 後撰集・冬・四九四／新撰万葉集・一八九／寛平御時后宮歌合・一四二

〔以上五首担当 山下〕

七七六 あさひさすかたやまかげのいたまにもてのうちさむきこほりとかなむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 朝日がさす片山陰の板屋根葺きの粗末な我が家にも、朝日の光で手のひらを凍えさせる氷を溶かしてほしいことです。

【語句】 ○かたやま ひとつだけぼつんと立っている山。または一方が山か斜面になっている地形の山の側。「ひさぎおふる片山陰にしのびつつふきくるものを秋の夕風」（新古今集・二七四）。○いたまにも 「いたま」は、板屋根の葺き板などの隙間や裂け目。雨や月光などが漏れる粗末な家をいうことが多い。「わがやどのしのぶぐさおふるいたまあらみ」（古今集・一〇〇二）。傍記異文と所載欄の貫之集は「いまだにも」であり、「今でさえも」の意となる。○てのうち 手のひら。貫之集は「てのうら」。○こほりとかなむ 氷をとかしてほしい。貫之集の詞書によれば除目に漏れ善処を願う意をこめた歌。

【所載】 貫之集Ⅰ・八三一／貫之集Ⅱ・三二

火

七七七 よとゝにもえゆくふじのやまよりもたえぬおもひはわれぞまされる

【異同】 ナシ

【現代語訳】 常に燃えている富士の山よりも、絶えない君への思いは私の方が勝っているよ。

【語句】◎火 用例としては富士の火、海人の焚く火、漁火、衛士の焚く火、蚊遣火、などいろいろあるが、思いひ（ひ）と掛詞にし、これらの火によそえて胸の熱い思いを詠むものが多い。○よとゝもに 常々。いつも。○ふじのやま 駿河国の歌枕。噴火、噴煙を詠むものと、雪を詠むものが多い。○おもひ 恋の熱い思い「ひ」と「火」の掛詞。

【所載】詞花集・恋上・二〇二／新勅選集・恋二・七一〇／新撰万葉集・四七八／寛平御時后宮歌合・一八一

七七八 みわたせばあかしのうらにもゆるひのほにぞいでぬるをイいもこひつゝイしくて

【異同】ナシ

【現代語訳】見渡すと明石の浦にあかあかと燃える火が見える。あのように私の思いは、はつきりと人目についてしまった。あの娘が恋しくて。

【語句】○あかしのうら 播磨国の歌枕。明石大門を隔てて淡路島に対している。白砂青松の美景で名高い。○もゆるひ 藻塩焼く火。漁火。○ほにぞいでぬる 目につくようになつてしまった。「ほ」は稲穂、山の峰などのように突き出たもの。三句まで「ほ」にかかる序詞。○いも 妻。恋人。

【所載】万葉集・三二九（旧三二六）見渡者 明石之浦尔 焼火乃 保尔曾出流 妹尔恋久 ミワタセバアカシノウラニタケルヒノホニゾイデヌルイモニコフラク みわたせばあかしのうらにともすひのほにぞいでぬるいもにこふらく／夫木和歌抄・二一六一九

七七九 わがやどのしもよのかぜをさむみこそあまのたくひをよそにながむれ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の霜夜の風はあまりに寒いので、遠くの海人の焚く火を見ても心温まるどころか、関係のないものとして眺めることだ。

【語句】○かぜをさむみこそ 風がとてもさむいので。○あまのたくひ 漁夫が夜、漁をする時船上で焚く火。

○よそに 無縁なものとして。「海人の焚く火」は「燃え」「煙」とともに詠まれることが多いが、「よそ」の例として次のものがある。「すずきつるあまのたく火のよそにだにみぬ人ゆゑにこふるこのごろ」（古今和歌六帖「すずき」一五一九）。

【所載】ナシ

七八〇 ひとおもふころのをきは身をぞやくけぶりたつとはみえぬものから  
こふるイ

【異同】ナシ

【現代語訳】人を恋い慕う熱い思いの残り火は、今もこの身を焼いている。煙が立つようには見えないものの。  
【語句】○をき 熾き。灰のなかでおこっている炭火。薪などが燃え終わって焰がでなくなり炭火のようになったもの。「心の熾き」は表面は平静を装っていても、心の中は赤く燃えている思いをいう。○けぶりたつとはみえぬものから 人目につくとは見えないけれども。

【所載】新撰万葉集・二二三／寛平御時后宮歌合・一六九／袋草子・五九八／八雲御抄・五五

〔以上五首担当 林〕

七八一 きみがもるゑじのたくひのひるはたへよるはもえつゝ物をこそおもへ  
みかきもりイ きえて

【異同】きみかもる―みかき守（大） ひるはたへ―ひるはきえ（大）  
みかきもりイ きえて

【現代語訳】あなたが守る、衛士の焚く火のように、昼は絶えいるばかりになり、夜は恋の思いに燃え続けて、物思いをしている私です。

【語句】○きみがもる 君が守る。所載欄の文献のほとんどに「みかきもり」、もしくは「みかきもる」とあり、和歌童蒙抄には「きみまもる」と見える。○ゑじ 衛士。諸国から選拔され衛士府（弘仁二（八一）年「衛門府」と改称）に配属された兵士。夜は火を焚いて宮門などの警護に当たった。「みかきもる衛士のたく火にあらねどもわれもころのうちにこそ思へ」（和漢朗詠集・五二六）。

【所載】詞花集・恋上・二二五／後葉集・二九四／俊成三十六人歌合・九八／時代不同歌合・二二三／百人秀歌・四八／百人一首・四九／和歌童蒙抄・五一五／和歌色葉・二九

【参考】作者名はないが、所載欄の文献では作者を大中臣能宣とする。

七八二 なつくればやどにふすぶるかやりびのいつまでわが身したもえにせん  
をイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏が来ると家でくすぶる蚊遣火のように、いつまで私の身は、ひそかに恋の思いを燃やし続けるのだろうか。

【語句】○かやりび 蚊遣火。蚊を追い払うためにいぶす火。○したもえ 下燃え。この歌では、蚊遣火が表面に燃え立たないでくすぶることと、心の中で人知れず恋い焦がれることの両意を掛けて、三句目までは「下燃え」を導く。「かやり火のしたに燃えつつあやめ草あやめも知らぬ恋のかなしき」（好忠集・五三九）。

【所載】古今集・恋一・五〇〇／新撰和歌・二五六／俊頼髓脳・三一五

【参考】万葉集二六五七（旧二六四九）番歌、古今六帖・七八三番歌と類想。

七八三 あしひきの山田もるを<sup>田に</sup>のをくかひは<sup>のイ</sup>したこがれのみ<sup>つゝ</sup>われ<sup>が</sup>こひ<sup>ふらくは</sup>をらむ

【異同】したこがれのみ―下こかれつゝ（大）

【現代語訳】山の田の見張りをする男が置く蚊遣火はくすぶるばかり、私はそれと同じように、ひそかに恋い焦がれたままでいるのだろう。

【語句】○あしひきの 「山田」に掛かる枕詞。○山田もるを 山田の番をする農夫。○かひ 蚊火。蚊遣火のこと。また鹿火（鹿や猪を追い払うために焚く火）とする説もある。中世における万葉語「かひ」「かひや」の撰取態度については、平田英夫「二条派歌人の万葉語撰取について―「かひや」を中心に―」（『和歌文学研究』一九九六年十二月）に詳しい。○したこがれ 下焦がれ。「か火」の炎が表に見えないで底の方でくすぶることと、「われ」が心の中でひそかに恋い焦がれることを重ね合わせて言ったことば。「かやり火のさよふけがたの下こがれ苦しやわが身ひと知れずのみ」（好忠集・一六〇）。

【所載】新古今集・恋一・九九二／万葉集・二六五七（旧二六四九）足目木之 山田守翁 置蚊火之 下粉枯耳 余恋居久 アシヒキノヤマダモルヲノオクカヒノシタコガレノミワガコヒヲラク あしひきのやまだもるをちがおくかひのしたこがれのみあがこひをらく／人麿集Ⅰ・一五／人麿集Ⅱ・二九七／人麿集Ⅳ・一五二／古来風体抄・一三二／秀歌大体・一〇一／俊頼髓脳・三一六

【参考】人麿集にあり、新古今集も作者を「人麿」とするが、万葉集に作者名はない。

七八四 めたつく<sup>らいにイ</sup>とあまのともせるいざりびのほにかいでなむわがした思を



【異同】ナシ

【現代語訳】漁に努めようと海人がもしている漁り火のように、はつきり表に現れてしまうのだろうか、私のひそかな思いであるものを。

【語句】○あたつく 「苦労する」「努める」意の「いたつく」として解釈した。所載の万葉集では「しびつく」となっている。傍記異文によれば「いたづらに」となるが、『校本万葉集』（佐々木信綱編・岩波書店）の「諸説」に、「代精」「イタズラニ」「ト訓ズルヲ否トス」と見える。○あま 海人。漁夫。漁業や海辺での塩焼きで生活している人。○ほにかいでなむ 秀にか出でなむ。「秀に出づ」は、表に現れ出る、人目につく意。「秀」に「火」を掛け、三句目までは「ほ」を導く序。「見渡せば明石の浦にともす火のほにそ出でぬる妹に恋ふらく」（万葉集・三二九（旧三二六））。○した思 表面に出さないで心に秘めた思い。「湊葦にまじれる草のしり草の人皆知りぬ我が下思ひは」（万葉集・二四七二（旧二四六八））。

【所載】万葉集・四二四二（旧四二二八） 鮪衝等 海人之燭有 伊射里火之 保尔可将出 吾之下念乎 シビツク（カニサス）トアマノトモセルイザリヒノホニカイデナムワガシタオモヒヲ しびつくとあまのともせるいざりひのほにかいださむわがしたもひを

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集には、大伴家持が「見漁夫火光歌一首（漁夫火光を見るの歌一首）」として見える。

七八五 もしほやくあまくらめやとまつほどにあなけふすまのうらにたくひや

【異同】ナシ

【現代語訳】藻塩を焼く海人が来るだろうかと思つて待つ間に、ああ、今日、この須磨の浦で焚いている塩焼きの火よ。

【語句】○もしほやく 「もしほ（藻塩）」は、海藻から採る塩。海藻に海水をかけて焼き、それを水に溶かし、その上澄みを釜で煮詰めた。「もしほ焼くけぶりになれし須磨のあまは秋たつ霧もわかずやありけむ」（中務集・二七）。○あま 海人。七八四番歌参照。○くらめや 語義がとりにくい。動詞「来（く）」に推量の助動詞の已然形「らめ」と反語「や」が付いたものか。来るだろうか、いや来ないかもしれない、というような気持ちか。○すま 須磨。摂津国の歌枕。現在の兵庫県神戸市須磨区の一部。須磨の浦の海人や塩焼きがよく歌に詠まれた。

「須磨のあまの塩焼く煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり」(古今集・七〇八)、「須磨のうらの塩焼くけぶり風をいたみたちはのぼらで山にたなびく」(古今六帖・七九七)。

【所載】ナシ

【参考】契沖は、「是はまくらと、ふすまとをかくし題によめり。」『和歌拾遺六帖』としている。それを証明できる資料的根拠はないが、あるいは、そうかもしれない。

〔以上五首担当 長戸〕

七八六 なにはめのこやによふけてあまのたくしのびにだにもあふよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】難波女の小屋で夜更けまで海人のひっそりと焚いている火のように、せめて人目につかずにでも逢いたいのだなあ。

【語句】○なにはめ 難波の海女。藻を焚くことから「火」「煙」などの語を伴うことが多い。「なにはめの衣ほす」とかりてたく蘆火の煙たため目ぞなき」(貫之集・一五九)。所載欄の新勅撰集では傍記異文と同じく「なにはめの」とする。○あまのたく 初句からここまでが「しのび」の「ひ(火)」を導く序詞。○しのび 「忍び」に「火」を掛ける。「なにはがたすくもたく火のうちのびしたもえにてやよをばつくさん」(古今六帖「人知れぬ」二六六八)。○あふよしもがな 逢いたいのものだ。結句に用いられる例として既出の古今六帖・五二二のほか「敷島の大和にはあらぬから衣ころもへずしてあふよしもがな」(古今集・六九七)、「沼水のなみには立てて底深み草がくれつつあふよしもがな」(古今六帖「水」一四六一)などがある。

【所載】新勅撰集・恋一・六三三

七八七 をり／＼にうちてたくひのけぶりあらばこころざすかをしのべとぞおもふ

【異同】○うちてたくひの―うちて焼火の(大)

【現代語訳】旅の先々で火打ちを打って焚く煙の出る折があったら、あなたのことを思って贈るこの薫物の香りで私のことをなつかしんでほしいものだと思います。

【語句】○たくひの 火打ち石をたく。火打ちは旅の必需品。○こころざすか 「こころざす」は、心をこめ

て物を贈るの意。「か」は薰物の「香」。旅の縁で「さすが（鑑の金具）」を響かせる。「武蔵鑑さすがにかけてたのむには問はぬもつらし問ふもうるさし」（伊勢物語・一三段）。○しのべとぞ思ふ「命令形＋とぞ思ふ」は貫之の好みであった。「君さらば山にかへりて冬」ことに雪ふみわけておりよとぞ思ふ（貫之集・四一〇）、「あふ事を月日にそへて待つ時はけふ行末になりねとぞ思ふ」（貫之集・五七九）、「ゆくけふもかへらん時も玉鉾のひきものかみをいのれとぞ思ふ」（貫之集・七三二）など。

【所載】後撰集・離別・一三〇四／貫之集Ⅰ・七一九／貫之集Ⅱ・五九

【参考】所載欄の後撰集詞書には「陸奥へまかりける人に、火うちつかはすとて、書きつけ侍りける」とあり、作者を貫之とする。貫之集では依頼の贈り主を藤原師氏（忠平男）とする。

七八八 人こふるなみだははるぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のことを恋しく思つての涙は春になるとぬるむものですね。絶えることのない思いの「火」が沸かしたに違いないことです。

【語句】○ぬるみける 春になると涙もあたたかくなるという趣向。原因は「おもひ」の「火」にある。○わかす 涙を沸かす発想としては「おもひせくむねのほむらはつれなくてなみだをわかす物にざりける」（蜻蛉日記・一六〇）が知られる。

【所載】後撰集・恋一・五四六／伊勢集Ⅰ・二七九／伊勢集Ⅱ・三〇三／伊勢集Ⅲ・一四五

【参考】所載欄の後撰集では藤原時平の「心ざしありながら、え逢はず侍りける女のもとにつかはしける」という詞書を持つ「頃をへて逢ひ見ぬときは白玉の涙も春は色まさりけり」に対する伊勢の返歌（伊勢集Ⅰも同様）とする。この場合、上句は、相手の涙がぬるくなつた、ととれる。しかし伊勢集Ⅱ、Ⅲではこの時平の歌とは無関係の位置にある。ここでは単独詠として解しておく。

けぶり

七八九 いせのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり

【異同】○いせのあまの―すまのあまの（大）

【現代語訳】伊勢の海人の塩を焼く煙が、風が強いので思ってもみない方向になびくように、あの人の気持ちも思いもかけぬ方向になびいてしまったことだ。

【語句】◎けぶり 物を燃やしたときに生じる粒子。和歌では「なびく」「立つ」といった語とともに詠まれることが多く、寄せる思いの喩えの代表的な一。題としては人麿集Ⅲ・六八〇に見える。また伊勢集・七三には「あまのいへよりけぶりとつ」という絵柄を詠んだ屏風歌「そでぬれてあまのたくひはもえねばや雲とけぶりのたちのぼらん」がある。○いせのあまの 所載欄に示した古今六帖の重出歌はこれと同じだが、古今集や伊勢物語などは「須磨の海人の」とする。○風をいたみ 風が強いので。「いたみ」は形容詞「いたし」の語幹に、原因や理由を表す接尾語「み」の付いたもの。類想のものとしては「しかの海人のしほ焼く煙風をいたみ立ちほのぼらで山にたなびく」（万葉集・二二五〇〔旧二二四六〕）がある。七九七番歌参照。○おもはぬかた 思ってもみない方向。自分のもとから離れて他の人のもとへなびくことをいう。

【所載】古今六帖「しほ」一七八三／古今集・恋四・七〇八／八雲御抄・六／代集・一一／伊勢物語・一二二段・一九三

七九〇 いつとてかわがこひざらむちはやぶるあさまのやまはけぶりとつとも

【異同】ナシ

【現代語訳】いつといって、私が恋しく思わない時があるうか。たとえ浅間の山が煙を絶つことがあっても。

【語句】○ちはやぶる ここでは、神の縁で「あさま」に掛かる枕詞。所載欄の貫之集や拾遺集もこれに同じ。

一方で、重出の一六八四番歌では「信濃なる浅間の沼は」とあり、貫之集の中にも「信濃なる浅間の山は」と伝える本文（御所本）もある。○あさまのやま 浅間山。信濃国と上野国の境。和歌では信濃にあるものとして詠まれる。「しなのなるあさまの山ももゆなればふじのけぶりのかひやなからん」（後撰集・一三〇八）。○たつ「絶つ」と解す。「わびぬればけぶりをだにも絶たじとて柴折り焚ける冬の山里」（和泉式部集・七三）。所載欄の文献では「絶ゆ」とするものが多い。

【所載】古今六帖「ぬま」一六八四／拾遺集・恋一・六五六／続古今集・恋二・一〇七六／貫之集Ⅰ・六五六  
【参考】所載欄の拾遺集では作者を「よみ人知らず」、続古今集では「紀貫之」とする。

〔以上五首担当 青木〕

七九一 つちにたくけぶりぞたちておほぞらのひかりをかくすくもとなるめる

【異同】くもとなるめる―雲と成ける（大）

【現代語訳】地上に焚く煙が、立ち昇って大空の光を隠す雲となるものようですね。

【語句】○つち 「天（あめ）」「空」に対して、大地、地上の意。○けぶりぞ 文法上は「たちて」にかかるのではなく、「くもとなるめる」にかかる。係り結び。

【所載】ナシ

七九二 ふじのねのならぬおもひにもえばもへかみだにけたぬむなしけぶりを

【異同】かみだにけたぬ―かたみにけたぬ（大）

【現代語訳】富士の嶺が、くすぶるばかりで燃え上がらない火、成就しない思いの火に燃えるなら燃えてくれない。神様さえ消すことのない、むなし煙ですもの。どうしようもありません。

【語句】○ならぬおもひ 「おもひ」に「火」を掛ける。富士の煙のようにくすぶるばかりで燃え上がらない火と、成就しない恋の思いの両意。○もえばもへ 燃えるなら燃えてくれ。「ば」は順接仮定条件。「もへ」の仮名遣いは本来「もえ」で、「燃えよ」の意。○かみだにけたぬ 神でさえ消すことのない。「けたぬ」は動詞「消（け）つ」の未然形に打消の助動詞「ず」の連体形を伴った形。○むなしけぶりを 「むなし」は形容詞シク活用の語幹で、「むなしけぶりを」の意。「ながながし夜」「なまなまし身」などと同じ用法。

【所載】古今集・雑体・一〇二九／平中物語・第一段・五九

【参考】古今集では作者を「紀乳母」とする。また平中物語では、

また、この男、人ともものいふに、返りごとはするものから、逢はでほど経ければ、男、  
我のみや燃えてかへらむよとともに思ひもならぬ富士の嶺のごと  
女、返し、

富士の嶺のならぬおもひも燃えば燃え神だに消たぬむなしけぶりを  
また、男、返し、

神よりも君はけたななたれによりなまなまし身の燃ゆる思ひぞ

また、女、返し、

かれぬ身を燃ゆと聞くとはいかたがせむ消ちこそ知らぬみづならぬ身は

とあり、「思ひもならぬ富士の嶺のごと」と詠んでよこした男への返歌で、「燃えるならいくらでも燃えていてください」と男に対する揶揄の形になっている。

なお、古今集・仮名序には「今は富士の煙も立たずなり」とあって、休火山のように記されているが、同じ古今集の恋一（五三四）には「人しれぬ思ひをつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ」とあり、更級日記にも「山のいただきの少し平らぎたるより煙はたちのぼる。タぐれは火の燃え立つも見ゆ」と見える。当該歌も活火山の富士である。

七九三 かれぬ身をもゆとのもえわたるともイきくとカイいかにせむけちこそしらねみづならぬ身は

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが生身の体を焦がしていると聞いても、私はどうしようもありません。消し方を知らないのですもの、水でない身は。「見つ」という関係でもありませんし。

【語句】○かれぬ身 枯れない身。生身。○けちこそしらね 消し方を知らない。「けち」は動詞「消（け）つ」の名詞形。○みづならぬ身は 「水」に「見つ」（逢う、契りを結ぶ意）を掛ける。

【所載】後撰集・恋二・六四八／平中物語・第一段

【参考】平中物語・第一段に関しては七九二番歌参考欄参照。男が「なまなまし身の燃ゆる思ひぞ」と言っているの、「かれぬ身を」と返していることがわかる。もつとも後撰集では「我のみや」の歌と贈答形式になっており、その「富士の嶺のごと」を受け、「かれぬ身を」ではなく、「富士の嶺の燃えわたるともいかがせむ」となっている。作者は七九二番歌が古今集で「紀乳母」とあるように、当該歌も後撰集では「紀乳母」とする。なおこの歌が「けぶり」の項に入っている理由はよくわからない。「燃ゆ」との関係か。

七九四 すみのえのまつのけぶりはよとゝもになみのなかにぞかよふべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】住の江の松にかかっている煙のようなものは、いつまでも絶えることなく、それが波に通いあって、

波も絶えることなく打ち寄せているようだ。

【語句】○すみのえ 摂津の国の歌枕。今の大阪市住吉区の一帯。「松」「波」などとともに詠まれることが多い。○まつのかぶり 松にかかっている霞や靄など。あるいは霞んでいるように見える松の遠景。松の長寿から、絶えないもの、常なるものとして詠まれる。「よそなりし同じときはの心にて絶えずや今も松のかぶりは」（和泉式部続集・四六五）、「君が代に立てしそむれば山下の松のかぶりはいつか絶ゆべき」（続詞花集・三五四）。○よとゝもに 永遠に変わることなく。常に。ずうと。○なみのなかにぞかよふべらなる 松の千歳が波に通い、波も永遠に打ち寄せているようだ、の意。「べらなる」は、推定された状態を表す助動詞「べらなり」の連体形。……のようすだ。……らしい。

【所載】貫之集Ⅰ・六八四

【参考】所載欄の貫之集によれば、「延喜十二年十二月、春立つあしたに、定方の左衛門督の尚侍に賀たてまつれる時のうた」五首のうちの一首。尚侍満子（定方妹）の四十の賀の折に詠まれたもの。

七九五 はてはみのふじの山ともなりぬるかもゆるなげきのけぶりたへねば

【異同】ナシ

【現代語訳】ついにこの身は富士の山ともなってしまうのか。胸のうちに燃えさかる、恋の嘆きの煙は絶えることがないので。

【語句】○はてはみの 「はて」は「果つ」の名詞形で、最後、結末、行きつく先。「みの」は「身の」。○もゆるなげきの 燃えるような恋の嘆きの。「嘆き」に薪の意の「投げ木」を掛け、「もゆる」「投げ木」は「けぶり」の縁語。○けぶりたへねば 「たへねば」は「たえねば」。煙が絶えないので。

【所載】続後撰集・恋五・九四一／伊勢集Ⅰ・二〇七／伊勢集Ⅱ・二二一／伊勢集Ⅲ・二二〇

【参考】富士と煙については七九二番歌参照。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

七九六 袖ぬれてあまのたくひはもえねばやくもとけぶりのたちのぼるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】（海の潮に）ぬれた袖で海人が焚く火は、（しめって）燃えないから、雲のように煙が立ち昇るのでしようか。

【語句】○袖ぬれて 海人は海で働くので潮のために袖が常に濡れていると考えられていた。「しほたるる袖のひるまはありやともあはでのうらのあまにとはばや」（千載集・七五五）。○あま 海で漁業や製塩に従事する人。○もえねばや 燃えないからであろうか。「もえ（自下二・未然形）＋ね（打消の助動詞「ず」の已然形）＋ば」で条件を示し、「や」でそれに対する疑問を表す。伊勢集Ⅱでは「もえねども」。○くもとけぶりの 雲のように煙が。「と」は比喩を表す。

【所載】伊勢集Ⅰ・七三／伊勢集Ⅱ・七五／伊勢集Ⅲ・七二

七九七 すまのあまのしほやくけぶりかぜをいたみたちはのぼらでやまにたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】須磨の浦の塩焼きの煙は、風が強いのでまっすぐに立ち上らず、山にかかってたなびいています。

【語句】○すまのうら 七八五番参照。神戸市須磨区の海岸。傍書の「しかのあま」は、博多湾入り口の志賀島の海人。所載欄の万葉集は初句「しかのあまの」。○かぜをいたみ 風が強いので。「いたし」は甚だしい、激しいの意。

【所載】万葉集・一二五〇（旧一二四六）之加乃白水郎之 焼塩煙 風乎疾 立者不上 山尔軽引 シカノアマノシホヤクケブリカゼライタミタチハノボラデヤマニタナビク しかのあまのしほやくけぶりかぜをいたみたちはのぼらずやまにたなびく

【参考】古今集仮名序「たとへうた」割注、同集・恋四・七〇八、伊勢物語一一二段に「すまのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり」がある。

七九八 かぜのうへにありかさだめぬちりのみはゆくゑもしらずなりぬべら也

【異同】ナシ

【現代語訳】風に乗ってありかを定めない塵のように軽い我が身は、どこへ行くのか行方しれずになってしまい



そうですよ。

【語句】◎ちり ほこり。ごみ。無価値なもの、取るに足らないものの比喩に用いられることが多い。また、夜離（よが）れのために寢床に積もるものとして歌う。○かぜのうへにありかさだめぬ 風に吹かれてあちこちに舞う塵が、軽々としているのを言った語。○ちりのみ 塵のように小さな軽い身。古今集の諸注釈は上句を「風前の塵」あるいは「風塵」をふまえた表現と指摘している。

【所載】古今集・雑下・九八九／新撰和歌集・三五五

七九九 はきたむるちりのかずにもおもはぬをうづもることのあやしとぞみる  
（とイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】掃き集めた塵のように取るに足らない身とも私は思わないのに、世に知られず埋もれているのは不本意なことです。

【語句】○はきたむる 「はきたむ」はごみなどを掃き寄せたまま集めておくこと。○かず 数が多いこと。たくさん。また、数え上げる価値のあること。○うづもる ラ行四段活用 of 動詞「うづもる」の連体形。物におおわれて見えなくなる。うずまる。「世に知られずにいる」の意。四段活用は例が少なく、下二段活用が普通。○あやし 理解できない。不思議である。

【所載】ナシ

八〇〇 つもりては山となるてふものなれどうくもあるかなちりひちの身よ  
（はイ）

【異同】ちりひちの身よ—ちりひちの身は（大）  
（はイ）

【現代語訳】塵泥は積もると（高い）山になるというものだけれど、つらいことですよ。塵泥のようにとるに足らない身の私は（低いまま）。

【語句】○つもりては山となるてふものなれど 積もれば高大な山になるというものだけれど。塵をいう。「てふ」は「といふ」の約。「しら雲の八重たつみねのちりひちのつもりてなれる山にしあらずや」（風雅和歌集・一七〇二）。○ちりひち 細かい土と泥。多く、小さなものや価値のないもののたとえに用いる。「ちりひちのかずにもあらぬ我ゆゑに思ひわづらんいもがかなしさ」（万葉集・三七四九（旧三七二七）、拾遺集・八七二）。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 三浦〕

八〇一 わがたまはとこのちりともまどふらむよひく／＼あらくはらはざらなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の魂は寢床の塵とでもいうように、あなたの所に戸惑っていることでしょう。だから夜毎邪陰に振り払わないでほしいのです。

【語句】○たま 魂。人間の精霊。体内から抜け出して行動する遊離魂。「もの思へばさはの螢をわが身よりあくがれにけるたまかとぞみる」（後拾遺集・一一六二）。○とこのちり 夜離れのために寢床に積もる塵。「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこ夏の花」（古今集・一六七）。○よひく／＼ 夜毎に。○あらく 手荒く。邪陰に。

【所載】ナシ

八〇二 しるといへばまくらだにせでねしものをちりならぬなのそらにたつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】秘め事を知ってしまうというので、枕さえしないで寢たのに、塵でもない浮名がなぜいかげんに高くてたっているのだろうか。

【語句】○しるといへば 枕が恋の秘め事を知ってしまうというので。「わがこひを人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ」（古今集・五〇四）。○ねしものを（枕さえしないで）寢たのに。「ものを」は逆接であとへ続く助詞。○ちりならぬな 塵でもない恋の噂。評判。○そらにたつらん 「空に塵が立つ」意と「そらごと」（いいかげんな噂）が「立つ」意をかける。「らん」は噂が立った原因や理由を推量する意を表す助動詞。

【所載】古今集・恋三・六七六／伊勢集Ⅰ・一五四／伊勢集Ⅱ・一五三／伊勢集Ⅲ・一五五

なるかみ

八〇三 おほきみは神にしませばあまぐものみかづきがうへにいはりすらしも

いかづち山にイ

【異同】 <sup>いかつち山にイ</sup>みかつきかうへに―みかつき山に(大)

【現代語訳】わが大君は神でいらつしやるので、天上昇にいる雷の上に仮の宮を造って、住んでおられるらしいな。

【語句】◎なるかみ 雷。雷の恐ろしき、すさまじさを、神として崇めたり、人間界の権威あるものに喩えたりして詠んでいる。○おほきみ 天皇の敬称。○神にしませば 神でいらつしやるので。「し」は強めの助詞。「ませ」は「あり」「をり」の尊敬語「ます」の已然形。○みかづき 題は「なるかみ」なので「いかづち」(雷)が正しく、「みかづき」は誤写であろう。○いほりすらしも 仮の住まいを造って、住んでいるらしいよ。「らし」は客観的な事実の推定。「も」は詠嘆。

【所載】万葉集・二三五(旧二三三) 皇者 神二四座者 天雲之 雷之上 廬為流鴨 スメロキハカミニシマセバアマクモノイカヅチノウヘニイホリスルカモ おほきみはかみにしませばあまくものいかづちのうへにいほりせるかも／夫木抄・一六四八六

八〇四 あまくもを<sup>そらにイ</sup>ほろに<sup>ない</sup>ふみあらし<sup>な</sup>なるかみも<sup>か</sup>けふに<sup>こけむかもイ</sup>まさりてこしらへむやは

【異同】 けふにまさりて―けふまさりてか(大)

【現代語訳】天雲をばらばらに踏み散らして鳴る雷も、今日の天皇以上に恐れ多いことがありますようか。

【語句】○ほろにふみあらし ばらばらに踏み散らし。○こしらへ 「こしらふ」は言葉を尽くして人の気をさそう、機嫌をとるの意。所載欄の万葉集「かしこけめやも」によって訳した。

【所載】万葉集・四二五九(旧四二三三) 天雲乎 富呂尔布美安太之 鳴神毛 今日尔益而 可之古家米也母アマグモヲホロニフミアダシナルカミモケフニマサリテカシコケメヤモ あまくもをほろにふみあだしなるかみもけふにまさりてかしこけめやも

【参考】所載欄の万葉集によれば縣犬養命婦(光明皇后の母)が天皇に奉った歌。

八〇五 あまのはらふみとゞろかし<sup>な</sup>なるかみもおもふなかをばさくる物かは

【異同】 ナシ

【現代語訳】大空を踏みとどろかして鳴る雷でも、恋人の仲を引き離せようか、いや引き離せはしない。

【語句】○あまのはら 天上界。大空。○ふみとどろかし 雷鳴を擬人的に表現したもの。○さくる物かは 引き離せようか、いやそうではない。「かは」は反語を表す。雷は落ちて木を割くことがあり、二人の仲を「さく」に、その「割く」をかける。

【所載】古今集・恋四・七〇一

〔以上五首担当 橋本・林〕

八〇六 ちはやぶる神にもあらぬわが中のくもぬはるかになりまさるかな もゆくイ

【異同】ナシ

【現代語訳】雷でもない私たちの仲は、雲がかかっているあの空ではるかに鳴るように遠くにますますなっていくことだなあ。

【語句】○ちはやぶる 神にかかる枕詞。神は「雷（神鳴り）」の意。○わが中 私たちの間柄。「神かけて君がちかひしわが仲のあふひはよそにならんとや見し」（兼澄集・一三六）などに見られる。○なりまさるかな 「なり」は「成り」と「鳴り」を懸ける。「鳴り」は雷の縁語。ますますなつてゆくなあ、の意。

【所載】後撰集・恋六・一〇二五

【参考】当該歌は、後撰集では贈答歌になっている。返しは「千早振神にも何にたとふらんおのれくもぬに人をなしつつ」（一〇二六）である。

八〇七 あまのはらなるかみいかにおもふらんけふは身をしるあめとこそふれ

【異同】ナシ

【現代語訳】雷はどう思っているだろう。今日は身を知るものとして雨がしきりに降っていることだ。この雨の中、あの人は来ますまい。

【語句】○あまのはらなるかみ 「なるかみ」は雷のこと。当該歌は八〇五番歌「あまのはらふみとどろかしなるかみも」を踏まえる。どれほど激しい雷でも割けない二人の仲を歌った八〇五番歌に対し、それほど深く思われていない自分を嘆く。○身をしる雨 自分の身の程を知る雨。相手が雨をおしても来るか否かで思いの深淺

がわかる。「かずかずにおもひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」(古今集・七〇五)。

【所載】ナシ

八〇八 ながめしてふればなるべしあまつそらかみのこゝろのそらになりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】長雨が降り、私ももの思いして過ごしているからであろう。雷も空で鳴り、私も上の空で、不安定な心持ちになったままだよ。

【語句】○ながめ 長雨の意の「ながめ」ともの思いをするの意の「眺め」とを掛ける。○ふれば 「降れば」と「経れば」を懸ける。○空 天象の空と、不安定な落ち着かない心境を指す空の両意を持つ。○なり かみ(雷)が「鳴り」、不安定な心境に「なり」の意を掛ける。

【所載】ナシ

【参考】「長雨」「降れ」「天つ空」「空に鳴り」は、「かみ(雷)」の縁語。天象を示す。

八〇九 あまぐものやへくもがくれなるかみのをとにのみやはきゝわたりなん

【異同】ナシ

【現代語訳】大空の厚く重なった雲に隠れて鳴る雷のように、遠く、あなたのことを噂として聞きつづけるばかりなのだろうか。いや、そんなことはできない。

【語句】○あまぐも 天雲。「なるかみの」までが「音」を導く序。○やへくもがくれ 存在の遠さを表す。和歌童蒙抄に「八重雲隠れとは、必ず八重と云ふにあらず。雲厚しといふ心也」とある。○をとにのみやは「おと(音)」は、雷の音であるとともに、「噂」の意。「やは」は反語。○きゝわたりなん 「……わたる」は、……しつづけるの意。「なん」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」のついたもの。聞きつづけてしまうだろう。

【所載】拾遺集・恋一・六二八／万葉集・二六六六(旧二六五八) 天雲之 八重雲隠 鳴神之 音耳耳八方 開度南 アマクモノヤヘクモガクレナルカミノオトノミヤモキキワタリナム あまぐものやへくもがくりなるかみのおとのみにやもききわたりなん 人麿集Ⅰ・一九／人麿集Ⅱ・三四六／人麿集Ⅳ・一五七／和歌童蒙抄・四

八一〇 あふことはくもゐはるかになるかみのをとにきゝつゝこひやわたらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】逢うことは雲がかかるほど遙か遠いものとなり、その遙か遠くで鳴っている雷の音のように聞こえてくる噂を聞きながら、恋い続けるのだらうか。

【語句】○くもゐはるかに 雲のかかる遙か遠く、の意。○なる 「成る」と「鳴る」の掛詞。○をと 八〇九番歌参照。当該歌は全体的な発想が八〇九番歌と通ずる。

【所載】古今集・恋一・四八二／新撰万葉・四九八／貫之集I・五三七

〔以上五首担当 杉本〕

八一 一 あまぐものちかくひかりてなるかみの見ればおそろしみねばこひしも

【異同】ナシ

【現代語訳】雨雲の近く光つてとどろく雷鳴。空を見ると（見ることができないほど）恐ろしい。かといって見ないでいるとあなたが恋しくてならない。

【語句】○あまぐも 雨雲。空を覆う雨を降らせる雲。時に雷を伴う。「あまぐものやへ雲がくれなる神のおとにのみやはきき渡るべき」（拾遺集・六二八）。○なるかみ 雷、雷神、雷鳴。音のとどろきを歌う。前の「あまぐも」の項に所引の拾遺集歌参照。「なるかみのすこしとよみてふらずともわれはとどまらむいもしとどめば」（万葉集・二五一九（旧二五一四））。

【所載】万葉集・一三七三（旧一三六九）天雲 近光而 響神之 見者恐 不見者悲毛 アマクモニチカクヒカリテ（ハシリテ）ナルカミノミレバカシコシミネバカナシモ あまぐもにちかくひかりてなるかみのみればかしこしみねばかなしも

【参考】下句は女性に対して詠んでいるか。

八二 一 あだ人のこゝろはそれのかみなれやくもゐにのみもなりまさるかな

【異同】ナシ

【現代語釈】浮気なあの人のは空の鳴神なのか。雲居はるかにへだたるばかりであるよ（私から遠くなつてゆくよ）。

【語句】○そらのかみ 空の雷。「そらのかみ」という複合語は珍しいが、八〇八番歌に見えるように、「あまつそらかみもころも」という言い方はある。続き方はこの歌の他に例が見当たらない。○くもぬにのみもなりまさる 「雲居になる」とはかけへだてたものとなるの意。「成り」に雷の縁語「鳴り」をかける。

【所載】ナシ

八一二 秋のたのほのうへてらすいなづまのひかりのまにもきみぞこひしき  
いなづま  
われやわするこひ

【異同】ナシ

【現代語釈】秋の田の穂の上を照らすいなづまの一瞬の光の間もあなたが恋しくてならない。

【語句】◎いなづま 雷光。いなびかり。雷の閃光。古代の農民の間では、稲といなづまとの交接によつて稲穂が実ると信じられていた。「つま」は現代では「妻」の意だが、古代では「夫」をもいう。類聚名義抄「雷」には「イナヒカリ、一日イナツルヒ、又イナツマ、ヒカリ、ヒラメク、イナタマ」とある。「瞬時」「はかなさ」などの表現に用いる。○ほのうへてらす 穂の上照らす。

【所載】古今集・恋一・五四八

【参考】所載欄の歌「秋の田のほのうへてらすいなづまのひかりのまにも我や忘るる」、これを異文として脇に記し、「イ」としたのが傍書。一瞬光る雷光は、「世中をなにととへむ秋のたのほのうへてらすよひのいなづま」（和歌初学抄・一一二）とも詠まれた。

八一二 いなづまのひかりのまにもわすれじといひしは人のことにぞありける

【異同】ナシ

【現代語釈】いなづまの光の照らすわずかな一瞬たりとも忘れはしなかったのは、人の言葉であつた（変わ

りやすいものであった。

【語句】○人のこと 人の言葉。「心には忘るる日なく思へども人の言こそしげき君にあれ」(万葉集・六五〇(旧六四七))。

【所載】ナシ

八一五 まちかね<sup>わびイ</sup>て心あかねばいなづまのひかりにのみぞをどろかれつる

【異同】○をとろかれつる―をとろかれける(御・桂)、驚かれぬる(大)

【現代語訳】今いらつしやるかとお出でを待ちかねて、そこを立ち去り難く(一心に待ち) 一瞬光った稲妻にだけはつとして我にかえつた。

【語句】○心あかねば 十分満足したとは言えず立ち去りがたいので。「見て帰る心あかねば桜花咲けるあたりに宿や借らまし」(亭子院歌合・二二)。○をどろかれつる おどろかれつる。「おどろく」は「はつと気がつく」の意。「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。「をどろかれつる」は誤写である。完了の助動詞「つ」がこのように接続する例はない。「ける」という本文に依拠して訳した。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 平野〕

八一六 いなづまはかげろふばかりありしときあきのたのみは人しりにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】稲妻がかげろうのようにほんの一瞬だけ光った時、秋の逢瀬の見込みがどの程度であるか人は知ったのであったよ。

【語句】○いなづま 稲妻。電。稲のつま。瞬時の恋情の喩えとされることが多い。「秋の田の穂の上を照らす稲妻の光の間にも我や忘るる」(古今集・五四八) ○かげろふ 春の晴れた日、地表近くの風景がゆらめいて見える現象。ここでは、はかなく消えやすく、捉えどころがないことのたとえ。八二〇番歌参照。○ばかり 副助詞。ほど。ぐらい。平安以降は限定の「だけ」の意にも用いる。○あきのたのみ 秋の田の実。田で熟した稲の実。古代には、稲光によって稲が実ると考えられていたから、「たのみ」は「稲妻」の縁語。逢瀬への期待を





【異同】ナシ

【現代語訳】山田に稲を植え、光つて稲を実らせる稲妻、妻とともに、秋になったら逢おうと思う。

【語句】○あしひきの 山または山の熟語にかかる枕詞。○うへて 植ゑて。○いなづま 「あしひきのやまだをうへて」は「稲妻」の「稲」を導く序詞。「いなづま」の「つま」に「妻」を掛ける。○ともに 「いなづま」が稲を実らせる時期とともにの意と、妻とともにの両義的用法。○あはん 「あふ」は男女が恋愛関係を結ぶ。結婚する意。頭韻「あ」の繰り返しが特徴的。

【所載】貫之集Ⅰ・四九九

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「天慶五年亭子院の屏風歌二十一首」のうちの一首。

八一九 あまつゆのおくてのいねはいなづまをこふとぬれてやかはかざるらん  
しらイ さイ いひイ

【異同】ナシ

【現代語訳】朝露の置く晩稲の稲は、稲を実らせるといふ稲妻を恋い慕つて、濡れて乾かないでいるのだろうか。

【語句】○あさつゆの 「消ゆ」「命」「置く」にかかる枕詞。ここでは「置く」と同音の「おくて」の「おく」にかかる。○おくて 成熟するのが遅い稲。晩稲。晩稲に朝露が置いて濡れるのをいなづまを恋う涙とみる。「秋田みな刈り果てつれど初霜のおくての稲は ひさしかりけり」（家持集・二七四）。晩稲の実る時期は稲妻の時期をはずれるか。○こふと 恋う、恋い慕うとて。○ぬれてや 「ぬれて」は、朝露に濡れる意と恋うる涙に濡れる意とを兼ねる。「や」は疑問の係助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・五一

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「天慶五年九月、内裏御屏風歌五首」のうちの一首。詞書に「稲刈りほせる」とある。

かげろふ  
八二〇 世の中とおもひしものをかげろふのあるかなきかの上に。そありけれ  
こイ

【異同】よにこイそありけれ—よにこそありけれ（御・桂・大）

【現代語訳】これが世の中、男女の間柄だとは思っていたけれど、かげろうのようにあるかないかはつきりせぬはかない仲であつたことよ。

【語句】◎かげろふ 春の晴れた日、地表近くの風景がゆらめいて見える現象。「かぎろひ」の転じたもの。「いとゆふ」とも。はかなく消えやすく、捉えどころがないことから「ほのめく」「ほのか」、また「あるかなきか」に続くことが多い。仏典における無常、在非在の喩えの一つでもある。○よのなかとおもひしものを「よのなか」は男女の仲。「ものを」は逆接の接続助詞。所載欄の後撰集では「世の中と言ひつる物か」となっており、意味がとりやすい。○かげろふのあるかなきか 仏典において「かげろふ」は存在の不確かさを表す比喩で、それを歌に用いた。「於諸法門勝解觀察。如幻如陽炎。如夢如水月。如響如空花。如像如光影。如變化事。如尋香城。雖皆無実而現似有（諸々の法門に於いて勝解觀察すること、幻の如く、陽炎の如く、夢の如く、水月の如く、響の如く、空花の如く、像の如く、光影の如く、変化の事の如く、尋香城の如し。皆実無しと雖も而も現じて有るに似たり）」（大般若經・卷一）。「あはれともうしとも言はじかげろふのあるかなきかに消ぬる世なれば」（後撰集・一一九二）。八二五番歌参照。○よ 男女の仲。夫婦の關係。

【所載】後撰集・雜四・一二六四

【参考】かげろうと仏典についての論文に、新間一美「平安朝文学における「かげろふ」について—その仏教的背景—」（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三年）がある。

〔以上五首担当 斎藤・中野〕

八二二 かげろふのそれかあらぬかはるさめのふるひと見ればそでぞぬれぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】（かげろうのようにはつきりしないが）あれはあの人だったのかそうでないのか、それほど久しぶりの懐かしい人に逢ったので、（春雨の降る日のように）涙で袖が濡れてしまったのです。

【語句】○かげろふの 「それかあらぬか」を導く措辞。「かげろふ」は「陽炎」。八二〇番歌参照。春の日に地表近くから立ち上る水蒸気が、光を屈折させてゆらゆらと揺らめいて見える現象で、おぼつかないもの、実体のはつきりしないものの喩えとされる。○それかあらぬか それと同じなのか、違うのか、はつきりしない。「去

年の夏鳴きふるしてし郭公それかあらぬか声のかはらぬ」（古今集・一五九）について、新日本古典文学大系『古今和歌集』脚注は、白楽天の詩などに多い「其不」の語法の訓読による表現で、李夫人「是耶非耶」の古訓点（神田本）に、「ソレカアラヌカ」があるとする。○はるさめの「ふる」にかかる枕詞。なお、第五句の「ぬれ」は「はるさめ」の縁語。○ふるひと「降る日と」に「古人」を掛ける。「古人」は、万葉集に二例。「妹らがり今木の嶺に茂り立つつま松の木は古人見けむ」（万葉集・一七九九（旧一七九五））など。同じような「ふりたる君」の例としては、「現にも夢にも吾は思はずきふりたる君にここにあはむとは」（万葉集・二六〇六（旧二六〇一）、古今六帖・二九一六）。

【所載】古今集・恋四・七三一／奥儀抄・五三六／和歌色葉・二六九／色葉和難集・三二七

八二二 かげろふのさやにこそみねむまたまのよるのひとめはこひしかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】かげろふのように、はつきりと姿は見ませんでしたけれど、夜に少しだけお逢いするのは、かえって恋しさがつのることです。

【語句】○かげろふの「かげろふ」は八二〇番歌参照。○さやにこそみね はつきりとは見なかったけれど。「さや」は、万葉集からみられる表現で、形容詞「さやかし」、形容動詞「さやか」と同源。はつきりと、鮮やかに、くつきりと。「ね」は「こそ」の結びで打消の助動詞「ず」の已然形。「こそ…已然形」が文中に挿入されている場合、下に続く逆接の条件句となる。「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみね香やはかくるる」（古今集・四二）。傍記「さやかにみえぬ」の方が文意が通るが、本文通りに解した。○むまたまの「夜」「闇」「髪」「夢」にかかる枕詞「むばたまの」の「ば」が「ま」に転じたもの。「むばたまの」「ぬばたまの」と同じ用法である。○ひとめ 一目。僅かばかり逢うこと。「夜の一目」は用例なし。

【所載】ナシ

八二三 かげろふのひとめからにやあやしくもおもわすれせぬいにもあるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】現れてはすぐ消えるかげろふのように、たった一目お逢いしたからでしょうか、不思議にも面影が

忘れられないあなたでありますよ。

【語句】○かげろふの「かげろふ」は八二〇番歌参照。すぐに消えてしまうことから「ひとめ」を導く措辞。「ほのめく」「ほのか」を導くことが多い。「ひとめ」と結びつくのはこの歌と八二二番歌、八二四番歌、及び万葉集旋頭歌（西本願寺本の訓「しの薄穂には咲き出でぬ恋をわがするかげろふのただ一目のみ見し人ゆゑに」）（二三一五（旧二三一一）の三例である。○ひとめ 八二二番歌参照。○からにや「からに」に疑問の係助詞「や」がついた形。「からに」は、原因、結果を順接の関係において示す。……ので。……ゆえに。「君ひとりとはぬからにやわがやどの道も露けく成りぬべらなり」（貫之集・八二六）。○あやしくも「あやし」は、理解し難い。不思議だ。「も」は主題を詠嘆的に提示。○おもわすれ 人の顔を見忘れること。「面忘れいかなる人のするものぞわれはしかねつ継ぎてし思へば」（万葉集・二五三八（旧二五三三）、古今六帖・二八八二）、「見し人はそれかあらぬかおぼつかなおもわすれせじと思ひしものを」（色葉和難集・二五九）。

【所載】ナシ

八二四 かげろふのひとめばかりはほのめきてこぬよあまたになりにイけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】かげろふのように、ほんの一目ばかりお逢いして、あとは訪れない夜が多くなってしまうした。  
【語句】○かげろふのひとめ 八二三番歌参照。○ほのめきて かすかに……して。「かげろふ」と結びつく例は、「かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるとも思はざらん」（宇津保物語・七）。○こぬよあまたに 訪れない夜が多くなって。「たのめつつこぬ夜あまたになりぬれば待たじとおもふぞ待つにまされる」（拾遺集・八四八、和漢朗詠集・七八八）。「あまた」は「ひとめ（一目）」と対比の妙。

【所載】夫木抄・一三一二〇

八二五 ありと見てたのむぞかたきかげろふのいつともしらぬ身とはしる／＼

【異同】ナシ

【現代語訳】あると思つて頼りにすることは難しい。かげろふのように、いつともしれぬ身の上であることは充分承知しつつ。

【語句】○ありとみて 実在すると見て。あると思つて。「ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ」(古今集・物名・四四三)と上二句が共通する。○かげろふ あるかなきかのはかないものであることから、仏典において、無常と在不在の喩えの一つとされる。八二〇番歌参照。「いつをいつとおもひたゆみてかげろふのかげろふほどの世をすぐすらん」(金葉集二度本・雑下・六四一・懷尋法師「依他の八つのたとひを人々よみけるに、この身かげろふのごとしといへることをよめる」)。上二句は「かげろふ」の在不在の喩えであり、「いつともしらぬ」は無常の喩えである。「ありとみて」と結びつく例は「ありとみて手にはとられずみればまたゆくへもしらず消えしかげろふ」(源氏物語・蜻蛉・七六六)。○いつともしらぬ 一つであるとも知れぬ。類歌「露の命何時ともしらぬ世の中になどかつらしと思ひおかるる」(後撰集・一〇〇八)、「あふことをいつともしらぬ夏虫のおもひはかぎりなくやあるらん」(陽成院歌合・一一)など。○しる／＼ 十分に知りながら。知りつつ。「世の中にふるぞはかなき白雪のかつは消えぬる物としる／＼」(拾遺集・一三三三)。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

八二六 かげろふのほのめくかげにみてしよりたれともしらぬこひもするかな

【異同】ほのめくかけに―ほのめく影を(大)

【現代語訳】ちらちらと揺れ立つ陽炎のようなさだかでない姿として見て以来、たれともわからぬあの人への恋をすることだ。

【語句】○かげろふの ここでは「ほのめく」を導き出すための措辞。「かげろふ」は、ちらちらと揺れながら立つ陽炎のこと。○ほのめくかけに はつきりとさだかでない姿として。「ほのめく」は、明確な色や形が見えずほんのりとかすかなさま。「かげ」は、この場合人影、人の姿の意。「に」は、……の状態で、ということ。

【所載】続古今集・恋一・一〇二七

八二七 つれづれのはるひにまよふかげろふのかげ見しよりぞひとはこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】所在なくものさびしい春の日に、入り乱れてまぎれ立つ陽炎(かげろう)。そのかげのようにさだ

かでない姿を見てからというもの、あの人のことが恋しい。

【語句】○つれ／＼ ものごとに動きや変化がなく、所在なくさびしいさま。心の満たされない状態がつづくさまの形容として言われることが多い。○はるひにまよふかげろふ 「まよふ」は、入り乱れてまぎれる、の意。春の日に、入り乱れてちらちらと揺れながら立っている陽炎。「かげろふ」は前歌参照。上三句は「かげ」にかかる序詞。○ひと あの人。ここは第三人称。

【所載】新後拾遺集・恋二・一〇〇六／綺語抄・九九／和歌童蒙抄・八四三／和歌色葉・二七〇

八二八 てにとれどたえてとられぬかげろふのうつろひやすき／＼みがこ／＼ろよ<sup>カイ</sup>

【異同】てにとれとーてにとれは（御）

【現代語訳】手に取っても、まったく取ることでできない陽炎。その陽炎のように、まことにあてにならず変りやすいあなたのこころよ。

【語句】○てにとれど 手に取っても。ここでは手に取ったつもりでもの意。○たえてとられぬ 決して取ることでできない。「たえて」は、下に打消の語を伴うことによって、全面的な否定を表わす副詞。上三句は「うつろひやすき」にかかる序詞。○かげろふの 八二六番歌参照。○うつろひやすき ほかへ移りやすい。気が変りやすい。

【所載】ナシ

〔以上三首担当 犬養悦・山下〕

本云

以民部卿本書了。此本有僻事

之由被申之間、又以他本手自校合了。

嘉祿第二歴中春下旬之候、兩人

能々校合了。

前和歌所開闔從四位上源朝臣

家長也  
在判

すべてこの六帖、いかにやらん、いづれもく  
みなかくのみしどけなき物にて  
侍れば、本のまゝにしるしをく。のち  
に見ん人心えさせ給べし。

八百廿五首

一校了

校了

【異同】本云―ナシ（御・大） 一校了―ナシ（桂・大） 校了―ナシ（御・桂・大）  
ナオ大久保本ハ、最末尾ニ「此六帖 禁裏御本并一品式部卿宮以御本書写校合畢」ノ一文ヲ有ス





## あとがき

お茶の水女子大学を退官された犬養廉教授の喜寿の祝いのあと、平安和歌を読む楽しみのため、阿佐ヶ谷の犬養家に一か月おきの頻度で輪読会をしようと考えた。出来れば三十分以内で集まれる近い範囲に住むメンバーの集まりとし、今まで注釈書のない『古今和歌六帖』を読もうということになった。

四千数百首という大部な歌集ゆえ、一人一回五首を分担し、十二人全員が発表する、歌意を確定することを主眼に六十首読む、という方法をとった。各人がトレーニングを受けた国文学の演習は一首の発表に二時間かける精読だったが、その方法はとらないことにした。また、そこで各自が得た知見を学術誌などに公表することは自由である、という了解のもとにスタートした。和歌の理解という共通の楽しみによって、毎回和気藹藹、自由闊達な集まりであった。

六年後、二〇〇五年に犬養先生が、続いて二〇〇八年に悦子夫人も逝去され、輪読会は休止となった。その後、犬養邸から場所を平野の保谷の研究部屋に移し、再開。現在にいたる。新会員もふえた。

近年、メンバーの中から注釈の出版を望む声が高まり、輪読を進める一方、第一帖に限定して見直し、書式を整え、不備をなくし、完全原稿を作成することにした。第一回目の発表資料をすべて再検討すると、公刊を予期しなかった段階とは違い、大幅な補足が必要となった。先に述べた経緯から、本人が手を入れた場合と、担当者が変わったところがある。

なお、公刊にあたってはこれまでにないまったく新しい方法を考えた。たまたまお茶の水女子大学がはじめたE-bookサーブスによるのことにしたのである。これは、寡占化が進むEジャーナル価格戦

略への対抗策として、研究成果を人類の共有すべき知的財産として提供するというものである。ネット環境が利用できる環境にありさえすれば、いつでも、誰でも、どこでも、無料で利用できる。もちろんこれまでの書籍という出版形態が非常にすぐれたもので、私どもとしてもそうした仕組みを今後とも尊重してゆきたい気持ちには変わりはない。

先述のように『古今和歌六帖』は非常に大きな歌集であるし、これが初めての注釈でもある。すべての読解が終わるまでにはあと何年もかかるかもしれない。とりあえず、巻一の整理がついたので、ひとつの試みとしてWEB版により公開してみたのである。内容に不備があったら直ちに訂正可能という利点もある。こうした形態による公開の方法について、あるいは内容について、忌憚のないご意見をお聞かせ願えたら幸いである。

メンバーは担当の順に、

長戸千恵子、青木太朗、\*犬養廉、三浦狭依、\*橋本智美、杉本まゆ子、平野由紀子、斎藤熙子、  
中野方子、\*犬養悦子、山下道代、林マリヤ、久保木哲夫、加藤静子、市東奈々、諸井彩子、  
尾高直子

である（\*は退会者）。

二〇一一年一〇月

平野由紀子

## 古今和歌六帖全注釈 第一帖

---

2012 年 3 月 28 日 初版発行

2019 年 10 月 10 日 第 2 版発行

著 者 古今和歌六帖輪読会

発 行 お茶の水女子大学附属図書館(E-book サービス)

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

<https://www.lib.ocha.ac.jp/>

電話 03-5978-5835 FAX 03-5978-5849

**ISBN978-4-904793-03-9 C3092**

本著作の著作権は著者が保持しています。著作権法上の著作権の制限を超える利用については、お茶の水女子大学附属図書館にお問い合わせください。